学校日和２

めろん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学校日和２

【Ｎコード】
Ｎ７２６９Ｄ

【作者名】
めろん

【あらすじ】
季節がめぐって春が来て、またまた国立魔法学校へやって来た少年は、十六歳になりました。クリスマスな彼と、万年ねむねむ美男子と、ちょっと恥ずかしがり屋な美少女と、眼帯ナルシス美男子と、その他諸々とのスクールライフが、再びはじまってしまいました。

第1回　始まり日和

よく晴れた春の日の朝。
ようやく自分の役目を果たす時が来たと、それは勢いよく鳴り出した。

ピピッ―…カチ

「……ふあ……」

鳴り出したそれ、目覚まし時計を素早く止め、少年は欠伸をしながら起き上がった。

「ふう、今日から学校か」

起き上がってすぐ、まだ眠たそうな黄緑色の目を擦りながら、右と左で赤と緑に綺麗に分かれた髪を隠すように帽子を被った彼の名前は”ミント”。

「……って、あれ？」

それから靴を履いてベッドを降りた丁度その時、ふと視界に入った目覚まし時計にミントは小首を傾げた。
彼がその仕草をしたのは、待ちに待っていた役目をたった一秒で終わらせられてしまった為に、目覚まし時計が哀愁を漂わせていたからではない。

「学校……明日からだっけ？」

ミントが小首を傾げた理由は、今日は四月一日だから学校が始まる日だと思っていたのに、その目覚まし時計に表示されている日付が三月三十一日だったから。

（……早くこの家から離れたいって思ってるせいかな？）

そんなことを思いつつ、ミントは部屋を出て一階に降りていった。

「……はあ……」

朝食の準備が終わり、再び二階に戻って来たミントは、”シャーン”と書かれたプレートが下がっているドアの前で、盛大な溜め息をついた。

「朝だよ」

ミントは露骨に嫌そうな表情でドアを開け、その部屋で眠っている人物に露骨に嫌そうな声でそう言った。

「……んー」

すると、そこで眠っている撥ねまくった赤い髪の男性から生返事が返ってきた。
彼はミントパパ。
名前は”シャーン”。

「早く起きないと遅刻するよ？」

「……んー、分かった。あと一分……」

ミントの呼び掛けに、布団に潜り込みながら応えるシャーン。

「はいはい。あと一分ね」

ミントはそう言ってシャーンの枕元に何かを置き、さっさと部屋を出ていった。

「……？」

今日はやけに聞き分けが良いな？　と不思議に思ったシャーンが、もそもそと布団から顔を出すと、

カッチカッチカッチカッチ

「え」

カッチカッチ

ドカーン

シャーンの部屋に、キノコ型の爆煙があがった。

「さてと」

背後で大爆発が起こったのにも関わらず、ミントは何食わぬ顔で反対側の”ジャンヌ”と書かれたプレートが下がっている部屋に入った。
しかし、その部屋のベッドには誰も眠っていない。

「朝だよ」

すると、何を思ったのか、ミントはベッド脇のテーブルに置いてある、緑色の炭酸の液体が入っているコップに向かってそう言った。

「ええ。朝ね」

液体が喋った!?

「朝ごはん出来てるよ」

が、驚くこともなく、まるでいつものこととでも言うかのように、ミントはそう言って部屋を出た。

ぶくぶくーっ

「ゲヘヘ♪　なかなか気が利くわね!」

液体から緑色の髪の女性が発生した!!

「はい」

「ゲヘヘ♪　センキュー」

緑色の長い髪を三本の三編みにし、眼鏡をかけて一階に降りて来た女性、ミントママの”ジャンヌ”にご飯を渡すミント。
するとそこに、少し遅れてシャーンがやって来た。

「あらシャーン、ボンバってるわね」

「おお。ボンバってるだろ?」

先程、目の前で爆弾が爆発した為に、彼の髪の毛まで爆発してしまってヘアスタイルが凄いことになっているのだが、ごく自然に会話するジャンヌとシャーン。

「はい」

そして、ごく自然にご飯を渡すミント。

「どーも」

「あら、美味しそうな目玉焼き。ミント、そこの墨汁取ってくれる？」

「醤油で我慢しなさい」

どうやらこの家の住人は、彼の凄いことになっているヘアスタイルについて突っ込む気は皆無のようだ。

「ゲヘヘ♪　センキュー。で、ミント？」

「何？」

ミントから醤油を受け取ったジャンヌは、笑い声に似合わず可愛らしくにこっと笑って、

「そろそろ行かないと遅刻するわよ？」

と、言った。

「？　何言ってんの？　学校は明日からでー…」

そう言っている途中で、ご飯を食べながらシャーンが背後の壁を指差したので、ミントはそちらに目を向けた。

「……しょ……」

その時計には、現在の時刻が四月一日の八時半と表示されていた。

「……え……？」

Ｗｈｙ？

おかしいじゃないですか。

目覚まし時計は三月三十一日ってなってた筈ですよ？　とミントが混乱していると、

「ゲヘヘ♪　今日はエイプリルフールだぜイエア☆」

ジャンヌがミントの目覚まし時計の日にちを四月一日にしながらそう言った。

「……」

「イエア☆」

石化したミントに向け、再び”イエア☆”と言うジャンヌ。

「……」

「どんまい」

石化したミントにそう言いながら、漬物に箸を伸ばすシャーン。

「……」

「……」

「……」

……。

「ふっざけんなあああああ！！」

暫しの沈黙の後、ミントは爆発したような叫び声をあげ、目にも留まらぬ速さで身支度を整えて荷物を持って箒に乗って家から飛び出していった。

「ゲヘヘ♪　ごめりんこごめりんこ」

「気ぃつけて行けよー」

そんなミントに、ジャンヌとシャーンは呑気にご飯を食べながらそう言った。

第2回　紹介日和

春の麗らかな太陽の下。
真っ黒な蒸気機関車を降りた背の高い少年と背の低い少女は、その先にある国立魔法学校に向かう為に、深緑の森の中を歩いていた。

「うーん……ミントったらどうしたんだろねー？」

緩くウエーブがかかった、肩まである桜色の髪の毛の彼女は”ココア”。

「うむ……汽車の中と駅では見当たらなかったな」

流れるような水色の長い髪を後ろでひとつに束ねている彼の名前は”プリン”。

「……ふむ。もしかして」

「？　もしかしてー？」

濃い桃色の大きな瞳を彼に向けてココアが続きを促すと、

「ミント、寝坊？」

眠そうな切れ長の蒼い瞳を彼女に向けてプリンが応えた。

「……それ、プリンに言われたら終わりだねー？」

「む？」

ココアは、プリンが抱えている両端に桃色のヒラヒラがついた白い枕を見ながらそう言った。
小首を傾げた飛び抜けて美男子の彼は、見た目はクールっぽいのだが、その可愛らしい枕がそのイメージをぶち壊している。

「……まー、もしかしたらチロルに捕まってるだけかもしれないしねー？　そんなに心配しなくても大丈夫だと思うよー？」

「ぴわわ?!　ココア、それは余計に心配っ！！」

ついでに発言も。

「あはは♪　そうー？」

顔色を悪くして慌てた彼を見て、ココアは面白そうに笑った後、

「それにしても、ポトフは何処まで走ってっちゃったんだろねー？　”ミントォォォォ！！”って叫びながら」

再び前方に顔を向け、小首を傾げた。

「む？　それこそ心配しなくて大丈夫だ」

するとプリンは、しゅっと元の無表情に戻った。

「あいつはお腹が空けば帰ってくる」

「……飼い犬？」

プリンとココアが会話をしている頃、

「ミントォォォォォ！！」

少しクセがついた黒髪の少年”ポトフ”は、未だ”ミントォォォォォ！！”と叫びながら爆走していた。

「理由？　そこに大地があるからサ」

そんなことは誰も聞いていない。

「こ……これだけ呼んでも返事が無いなんて……何処にいるんだよ、ミント……？」

叫びながら爆走して苦しくなったのか、ポトフは足を止めた。
プリンと同じように美形で背の高い彼は、右目に黒い眼帯をつけ、左耳に十字架がぶら下がっているピアスをつけている。

ガサガサ

「？　ァん？」

前方でした大きな物音に反応し、ポトフがそちらに顔を向けると、

『うぱー』

そこには、大型の魔物がいた。

”魔物”とは、たまに例外もいるが、性格が狂暴で、動物や人間を見たらほとんど理由もなく襲いかかってくる、非常に血の気の多い生き物のこと。

魔物は攻撃方法や魔力の他に、姿も様々で、動物のようなものもいれば、よく分からない姿のものもいる。

『うぱー』

只今ポトフの前に現れたのは、姿に似合わず可愛らしい鳴き声を発するワニのような魔物。

「わァお。おにィさんが見たら狂喜乱舞しそォ――…」

自分より大きな魔物を見ても、顔色一つ変えずに呑気にそんなことを言っている途中で、

「――っ！？」

ポトフは魔物の鋭い牙に、帽子が引っ掛かっていることに気が付いた。

「……ミントを……」

ザワッ

と同時に、ポトフは魔物に殺気が篭った鋭い眼光を向けた。

『うぱうぱ』

すると魔物は、上等。カモン、とでも言うように、立ち上がって右の前足をちょいちょいと動かした。

「返しやがれェェェ！！」

『うぱー！！』

ほぼ同時に地を蹴り、かの有名なクロスカウンターのキックバージョンを披露するポトフと魔物。

『うばほうが？！』

が、当然のことながら、ワニの足は短い。
よって、ポトフの蹴りだけが魔物の腹にヒットした。

「このっ！　くそっ！　ミント返せよ！！」

『うば！？　うば？！　うぱば！？』

そのままマウンドポジションになって魔物の腹を殴るポトフ。

「返せよ！！」

『うばほああ！！』

ポトフの叫びも虚しく、魔物は断末魔の叫び声をあげて消滅した。

「……嘘……だろ……？」

その場に帽子以外何もなくなってしまったのを見て、力なく膝をつくポトフ。

「……ミント……」

ポトフは左目の端に光を宿し、帽子を握り締めながら大空を仰いで叫んだ。

「ミントォォォォ！！」

「そこ退いてポトフううううううううう！？」

「って、ミントォォォォォォォォォォォォ？！」

すると、ミントが空から降ってきた。

そして、ガチコーンという痛々しい音が辺りに響き渡った。

第3回　逃走日和

「いったた……大丈夫、ポトフ？」

ミントは頭を押さえながら起き上がり、ガチコーンと激突してしまったポトフに顔を向けた。

「って、ポトフ？！」

その瞬間、ミントは文字通り飛び上がった。

「……ミン……ト……」

それは、うつ向き加減のポトフが泣いていたから。

「ごごご、ごめん、ポトフ！！　オレ、うちのバカ親に”エイプリルフールだぜイエア☆”とかくっっだらない理由で日にち騙されたから遅刻しちゃって駅に行ったらもう汽車出発してたから箒でここまでぶっ飛ばして来たんだけどいきなり箒が空中分解しちゃって荷物と帽子落としちゃってそのあのええとオレの帽子知らない？！」

「……」

身振り手振りを交えながらのミントの必死の弁解に、ポトフはうつ向いたまままったく反応しない。

「……ごめんね、ポトフ？　そんなに痛かった？」

一気に騒いで気持ちが落ち着いたのか、申し訳なさそうな表情でミ

ントがうつ向いている彼の顔をしゃがんで下から覗き込むと、

「グゥレイトォォォ！！」

「うわあ?！」

ポトフはガバッとミントを抱き締めた。

「ぽ、ポトフ?」

グゥレイトォォォって何さ?　とか思いながら、ミントが彼の名前を呼ぶと、

「よかったァ、生きてたんだな!?　帽子は落としただけなんだな?！　もォ、焦らせんなよ、ワニの口に引っ掛かってたからワニに食われたかと思ったんだぞ!?」

「ワニの口に!?　焦らせてごめんなさい！！　そして焦ってくれてありがとう!!」

ポトフの言葉に驚き、彼に謝りながらも、やっぱり、グゥレイトォォォって何さ?　とか思うミント。

「あー！　ミントー！　久しぶりー！」

「！　ココア」

ポトフの腕の中から解放され、ミントが帽子を被っていると、ココアがそこにやって来た。

「久しぶり、って、プリンそれどうしたの！？」

振り向いた途端、頭に大きな瘤が出来たプリンが目に入り、ミントは透かさずそれに突っ込みを入れた。

「ぶう……急に空からバッグが降ってきたんだ」

頬を膨らませながら、プリンはバッグをミントに見せてそう言った。

「あ、ごめん、プリン。それオレの」

その黒いバッグを見て、彼に頭を下げて謝るミント。

「む？　そうだったのか」

それを聞いて、しゅっと元の顔に戻るプリン。
ついでに、頭の瘤もしゅっと引っ込んだ。

「……ありがとう。久しぶり、プリン」

「うむ。久しぶり」

引っ込んだ！？　と心の内で突っ込みつつ、ミントはバッグを受け取りながら久しぶりの挨拶を交した。

「あっはっはっ！　これで四人揃ったなァ！」

「ふふふ。そのようだな」

「春休みぶりだね～！」

「あはは♪　でさー？」

お互いの顔を見合わせ、明るく笑い合う四人。

「何？」

「む？」

「はェ？」

そして、ココアに顔を向ける三人。

「後ろにおっそろしいのがいるんだけどー？」

ココアは笑顔を引きつらせてそう言った。

「「うしー…」」

そのままココアの後ろに目を向ける三人。

『グルルルルラァ……』

そこには、鋭い牙と爪を有し、背中に革のような大きな翼を持ち、腹以外は堅い鱗で覆われている、桁外れに巨大な魔物が、

『グオオオオ』

『ガオオオオオオ！！』

三体いた。

「……わあ、何あれ？」

「……ふむ。恐らく、ドラゴンだ」

「……えっとー、ドラゴンって、あの危険度ＭＡＸで有名なドラゴンー？」

「……わァお。ファンタジ～ィ……」

四人は放心状態でそんな会話を交した後、

「逃げよっか」

「「大賛成」」

ミントの提案に同意し、全速力で逃げ出した。

『グルルルラアァ！！』

「ヤーーーーーー！！」

「きゃーーーーー！！」

「ココアちゃんは何があっても俺が守るぜェ！！」

『ガオオオオオオ！！』

「じゃあ、早くなんとかしなさいよーーー！！」

「え？　〝速く〟？　お安いご用♪」

「って、確かにポトフの方が足早いけど何お姫様だっこしてんのよー？！」

「……案外余裕なんだな、お前ら？」

『グオオオオ……ゴッホゴッホ！！』

「うわあああ！！　なんかむせてるよおおおお！！」

こうして、四人は国立魔法学校へと逃げて行くのであった。

第４回　大掃除日和

蒸気機関車の終着駅を出て、広大な森を抜けた先の小高い丘の上にある、縦にも横にも巨大な城のような国立魔法学校の大広間で、始業式が開かれていた。

『……では次に、学校長挨拶』

『えー、げふんげふん』

進行役の先生に言われた通り、学校長は腰かけていた椅子から立ち上がり、長々と語り出した。

「ぷっはー！　やっぱりコーラは最高だね！　グゥレイトォだね！」

「うむ。やはりプリンはカスタードに限るな」

一番後ろの席だから、向こうからは暗くてよく見えないだろうと踏んだのか、学校長の話をこれっぽっちも聞かずに、長テーブルに用意してあったコーラをことごとく飲み干していくミントと、カスタードプリンを上品に頂くプリン。

「ちょっとポトフー!?　いつまでこうしてる気なのよー?!」

彼らの向かい側の席で、未だポトフにお姫様だっこされているココアが、小さな声でポトフにもの申した。

「あっはっはっ！　それは勿論、死が二人をわかつまでV（ハート）」

すると、ポトフは爽やかに微笑んでココアにそう言った。

「あれ？　おっかしいな。なんか急に寒くなったね、プリン？」

「うむ。不思議。何やら急に寒くなったな、ミント」

その寒い台詞が耳に届いてしまった為、体感温度が急降下したミントとプリン。

「ふざけたこと言ってないで早く降ろしなさいよー！　って言うか、どうしてお姫様だっこなのよー！？」

頬を若干紅潮させながら、彼に言い返すココア。

「どうしてって、ココアちゃんがお姫様だから」

「なっ―…」

すると、ポトフはココアの赤らんだ頬に左手を添え、

「勿論、俺だけの……♪」

流し目。

「わあ！　見て見て、プリン！　あっちにバケツプリンが置いてあるよ！」

「うむ。その隣にはコーラタワーが置いてあるな」

「わはー、凄いね！　早速移動しよっか？」

「ふふふ。うむ。早速移動しよう」

寒さに耐えられなくなったミントとプリンは、半ば現実逃避しつつ、ナルシストでキザリストなポトフと顔を真っ赤にしたココアを残して、足早にそこから立ち去った。

国立魔法学校には四つの寮があり、生徒にとって、学期が終わるまではそこが彼らの家となる。

ウサギさん寮、おサルさん寮、ヘビさん寮、ヒヨコさん寮と、なんとも幼稚な名前がつけられている四つの寮は、それぞれが男子寮と女子寮に分かれている。

「わはー。もう三年目になるけどなんか久しぶりだねー？」

「うむ。久しぶりだな」

「あっはっはっ！　埃スゲェなァ！」

始業式が終わり、ミントとプリンとポトフは、ウサギさん寮の男子寮の一室にやって来た。
その部屋は、春休みの間使われていなかっただけの筈なのに、ポトフが言った通り、埃で酷く汚れていた。

「うん。掃除が必要だね」

「うむ。掃除が必要だな」

「ウン。なんで俺を見るんだ？」

こちらに顔を向けたミントとプリンに、ポトフは微笑んだまま聞き返した。

「あはは、冗談冗談♪　魔法でぱぱーっと終わらせちゃうのも一つの手だけど、今日は自力で掃除してみよう！」

「？　どうして？」

腕捲りをして気合いを入れたミントに、小首を傾げるプリン。

「ノリで」

「ノリか」

プリンがすんなりと納得したところで、

「じゃあ、オレは此処で、プリンはお風呂。ポトフはトイレね？」

「なんで！？」

「ノリで」

「あっはっはっ、なァんだノリかァ」

三人は役割分担をして、自分達の部屋の大掃除を始めた。

「ねえ、プリン、ポトフ」

「む？」

「はェ？」

しばらくすると、ミントに名前を呼ばれたので、プリンとポトフはこちらに顔を出した。

「此処に観葉植物置いていい？」

窓際の日当たりのいい場所を指さしながら、二人の同意を求めるミント。

「ふふふ。勿論、ミントの好きに―…」

「あっはっはっ！　勿論、ミントの好きに―…」

『『ジェラララ！！』』

すると、ミントが危険な笑い声を発する食人植物を出現させたので、

「「しないでください」」

二人は声を揃えてそう答えた。

「そっか。残念……」

（（と言うか、それは絶対に観葉植物と違うかと））

そんなことを思いながら、彼らは掃除を続けるのであった。

第5回　ライバル日和

太陽が沈んで、辺りが暗くなった頃。

「「終わった……」」

プリンとポトフが同時に同じ言葉を発した。

どうやら、一心不乱に取り組んでいた掃除がようやく終わったようだ。

ちなみに、どうして彼らが今まで頑張っていたかと言うと、それは、ひとえにミントに褒めて貰いたいが為である。

「あ？」

「むっ……」

しかし、掃除場所から出てリビングに入ると、同じ目的を持った者、詰まり、ライバルとバチッと目が合ってしまった。

「……あっはっはっ！　風呂掃除するのに何時間かかってんだよ、テメェ？」

軽く睨み合った後、ライバルに口喧嘩をふっかけるポトフ。

「それは貴様も同じことだろう」

すると、プリンは透かさず言い返した。

「……と言うか、今までトイレに込もってたのか、貴様は。くさく

さ」

プリンが小馬鹿にしたように鼻で笑うと、

「はァ？　このトイレはもはやピッカピカで良い香り状態だってェの」

余裕綽々の笑みを浮かべながら応えるポトフ。

「ふっ。お風呂はもっとぴかぴかだ」

挑発的な笑みで更に言い返すプリン。

「あっはっはっ！　そんなことほざくなら見せてみろよ？」

そう言いながらお風呂場に足を踏み入れたポトフは、

「なっ？！」

ピカピカに磨きあげられた壁と床と浴槽と、それに張られたもくもくと湯気を上げているお湯を見て、目を見開いて固まった。

「ふふふ。どうだ？　完璧だろう」

そんな彼を見て、勝ち誇ったように笑うプリン。

が、しかし、

「バカか、テメェ？！」

ポトフは彼に向かってそう怒鳴った。

「な―…」

予想外の反応に、プリンが何かを言い返そうとしたところ、ポトフは自分のバッグを勢いよく開け、

「アヒルちゃんなくして何が完璧だ?!」

と、取り出したアヒルちゃんをプリンに見せ付けながらそう言った。

「――!!」

雷に打たれたような衝撃を受けるプリン。
アヒルちゃんの存在は、完全に盲点だった。

ちゃぷ

ぷかぷか

「……よし。これで完全だぜ」

「うむ。これで完璧だな」

湯船に黄色いアヒルちゃんを浮かべ、満足そうに頷くポトフとプリン。

「やっぱ風呂にはアヒルちゃんが欠かせねェよな?」

「な」

趣味の一致。
なんだか仲が良いのか悪いのか、よく分からない二人であった。

「ただいま～」

「「！　ミント！」」

部屋の扉が開き、そう言えば今までミントがいなかったことによるうやく気が付いたプリンとポトフ。

「あ、掃除終わったの？」

お風呂場から出てきた二人を見て、ミントがそう尋ねると、

「あっはっはっ！　勿論だぜ、ミントォ♪」

「わ！？」

当初の目的を思い出したポトフは、ミントをトイレへと引っ張っていった。

「な？　綺麗だろォ？」

ずるい、とでも言いたげなプリンを無視し、期待に満ち溢れた目でポトフがミントに顔を向けると、

「わあ！　うん！　すっごい綺麗になってるよ、ポトフ！！　しかも薔薇まで飾ってあるし！」

ピカピカのトイレを見て、驚いたようにミントがそう言った。

「あっはっはっ！　流石俺―…」

「ミント、こっちも！」

「へ？」

ポトフが満足そうに笑っている隙を見て、プリンはミントをお風呂場に連れていった。

「わあ！　プリン、すっごいピカピカ！！　それに、お湯まで張ってくれたんだね！」

ピカピカのお風呂場を見、またもや驚きの声をあげるミント。

「ふふふ。頑張った」

そんな彼を見て、満足そうに笑うプリン。

「……」

それがなんとなく気に食わなかったポトフは、

「ミントォ、俺の方が綺麗だろォ？」

「え？」

ミントの腕を掴み、ちょっと捉え間違えれば物凄いナルシストな発言をした。

「……何を言うか。僕の方が綺麗に決まっているだろう」

「へ？」

彼に対抗し、ミントの反対側の腕を掴んで、やはりちょっと捉え間違えれば物凄いナルシストな発言をするプリン。

「「むむむ」」

プリンとポトフはミントを挟んで火花を散らした後、

「「ミント、どっちが綺麗?!」」

再びちょっと捉え間違えれば物凄いナルシストな発言をした。

「？　どっちも綺麗だよ」

ミントはきょとんとした表情で小首を傾げながら、ちょっと捉え間違えれば物凄いキザな返答をした。

「「そ―…」」

「あ、そだ。はいこれ」

「「！」」

納得いかない二人が何か言う前に、ミントは思い出したように手に提げていた袋から、プリンと骨付き肉を取って二人に差し出した。

「お掃除お疲れ様」

そしてミントは、にこっと笑った。

「……」

「……」

そんな彼を見て、戦意を喪失したプリンとポトフは、

「……？　どしたの？」

「「ありがとう、ミントっ！！」」

「うわあ？！」

首を傾げたミントに、お礼を言いながら抱きついた。

第5回　ライバル日和（後書き）

その夜。

ミント

「……またアヒル浮かべたのか……」

趣味の不一致。

第6回　復習日和

東の空に日が登り、再び朝が訪れた。
ワイシャツに着替えて、帽子を被り、ピンクと黒のストライプのネクタイを締めて黒いローブをはおったらさて次は。

「ぐー」

「すかーっ」

「……起こすか」

制服に着替えたミントは、まだいびきを掻きながら気持ち良く眠っている二人を起こすことにした。
まずはプリンから。

「ゲットアッププリン」

ミントが謎の複合語を言いながら、プリンが抱えている可愛らしい枕を手慣れた手付きで没収すると、

「枕？！」

プリンは酷く慌てた様子で枕を追うようにガバッと起き上がった。

「おはよ。顔洗っといで」

「うむ。おはよう」

プリンはミントから枕を返してもらうと、冷静さを取り戻し、そのまま顔を洗いに行った。

「ポトフ」

次は、可愛らしいヒツジのクッションを抱えながら寝ているポトフのベッド脇に移動するミント。

「すかーっ」

「……」

ポトフは、何やらプリンと同じような体勢で眠っている。

（……流石は双子……）

と思いながら、ミントは、それなら、ポトフも没収すれば起きるのでは？　と考え、早速それを実行した。

「ゲットアッポトフ」

先程と同じパターンの複合語を言いながら。

パシッ

「へ？」

ミントはヒツジのクッションを没収した直後、その手をポトフに掴まれた。

「……あっは♪」

手を掴んだポトフは、眠ったままにっこりと笑った。
――嫌な予感。
ミントがそう思ったのとほぼ同時に、

ぐいっ

「うわ!?」

ガバッ

「ココアちゃァんV」

嫌な予感的中。
ミントは腕を引っ張られ、そのままポトフに抱き締められた。

「ちょ、ポトフ?!　オレはミントだよ!?　ノットココア!!
イエスミント!!」

「んァ?」

彼の腕の中でミントがわけの分からないことを言いながら暴れていると、ポトフは薄く目を開けた。

「……あれェ?　……ココアちゃんじゃなくてミントだァ」

「!　そうだよ!　ノットココア!!」

おかしいな、と小首を傾げるポトフと、早く離して、とでも言いた

げな顔を彼に向けるミント。

「……まァ、いっかV」

ぎゅっV

ポトフはこの状況をポジティブに受け止めた。

「よくねえええええ!!」

バシーン!!

「ぐはァ?!」

ミントは絶叫突っ込みを入れつつ、先端に真っ赤な薔薇が咲いている、薔薇の鞭を出現させてポトフをぶっ飛ばした。

キーンコーンカーンコーン

「はい。出席を取りますが点呼は面倒臭いので全員いますね？」

「「は……はあ……」」

三年生になってからの初授業の魔法学の時間。

黒髪で面倒臭がりのポリー先生の質問に、ウサギさん寮の三十人はそう答えた。

「ぐー」

ちなみに、三十一人目の生徒は早速枕に顔を埋めて眠っている。

「全員出席素晴らしいですね。はい。では、ピノキ花粉シーズンが終わって超嬉しい私、ポリーがお送りする魔法学を始めます」

そんな彼を無視して教科書をパラパラと捲り始めるポリー先生。

どうやら彼女はピノキ花粉症のようだ。

「では、授業に入る前にって言うかもう入ってますけどそこら辺は気にしないで今までの復習をしてみましょう」

ポリー先生はそう言うと、たまたまバチッと目が合ったココアに質問をした。

「では、ココアさん。魔法の属性は何種類あるでしょうか？」

「はーい。えっとー、炎と水と樹と雷と地と風と氷と闇と光と無の十種類ありますー」

先生の質問に、いつもの間伸びした口調で答えるココア。

「はい。お見事その通り。では、無属性魔法は物を浮かすことから相手の首を刎ね――…おっと失礼。様々なものがありますが、その種類は？　サラダさん」

ココアが答えた後、視界の隅に入った猫耳少年、サラダを指すポリー先生。

「は、はいっ。物質魔法と呪魂魔法と回復魔法と召喚魔法の四種類ですっ」

サラダはさりげなく恐ろしいことを口にしたポリー先生に若干怯えていた。

「良く出来ました。それでは、ミントさん。例えば炎属性の魔法なら相手をレアからウェルダン――…おっと失礼。と、いくつかクラスがありますが、全部でいくつありますか？」

またもや危険な言葉を口走りつつ、ミントに質問するポリー先生。

「……初等魔法と高等魔法と最大魔法と最高魔法の四つです」

わざととしか思えないポリー先生の失言に、ミントは頬を引きつらせながら答えた。

「完璧ですね。では、皆さん、魔法の基礎はしっかり覚えているようなので――覚えてない人は授業の後で私に聞いてください。身をもってそのちいせぇ脳味噌に刻み込んでやりますから――今日の授業に入ります」

ポリー先生は爽やかに生徒達にそう告げると、何事もなかったかのように黒板にチョークを走らせ始めた。

「「……」」

体罰？　いいえ。教育の一環です、と笑顔で口にしそうなポリー先生に、言い知れぬ恐怖を覚えるウサギさん寮の生徒達であった。

「ぐー」

約一名を除いて。

第7回　野外授業日和

「えっと、次は生物学だよね？」

大きな食堂で、ミントが食後のコーラを飲みながら尋ねた。

「うん。あと確か、外に集合って言ってたよねー？」

「うん。嫌な予感がひしひしとするね♪」

ココアをテーブルに置いて頷いたココアが口にした言葉に、取り敢えず笑うしかないミント。

「そォ言えば、その次の四限目の魔物学も外だって言ってたよなァ？」

骨付き肉の骨を口から出しながら左を向くポトフ。

「僕に聞くな」

その隣でプリンを食べていたプリンは、スプーンを止めることなくそう答えた。

「まー、プリンは一限目と二限目、どっちも寝てたもんねー？」

「うむ。……ぷわ……ねむねむ」

ココアの言葉に頷くと、プリンは小さな欠伸をして眠たそうな声を発した。

彼女の台詞から、どうやら三年生の授業は一コマ九十分のようだ。

「って、まだ眠いの?!」

そんな彼に、ミントは素早く突っ込みを入れた。

「うむ。寝疲れて眠い」

「エンドレスじゃん!?　それってエンドレスじゃん?!」

「ふふふ。ミントおもしろぐー」

「って、台詞の途中で寝たあ!?」

ミントの突っ込みの甲斐もなく、プリンは枕に顔を埋めて眠り出した。

「隙ありィ♪」

プリンが眠った隙を見て、ポトフは彼の額に油性ペンで”腐肉”と書いた。

「修学旅行!?　しかも何故に”腐肉”?!」

すると、今度はポトフに突っ込みを入れるミント。

「あっはっはっ!　ツッコミ入れんの大変だなァ、ミントォ?」

「誰と誰のせいだよ?!」

「ボブとジョニー？」

「本当に誰だよ！？」

「はー、三限目と四限目はどっちも外かー……」

突っ込み続けるミントと、完全に彼で遊んでいるポトフを無視し、ココアは嫌な予感に溜め息をついた。

「……今日の生物学と魔物学は同時進行二限続きで、野生の動物、または魔物の観察をしてもらいます」

「では、今からスケッチブックを配布する」

生物学担当のリア先生が説明すると、魔物学担当のセル先生が指を打ち鳴らした。

「……スケブ……」

手元に現れた、表紙に”スケブ”と書かれたスケッチブックを見て、やる気の無さを感じるココア。

「……課題は、動物と魔物を合わせて、一人十匹のスケッチを完成させることです。それでは、いってらっしゃい」

リア先生が言うと、彼女達は右にずれ、生徒達にその先にある森に入るよう促した。

「うーん、一人十匹かー」

「四人で分ければ早く終わるぜェ？」

多いな、とココアが困った顔をしていると、指先で皿回しならぬスケブ回しをしながらポトフが言った。

「！　成程ー！　良いこと言うわねー！　たまには」

「あっはっはっ……たまには？」

「じゃー、ポトフは六匹でプリンは二匹、私とミントで二匹ねー？」

たまには、と言われてへこんだポトフを無視して、ココアがそれぞれの配分を言った。

「って、俺、六匹？！」

「八匹にするー？」

「六匹で結構でェす♪」

ココアが一言でポトフを黙らせると、

「ふむ。どうしてココアとミントで一塊？」

プリンが小首を傾げながら彼女に質問した。

「そりゃー、女の子が一人で森を歩くのは危険だし、ミントはとてつもなく絵が下手でしょー？　だからだよー」

何気無く酷いことを口にするココア。

「納得した」

それに納得しちゃったプリン。

「じゃー、早速しゅっぱーつ！　って、はれ？　ミントはー？」

元気に拳を振り上げた後、ミントがいないことに気付いて小首を傾げるココア。

「ミントならあそこで植物を観察しているぞ？」

「え？」

プリンが指さした方に目を向けると、

「……綺麗……」

その先で、ミントはこれから入る森の草木に感動していた。

「これが、〝青の森〟……」

それは、その森が今までの森とは違って、草木が文字通り青々としているから。

「ミントー、早く行くよー？」

「あ、うん」

こうして、四人はそれぞれ青の森へと入って行った。

第8回　弱点日和

「ミントー、早く行くよー？」

「あ、うん」

青の森に入っていったココアとミントが見えなくなった頃、

「はァ……何故だ……何故俺だけ六匹なんだ……」

森の入り口で、ポトフががっくりと肩を落とした。

「……それだけ頼りにされているということだろう」

するとその隣で、枕を抱えたプリンがそう言った。

「――！　そっか、そォだよなァ！！　あっはっはっ！　流石俺！！」

その言葉を聞き、たちまち元気になるポトフ。

「うむ。やはりイケメンは違うな」

「だろォ？！　よォし！！　ここは六匹とは言わず、景気よく八匹ぐらいやってやるぜェ！！　あっはっはっ！」

プリンに煽られてますますやる気が出たポトフは、軽快な足取りで森の中へと入っていった。

「うむ。頑張れ」

そんな彼の後ろ姿を見て、プリンは黒く微笑んだ。

「僕の分まで」

プリンの底は、黒いのだ。

「見て見て、ココア！　青い薔薇が咲いてるよ！」

「わーホントだスゴーイ」

昼下がりの青の森の茂みの中。

ミントはこの森に存在する青系統の色の植物に小声で感動し、ココアはそれを小声で受け流していた。

二人が小声で話している理由は、只今スケッチしている魔物に気付かれないようにしている為である。

ちなみに、スケッチしているのはココアだけ。

「青い薔薇は確か”奇跡”を意味してたから……この森は奇跡に、ミラクルに満ち溢れているんだね！」

「わー、ちょー凄いねー」

”奇跡”を何故か”ミラクル”と言い直したミントはスケッチをせずに、ココアの隣で、美しく咲いている青い薔薇に目を輝かせている。

「……こんなもんかなー？　ま、いいや。ミントー、次行くよー？」

「あうぅ、花子～……」

魔物のスケッチが完成したので、ココアがミントを引っ張りながら魔物に気付かれぬように回れ右して茂みを出ると、

「え」

「え？」

彼女は固まり、青薔薇の花子との別れを惜しんでいたミントが不思議に思って振り向いた。

「え」

そして、ミントもまた彼女と同じように固まった。

『『ねばぁ』』

何故なら、二人はカタツムリに包囲されていたから。

「……さて問題です。姿形が似ている動物と魔物との間にはどんな違いがあるでしょーか、ミントさん？」

固まったココアが、カタツムリから目を離さずに問題を出すと、

「取る行動が違うことがあります、ココアさん。動物の方は人間を見たらほとんど逃げ出しますが、魔物の方は人間を見てもほとんど逃げずに立ち向かって来ます」

ミントはその問いに、彼女と同じ調子で答えた。

「そうですね。では、その他にはどんな違いがあるでしょーか？」

「その他には、大きさが違うことがあります。しばしば動物の方よりも、魔物の方が大きかったりします」

ミントが答え終わると、ココアは爽やかな笑みを浮かべながら彼に顔を向けた。

「それでは、ミントさん。この大きなカタツムリさんたちは動物ですか？」

「いいえ、魔物です」

最後の質問に、ミントが爽やかな笑顔で答えた途端、

『『ねばあああああ！！』』

巨大カタツムリの魔物が、威勢のいい雄叫びとは裏腹に、非常にゆ

っくりとミントとココアに迫ってきた。

「きゃあああああ！！」

するとココアが甲高い悲鳴をあげ、素早くミントの背中に隠れて彼を盾にした。

「こ、ココア？」

悲鳴をあげたことに驚いたミントが彼女の名前を呼ぶと、

「わ、わた、カタツムリ、ダメッ――いやあああ！！　来ないでええええ！！」

涙目のココアは、ミントの背中にしがみつきながら、顔を真っ青にして叫んだ。

「つつつ、ツインホイップううう！！」

ので、涙が弱点なミントも顔を真っ青にして叫んだ。

『『ジェラララ！！』』

直後、彼の両手に二本の鞭が装備された。

一本は、先端に真っ赤な薔薇と二枚の葉がついた薔薇の鞭、”ローズホイップ”。

もう一本は、鋭い牙を光らせ、紫色の舌を垂らして危険に笑う、二枚貝のような葉を四枚つけた食人植物の鞭、”マッドホイップ”。

「ココアを泣かすな！！」

台詞はかっこいいのだが、顔は非常に強張っている。

「舞い散れ！　”矢車菊（ヤグルマギク）”　！！」

ミントは二本の鞭を強く握り締めると、背中にココアをくっつけたままその場で勢いよく回転し、回転斬りならぬ回転打ちを放った。

べちゃちゃちゃちゃっ！！

回転打ちを喰らい、魔物は気持ちの悪い音と共に勢いよく四方八方に吹っ飛んでいった。

『『ねばぎばああ！！』』

と叫びながら。

第8回　弱点日和（後書き）

魔物がお星様になった後。

ミントとココア

「「……ネバギバ？」」

第9回　わんわん日和

青の森の大きな青い木の下にて。

「ぐー」

水色の長い髪の毛を後ろで一つに束ねている彼、プリンは、枕に顔を埋めて昼寝をしていた。

「ぐー」

魔物が住む森の中でここまで隙を見せるとは、なかなかの度胸である。

カサ

と、その時、プリンの前方にある草むらが小さく動いた。

「ぐー」

しかし、プリンはそれに気が付くことなく眠り続けている。

カサカサ

その間にも、草むらが動く小さな音は、だんだんと彼に近付いてくる。

「ぐー」

カサッ

音は、プリンの少し前で止まった。
それは、そこで草むらが終わっていたから。

『？』

草むらから姿を現した生物は、長めの垂れ耳をぱたぱたと動かした後、プリンを見上げ、首がないので体全体を傾けた。

「ぐー」

プリンはぐうぐうと眠り続けている。

ぱた

その生物は、再び耳を動かすと、短い四足をちょこちょこと忙しく動かして歩き出した。

ちょこちょこちょこ

そして、プリンの足元で止まった。

「……む……」

丁度その時、プリンは小さい呻き、枕から顔を離しつつゆっくりと目を開けた。

「……？」

徐々にはっきりしてきた視界の隅に何かの存在を確認したプリンは、自分の足元に、その綺麗な蒼い瞳を向けた。

「！」

と同時に、いつもは眠たそうに半開きになっている彼の目が大きく見開かれた。

「……わんわん……！」

プリンが目を輝かせながら呟くと、淡い紫色の小さくてまるっこい犬のぬいぐるみのようなそれは、可愛らしく鳴いた。

『む～』

「いーい？　これを写すようにして描くの。絶対アレンジしちゃダメだよー？」

「うん。分かった」

切株に座ったココアがスケッチブックを彼に渡しながら言うと、地面から顔を出している木の根に座ったミントが返事をした。

「……それとー、」

「？」

左手に鉛筆を持って、早速ココアが描いたスケッチを写し始めたミントに、

「……カタツムリのこと、ポトフには言わないでねー？」

ココアは若干赤くなりながら、非常に言いにくそうにそう言った。

「はーい」

が、あまりにも軽い返事が返ってきたので、ココアは思わずずっこけた。

「？　どしたの？」

そんな彼女に、スケッチブックから目を離して、きょとんとした顔を向けるミント。

「ほ……ホントに言わないー？」

顔を上げたココアが確認するように聞き返すと、

「なァにを？」

彼女の後ろからポトフがひょこっと顔を出したので、

「ひゃあ?!」

ココアは驚いて短い悲鳴をあげた。

「あっはっはっ！　驚いたココアちゃんもかァわい～い♪」

そんな彼女を、切株に座ったポトフは笑いながら自分の膝の上にひょいっと乗せた。

「あ、ポトフ。スケッチ終わったの?」

「おう!」

またもや彼にお姫様だっこされてしまい、降ろせ降ろせと騒いでいるココアを無視してミントが聞くと、

「八匹終了！　楽勝だぜェ♪」

ポトフはそう言って、自慢げに自分のスケッチブックをミントに見せた。

「わあ、凄い！　八匹も描いたの?」

彼のスケッチブックを捲りながら、驚いたように言うミント。

「だろだろォ?　あっはっはっ！」

ミントに凄いと言われ、鼻を高くするポトフ。

「じゃあ、プリンの分まで描いたんだね？」

そんな彼に、ミントが顔を上げてそう言った。

「あっはっ――はァ？！」

信じられない言葉を聞き、ポトフの笑いが止まった。

そして、瞬時に自分をおだてたプリンと彼の言葉が思い出された。

『……それだけ頼りにされているということだろう』

『うむ。やはりイケメンは違うな』

「……」

ポトフはココアを膝の上から降ろして脇に置くと、静かに立ち上がり、

「何処だあンのクソ枕ァァァァァァァァァァ！！」

怒りと屈辱の念を込めて盛大に吠えた。

「僕はプリンだ、馬鹿犬」

すると、すぐに返事が返ってきた。

「俺はポトフだ、クソ枕ァァァ！！」

ポトフは怒鳴りながら距離を詰め、プリンに上段回し蹴りを決めようとした。

『む～』

「わォ何コレ超カワイ～イV」

が、プリンが抱えている枕の上から顔を出した淡い紫色の生物を見た途端、ポトフはピタッと静止した。

「ふふふ。豆次郎だ」

『むむぅ?!』

「はァ？　テメェ、何言ってんだよ、”むぅちゃん”だろ。”む～”って鳴くんだから」

『む～！』

「ふむ。成程。むぅちゃんか」

『む～！』

「「……」」

何やら急にほのぼの化した空間と、その中心にいるむぅちゃんを見て、

「……ったく、なんなのよあれはー？」

「あれ、むぅちゃんに焼き餅？」

「ノット」

そんな会話をするミントとココアであった。

第１０回　平伏日和

階段を上って、爽やかな朝の光が差し込む食堂の入り口をくぐった少女は、一人の少年の後ろ姿を捕え、ぱっちりとした金色の目をこれ以上ないほどに輝かせた。
動悸がして、自然と息も苦しくなる。
これは、彼女が運動不足だからではない。

「……よし！　今日もバッチリよ、チロル！」

ローブのポケットから取り出した手鏡で、ポニーテールにした金髪に乱れがないか確認し、服装にどこかおかしなところは無いかチェックした後、

「おっっっはよ～～！！　ミントきゅ～～～ん！！」

彼女、”チロル”は、愛しの彼、ミントの元へと駆け出した。

ドガアアアアアン！！

直後、静かな食堂に轟音が鳴り響いた。
勿論、これはチロルが立てた足音ではない。

「「？！」」

この時食堂にいた者は、食堂のおばちゃんも含めて、轟音の発信元に無言で目を向けた。
そこからは、こっちは食事中だというのに、もうもうと粉塵と爆煙が上がっている。

バサリ

大きな羽音と共に突風が巻き起こり、粉塵と爆煙は一瞬にして晴れた。

『グオオオオオオ！！』

「「って、ドラゴンんんん?!」」

そして姿を現した巨大な魔物、ドラゴンが雄叫びをあげた直後、その場にいた者は悲鳴をあげて食堂から逃げ出した。

『むむっ！』

が、その中で正反対の行動を示す者が一匹。

『む～！』

プリンに抱えられていたむぅちゃんだけは、彼の腕の中から飛び出し、あろうことか、ドラゴンに向かって走り出した。

「！　むぅちゃん！」

「何してんだバカ枕！？」

「何やってんのさ、二人とも?！」

むぅちゃんを追い掛けたプリンの腕を掴んでポトフがそれを止めると同時に、彼の腕にミントの薔薇の鞭が絡み付き、

ぐわんっ

「おわ?!」

「ぴわ!?」

二人はミントに釣られたように、食堂の入り口の方に引き戻された。

『む〜』

その間にドラゴンの元に辿り着いたむぅちゃんは、短い右前足を上げ、ドラゴンに向かって挨拶をした。

『グオ』

「「!?」」

すると、ドラゴンも片手を上げて挨拶を返した。
ドラゴンが挨拶をしたことに、逃げ遅れたミントとプリンとココアとポトフの四人が驚いていると、

タッ

「……探しましたよ。こんな所にいらっしゃったんですか、夢魔様？」

ドラゴンの背中から、ミントたちと同い年くらいの少年が飛び降りて来て、華麗に着地した。

『む～』

「”む～”じゃないですよ。此処は異世界で、しかも貴方は小さくて探すのが大変なんですから、あれほど勝手な行動は控えるようにと――」

彼はむぅちゃんをやんわりと叱っている途中で逃げ遅れた四人に気付き、そちらに顔を向けた。

「！？」

驚いて固まっている四人を見て、少年は驚きに目を見開いた。

「……そ……それはもしや……薔薇の鞭……！！」

少年は震える声でそう呟いた後、感極まって、

「女神様あああああ！！」

と叫びながら駆け出し、ミントの足元に平伏した。

「ええ？！」

少年の行動に、ミントは驚いて思わずのけ反った。

「ワット！？　何よあんた？！　ミントきゅんに平伏していいのはアタイだけ～～～みたいな～～～！！」

その隣に、チロルも平伏した。

「えええええ！？」

飛び入り参加してきた彼女に更に驚くミント。

「……ミントにそんな趣味が……」

そんなミントに、じとっとした視線を向けるココア。

「ココア？！」

このままだと自分の趣味を誤解されかねないと思ったミントは、

「ああ、お目にかかれて光栄です女神様！！　はっ！　申し遅れました！！　僕はフラン……”フラン＝スパン”と申す者です！！」

「い、いや、あの、えと、フランスパンさん？　人違いではないですか？　って言いうか、オレ、男なんですけど」

困ったように笑いながら、しゃがんで少年、フランに話し掛けた。

ちなみに、チロルに関しては面倒臭いので無視した。

「え、ええ！？　貴方はメルヘンの女神様、ジャンヌ様ではないのですか？！」

すると、フランは驚いたようにガバッと顔を上げた。

「……。……。……ジャンヌ？」

長い沈黙の後、彼が口に出した名前をゆっくりと聞き返すミント。

「はい。ジャンヌ様です」

こくりと頷くフラン。

「……あー、その人なら、王都市・シャイアにいますよ？　たぶん」

と、ミントが教えると、

「マジですか！？」

「マジですよ」

「そ、その都市に行くにはここからどの方角に向かえば？！」

「北東ですね」

「あ、ありがとうございました！！」

立ち上がったフランは、被っていたシルクハットを取って深々と頭を下げ、

「イヴ！！」

『グオオオオオオ！！』

イヴと呼ばれたドラゴンに乗って、北東へと飛び去っていった。

「「……ドラゴンマスター……」」

『む～む～』

五人はそんな彼を見て、口をぽかんと開け、一匹は二本足で立って、彼とドラゴンに短い右前足を出来る限り大きく振ってさよならをした。

第１１回　原因日和

「あらら……随分と派手に壊してくれちゃったね～」

食堂に空いたどでかい穴を見て、薬草学担当の紫色の髪の女性、クー先生は、にこっと笑った。

「あっはっはっ……だいぶオープンな食堂になりましたねェ……？」

「う、うむ。森がよく見えるな……」

『む、む～……』

「あ、あはは……って言うか」

ポトフとプリンとむぅちゃんが引きつった笑顔でそう言った後、

「この斧はなんですか？」

と、ミントがクー先生に尋ねた。

三人は今、壁に背を預け、正面からはクー先生によって首に巨斧が当てられているという、危機的状況の中にいる。

「マリルちゃんだよ」

小柄なクー先生よりも大きな巨斧、マリルちゃんは、名前に似合わずギラギラと危険な輝きを放っている。

「どうして先生はマリルちゃんをオレたちに向けているのですか？」

冷や汗を掻きながらミントが再び質問をすると、

「キミたちが逃げようとするからだよ」

クー先生は、笑顔でそう答えた。

「そ……そりゃあ、斧持った人がこっち向いてにこっと笑ったら、誰だって逃げるでしょう……？」

それに正論で返す引きつりまくった笑顔のミント。

現に、ココアとチロルもさっさと逃げていなくなっている。

「ふふっ♪　そんなことより、この穴はドラゴンのせいで空いちゃったんだよね？」

「は……ハイ……」

しかし、クー先生は笑顔でそれを切り捨てた。

「でも、ドラゴンが此処に来たのは、そのまるっこいののせいなんだよね？」

『むむぅ？！』

クー先生の鋭い指摘に、プリンの腕の中でぎくりと反応するむぅちゃん。

「で、そのまるっこいのを此処に持ち込んだのはプリンくんなんだよね？」

「ぴぐっ？！」

同様にぎくりと反応するプリン。

「じゃあ、この穴が空いた原因は、キミたちにもあるよね？」

「「は、ハイィ！！」」

クー先生はそう言った後、ギラギラと光るマリルちゃんを三人の喉笛に押し当てた。

「ふふ♪　ねえ？　私が今うっかりくしゃみなんかしたら、キミたちの首と胴体がバイバイしちゃうんだけど、どうする？」

どうするって、どうしようもないではありませんか。そう思った三人は、綺麗に声を揃えてこう答えた。

「「喜んで修理させて頂きマス！！」」

「……はァ……やるか」

「……うむ」

クー先生が去っていった後、ポトフとプリンは魔法で金槌を呼び出し、彼女が置いていった板を手に取った。

『……むゅ～……』

「げ、元気出してよ、むぅちゃん？」

垂れ耳を更に垂らして、短い前足で”の”の字を書いているむぅちゃんに励ましの声を掛けるミント。

『むむ……む～……。……むぅ！』

「？」

弱々しい声を発した後、急に耳をピンと立てたむぅちゃんに、疑問符を浮かべるミント。

『む～！』

ぽわん

すると、むぅちゃんは小爆発を起こし、金槌に変身した。

「……。……。あ、使えってこと？」

その意味を理解したミントが、むぅちゃん金槌を左手に取って、右手で支えた釘にそれを打ち付けた。

ごっ

ぼふん

『むゅうううぅうんっ！！』

「ごごご、ごめんね、むぅちゃん？！」

打ち付けたと同時に、むぅちゃんは変身を解いて泣き出したので、ミントは慌てて謝った。

「……暇だ」

同時刻、無駄に豪華で無駄に広い王室にある無駄に大きな玉座に、小柄な白銀の髪の国王が座っていた。

「暇だ暇だ暇だ暇だぁ！」

彼は床に届いていない足をじたばたさせ、己の暇さ加減を表現した。

「う～……早くシャーン来ないかな……」

力なくうなだれて、ぽつりとそう呟くと、

「――はっ！」

彼は自分の発言に、はっとなった。

「ルゥ！！」

と同時に、王室の無駄に大きな扉がバァンと勢いよく開き、撥ねまくった少し長めの赤い髪の男、シャーンが姿を現した。

「べ、別に来て欲しくなんかねえよ！！」

若干顔を赤らめながら、彼に向かって叫ぶ国王、”ルゥ”こと”ルクレツィア”。

「ツンデレ気取ってる場合じゃねえぞ！！　外見ろ、外！！」

すると、シャーンは酷く焦った様子で無駄に大きな窓を指さした。

「外？」

シャーンに言われた通りに窓に目を向けると、

「――！」

そこから、こちらに真っ直ぐに向かって来ている巨大な魔物――ドラゴンの姿が確認出来た。

「ワア、ナニアレ？」

「ああ、驚いて思わずカタコトになるのも分かるが……って、にっこにこ？！」

ドラゴンを見て、驚いているだろうと思っていたのに、ルゥがにっこにこだったので思わず突っ込みを入れてしまったシャーン。

「何してんだよ、シャーン？！　早く外行くぞ！！　街に何かあったらどうするんだ！？」

その間に、ルゥは早くも外に向かって駆け出した。

「ああ、それは大丈夫だ。街には城の衛兵を全動員させておい―…」

「馬鹿野郎！！　そんなの今すぐ引っ込めろ！！」

箒に乗って彼に続きながらそう言ったシャーンに、ルゥは透かさず喝を入れた。

「だろ？　――って、ええ？！」

褒められると思っていたのに怒られたので、シャーンはショックを受けた。

「そんなことしたら危ないだろ！？　戦って怪我でもしたらどうするんだ？！」

「なんの為の衛兵！？」

「ってなわけで、オレが戦(や)る！！」

「男前ッ！！　って、いやいや、衛兵よりお前が怪我した方がまずいだろ？！」

無茶苦茶な国王に、休みなく突っ込みを入れるシャーン。

「いひひ♪　だから兵士長も一緒に行くんだろ？」

そんな彼に、ルゥが悪戯っぽく笑いながら言うと、

「？　俺がいつ行くって言った？」

シャーンは疑問符を浮かべて首を傾げた。

「急にドライな対応？！」

突っ込みを入れながらも走り続けるルゥ。

今は緊急事態の筈なのに、随分と余裕である。

「と、兎に角行くぞ！！」

「へいへい」

「超面倒臭げ？！」

そうして、国王と兵士長はドラゴンと対峙するのであった。

第１２回　戦闘日和

風を切るような速さで空を飛ぶドラゴンの背中に、一人の少年が乗っていた。

「お城……！　ということは、あそこが王都市・シャイアでしょうか？」

燕尾服を身に纏い、シルクハットが風で飛ばないように白い手袋をした手で押さえている彼の名はフラン。

「イヴ、取り敢えず降りてみましょう」

『グオオ！』

フランの言葉を聞いた茶色のドラゴン、イヴは、バサバサと翼を動かし、ドシンと豪快な音を立てて着地した。

タッ

「……わあ、綺麗な街ですね」

イヴの背中から飛び降りて華麗に着地してみせたフランは、巨大な門の向こうに広がる王都市・シャイアを見て呟いた。

ズドドドドドドドドド

「おや？」

白亜の城を眺めていたフランは、猛烈な砂煙がこちらに向かって来ていることに気が付いた。

「うおおおおおおおお」

「は、はい？！」

砂煙の正体、気合いの入った声を発しながらこちらに向かってくる少年を見て、フランは思わず一歩下がった。

「おおおお、ファスチネイションサンダー！！」

フランが少年だと思った銀髪の国王、ルゥは、門の外に出ると同時に叫んだ。

「『？！』」

ドカアアアアアン！！

目も開けていられないような強い光が走ったと思った次の瞬間、豪快な音と共にフランとイヴの上に雷が落ちた。

「オレは――お前と戦いたくない！！」

「しょっぱなから最大魔法かましといてそれはないと思うぞ？」

かっこよく決めたルゥに、箒に乗って宙に浮いているシャーンがさらりと突っ込みを入れた。

「では訂正しよう。オレと戦え！！」

「どこの悪役だ」

などと、ルゥとシャーンが早速漫才を始めていると、

「い、いきなり何をするんですか、貴方は?!」

イヴが翼で守ったおかげで無傷なフランが、ルゥをズビシッと指さして叫んだ。

「ほほう、無傷とな?　相手にとって不足なしでおじゃる!!」

「お前は誰だ」

そんな彼に、馬鹿にしているとしか思えない反応を見せるルゥ。

「おい、そこのジェントルマンなドラゴン使い。いきなり攻撃して悪かったな。シャイアになんの用だ?」

ルゥにしっかり突っ込みを入れた後、シャーンはフランに話し掛けた。

「くっ……!　流石は女神様がいらっしゃる街……そう簡単には入れてもらえませんかっ!」

しかし、フランは勝手に盛り上がっていた。

「ですが、女神様にお会い出来なければ、この世界に来た意味がありません!　行きますよ、イヴ!!」

『グオオオオオオ！！』

フランの言葉に答えるように、イヴは翼を広げ、迫力満点の雄叫びをあげた。

「いっひひ♪　そうこなくっちゃ！！」

「……いいもんね。無視されるの慣れてるから」

不敵に笑ってフォークを身の丈ほどに巨大化させるルゥと、悲しいことを呟くシャーン。

「先手必勝、イヴ！」

『グオオオオオオ！！』

フランの掛け声に合わせてイヴは口から火を吹き、先制攻撃を仕掛けた。

「トランス、スプーン！」

巨大フォークをスプーンに変身させ、その攻撃を防ぐルゥ。

「ええ?！　スプーンになった！?」

『グオオ?！』

フランとイヴは、それに素直に驚いた。

「隙あり！」

「！」

その隙にイヴの背後に回ったルゥに、

「……ふっ、甘いですね」

フランは不敵な笑みを浮かべてそう言った。

――ドラゴンの鱗は硬いのだ。

「甘かねえ、よ！！」

ズドン！！

『ギャオオオオオ！！』

しかし、ルゥは先程の炎で真っ赤になったスプーンをフォークに戻し、それでイヴの背中を貫いた。

「――いいえ、甘いです」

「？！」

すると同時に背後から声が聞こえ、ルゥがそちらに振り向くよりも速く、

ドスッ！！

「がはっ！？」

フランの手刀がルゥの頭と首の境目に入った。

「イヴ」

『グオオオオオオ！！』

重力に従って地面に落ちていくフランの合図に合わせて、巨大なフォークが刺さっているのに無事なのか、イヴは全身に力を込めた。すると、イヴを守る為の硬い鱗の盾が、鋭く尖った矛へと化した。

「ルゥ！！」

矛となった鱗がルゥを串刺にする前に、箒に乗ったシャーンが彼をイヴから引き離した。

「ルゥ、大丈夫か！？」

針山と化したイヴと油断なく距離を取りながら、シャーンは右腕にぶら下がっているルゥを見た。

「ゴホッ……い、ひひ……油断した……まさかドラゴンマスターが攻撃してくるとは……」

くらくらする頭を押さえながらも、ルゥは不敵に微笑んだ。

「……面白いじゃん！」

「面白いってお前、ここは一旦引いて――…」

「ああ、忘れてました。短足さんがいたんでしたね」

「おし、ぶっ飛ばすぞー」

フランに短足と言われ、シャーンは考えをコロッと百八十度変えた。

コロコロコロ……

その時、戦場に一つのリンゴが転がってきた。

「『？』」

不思議に思ったルゥとシャーンとフランとイヴが疑問符を浮かべると、

「……”ぶっ飛ばす”？」

街の門の方から、確認するようなゆっくりとした声が聞こえてきた。

その声に、三人と一体がそちらに振り向くと、

「……って言うか、そのフォーク、ルゥのだよね？」

そこには、買い物袋を取り落とした茶髪のお兄さんが立っていた。

「そ、ソラ……兄……」

顔を真っ青にしたルゥが彼の名を口にすると同時に、

「爬虫類をいじめるなあああああああああ！！」

「「は、はいいっ！！」」

彼、ソラが物凄い剣幕で怒鳴ったので、思わずフランまでルゥとシャーンと一緒に答えた。

「バーンバニッシュうううううううううう！！」

「「えええええええ？！」」

ドッカアアアアアン！！

が、結局彼らはソラの炎魔法の餌食となった。

「大丈夫、ドラゴン！？」

黒焦げになった三人を無視し、酷く心配した様子でイヴに駆け寄るソラ。

『ぐ、ぐおお……』

「そっか。よかった……」

取り敢えず頷いたイヴを見て、ソラはほっと胸を撫で下ろした。

「あら、チビキング。真っ黒焦げじゃない」

すると、再び門の方から別の声が聞こえてきた。

「……ぶっ飛ばすぞ、パー子」

その声の主、門の下に立っている緑の髪の女性に力なく言い返すル

ゥ。

「ゲヘヘ♪　またボンバってるわね、シャーン」

「お……おうよ」

黒焦げでボンバーヘアのシャーンが返事をすると、

「見て見て、ジャンヌ！　ドラゴン！　本物のドラゴンだよ！！」

ソラがキラッキラに瞳を輝かせながら彼女にそう言った。

「！？　ジャンヌ様？！」

すると、フランの瞳がキラッキラに輝いた。

「あ、貴女が、メルヘンの女神、様……？！」

素早く彼女、ジャンヌの前に膝をついたフランが、確認するように尋ねると、

「おうよ」

ジャンヌは男らしい返事をした。

「〜っ！！　かかか、感激です、女神様！！　お会い出来て光栄です！！　あ、あの、僕、フラン＝スパンと申します！！　って言うか、もう、は、はは〜〜！！」

そうしてフランは、ジャンヌの足元で何度も何度も額をついた。

「め……メルヘン崇拝者……」

「……オレ、あんなヤツに負けたのか……」

そんな彼を見て、顔を引きつらせるシャーンと、哀愁を漂わせるルゥであった。

第１３回　お休み日和

髪型も服装もバッチリ決めたら、鏡に映った自分に向かって胸キュンスマイル（ポトフ命名）。

「おし♪　ミントォ！」

自己確認が済み、鏡から離れると、ポトフは観葉植物に水をあげているミントの元へ移動した。

「？　何？」

『『シュララララ！』』

すると、ミントと観葉植物が振り向いた。

「って、マッドホイップゥ？！」

「ううん。マッドプラントの赤ちゃんだよ。可愛いでしょ？」

驚いたポトフに、ミントは水さしをテーブルに置きながらそう言った。

『『シュララララ！』』

彼の隣で、小さな鉢植えに入っているマッドプラントは、小さいながらも青い舌を垂らして危険に笑っている。

「……。な、なァ、ミント？」

可愛いというか恐怖心しか抱けない上に、前に置くなって言ったじゃん、とは決して口に出さない優しいポトフ。

「ん？」

「俺、かっこいい？」

ミントが小首を傾げると、ポトフはその場でくるりと回り、右手の親指と人さし指の間に顎を当てた。

「……」

突然何を言い出すんだこのナルシストは、と思っている途中で、

「あ。う、うん！　すっごくかっこいいよ！」

何かを思い出したのか、ミントはこくこくと頷いた。

「あっはっはっ！　だよなァ♪」

「うんうん！　かっこよすぎてココア困っちゃうんじゃないかな？」

にこっと笑ったポトフに、ミントもにこっと笑ってみせた。

「――！！」

衝撃。

「？　ポトフ？」

突然石化した友人の名を不思議そうに呼ぶと、彼はおもむろにクローゼットを開け、体操服を手に取った。

「って、なにゆえジャージ?!」

それに着替えようとした彼を、慌てて止めるミント。

「だって、ココアちゃんが困っちゃうって―…」

「だからって、なんでよりによってジャージ?!　しかもなにゆえ半袖半ズボン!?」

「少年らしさをアピールしてみようかなと」

「あーもー!　いいから早く行きなよ、遅刻しちゃうよ?!」

彼の手から体操服を奪い取ったミントは、壁に掛った時計をズビシッと指さしてそう言った。

「おォ!?　ヤッベェ!　い、行ってくるぜ!!」

時計を見たポトフは、急いで部屋の扉を開けた。

『む～!』

すると、何処からかむぅちゃんがトコトコとついて来たので、

「おォう!?　それはイケナイぜ、むぅちゃん!!」

ポトフは慌ててむぅちゃんに言った。

『む～？』

不思議そうに彼につぶらな瞳な瞳を向け、体全体を右に傾けるむぅちゃん。

「邪魔しちゃ駄目だよ？　むぅちゃんはお留守番してるの」

『ふゅむ』

そんなむぅちゃんを両手で捕まえたミントは、

「行ってらっしゃい、ポトフ」

彼に向けてにこっと笑ってそう言った。

「おう！　ごめんな、むぅちゃん？　行ってきまァす♪」

すると、ポトフは元気よく駆けていった。

「あ、そうそう」

と思いきや、彼はくるりと振り向いた。

「ミント、紫の薔薇をプレゼントしようと思うんだけど？」

「”哀愁”」

「……やっぱ赤薔薇にしとくぜ」

「そうしときなさい」

ミントに紫の薔薇の花言葉を聞くと、ポトフは今度こそ走り去っていった。

『む～？』

「ポトフはね、今日、ココアとデートなの」

何を言ったのかは分からないけれど、そう聞かれたような気がしたミントが答えると、

『む！』

むぅちゃんは短い両手で顔を隠した。

勿論、隠し切れていないけれど。

コンコン

「『？』」

部屋の奥から小さな音がして、不思議に思ったミントとむぅちゃんは、疑問符を浮かべながらそちらに向かった。

コンコン

「ぐー」

音の正体は、フクロウ。

まだぐうぐうと眠っているプリンの近くにある窓を、一羽のフクロウが外からつついていた。

「……手紙？　珍しい」

その窓をパカッと開け、フクロウが背負っていた手紙を受け取るミント。

『ホー』

郵便物を渡すと、フクロウは華麗に飛び去って、

『む～！』

『ホホー？！』

行こうとしたが、むぅちゃんに捕まってしまった。

「全部オレ宛てだ」

そう呟いて、ミントは一枚目の手紙を裏返した。

”ジャンヌ＝ブライト”

「うわ？！」

差出人の名前を見て、ミントは勢いよくテーブルにそれを叩き付けた。

その後、自分は何も見ていないと自分自身に言い聞かせ、ミントは二枚目を裏返した。

”シャーン＝ブライト”

「……」

大体予想がついたのか、ミントはノーリアクションで手紙を開いた。

［変な人に住所教えるな］

シンプル・イズ・ベストな手紙を閉じて、ミントは最後の手紙を裏返した。

”ルクレツィア＝シャイアルク”

「?!　ルゥ様!?」

この国の王である彼からの手紙に驚きながらも、ミントは封を開けた。

［やっほぅミント！　特に気になってないけど、一応聞いとくぞ。元気か？　オレはバリバリ元気ぞよ。ってかなんだよ、あのドラゴンとフランスパン！　めっちゃ強いじゃねえか！　偉いぞ、ミント！　よくぞ住所教えてくれたな！　でさでさ……］

ミントが口語で書かれたの長ったらしい手紙を読んでいる時、

「……む……」

プリンがむくりと起き上がった。

「……ぷわ……ねむねむ」

今起きたばかりなのに、眠そうに欠伸をしたプリンの目に、

「む？」

一枚の手紙が映った。

それに興味を持った彼は、枕を持ったままそちらに移動した。

てててて

「……ジャンヌ＝ブライト……」

それを手に取って、書かれた文字を読み、ミントの手紙か、とプリンが理解すると同時に、

「呼んだ？」

「ぴっ？！」

何処からかミントではない声がしたので、彼は驚きの声を発した。

「だ、誰っ？」

プリンがキョロキョロと辺りを見回しながらそう言うと、

「何処見てんのよ？　此処よ、此処。あんたの手元」

先程の声がした。

「て、手も―…」

プリンがゆっくりと自分の手元に目を向けると、

どろり……

「っヤーーーーー！！」

手元にある封筒からどろりとした液体が漏れ出していたので、プリンは絶叫しながら手紙を投げ、ミントの背中にしがみついた。

「？！　お、おはよう、どうしたの、プリン！？」

手紙を読んでいたミントが驚いたように尋ねると、

「て、手紙のオバケ！」

プリンは震えながら前方を指さしてそう言った。

「？　手紙のオバ―…」

ミントがそちらに目を向けると、

ぶくぶくーっ

「ゲヘヘ―…」

すると、何やら手紙の中から漏れ出した液体から女性が発生したので、

「プリン、テレポート」

「う、うむ！　テレポート！！」

ミントはプリンにそれを瞬間移動させてこの部屋からいなくなってもらい、綺麗さっぱり見なかったことにした。

第１４回　間違い日和

「使いの者？」

長ったらしい上に国王らしからぬ口語で書かれた手紙を読み終えたミントは、最後の文に小首を傾げた。

「む。ミント、読み終わった？」

ベッドに座り、彼が読み終えるまで暇していたプリンが声を掛けると、

「うん」

ミントは手紙を畳んで頷いた。

「そうか。では、昼食に出発だ」

すると、プリンは立ち上がってそう言った。

「あ、ごめん。待たせちゃった？」

「ふふふ。大丈夫だ」

そうして、ミントとプリンがドアに向かうと、

『む～！』

それに気付いたむぅちゃんが彼らにトコトコとついていった。

『ほ……ホー……』

むぅちゃんに遊ばれまくってしまった憐れなフクロウは、よろよろと窓から飛び立った。

「わは～、雨凄いね～？」

「うむ。雷も凄いな」

『む～』

食後のコーラとプリンを頂きながら、窓の外を見て言う二人と一匹。

いつの間にか、外は大荒れの天気となっていた。

「あれ？　ポトフとココアだ」

ふと視界の隅に入った人影に、ミントは疑問符を浮かべた。

「む？　お出掛けしていたのではないのか？」

『む～？』

「その筈なんだけど……」

と、プリンとむぅちゃんもご一緒に疑問符を浮かべていると、

「あ！　ミントとプリンだー！」

ポトフとココアが同時にこちらに気が付いてやって来た。

『……む～……』

自分だけ名前を呼ばれなかったので、しょんぼりするむぅちゃん。

「こんなところでどうしたの？」

と、ミントが尋ねると、

「いやァ、急に物凄い雨が降ってきたから……」

「雷も凄いし、帰れなくなったら大変でしょー？　だから、早めに帰って来たのー」

ポトフとココアがそう答えた。

「……で、丁度お昼だし、と？」

「大正解♪」

「此処に座ってもいいよねー？」

二人はそう言うと、昼食を乗せたトレーをテーブルに置き、ミントたちと同席する形になった。

「びしょぬれだね。大丈夫？」

「え？　”水も滴るいい男”？」

「うん。一言もいってないけど」

ポトフの聞き間違いを笑顔でさらりと流した後、

「はい、タオル」

ミントは魔法でバスタオルを呼び出した。

「あー…」

「ありがとー！！」

ポトフに差し出されたバスタオルを横から奪い取り、笑顔でお礼を言うココア。

「どういたしまして」

それに対して笑顔で応えるミント。

「……」

タオルを受け取ろうとした右手の行き場を無くしたポトフ。

『む～！』

プリンから貰ったプリンを美味しそうに頂くむぅちゃん。

「ふふふ。美味しい？」

そんなむぅちゃんを見て、プリンが微笑みながら聞くと、

「ん。まいうー」

という返事が返ってきた。

……。

……。

……返事？

おかしい。

むぅちゃんは”む～”としか言わない筈だ、と四人が声のした方に顔を向けると、

「もぐもぐ」

そこには、自分で効果音を言いながら、平然とプリンのプリンを食べている男が座っていた。
紺色の部分的に長い前髪で右目が隠れている彼は、何故か彼の身長以上もある大鎌を肩に立掛けている。

「……」

「……」

「……」

「……」

その場に流れる沈黙。
それを破ったのは、プリンの怒号。

「僕のプリン！！」

プリンが弾けるように椅子から立ち上がると、

「「って、誰！？」」

「誰だテメェ？！」

彼につられたように、ミントとココアとポトフも立ち上がった。

「フッフッフッ。オレ様か？　オレ様は――」

すると、彼はプリンをコトリとテーブルに置いた。

（（一人称”オレ様”？！））

と、四人が心の中で突っ込みを入れると、

「――死神だ」

ガラガラガラピシャーン！

彼が”死神”と名乗ると同時に、物凄くタイミングよく雷が落ちた。

「「し、死神……？！」」

決まりすぎている自己紹介に若干気後れしながらも、自分の耳を疑っているかのように聞き返す四人。

「フッフッフッ。……ん？　この世界では、ワタル＝シニガーミか？」

死神は不敵に笑ったかと思うと、小首を傾げてそう言った。

「って、苗字”死神”？！　しかも何故に伸ばす！？」

それを聞いたミントは、気後れしていたことも忘れて透かさず彼に突っ込みを入れた。

「んー、それはあれだ。チョコだ」

「それを言うならノリだろ！？」

「そうとも言うかもな」

「いや、そうとしか言わねえよ?!」

「よく分かったねー、ミントー?」

死神にズバズバと突っ込みをかます、チョコがノリの言い間違いだと分かったミントに、ココアが驚きながらそう言った。

『む~!』

そんな中、むぅちゃんがトテトテと死神の前にやって来ると、

「おお、むぅちゃん。ちゃお」

『む~!』

死神が右手を挙げ、むぅちゃんも右手を挙げて挨拶をした。
そして、むぅちゃんを頭に乗せた死神は、

((!?　飼い主?!))

とか思っている四人に目を向けた。

「赤に緑、水色、ピンク、黒。おお、ピン子だ、ピン子」

ビンゴをピン子と言い間違えた死神は、大鎌を担いで立ち上がると、

「お城へレッツゴー」

と言って、大鎌を高らかに掲げた。

すると、一瞬にして五人と一匹の姿が食堂から消え去った。

第１５回　名乗り日和

「とーちゃーく」

『む～』

死神の抑揚のない声と、彼の頭の上からむぅちゃんの鳴き声が聞こえると、ミントは広々とした、必要以上に豪華な部屋に立っていた。

「……？　此処って、シャイア城の王室？」

辺りを見回しながらミントが尋ねると、

「ん」

なんとも簡潔な返事が死神から返ってきた。

「じゃあ、ルゥ様の手紙に書いてあった”追伸。使いの者を送っちゃったゾ☆”ってのは、キミのことなんだ？」

「……フッフッフッ。バレちゃあ仕様がない」

ミントの問いに、死神はフッフッフッと不敵に笑った後、

「オレ様は死神だ！！」

「うん。知ってる」

と、迫力満点に名乗ったのだが、さらりと流されてしまった。

「……いじいじ」

『む～う！』

それにいじけてしまった死神は、頭の上からむぅちゃんを降ろし、人さし指でつつき出した。

「……ねえ、ワタル？」

そんな彼に、引き続き辺りを見回していたミントがゆっくりと話し掛けた。

「ん？　なんだ、クリスマスしょうね―…」

「ミント」

「―…ミント？」

ミントの声がものごっつ怒っていたので、彼の呼び方を素早く訂正する死神。

『む～っ』

その隙に、ミントの肩の上に避難するむぅちゃん。

「プリンとココアとポトフは？」

いつもの声に戻ったミントが尋ねた。

「んー、プリンとココアは大好きだが、ポトフは甘くないからー…」

「食の話じゃねえよ」

「かたじけない」

床に手をついて謝る死神。

「枕少年とピンク少女と眼帯少年は……んー、たぶんだな……」

彼はしばらく考え込み、

「そこら辺に落としてきちゃった☆」

抑揚のない声で語尾に星印をつけた。

「ローズホイップ」

彼と同じ調子で、ミントは薔薇の鞭を出現させた。

ひゅっ

「ぴわっ？！」

どすんっ！

死神に空間移動の途中で落とされてしまったプリンは、シャイア城の廊下で、思い切り尻餅をつくかたちになってしまった。

「……痛い」

強打した腰に手を当てながら、プリンがそう呟くと、

「邪魔」

という、酷く冷たい声が上から降ってきた。

「じゃ―…」

腰の痛みも忘れて、プリンが声の主にバッと顔を向けると、

「通行の邪魔だ。退け」

そこには、一人の少年が立っていた。

美しく整った顔立ちの彼の肩までの撥ねまくった髪と鋭い瞳は、漆黒に染まっている。

「……」

その少年を、じっと見るプリン。

「……。……なんだ？」

「食べ歩きよくない」

「黙れ」

少年の手に握られているきゅうりを見て言ったプリンに、彼はさらりと言い返した。

「……ふむ。あいつと似てる」

そう言いながら、ゆっくりと立ち上がるプリン。

「……？」

「死神とかいう奴とお前の魔力似てる」

同じくらいの身長の、疑問符を浮かべた彼にそう言った後、

「お前、あいつのいる場所知ってる？」

プリンは小首を傾げた。

「……助詞が少ない」

そんな彼の発言に、少年は小さく突っ込みを入れた。

「む？」

それがよく聞こえなかったのか、反対側に小首を傾げるプリン。

「……これから行くところだ。だから退け」

すると、少年はさらりと言った。

「うむ。分かった。ついてく」

「……勝手にしろ」

そう言ってプリンが右にずれると、少年はスタスタと歩き出した。

「だから、食べ歩きよくない」

「黙れ」

きゅうりをかじりながら。

「僕はプリン＝アラモードだ」

「は？」

突然自分の名前を名乗ったプリンに、疑問符を浮かべる少年。

「そろそろ名前出さないと少年のまま終わるぞ？」

「……。……”イシグロ　ユウ”だ」

そんなことを言いながら、少年、ユウとプリンは、王室に向かって

歩き出した。

第１６回　ときめき日和

「……たく、なんなのよ、この城は?!　無駄に広すぎよ!!」

シャイア城の廊下の曲がり角で、狐色の長い髪をツインテールにした少女が、疲れた様子で壁に手を置きながら文句を言った。

「……”おかげでユウとはぐれてしまった”、ですか?」

彼女の隣で、セミロングの髪と瞳が栗色な、至極無表情の少女がそう言うと、

「そうそう―…って、何変なこと言わせてんのよ、リン!?」

台詞の途中で顔を真っ赤にした少女は、壁から手を離し、彼女、”リン”に向かって叫んだ。

「ウララが勝手に言った、です」

そんな彼女、”ウララ”に、リンは冷たい言葉で対応した。

「ごっほん!　そ、それにしても、大丈夫かしらね、この娘?」

わざとらしい咳払いをして、ウララは目の前に倒れている桜色の髪の少女、ココアに話題をずらした。

「……何を言っている、ですか?　大丈夫なら、倒れているわけがない、です」

「……はい。そーですね」

が、その話題でも、リンからは冷たい言葉が返ってきた。

「……。つついても反応がない、ですね」

リンはそう言って、頭がぐるぐるととぐろを巻いている木製の杖先でココアをつつくのをやめ、

「首尾いっ――…」

「やめえええええい?!」

大きく振りかぶった杖をココアの喉元に振り下ろそうとしたので、ウララが必死になって彼女を止めた。

「……冗談、です」

「見えねえよ?!　全っ然冗談に見えねえよ!?」

「うっせー、冗談だって言ってんだろ、です」

「あい！　すみませんでしたー！！」

鋭く尖った杖先を無表情で喉元に向けられ、テンション高めで謝るウララ。

「……分かればよろしい、です。《癒しの風》」

杖を下ろしたリンは呪文を唱え、それで床を突いた。

すると杖先が白く光り、ココアの上をふわりと風が吹き抜けた。
不思議な風が、ココアの体を癒していく。

「……う……」

すると、ココアは小さく呻き、

「ふぇ……？」

瞳を開きながらむくりと起き上がった。

「あ！　目が覚めたみたい！　流石リンね！　よかった～」

それを見て、ウララはぱあっと顔を明るくした。

「……？　えっとー……誰？」

そんな彼女を見て、ぱしぱしとまばたきをし、小首を傾げるココア。

「私はアシカワ　ウララ。で、こっちが」

「シラトリ　リン、です」

その問いに答えながら、ウララはにこっと笑い、リンはぺこりと頭を下げた。

「ウララにリンね……。私ははココア。ココア＝パウダーだよー！
よろしくねー？」

ココアは確かめるように二人の名前を繰り返した後、すっくと立ち

上がって名前を名乗った。

（（……ココアパウダー？））

随分と変わったお名前をお持ちで、とか二人が思っている途中で、

「？」

ウララが右側から聞こえてくる声に気付き、曲がり角からそっと顔を出した。

「！」

そして、すぐに赤くなった顔を引っ込めた。

「……ふーん。ウララってあの人のことが好きなんだー？」

すると、ウララのすぐ下から、ココアの声が聞こえてきた。

「なっ？！」

見ると、ココアもウララと同じように、右側の廊下を覗き込んでいた。

「なっ、ななな、何言ってー…」

「大正解、です」

「あ、やっぱりー？」

「って、リン？！」

隠そうとしたのにリンに頷かれた為に、自分の気持ちがバレてしまった憐れなウララ。

「ちちち、違うわよ！　そっ、そんなんじゃないんだから！！」

が、それでもウララは必死に抵抗した。

「隠さなくても大丈夫だよー、ウララー！　私、背中押したげるからー！」

そんな彼女に、ココアはにっこりと素敵な笑顔を向けた。

「え――？」

その笑顔を見て、ウララが隙を見せた瞬間、

「レッツらゴー♪」

どんっ

「って、本当に押しちゃったあ？！」

ココアは文字通り彼女の背中を押した。

「――っと、きゃ！？」

それによってバランスを崩したウララは、廊下に飛び出し、

ばふっ

「「！！」」

丁度そこを通った人物――ユウに抱きつくかたちになってしまった。

「きゃー！　ウララってば大胆ー！」

「ココアのせい、です」

小声でエキサイトしているココアに、小声で突っ込みを入れるリン。

「ご！　ごごご、ごめん、ユ―…」

顔が真っ赤になったウララが、慌ててユウから離れようとすると、

すっ

「……え……？」

彼の両腕が、静かに彼女の腰にまわされた。

「……」

その両腕に、無言で力を込めるユウ。

「ゆ……ユウ―…」

予想外の素敵な展開に、ウララが赤くなった顔を更に赤くすると、

ゴキッ♪

彼女の腰から素敵な音がした。

「ぐは?!」

直後、ユウがパッと両腕を離した為、文字通り腰が砕けたウララは血を吐きながら仰向けに倒れた。

「い、いきなり何すんのよ?!」

驚くべき再生能力!

ウララはすぐに立ち上がって、ユウをズビシッと指さして怒鳴った。

「それはこっちの台詞だ。変態」

すると、ユウがそう言ったので、

「む? "いきなり何すんのよ"がか?」

彼の後ろにいたプリンが小首を傾げた。

「どアホ」

すると、ユウはプリンにそう言って、再びスタスタと歩き出した。

ユウに変態と言われたウララの怒りが爆発している頃。

「……う……く……っ」

その先の廊下でうつ伏せに倒れていたポトフが意識を取り戻した。

「いっ……て―…」

そう言いながら、ポトフが後頭部に右手を当てて上体を起こすと、

「―…え？」

彼は目を見開いた。

「え、えええええェえ？！」

それは、彼の下に人がいたから。
そのことに気付いて、ポトフは驚いてそこから飛び退こうとしたが、
彼の動きは止まってしまった。
何故なら、

「……か……可愛い……」

彼の下にいる人物が、人形のように可愛かったから。

美少年とも美少女とも取れる中性的な顔のその人物は、気を失っているのか、目を瞑ったまま動かない。

「……」

それをいいことにじっと見つめていたら、ポトフの右手は自然と彼の後頭部から離れ、ゆっくりとその人物の、短めの綺麗な銀髪へと伸びていった。

――そして、その手が髪に触れるか触れないかというところで、

「《壮麗なる龍はすべてを呑み込む》！！」

「終焉（しゅうえん）の闇！　ダあああああああクネスサクリファイス！！」

ちゅどおおおおおん！！

「ぐはァ？！」

全身水で出来た巨大な水龍と、漆黒の巨大な十字架が勢いよく飛んできて、彼を思い切りぶっ飛ばした。

「貴様、アオイに何をしたあああ？！」

「コンのど変態がああああ！！」

直後、ユウとココアの怒鳴り声が城に響き渡った。

彼らから見ると、それはそれは大変危険な状態だったようで。

第17回　王室日和

「……いきなりこんな所に呼び出して、一体なんの用ですか、ルゥ様？」

無駄に広い王室で、空のコーラのビンを白いテーブルクロスがかかった長テーブルに置くと、ミントはルゥを見てそう尋ねた。

「お、おう。その前にさ」

彼に話し掛けられたルゥはぎこちなく頷いた後、

「どしてこの三人はズタボロなんだ？　しかも、一人は隣の部屋で寝てるし」

と、ポトフとウララと死神に目をやりながら疑問を口にした。

隣の部屋で寝ているというのは、未だに目が覚めないアオイのこと。

ついでに、彼の枕元にはむぅちゃんがついている。

「……ルゥ様？」

「？」

ミントが声のトーンを落としたので、ルゥは疑問符を浮かべた。

「国王様だからといって、他人（ひと）の趣味に口出しするのはどうかと」

「はっ！　ご、ゴメン！」

「「いやいやいやいやいや！？」」

ミントの発言を全力で否定するポトフとウララ。
ちなみに、死神は言葉の意味が理解出来ていない様子で小首を傾げている。

「な、何変なこと言っちゃってんのよ、あんた？！」

「と言うか、国王様もハッとしないでください！？」

その後ウララはミントに、ポトフはルゥに突っ込みを入れた。
ちなみに、死神は首が痛くなったので、小首を傾げるのをやめてメロンキャンディーを舐め始めた。

「とまあ、冗談は足の下に置いといて」

「冗談に聞こえねえよ？！　って言うか、何よ、その話題の扱いは！？」

「ワタルは空間移動に失敗しやがったので成敗しました」

ウララの突っ込みを華麗に無視したミントが言うと、

「……それは煩かったから黙らせて、そいつはアオイに悪戯しようとしてたからぶっ飛ばした」

ユウがきゅうりを手に取りながら、彼に続くように答えた。

「〝それ〟扱い？！」

「い、いやいや、イタズラって、俺は何も――…」

「浮気者」

「こ、ココアちゃん……」

怒ってそっぽを向いてしまっているココアに弱るポトフ。
その間ウララは、またもや華麗に無視された為に一人寂しくへこんでいた。

「は？　何を言っている？　アオイは男だ」

それすらも無視して、ユウはココアにそう言った。

「そんなの見れば分か――…って、ええー？！　あんなに可愛いのにー！？」

それに驚いたココアは、

「――れ？　じ、じゃあ、あのー、い、イタズラって……？」

奇異なものを見るような目をユウに向けた。

「……お前、そんなことも分からないのか？」

すると、ユウは彼女に人を小馬鹿にしたような目を向け、

「あのマウンドポジションは、明らかに額に”肉”って書こうとしてる奴の体勢だろ？」

と言った。

「……」

「……」

「……」

「……」

その解答に固まるココアとポトフとウララとルゥ。

「……？　なんだ？　違うのか？」

彼らの反応を見て、素で疑問符を浮かべるユウ。

「肉は好きくない」

「……マウンドポジションで落書き？」

「……ふむ。その表現は、落書きではなくて殴るイメージがあるのだが……」

「……って言うか、乗っかっちゃったら起きちゃうよね？」

「うむ。確かに」

「そこ。ずれてる、です」

ぼそぼそと小声でそんなことを言う死神とミントとプリンに、さら

りと突っ込みを入れるリン。

「まあ、その話もどっかに置いといて」

ミントはかなり適当に話を切り上げると、

「話は戻りますが、なんの用ですか、ルゥ様？」

元の話に軌道を修正した。

「あ、ああ。折角、異世界からミントたちと同年齢の客が来たから紹介しようと思って」

その問いに、我に返ったルゥはそう答えた。

「異世界？！　……ってことは、あのフランスパンさんとかと同じ！？」

「そー言えばいたねー、そんなのー。此処にはいないけどー」

驚くミントと、何気に酷いことを言うココア。

「あいつならパー子の元で溶解魔法の練習を頑張ってるらしいぞ。ぶくぶくと」

ルゥが提供した情報に、両手で両耳を塞ぐミント。

「……詰まり、あなたがリンたちをこの世界に連れてきた、ですか？」

溶解魔法？　と疑問符を浮かべながら、ルゥに質問するリン。

「いやいや。それはオレじゃなくて、フランと同じ頃に此処に来た」

ルゥはふるふると首を横に振った後、

「〝マシュー＝マロ〟とかいう奴だ」

と、答えた。

「「……マシュマロ？」」

長音符とイコールを飛ばして、疑問符を浮かべながらリピートするミントとプリンとココアとポトフ。

「……」

「……」

「……」

心当たりがあるのか、驚いたように目を見開くリンとウララとユウ。

「おお。ナイトメアの仕業か」

すると、死神が両手をポンと叩いた。

「またあいつかあああああ！！」

「ゆ、ユウ！？」

「落ち着く、です！！」

そして、ドタバタと慌ただしく王室を出ていった三人に、その場に残った死神以外の者は、疑問符を浮かべて小首を傾げた。

第17回　王室日和（後書き）

詳しくは、ＲＰＧまがいな自作、〝ろーぷれ〟で！↑

第１８回　びっくり日和

真っ黒な蒸気機関車から降りた少年の灰色の瞳に、森の先にある城のような建物が映った。

「……わあ、あれが国立魔法学校？」

『む～』

彼の短めの銀髪の上に乗った、淡い紫色の犬のぬいぐるみのような魔物、むぅちゃんが鳴くと、

「じゃあ、まず、この森を抜けなきゃね」

少年は、くすりと笑って歩き出した。

薬草学の授業中。

生徒たちは、羽が葉っぱになっている蝶々の捕獲を命ぜられ、森に入っていた。

「……で、ココアと仲直り成功、と？」

森の中を歩きながらミントが聞くと、

「おう！」

虫取網を担いだポトフはにっこりと笑って元気に頷いた。

「詰まんないね、プリン」

「詰まらないな、ミント」

「え！？　面白さを求められてた？！」

本当に詰まらなそうに詰まらないと言ったミントとプリンと、そんなことを言われてもと困るポトフ。

「……あ、もしかして焼き餅かァ、ミントォ？」

しかし、ポジティブな考えに到ったポトフは、ミントを後ろからぎゅっと抱き締めた。

「うん。プリンがね」

彼の腕の中で、ミントは表情一つ変えずに言った。

「なっ！？　ミント？！」

まさかのとばっちりに驚いたプリンは、虫籠を肩に下げている。

「ま、枕……」

無意識にミントを離して、びっくり顔でプリンを見るポトフ。

「き、貴様もその気になるな!!」

バシーン!!

「ぐっは!?」

そんな彼の顔面に、プリンは突っ込みも兼ねて、抱えていた枕を右から叩き付けた。

「っテメェ、俺の顔に何すんだ?!」

打たれた所を右手で押さえながらポトフが怒鳴ると、

「何されたのかも分からないのか馬鹿!!」

彼に負けじと怒鳴り返すプリン。

「バッ?!　テメェ、喧嘩売ってんのか!?」

「今なら無料サービス中だ!!」

「おっしゃ買ったァ!!」

そうして、プリンとポトフは虫取網と虫籠を投げ出して、ドカンバコンと喧嘩をし始めた。

「……も～、汚れちゃうじゃん」

問題はそこなのか。

ミントは溜め息交じりに虫取網と虫籠を拾い上げた。

「う～ん、羽が葉っぱになっている蝶々なんて、何処にいるんだろ？」

背後で行われている白熱した喧嘩を完全にシャットアウトし、授業に専念するミント。

ガサガサ

「ん？」

辺りをきょろきょろと見回していると、ミントは前方の暗がりから何者かの気配を感じ取った。

「この感じは……魔物！」

そう呟いた後、ミントは薔薇の鞭を出現させて、それを素早く暗がりへと走らせた。

バチィン

次いで聞こえてくる、薔薇の鞭が何か硬いものに当たった音。

「！　弾かれた……！」

直感で分かるのか、ミントは薔薇の鞭を一旦手元に引き戻した。
それを頭上で振り回し、勢いをつける。

「――乱れ咲け！！　”蓮華（レンゲ）”　！！」

そして再び暗がりへと走らせ、四方八方から攻撃を畳み掛けた。

ガガガガガガガガッ！！

くんっ

「！　うっそ――…」

それがすべて弾かれてしまった上に、鞭が掴まれたと分かったミントがそう口にした直後、

ぐんっ！！

「うわあ？！」

ミントは暗がりへと勢いよく引っ張られた。

「「！　ミント？！」」

それに気が付いたズタボロのプリンとポトフは、慌てて彼を追った。

「わあああああああ！？」

まるで釣られたように暗がりへ思い切り引っ張られたミントは、綺麗な放物線を描き、

ゴッ

太い木の幹に突っ込み、鈍い音を立てて撃沈した。

「ええ！？　人？！」

その近くには、右手に銀色に輝く剣を持ち、左手には薔薇の鞭の先端をしっかりと握っている少年がいた。

『む～！』

彼の足元には、まるっこい魔物、むぅちゃんがいる。

「だ、大丈夫ですか！？」

少年は剣と薔薇の鞭を持ったまま、ミントの元に駆け寄った。

「……ふえら～……」

それまで頭上にくるくるとお星様が回っていたミントは、

「はっ！　魔物！」

と言って、ガバッと起き上がった。

『む～』

そして、彼の視界の真ん中に、ばっちりとむぅちゃんが映った。

「あ、魔物……って、むぅちゃん?!　ごっ、ごめんね!?　怪我はない?!」

自分が今までむぅちゃんのことを攻撃していたのだと気が付き、慌てて謝るミント。

『むぅ』

そんな彼に、こくりと頷いてみせるむぅちゃん。

「あ、そだよね。オレの攻撃は全部弾かれたんだし。って、弾かれたあ?!」

自分の発言にハッとなったミントは、恐る恐る次の言葉を紡いだ。

「……って……ことは……オレ……むぅちゃんに……負けた……?!」

そして、

「……うわーん！！」

「わ！？」

そのことが余程悔しかったのか、ミントは隣にいた少年に泣き付いた。

（……ん？　泣き付いた？）

一時冷静になるミント。

「ご！　ごめんなさい！」

知らない人に泣き付いてしまったことに気付いたミントは、慌てて離れて深々と頭を下げて謝罪した。

「あ、いいえ。僕の方こそごめんなさい」

すると、少年は頭を下げ、

「その……まさか人が釣れるとは思わなくて……」

と、申し訳なさそうに言った。

「え？　あ、いやいや。誰だって暴れ回ってる薔薇を引っ張ったら人が釣れるなんて思わな――え？」

自分の発言の途中で、ミントはまたしても疑問符を浮かべた。

「え、ええ!?　ってことは、キミが?!」

ミントが驚いた顔を少年に向けると、

「はい。ごめんなさい」

少年は再び深々と頭を下げて謝った。

「いやいや、オレの方こそごめん……えっと?」

彼の頭を上げさせる為のミントの発言が途中で止まったので、

「あ、僕はアオイ。”ヒュウガ　アオイ”です」

少年は頭を上げてアオイと名乗った。

「あ!」

そして何かを思い出したように、剣を背負っている鞘に収め、その手でポケットからハンカチを取り出すアオイ。

「はい、どうぞ」

そしてふわりと微笑み、それをミントに差し出した。

「あ。……ありがとう、アオイ。……えっと、オレはミント。ミント＝ブライトだよ」

自分が先程泣いたことを思い出し、恥ずかしいと思いながらハンカチを受け取ってお礼を言うミント。

「いいえ。どういたしまして、ミントさん」

すると、アオイはくすりと微笑んだ。
その微笑みは、ポトフに見られたら危険。

「プリティプリティイイィ！！」

ガバーッ！！

「わあ！？」

見られちゃった……。
プリティ（超）プリティ（可愛らしい）と叫びながら、ポトフはアオイをガバーッと抱き締めた。

「やめろ変質者」

そんなポトフは、プリンの枕によって思い切り吹っ飛ばされた。

バシーン！！

「変質者？！」

変態と言われるよりも、変質者と言われた方がなんとなく傷付いたポトフであった。

第１９回　天然日和

暗がりを出た四人は、日当たりのいい柔らかな草の上に適当に座った。

『む～』

「あっはっはっ！　可愛いなァ♪」

地面につけていた左腕をよじよじと登ってきたむぅちゃんを見て、自然と笑顔になるポトフ。

「ぴわわっ……そ、そっちは危険だ、むぅちゃん！」

その様子を見ていたプリンは、心配そうに言った。

『む～？』

「どぉいう意味だ、枕？」

そんな彼に、むぅちゃんは疑問符を全身を傾けて表現し、ポトフは爽やかに聞き返した。

「そのままの意味だ」

爽やかに答えるプリン。

「……じゃあ、アオイはむぅちゃんを届けにシャイアから一人で来たの？」

「はい」

不穏な空気が爽やかに流れ出した空間のすぐ隣で、ミントの問いに、アオイはこくりと頷いた。

どうやらアオイは、ミントたちにむぅちゃんを預けに此処まで来たようだ。

「へえ、大変だったね？　ワタルに魔法使ってもらえばよかったのに」

アオイからしてみれば此処は異世界で、しかも、王都市から学校まで結構な距離があるのに、と思いながらミントが言うと、

「あ、ええと、死神さんは一生懸命料理をしていたので」

アオイは応えた。

「シャーンさんにカレーの作り方を教えてもらいながら」

倒置法を用いて。

「……へぇ」

それを聞いたミントは、急に血色が悪くなった。

「……じゃあ、えっと、ユウとかとは一緒に来なかったの？」

しかし、その話題については敢えて突っ込まずに、ミントは華麗に話題を変えてみせた。

「ユウとリンとウララは、楽しそうに公園で遊んでいたので」

彼の問いに、再びこくりと頷くアオイ。

「へえ、仲いいんだ？」

それを聞いて、ミントは、ウララとポトフのことを、ユウは男女平等と言わんばかりに、あんなに派手にボッコボコにしてたのに、と驚いた。

「はい。三人で楽しそうにサンドバッグごっこしてました」

すると、アオイはくすりと笑ってそう言った。

「サン……」

それを聞いたミントは、一時的に思考が停止した。

「？　サンドバッグごっこです」

その反応を、よく聞き取れなかったと解釈したのか、アオイはもう一度言った。

「……」

黙すミント。

「……えっと、それを、楽しそうに？」

だって、どう考えたって、それは良い子も悪い子も絶対に真似してはいけない最悪な遊びだ。
と言うか、遊びではない上に、そんな笑顔で言うような単語でもない。
そう思ったミントが、楽しそうに、を強調して、確認するようにゆっくりと聞き返した。

「はい。サンドバッグ役のウララは麻袋に入っていて見えなかったのですが、ユウとリンはとっても楽しそうでした」

悪意のない、潔白な笑顔。

「……わあ……斬新……」

こいつ、天然だ。
楽しそうなら、まあ、いっか♪　なノリだ。
とか思いながら、サンドバッグ役は麻袋に入るという無駄知識を得てしまったミントは、そうとしか言えなかった。

「そう言えば、その虫籠。ミントさんたちは虫採りをしていたんですか？」

遠い目をしているミントをよそに、アオイは微笑みを絶やさずにほのぼのとした話題を切り出した。

「え？　あ、うん。まあ」

そう言えばって、どう言えば？　と、ミントは先程の会話から脈絡を見い出そうとした。

「わあ、楽しそうですね。ええと、何を探しているんですか？」

そんなミントに、彼はくすりと笑ってそう言った。

「……。蝶々だよ」

考えても無駄だという考えに到ったミントは、気持ちを切り換えて彼の問いに答えた。

「蝶々ですか。僕も好きですよ、蝶々―…あ」

発言の途中で、何かに気付いたアオイは、すっと右手を斜め上に伸ばした。

すると、その指先に、羽が葉っぱになっている蝶々がひらひらと舞い降りた。

「わあ、初めて見る蝶々です！　こんにちは」

驚いたようなことを言ってから、アオイがその蝶々に挨拶をすると、蝶々は挨拶を返すかのように羽をパタパタと動かした。

「……え？　嘘……？」

「指に蝶々さんが……」

「……スッゲェ……」

その光景に目を見開くミントと、爽やかな睨み合いを中止したプリンとポトフ。

ひらひら

「わあ、キミのお友達？」

すると、更に二匹の羽が葉っぱになっている蝶々がアオイの周りにやって来た。

とととととっ

ぱたぱたぱた

「わあ。ふふっ、こんにちは」

「……」

次々と彼の周りに集まってくる蝶々やリスや小鳥を見て、

「……め、メルヘン……」

と、ミントは思わず呟いてしまったそうな。

第２０回　恋毒日和

二限目の授業中、頬杖をついて窓の外に目を向けてみた。
そこには、雲一つない青い空が広がっている。
今日も誠にいい天気。

（……はあ……）

ところがどっこい。
金髪ポニーテールとボディーラインが眩しい美少女、チロルは小さく溜め息をついた。

（空は晴れているのに、アタイの心は曇り空……）

なんてベタな。

（ああ、アタイ、満たされていないわ！！　心も体もバッチリ花マル百点満点パーフェクトなアタイに足りないものは、何？！　一体全体なんなのよおお！？）

現在、心の中でスポットライトを浴びている悲劇のヒロイン、チロルは、よよよと涙ながらにハンカチを噛んだ。

（……なんて古風な……）

それが表にも出てしまい、隣の席の女の子が若干引いている。

（ああ、このままではアタイの美しさが二パーセントオフしてしまうわ！　そんなことになったら、もしそんなことになってしまった

ら、アタイ、ミントきゅんに嫌われ―…）

が、そんなことはアウトオブ眼中。

チロルは、何か微妙な割引きのようなことを口走りながら独走している途中で、

（――ミントきゅん？！）

自分の心を曇らせているものにハッと気付いた。

「オウ、アイシー！！　チロルちゃん、分かっちゃったわあああ！！」

ので、チロルは椅子を派手に鳴らして弾けるように立ち上がった。

「もう出来たんですか？　凄いですね。では、この問題はチロルさんに答えてもらいましょうか」

ははははと笑いながら、黒板に問題を書いていたブロンドヘアの社会学のフェイ先生がチロルを指すと、

「今のアタイはズラにも止められないいいいい！！」

チロルはそう叫びながら、教室を飛び出していった。

「「……」」

暫しの沈黙。

「……先生、ズラなんですか？」

「そそそ、そんなわけ―…やっ、やめなさい！！　風魔法はやめなさい！！　って、浮遊魔法もダメえええええ！！」

バァン！！

「ミントきゅん！！」

チロルは魔科学室の扉を勢いよく開けて叫んでみたけれど、そこには誰もいなかった。

「うっ……全部の教室を回ってみたけど、何処にもいない……」

チロルはそう言うと、へなへなと床に膝をついた。

「……こんな……こんなのって……」

そこで止まると思いきや、へなへなと体も床につけるチロル。

「うう……アタイが綺麗だからって、神様も嫉妬して意地悪してる

のね……！」

何故そうなる。

どこまでもナルシストなチロルは、その場で完全に横になった。

「ん？」

横になったチロルは、何かが床に転がっているのに気が付いた。

「……？」

不思議に思ったチロルは、匍匐(ほふく)前進してそれを手に取った。

「！」

そのクリスタルの小瓶のラベルを見て、チロルは驚いて目を見開いた。

そしてそれをそっと握ったところ、

「惚れ薬の使用は犯罪ですよ」

「ドッキー！！」

後方から女の子の声が降ってきた。

「なな、何言ってるのよ、アロエ！？　これは～、落ちてたから拾っただけ～みたいな？」

チロルは慌てて起き上がって振り返り、自分の後ろにいつの間にか立っていた茶髪の眼鏡少女、”アロエ”にそう言った。

「思っ切り”ドッキー”とか言っといて、何を言ってるんですか？
無駄ですよ」

呆れたように小さく溜め息をつきながら、すぐ近くの机の中にあったノートを取り出すアロエ。
どうやら授業はとっくに終わっていて、彼女は置き忘れたノートを取りに来たようだ。

「……それにしても、ミスおサルさん寮のチロル＝チョコさんが惚れ薬をくすねようとしていたとは、驚きですね？」

再びチロルに向き直ったアロエは、眼鏡を直しながら言った。

「……だって……」

彼女から逃げるように、視線を下に向けるチロル。

「おやおや、駄々っ子大作戦ですか？　可愛らしいですね」

何故か悪役っぽいアロエ。

「……」

そうして、チロルが何も言わなくなったところで、

「……いいですか？　惚れ薬というのは、スプーン一杯だけで相手を一生奴隷にさせることが出来る程危険な薬なんです」

アロエは先程より柔らかな口調でそう言った。

「!?」

それを聞いて、驚いたように顔を上げるチロル。

「そう。貴方が思っている程、毒性の低いものではないのです」

彼女に右手を差し出しながら言うアロエ。

「……ごめんなさい」

今にも泣きそうな震えた声で謝りながら、チロルはその手に小瓶を乗せた。

「はい。よく出来ました」

小瓶を受け取ったアロエはふわりと微笑んだ後、彼女の頭に左手を置いた。

「ふえぇん!!　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいい!!」

堪え切れなかったのか、チロルはアロエに抱きついて泣き出してしまった。

「……まあ、惚れ薬を数滴使ってしまったら危険ですが、一滴だけなら――」

チロルの頭をよしよしと撫でながら、アロエは彼女に同情してか、そんな話題を切り出した。

「――面白そうですね」

違った。

ただの好奇心だった。

――この日、昼食でチロルから貰ったコーラを飲んだミントは、

「ふふ～♪　チロルたん、だ～い好きV」

と、人が変わったかのようにチロルにべったりし出したとかしなかったとか。

第２０回　恋毒日和（後書き）

その日の夜。

プリン
「む？　ミント、顔が真っ赤」

ミント
「うわーん！！　なんか知らないけど今日オレ、ポトフ化ちゃったよおお！！」

ポトフ
「ええェ！？　俺みたいになるのがそんなに嫌？！」

第２１回　体育日和

「むう……体育は暇だ」

大きな栗の木の下で、プリンはムスッとした表情でそう言った。

「なら、こんなとこにいないで、プリンも参加すればいいでしょ？」

そんな彼の背後から突然顔を出し、ドッキリ大作戦を仕掛けてみたミント。

「ぴわ！？　ミント？！」

ドッキリ大作戦、大成功。

「はい、ミントですよ～。プリーズスタンダップ」

腰に手を当てながらミントが立つように言うと、

「ヤ」

プリンはぷいっとそっぽを向いた。

「”ヤ”じゃないの」

「ヤー」

「長音符つけたら何か変わるとお思いデスカ？」

ぷうと頬を膨らませているプリンに、ミントは小さく溜め息をついた後、

「立てやコラあああ！！」

ついに実力行使！

プリンの後頭部から尻尾のように垂れている、一本に束ねられた長い髪を、背負い投げの体勢で勢いよく引っ張った。

「ぬ、抜ける～……ぅ！」

痛い痛い、とバツになった目が似合いそうな顔で、プリンは強制的に立ち上がることになった。

「はい。よく出来ました」

プリンが立ち上がると、ミントはパッと髪の毛を離した。

トン

「はい、サッカーボール。これは何するもの？」

「……蹴るもの」

目の前に置かれたサッカーボールを見て、ミントの質問に答えるプリン。

「正解。じゃあ、早速蹴ってみよー」

ミントが抑揚の無い声でそう言うと、

「うむ。とー」

プリンが抑揚の無い声を出すと共に、サッカーボールを蹴った。

クルクルクル……

その場で虚しく回転するボール。

「「……」」

黙す二人。

「も、もう一回！」

ミントが言うと、

「とやー」

先程より気合いの入った、しかし、どこか気の抜ける声と共に、ボールを蹴るプリン。

クルクルクル……

ボール、逆回転。

「「……」」

沈黙、再び。

「……。……。も、もしかして、故意？」

「違う」

「……ですよね」

冗談を言ってみるが、敢えなく撃沈するミント。

「……ぶう」

「じゃ、じゃあ！！　次はこのボールを、えーと……そう！！　ポトフだと思ってやってみてよ！！」

ぶうっと頬を膨らませたプリンに、慌ててミントがそう言うと、

「……？　これを？」

プリンは小首を傾げた。

「そう！　はいはい、イメージして～？　プリンの足元に、横になって眠っているポトフの頭があります」

「ふむふむ」

状況説明を聞いて、こくこくと頷くプリン。

「右手にはスプーン。左手には、プリンが楽しみにしていたプリンが乗っていた筈の空の皿が―…」

ドカアアアアアン！！

……キラーン

「……」

爆発的な音を立てて吹っ飛び、星になったボールに言葉を失うミント。

「……」

星になったボールに向けていた顔を、カタカタと壊れた人形のように戻してプリンを見てみると、彼はものごっつ怖い顔で、フーフーと肩で息をしている。

”プリンのプリンを盗る＝殺サレル”。

また一つ賢くなったミントの顔色は、心なしか悪かったと言う。

「お、いたいた！　ミントォ～！」

「!?」

そんな超バッドタイミングでやって来たポトフに、大空のごとく真っ青になるミント。

「……まだ……生きてたか……」

「?!」

プリンの発言に、大海のごとく真っ青になるミント。

「もォ、こんなとこで何してんだよ？　ミントがいなきゃ詰まんねェじゃん」

無邪気な笑顔のポトフから発せられた、嬉しい言葉。

「……俺の……俺のプリンを……よくも……っ！！」

邪気だらけのプリンから発せられた、恐ろしい言葉。

（ゴマモード入っちゃってます？！）

暗黒モードに突入したプリン、詰まり、ゴマプリンの存在に気付いたミントは、

「逃げてポトフうううう！！」

ポトフに向けて全力でそう叫んだ。

「はェ？」

それにポトフが小首を傾げた直後、

「開け、破滅の扉！！　吹き荒れろ――神風（かみかぜ）！！」

ビュオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

「どわあああああァ？！」

「ポトフうううううう！！」

……キラーン

彼はプリンの最大の風魔法に勢いよくぶっ飛ばされ、明日を照らす星になった。

「ああ……あぁあ……」

憐れポトフ。

あとで骨付き肉買ってあげるからね、とか思うミントであった。

第２２回　交剣日和

「……なァ、ミント？」

「ん？」

「どうやったら強くなれるんだ？」

「はい？？」

空が灰色に曇っている土曜日の朝。
食堂で、心の中での約束通りミントが奢ってくれた骨付き肉を食べ終わったポトフが、いつになく真剣な面持ちでそう言った。

「ど、どうしたのさ突然？　って言うか、ポトフは充分強いと思うけど？」

そんな彼に、びっくり顔でミントが言うと、

「だって俺……今まで一度も枕に勝ったことがねェんだぞ？」

ポトフは骨付き肉の骨を握り締めながら、悔しそうに言った。

「ぽ……ポトフ……」

悔しそうなポトフを見て、完全にその場の流れに乗せられてしまったミントは、

「えっと、特訓して実戦してみてレベルアップすればいいんじゃな

いかな？」

と、真面目に答えた。

「……？　特訓と実戦？」

「うん！　……あ、でもオレ、ポトフが得意な足技も剣も出来ないな……どうしよう？」

小首を傾げたポトフに、小首を傾げ返すミント。

「！　付き合ってくれるのかァ！？」

しかし、ポトフはその言葉が嬉しかったようで。

「え？　あ、うん！　勿論だよ！」

「ありがとォミント！！」

こうして、ミントとポトフは食堂を後にした。

ちなみに、プリンはむぅちゃんと一緒に熟睡中。

ガチャ

「ただいまァ」

青い屋根の家のドアを開けながらポトフがそう言うと、

「！　おかえりなさい、ポトフくん。あら、ミントくん、こんにちは」

家の中から、パタパタと金髪のお姉さん、”エリア”がやって来た。

「あ、はい。こんにちは」

ミントがぺこりと頭を下げて挨拶すると、エリアはにこっと微笑んだ。

「……っと、どうしたの、急に？」

その後、突然帰ってきた理由を尋ねるエリア。

「特訓しに来ました。おにィさんはいますか？」

というポトフの答えと質問を聞き、

「はい？？」

エリアはミントと同じようなリアクションを示した。

「……成程。それで剣の特訓をしたいと？」

「はい」

町外れの森にある、開けた場所に立った茶髪のお兄さん、ソラが、今までの話をまとめるように聞くと、ポトフはこくりと頷いた。

「……うーん……」

ソラは少し困ったような顔をした後、

「……指導出来るような腕じゃないけど、いいよ。僕でよければ」

よし、と頷いて言った。

「ありがとォございます！　じゃァ、行きますよ！」

「うん！」

ヴン、と光の剣、〝プリズムソード〟を出現させたポトフと、腰に手を伸ばすソラ。

そんな彼らからほどよく距離を置いた所に、ミントとエリアは立っていた。

「……？　あの、エリアさん？」

「？　何、ミントくん？」

向けられた黄緑色の瞳に、青い瞳を合わせるエリア。

「どうしてポトフ敬語なんですか？」

ミントからの質問に、エリアは、ああ、と言った後、

「たぶん、ミントくんが私にそういう風に話しているのと似たような理由よ」

と答えた。

「？」

その解答に、小首を傾げるミント。

「だからポトフくんは、私たちのことを、”お父さん”と”お母さん”じゃなくて、”お兄さん”と”お姉さん”って呼んでるんだと思うわ」

そんなミントにふわりと微笑み掛けると、エリアはソラとポトフに視線を戻しながらそう言った。

「……」

その言葉の意味を、ミントが考え込んでいると、

「それにしても、ソラ、大丈夫かしら？」

顎に人さし指を当てながらエリアが言った。

「はい？」

「ソラ、剣持って来てないのよね」

「え、えええええ？！」

顔を上げると、エリアがさらりとそう言ったので、ミントは取り敢えず驚いた。

「れ？」

腰に伸ばした手がスカッと空を掴んだので、ソラは不思議に思ってそちらに目を向けた。

「……うそ」

見ると、そこにある筈の剣と鞘がない。

（わ……忘れてきちゃった……）

かなりうっかりさんなソラは、ちらりとポトフに目を向けた。

ポトフは真剣そのもので、プリズムソードを構えてソラが来るのを待っている。

「……」

これは忘れてきちゃったとは言えないなあ……とその場の空気を読んだソラは、腰に伸ばした右手をさりげなくUターンさせ、肩の高さの所で掌を上に向けた。

「……？」

が、まったくさりげなくではなく、かなり不自然だった為、ポトフの頭の上には疑問符が浮かんでいた。

「ごほん。……いくよ！」

恥ずかしさを隠す為に軽く咳払いをすると、

ゴオッ！！

「「！？」」

ソラの右の掌から巨大な火柱が上がったので驚くポトフとミント。

「！」

「炎の、剣……！？」

そして、火柱が消えると、いつの間にかその手に握られていた、赤々と燃え盛る炎で出来た剣を見て更に驚く二人。

「……熱く……ないんですか？」

柄までメラメラと燃えているので、ポトフが素直に質問すると、

「自分が出した火で火傷する馬鹿がいる？」

ソラはうつ向き加減でそう答えた。

「あらあら、ソラ、大丈夫かしら？」

すると、再びお姉さんが同じことを言ったので、今度はなんだ、とミントが彼女を見ると、

「剣を持つのは随分久し振りだから、昔の血が騒いでなきゃいいんだけど」

エリアは困ったように笑いながらそう言った。

「へ！？」

昔の血って？！　と、ミントは聞き返した。

「……そう言えば、レベル上げには実戦が一番効果的って聞いたことがあるな」

その間、ソラはうつ向き加減のまま口を開いた。

「じゃあ、実戦形式で特訓だよ、ポトフくん」

そう言って、炎の剣をヒュンヒュンと器用に二回転させた後、

「勿論、手加減なんかしないよ」

切っ先をポトフに向けて、ソラは邪悪に微笑んだ。

「!?　おにぃさん?!」

「あらあら、騒いじゃってるわね」

「って、笑い事じゃないんじゃないですかああ?!」

強くなる為の道のりは、長く険しいのであった。

「何かっこよくシメてんのさって、ポトフうう?!」

第２３回　絆創膏日和

ウサギさん寮の男子寮と女子寮への入り口がある、広々とした談話室。
その中央で、むぅちゃんを頭に乗せたプリンは、きょろきょろと辺りを見回していた。

「……むう……何処にもいない……」

『む～』

やがて二人は火の気のない暖炉のそばにあるソファに座り込み、しょんぼりとうなだれた。

「？　あれー？」

すると、寮の扉が開き、ココアが姿を現した。

「プリン、おはよー。どうしたのー？」

しょんぼりとうなだれているプリンの元に移動しながら彼に挨拶するココア。

「む。おはよう、ココア」

彼女の声に顔を上げるプリン。

『む～！』

「きゃ！？」

同時にむぅちゃんが勢いよく飛びかかってきたので、ココアは反射的にそれを両手で捕まえた。

『む～む～！』

捕まえられているにも関わらず、短い手足をじたばたと動かしてココアに抗議するむぅちゃん。

「へ？？　……。！　あ、ごめんねー、むぅちゃん。おはよー」

何を言っているのかさっぱり分からなかったけれど、挨拶をしていないことに気付いたココアは、謝りながらむぅちゃんに挨拶した。

『むむむ～』

すると、おはよーと同じ調子でむぅちゃんが鳴いた。

「やーかわいー！！」

『むむぅ？』

そんなむぅちゃんをぎゅーと抱き締めてから、

「て、そだ。プリンは此処で何してたのー？」

ココアは小首を傾げながらプリンに質問した。

「うむ……ココア、ミントと馬鹿犬を知らないか？」

プリンはその質問に、違う質問で返した。

「えー!?　プリンも知らないのー?!」

ココアは驚いたような、がっかりしたような声でそう言った後、

「……て言うか、やっぱり張り合う相手がいないと寂しいんだねー?」

と、悪戯っぽくニヤリと笑った。

「なっ!?　ぼ、僕が探しているのはミントだっ!!　と言うか、あいつがいなくて寂しいのはココアの方だろう?!」

ココアに言われてムキになる、非常に分かりやすいプリンと、

「なっ!?　べ、別に寂しくなんかないわよー?!」

プリンに言われてバフッと赤くなる、非常に分かりやすいココアであった。

ぽつり

「！　降ってきたわね」

頬に雫が当たり、空を見上げたエリアが言った。

「えい！　やっ！　はあ！　たああ！！」

「く――っそ！！」

ソラの連続切りをなんとかかわしていたものの、最後の一撃に当たってしまったポトフは、

ブンッ

光の剣を素早く振り下ろして反撃を仕掛けた。

「甘いよ！」

ドッ！！

「ぐはァ？！」

それを難無く避けたソラに追撃され、ポトフは勢いよく後方に吹っ飛んだ。

「あうぅ……ポトフ……」

ぽつぽつと降ってきた雨にも関わらず、心配そうにポトフを見ているミントに、エリアはふわりと笑って、

「大丈夫。火は雨にも弱いのよ？」

と言った。

「やああ！！」

「っさせません！！」

ガキィン！！

徐々に強くなっていく雨の中、炎の剣を光の剣が受け止めた。

「！　なかなかやるね、ポトフくんっ！」

不敵な笑みを浮かべて炎の剣を光の剣ごと力強く押し込むソラ。

「ど、どぉも……っ！！」

無傷なソラに対して、全体的にボロボロになっているポトフは、負けじと炎の剣を光の剣で押し返す。

「ふふっ、でも」

しかし、力負けしたポトフの光の剣は、ソラの炎の剣に弾かれて、

「もう限界みたいだね？」

「――！！」

無防備になったポトフに、炎の剣がそのまま勢いよく振り下ろされた。

「……」

「……」

「……」

さらに勢いを増して、やかましく鳴り続けている雨の音だけが聞こえる、長い長い沈黙が流れた。

「……？」

振りかかってこない痛みを不思議に思ったポトフは、反射的に瞑った目をそっと開いてみた。

「……はれ？」

目を開けてみると、先程までの狂気に満ちた危険な笑顔が消え、きょとん顔をしているソラが立っていた。

「……ええと……僕は何を？」

ぱちぱちと目をしばたたいて小首を傾げ、ソラは右手に持った剣に目を向けた。

炎の剣は、バケツを引っくり返したような雨に濡れて勢いを無くし、その手の中でか細く燃えている。

次いでソラは、傷やら泥やらで汚れまくっているポトフを見た。

「わあああ!?　だだだ、大丈夫、ポトフくん?!」

そして叫んだ。

「……??」

ポトフが無事だったことに安堵しつつも、何があったのか分からない様子で疑問符を浮かべるミント。

「ふふっ、雨がソラの頭を冷やしてくれたのね」

そんなミントに、エリアは微笑みながらそう言った。

「！　エリアさん……！」

そう言われてエリアを見たミントは、彼女の手が、青白い光を帯ていることに気が付いた。

ペタ

「……本当にごめんね、ポトフくん？」

青い屋根の家の中で、ポトフの顔に絆創膏を貼りながら、申し訳なさそうに謝るソラ。

「……」

それに何も返事をしないポトフ。

その理由は、

「絆創膏貼りすぎですソラさん！！」

絆創膏の貼りすぎの為。

「え？」

「いや”え？”じゃないですよ？！　ポトフ、ミイラ男ならぬ絆創膏男になってるじゃないですか！！」

小首を傾げたソラに、ミントはポトフを指差しながら勢いのいい突っ込みを入れた。

「わあああ！？　ほ、本当だ！！　ごめんね、ポトフくん！？」

ミントに突っ込まれて、自分が絆創膏を貼りすぎていることに気付いたソラは、慌てて顔に貼ってあるそれを剥がした。

ベリィッ！！

「ぎゃあああああ？！」

「ななな、何してるんですか、ソラさんんんん?!」

「わあああ!?　ご、ごめんねポトフくん!!」

「なんで半笑いなんですかソラさんんんんん?!」

「いやぁ、面白いなと」

「わざとなんですかソラさんんんんんんんん?!」

と、主にミントがギャーギャー騒いでいると、

「お昼ごはん出来たわよ~?」

エリアが、何かジュワアアアといってる物を持ってきてそう言った。

「「?!」」

それを見て、目を見開くソラとポトフとミント。

「?」

小首を傾げるエリア。

「「……それはなんですか?」」

三人が同時に何かジュワアアアといってる物を指差しながら尋ねると、

「何って、おにぎりに決まってるじゃない？」

可愛らしく笑いながら、エリアは、何かジュワアアアといってる物をおにぎりと称した。

「……」

「……」

ソラがちらりとポトフを見ると、ポトフは頷いてミントの腕を取った。

そして、

「わあ、もうこんな時間！　僕、美容室に戻らなくっちゃ！！」

「あっはっはっ！　さァ、そろそろ学校に戻ろうぜ、ミントォ♪」

「あ、う、うん！　お、お邪魔しました～！」

わざとらしい言い訳を口にして、何かジュワアアアといってる物から逃れようと試みた。

――が、

ガシィッ！！

「折角人数分用意したんだから、お昼くらい食べていってよ？」

片手でソラとポトフを捕まえたエリアは、にっこりと素敵な笑顔でそう言った。

「「……は、ハイ……」」

こうなってしまったら、もう頷くしかないソラとポトフと、

「……なんでオレまで」

とばっちりを受けてしまったミントであった。

第２３回　絆創膏日和（後書き）

エリア
「はい、お茶もどうぞ」

ゲヒヒヒヒヒ

ミント
（わ、笑った！？　なんか今お茶が笑った？！）

ポトフ
（お、おにぃさァん……）

ソラ
（こ、これも特訓だよ、ポトフくん！）

第２４回　再厄日和

爽やかな日曜日の昼前。

「……うぅ……」

まったく爽やかではない様子で、ミントはぐぐぐっと起き上がった。

「ぴわわっ?!　ミント、大丈夫!?」

すると、ベッド脇から心配そうに顔を出すプリン。

「ふ……ふふっ、おはよ、ブリン……」

真っ青な顔で、可能な限り爽やかに挨拶するミント。

「ぼ、僕はプリンだっ！」

引き続き心配そうな顔をしていながらも、きちんと訂正するプリン。

「ごめんごめん……あれ？　ボドブは？」

彼に謝ってから、隣のベッドにポトフがいないことに気付いたミントは、プリンに尋ねた。

「む？　馬鹿犬は朝っぱらから僕に決闘を申し込んできたのだが、面倒だったから、”ココアが呼んでたぞ”と言ったら、鏡の前で何かえらいサムイことをしてから部屋を勢いよく飛び出していったぞ」

プリンは長文でさらさらと答えた。

「……そう」

ポトフと訂正するかと思いきや、プリンはそこにはまったく触れなかった。

しかも、昨日の特訓の成果を見せる為の決闘の申し込みを、”面倒”の一言で片付けたプリンに、ミントは頷くと見せかけてカクッと頭を下げた。

（ん？　……ってことは、ポトフはもう元気ってこと？）

昨日の”おにぎり”と”お茶”と称された代物（しろもの）を食べたせいで、こんなにも具合いが悪いミントは、あれに慣れてるのかポトフは……、とか思った。

「……」

ずっとうなだれているミントを心配して、プリンは、ようし、と腕捲りをして、一歩を踏み出そうとした。

「！！　だだだ、大丈夫だよ、プリン！！　オレ、ちゃんと食堂まで行けるから！！」

が、それをミントが全力で引き止めた。

「む？　でも……」

「大丈夫！！　大丈夫だから！！」

逆接の接続詞を口にしたプリンに、ミントは帽子を被って起き上がってから大きく息を吸い、

「だからキッチンには立たないで！！」

力一杯お願いした。

と言うのも、プリンがキッチンに立つと、いろいろと危険だから。

確かこの前の調理実習の時は、背中に出刃包丁が刺さっていた。

（イリュージョンだよ！？　どうやったらそんなことになるんだよ？！）

ミントが心の中で思い出し突っ込みをしていると、

「……うむ。分かった」

具合いの悪いミントの為にデンジャラスなクッキングをしようとしていたプリンは、ようやく首を縦に振った。

『むゆ～……むゆ～……』

「む？　人がいっぱい」

食堂に入る為の階段の前に、たくさんの生徒たちが集まっているのを見て、頭にまだ眠っているむぅちゃんを乗せたプリンは疑問符を浮かべた。

「しかも、全部女子みたいだね」

その隣で同じように疑問符を浮かべるミント。

「ふむ。いつぞやの馬鹿犬の周りみたいだな」

「キミの周りもそうだったよね？」

「そ、そんなことない！」

ミントの言葉に、ぱっと枕で顔を隠しながら言い返すプリン。

確かに以前プリンとポトフは女子生徒に群がられることがしばしばあったが、プリンは、彼の婚約者である”ムース”が現れて以来、ポトフは昨年のダンスパーティー以来、そのようなことはなくなった。

「プリンみたいにかっこいい人でもいるのかね？」

「ぼ、僕はかっこいくなんかない！」

「はいはい」

「むー！　ミントの意地悪っ！」

適当な返事に、ぷーっと顔を膨らませるプリン。

ぷりぷり怒っている彼とポトフは双子でも、やっぱり性格は違うんだなあ、とか思いながら、ミントは少し背伸びをした。
それは、彼女たちが何に集まっているのかを見る為。

「……料理店、”死神”？」

女子生徒たちの頭越しに、まず始めに見えたものは、やけにかすれた毛筆で書かれた大きな看板。

「！？　ワタル？！」

そして次に、ミントは看板の隣に死神が見えた。
その後、まあ、確かにワタルも美形だな、とか思うミント。

「僕のプリン……！！」

背伸びをしなくても大丈夫な長身のプリンは、死神を見て、バックにメラリと炎を燃え上がらせた。

「お、落ち着いてよ、プリン！？」

まだ根に持っていたのかと思いながら、どうどうとプリンをなだめるミント。

「……にしても、ワタルって料理上手いんだね？」

ミントはなだめながら、看板の隣にいる死神を見た。
彼は看板の通り料理を作っているらしく、食材を切ったりフライパンを振ったりしている。
そして、そのどの動きも、なんだか異様に様になっていて上手だっ

た。

「……でも、この異様に甘ったるいにおいは一体……？」

鼻に片腕を当てながら、ミントがしばらく彼を見ていると、

「へいお待ち」

何やら寿司屋のおっちゃんみたいな台詞を口にしながら、死神が料理が乗った皿をカウンターに出した。

「あ、いっけない！　もうこんな時間！！」

「わあ、本当だー！！　もう行かなくちゃ！！」

どぴゅん

「「？」」

すると、急に女子生徒たちが食堂に駆け込んでいったので、何事かと小首を傾げるミントとプリン。

「へいお待ち」

「「！？」」

すると、いつの間にか死神が目の前に料理を持って立っていたので、二人は揃ってびっくり顔になった。

「こ、こんな所で何してんー…」

「う、うむ。食堂の営業妨害もいいところ―…」

ミントとプリンは、先程の発言に〝のさ？〟と〝だ〟をつける前に、死神が持っている料理を見て、目を見開いて言葉を失った。

「ん？　どうした？」

そう言いながら、ミントの大きな目に目潰しを仕掛ける死神。

「それは何さ？」

目潰しされる前にその手をガシッと掴んだミントは、彼が持っている皿を指さして質問した。

「いやん。ミント積極的」

手を掴まれたことに恥じらう死神。

「あ？」

その手に渾身の力を込めるミント。

「か、かたじけない……っ！」

上擦った声で謝罪し、ミントに手を離してもらうと、

「チョコカレーだ」

と、言った。

「……チョコ……」

「……カレー……」

台詞分担して、もう一度死神が持っている料理を見るミントとプリン。

その料理を構成しているのは、ほかほかの白いごはんと、一口サイズに切られた肉や野菜と――熱々な茶色い液体。

（（これか。これがチョコなんだな？））

チョコカレーの意味を理解した二人は、くるりと回れ右をし、

「さて、コーラコーラ♪」

「ふふふ。プリンプリン」

ごく自然に逃走を試みた。

ちゃきん

「まあ遠慮するな」

が、死神に止められた。

「「……っ！！」」

肩にまわされたのが腕ならいいが、今まわされているのは、刃こぼれして不規則にギザギザになっている、刃渡り一メートル程の三日

月型の大鎌。

「「……い、いただきまぁす……」」

苗字が死神ということもあって、言葉では表現出来ない恐怖に襲われた二人は、そう言うしかなかった。

「おお、心置き無くいただいてくれ」

すると、死神は大鎌肩に担ぎ直して嬉しそうにそう言った。

（ねえ、二日連続この展開って酷くない？）

チョコカレーを目の前にして、心の中で誰にともなく同意を求めるミントであった。

第２４回　再厄日和（後書き）

死神
「ホットチョコもどーぞ」

ミント
「どんだけチョコ好きなんだよ?!」

プリン
「……あまあま……」

第２５回　私刑日和

「リンリンリンリン！！」

「……一回呼べば分かる、です」

「いいからあれ見て！！」

大きな柱に身を隠しながら、狐色の髪をツインテールにしたウララは廊下の向こうを指さした。

「ね！　あれってココアじゃない？！」

「……そのよう、ですね」

栗色の髪のリンが、小声でエキサイトしているウララの指の先に目をやると、そこには確かにココアが歩いていた。

「隣にいるのは、確か……ポテト？」

彼女の隣を歩いている眼帯くんを見て、リンが小首を傾げながら言うと、

「え？　そんな名前だったっけ？」

ウララも小首を傾げて疑問符を浮かべた。

「……まあ、そんなことはどうでもいい、です」

「それもそうね」

憐れポテト、もとい、ポトフ。

「見たところ、デート中のよう、ですね」

二人の様子を見て、リンがさらりと言うと、

「ええ……うっは～！　もう手なんか繋いじゃって！　ココアったら、見せ付けちゃってくれちゃってるじゃない！」

隣で面白そうにきゃいきゃい騒ぐウララ。

「……。……ウララもユウと繋ぎたい、ですか？」

そんな彼女に、リンがいつも通りの無表情で質問をした。

「そうね―…て、ななな、何言ってるのよ？！　そんなことしたら手の骨を粉砕されるのがオチよ！！」

その質問に、顔を真っ赤にして答えるウララ。

「……」

あり得る。

そう思ったリンは、敢えて何も言わなかった。

「え？　そうなの？」

「「！？」」

突然後ろから降ってきた声に、二人が驚いてバッと振り向くと、

「ユウ」

ユウを呼ぶ銀髪の少年、アオイがそこに立っていた。

「なんだ、アオイ？」

彼に呼ばれてこちらにやって来る黒髪の少年、ユウ。

「ユウ、手を出して？」

「？」

彼のお願い通りに、ユウがすっと右手を出すと、

「ウララがユウと手を繋ぎたいんだって」

ぎゅ

「はい、ウララ。よかったね」

その手にウララの右手を繋げて、アオイはくすりと微笑んだ。

「……」

彼の真っ白な笑顔を見て、悪意はないんだろうなあ、とか思うリンと、

「……」

「……」

今の状況に、顔を真っ赤にするウララと、表情の変化を見せないユウ。

「……」

「……」

バキィッ！！

「って、やっぱりいいいい！？」

粉砕された右手を押さえて叫ぶウララ。

「……水道は何処だ？」

辺りをきょろきょろと見回すユウ。

「って、何水道探してんのよ？！」

「上水道」

「いや別に水道の種類聞いてねえし？！」

「……お前が手を洗うのはどんな時だ？」

やかましく突っ込んでくるウララに、ユウは倦怠感溢れる溜め息を

ついてから、彼女にそう質問した。

「え？　……えっと、私が手を洗うのは、手が汚れた時――」

「大正解」

「――表出ろテメェ！！」

「……お前って本当煩いな？　《天空をめぐる無形の刃（やいば）》」

ビュワッ

ザザザザザザザザッ！！

「いやあああああ！！」

「おお。水道発見」

という具合いに、ウララがユウの風魔法に切り裂かれている時、

「此処で何してたの、リン？」

騒を起こした張本人であるアオイは、まるで部外者のように小首を傾げてリンに尋ねた。

「え？　なっ、何もしてない、です」

我に返ったリンは慌てて首を横に振ってそう答えた。

そして、ココアとポトフの方をちらりと盗み見ると、

「！」

リンはパキッと固まった。

それは、何か彼女たちの距離が、非常に近くなっていたから。

「そう？　何か見てるみたいだったから」

すると、アオイがそう言ってココアたちの方を見ようとしたので、

「だっ、だから、何も見てない、です！　と言いますか、アオイにはまだ早い、です！！」

と言いながら、リンはその視線を遮るように立った。

「？　僕にはまだ早い？」

彼女の言葉に、きょとん顔で小首を傾げるアオイ。

「！」

しまった、と両手で口を塞ぐリン。

「……うーん……よく分からないけど、何もしてなかったんだよね？」

そんな怪しげな行動をしているにも関わらず、アオイはそう聞き返すと、

「！　は、はい、です！」

「そっか。じゃあ、待たせちゃ悪いから、早く死神さんの所に行こう？」

くすりと微笑んでそう言った。

「あ、死神さん！」

食堂の前で死神を発見した四人は、彼の元へと移動した。

「おお、遅かったな」

「そう言うなら一緒にテレポートさせなさいよね――って、ええ！？　えっと、ミントとプリンが倒れてる？！」

振り向いた死神に文句を言っている途中で、彼の後ろにミントとプリンが倒れていることに気付いたウララは、

「ちょっ、あんた一体何したのよ？！」

と、慌てて死神に尋ねた。

すると、死神はフッフッフッと不敵に笑い、

「言っただろう？　”遅かったな”って」

と言った。

「「――！？」」

その言葉に目を見開くリンとウララ。

「う……嘘でしょ、ワタル……？！」

「ま……まさか……二人を……」

信じられないという顔で、ウララとリンが震えた声を発すると、

「ん。お前らが遅いから、先に食べてもらっちゃったぞ☆」

死神は抑揚のない声で、語尾に星印をつけた。

「紛らわしい、です！！　目指せ甲子園！！」

「驚かせないでよ！！　集中豪雨ぅ！！」

「あーれー」

そんな彼に、リンは杖をフルスイングさせ、ウララはボウガンを連射した。

「……おいアホ神。こんな所に呼び出してなんの用だ？　くだらな

い用なら漏れ無く死がついてくるぞ」

ぐふ、と倒れた死神に、ユウは冷え切った言葉を掛けた。

「カレーパーティーをしようと思ってな」

「《壮麗なる龍はすべてを呑み込む》」

ドパアアアアアン！！

立ち上がった死神を、巨大な水龍で容赦なくぶっ飛ばすユウ。

「あ……安心しろ。ちゃんとニンジンはよけてあげるゾ」

「《地を這う悪魔は生者を喰らう》」

ズズズズズズンッ！！

立ち上がった死神に、今度は彼の足元から発射された漆黒の光線が襲いかかる。

「……ゆ……ゆうこりん酷い」

「《暗雲の閃光は破滅をもたらす》」

カッ！！

ドガアアアアアン！！

ガクッ……とダウンした死神に、凄まじい轟音を伴う雷が落ちた。

「わあ、ユウ凄い！」

「ま、任せろ」

くすりと笑いながらぱちぱちと拍手するアオイに照れるユウ。

「……」

笑顔のアオイを見て、一度彼の目から世界を見てみたい、とか思うリン。

彼の目から見れば、きっとどんな状況もほのぼのと見えるのだろう。

「……ってことは、この二人、カレー食べて倒れたの？」

そう言って、倒れているミントとプリンの近くにあるカレーの鍋の蓋を開けようとしたウララに、

「ウララ、開けては駄目、です」

と言った後、リンはカレーの鍋を指さしてユウに顔を向けた。

「ユウ、後始末をお願いします、です」

「《暗雲の閃光は破滅をもたらす》」

それに頷く代わりに、ユウはカレーの鍋を派手に破壊した。

第２６回　ツッコミ日和

つんつん

「んー、駄目だ。起きないな」

頭をつついても、倒れているミントはまったく反応しないので、死神はうーんと首を捻った。

ぐぎ

「あうち」

「何本当に首捻ってんのよバカ？」

本当に首を捻った死神に、ウララはそう突っ込んでから、

「あんた一体なんてもの食べさせたのよ？」

未だに倒れているミントとプリンを見て尋ねた。

「んー……オレ様は普通のチョコカレーを作ったつもりだったのだが……」

作り方がまずかったのか？　と顎に手を当てて答える死神。

「チョコカレーって時点で普通じゃないけどね。一体何入れたの？」

プリンの頭をつつきながらウララが聞くと、

「んーとだな、ジャガイモとニンジンとタマネギと肉と」

「うんうん」

死神が指を折って挙げた食材に、普通普通と頷くウララ。

「リンゴとハチミツとチョコときゅうりと」

「うん……うん？」

普通……普通？　と小首を傾げるウララ。

「あと生きた魚とカタツムリだ」

「待て待て待て待てい！？　明らかにおかしいだろ特に最後の二つ？！」

完璧だ、とばかりに胸を張った死神に、ウララはスパァンと突っ込みを入れた。

「ん？　何故だ？」

「”何故だ？”じゃないわよ？！　どこの世界にカレーに生きた魚とカタツムリ入れる奴がいるのよ！？　どんだけカオスなカレーなのよ？！」

叩かれた後頭部を擦りながら小首を傾げた死神に、ウララは見事に三連突っ込みを決めた。

「何を言うか。シャーン氏直伝のすぺしゃるカレーのチョコっとアレンジバージョンだぞ？」

「誰よシャーンって？！　間違いなくそいつに問題あるわよ！！あと何”チョコっと”とか小ネタ挟んでんのよ？！　って言うかあんた味見したの！？　してないでしょ？！」

「そりゃ勿論」

「最悪だなオイイイ？！」

という具合に、ウララが忙しく突っ込み続けていると、

カツカツカツカツ

「「！！」」

廊下の向こうから、鋭い足音が聞こえてきた。

「ちょっ、先生とか来ちゃったんじゃないの！？」

「そりゃあこれだけ暴れればな」

「あんたがいちいちユウのむかつきポイントを刺激したのが悪いんでしょ！？　って言うか、こんな時にそこで何してんのよ、リン、ユウ、アオイ？！」

「「？　ジェンガ」」

「あーもー、何でこんな呑気なヤツばっかなのよおお？！」

危機感も何もない死神とリンとアオイとユウに、頭をぐしゃぐしゃにして嘆くウララ。

「誰だ、そこにいる生徒は?」

すると、静かに憤っている声が聞こえてきたので、

(! やば! ワタル!!)

(ん。ちゃお)

ウララは死神をばんばん叩き、死神は大鎌を高々と掲げた。

ヒュッ

直後、その場からアオイとリンとユウとウララと死神は消え去った。

カツン

丁度その時、銀髪のセル先生がその場に到着した。

「……またお前らか」

そしてそこに倒れているミントとプリンを見て、彼は深々と溜め息をついた。

たぷんっ

「明日までそうしていろ」

二人の頭に液体がいっぱいに入っているボウルを乗せたセル先生は、吐き捨てるようにそう言うと、回れ右して立ち去ろうとした。

「ま、待ってください！　ご、誤解です、セルシオ先生！！」

そんな彼を、ボウルを引っくり返さないように注意しながら慌てて呼び止めるミント。

「ああ？」

先生らしからぬ形相と、どすの利いた声と共に、こちらを振り向くセル先生。

「や……オレたちは変なカレーを食べさせられて倒れてただけなんです！！」

「う、うむ！　その通りだ！」

若干怯みながらも、ミントと一緒に無実を訴えるプリン。

「カレーだ？　誰に食わされたんだ？」

「死神だ」

セル先生の質問にプリンが答えると、

「……つくならもっとまともな嘘をつけ」

先生はツカツカと去っていった。

「ちょっ、待っ――先生！　先生えええええええ！！」

「む？　むぅちゃんがいない」

叫ぶミントと、辺りをきょろきょろするプリン。

「捨てた。此処はペットは禁止だ」

と言う声を最後に、セル先生の姿は見えなくなった。

「……」

「……」

沈黙。

「むぅちゃん！！」

「むぅちゃんじゃないよプリンのバカ！！」

ガーン、という効果音が似合いそうなプリンに、ミントは素早く突っ込みを入れた。

「ば―…」

「なんで”死神”って答えるのさ?!　嘘だと思われるに決まってるじゃん!!」

「……む……ごめん……」

何か言い返そうとしたけれど、そう言われて素直に謝るプリン。

「ああ、もう、ボウルの中身は濃硫酸だし!!　よく無事だなボウル!!」

身に覚えのない罪を着せられ、行き場のない怒りをボウルにぶつけるミント。

「……」

怒っているミントの隣でしょんぼりするプリン。

「――!」

そんな彼に気付き、ハッと我に返ったミントは、

「ご、ごめん、プリン。オレ、酷いこと言って……」

慌てて彼に誤った。

「ううむ。大丈夫」

気まずそうなミントに、プリンはふるふると首を横に振ると、

「すべては死神のせいだ」

と言った。

「だあよおねえええ?!」

心から同意するミント。

「あんな不味いカレー食わせた上にこんな罰則喰らって……」

「おまけにむぅちゃんがいなくなって……」

そう呟いた後、二人は同時にバックに怒りの炎を燃え上がらせた。

「「死神め……!!」」

二人がメラメラと燃えていると、

「? あれー? ミントとプリンー?」

「こんな所で何してんだァ?」

そこにココアとポトフがやって来た。

「……」

「……」

「え？　な、何？」

ミントとプリンにじっと目を向けられ、思わず一歩下がるポトフ。

「……あー、そう言えば今日は午後からブドウに料理教えてあげるんだったっけー！」

すると、ココアはわざとらしく手をポンと叩き、

「じゃ！　ポトフ、また明日ねー！」

大きく手を振って爽やかに去っていった。

「え！？　ちょっ、ココアちゃん？！」

慌てて彼女のことを追おうとしたポトフを、

「……」

「……」

ミントとプリンの無言の視線が引き止めた。

「っああ、もォ！！　分かったよ、俺もやればいいんだろォ？！」

ミントとプリンの無言の訴えを読み取ったポトフは、彼らと同じようにボウルを頭に乗せたとさ。

第２７回　悲鳴日和

ゴーン

日付が変わり、校内に古めかしい時計の鐘の音が響き渡った。

「……はあ、やっと終りだね」

「うむ。終りだな」

「やァっと終わったなァ」

その音を聞き、ミントとプリンは頭の上から濃硫酸入りのボウルを取り、ポトフは空のボウルを取った。

「じゃァ、寮に戻ろォぜ、ミント♪」

ぎゅっ

「うむ。戻ろう、ミント」

ぎゅっ

「うん。どして二人してオレの服掴んでるのさ？」

服をしっかりと掴んでそう言ったポトフとプリンに、ミントがその理由を二人に聞くと、

「あっはっはっ！　バカだな、オバケなんているわけねェだろォ？」

「うむ。その通りだ」

と、何やら違う答えが返ってきた。

どうやら彼らは気が動転して、二歩ぐらい先の答えを口にしてしまったようだ。

「……。そだね。オバケなんているわけないよね」

まだオバケが怖いのか、とか思いながら、ミントは彼らに同調した。

「おう！」

「うむ。その通りだ」

「じゃあ、キミらの肩に白い手が乗ってるのも気のせいだよね？」

「「きゃあああああ？！」」

と思いきや、まったくしていなかった。

（……”きゃあああああ”？）

プリンとポトフの甲高い悲鳴に、首を傾げるミントであった。

ガチャ

　ウサギさん寮の部屋の扉を開けると、薄暗い部屋の中を下弦の月がぼんやりと照らしていた。

「……わは～、月が綺麗だね～」

「……月は好かねェ」

暗い部屋で月を眺めながらミントが言うと、ポトフはぼそっとそう言って、カーテンを閉める為に一歩踏み出した。

『むぎゅ』

「っきゃあああああ?!」

ガバーッ!!

「うわあお!?」

が、何か柔らかいものを踏んだ為、ポトフは再び甲高い悲鳴をあげてミントにしがみついた。

「ななな、なんかいるぞ！　なんか!!」

「なんかって何さ?　プリン、明かりつけて――ってキミもなの?」

「ヤーあ！」

明かりをつけてもらおうとしたプリンも、今にも泣きそうな声を発しながら自分にしがみついていることに気付き、

「……はあ……」

ミントは、やれやれと呆れたように溜め息をついてから、ポケットから取り出した杖を振った。

パッ

「はい、オバケとごたーいめーん」

部屋に明かりがともり、全体が明るくなると、ミントはポトフの足元に目を向けた。

「「お、オバケなんかいないもんっ！！」」

彼に続くようにして、恐る恐るそちらを見るプリンとポトフ。

「「あ」」

『……むゆ～……』

そこには、ポトフの足跡がくっきりとついているむぅちゃんがいた。

「むぅちゃんを踏むな！」

すると、先程の弱々しい彼は何処へやら。

プリンはポトフを枕で吹っ飛ばした。

バシーン！！

「ぐはァ？！」

「ヒール！」

吹っ飛ばした後、すぐにしゃがんでむぅちゃんに回復魔法をかけるプリン。

「あれ？　セル先生、ペットは禁止だから捨てたって言ってなかったっけ？」

回復魔法の光を当てられているむぅちゃんを見て、ミントが小首を傾げながら言うと、

「……植物ならいいということだろう」

と言って、プリンは彼にむぅちゃんの長い垂れ耳を見せた。

「！　葉っぱになってる」

むぅちゃんの耳は緑色に塗られていて、白い葉脈が書かれていた。

「……なかなか可愛いんだね、セル先生も」

「うむ。お茶目さんだな」

ふふっと笑いながら、ミントがむぅちゃんの頭に花を乗せていると、

「？」

プリンはカーテンが風に揺れていることに気付いた。

（……？　窓が開いてる？）

「――！？　馬鹿犬？！」

次いで、何処にも部屋のポトフがいないことにも気付き、プリンは慌てて窓に駆け寄った。

「！」

そして、固まった。

「？　プリン？」

プリンの隣に移動するミント。

「どしたの――…さ……」

そして、固まった。

「ふわふわ」

窓の外には、下弦の月をバックに、死神が大鎌の刃と柄に足をかけて宙に浮いていた。

「「……」」

ポトフをお姫様だっこしながら。

ぱたん

シャッ

野郎同士のお姫様だっこはなかなかのショッキング映像だったらしく、ミントとプリンは無言で窓とカーテンを閉めた。

「酷いなあ」

「「？！」」

回れ右をするとそこに死神がいたので、ぎょっと目を見開くミントとプリン。

「よっこいせ」

その間に、ポトフをベッドに乗せる死神。
ポトフは気絶しているらしく、ぐったりとしている。

「窓から侵入しようとしたら、いきなりポッティーが飛んできたから、オレ様がガシーっと受け止めてあげたのに。ぷんぷん」

死神は腰に手を当て、ぷんぷんと怒っている。

「「ど……どうも……」」

彼にお礼を言いながらも、

（（と言うか、侵入しようとしたのか））

とか思うミントとプリン。

「まあ、兎も角今日はもう遅い。てなわけで、グッナイ☆」

二人の疑問をよそに、死神はそう言って横になった。

「……」

「……」

ミントのベッドに。

「ぐーすかぴー」

「いやいやいやいや?!」

自分のベッドで眠り出した死神を、突っ込みを入れつつ起こすミント。

「ん……なんだ?」

若干不機嫌そうにうっすらと目を開ける死神。

「いや、なんだ?　じゃなくてね!?　何自然に寝てんの?!　っていうか何さっきのいびき!?　更に言うと此処オレのベッドなんですけど?!」

そんな死神に、ミントが四連突っ込みをかますと、

「！」

死神はその眠そうな目をハッと見開いて、急にベッドの上で正座した。

「なっ……にさ？」

彼の行動に疑問符を浮かべるミント。

すると、死神は両手をついて頭を深々と下げてこう言った。

「……ふつつかものではございますが、どうぞよろしくお願いします……」

と。

「……初めてだから、優しくしてね？　ぽっ」

そして、顔を上げて口に手を当てて目線を反らして恥じらった死神を、

「朝顔」

ミントは薔薇の鞭で縛り上げ、ベランダから逆さ吊りにした。

第２８回　開会式日和

ぱーんぱーんぱーんぱーん

青空に花火が打ち上げられ、生徒は外に集まった。

「学園祭か～……滅べばいいのに」

朝っぱらからネガティブなミントをよそに、

「シロップは何味にしますか～？」

「僕はプリン」

「俺は生肉」

「オレ様チョコレート」

無茶な注文をかき氷屋に迫るプリンとポトフと死神。

「かしこまりました～」

かしこまっちゃった?!

かき氷屋は何やらクリーム色のシロップと、赤黒い不気味なシロップと、茶色いドロドロしたシロップをそれぞれにかけると、はい、と三人に手渡した。

「むむ！　冷たいプリンだ！」

「おォ！　冷たい生肉！」

「きんきん」

それを早速パクッといただいて、目を輝かせるプリンとポトフと、頭が痛くなった死神。

「元気だねぇ？」

そんな三人に、ミントがネガティブな顔を向けると、

「はい、あーん♪」

ポトフは彼の顎に手を当てて口を開けさせ、生肉かき氷を食べさせた。

「ふみゃあ！？」

口の中に広がった生臭い臭と血のような味に、思わず短い悲鳴をあげるミント。

「あっはっはっ！　にゃんこみたいでカ～ワイ～♪」

そんなミントの頭を撫でながら笑うポトフ。

「あ、いたいたー！　おはよーって、なんでワタルもいるのー？！」

そこへ、ココアが走ってやってきた。

「フッフッフッ。さあ？」

「ええー?!　なんでいるのか分からないのー!?」

もったいぶったわりには首を傾げた死神に、ココアがええ、と驚くと、

『レディースアンドジェントルメーン！　今年もやっちゃいますよ学園祭!!』

という声がグランドに響いた。

「！　始まったねー！」

「うむ。始まったな」

それを聞いて、声の主の方を向く五人。

『今年も毎年恒例、誰も意見を言ってくれなかったね！　でも泣かないよ！　もう大人だから!』

声の主、クー先生はそう言うと、

『と言うわけで、今回はトーナメントバトルをしようと思うのだが、おのおのがた、覚悟はよいか?』

急にキャラを変え始めた。

「?　トーナメントバトルー?」

ココアが疑問符を浮かべると、

『うん！　詰まり勝ち抜き戦！　勝って勝って勝ちまくって、賞金をゲットしちゃいまひょー！！』

クー先生が生徒たちにマイクを向けた。

「「おおー！！」」

「……なんでみんなノリノリなのさ？」

拳を高々と挙げてそれに答えた生徒たちに、ネガティブミントは小さく突っ込んだ。

『じゃあ、早速始めちゃうよ！　カモーン！　バトルフィールド！！』

そんなミントの突っ込みは勿論聞こえない。

そのままのノリで、クー先生はパッチィンと指を打ち鳴らした。

ばふんっ！！

「「！？」」

するとグランドが、広いステージを囲むように円形に観客席がある、コロシアムへと姿を変えた。

『うっはー！　超燃えてきたぜベイビー！！』

「「イエア！！」」

「だから、なんでそんなにテンション高いのさ？」

向けられたマイクに気合いの入った声を変える生徒諸君に、置いてきぼりにされているミント。

『ルールは超簡単！　どんな手を使ってでも生き残った人が勝ち！　但し、殺人は犯罪だよ！　ドゥーユーアンダースタン！？』

「「イエスアイドゥーーー！！」」

流れに負け、ついに乗ってしまったミント。

『じゃあ、みんな席について！　名前を呼ばれたら、速やかに！　一分以内にステージに立ってね！！』

クー先生がそう言うと、生徒たちはわらわらと観客席へと向かい出した。

「やー、なんか無駄にエキサイトしちゃったねー！」

「あっはっはっ！　楽しかったなァ♪」

「フッフッフッ。オレ様としたことが」

席へ向かう途中、楽しそうに会話をするココアとポトフと死神の隣で、

「乗ってしまった……」

ミントはがっくりと肩を落としていた。

（……ん？　みんなってことは、プリンもさっきあんなテンション――？！）

ふと、そう思い、ミントがぱっとプリンに顔を向けると、

「ぐー」

そこには、寝ながら歩くプリンの姿があった。

（……だよね）

プリンがエキサイトする様が思い浮かばなかったミントは、ほっと胸を撫で下ろした。

『さあさあ、今年も始まりました学園祭！　今回はトーナメントバトルと言うことで、私、クロレカが実況を務めさせていただいちゃうよ！』

生徒が皆席についたことを確認すると、拡声器からクー先生の声が流れた。

『そして、解説は魅惑の黒髪美人教師、ポリー先生にお願いしました！』

『……どうも』

クー先生のせいでかなり喋りにくそうなポリー先生。

『待ったなし、戦闘不能になったり、リングアウトしたりしたら負け！　棄権は認めないよ！』

そんなことは気にせず語り続けるクー先生。

「「認めないの？！」」

突っ込む生徒諸君。

『では、トーナメントバトル第一回戦を始めるよ！』

それも無視。

こうして、国立魔法学校の学園祭、トーナメントバトルが始まった。

第２９回　初戦日和

「……ココアちゃん、大丈夫かなァ……」

「あはは、去年の学園祭優勝者に何言ってるのさ？」

心配そうにステージを見つめるポトフにミントがそう言うと、拡声器からクー先生の声が流れ出した。

『では、記念すべき第一回戦を始めるよー！！　まずは選手に入場してもらいましょー！！』

それを聞いて、賑わっていた会場が静まり返る。

『赤リンゴコーナー』

「赤コーナーでいいと思うんだけど？」

『ココア＝パウダー！！』

観客席にいるミントの突っ込みが届く筈もなく、クー先生がそのまま続けると、ステージの右側からココアが登壇した。

同時に、わあっと沸き上がる会場。

「ココアちゃんカワイーっ！！」

「うん。ちょっと黙れ？」

騒ぎに便乗して何か叫んだポトフを爽やかに黙らせるミント。

『対して、紫リンゴコーナー』

「？　なんで青じゃねェんだ？」

「紫リンゴって、明らかに毒リンゴだよね」

『チロル＝チョコ！！』

ポトフとミントの突っ込みを華麗にスルーし、クー先生は、相手選手の名前を読み上げた。
再びわあっと声援があがる会場。

「って、チロル？！」

ステージの左側から登壇したチロルに驚くミント。

「……ふむ。いきなり去年の優勝者と準優勝者の戦いだな」

賑わっている周りに起こされたプリンは、眠そうに目を擦りながらそう言った。

『おおっと！？　初戦でいきなり去年の優勝を争った二人の対決ですね、ポリー先生！！』

『……なかなかのくじ運ですね』

そんな先生方の声が流れると、

「……くじ運がいいですって？　何言ってるのってかんじぃ……」

ステージの中央まで歩を進めたチロルがわなわなと震えながら呟いた。

「？　どしたのー、チロルー？」

そんな彼女と対峙して、小首を傾げるココア。

「……アタイは……アタイは……」

すると、チロルはダンッと片足で思い切りステージを踏みつけ、

「アタイはミントきゅんに薔薇の鞭でいたぶって欲しかったのに～～みた～いな～～～っ！！」

と、叫んだ。

「ぶはあ?!」

その直後、飲みかけていたコーラを思わず盛大に噴き出すミント。

「……」

「……」

に、会場じゅうの視線が集まった。

「……み……」

「……ミント……」

両サイドのプリンとポトフも、だいぶ引いてしまっている。

「っうわーん！！　オレ、そんなことしないもんんん！！」

ので、ミントはコーラを床に叩き付け、泣きながら何処かに走り去っていってしまった。

「ん。やはりキャンディーはメロンだ」

そんな中、死神は平然とメロンキャンディーを舐めていた。

「……ゴホンッ。では、これより試合を開始する」

静まり返った会場に、ステージの中央に立った、この試合の審判であるセル先生の声が響いた。

ぷー

「ライトニングアロー！！」

「イービルフィア！！」

何やら可愛らしい合図と共に、ほぼ同時に高等魔法を繰り出すチロルとココア。

ドカアアアアアン！！

バチバチとした雷の矢と、禍々しい闇の渦が衝突し、相殺された。

「……あんたねー？　そーゆーことはこんなとこで、しかも、大声では言わないでしょ普通ー？　ミント泣いちゃってたよー？」

先程の彼女の爆弾発言について、尤もな突っ込みを入れるココア。

「フンだ！　ヒトの恋路を邪魔するアンタが悪いのよ！！」

が、聞く耳持たず。

チロルは杖を取り出し、それを勢いよくココアに向けた。

「ギロチン！！」

ボワンッ

「させないよー！！」

出現したギロチンに捕われる前に、後ろへ素早く跳ぶココア。

「アイアンメイデン！！」

ボワンッ

「！？」

するとチロルが叫び、ココアの両サイドに、無数のトゲがついた、半分ずつの人型の鋼鉄が現れた。

バコンッ！！

それが確認出来たと思ったら、それらは勢いよくくっついて、完全

な人型になった。

「……チッ」

合わさったアイアンメイデンを見て、悔しそうな顔で舌打ちするチロル。

「あああ、あぶ、危ないでしょー！？」

それは、そのすぐ後ろに、顔を真っ青にしたココアがいたから。

『なっ……なな、なんて恐ろしい試合なのでしょうか！？　チロル選手、ココア選手を殺す気だー！！』

『殺人は犯罪です』

ようやく我に返り、実況を始めるクー先生と、コメントするポリー先生。

「まだまだぁ！！」

ボワンッ

「きゃ？！」

チロルが再び杖を振ると、ココアは椅子に確りと固定された。

「こ、これは――？！」

「紫電の断罪！！　サンドラルエクセキューションっ！！」

「――って、そういう意味で電気椅子ー?!　カオスシールド!!」

こんな危機的状況でも、突っ込みを入れる余裕があるココア。

ドシャアアアアン!!

直後、紫色の雷と、暗黒の盾が激突した。

『おーっとー!!　チロル選手の雷魔法と、ココア選手の闇魔法との激しい衝突ー!!　はたしてこの勝負の行方はー?!』

眩しそうに目に手をかざしながら実況するクー先生。

ボシュウ……

『!　闇が、ココア選手が勝ちましたー!!』

「……ふふっ♪　強い電気をありがと!」

雷が治まると、ココアは不敵に笑って、

「おまけつきで返してあげる!!　ブラッディハザード!!」

次の闇魔法を唱えた。

「!?」

すると、紫色の雷を帯た暗黒の盾、カオスシールドが勢いよくチロルに襲いかかった。

ドカアアアアアン！！

チロルが闇に呑み込まれ、爆炎が巻き起こった。

『「……」』

爆炎が治まるまでの暫しの沈黙。
それを破ったのは、セル先生。

「チョコ、戦闘不能。よって勝者、パウダー」

静かな会場にセル先生の声が響き渡り、

『決まったー！！　ココア選手の勝利ー！！』

クー先生が叫び、会場がわあっと盛り上がった。

「あ、あっはっはっ！　流石ココアちゃんだぜェ！」

「むぅ……ミント、次なのにまだ帰ってこない……」

賑わう観客席で、冷や汗を握っていたポトフと、次の試合に出場するのに、未だに帰ってきていないミントを心配するプリンであった。

「あー、楽しかったー♪」

試合が終わり、ココアは大きく伸びをしながら観客席へと戻ってきた。

「おかえりココアちゃん、お疲れ様♪」

「うむ。お疲れ、ココア」

そんな彼女を、胸キュンスマイルで迎えるポトフと、普通に迎えるプリン。

「……ただいまー……で、なんで膝の上？」

さも当然のように自分を膝の上に乗せたポトフに、その理由を尋ねるココア。

「なんでって――」

すると、

「――キミが好きだから」

ココアは耳元で甘く囁かれた。

「ひにゃあ？！」

「あっはっはっ！　真っ赤になっちゃって、ココアちゃんカワイ～♪」

「……さむさむ……」

真っ赤になったココアと、楽しそうに笑うポトフと、寒そうに枕を抱きかかえるプリン。

「ん。みんふぉだ」

その隣で、メロンキャンディをくわえた死神が口を開いた。

「……食べ物を口に入れたまま喋るな」

彼にさらりと注意するプリン。

「かぽ」

すると、彼はメロン味のロリポップを口から出して、

「ミント、かなり怒ってるな。魂が乱れてる」

と、言った。

「……」

「……」

「……」

「あむ」

再びロリポップをくわえた死神を見ながら、え？　こいつ魂見えるの？　とか思う三人であった。

『さあさあ、チロル選手がタンカで運び終わりましたので、始めますよ第二回戦！！　赤リンゴコーナー、パセリ＝ジュース！！』

終わった試合には興味ないのか、チロルが医務室に担ぎ込まれたにも関わらずに、クー先生は早速第二回戦を始めた。

「「わあああああっ！！」」

なかなか薄情者が多い国立魔法学校。
パセリの登場に、生徒たちは歓声をあげた。

『ではでは、続きまして紫リンゴコーナー、ミント＝ブライト！！』

「……」

アナウンスが流れると、うつ向き加減で登壇するミント。
と同時に、会場がわあっと盛り上がった。
ついでに、薔薇の鞭ーとかいう声も聞こえてきた。

「……」

そんなからかうような声を完全に無視し、うつ向いたままステージの中央に向かうミント。

「では、戦闘開始だ」

両者がステージの中央で向き合うと、セル先生は小さなラッパを吹き鳴らした。

ぷー

「ふはーはは！　ミント＝ブライト！　此処で会ったが百年目ええ！！　俺ら、チロルちゃんファンクラブからチロルちゃんを奪ったお前をギッタンギッタンにー…」

「蓮華」

ババババババババババババババッシーン！！

「ー…して……やる……」

ドサリ

「……なんか喋った？」

満身創痍になって倒れたパセリに、薔薇の鞭をしまいながら、ミントは酷く冷たい目を向けて尋ねた。

「……」

「……」

言葉を失う会場。

「……ジュース戦闘不能。よって勝者、ブライト」

静まり返った会場に、セル先生の判定が響いた。

『あ、圧勝ー！！　ミント選手、ものの十秒でパセリ選手を倒しましたー！！　私が実況する間もなく終わってしまいましたー！！』

わ、わあっと盛り上がる会場。

「……」

ミントは降壇する際に、登壇した時に彼をからかった生徒たちがいた観客席にちらっと目を向けた。

「「っ！！」」

それは一瞬のことであったが、彼らは向けられたその目から、彼が言わんとしたことを読み取れた。

――次はテメェらだ、と。

「ただいまー」

「！」

聞こえてきたその声に、ココアはピンと背筋を伸ばした。

「お、おかえりなさいませミント様」

「あはは、何やってんのさココア？」

そして深々と頭を下げたココアを見て、ミントは笑ってそう言った。

「あ、あはは－、いや、なんとなく－……」

（あ、あれ？　機嫌治ってる？）

不思議に思いながら頭を上げるココア。

「ね、ココア、プリンとポトフとワタルは？」

そんな彼女に、席に座りながら質問するミント。

「あ、えっと、ポトフは次の試合で、プリンはその次の試合だから、さっき下に降りてったよー。ワタルは……えっと、分かんない」

そう言えば、死神はいつからいなくなったんだろう？　と小首を傾げるココア。

「そっか。じゃあ、張り切って応援しなきゃね！」

そう言って、にこっと笑ったミント。

「あ、うん！」

それを見て完全に安心したココアは、

「ところで、帰ってくるのが随分遅かったけど、何してたのー？」

と、彼に尋ねた。

「え？　……ああ」

すると、ミントはにこっと素敵に笑って、

「ちょっとね」

と言った。

「……っ」

そのとっても素敵な笑顔を見て、ちょっと何して来たんだお前は？！　と、何故か恐怖の念を覚えるココアであった。

『では、第四十九回戦を始めます！』

「あ！　始まったね！」

「う、うん。でも、なんか不吉な数字だねー？」

クー先生のアナウンスを聞き、ステージに目を向けるミントとココア。

『では、選手に入場してもらいましょう！！　赤リンゴコーナー、ポトフ＝フラント！！』

名前が呼ばれ、ポトフが登壇すると、

「「きゃあああああ！！」」

と、観客席から黄色い歓声があがった。

「わは～、相変わらず大人気だね～？」

「……うん。そだねー」

それを見て、遠い目をしつつコーラを飲むミントと、若干複雑そうな表情になるココア。

『対して、紫リンゴコーナー、ペスカ＝トーレ！』

名前が読み上げられ、ポトフの向かい側から、野球少年風味のペスカが登壇すると、

「「……」」

しらっと静まる観客席。

「うおい？！」

差が激しすぎる女子生徒たちに、ペスカが突っ込みを入れた。

「気の毒だね」

「うん。気の毒だねー」

そんな彼を気の毒に思うミントとココア。

『おおっと!?　何やら会場の反応がえらく違いますね!!　ポリー先生、これは?!』

言わんでいい質問をするクー先生。

『……まあ、ほとんどの人間は、視覚に支配された生き物ですからね』

さらりとペスカの心の傷を深くするポリー先生。

「うおおい!?　どういう意味ですか先生ええ?!」

そんなポリー先生に、半泣き状態で突っ込みを入れるペスカ。

『状況から読み取ってください』

なかなかシャープに答えるポリー先生。

「……ひどいや……」

打ち拉(ひし)がれるペスカ少年。

「……」

そんな彼に、セル先生は無言で近付いた。

「……トーレ戦闘不能。よって勝者、フラント」

そして、体操座りしてのの字を書きまくっている憐れな彼を見て、セル先生はそう言った。

「ええェ！？」

『なんとー！！　ポトフ選手、不戦勝ー！！』

まだ何もしていないポトフがショックを受けているにも関わらず、クー先生はテンション高めで叫んだ。

「それほど盛り上がることでもないよねー？」

「て言うか、ペスカが負けたのって、ポリー先生のせいだよね」

盛り上がる会場とは対照的に、冷めた意見を述べるココアとミントであった。

『ではでは、続いて第五十回戦！』

ポトフとペスカが降壇すると、早速次の試合を始めるクー先生。

『赤リンゴコーナー、プリン＝アラモード！！』

プリンが登壇すると、

「「きゃあああ！！」」

先程と同じようにあがる黄色い歓声。

「……流石双子」

「だねー……」

なんだか笑けてきたミントとココア。

『紫リンゴコーナー、オリーブ＝オイル！！』

クー先生がコールすると、反対側から可愛らしい少女が登壇した。
すると、先程とは違って、わあっと声援があがる観客席。

『さあ、中央に移動してー！』

クー先生に言われた通り、ステージの中央で向かい合うプリンとオリーブ。

「では、これより試合開始だ」

セル先生が、ぷーと可愛らしい音を鳴らし、試合が始まると、

すっ

「え？」

プリンが手を差し出してきたので、驚くオリーブ。

「僕はプリン＝アラモードだ」

自分から名前を名乗り、相手と握手する。
それが、試合前の礼儀。

「お、オリーブ＝オイルですっ！　よ、よろしくお願いしますぅ！」

ハッとそのことを思い出したのか、差し出された彼の右手に、自分の右手を繋げるオリーブ。

「うむ。よろしく」

すると、プリンはふっと微笑んだ。

「！」

ので、

「しゅ、しゅてき……」

オリーブは顔を真っ赤にして、へなへなと力なく崩れ落ちた。

「ぴわわ！？　だ、大丈夫か？！」

そんな彼女を抱え起こすプリン。
しかし、そんなことをしたものだから、

「ひゃいあ！！」

オリーブはボンッと顔を更に赤くし、幸せそうに気を失った。

「……オイル戦闘不能。よって勝者、アラモード」

『なんとー！！　またもや不戦勝ー！！』

よって、またもや不戦勝で終わる試合。

「……」

「……」

「……まあ、プリンは狙ってやったわけじゃないんだろーねー？」

「うん。たぶん、プリン的には礼儀正しく接しただけなんだろうね」

「顔がいいって大変だね」

「ね」

観客席でココアとコーラをいただきながら、遠い目をするココアとミントであった。

第３１回　顔面蒼白日和

日も暮れてきた頃。
クー先生は、会場がガランとしていることにふと気が付いた。

『おや？　会場に人がいませんね？　カラスと一緒に帰っちゃったんですか？』

『……カラスと一緒ではありませんが、医務室に帰っていきましたよ』

『うはー、いいですね！　これからみんなで枕投げ大会ですか？』

『そのくらい元気になるといいですね』

楽しそうな彼女に、淡々と応えるポリー先生。

『おっと、すみません。では始めますよセミファイナル！』

自分の仕事を思い出したクー先生は、準決勝に出場する選手の名を読み上げた。

『に～し～、ミント～＝ブライト～』

相撲風に。

「……何故相撲風……」

小さく突っ込みながら、よっこいしょっとステージに上がるミント。

『ひが～し～、ココア～＝パウダ～』

「って言うか、西と東じゃなくて、赤リンゴコーナーと紫リンゴコーナーって言ってなかったっけー？」

その反対側から、小首を傾げながら登壇するココア。

「はわわ……ミントとココアちゃんが……」

「……ふむ。どちらが勝つだろう？」

がらりとした観客席に、間に一つ空けてぽつりと座ったポトフとプリン。

（（アナウンスが相撲風ってことは……））

ポトフの心配とプリンの疑問をよそに、ミントとココアは審判であるセル先生を見た。

「……」

「……」

「……やらんぞ」

彼らの期待のこもった目からその意味を読み取ったセル先生は、こほんと小さく咳払いしてそう言った。

「では、これより準決勝を始める」

ええー、とでも言いたげな二人を無視し、セル先生は試合開始の合図をした。

ぷー

「シャドウエッジ！」

「わ！」

しぱんっ！

開始と同時に放たれた、ココアの初等闇魔法である影で出来た爪を、ミントはひらりとかわしてみせた。

「ふふっ♪　行くよ、ミントー！　アームアーム！」

ココアは強気に微笑むと、自分の右腕に杖を当てた。

ぽわんっ

『おおっと?!　ココア選手の右腕がチェーンソーに!!　ポリー先生、これはー!?』

『部分変身魔法、アームアームですね。よく出来てます』

実況するクー先生と、ココアの魔法に感心するポリー先生。

「いざ、尋常に勝負ー！」

ヴィーーーーーーーン

「……鞭相手にチェーンソーって辺りで尋常じゃないと思うんですが？」

薔薇の鞭を左手に持ったミントが、顔を引きつらせながら言うと、

「細かいことは、気にしちゃダメだよー！」

ココアは勢いよく地を蹴った。

「やあああああああ！！」

「いや、こっちの方がやあああああああ？！」

チェーンソーとなった右腕を振り下ろすココアと、素早く横に跳ぶミント。

ガガガガガガガガッ！！

『おっとー！　標的を逃したチェーンソーがステージをガガガガーっとー！！』

『だから殺人は犯罪です』

ガガガガっと刻まれたステージを見て、顔を青くする先生方。

「あぁあ、ああ当たればどうなるか分かってますか、ココアさん！？」

当然、彼女たちよりも更に真っ青なミント。

「分かってるよー。さっきみたいに飛び散るんでしょー？」

ステージからゆっくりとチェーンソーを離したココアは、ミントを振り向くと、

「但し、コンクリートじゃなくて、血だけどねー？」

にっこりと素敵な笑顔を見せた。

「よ、よくご存知でらっしゃる……」

ビシバシと伝わってくる嫌な予感に、無意識のうちに一歩下がるミント。

「キャハハハハハハ！！　飛び散っちゃえーー！！」

「わあい、壊れたココア久しぶりいいいいいい！？」

嫌な予感、的中。

ミントは泣き叫びながら逃げ出した。

『おおっとー！？　ココア選手が突然破壊主義者にー？！』

『飛び散ったコンクリ見てスイッチが入るとは、危険極まりないですね』

引き続き顔色が悪い先生たち。

「キャハハハハハハ！！」

「わあ！？」

ガガガガガガガガガガ！！

「キャハハハハハハ！！」

「うわ？！」

ズガガガガガガガガ！！

「キャハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

「ちょっとこの人どうにかしてよポトフううう！？」

襲いかかってくるチェーンソーを避けながら、必死に逃げ回るミント。

「どうにかしろと言っているぞ？」

「いやァ……無理だろ？」

ココアを指さして言うプリンと、苦笑いするポトフ。

「キャハハハハハハ！！」

チェーンソーを振り回しながら迫り来るココア。

「っああ、もう！！」

ミントは、半ばヤケクソに意を決して足を止め、狂った彼女を振り返った。

「キャハハハハハハ？」

『おっとー！？　ミント選手、今度産まれてくる時は何に産まれてきたいですかー！？』

小首を傾げながらもミントに迫るココアと、縁起でもない質問をするクー先生。

「取り敢えず、足の長い父親と溶けない母親の間に産まれたいかなっ！！」

質問に答えながら、ミントはココアに向けて薔薇の鞭を走らせた。にも関わらず、攻撃が可能な範囲まで来たココアは、彼に向かってチェーンソーを振り下ろした。

「絡み付け――朝顔！！」

ぐわんっ！！

「！？　キャハ？！」

ミントが技の名前を叫ぶと同時に、薔薇の鞭は朝顔の蔓（つる）ように見事彼女の体に絡み付いた。

『なんとー！！　ミント選手、ココア選手の動きを封じましたー！！』

『せ、成功してよかったですね』

冷や汗ものの先生方。

「キャハ、キャハハハ！」

「ごめんね、ココアとポトフ」

鞭を切ろうともがくココアと、はわわ！　って顔になったポトフに謝ってから、ミントは鞭を握っている手に魔力を込め――…

「あ、リングアウトさせればいいのか」

――…ようと思ったが、代わりに力を込めた。

「吹っ飛べえええええ！！」

「キャハハハハハハ！？」

そしてミントは、ステージの外に向かって、ココアを思い切り投げ飛ばした。

ドカアアアアアン！！

「……パウダー、リングアウト。よって勝者、ブライト」

ココアがリングアウトすると、セル先生が勝者の名を口にした。

『決まったー！！　ミント選手、決勝進出ー！！』

それを聞いて、クー先生は盛り上がり、

「ごめん、ココア！！」

「ココアちゃん！！」

ミントとポトフは慌ててココアに駆け寄っていった。

第３１回　顔面蒼白日和（後書き）

後日談。

プリン
「ミント、あそこで魔力を込めたらどうなっていたんだ？」

ミント
「え？　ああ、鞭のそこらじゅうから十センチほどのトゲがビビュッと」

プリン
「……っ」

第３２回　命令日和

壁に激突して撃沈したココアを、ミントは、よっと背負って立ち上がった。

「ぴわわっ……ミント、僕がテレポートで送るっ！」

「お、俺が此処で回復させればいいんじゃねェか？」

試合が終わったばかりなのに、と心配そうに言うプリンとポトフ。

「ありがとう。でも、大丈夫だよ。オレのせいだし。それに、二人はこれから試合でしょう？　試合前にそんなに魔力使っちゃダメだよ」

そんな二人にミントはそう言うと、

「じゃ、行ってくるね！」

くるりと回れ右をし、ココアを医務室へと連れていった。

「ぴわわ……行っちゃった……」

ココアを背負って走っていってしまった彼を見て、引き続き心配そうな表情のプリンと、

「セットでいただきたい」

ぐっと右手を握るポトフ。

「……」

しらっとした目を彼に向けるプリン。

「うはァ～、二人とも可愛いくて困っちまうなァ♪」

「貴様の存在が一番困る」

幸せそうなポトフに、プリンはさらりとそう言った。

『レディースおーっと誰もイナーイ！！』

『元気ですね』

レディースアンドジェントルメーンのノリで観客席を見て言ったクー先生に、ポリー先生は素直な感想を述べた。

『いやぁ、そんな照れます！』

『誰も褒めてません』

『そうですね！　では、セミファイナルパート2を始めまーす！』

ポリー先生の言葉をさらりと受け流してみせたクー先生。

『赤リンゴコーナー、ポトフ＝フラント！！』

「お。普通だ」

ステージに上がりながら、アナウンスが普通に戻ったことに安堵するポトフ。

『紫リンゴコーナー、プリン＝アラモード！！』

「ぷわ……ねむねむ……」

その反対側から、口に右手をかざして小さく欠伸しながら登壇するプリン。

「試合開始だ」

二人がステージの中央で対峙すると、セル先生は試合を開始させた。

ぷー

「死にさらせェェェ！！」

「貴様がな」

バシーン！！

試合開始と同時に、ポトフの足とプリンの枕が激突した。

『おっとー！　これまでのすべての試合で不戦勝したプリン選手とポトフ選手、両者ともいきなり殺る気満々です！』

『”やる”がおかしいです。と言いますか、枕って武器にもなるんですね』

早速実況を始めるクー先生と、コメントするポリー先生。

「あっはっはっ！　今日こそ決着つけてやるぜェ！！　覚悟しろォ、枕ァ！！」

タッとお互いに離れると、プリンをズビシッと指さして言うポトフ。

「……決着など、いつもついているだろう。貴様の負けという形で」

そんな彼に、挑発的な返事をするプリン。

「んだとテメェ？！」

その挑発に、見事に乗ってしまったポトフ。

「事実を言ったまでだ」

更に挑発するプリン。

「ぶっ飛ばァァァす！！」

「おお？　出来るといいな？」

「ぶっ殺ォォォォす！！」

怒りが爆発したポトフは、盛大に咆哮（ほうこう）すると、ブワッと一気に魔力を高めた。

「ランラン！！」

「微風」

ポトフが魔法を唱え、自分を包むように現れた光の球を、プリンはとても微風とは言えないような微風で掻き消し、

「コウコウ！！」

「旋風（つむじかぜ）」

頭上に現れた十字架から乱射される光線を、渦巻く風で相殺し、

「キラキラァ！！」

「神風」

白熱した巨大な光の柱を、超突風で迎え撃った。

ちゅどおおおおおん！！

ポトフの光魔法とプリンの風魔法がぶつかる度に、戦場に爆発が巻

き起こる。

『激戦ですね！！』

『そうですね』

『て言うか、光と風って普通ぶつかるんでしょうか、ポリー先生！？』

『……まあ、魔法ですからね』

痛いところを突いてきたクー先生に、苦し紛れにそう答えるポリー先生。

「わは～、やってるやってる」

医務室にココアを運び終わったミントが、大爆発が起きている会場に戻ってくると、早速プリンとポトフの声が聞こえてきた。

「いちいち止めんなよバカ！！」

「止めない方が馬鹿だろう？」

「……相変わらずだね」

無茶なことを言いなさるポトフと、さらりと言い返すプリンを見て、思わず苦笑いするミント。

「はわ！　た、確かに！」

「……」

ハッとなったポトフに頭を抱えながら、プリンは何も持っていない右腕を大きく振りかぶった。

「舞風（まいかぜ）」

その時産まれた風の刃を、プリンはポトフに向かって思い切り投げつけた。

風の刃は、回転しながら進んでいくうちに、みるみる巨大になっていく。

「！　プリズムソード！」

ガキィン！！

巨大化しながら襲いかかってきた風の刃を、ポトフは光の剣で見事に弾くと、

「ピカピカァ！！」

透かさず光魔法を唱えた。

カッ！！

「「！！」」

『わ！？』

『っ！　目くらまし系の光魔法ですね』

直後、目を開けていられないような強い光が、日が暮れて暗くなった辺り一面を照らした。

「もらったァ！！」

強烈な光に当てられて目を瞑ったプリンに、ポトフは正面から光の剣を振り下ろした。

「――！」

その直後、瞳を開け、身の危険を察知したプリンは、とっさに叫んだ。

――それは、風魔法でも瞬間移動（テレポート）魔法でもない言葉。

「おすわり！！」

プリンの声が、広い会場に響き渡った。

「……」

『……』

『……』

「……は？」

次いで、固まるセル先生とクー先生とポリー先生とミント。

「……か……体が……勝手に……っ？！」

それは、光の剣を取り落としたポトフが、プリンの目の前で”おすわり”をしていたから。

「あ……」

我に返ったプリンは、しまったという顔をしつつも、ぴこーんと何かを思い付いた。

「……ばーん」

「きゅうん」

ぽてっ

プリンが指で鉄砲を打つ動作をすると、ポトフは可愛らしい声を発しながら仰向けに倒れた。

「――はっ！！　くっ……くそっ……！！　なんで……っ！？」

「……。……フラント、戦闘不能。よって勝者、アラモード」

「な、何ィ？！」

ので、セル先生は右手を挙げてそう言った。

『ななな、なんとー！！　ポトフ選手は犬だったー！！』

「ふざけんなァァァ？！」

その後、クー先生とポトフの声が会場に木霊した。

第３３回　決勝日和

『さあ、始めちゃいますよファイナルバトル！！　赤リンゴコーナー、ミント＝ブライト！！』

紺碧の空に金色の月が輝き出した頃、クー先生のアナウンスが流れ、ミントはステージに上がった。

『バーサス、紫リンゴコーナー、プリン＝アラモード！！』

その反対側から、いつもの通り枕を抱えて登壇するプリン。

「では、これより決勝戦を始める」

ステージの中央に立ったセル先生は、ぷーとラッパを吹いて試合を開始させた。

「む。よろしくミント」

「よろしく」

差し出された手を握ると、

「……こんな所であの負け方は可哀想なんじゃない、プリン？」

と、ミントが言った。

「む……」

「後でちゃんと謝っておくこと」

「……うむ」

プリンがこくりと頷くと、ミントはにこっと笑ってみせた。

「……ミント、あいつは今何処にいるんだ？」

試合が終わったら失踪してしまったが……と、手を離した後、プリンは尋ねた。

「え？　ああ……ポトフなら、あの辺りで壁を向いて体操座りしてるよ」

「た、体操……」

彼の問いに、ミントは観客席の隅っこの方を指さしてそう答えた。

「……」

ミントの言った通り、ポトフは観客席の隅っこで、壁を向いて体操座りをしていた。

「……はァ……」

そんな彼から、溜め息が溢れた。

理由は、先程の試合でプリンの命令を、しかも、犬に向かってするような命令を聞いてしまったから。

観客席にミント以外に人がいなかったのは救いだが、あんな無様な姿をミントやプリンに見せてしまった。

カッコ悪い。

カッコ悪すぎる。

「……消え去りたい……」

いつでもかっこよく在りたいポトフは、今にも消え去ってしまいそうな声で呟いた。

「おっけー」

すると、彼の後ろから返事が返ってきたので、不思議に思ったポトフが振り向くと、

「フッフッフッ。今楽にしてやるゾ☆」

ブン！　ブン！

そこには、大鎌を素振りしている、殺る気満々の死神が立っていた。

「フフン♪　月輪（ゲツリン）！」

「いやいやいやいやいや待てェェェェェ?!」

ビュウン!!

満足のいく素振りが出来たのか、死神がポトフの首目がけて大鎌を薙ぎ払った。

が、それは空を斬った。

「……ん？　何故避けた？」

「避けるに決まってんだろォォォ?!」

小首を傾げた死神に、ポトフは涙目で突っ込みを入れた。

「？　”消え去りたい”って言ったから刈ってやろうと思ったのに。うっわ、オレ様超優しー」

超棒読みな死神。

「何処が!?　自分の落ち込み具合いを言葉で表現してみただけだってェの!!　って言うか”刈る”ってなんだ死神っぽいな?!」

そんな彼に再び突っ込みを入れるポトフ。

「だから死神だと言ってるだろ？　痛い！　速い！　上手い！　が、売りの」

大鎌を担ぎ直して、えへんと胸を張る死神。

「怖ェよ!?　って言うかなんだそのキャッチフレーズは?!　そして痛ェのかよ?!」

またまた透かさず突っ込みを入れるポトフ。

「痛くなきゃ死んだ気がしないだろ?」

死んだ気も何も、死んでしまえば何も分からなくなると思うが。

「あと、これは自慢だが、オレ様の鎌子はなんでも刈れるんだ。指も腕も足も胴も頭も首もスパスパーって♪」

大鎌、鎌子を右手で器用にヒュンヒュン回しながら自慢する死神。

「だァら怖ェよ?!　音符つけんな!!　そして自慢すんな!!　ってか鎌子っていうのかその鎌!?」

そんな死神に、ひたすら突っ込みを入れるポトフ。

「ん。正式名称は三日月鎌（クレセントサイス）だ」

パシッと鎌子を止め、再び肩に担ぐ死神。

「んだそれ!?　明らかに正式名称の方がかっこいいじゃねェか?!」

ご尤もな突っ込みを入れるポトフ。

「鎌子の方が可愛いいだろ?」

小首を傾げる死神。

「まったく可愛くねェェェェェェェェェェ！！」

何はともあれ、死神のおかげで元気になったポトフであった。

ポトフと死神が会話にならない会話をしている間、ミントとプリンはドカンバコンと戦っていた。

「ヒール！！」

『おおっと！？　ミント選手、プリン選手に向かって回復魔法を唱えたー！？』

『……いえ、あれは……』

ドカンバコーン！！

『なんとー！！　回復魔法なのに爆発したー！！』

『いわゆる”失敗魔法”ですね』

「……蒼き風よ、我が意のままに舞い踊れ――」

ミントの回復魔法（失敗魔法）をかわしたプリンは、左手に枕を預け、右腕を大きく後ろに引いた。

「――舞風！」

右手の五本指の間にそれぞれ産まれた風の刃を、ミントに向かって投げつける。

「させないよ！！　ツインマッドホイップ！！」

『『ジェラララ！！』』

向かってきた刃を、一対の食人植物の鞭ですべて弾き飛ばすミント。

「序曲、かざぐるま」

が、プリンがミントに手を向けたままそう言うと、

「――！？」

弾かれた風の刃は向きを変え、ミントとマッドホイップを、回りながら取り囲んだ。

「破曲、たつまき」

風の刃の回転が速くなり、ミントの周りに竜巻が起こる。

「急曲、かまいたち」

その後、プリンはミントに向けていた右手をぐっと握り締めた。

スパァン！！

会場に、何かが切り裂かれた、痛々しい音が響き渡った。

「……！」

「……み、ミント……」

竜巻が晴れると、観客席にいる死神とポトフは目を見開いた。

それは、静かに手を下ろしたプリンの先に、満身創痍になったミントが倒れていたから。

『……こ……これは……』

『……痛そうですね……』

自分の体を抱えながら、素直な感想を述べるクー先生とポリー先生。

「……」

起き上がる気配がないミントを見て、セル先生は左手を上げた。

「ブライト、戦闘不―…」

「まだ……まだぁ！！」

バンッ！！

ミントはセル先生の言葉を遮って、ボロボロな左手で倒れたままステージを強く叩いた。

「む？」

『ジェロロロロロロ！！』

「ぴわ―…！？」

プリンが疑問符を浮かべた直後、彼の足元から、ローズホイップとマッドホイップを掛け合わせたような巨大な食人植物、マッドローズが飛び出した。

バクン！！

と同時に、プリンは、真っ赤な薔薇の中心にある巨大な口に飲み込まれてしまった。

「ゴホ……”ごちそうさま”は？」

よろよろと立ち上がったミントが聞くと、

『ジェロロローウ！！』

狂気の薔薇、マッドローズは、甲高い奇声を発した。

「よし、いい子」

それを聞いて、ミントが弱々しく微笑むと、

「……勝者、ブライト」

『っ決まりましたー！！　優勝者はミント＝ブライトー！！』

セル先生が左手を下ろして右手を上げ、クー先生が高らかに勝者の名前を読み上げた。

第３４回　早朝日和

夜が明けて、鳥の鳴き声が聞え出した頃、

「な……なんだよ、こんな時間に……？」

こんな早い時間に起こされたポトフは、真剣な面持ちでこちらを向いている彼に理由を尋ねた。

「……ご……」

すると、彼、プリンは少し躊躇うような仕草を見せた後、

「ごめんなさいっ！！」

バッと頭を下げて彼に謝罪した。

「……は？」

プリンからの突然の謝罪に驚くポトフ。

（なんか、フラれた気になるのは何故だろう……？）

場の雰囲気の問題ではないかと。

ポトフがそんなことを思っていると、プリンはバッと顔を上げ、

「ち、ちゃんと謝ったからなっ！」

恥ずかしそうにそう言った後、ズカズカと自分のベッドに帰って行

き、バフッと布団を被った。

「……」

いや、ツンデレ気取られても……と、ぽかんと口を開け、只今の状況を理解しようと努めるポトフ。

「……ぐー」

ポトフが状況を飲み込めたのは、プリンが抑揚のないいびきを掻き始めた頃。

と言っても、プリンが眠りに落ちたスピードが速いだけなので、そんなに時間は経っていない。

「……枕が、俺に、謝ってきた……？」

不安定な声で、ゆっくりと言葉を紡いだポトフは、

「世界が滅びる！！」

顔面蒼白になってそう言った後、慌ててベッドに潜り込んだ。

「ふあ！？　ポトフ？！」

ミントの。

「な、何オレのベッドに潜り込んでるのさ？！」

おかげで目が覚めてしまったミントは、上体を起こして彼に目覚めの突っ込みをかました。

「ミント!!　世界が!!　世界が滅びる!!」

ミントの突っ込みを綺麗に無視し、彼の肩を激しく前後させるポトフ。

「ちょ……待っ……な、何寝惚けたこと言ってんのさ?」

ポトフの腕を掴んで彼の動きを止めるミント。

「だだだって、枕が、枕が突然俺に謝ってきたんだぞォ?!」

まだ落ち着いていないようで、ポトフは真っ青な顔でそう言った。

「……へ?　よかったじゃん?」

それを聞いて、ミントは、

「それでなんで世界が滅びるのさ?」

と言いながら、思い切り疑問符を浮かべた。

「はェ?!　……あ、……それは……えェと……」

ご尤もな質問をされ、ようやく我に返ったポトフ。

「……。ああ」

そんな彼を見て、ミントはふっと微笑み、

「そんなに嬉しいんだね」

と、言った。

「ふにゃなたあゆゥ？！」

再び壊れるポトフ。

「ふにゃ……？」

彼のリアクションに小首を傾げるミント。

「らひぬやまつきの！！　むさねきょもわるよ？！」

「た……頼むからちゃんと喋ってよ？　分かんないから」

錯乱しているポトフに、ミントは苦笑いしながら言った。

「むゥ……生意気な……」

余裕げなミントを見て、ポトフは面白くなさそうに呟いた後、

「おりゃァ！」

「うわあ！？」

バフッ

ミントを冗談でベッドに押し倒した。

「……！」

「ちょっ、何すんのさ？」

が、

「……ミント……」

「って、近い近い近い近い近いですううううう？！」

うっかり本気になってしまった。

「あああ、あ、朝顔！！」

「ふがァ？！」

ので、ポトフは薔薇の鞭で縛り上げられ、天井に吊された。

「……む？　何事だ？」

『む～？』

大きな物音を聞き、目が覚めたプリンとむぅちゃんがむくりと起き上がると、

「……！　ザ・ハングマン……！」

プリンは天井から吊されているポトフを見て目を見開いた。

「吊された男の正位置……物事の考え方が百八十度変わるゾ☆」

次いで、彼の隣に現れた死神が、抑揚のない声でそう言った。

「ぴわわ?!」

『む~!』

突然隣に現れた死神に、驚いて思わずのけ反るプリンと、彼に挨拶するむぅちゃん。

「ちゃお」

むぅちゃんに挨拶を返すついでに、ミントとプリンとポトフの三人にも挨拶する死神。

「ん?」

その後、彼はむぅちゃんを見て、

「……お前、いつから植物になったんだ?」

と、真剣な表情で尋ねた。

『むぅ?』

耳を葉っぱテイストにペイントされたことに気が付いていないのか、からだ全体を傾けるむぅちゃん。

「み、ミント、一体何があったんだ……!?」

吊された男になって顔を青くしているポトフを指さしながらプリンがミントに尋ねると、

「そんなことより、昨日の大会の途中姿が見えなかったけど、何してたの、ワタル？」

ミントはさらりとそう言った。

（（そ……”そんなことより”……））

軽く流されて、ショックを受けるプリンとポトフ。

「ん？　ああ」

『む～ぅ……』

そんな彼らをよそに、死神はむぅちゃんを指でぐりぐりしながら、

「医務室という所で遊んでた」

と答えた。

「？　医務室で？」

彼の答えに、疑問符を浮かべるミント。

「ん。痛いよーって痛がってる奴らにオレ様は死神だって自己紹介するとバタバタ気を失うからもう楽しくて楽しくて」

と言いながら、フッフッフッと楽しそうに笑う死神。

「「……」」

タチの悪い遊びに、言葉を失う三人。

「……さ、朝ごはんにしよっか、プリン」

「うむ。むぅちゃん」

『む～』

暫しの沈黙を経て、帽子を被ったミントと、長い髪を一つに束ねてむぅちゃんを頭に乗せたプリンは、ごくごく自然に部屋から出ていった。

「え？　ちょ、俺は？！」

「……フッフッフッ。また二人きりになれたな、ポッティー？」

「嬉しくねェェェ！！」

「まあそう照れるな」

「照れてねェェェ！！」

鎌子を右手に取って迫ってきた死神から、逆さ吊りにされて逃げられないポトフは、初めて迫られる側の気持ちが分かったとか。

第３５回　お見合い日和

昼食後の昼休み。
日当たりのいい中庭に生えている大きな木の下にある小さなテーブルで、ミントはノートを広げてテスト勉強をしていた。

「……で、ここでゴルゴンの定理を使う」

彼のノートの中央辺りを指さしながら、プリンはそう言うと、

「分かった？」

ぴょこっと顔を上げて小首を傾げた。

「……」

しかし、もの言わぬミントは羽ペンを持ったまま固まっている。

「？　ミント？」

そんな彼の顔の前で、ふいふいと手を振ってみるプリン。

「っにゃーーーーー！！」

「ぴわわ！？」

すると突然、ミントは頭を抱えて叫んだ。

「ど、どうしたの？」

「うわーん！！　全然分かんないよー！！　って言うか、誰だよゴルゴンってー？！」

「む？　ゴルゴン＝ゾーラは魔法暦八百年代に活躍したバテコンハイジュ出身の数学者で魔力曲線や空間座標の算法の他に無属性魔法に関する魔力消費率――…」

「やーめーてー！！」

さらさらと語り出したプリンに、両耳に両手を当てながら叫ぶミント。

「ぴわわっ、ご、ごめん、ミント！」

プリンは慌ててミントに謝ると、

「で、では、こっちの例題からやろう？」

テーブルに置かれた教科書のページをぺらりと戻しながらそう言った。

「……うん」

彼の言葉に、ぐすっとしたミントが頷くと、

「お疲れ、ミント♪」

ひやっ

「ひや？！」

聞き慣れた声に次いで、頬に何か冷たいものが当たった。

「！　ありがとう、ポトフ！！」

振り向くと、そこにはポトフがコーラを持って立っていたので、ミントは透かさずお礼を言った。

「あっはっはっ！　どぉいたしましてェ♪」

ミントの頭をぽんぽんと弱く叩きながら、彼のノートを上から覗き込むポトフ。

「うはァ～、数学かァ～」

ノートの内容を見たポトフは、その先にいるプリンが目に入った。

「……」

「……」

「……ほらよ」

プリンの無言の訴えを読み取ったポトフは、彼の前に紙パックを置いた。

「……あおぢる……」

それに書かれた文字を読むプリン。

”じ”じゃないのか、とか思いながら、パッケージに描かれているアオムシは極力気にしないようにして、プリンはそれにストローを刺して飲んでみた。
理由は、折角ポトフが自分の為に買ってきてくれたものだから。

「……ぷえ、にぎゃい」

が、やはり不味かった。

「んーと、今やってるのはここだな。分かるか？」

目がバッテンになったプリンをよそに、ミントの隣に座ってテーブルに牛乳ビンを置きながら首を傾げるポトフ。

「……よく分かんない」

牛乳か。
牛乳なのか、とか思いながら、彼の質問に答えるミント。

「じゃァ、俺の出番だな♪　いいかァ？　これがこォなるのは分かるよな？」

そんな彼に、ポトフはにこっと笑ってそう言った。

「うん」

「よし♪　で、次はこの式を……」

ので、ミントは彼の説明を聞き始めた。

「……ぷゆゅ……」

問題に取り組み始めた彼らの向かい側に座って、あおぢるに悪戦苦闘しているプリン。

美味しくない。

美味しくないのだが、折角買ってきてくれたのだから捨ててしまうのは……と、プリンが律儀にそれを飲んでいると、

「あ、いたいたー！　プリンー！」

と、ココアの声が聞こえてきた。

「……む？」

呼ぶのは馬鹿犬の方ではないのか、とプリンはそちらを向くと、

「！？」

彼はそのままぱきっと固まった。

「ごきげんよう、プリン」

それは、ココアの隣に、青いドレスを身に纏った、いかにもお嬢様な紫色の髪の淑女がいたから。

「なっ、何故此処にいるんだ、ムース？」

彼女、”ムース”にプリンが尋ねると、

「あら、此処に来るのには理由がなくてはいけませんの？」

「ムースはプリンに会いに来たんだよー？」

お嬢様仕草＋お嬢様口調で返すムースと、悪戯っぽく笑うココア。

「な、何をおっしゃってますの、ココアさん？」

すると、ムースは紅潮した頬に両手を当てながら、

「大正解ですわV」

と、言った。

「……」

「やー、愛されてるねー、プリンー？　流石婚約者ー♪」

呆れ顔をするプリンと、ニヤニヤ笑うココア。

「ねーねー、二人はいつ何処で何を誰と何故どのように婚約したのー？」

ふと思ったことをココアが質問すると、

「５Ｗ１Ｈですわね！」

「……”誰と”と”何を”はおかしいだろう？」

プリンの婚約者であるムースは上品に笑い、プリンは再び呆れ顔をした。

「では、お話しして差し上げますわ♪」

「やたー！」

「……ぷゆゅぅ……」

そうして、ムースは目を瞑って語り出し、プリンはどうでもよさそうに、再びあおぢると戦い始めた。

≫≫≫

「どういうことですの、おとうさま！？」

豪華な食事会場の、無駄に豪華な子供用の椅子に座った五才のムースは、苛立ちを抑え切れずに、バンと白いテーブルクロスがかかったテーブルを叩いた。

「やくそくの時間におくれるだなんて！　しつれいきわまりないですわ！」

平仮名表記ではあるが、何故か発言が子供らしくないムース。

「お、落ち着くんだ、ムース」

彼女の隣に座っている、紫色の髪の紳士、ムースパパは、

「まだ二時間半過ぎただけじゃないか」

と、言った。

「二時間半ですわよ!?　ピアノのおけいこと、バレエのれんしゅうができてしまいますわ!!」

二時間半も待たされて、当然ご機嫌斜めなムース。

「し、しかし……」

ムースパパは、気まずそうに向かい側の席にちらりと目を向けた。

「はっはっはっ！　遅いなあ、プリンは！」

「うふふふ。遅いですわねぇ、プリンは」

そこには、呑気に笑っているアラモード夫妻が座っていた。

（なんでお子さんは貴殿方と一緒じゃないんですかあっ?!）

そんな彼らに、心の中で思い切り突っ込みを入れるムースパパ。

「もういいですわ!!　わたくし、もうかえらせていただきます!!」

ムースはもう一度テーブルを叩くと、とうっと椅子から飛び降りて走っていってしまった。

「！　ムース!!」

「はっはっはっ！　お手洗いかな、ジェラートさん」

「うふふ。お手洗いでしょうか、ジェラートさん？」

「……ええ。そうなんじゃないでしょうか」

政略結婚の相手なのだが、やっぱり断ろうかな、とか思うムースパパであった。

「まったく！！　二時間半もまたせるなんて、しんじられませんわ！！」

プンスカ怒りながら食事会場を出たムースは、階段を降りて外に出た。

「だいたい、なんですの、〝せいかくけっこん〟というのは？！」

ちょっと間違えているのはご愛敬。

「おとうさまは、かってすぎます！！　わたくしが、わたくしがすきなのは……ひつじのジーノですのに」

羊ではなくて執事である。

ムースは切なげに呟くと、建物の前にある噴水前のベンチに座り込んだ。

「……ジーノはやくそくの時間におくれたりしませんわ。それに、とてもかっこよくて、やさしくて――…」

と、ムースがぶつぶつ言っていると、突然ふわりと風が吹いた。

「――――！」

その時、ふと顔を上げたムースは、白い門の向こう側からやって来た少年を見て固まった。

風にそよぐ、流れるような水色の髪。

目も鼻も口も美しく整った綺麗な顔。

寝心地良さそうな、両端にピンクのひらひらがついた白い枕。

「……！！」

最後の一つは明らかにおかしいのだが。

「け、けっこんしてくだしゃい！！」

憐れジーノ。

ムースはすっくと立ち上がると、その少年、プリンに深々と頭を下げていきなりプロポーズした。

――その答えは、すぐに返ってきた。

「ぐー」

≫≫≫

「……てな流れですわV」

「……」

ムースの語りに、どこから突っ込めばいいだろう？　とか思うココアと、

「うう……ぴや……」

未だあおぢると戦っているプリンと、

「わ、凄い凄い！　ポトフ天才！！」

「あっはっはっ！　だろォ？」

問題が解けたことに喜ぶミントとポトフであった。

第３６回　外出日和

「ふう、終わったねえ」

「うむ。終わったな」

「おお、残るは来週の実技だなァ」

ぽかぽか陽気のお昼前。

三日間に渡る筆記試験が終わり、ミントとプリンとポトフは教室を出た。

「実技試験かあ……。今回は何やるんだろうね？」

「うむ。この学校は突拍子も無いことを突然言い出すからな」

「森からの脱出とかな。でも、一個前のは普通に無属性魔法のテストだったよなァ？」

ポトフの発言を聞き、ミントはハッとした。

「回復魔法のテストだったらどうしよう……？」

「あっはっはっ！　それは絶対にねェよ」

青い顔をして呟いたミントに、ポトフは明るく笑ってそう言った。

「え？」

「……回復魔法は向き不向きの激しい魔法だからな」

小首を傾げたミントに、枕を抱え直しながら応えるプリン。

「そ。だから、回復魔法に向かない人のところには、回復魔法が得意な人が引き寄せられるらしいぜェ？」

そう言って、後ろからミントに抱きつくポトフと、

「それが二人いると、小競り合いが絶えなくなるらしい」

彼を枕でホームランするプリン。

「ってェな、何すんだ、枕ァ？！」

「枕で変態を殴った」

「わォ！　簡潔！　って、ふざけんな、テメェ！？」

「事実を言ったまでだ。と言うか、ふざけているのは貴様の方だと思うがな？」

「上等だァ！！」

という具合いに、いつものようにドカンバコンと喧嘩を始めたポトフとプリンを見て、

「あはは……まんまキミらのことだね？」

思わず苦笑いするミント。

「向き不向きの激しい魔法かあ……」

あんな派手に爆発するんだから、自分は相当向いていないのだろうな、と、ミントは何かを諦めたような清々しい笑顔で、窓の外に目を向けた。

「あ」

その時、箒に乗って飛行している生徒が丁度目に入った。

「そう言えば、オレの箒、空中分解しちゃったんだった」

ふと、自分の箒がお釈迦になっていたことを思い出したミントは、

「……今日買いに行こうかな？」

実技試験で使うことになったら大変だし、と思いながら、ぽつりと呟いた。

「僕も」

「俺も」

「「行く！」」

すると、喧嘩中だったのにどうやってそれを聞き取れたのか、プリンとポトフが食い付いてきた。

お互いの頬を引っ張りながら。

「……うん。じゃあまずその手を離そうね？」

「「はーい♪」」

彼らの聴力に驚きつつ、うっかり口に出してしまったことを若干後悔するミントであった。

「うは～ァ！　いつ来ても此処は人がいっぱいだなァ！！」

王都市・シャイアの駅で蒸気機関車を降りたポトフは、辺りを見回しながらその感想を述べた。

「うむ。貴様はいつ来ても田舎者丸出しだな」

そんな彼を見て思ったことを、遠慮なくさらりと述べるプリン。

「丘に住んでるヤツに言われたくねェよ」

「森に住んでる奴に言われたくない」

バチバチと火花を散らし始めたポトフとプリンに、

「置いてくよー？」

ミントはスタスタと歩きながらそう言った。

「「ま、待って！！」」

どちらも都会に慣れていないので、二人は慌ててミントを追い掛けた。

「えーと、箒屋さんはっと……」

ミントが歩きながら背伸びをしつつ、きょろきょろと辺りを見回していると、

「ミントミント！　あそこにおっきいプリン屋さんがある！」

プリンが目を輝かせながら言った。

「んーそだねー」

それを適当に流すミント。

「ミント！　あそこで新作眼帯が売ってるぞォ！？」

ポトフが目を輝かせながら言った。

「わーホントだー」

それも適当に流すミント。

「ミント！」

「ミント！」

それでも彼らは後ろから何度もミントを呼ぶので、

「ああもう煩いっ！！」

ミントは立ち止まって振り向いて二人を叱った。

「「！　ご、ごめんなさい……」」

ので、二人はしょんぼりと下を向いて彼に謝った。

「……っ」

やりにくい。

非常にやりにくい。

「……箒買ってから行こうよ？」

ので、ミントは己の甘さを恨みながらそう言った。

「「！　はーい♪」」

すると二人はぱあっと顔を明るくし、張り切って箒屋を探し始めた。

「よし、良い子」

己の父性愛を呪うミントであった。

「！　リン、見て！」

「？　何用、ですか、ウララ？」

洋服店で白いワンピースを見ていると、ウララに名前を呼ばれたので、リンはそれを元の場所に戻して彼女の元に移動した。

「ほら、あれ！　ミントとプリンとポトフよね！？」

祝、ポトフ。

彼の名前をちゃんと覚えたウララが言うと、

「……そのよう、ですね」

店員と一緒ににいる彼らを見て、リンはこくりと頷いた。

「かっこいいわよね～、あの二人♪」

「……ウララは面食い、なのですね」

うっとりしているウララを見て、無表情でそんなことを呟くリン。

その後、もう用はないと言うように、リンが先程のワンピースの所に戻ろうとした直後、

ぽわんっ

「「！？」」

店員がミントの肩を軽く叩くと、次の瞬間、彼は可愛らしい服を着てそこに立っていた。

「……すごい、です……」

着替えも魔法で出来てしまうのか、と驚くリンと、

「きゃー！　フリフリでカワイー！！」

オレは男だああ的なことを叫んでいるミントを見て、エキサイトするウララ。

「……まあ、似合ってしまうものは仕方ない、です」

ええ!?　そうだったんですか?!　的なことを店員に言われているミントを見ながらリンが言うと、

「あ、いたいた!　リン、ウララ、こんな所で何してるの?」

もう五時だよ?　と言いながら、アオイが後ろからやって来た。

「……」

「……」

「な、なあに?」

その声にバッと振り向いてじっと見つめてきたリンとウララに、アオイがビクッとしながら尋ねると、

「ねぇ、リン?」

「何、ですか、ウララ?」

「似合っちゃうものは?」

「仕方ない、です」

そう言いながら、じりじりとアオイに迫るリンとウララ。

「り、リン？　ウララ？」

それに合わせるように、一歩ずつ後退りするアオイ。

「うふふ、これを着る、です、アオイ」

「ふふふ、こっちでもいいわよ、アオイ？」

「な、何言ってるの？　それ、どっちも女の子の服だよ？」

やたらフリフリした可愛らしい女の子用の洋服を持って迫る二人の目を、後退りしながら覚まさせようと試みるアオイ。

ゴンッ

「！？」

が、彼はいつの間にか店の角に追い込まれてしまっていた。

「ふふふ、残念ね、アオイ？」

「うふふ、覚悟、です」

にやりと笑うウララとリンに、

「ぼ、僕は男だよお！！」

アオイが涙目で叫ぶと、

「死にたいようだな、貴様ら？」

「「！！」」

彼女たちの後ろから、恐ろしい殺気を含んだ低い声が聞こえてきた。

「ゆ……」

「ゆ……」

「ユウ！！」

ギギギと彼を振り向いた二人の間を走り抜け、ささっとユウの後ろに隠れるアオイ。

アオイが攻撃範囲からいなくなると、ブワッと高まるユウの魔力。

「お、落ち着く、です、ユウ……？」

「そ、そうよ？　それに、此処はお店の中――…」

「《壮麗なる龍はすべてを呑み込む》＋《暗雲の閃光は破滅をもたらす》！！」

ドパアアアアアン！！

ドガアアアアアン！！

リンとウララの説得も虚しく、彼女たちと洋服店の北側の隅っこは、ユウの最大魔法×2によって吹っ飛ばされてしまったとさ。

第３６回　外出日和（後書き）

店員
「ちょ？！　お客さ―…」

ユウ
「これで許せ」

ドサッ

店員
「またのご来店、お待ちしておりまぁす♪」

アオイ
「わあ、ユウってお金持ちなんだね（くすり」

第３７回　飛行日和

「あっはっはっ！　待て待てェ♪」

太陽がさんさんと輝く青い空の下、箒に乗ったポトフは、

「あはははは、捕まえてごら～ん♪」

箒に乗って前方を飛行しているミントを追い掛けていた。
一見、海辺か花畑で妙にスローに追い掛けっこをしているベタなワンシーンを思わせるが、

バビューーーーーーン！！

と、この二人は実際、物凄い速さで追い掛けっこをしていた。

「あっは……は……ちょ、ホントに待って……」

「あはははは、まだまだ飛ばすぜー！！」

バビューーーーーーン！！

バテ気味になっているポトフを置いて、飛ばし屋と化したミントは、更に加速した。

「やー、ミント凄いねー」

「うむ―…わ！？」

その後ろで、彼らと同じく箒に乗って宙に浮いている二人は、ココアとプリン。
ココアが目の上に手をかざしながら言うと、プリンは箒から落下した。

「って、落下したー！？」

ガンガン小さくなっていくミントから目を離したココアは、慌てて地に落ちたプリンの元に移動した。

「だ、大丈夫ー！？」

「……う……うむ……」

ココアが声をかけると、よろよろと起き上がったプリンは、

「ぶう……箒め」

何事もなかったのかのようにスイーッと目の前にやって来て静止した彼の箒を睨みつけた。

「ったく、何やってんだよ枕？」

そこへ、呆れたような表情のポトフがやって来た。

「ヒ―…」

そして、ポトフがプリンの傷口に右手をかざしたところ、

「ヒール」

ぷわ

プリンは自分で自分の傷を回復させた。

「……」

「……ふっ」

恥ずかしい。
非常に恥ずかしい。
そして、あからさまに鼻で笑いやがったその涼しげな美顔が憎たらしい。
ので、

「喧嘩売ってんのか売ってるよな上等だァァァ！！」

ドカアアアアアン！！

ポトフは自問自答した後、プリンに強烈な回し蹴りを見舞わした。

「っ！？　い、いきなり何をするっ？！」

いつもと違って自問自答だった為か、まともにそれを喰らってしまったプリン。

「何されたかも分かんねェのかバーカバーカ！！」

「くっ……上等だあ！！」

ドカアアアアアン！！

そうして、いつものように喧嘩を始めた二人を見ていたココアは、

「あれー？　いつもと台詞が逆だねー？」

とか、呑気な独り言を口にした。

「やー、箒は最高だね！」

ウサギさん寮への廊下を歩きながら、ミントは晴れ晴れとした笑顔でそう言った。

「……箒は嫌いだ」

「あはは……」

「あっはっは！　いやァ、まさかホントに実技が箒だったとはなァ」

彼の隣を歩きながら、何かぼそっと呟いたプリンと、苦笑いするココアと、明るく笑うポトフ。
ちなみに、プリンとポトフは例のごとくボロボロになっている。

「勿論、コーラも最高だけど♪」

「あはは、ミントって凄いんだねー？　あんなに飛ばせるなんてー」

それを気にも止めずにコーラのフタを開けようとしたミントにココアがそう言うと、

「そ……そっかな……？」

無意識にフタから手を離したミントは、ゆっくりと彼女に顔を向けた。
彼は、褒めに弱かった。

「そだよー！　凄かったよー？」

「おう！　あれなら実技は文句なしでミントが一番だぜェ♪」

「うむ。あれだけ速くても箒から落下しないなんて、ミント凄い」

そんな彼に、にこっと笑いながら言う三人。

「え、えへへ―…」

そう言われて、若干顔を赤くしながら嬉しそうにミントが照れ笑いすると、

「ところで、帽子はどうしたのー？」

と、小首を傾げながらココアが尋ねた。

「―…へ？」

その言葉に、パキッと固まったミントは、恐る恐る自分の頭に左手を持っていった。

「ふにゃあああああ？！」

そして叫んだ。

「にゃい！！　帽子が！！　帽子がにゃああい！！」

パニック状態に陥って猫口調になっているミントを、

「そ、そんなに慌てなくても―…」

「にゃんこみたいでカァワイ～♪」

「にゃんにゃん」

「―…ミント、帽子なら他にもいっぱい持ってるでしょー？」

いらない発言をしたポトフとプリンを無視して、ココアが落ち着かせようと試みたところ、

「何言ってるのさ！？　あの帽子は、チロルから貰ったヤツなんだよ？！」

と、髪の毛の赤と緑の分かれ目を両腕で隠しながらミントが言った。

「「！　ミント……！」」

ミントのその言葉を聞いたココアは、

「ぴわわ！　ミント殺されちゃう！」

「……なんかちょっと寂しい」

「なんだかんだ言ってもチロルのこと―…」

またもや余計なことを口にした二人を無視して、

「ヒトから貰ったものは大切にしなきゃでしょ?!」

「―…うん。いいことだけど、それは聞かなかったことにしとくねー?」

感動しかけの時に、ミントに素で一般論を口にされたので、何やら少しがっかりした。

「ああもう！　何処に落としたんだろう!?」

ミントはローブのポケットにコーラをしまうと、

「ごめん、先戻ってて！　オレ、帽子探してくる！」

と言って、再び外へと走っていった。

「……よし。なくした帽子がチロルから貰ったヤツだからミントはあんなに慌てていた、と」

ミントの後ろ姿を見送りながら、ココアは自分の記憶を自分で書き換え、

「なんだかんだ言っても、ミントってチロルのこと好きなんだねー♪」

ということにした。

「ぼ、僕も行く！」

「俺も！！」

「あはは……ホントに仲良しだー……」

「勿論、ココアちゃんもっＶ」

「―…ねー、って、私もー？！」

こうして、四人は仲良く帽子を探し始めたそうな。

第３８回　理不尽日和

「弟子にしてくださいだぁ？」

それは、王都市・シャイアにドラゴン、イヴとドラゴンマスター、フランがやって来た日。

国王、ルゥとの戦いが、茶髪お兄さん、ソラによって強制的に終わらせられた後に現れたミントママ、ジャンヌに、メルヘン信者、フランは平伏していた。

「嫌よ。めんどくせえ」

そんなフランのお願いを、今にも鼻の穴に人さし指を入れそうなほど適当に断るジャンヌ。

「ええ！？　そ、そこをなんとかっ！」

ショックを受けたフランが再び額を地面につけると、

「じゃあ、いいわよ」

ジャンヌはコロッと百八十度意見を変えた。

「考え変わるの早っ？！」

「黒焦げアフロボンバーは黙ってろい」

ジャンヌは黒焦げアフロボンバーになっているミントパパ、シャーンの突っ込みをさらりと流すと、

「てなわけで、もう足を上げんさい」

と、土下座しているフランに言った。

「いや、そこは足じゃなくて頭だろ?!」

「！　はい！」

「って、この子ホントに上げちゃったあ?!」

シャーンの突っ込みも虚しく、フランが言われた通り足を上げると、

『ギャオオオオオ!!』

『ガオオオオオオ!!』

『グオオオオオオオオ……ゴッホゴッホ』

南西から三体のドラゴンが飛んできた。

「「すっげーーー!!」」

それを見て、目をキラッキラに輝かせるソラとルゥ。

「！　ロラン、シンシア、ディアモール！」

聞き覚えのあるその鳴き声に、フランが振り向くと、

バサバサ

ドスン！

三体のドラゴンは、イヴの隣に着地した。

タッ

飛んできたドラゴンのうちの一体、シンシアから、激しくウエーブがかかったピンク色の髪の少女が飛び降りて着地した。

「まろろ♪　ニーハオ、フラン！　こんな所で何倒立してるまろ？」

水玉模様のトンガリ帽子を被り、顔は真っ白で、左目の周りに大きなオレンジ色の星がペイントしてあり、鼻の先に赤い球体をつけているという、道化師のような少女が挨拶すると、

「！　マロ様！」

倒立しているフランは、驚いたように彼女の名前を口にした。

「メルヘンの女神様、ジャンヌ様に弟子入りのお願いをしていました」

その後、きちんと質問に答えるフラン。

「まろ！　面白そうまろ！　まろも弟子入りするまろ！」

すると、少女、マロは、大きな真紅の瞳をキラッキラに輝かせてジャンヌにそう言った。

「ええ！？」

「いいわよ」

「ええ！？」

「やったまろー！」

驚いているフランを無視してさらりとオッケーを出すジャンヌと、
ぴょんぴょん跳ねて喜ぶマロ。
こうして、シャイアの前で倒立している人物が二人になった。

（（うわあ……））

それを見て、げんなりするソラとルゥとシャーン。

「あんたらアホの子？　何倒立してんの？」

「「ええ！？」」

馬鹿を見るような目で言ってきたジャンヌにショックを受けるフランとマロ。

（（理不尽……））

彼らを気の毒に思う三人。

「じゃ、早速修業開始よ。まずは、そうね……」

倒立をやめてちゃんと立った二人に、ジャンヌは腕組をしながら、

「溶けなさい？」

と、言った。

「「は、はい？？」」

（（いきなりレベルたけええ？！））

彼女の言葉に、目が点になるフランとマロと、心の中で突っ込みを入れるソラとルゥとシャーンであった。

「まろ……まろ……」

「はあ……はあ……」

シャイア城の近くにある赤い屋根の家の庭で、マロとフランは地面にへたばっていた。

「まろ……難しいまろ……溶解魔法……まろ」

「はあ……ええ……はあ、ですが、メルヘンは溶けるものだとジャンヌ様が……はあ」

息を切らしながらも、二人はぐぐぐっと立ち上がり、再び溶解魔法の練習を始めた。

「アイ」

「アム」

「「メルヘン！！」」

これが練習時の掛け声。
正味な話、近付きたくない。

「ゲヘヘ♪　メクソうみゃー」

近所でそんな噂がたっているにも関わらず、その家の縁側で、ジャンヌはメロンクリームソーダ、略してメクソを美味しそうにいただいていた。

「こんにゃちはー、郵便にゃー」

「お？」

すると、郵便屋さんの声がしたので、ジャンヌはメロンクリームソーダを置いてそちらに移動した。

「にゃっほー♪」

「おー、おひさ。毛玉」

「にゃー！　だから毛玉じゃなくてアミュレリス＝ヴァレンタイン、愛称はアミュにゃー！」

「じゃあ、こそドロ」

「すっごい不名誉なニックネーム?!　アミュって言ってるにゃー!!」

ジャンヌに変なニックネームで呼ばた頭に猫耳が生えている郵便屋さん、アミュは、彼女に思い切り突っ込みを入れた。

「で、なんの用よ?」

「だから郵便にゃーって言ったにゃー?!」

「にゃーにゃーうるへえ」

「これは昔からの口癖にゃー!!　だから、喋らせたそっちが悪いにゃー!!」

「ああ?　こっちが悪いってのか猫テメェコノヤロー?」

「当たり前にゃー!!」

「ごめりんこ」

「分かればいいにゃ」

アミュはそう言ってジャンヌに責任転換しながら、彼女に郵便物を渡した。

「あら、偉いわね。はい、カツオ」

それを受け取ると、お手伝いをした子どもにお菓子をあげるようにアミュにカツオを差し出すジャンヌ。

「……バカにされてるとは思うけど、ありがたくいただくにゃ」

カツオに負けたアミュは、別れの挨拶をした後、複雑な表情で去っていった。

「何かしら？」

アミュがカツオをくわえて去っていった後、

「アイ」

「アム」

「「メルヘン！！」」

「うるへえ黙れ」

「「ええ！？」」

煩い二人を黙らせてから、ジャンヌは封筒を開けた。

「……授業参観？」

中に入っていたのは、国立魔法学校からの、授業参観のお知らせの手紙。

「……ゲヘヘ♪」

それを見て、ジャンヌはゲヘヘと笑った後、

「何サボってんの？　ちゃんと掛け声出しなさいよ」

と言った。

「「ええ！？」」

理不尽な彼女に、再びショックを受けるフランとマロであった。

第３９回　水溜まり日和

青い青い空の下。
緑の草原を走る土色の一本道の上を、ミントは独り歩いていた。

「？」

そのまま少しの間歩いていくと、ミントの前方に突然水溜まりが現れた。
楕円形のそれは、至って普通の水溜まり。
透明な水は、日の光を受けてきらきらと輝き、静かな水面にミントを映す。

サアア……

ミントがなんとなく水溜まりを眺めていると、ふいに優しい風が吹き抜けていった。
それによって、静止していた水面が弱く波打つ。

「……？」

と、思いきや、水溜まりは突然緑色に濁り出し、ブクブクと音を立てて泡立ち始めた。

「ま、まさかこれは―…」

嫌な予感を感じ取ったミントが口を開くや否や、その液体は、

『ウェルカ無抵抗♪』

と言って、彼に襲いかかってきた。

「うわあああああ?!」

「!?」

ガバーッ!!

……という、意味不明な夢を、中庭の木の下で見たミントは、飛び起きると同時に目の前にいた人物に抱きついた。

「? ガバーッ?」

疑問符を浮かべつつ、先程の効果音をリピートして、一時冷静になるミント。

「みんとん、大胆……」

すると、彼に抱きつかれた人物、死神が、頬に朱色を走らせながらそう言った。

「うわあ!? わ、ワタル?! いきなり飛び付いちゃってごめんね!? ってか何さそのバドミントンの略みたいなニックネームは?!」

無意識に抱きついてしまったことに気が付いたミントは、慌てて死神から離れた後、謝り突っ込みをかました。

「フッフッフッ。可愛いだろ? みーんとん♪」

「……いや、可愛いだろって言われても―…」

フッフッフッと不敵に笑う死神に、ミントが若干困っていると、

ドサッ……

という、背後で何かが落下した音がした。

「？」

それを不思議に思った次の瞬間、

「――！」

ミントはハッと目を見開いた。

いつの間に眠りに落ちてしまったのかは分からないが、此処は中庭で、不特定多数の生徒が普通に通る。

そして、自分は先程死神に抱きついてしまった。

すると、背後で何かが落下した音がした。

（こ……このベタな展開はまさか……）

と思いながら、ミントがギギギと振り向くと、

「ひ、酷い……っ！！　俺とはただの遊びだったんだなァ？！」

予想通りの台詞が飛んできた。

「ご、誤解だよ、チロ―…って、いや、なんでここでポトフなのさ

?！　これじゃあどっちにしたって誤解を生む展開になっちゃうじゃんか!?　って、言ってるそばから何泣きながら走り去ってんのさポトフううううう?!」

が、そこに立っていた人物は予想外の人物だったようで。
ミントは今の状況に対して素早く三連突っ込みを決めた。

「酷いわ、みんとん!!　オレ様というものがありながら、他にも男がいたのね!?」

ポトフが走り去っていったと同時に、この展開にするりとのってみせた死神と、

「だから違―…あ、やっぱり修羅場シーンだと思った?　って、話をややこしくするなあああああ!!」

寝起きなのに、随分と元気なミントであった。

「♪」

『む～♪』

「……はわー……」

その頃、プリンとむぅちゃんとココアは、学校の廊下を歩いていた。

「……というのが”風の歌”だ」

流れる風のように美しい低音の歌の一節を歌い終わると、プリンはココアに顔を向けた。

「やー、凄い凄ーい！！　プリンってホントに歌上手いんだねー！？」

『む～！』

そんな彼に拍手を贈るココアと、彼女の頭の上で短い前足を叩くむぅちゃん。

「……照れる」

ココアとむぅちゃんに褒められた為、持っていた枕で顔を隠すプリン。

なかなかのシャイボーイである。

――しかしそれは、自分の視界を遮る行為。

「っラアアァァァ！！」

ドカアアアアアアン！！

「ぴぐわ？！」

「って、プリンー！？」

『む？』

よって、プリンの腰にポトフの飛び蹴りがクリーンヒットした。

「ちょ、ちょっと、いきなり何飛び蹴ってるのよポトフー？！」

『む～』

ココアが謎の動詞を口にすると、むぅちゃんは彼女の頭から飛び降りた。

「くっ……消えたいのか、貴様っ？！」

いきなり飛び蹴ってきたポトフをキッと睨みつけるプリン。

「うるせェ！！　喧嘩売るぞォ！！」

何故か物凄く機嫌が悪いポトフ。

「押し売りは犯罪だっ！」

そうして、例のごとくズカンバコーンと喧嘩が始まった。

「もー……。ん？」

それに呆れていると、ココアは、むぅちゃんが廊下をちょこちょこと歩いていることに気が付いた。

ちょこちょこちょこちょこ

「やー、カワイー…」

言っている途中で、むぅちゃんが水溜まりの前で止まったことに気付き、

「だ、ダメだよー！！」

『ひゅむう！？』

両手で持ち上げて、水溜まりから遠ざけた。

『む～！　む～！』

「水溜まりの水なんか飲んじゃダメだよー？」

手の中でじたばたと暴れるむぅちゃんにそう言うと、

「って、なんでこんなとこに水溜まりがー！？」

ココアは学校の廊下に水溜まりがある不思議に気が付いた。

「？」

すると、

ブクブクブクブクブクブク

水溜まりが突然緑色に濁り出し、ブクブクと音を立てて泡立ち始めた。

「っきゃあああああ?!」

それを見て、思わず飛び退くココア。

「「っ!?　ココア?!」ちゃん?!」

戦場の真ん中にココアが飛び込んできたので、ビタッと動きを止めるプリンとポトフ。

その次の瞬間、

ぶくぶくーっ

と、水溜まりから人が発生した。

「『?!』」

固。

「ゲヘヘ♪　とうちゃーく!」

びっくりしすぎて固まってしまった三人と一匹を無視して、水溜まりから現れた人物、ジャンヌは、取り敢えずその場で倒立した。

第４０回　一撃必殺日和

「そう言えば、どうしてワタルが此処に？」

ポトフの落し物を拾いながら、ミントが小首を傾げつつ尋ねると、

「フッフッフッ。学校に行くって言ったからついてきたんだ」

死神は不敵に笑った後、さらりと答えた。

「？　誰にさ？」

再び疑問符を浮かべるミント。

「みんとんのママンに」

ガッシャーン

死神の答えを聞いた途端、再び落下するポトフの落し物。

「……は？」

びっくりしつつも、喉の奥から声を絞り出すミント。

「ん？　もしかして、みんとんって”ママ”って呼ぶのありえないタイプ？」

そんな彼に、的外れな質問をする死神。

「ワタル……ヤツは……今……何処に？」

震える声でゆっくりと言葉を紡ぐミント。

「フッフッフッ。それが、オレ様としたことが不覚にも迷子様にてしまってな。で、困ってラジオ体操してたら偶然みんとんを見付けて――…」

ぶわんっ

「……古より来る琥珀――σ（シグマ）！！」

死神の解答途中で、ミントは意味不明な彼に突っ込みを入れることなく琥珀色に輝く魔法陣を出現させ、

『呼ばれて飛び出てσ参上～なんだなぁ～♪』

鷹の頭と翼を持った獅子、グリフォンの”σ”を召喚した。

「ヤツの所へ！！」

『りょ～おかい！　オイラにしっかり捕まっててください！　なんだなぁ～♪』

バビューーーーーン！！

ミントが命令を言いながらσの背中に飛び乗ると同時に、彼とσは風のように去っていった。

「ふしぎ動物……！」

取り残された死神は、σの登場に目を輝かせていた。

「あの……いつまで倒立してるんですか？」

頭に血が登りますよ？　と、ポトフが言うと、

「この世界に光がある限りよ！！」

ジャンヌはなんかかっこいい返事をした。

「は、はァ……」

どう対処していいのか困るポトフ。

彼は左人さし指で弱く頬を掻きながら、ちらりとプリンの方を見た。

ココアとむぅちゃんも、困った顔でプリンに目を向けている。

この場から何処か平安な場所に瞬間移動（テレポート）させて。

そんな言葉が、二人と一匹の顔に、ありありと書かれていた。

「テレ―…」

そのＳＯＳサインを読み取ったプリンが、瞬間移動魔法、テレポートを唱えようとしたところ、

『とうちゃ～く！　なんだな―…』

「―…咲き誇れ――曼珠沙華（まんじゅしゃげ）！！」

ヒュバアアアアン！！

窓の外からσが姿を現し、その背中に乗っていたミントが、いきなり彼の中での最強の技、曼珠沙華をジャンヌにお見舞いした。

「『！？』」

ありえない速さで繰り出される鞭にありえない回数打たれたジャンヌが吹っ飛んで壁に激突したのを見て、目を見開き言葉を失うプリンとポトフとココアとむぅちゃんとσ。

（な……何が起こったのー？！）

（む～！？　む～！？）

（こ、この技が出るってことは……）

（……ミント、キレてる）

（……ご主人様、怖いんだなぁ～……）

巻き起こった爆煙と、薔薇の鞭と食人植物の鞭を持ったミントの背

中を交互に見ながら、ただただ震える三人と二匹。

「……何しに来た？」

いつもは高めな彼の声が、今は何故か妙に低い。

「……じゅっ……授業参観―…」

「あ？」

ズタボロになっているジャンヌの発言を遮るミント。

「……と、保護者面談をしに来たのよ……ごふっ」

ジャンヌはそう言うと、ごふっと気を失った。

「……」

「……」

「……」

「……」

『……』

『……』

沈黙。

「今日って授業参観と保護者面談があったんだね？　みんな、知ってた？」

ぱっと振り向いて、ガクガクブルブル震えている三人と二匹に、ミントはいつもの高めの声で話しかけた。

「へ！？　あ、ううん！！　わ、私も知らなかったよー！！」

「う、うむ！！　ぼ、僕も！！」

「あ、あっはっはっ！！　となれば、早速ココアちゃんのお父様にご挨拶しなきゃだなァ！！」

「！？　な、何言ってるのよー？！」

『む、む～……♪』

『ち、ちっちゃくて可愛いんだなぁ～……♪』

そんなミントに、三人と二匹は極力通常通りにふるまった。

「「……」」

彼らが何事もなかったかのように去っていった後、

「あ……あのジャンヌ様をたった一撃で倒すだなんて……」

「す、凄すぎまろ……」

ジャンヌの弟子であるフランとマロは言葉を失い、

「わあ、ミントさんって強いんだね」

彼女についてきたアオイはくすりと微笑んだ。

「私はそこで笑うあんたが怖いわ」

「……です」

そんな彼に恐怖を覚えるウララとリンと、

「フッフッフッ。アオイかわいー☆」

「《暗雲の閃光は破滅をもたらす》」

アオイにとって危険な発言とユウに判断された為、彼にぶっ飛ばされる死神であった。

第４１回　中庭日和（前書き）

後書きにて、お知らせを追加させていただきました。

第４１回　中庭日和

「えェ？　来てない？」

保護者面談の為、授業は午前中で終了した。
ので、中庭の木の下に座ってココアと話していたポトフは、彼女の言葉を聞き返した。

「う、うん。私の親は何処見てもいなかったよー？」

「そっか。残念……」

「……」

残念そうに若干うつ向いた彼を見て、

「……ほ、本気で挨拶する気だったのー？」

ココアは控え目に尋ねた。

「……ダメ？」

すると、顔を上げたポトフに質問で返された。

「え？！　あ、い、いや……ダメ……ってことは……ない……ような……なんてー…」

両手を振ったり止めたりしながら、しどろもどろに答えるココア。

「ホント？！」

それを聞いたポトフは、ぱあっと顔を明るくして聞き返した。

「ええ！？　あ、い、いやいや、さっ……も？！」

顔を赤くして、更に挙動不審になるココア。

「あっは♪　ココアちゃんカワイーV」

そんな彼女を、ぎゅっと抱き締めるポトフ。

「ひあああっ？！」

彼の行動に、顔が限界まで赤くなるココア。

「あっはっはっ！　もォ、そんなに可愛いと――」

彼女の気の抜けた悲鳴のようなものを聞き、ポトフは面白そうに笑うと、

「――食べちゃうぞ？」

ココアの真っ赤な耳元で、お得意の甘ったるい声で囁いた。

ボン

「ボン？」

同時に、ココアが爆発した。

「え、えええェ！？　こ、ココアちゃん？！」

本当に爆発してしまったココアに焦るポトフ。

「プリッツー、ポッティーがココアのマーチを食べちゃうって言ってるー」

そんな彼を指さしながら、死神はプリンのローブをくいくいと引っ張り、どこか危なっかしいニックネームを用いてポトフの発言を彼に報告した。

「うむ、そうか。ふふふ、可愛い」

『擽ったいんだなぁ～♪』

それをさらりと流した動物好きなプリンは、σの頭を撫でている。

「プリッツー」

「む？　なんだ？」

「オレ様もやりたーい」

「うむ、そうか」

死神の希望を聞き、プリンが右にずれると、

「おお、もさもさ！」

「ふふふ、可愛い」

『擽ったいんだなぁ～♪』

二人は仲良くσの頭を撫で始めた。

「うーん、いつ戻せばいいんだろ……」

そんな彼らを見て、ミントはσを戻すタイミングを見い出せずに困っていた。

「さぁな」

その隣で、かなり適当な返事をしながらきゅうりをかじるユウ。

「……」

「……？」

「……」

「……」

じっとこちらに目を向けてきたミントに、彼の無言の訴えを読み取ったユウは、

「……口で言え」

と、一本のきゅうりを投げつけた。

「わっ！！　よく分かったね！？　ありがとう、ユウ！！」

投げつけられたきゅうりをパシッと器用に受け取り、彼にお礼を言うミント。

「……そりゃ、あれだけ凝視してたらな」

そんな彼に、無表情のままそっけなく答えるユウ。

「いやぁ、だってユウがすっごく美味しそうな音立てて食べるから、なんかオレまで食べたくなっちゃってさぁ！！」

「……。美味いか？」

「うん！！」

そう言って、嬉しそうにきゅうりを食べ始めたミントを見て、ユウはふっと微笑んだ。

「ウララ、今は機嫌がいいよう、です」

「え、ホント！？　ゆ、ユウ、私にも―…」

「死ね」

が、それはウララによって無表情に戻された。

「な……なんですってえ～？！」

「ふむ……やはり、ユウは可愛い男の子好き……？」

ミントに比べて激しすぎる対応の差に憤慨するウララと、何やら危険な発言をするリン。

「そーっとそーっと……」

『む～……！』

彼女たちの隣に座って、至極真剣な表情でジェンガ中のアオイは、むぅちゃんに応援されていた。

「わあ、やった！　次はウララの番だよ？」

積まれた塔を倒すことなく無事に自分の番を終えたアオイは、くすりと微笑んでウララに顔を向けた。

「へ？　あ……ああ、そうね」

我に返ったウララが、不安定な塔に手を伸ばしたところ、

「……ウララ、もしかしたら、ユウは好きな子に冷たく当たってしまうタイプなのかもしれません、です」

彼女にリンがこそっと耳打ちした。

「マジで？！」

ガッシャーン！！

よって、手元が狂ってしまったウララは、不安定な塔を派手に崩壊

させてしまった。

「あ」

それに気が付いた頃には、時既に遅し。

「わあ、今回もウララの負け～」

『む～♪』

「罰ゲーム、です。リンたちに飲み物を買ってきてください、です」

あ、と口を開けたウララを見て、くすくすと笑うアオイとむぅちゃんと、彼女に無表情で罰ゲームを言い渡すリン。

「な、何言ってるのよ!?　今のはリンのせいじゃない?!」

そんな彼女をズビシッと指さしながら言うウララ。

「なんのこと、ですか?」

しれっとした言葉を返すリン。

「なんのことって、あんた―…」

「ウララ、人のせいにするのはよくないよ?」

『む!』

が、アオイに注意された上に、むぅちゃんに、め!　ならぬ、む!

と怒られた為、

「～っ！　あーもう、分かったわよ買ってくればいいんでしょ？！」

ウララはそう言って立ち上がった。

「リン、イチゴミルクがいい、です」

「ええと、僕はお茶がいいな」

『むむ、むむむ～！』

「オレ様ホットチョコー」

「あ、じゃあ、オレはコーラ」

「……きゅうり」

「僕はプリンだ」

『オイラはシマウマが食べたいんだなぁ～♪』

「って、何ちゃっかり便乗してんのよ？！　しかも後半飲み物じゃねぇし！？」

「はへふひほ～……」

「ココアちゃん！？　ココアちゃん？！」

そんなこんなで、中庭で過ごす時間はのんびりと過ぎていくのであ

った。

第４１回　中庭日和（後書き）

皆様こんにちは。
びよってますか？

ミント
「変な動詞をつくるな」

学校日和２なだけに。

「いいから先進めなさい」

はい。すみません。
この度、皆様にお知らせがありまして、後書きを付け足させていただきました。お知らせ。それは――

「変な作者の都合により、更新が更に遅く、更に不定期に、更に意味不明になってしまうということです」

……。

はい。その通りです。ごめんなさい。
学校日和２がたまたま目に入ってしまわれた方、操作ミスでここにいらしてしまった方、前作から読んでくださっていらっしゃる方、鼻で笑ってくださった方、恐れ多くも評価・感想をくださった方々……誠に申し訳ございません。
Ｂｕｔ。
これからも見捨てずにいてくださるならば、私めは至極嬉しいです。

「本当に駄目作者でごめんなさい。オレがきっちりシメ――ごほん。

では、これで、申し訳なさすぎて布団に潜ってしまったネガティブ作者からのお知らせを終りにします」

……。

はい。以上、変な駄目ネガティブ作者からのお知らせでした。

第４２回　ぶっ飛日和

「！！　デスティニー！……！！」

朝っぱらから運命を感じちゃった彼女、チロルは、お喋りしていた友達を置いて、一目散に走り出した。

「ミントきゅ～～～んＶ」

ミントの元に。

「！？　ち、チロ―…うわあ？！」

ドシーン

もう少しで愛しのコーラが手に入ると油断していたのか、食堂で並んでいたミントは、飛び付いてきたチロルと共に倒れるかたちになってしまった。

「あうち……ごめんね、ミントきゅ―…」

上体を起こしながらミントに謝っている途中で、

「お、重―…」

「やぁん！　ミントきゅんをプッシュダウンしちゃうだなんて、アタイったらなんて大胆なの～～～っ！」

彼の聞き捨てならない言葉を掻き消すように、頬を赤く染めてエキ

サイトした。

「い……いや……だから重い――…」

「……あンＶ　ミントきゅん、アタイ、ゾクゾクしてきちゃっ――…」

「って、あああああ?!」

お色気たっぷりのチロルの言葉を無視し、彼女を自分の上から退かしつつガバッと起き上がったミントは、

「列詰まっちゃったじゃん!!　また最初から並ぶしかないじゃんかもーチロルのバカ!!」

いつの間にか自分の並んでいたところを詰められてしまい、彼女に怒りの言葉をぶつけた。

「え……？　”バカ”？」

目を見開き、彼の言葉を聞き返すチロル。

「バカだよバカ！　チロルが来なければコーラまであと二人だったのに、キミのせいであと三十八人になっちゃったんだよ!?　ああもう、最低最悪ありえない!!」

彼女に遠慮なく怒鳴り散らすミント。

「そ、それでそれでっ？」

どこか嬉しそうにミントに身を近付けるチロル。

「あああもう煩いなあ！！　どっか行っちゃえよバカチロルーーーっ！！」

バッシーン！！

そんなチロルを、ミントは薔薇の鞭でぶっ飛ばした。

「っきゃはーV」

……。

本当にどこかいっちゃっているチロルであった。

キーンコーンかーンコーン

「ポトフポトフ！」

「？　なんだァ？」

生物学の授業が終り、席から立ち上がったところをミントに呼ばれ、ポトフは彼の元へ移動した。

「これ見て！」

「？」

ミントが指さした、分厚い教科書の一ページを見てみると、

「〝犬科の混合種は、しばしば犬のような行動を取ることがある〟」

と、書かれていた。

「……」

「……」

間。

「ふっざけんなァァ！！」

「プリンはこれを知ってたんだね……」

数秒の間を置いて、ポトフは頭を抱えて叫び、ミントは顎に手を当ててしみじみと言った。

「犬科って……例え犬科だとしても俺は狼だぞォ？！　狼と犬は違うよなァ、ミントォ！？」

髪の毛をぐしゃぐしゃにしたまま、必死に同意を求めるポトフ。

「え？　うーん……」

ミントは顎に手を当てたまま少し考え、

「取ってこーい！」

と言って、消しゴムを遠くに投げた。

ポーン

「わァい♪」

ポトフはそれを追い掛けて見事にキャッチし、再びミントの元へ戻ってきた。

「あはははは♪　よーしよしよし、良い子だね～」

面白そうに笑いながら、わしゃわしゃとポトフの頭を撫でてやるミント。

「あっはっはっ！　照れるぜェ、って、ミーント？」

にこやかに怒るポトフ。

「ごめんってば」

両手を挙げて透かさず謝るミント。

「……なんだよなんだよ」

「だからごめんって。うーん、でも、混合種にこんな面白―…困った秘密があったなんてねぇ？」

すねて座り込んでしまったポトフの頭を再び撫でながら、ミントはしみじみとそう言った。

「……。この手を払えないのも犬だから？」

嬉しいような悲しいような複雑な表情をするポトフ。

「何してるのー？　早くお昼にしようよー」

「よー」

「「！」」

すると、ココアとプリンが教室のドアからひょこっと顔を出したので、

「？！」

「！！」

ポトフは口の前で人さし指を立て、ミントはそれにこくこくと頷いた。

「……待たせてごめんね、ココアちゃん」

ミントが頷いたのを確認すると、ポトフはサラッと髪を掻き上げながら彼女の元まで移動した。

「出た。爽やかモード」

とかミントが呟くと、

とととと

空気を読んだのか、プリンがこちらにやって来た。

「ミント、何してたの？」

ぴこっと小首を傾げてこそっと質問するプリン。

「え？　えっと、実験？」

そんな彼に、小首を傾げ返すミント。

「実験？」

反対側に小首を傾げるプリン。

「べ、別に待ってなんかないわよー！」

すると、ココアの声が聞こえてきた。

「「……」」

小首傾げ大会を中止し、無言で彼女たちに目を向けるミントとプリン。

「ええェ？！　さっき早くお昼にしようって言ったのに！？」

「言ってないわよー！」

聞き返してきたポトフに、ココアが透かさず言い返すと、

「……そぉんな嘘を言う口は、塞いじゃうぞ？」

彼女の顎に右手を添えて、彼は魅惑的に微笑んだ。

「……ひ……ひと……人前で何変なこと言ってるのよー？！」

一瞬にして顔が真っ赤になったココアが声を絞り出すと、

「じゃァ、人前じゃなかったら、何してもいいのかな？」

ポトフは妖艶な笑みを浮かべてそう言った。

「……け……」

「け？」

弱々しい声を、余裕げに微笑むポトフが聞き返すと、

「ケダモノーーーっ！！」

バッシーン！！

彼はココアの強烈な平手打ちによってぶっ飛ばされ、彼女は風のように走り去っていった。

ガラガラガッシャーン

「ケダモノだって」

「まあ、狼男だからな」

「……動物虐待……」

飛んできた彼をミントとプリンは無表情で見下ろし、ポトフはうつ伏せのまま何か呟いた。

第４２回　ぶっ飛日和（後書き）

皆様こんにちは！
びよってますか?！

プリン
「……学校のテストと塾のテストと受験勉強はどうした?」

いやぁ、たまには現実逃避もしたくなりますじゃん?

「……。これからも、作者の不定期な現実逃避に付き合ってくれると嬉しいぞ」

以上、意志薄弱な作者でした！

「うむ。ばいばい」

無表情でバイバイした?！

第４３回　被虐日和

「暇だわ」

「暇、ですね」

野原に座って青い空を見上げながら、ウララとリンが退屈そうに呟いた。

「……くう……」

「……」

そこから少し離れた所で体を丸くして眠っているアオイの隣で、ユウはいつものようにきゅうりをかじっている。

「にしても、凄いわね、あの魔法学校」

「はい、どこかで見たことがあるような気がしないでもない、ですが、お城のよう、です」

「あー、分かる分かる。私もどっかで見たことあるような気がするのよね～。何処で見たのかしら？」

「……よく分からない、ですが、何故か箒に乗って空を飛ぶ眼鏡少年が連想出来ます、です」

「あー、それも分かる。それで、なんか頭のいい金髪の女の子とノッポな赤毛の男の子が―…」

などと、空から目を離して国立魔法学校にそれを向けたウララとリンが、非常に危険な会話をしていると、

「あれ？　ウララにリンにユウにアオイ、こんな所で何してるの？」

という、聞き覚えのある、高めの少年の声が空から降ってきた。

「！　ミン―…って、箒に乗って空を飛んでるううう？！」

その声がした方へ顔を向けたウララは、箒に乗って宙に浮いているミントを見て驚いた。

「？　飛んでるけど？」

その反応に、不思議そうに小首を傾げるミント。

「ほ……本物の魔法使いだわ、リン」

「は、はい、です……」

目の前にいる魔法使いを見て、今更な反応を示すウララとリン。

「えっと、何してるの？」

彼女たちの反応を不思議に思ったが、まあいいか、と箒から降りたミントは話題を元に戻した。

「へ？　あ、ああ、暇してるのよ」

その質問に、我に返ったウララが答えた。

「わあ、じゃあ、みんなも入ろうよ！」

すると、ミントがぱあっと顔を明るくして言った。

「？　何に、ですか？」

リンが小首を傾げて尋ねると、

「箒鬼ごっこ」

ミントはさらりとそう答えた。

「リンたち、飛べない、です」

さらりと返すリン。

「え！？　そうなの？！」

異世界の人は箒に乗って空を飛べないということを初めて知ったミント。

「うーん、じゃあ、どうしよっか？」

その後、ミントは顎に左手を当て、うーん、と首を捻り出した。

「良い人だわね、カワイイし」

「はい、です」

暇な自分たちの為に首を捻っている彼を見て、ウララとリンが何かボソっと呟くと、

「や……やっと追い付いたぜェ……」

「……もーっ……ミント速すぎだよー？」

「ぷ、わ、ぴわわ！？」

アオイとユウの頭上から、ポトフとココアの声と、プリンが降ってきた。

「……《天空をめぐる無形の刃》」

ビュワ！！

「ぴわわわわわわ？！」

降ってきたプリンに向け、風魔法を発動させるユウ。

よって、プリンは彼らの上に落下することなく、野原の上に落下した。

「……ぷゆゆう……」

「……くう……」

ダウンしたプリンと寝ているアオイをそのままに、ミントは、やって来たポトフとココアに状況を説明した。

「じゃー、かくれんぼしようよー！」

すると、即刻決まった。

「ココアちゃんにさんせェ～♪」

「うん、それなら箒使わないしね！」

「わっ！　かくれんぼだって、リン！」

「懐かしい、です」

「……いくつだお前ら？」

一人何か乗り気ではない声がした気がしたが、八人は早速かくれんぼを始めるのであった。

「九十九、ひゃーく！」

百まで数え終わったミントが目を開けると、

「お疲れ様です、ミントさん」

彼と同じく鬼になったアオイが言った。

「もう、〝です〟とか〝さん〟とかいらないよ？」

そんな彼に、ミントが腰に手を当てながら言うと、

「え？　……あ、はい―…うん、分かった。ミント」

アオイはこくりと頷き、言葉遣いを訂正した。

「よし！　探すよ、アオイ！」

「うん！」

そう言ってミントが走り出すと、アオイもくすりと笑って走り出した。

「プリンってワタルと同じで消えられるのね？」

「そだよー。プリンはテレポートが得意なんだよー」

「……消えるのは結構、ですが、目の前で消えられるのは心臓に悪い、です」

「ごめん」

「「？！」」

ウララとココアとリンの三人が、隠れる場所を探しながらそんな会話をしていたら、その隣にプリンが突然現れた。

「ちょ、驚かせないでよ、プリンー？」

「む。ごめん」

ココアに言われて再び謝るプリン。

「で、どうして戻って来たのー？」

「僕が隠れようとした所に馬鹿犬が走ってきたから戻ってきた」

「あは、流石双子ー♪」

「ふ、双子って言うな！」

「ポトフと双子は嫌なのー？」

「ヤー！」

「……何故枕？」

「謎、です」

ココアと会話しているプリンが持っている枕に、ウララとリンが疑問符を浮かべていると、

カリッ

という、何かをかじったような音が、ごつごつした岩だらけの斜面の下の方から聞こえてきた。

「「……」」

無言でそちらに目を向ける四人。

次いで、アイコンタクトするココアとリン。

「かじった音がした」

「……明らかにユウだわね？」

「ね」

「ね、です」

「……？　何ニヤニヤして―…」

実際にニヤニヤしているのはココアだけなのだが、無表情ながらも楽しそうなリンにも理由を尋ねると、

「「行ってこーい！」、です」

ドン！

「きゃあ?!」

二人はウララの背中をドンと押した。

「ぴわわ?!　ウララが転がり落ちた!?」

「いーの！　ほら、行くよー?」

「い、いいのか?!」

「プリン、気にしなーい気にしない、です」

ガラガラズガドシャーン！

「……どんな登場の仕方だ？」

岩だらけの斜面を派手に転がって登場してきたウララに、さらりと突っ込みを入れるユウ。

「あ……あんのヤローども……！！」

自分を突き落としたこととユウと一緒にさせたことに対して憤り、これが終わったらココアとリンにボウガン喰らわしてやる、とか思うウララ。

「……って言うか、なんでこんな鬼の近くに隠れてるのよ？」

取り敢えず起き上がり、服についた汚れを叩き落としながらウララが尋ねると、

「めんどい」

大きな岩に寄りかかっているユウは、きゅうりをかじりながら簡潔に答えた。

「めんどい……って、かくれんぼが？」

「お前の質問に答えることが」

「あんたねぇ、かくれんぼを笑う者はかくれんぼに泣―…って」

ワンテンポ遅れて、彼が言ったことに気付くウララ。

「！　……」

その時、ユウは何かを感じ取り、

「んだとテメ―…」

「黙れ。見付かるぞ」

怒鳴り声をあげようとしたウララを黙らせた。

「ふ、ぐがあ……っ？！」

彼女の首を、両腕で力いっぱい絞め上げて。

「？　どうしたの、ミント？」

「なんかさっき声が聞こえなかった？」

すると、上の方からミントとアオイの声が聞こえてきた。

「……！！　……！！」

黙る！！　黙るから離して！！　と、訴えようにも声が出ないウララは、首を絞められて苦しいのやら、この密着状態が恥ずかしいのやらで、顔が真っ赤になっている。

「……気のせいかな？」

という声が聞こえ、足音が十分に遠ざかっていったところで、

「……行ったな」

パッ

「ガハゴホゲホゴホッ！」

ユウはパッと腕を離して、ウララはその場に崩れ落ちた。

「ぁ……あんたねぇっ！　な……何もチョークスリーパーで……っ黙らせることないでしょ……っ？！」

空気をたくさん吸った後、ウララがバッとユウに顔を向けると、

「……苦しかったか？」

ウララの前にしゃがんだ彼はふっと微笑み、彼女の頭に右手を乗せた。

「……あ……あああ当たり前でしょう？！」

バフッと赤くなった顔をそのままに、ウララが目の前にいるユウにそう言うと、

「じゃあ、次は五分に挑戦してみような？」

彼は彼女の頭を撫でながら麗しい笑顔でそう言った。

（殺サレル）

そんな彼を目の前に、いろんな意味で殺サレルと思ったウララは、砂煙を上げて脱兎のごとく逃げ出した。

「あ、ウララだ」

「ウララ、自分から出てきちゃダメだよ?」

よって、鬼に見付かってしまった上に注意されてしまったウララであった。

第４３回　被虐日和（後書き）

皆様こんにちは。

ココア

「びよってますかー？　って、コレいい加減しつこいと思うよー？」

大丈夫です。薄々気付いてます。

……こほん。本当に見捨てないでくださった男前な、あるいは女前な方々、私、めろんは、そんなステキな貴方様方にめろんめろんでございます。

「それ詰まんないと思うよー？」

大丈夫です。薄々気付いてます。

……こほん。ではでは、まだまだ不定期更新が続きますが、これからも学校日和２にお付き合いなさってくださいますと、めろんは弾けます。

「意味不明な作者ですが、これからもどうぞよろしくお願い致しますー」

はい。どうぞよろしくお願い致します。

「では、また次回ー！」

……お会いできますよね？

「ネガティブでシメちゃったー？！」

第４４回　びよクエ日和（前書き）

後書きにて、お知らせがございます。ちなみに、サブタイは学校日和２クエスト、略して”びよクエ”です↑

第４４回　びよクエ日和

時は夕方、世は異世界。
国立魔法学校、一階廊下の最深部にある北向の薄暗い教室にて、ピリピリとした空気が漂っていた。

「……この毒の名称はなんだ、ヴァレンタイン？」

「ひ、ヒメラル……？」

「あ？」

「ひにゃ！？　ご、ごめんなさいっ！！」

理由は、此処が魔物学の教室で、今は魔物学の授業中だから。
魔物学を担当している銀髪長身の彼、セル先生は、どこの学校にも一人はいると思われる、多くの生徒たちから恐れられている先生である。

「チッ、……ブライト」

質問に答えられなかった猫耳少年、サラダが謝ると、舌打ちしなさったセル先生は、サラダの代わりにミントを指した。

「え、えっと、ヒメイヤ」

「そうだ。そのヒメイヤが……」

ミントが答えると、セル先生は黒板にチョークを走らせた。

無事に質問に答えられたので、ミントはほっと胸を撫で下ろした後、ちらりと壁掛け時計を見た。

（！　あと一分か！）

見ると、授業終了まであとわずか。
それが分かった途端、ミントはそわそわし始めた。

（そわそわそわそわ）

別に心の中で言わなくてもいいと思うが。

（そわそわそわそ―…）

「では―…」

キーンコーンカーンコーン

（！）

授業終了の鐘が鳴り、ミントはぱあっと明るくしてセル先生の方を見た。

キーンコーンカーンコーン

「……。……今日はここまでだ」

本当はもう少し授業を進めたいところだったのだが、そんなミントと目が合ってしまったので授業を終わらせた、意外に優しいセル先生。

やっと解放された！！　と言わんばかりに、いそいそと教科書類を片付ける生徒たち。

（終わった終わった♪）

彼らに負けじと素早く机の上を片付けて、ミントが急いで教室を出ようとしたところ、

「ぷわ……。……む？　終わったのか？」

「くァ～……よく寝たァ～！」

「！！」

寝起きプリンと寝起きポトフが現れた！

属性：風と光。
戦力：共に１０。
知力：共に１０。
容姿：共に１０。
授業態度：共に－１０。

「よし！　早速食堂に行こォぜェ、ミントォ♪」

ポトフの先攻。
必殺スマイルお誘い攻撃。

（……くっ……流石授業中ずっと寝てただけあって、ふてぶてしさ極まりないっ！）

ミントは相手の様子を窺っている。

ガシッ

「「？」」

と、そこへ、

「何処に逝くって？」

「「？！」」

セル先生が現れた！

属性：闇。
戦力：１０。
知力：１０。
優しさ：２。
厳しさ：１０。
気の長さ：－９。

「そんなに眠いなら、俺が永眠させてやる」

セル先生の暗剣ちらつかせ攻撃。

「あ……あっはっはっ……そんなご冗談―…」

両手を前に出しつつ、乾いた笑い声をポトフが発すると、セル先生はふっと口の端を綻ばせ、

「俺は、貴様らの次に冗談が嫌いだ」

二人の首に、逆手で持った暗剣を突きつけた。

「「ミントーーー！！」」

真面目に生命の危機を感じ取り、ミントに助けを求めるプリンとポトフ。

「頑張って！」

どぴゅん

「「ミントおおお？！」」

が、ミントはこの隙に逃げ出した。

「ほっ、ほっ、ほっ！」

自業自得ではあるが、生命の危機に瀕した友を超えてきたミント

は、軽快に階段を駆け上がっていた。

「ほっ、ほっ……ほ?!」

しかし、その足は、二階の廊下に出たところでフリーズした。

それは、

「！　ミントきゅ～～～ん！！」

チロルが現れた！　から。

属性：雷。
戦力：９。
知力：９。
容姿：１０。
スタイル：１０。
ミント夢中度：ＭＡＸ。

「って、なんだその最後のパラメーターはああ?!」

チロル特有のパラメーターに突っ込みを入れる、顔が赤いミント。

「やぁん♪　ミントきゅん一緒にディナーアンドスウィートタイムを―…」

そんなミントに駆け寄るチロル。

しかし、チロルとディナーアンドスウィートタイムを取っている場合ではないミントは、

「チロルごめんローズホイップ！！」

バシーン！！

駆け寄ってきた彼女を迷わずぶっ飛ばした。

「あぁん、強烈ぅっ♪」

すると、チロルは嬉しそうにぶっ飛んでいった。

「ふうっ……あと少―…」

四階にある、ウサギさん寮へと繋がる渡り廊下に差し掛かったところ、

「眼鏡、眼鏡……」

両手両膝を床につけてベタに眼鏡を探しているアロエが現れた！

属性：炎。

戦力：７。
知力：１０。
視力：左右共に０．０２。
容姿：９。
スタイル：５。
危険度：１０。

「あ、眼鏡」

ミントはアロエの眼鏡を手に入れた。

「はい、あったよ眼鏡」

そして、アロエにそれを手渡した。

「わあ」

「！」

眼鏡を受け取り、表情を明るくしたアロエ。
が、殺気を感じ取ったミントは、

「ありがとうございー…」

「どういたしまして！！」

アロエがお礼を言い終わる前に、どぴゅんとその場から逃げ出した。

「……チッ。感付かれましたか……」

袖口にメスを隠し持っていたアロエは、悔しそうに舌打ちした。

「ヌタウナギ！！」

ゴゴゴゴゴ……

ウサギさん寮に入る為、ミントが銅像に向かって合言葉を言うと、引き戸に見せかけた押し戸が重々しい音を立てて開いた。

「よし、これで――…」

談話室を駆け抜け、男子寮への階段を上り切ったミントが角を曲がると、

「――え？」

彼は自分の目を疑った。

と同時に、自然と動かなくなる彼の体。

ミントの視線の先、彼とプリンとポトフの部屋の前に――

「！　あ」

――ミントが二人現れた。

「え、えええええ？！　オレが三人いるうう！？」

目の前で起きている信じられないホラー現象に思わず絶叫するミント。

「「え？　あ」」

ぽわんっ

「違うよー？　私はココアー」

「そして、わたくしはムースですわ」

すると、第二のミントと第三のミントが変身魔法を解き、そこからココアとムースが現れた。

属性：闇と水。
戦力：共に９。
知力：共に１０。
容姿：共に１０。
スタイル：共に９。
彼に夢中度：共にＭＡ―…

「へーーーーーーイ？！」

「「？！」」

アメリカンにナレーションを妨害したココアに、ミントとムースから痛い目が向けられた。

「こ……こほんっ」

それに気付き、わざとらしく咳払いをするココア。

「……二人して変身魔法なんか使ってこんなところで何してんのさ？」

さらりと流してあげる優しいミント。

「だって此処は男子寮だよー？　女の子のままじゃ入れないでしょー？」

「ですから、ミントさんの姿をお借りしましたの。それなら怪しまれないでしょう？」

「ねー」

顔を見合わせて頷き合う二人に、

（オレが二人もいる方が不自然だとは思わないのだろうか？）

ご尤もな疑問を浮かべるミント。

「って、そんなこと考えてる場合じゃなかった！！」

と同時に、はっとしたミントは、慌てて部屋の鍵を取り出してドアにそれを差し込んだ。

「あ、ねーミン―…」

「ポトフとプリンならセル先生に怒られ中だよ！」

ガチャッと鍵を開けつつ、ミントはココアの質問途中で答えを述べた。

「な！？　べ、別にムースがプリンに会いに来ただけだも―…」

「し！！」

その答えにもの申そうとしたココアを黙らせ、部屋の扉を開くミント。

「「！」」

すると、正面の窓から、ゆっくりと細くなっていく三日月が見えた。その三日月は徐々に光を失い、やがてすっぽりとこの惑星の陰に隠れ、赤黒い輝きを放ち出した。

「今日は月食の日でしたのね……」

と、ムースが呟いた直後、

『『キュルオオオオオオオオオオオオ！！』』

「「？！」」

部屋の中から、甲高い笑い声のような鳴き声が聞こえてきた。
それに驚いて、赤黒くなった月から目を離すココアとムース。
すると、丁度その先に――

『『キュルオキュルオキュルオオオオオオ！！』』

「「……何あれ？」」

まさに、何あれ？　な物体があった。

「……マッドプラントの花だよ。月食の時にしか咲かないんだあ……」

彼女たちの問いに、ミントが静かにそう答えた。
何あれ？　な物体は、そう言われてみれば花にも見えなくもないような形をしていて、それはそれは毒々しい蛍光色を纏い、真っ暗な部屋にこれでもかというほど己の存在をアピールし、

『『キュルキュルキュルオキュルオキュルオオオオオオオオ！！』』

気が狂ったかのように爆笑している。
――これが、一年に片手で数えられるほど咲くか咲かないかの、非常に珍しいマッドプラントの花。

「……感動……」

マッドプラントの、まさにマッドな花を眺めてうっとり感動しているミントと、

「「……」」

気分が悪くなったのか、口を押さえるココアとムースであった。

『『キュルオキュルキュルキュルオオオオ！！』』

第４４回　びよクエ日和（後書き）

皆様こんにちは！

ポトフ

「びよってますかァ？」

今回は、しょーもないお知らせではなくて、真面目なお知らせを致します。

真面目なお知らせ。それは――

「バカ作者が調子こいて、”人気投票”を開催するそォでェす。って、これも充分しょーもねェと思うぞ？」

……はい！　突然ですが、本日より調子こいて『学校日和２キャラクターズ人気投票』なるものを開催しちゃいたいと思います！

「作者はすぐ他の作者様の真似をしたがるからなァ」

こほん。

票はお一人様二票で、学校日和２の感想欄、または、メッセージにて、貴方様の学校日和２のお気に入りのキャラクターにご投票なさってくださいお願いしますいや真面目にホントに――…

「しつけェ」

あと、キャラクターたちに質問等がございましたら、同時進行でどうぞ！

期日は６０話が更新されるまでです！

「漠然としてんなァ」

しゃーねえなぁ、やってやるか！　と、一ミリでも思ってくださったそこの寛大な懐をお持ちの男前ｏｒ女前なアナタ！
貴方の清き一票が、めろんを救います！

「意味分かんねェよ。……一が一来なかったらどォすんだァ？」

一が一じゃなくて万が一。それじゃあ１００％来―…ないかもしれませんが、まあ、その時はドンマイってことで♪

「わォ、ポジティブ♪」

この後書きを消去します♪

「と思いきや、せけェ？！　……とまァこんな感じですが、皆様のご協力をお待ちしておりまァす♪」

はい！　お待ちしておりますですはい！！
以上！　なんか調子こいちゃった作者からのお知らせでした！

「では、また次回！　それまでェ、アディオスアミーゴォ♪」

わあ、何者？

第４５回　父の日日和

「ミントー」

「？　何―…」

しとしとと穏やかな雨が降り続く季節。
聞き慣れた声に名前を呼ばれたミントが振り向くと、

「―…プリンんんん?!」

そこに立っていた美男子、プリンを見て、思わず叫び突っ込みを入れた。

「うむ。僕はプリンだ」

「ななな、何、鼻メガネなんか装着してんのさ?!　って言うか、こんなん何処で手に入れたのさ!?」

理由は、プリンが鼻メガネを装着していたから。
ちなみに、鼻メガネとは、レンズの他に、やたら大きな鼻と小粋な髭がついている、素敵な眼鏡のことである。
折角そんなにかっこいい顔をしているのに、台無しも甚だしい！！　と、ミントはプリンから素早く鼻メガネを没収した。

「む?」

すると、プリンは不思議そうに小首を傾げ、

「今日は父の日だぞ？」

と、言った。

「？？？」

父の日＋鼻メガネ＝意味不明。

そんな式が脳内で組立ったミントは、

「なんで父の日に鼻メガネしなきゃならないのさ？」

と、素直に質問してみた。

「うむ。それは、馬鹿犬が今日は父の日だと言ったからだ」

「……はい？」

「それで、父の日には父親のような格好をしなきゃいけないから、それをつけろと」

ミントが取り上げた鼻メガネを指さしながら、プリンは純粋なオーシャンブルーの瞳を彼に向けて答えた。

「……」

プリンの答えを聞き、大体の状況を把握したミント。

（……まあ、信じることは良いことだよね）

ミントはそう思いながら、

「それ嘘だよ、プリン」

彼にさらりと真実を教えてあげた。

「――!?」

衝撃。

「……」

のち、怒り。

「……。今回は好きなだけ仕返していいと思うよ?」

下を向いて拳を握り締め、ガタガタと震え出したプリンにミントが言うと、

「――クク、次回があるといいがな? テレポート」

邪悪なオーラに満ち溢れたプリン、詰まり、ゴマプリンは、危険な笑みを顔いっぱいに湛えて姿を消した。

「……ご愁傷様、ポトフ」

自業自得だと思いつつも、ミントはポトフの為にぱむっと合掌しておいた。

「……父の日かあ……」

その後ミントは机に座り、抽出（ひきだし）から一枚の画用紙と一本の鉛筆を取り出した。

≫≫≫

コンコン

「？　入れ」

王室のドアがノックされたのを聞き、国王、ルゥはすぐにドアの向こうの人物に入れと命じた。

「……お前な、もう少し用心深く部屋に人を入れろよ？　お前を殺そうとしてる奴だったらどうすんだ」

ので、隣に控えていた兵士長、シャーンが呆れたように注意した。

「なんで？　そんな奴が来たら楽しいじゃん」

「……。あそ」

今更ではあるが、戦闘好きな国王って、どんなもんなんだろうな、と、シャーンが頭を抱えていると、

「むーっ！」

ギギギッ……

王室の大きなドアが、一人の少年によってゆっくりと開かれた。

「！　おお！　ミント！」

王室に入り、今度は一生懸命ドアを閉め始めた彼、ミントを見て、ルゥがぱあっと顔を明るくすると、

「るーさまー！」

やっとドアを閉め終えたミントは、てててとルゥの元へと走ってきた。

「”るー”じゃない、”ルゥ”だ。ＯＫ？」

「るーさま！」

「うし！　可愛いから許す！！」

当時五歳のミントの頭を撫でながら、機嫌良く言うルゥ。

「あのね、今日、父の日でしょ？　だから、みんなでクッキー作ったの！」

　すると、ミントは肩に提げた黄色い園児バッグから小さな袋を取り出し、

「はい、るーさま！」

にこっと笑ってルゥに差し出した。

「オレにくれるのか？　ありがとな」

それをにこっと笑って受け取ったルゥは、

「おお！　めちゃんこ美味いぞ、ミント！」

中に入ったクッキーを一枚取って食べてみた。

「えへへ、めちゃんこー」

そう言われて、嬉しそうに笑いながら彼の言葉を真似するミント。

「くあ！　もう可愛いなお前一体誰に似たんだよ？　はい、あーん」

「わあ！？」

「美味いか？」

「うん！　うまいー！」

と、楽しそうにクッキーを食べている二人に、

「……」

悲しいかな、完全に置き去りにされている彼は兵士長でミントパパ。

名前はシャーン。

（……父の日って……父の日って……）

なあミント、お前の父は俺じゃないのか？　と、シャーンが心の中で悲しい疑問を浮かべていると、

「「ごちそーさまでしたっ！」」

ルゥとミントが両手を合わせてそう言った。

（……。父の日のバカヤロー）

夕日に向かって思い切り叫びたい心境のシャーンであった。

「おっしゃミント、お礼にコーラ買ったげるぞ！」

「！　わーい！」

ふよふよふよ

シャイア城から自宅への帰り道。

自分の後ろにミントを乗せたシャーンは、箒に乗って夕日をバックに空を飛んでいた。

「♪」

「……？　何かいいことでもあったのか？」

後ろにちょこんと乗っているミントが嬉しそうだったので、シャーンが振り向きながら尋ねると、

「うん！　るーさまにコーラ買ってもらったし、ほめられた！」

ミントは元気に頷いてそう答えた。

「……。クッキーのことでか」

蘇る今日のお昼の悲しき記憶。

「うん！　おいしかったなぁ♪」

「ははは、俺には何もないのな？」

こくりと頷いたミントを見て、前に向き直り、何かを諦めたように清々しく笑いながらボソッと独り言を呟くシャーン。

「……。……あげない」

　すると、後ろから小さな声が聞こえてきた。

それは、夕方の涼しい風に掻き消されてしまいそうなくらい小さな声。

「？　あげー…」

それを聞き取ったシャーンは、予想に反した言葉に、再びミントを

振り向くと、

「―…だって」

彼の先程の明るい表情は、一変していた。

「!?　ミント?!」

彼の突然の表情の変化に驚き、目を見開くシャーン。

「……だって……何回かきなおしても……」

園児バッグの脇から飛び出ている、くるくると巻かれた画用紙を握り締め、

「ぜんぜん上手にかけないんだもん……っ!」

ぼろぼろと泣きながら、ミントは震えた声でそう言った。
その涙は、自分に絵の才能があまりにも無さすぎる悔しさから。

「……!」

肩を震わせている小さなミントからの、真剣で一生懸命な言葉を聞き、

「……馬鹿だな。下手でもいいから見せてみろよ?」

シャーンはふっと微笑んでそう言いながら、彼を向いて座り直した。

「……っ」

ミントはうつ向いたまま、ごしごしと涙を拭うと、

「……おこらない？」

と、静かにシャーンに尋ねた。

「怒らない怒らない」

答えた後、しばらくしてからミントから画用紙を受け取ったシャーンは、

「……」

それに描かれた絵を見て、うっかりフリーズしてしまった。

「……。前衛的だな」

これは一体……あ、ああ、そうか、俺か。……俺か？　……俺……だよな、と、自己解決したシャーンは、なんとか感想を捻り出した。

「……？　ぜん？」

その言葉に、やっと涙が止まったミントはきょとんとした顔で小首を傾げた。

「……誉め言葉だ」

そんなミントの頭に、ぽんと右手を置いて、

「ありがとな、ミント」

シャーンはにこっと笑いながらそう言った。

「！」

その言葉を受け取り、ミントは驚いたようにシャーンを見上げた後、

「じゃあ、飛ばすぞミント！」

「……うんっ！」

にこっと笑い返しながら元気に頷き、シャーンと共に家に帰っていった。

≫≫≫

……てな記憶がふと蘇ったミントは、なんとなく画用紙にシャーンの似顔絵を描いてみていた。

ガチャ

「し……死ぬかと……あともうちょっとで本気で死んじゃうかと思ったぜ……」

「！」

似顔絵が完成した丁度その時、ゴマプリンから命からがら逃れてきたポトフが部屋に帰って来たので、ミントはパッと振り向いた。

「ねえ、ポトフ」

「ごふっ……なんだァ、ミントォ？」

そして机に鉛筆を置いたミントは、代わりに画用紙を手に取って、

「これ、何に見える？」

「はェ？」

と、尋ねながらポトフにそれを見せた。

「……」

ズタボロになっているポトフは、顎に右手を当て、その絵をまじまじと見ながらじっくりと考えた後、

「……ゾウリムシ？」

と、真剣に答えた。

ちなみに、ゾウリムシとは、微生物の一種である。

「……」

すちゃっ

ミントは、無言でポトフに鼻メガネを装着した。

ガチャ

丁度その時、プリンが帰ってきた。

「……」

「……」

「……」

間。

「……お……俺の……」

「「……ふっ」」

「俺の顔がァァァァァァァァァァァァァ？！」

「あはははははははっ！」

「ふふふふふふふふっ」

「わわわ、笑うなァァァァァァァァァァ！！」

一番大切にしている顔を見て爆笑されたナルシーな彼は、素早く鼻メガネを外して、力の限り吠え続けた。

第４５回　父の日日和（後書き）

皆様こんにちは。
えー、わたくしごとではございますが、私、明日英検です。

ミント

「こんなん書いてる場合じゃねえ?!　……っと、こんにちは、ミントです」

今回は、私がふとした時に思い付いた、ちびっこミントのお話でした。

「なんか恥ずかしいな……って、ふとした時って?」

現代社会の授業中。

「まったく関係ねえ!?　って言うか、授業に集中しろよ?!」

まあ、そこら辺はどんまいってことで。

「うん。そだね。作者の人生がどんまいってことで」

話は変わりますが、人気投票にご参加なさってくださった方々様々、誠に、誠にありがとうございました！

「ありがとうございました!!　いやぁ、奇跡だね」

イエス！　ミラクル！

「……」

と、言うわけで、またまた調子に乗りましてですね、投票・質問等は、懲りずにまだまだ受け付けておりますので、どうぞお気軽に、適当に、なんかもう、その日の気分で投票なさってください！　とか言っちゃいます！

「……質問等って、なんなのさ？」

例えば今晩のおかずとか。

「めちゃんこどうでもいい？！」

もっとおかず増やして欲しいとか。

「お母さんに言って？！」

と、まあ、そんな感じで質問要望等いろいろウェルカムなので、もしもお暇でしたならば、いつでもどこでも何度でもどうぞ！

「……。はい。では、不定期ではございますが、次回また是非お会いしましょうね！」

以上、どうでもいいかもしれない後書きでした！

「なら書くな」

手厳しい。

第４６回　一面日和

「そう言えばさー」

マグカップをテーブルに置いて一息入れてから、ココアは思い出したように口を開いた。

「最近むぅちゃん見ないけど、どしたのー？」

「「あ」」

すると、見事にミントとプリンとポトフの声がシンクロした。

「……〝あ〟？」

「ひどい！　忘れてたのかっ？！」

小首を傾げたココアに次いで、プリンが二人にもの申すと、

「「お前もだろ？」」

ミントとポトフ、再びのシンクロ。

二人がしらっとした目を彼に向けると、

「……」

プリンはふいっと目線を逸らした。

「……」

「……」

「……」

「……ぷう」

そして、プリン言語を発した。

「〝ぷう〟じゃないでしょ～？」

「ぴわわ?!　痛い痛いごめんミントっ！」

ミントが一本に束ねられたプリンの髪を引っ張ると、彼は素直に謝罪した。

「ってことは、みんなも最近見てないんだー？」

再びマグカップを手に取りながらココアが呟くと、

「……」

食事中なのに、行儀悪く頬杖をついたポトフは、不服そうな顔を彼女に向けた。

「？　何、ポトフー？」

そんな彼に、小首を傾げるココア。

「……そんなに気になるの？」

すると、ポトフは口を尖らせた。

「え――？」

「わ、ポトフが焼き餅焼いてる」

「……比較する次元が違うだろ」

何やら不機嫌な彼に、ココアとミントは驚いて、プリンは呆れたようにそう言った。

「あはは、そだよね」

「うむ。むぅちゃんはプライスレスで、貴様はバリューレスだからな」

頷いたミントの言葉を引き受けるプリン。

但し、ミントは、魔物と人間だから、と言おうとしたのだが。

「おォ、成程なァ。むゥちゃんはお金で買えない価値があって、俺はお金で買う価値もない――」

「うむ」

「――って、ふざけんなテメェコノヤロォォォォォォ？！」

ドカンバコーン！！

そうして、例のごとく始まる兄弟喧嘩。

「仲良しだねぇ」

「ホントにねー」

そんな彼らを目の前に、別に止めるともなく、のほほんとコーラとココアを頂くミントとココアであった。

『む～』

ちょこちょこちょこちょこ

一方、その頃むぅちゃんは、国立魔法学校の廊下をちょこちょこと忙(せわ)しく歩いていた。

『むぅ……む～むむ～』

訳：はあ……マッドさん怖いよ～。

どうやら、むぅちゃんが家出（？）したのは、ミントが育てているマッドプラントのせいのようだ。

ミントの愛情がたっぷりと注がれたマッドプラントは、今や、そ

れはそれは大きな観葉植物として、部屋の片隅を陣取っている。
それについては、長い間一緒に生活していたせいか、マッドプラントに愛着が湧いてしまったプリンとポトフは何も言わない。
そうしている間に、マッドプラントは彼らに噛みつかなくなったのだが、魔物だからなのか、むぅちゃんにはやたら威嚇してくる。
それはもう、勇猛果敢に。

『むぅぅ……』

訳：うぅぅ……。

魔物を涙目にさせるマッドプラントとは、一体何物なのか。
答えは、怪物？
ノット。
植物である。

ぽふん

『む？』

訳：痛っ？

下を向いてちょこちょこ歩いていると、むぅちゃんは何かにぶつかってしまった。

『む～？』

訳：なんだろう？

一体何にぶつかったのだろうと、首が無いので、まるっこいからだ

全体を上に向けると、

「……」

そこにいたのは、部分的に長い銀髪と、紫色の瞳を持つ、この学校で恐らく一番怖い先生、詰まり、魔物学担当のセル先生。

『む』

訳：よ。

そんな彼に、何も知らないむぅちゃんは、短い右前足を挙げて挨拶した。

「……」

無言。

『むぅ？』

訳：あれ？

無表情で無反応で無言なセル先生に、首が無いのでからだ全体を傾けるむぅちゃん。

「……」

すると、セル先生は無言でしゃがむと、右の親指と中指を打ち鳴らして、牛乳を呼び出した。

『むぅ！　むむむ？』

訳：わぁ！　くれるの？

浅い皿に注がれた牛乳を見て、むぅちゃんがつぶらな瞳を輝かせると、

「ああ」

セル先生はふっと微笑んで頷いた。

魔物の言葉が分かるとは、流石魔物学の先生である。

『む……！』

そんな素敵な笑顔を直視してしまったので、むぅちゃんは慌てて牛乳を飲み始めた。

ヴィン

「『？』」

すると、後方から不思議な音がしたので、彼らがそちらを向くと、

「こんな所にいたまろか！　探したまろよ、むぅちゃん！」

空間にぽっかりと空いた紫色の穴から、道化師のような格好をしたピンクの髪の少女が現れた。

『むむ！』

訳：マロ！

それを見たむぅちゃんが彼女、マロの名前を呼ぶと、

「……お前が飼い主か？」

セル先生はむぅちゃんを手の上に乗せて立ち上がり彼女に振り向いた。

「は、はいまろ」

突然話しかけられたので驚きつつも、こくりと頷くマロ。

「見付かって良かったな」

すると、セル先生はむぅちゃんを彼女に手渡しながらふわりと微笑み、

「もう迷子になるなよ？」

と、むぅちゃんに言った後、静かにその場から去っていった。

「……」

『……』

何やらいつになく爽やかで優しげなセル先生に、

「……めろりんⅤ」

『むむむぅ……V』

瞳をハートにするマロとむぅちゃんであった。

「……成程。セル先生は動物好き」

この時、物陰に隠れたアロエが手帳に何かメモしていることには、誰も気が付かなかったと言う。

第４７回　暗黒日和

キーンコーンカーンコーン

「！」

キーンコーンカーンコーン

「……鐘が鳴ってしまいましたね。では、今日はここまでにします」

腹減ったなァ、とか思いながら聞いていた四時限目の魔法学の授業が終わり、ポトフはささっと教科書類を片付けた。

「よォしっ！　食堂行こうぜ、ココアちゃん♪」

続々と教室を出ていく生徒たちに負けないよう、パキンと右手の中指を打ち鳴らして勉強道具を魔法で自分の部屋へと移動させた後、素早く隣に座っているココアを夕食に誘うポトフ。

「……すー……」

が、隣からは、返事ではなく寝息が返ってきた。

「……。寝てる……」

居眠りしているココアは珍しかったようで。

机に突っ伏して寝ている彼女を見て、ポトフは数回まばたきをした後、

「……無防備すぎるぜ、ココアちゃん？」

ふっと微笑み、何やら危険なことを呟きながら、ココアを起こそうと、彼女の肩に手を伸ばした。

「――！」

その時、突然ピーンときたポトフは、伸ばした右手を引っ込めた。

「隣で寝てるってことは、俺、ココアちゃんに信頼されてる……っ？！」

そして、感動したようにその手を自分の口にかざすポトフ。

しかし、感動しているところ悪いが、授業中の居眠りに隣の席の人への信頼など存在しないと思われる。

「……」

「……」

静かに机に突っ伏しているココアを見て、ポトフはその綺麗な顔で麗しく微笑み、

「その信頼、裏切らさせてイタダキマス」

ぱむっと両手を合わせてそう言った。

「て裏切るんかーい？！」

バシコーン！！

「ぐはァっ?!」

直後、眠っていた筈のココアから突っ込みと張り手が勢いよく飛んできた。

ズザーガラガラガッシャンドサドサドサバコーン!!

「いったた……、起きてたの、ココアちゃん?」

何やら数秒の間でいろいろと痛そうなことが起きていそうな音がしたにも関わらず、すぐに上体を起こしてココアに問いを投げ掛けるポトフ。

「当ったり前でしょ起きるわよそりゃー!?」

ツカツカとポトフの元に移動し、彼をズビシッと指さしながら言い返す、ご立腹なココア。

「じゃァ、もォちょっと寝たふりしてなきゃ」

「出来るかボケえええええ?!」

口を尖らせたポトフに、どこかキャラが違う突っ込みをぶちかますココア。

どうやら相当ご立腹なようで。

「……。レディがそォんな汚い言葉使っちゃ」

ポトフはそんなココアの右手をぐいっと引っ張り、

「きゃ――…」

「ダァメ♪」

ちゅ

と、彼女の口を塞いだ。

ガラリ

「何してるのポト――…」

丁度その時、なかなか教室から出てこないポトフを呼びに、ミントがガラリと教室の扉を開けた。

「――…、……フ……」

最後の文字を発音した後、ミントは両頬を紅潮させ、

「……お……おじゃましました……」

と言って、ぱたむと扉を閉めた。

「……」

「……」

……。

「きゃっ、恥ずかしっ☆」

「来たれ終焉!!　ダークネスサクリファイスううう!!」

ちゅどおおおおおん!!

という具合いにポトフをぶっ飛ばした後、ココアは急いでガラッ!!　と扉を開け、

「違う!!!」

と、力いっぱい何かを否定した。

「ひや!?」

すると、何故かプリンの背後に隠れていたミントが思わず声をあげて驚いた。

「み、ミント、どうしたの?」

何がなんだか分からないといった表情のプリンが、自分の後ろに隠れているミントに尋ねると、

「ごごごめん!!　で、でも、オレそんなつもりじゃ」

彼を綺麗に無視して、ミントは全身全霊で謝罪した。

「でもだってまさかお楽しみ中のところを邪魔するなんてごめんオレ本当死んだ方がいいよねえええ?!」

「違うけど死ねえええええ！！」

パニック状態に陥って、何やら誤解を招くような表現を用いやがったミントに、ココアは乙女らしからぬ言葉を最大ボリュームで発した。

それはもう、赤鬼も真っ青になるような形相で。

「深淵（しんえん）の果て、常闇（とこやみ）の都（みやこ）へと導け！！」

極限まで高まった魔力と、随分と物騒な呪文。

その二つの条件が満たされた時、ココアの前に漆黒の巨大な魔法陣が現れた。

「――滅びの使者、ルイン！！」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

破滅をもたらす暗黒の使者、”ルイン”の名をココアが叫んだところより先のことを覚えていた者は、誰もいなかったと言う。

第４８回　ほのぼの日和

「パプリカ皇帝？！」

休日の静かなお昼過ぎ。

謎の皇帝の名前を叫びながら、プリンはガバーッとベッドから飛び起きた。

「はよぉーす」

すると、左側から抑揚のない挨拶が飛んできた。

「……」

なんだ夢か、と胸を撫で下ろしていたプリンは、蒼い瞳をぱちくりさせ、

「……熱でもあるのか？」

と、自分に挨拶をしてきたポトフに尋ねた。

「失礼だなテメェ」

元気なく言い返したポトフは、自分のベッドに座って何かを読んでいる。

「む？　ミントは？」

そんなポトフに目を向けた時に、ふと気が付いたことを小首を傾げ

ながら彼に問うプリン。

「チロルちゃんに拐われたァ」

ポトフは読んでいたものをパタンと閉じ、再び元気のない声で答えた。

「……。そうか」

だから元気がないのか、とか思いながら、プリンは再び横になった。

「って、いやまた寝んのかよ?!」

ガスコーン!!

「ぴぐわ!?」

ポトフが突っ込みを入れた直後、何やら硬いものの角がプリンの額の中央に直撃した。

「き、貴様いきなり何をする!?」

「うるせェ！　休日を無駄にするなァ!!」

「無駄――睡眠は必要不可欠で絶対的なものだ!!」

「テメェは必要以上に寝過ぎなんだよ!!」

「まだ十四時間しか寝てないではないか!!　と言うかさっきこれの角が――…」

何やら休日の過ごし方と睡眠について言い争っている途中で、プリンは先程ポトフが投げてきたものを初めて見た。

「……。チェス盤？」

白と黒の四角が互い違いに並んだ板を見て、プリンが小首を傾げながらその板の名前を呟いた。

「暇だから付き合え」

すると、ポトフが尊大な態度で彼に言い放った。

「……」

ぽかんと小さく口を開け、彼のことをまじまじと見るプリン。

「……なんだよ？」

茶色い瞳を逸らしながら言うポトフ。

「やはり熱があるのか？」

「失礼だなテメェパート2？！」

何やら不思議な突っ込みを入れてきたポトフを見て、プリンはふっと微笑み、

「さっきまで説明書を見てた奴が僕と勝負になると思っているのか？」

と、言った。
どうやらポトフが先程まで読んでいたものは、チェスの説明書だったようだ。

「なっ――う、うるせェ！　俺にかかればテメェなんか秒殺だァ！！」

「それは貴様がどんなに強くてもルール的に無理だ」

「だァらうるせェよ?!　テメェの口にプリン詰め込むぞォ!?」

「喜んで」

「喜ぶなァァァァ!!」

相変わらず、どうにも素直でない二人であった。

カーカー

青い空が橙色に染まり、カラスが夕日に向かって飛んでいった。

「今日もとっても楽しかったよ、ミントきゅんV」

おサルさん寮の前でにこっと綺麗に笑いながら、チロルは彼に向かってそう言った。

「……さいですか……」

一方、ミントは何故か疲れ果てている模様。

「送ってくれてありがと」

「！」

何やら魂が出てきてしまいそうな彼の口をつま先立ちで塞いだ後、

「えへっ♪　じゃあ、また明日ね、ミントきゅんV」

両頬を赤く染めたチロルはミントに別れの挨拶をし、おサルさん寮の中へと入って言った。

「……」

「……つま先立ち」

「へ？　――うわあ？！　ぱ、パセリ！？」

ぽけーっとミントが突っ立っていると、おサルさん寮の前の銅像の影から、ぬっとパセリが現れた。

「おのれミント＝ブライトぉ……チロルちゃんファンクラブ最大の敵いいいい」

のそりのそりとゾンビのように近付いてくるパセリ。

「い、いや、ファンクラブって、もう解散したんでしょう……？」

それに合わせて一歩ずつ下がるミント。

「俺の中では永久不滅、って言うか」

パセリはそう言った後、じいっとミントの唇を見つめた。

「？」

「……チロルちゃんの唇」

そして呟いた。

「は、はい？」

ぞわっと香る、嫌な予感。

それは、次の瞬間、的中することになった。

「俺によこせえええ！！」

「いや何言ってんのさこの変態いいいいいい？！」

とんでもないことを叫びながら迫り来るパセリから、ミントは大絶叫しながら逃げ出した。

「待てえええええ！！」

「誰が待つかあああ？！」

「唇よこせえええええ！！」

「変態変態変態いいいいい！！」

などと、何やら誤解を招きそうなことを叫びながらウサギさん寮の前までやって来たミントとパセリ。

「！」

すると、ミントのライトグリーンの瞳に、味方二人が映った。

「ミントを泣かせるヤツはァ」

「許さない」

味方二人――ポトフとプリンは、同時にバッとパセリに右手を向け、

「キラキラァ！！」

「神風！！」

と叫び、二人の最大魔法を彼にお見舞いした。

「あああありがとう二人とも！！」

「……照れる」

「あっはっはっ！　気にすんなってェ♪　それより、夕食にしようぜェ、ミントォ？」

「うん！」

「ふふふ、では出発だ」

うぎゃあぁぁあああぁぁあと、壮絶な悲鳴をあげてぶっ飛んでいったパセリを綺麗にスルーし、ミントとプリンとポトフの三人は、仲良く夕食を取りに食堂へと向かうのであった。

第４８回　ほのぼの日和（後書き）

今回は、ある休日のお話。ほのぼの……でしたでしょうか？（弱気

第４９回　日暮れ日和

円形の街の中央に巨大な城がそびえ立つ、此処は王都市、その名もシャイア。

「ただいー…」

西の空に日が落ちて、夜空に無数の星が美しく輝き出した頃。
その城、シャイア城からそれほど離れていない所にある、庭付き一戸建ての赤い屋根の家に仕事が終わって帰ってきたミントパパ、シャーンは、ドアを開けると同時に硬直した。

「……」

目を擦ってもう一度目を開き、見間違いではないことを確認した上で、

「なんで首から下だけ溶けてるんだ、ジャンヌ？」

玄関先でえらい心臓に悪いことをやっている理由を、生首ミントママ、ジャンヌに尋ねた。

「七夕だからよ！」

すると、生首の状態でその場ですいすい回りながら、ジャンヌは簡潔に答えた。

「……。そうか」

シャーンはそれだけを言うと、玄関に鍵をかけて壁に箒を立てかけた後、平常通りリビングに向かって歩いていった。

「ゲヘヘヘヘ！　笹の葉メ～ルヘ～ン♪」

残された生首は、七夕らしい歌をアレンジして歌いながら、彼の後についていった。

王都市・シャイアは、本日も誠に平和である。

「！」

いつもの巨大な食堂での夕食の時間、自分の夕食を持ったココアの濃い桃色の瞳に、茶髪眼鏡少女が映った。

「やっほー♪　久しぶり、アロエー！」

「あ。お久しぶりです、ココアさん」

ひらひらと左手を振って元気に挨拶したココアに、さらりと挨拶を返した彼女は”アロエ”。

「ここ座っていいー？」

こちらに気付いたアロエの隣の席を指さして、ココアが小首を傾げながら尋ねると、

「……。別にいいですが、今日はポトフ＝フラントと一緒には食べないのですか？」

と、アロエが逆に質問をしてきた。

「な――べ、別に毎日一緒に食べてるわけじゃないもーん！」

彼女の横に座りながら、若干顔を赤くしたココアがぷうっと頬を膨らませた。

「……そのようですね」

アロエはそう言って眼鏡をかけ直すと、懐から怪しげな手帳を取り出した。

「！　で、出た！　アロエの手帳……っ！！」

そのまんまなことを、物々しくココアが言った。

「なんでも、ココアさんはポトフさんの”あーんしてV”とか、”顔にケチャップついてるぜ♪”とかまあ、ベタベタな攻めが苦手だとか」

ぱらりと手帳を開き、つらつらと語り出すアロエ。

「だ、だだだ、だってそりゃ、こんな公衆の面前で」

顔を赤くしながらも反論を試みるココア。

「そうですね。お二人の時は別に嫌がらないと言うかむしろ―…」

「にょおおおおお?!」

ページを捲って何やら恥ずかしい情報を流し始めたアロエを、顔を真っ赤にして全力で止めに入るココアであった。

「かァわいいなァ♪」

そんなココアを遠くの席から頬杖をついて見ていたポトフは、ふわりと微笑んで何か呟いた。

「あはは、随分と一途になったね～ポトフ～?」

ポトフの向かい側に座ってコーラを飲んでいたミントは、のほほんと笑いながら彼に向かってこう言った。

「昔はタラシまくってたのに」

「あっはっは、聞こえ悪ィぞミント?」

ココアから目を外して、ミントにピントを合わせたポトフが突っ込んだ。

「だって、本当のことでしょう? 前はどの女子にも可愛い可愛いって言ってたし」

「いやまァそれは実際可愛いし♪　バット」

ミントの発言を認めた後、ポトフは逆接の接続詞をつけたし、

「ココアちゃんは特別Ｖ」

と言った。

「左様でございマスカ」

楽しそうなポトフに、さらりと返すミント。

「勿論、ミントも特別ゥ♪」

すると、ポトフはそう言って素敵に笑ってみせた。

「はいはいどーも」

「ミントー！」

ミントがそれを適当に流すと、後ろでひとつに束ねた水色の長い髪を弱く上下させながら、プリンが右手にプリンを持って小走りでこちらにやって来た。

「テメェは格下」

やって来たプリンに、ポトフはさらりとそう言った。

「バリューレスは黙っていろ」

その言葉に、彼よりも更にさらりと返すプリン。

「バ……テメェ、俺の価値は0円すなわちタダってことかァ？」

若干震えながら聞き返すポトフ。

「商売の基本がなってないな。そのものの価値と同等の値で売ったら、こちらにはなんの利益もないだろう？」

「まさかのマイナス？！　貰ってくれてありがとうの領域！？」

「そんなことより」

自分の価値がタダ以下だと言われ、流石にショックを受けたポトフとの会話をぶった切り、プリンはミントに顔を向けた。

「ミント、今日、たなばた！」

「うん、そうだね。”ば”だけどね」

プリンの態度の落差の激しさを改めて感じつつ、コーラを飲みながら応えるミント。

「む？　たーなー……”ば”？」

ぴこっと小首を傾げるプリン。

「そう。七夕」

「たなばば！」

「あはは、キミは”ぼ”が大好きなんだね～？」

彼なりに一生懸命なプリンを見て、ミントは何かを諦めたように爽やかに微笑んだ。

「うむ、兎に角それだ！」

プリンは、ちょっとズルかった。

「あはは、じゃあ、笹取りに行こうか？」

彼が言わんとしたことを先読みし、空のコーラのビンをテーブルに置きながらミントが尋ねると、

「うむ！」

プリンは元気よく頷いた。

そうして、即刻プリンを食べ終えた彼と共に立ち上がったミントは、

「ほら、ポトフも行こうよ？」

と、うなだれているポトフに声をかけた。

「……！」

すると、ポトフは顔を上げて、

「ミント……俺を貰ってくれるのかァ……？！」

目を輝かせてそう言った。

「何バカなこと言ってんのさ？」

そんな彼に、ミントは呆れたように笑ってみせた。

「ココアに貰ってもらいなさい」

「なんか言ったー？」

その隣で、ココアが素敵に微笑んだ。

「！？」

いつの間に、と、ミントが驚いていると、

「ミーンートー？」

ココアからにょきっと角が生えた。

「ごごごめんなさいいい！！」

「待ちやがれえええええ！！」

「ぴわわ！　ミント！！」

「待ってココアちゃ～ァんＶ」

ドタバタと駆け回り始めたミントとココアとプリンとポトフと、食堂で騒ぐのは控えていただきたい、とか思う、その他大勢の生徒た

ちであった。

第５０回　課題日和

ジワジワと暑い夏の日の朝、ウサギさん寮の生徒たちは、青の森の前に集合した。

「……では、前回の授業で知らせた通り、今日はこの森に住む魔物”オット”の牙を集めてきてもらう」

全員集まったことを確認すると、セル先生は静かに口を開いた。

「一人十本。集め終わるまで帰ってくるな」

そしていつものように生徒たちに冷たく言い放つと、

「……気を付けてな。デビルズドライヴ」

珍しくちょっとした優しさを見せた後、いつものように闇魔法を唱えた。

ドッカアアアアアアアアアアアアアン！！

が、今回はいつもより威力が凄かった。

「……」

物凄い勢いでぶっ飛んでいった生徒たちを見て、

「……加減間違えた」

ぽつりと小さく呟いた、意外とおっちょこちょいなセル先生であった。

「って、おっちょこちょいなんて可愛らしい言葉で済むかあ?!」

はっと気が付いたミントは、遅ればせながら、先程のナレーション対して突っ込みを入れた。

「！　気が付いたかァ、ミントォ!?」

ポトフにお姫様だっこされながら。

「って、いかにしてこの状況?!」

今度はこの状況に突っ込むミント。

「セル先生にここまで飛ばされて、起き上がったら後ろからミントがぶっ飛んできたから受け止めたんだぜェ」

ので、ポトフはこの状況に至るまでの経緯をさらりと説明した。

「そ、そうなんだ。ありがとうポトフ」

「どぉいたしましてェ♪」

きちんとお礼を言ってからポトフに降ろしてもらったミントは、くるりと辺りを見回した。

「わあ。だいぶ遠くに飛ばされちゃったみたいだね、オレら」

遠くの青い木々の上に、ちょこんと見える国立魔法学校の屋根を見ながらミントが言うと、

「そぉだなァ。他にヒトのにおいしねェし」

と、ポトフが応えた。

（……におい？）

やっぱりどこか犬っぽいなあ、とか思うミント。

「ん？」

「ん？」

突然ポトフがぴくっと反応したので、ミントが小首を傾げると、

「こ、このにおいは……」

「このにおいは？」

「鹿だァ！！」

切れ長な茶色の瞳を輝かせながら、ポトフはぱしっとミントの腕を掴んだ。

「え」

「行くぞミントォ！！」

「え、えええ！？　オレも？！」

「イエス、オフコォォォス！！」

「なんで英語おおおおおお？！」

そうして、ミントとポトフは課題そっちのけで鹿を追い始めたのであった。

「いっ……たーあ……」

本当に痛そうな声を発しながら、ココアはぐぐぐっと上体を起こした。

「まったく、もうちょっとって言うかだいぶ丁寧に飛ばして欲しいよねー」

ぷんすか怒りながら文句を言った後、

「……でも、あの技かっこよかったなー」

ココアはセル先生の闇魔法を思い出しながら呟いた。

「……〝デビルズドライヴ〟かー」

今度練習してみよー、などと、ココアが危険なことを考えていると、

ズルリ

と、背後で何かが擦れた音がした。

「ズルリ？」

途端に、彼女は全身を駆け巡る寒気に襲われた。

ズルズルズルズルズルルリ

「ままま、まさか……」

ガタガタ震えながら、何やら近付いてくる上に増えている音に振り向くと、

『『ねばぁ』』

（やっぱりいいいいい！？）

いつぞやの巨大カタツムリが、ずらりと彼女の周りを囲んでいた。

『『ねばあああああ！！』』

「きゃあああああああ！！」

前回同様、威勢のいい鳴き声とは裏腹に、非常にゆっくりと迫り来る巨大カタツムリに、ココアが反射的に目をきつく瞑りながら甲高い悲鳴をあげると、

べちゃべちゃべちゃっ！！

前回同様、粘着質な物体が何かに勢いよく打たれる、気持ちの悪い音がした。

「――え？」

その後、魔物の気配が消えたので、ココアがゆっくりと目を開けると、

「……ふう。無事か、ココア？」

と尋ねながら、彼女の目の前に立っていたプリンが振り向いた。

「あ、プリンかー」

彼を見て、ココアの口から思わず溢れた言葉に、

「む……。……馬鹿犬じゃなくて悪かったな」

プリンはムッとした顔でそう言った。

「へ？　……！　や、違、ああ、ありがとープリンー！！」

そんなプリンを見て、ココアは両手をぶんぶん振りながら慌ててお礼を言った。

「……ぶう」

が、プリンは膨れていた。

「お、怒んないでよー！　ごめんってばー！」

「……うむ。分かった」

あわあわと謝ってきたココアを、プリンはこっくりと頷いてさらりと許した。

「よかったー、ありがとープリンー」

許してくれたので、ほっと胸を撫で下ろすココア。

「……照れる」

彼女にお礼を言われ、いつものように枕で顔を隠そうとした時に、

「！」

プリンは、枕の異変に気が付いた。

「……べちょべちょ……」

巨大カタツムリの魔物をそれで攻撃したが故に、彼の枕は、べちょべちょに汚れていた。

じわり……

「！？」

ので、

「えぐえぐっ」

「ななな、泣かないでよ、プリンー？！」

今度は泣き出してしまった彼を、ココアは慌てて泣きやませようと試みた。

「だってべちょべちょ……」

「あ、洗えばなんとかなるってー！　ほら、あそこにある川で洗おうよー！？」

「……。落ちる？」

「落ちる落ちるよー！」

という具合いに、課題をすっかり忘れている四人なのであった。

第５１回　協力日和

カカカッカカカッカカカッ

青く美しい草木が密生している青の森で、一頭の鹿が全力疾走していた。

「待て待て待てェェェ！」

「ちょっ、速いってポトフううう?!」

理由は、すぐ後ろに、ハンターとそのおまけが迫ってきているから。

ザザッ

追手からいち早く逃れる為に、小高い茂みを飛び越えた鹿は、

「ひにゃあ?!」

ぐにょ

と、たまたまその先にいた猫耳少年、サラダを踏み付けていった。

ガササッ

「逃がすかァァァァ！！」

「うわあ?!」

鹿を追い掛けて、同じように茂みを飛び越えたポトフとミントも、

「ひにゃああ?!」

ぐにょにょ

と、サラダを踏み付けていった。

「……?　――!　ちょ、なんか今サラダ踏まなかった!?」

はっとしたミントが、ポトフに向かってそう言うと、

「?　サラダ?」

ミントをちらりと見たポトフは、

「……誰だそれ?」

と、首を傾げた。

「えええ!?　三年も同じ寮にいるのに分かんないの?!」

全力疾走しながら突っ込みを入れたミント。

「野郎に興味なァァァし!!」

「いやでも隣の部屋の人ですよおおお?!」

再びミントを引っ張りながら茂みを飛び越えたポトフと、現代の近所付き合いの現状を思い出させるような突っ込みを入れたミントで

あった。

ぱしゃぱしゃ

青の森の中を流れる大きな川で、プリンは枕を洗っていた。

「わ、この森はリンゴも青いんだねー」

そこから少し離れた所で、ココアは青い木になった青いリンゴを見ていた。

「これ、食べられるのかなー？」

と疑問符を浮かべながら、ココアがそのリンゴを摘もうとした時、

ガササッ

「？」

何か物音がしたので、その手を引っ込めてそちらに顔を向けた。

『オッオッ、オットット』

物音がした方向――プリンの背後に目を向けると、そこには、二本の長い牙を持った、二メートルくらいのオットセイのような魔物がいた。

魔物は一生懸命枕を洗っているプリンの後ろに忍び寄ると、

『セイッ！！』

と、気合いの入った掛け声と共に、プリンの背中に体当たりした。

「ぴわ――！？」

ので、

バッシャーン！！

プリンは川に突き落とされてしまった。

「――はっ！　ぷ、プリンー？！」

何か風景を眺めるように、それを傍観していたココアは、はっと我に返ってそちらに駆け寄った。

『オッオッ、オッオッ』

「あ」

すると当然、魔物の前に飛び出してくる形になってしまった。

『『オッオッオッオッ』』

「やー！！　早く上がって来てよプリンー！？」

何やらやる気満々な、しかもいつの間にか増えている魔物を前に、ココアは川に向かってそう叫んだ。

ザバアッ

「『！』」

すると、

「ククク……呼んだか、小娘？」

「！？　こむす―…って、ゴマー？！」

川の中から、枕を持っていないプリン、すなわち、ゴマプリンが現れた。

「ご名答。……？　おお」

ふっと口だけ笑ってココアにそう言った後、

「狩りがいがあるな。数だけは」

魔物の群に顔を向け、挑発的な笑みを浮かべた。

「って、何挑発して―…」

『『オオオーッ！！』』

「―…ほら言わんこっちゃないじゃないー！！」

その挑発に乗り、怒濤のようにゴマプリンに襲いかかった魔物を見て、ココアが突っ込みながら慌てていると、

ピタ

「へ？」

魔物の動きがピタリと止まった。

「……これが攻撃？」

ココアが疑問符を浮かべていると、

「笑わせる」

魔物の攻撃――鋭く長い牙を左手でいとも容易く止めてみせたゴマプリンのどす黒い魔力が、ぶわっと一気に高まった。

「そよ―…」

「！　だ、ダメだよ、ゴマプリンー！！」

「―…？」

ので、ココアはゴマプリンの魔法を遮って、

「その魔物、”オット”でしょー?!　だから、牙を取るだけで、やっつけちゃダメだよー!!」

と、彼に向かって言った。

ココアは、きちんと課題を覚えていたようだ。

「……。この俺に命令するとはな」

バキイッ!!

『オオオオオオオ!!』

ゴマプリンはそう呟くと、左手に力を込め、魔物、オットの牙をへし折った。

「いい度胸だ」

バキバキバキバキバキ!!

『『オオオオオオ!?』』

続けてバキバキとオットの牙をへし折っていくゴマプリン。

「い、”いい度胸”……?」

不吉な予感がし、知らず知らずのうちに後退りする、顔が青いココア。

「邪魔だ。微風」

ビュワ！！

すべてのオットの牙をへし折ると、ゴマプリンは用済みなそれらを向こう岸に吹っ飛ばし、すっとココアに右手を向けた。

「ご、ゴマさん……？　何故右のおててがこっちを向いてるんですかー……？」

引きつった笑みを浮かべながら、ココアが後退りしつつ尋ねると、

「姫を地獄へ招待してやろうと思ってな」

ゴマさんは、邪悪な笑みを浮かべてそう答えた。

「い、いやー、遠慮させていただきー…」

「遠慮は無用だ」

彼はココアの言葉を遮り、

「何せ一瞬で済むからな。テレポー…」

ドカアアアアアン！！

彼女を虚無の彼方へ瞬間消滅させようとしたところ、背後から何者かにぶっ飛ばされた。

「っ大丈夫、ココアちゃん?!」

ゴマプリンが先程立っていた所に現れたのは、黒髪眼帯少年。

「！　ポトフ！！」

彼、ポトフの登場に、青くなっていたココアの顔が明るくなった。
そんな彼女に、ポトフはにこっと笑ってみせた後、吹っ飛んだゴマプリンをキッと睨みつけ、

「ココアちゃんを”姫”って呼んでいいのは俺だけだァァァァ！！」

「いやそっちかよ?!」

盛大に吠えたところ、後ろからミントの突っ込みが飛んできた。

「……プリン、枕を持ってないね」

その後、ミントが倒れているプリンがゴマプリンだと確認すると、

「ミント」

「了解。ココア！」

「うん！」

三人は、ばっちり意志疎通してみせた。

「……ククク……いい度胸だ。貴様から先に消してやる」

「上等ォ、やれるもんならやってみろォ！！」

「川から上がってきた時には枕を持ってなかったよー！」

「分かった……って、川で何してたのさ？」

こうして、ポトフはゴマプリンの相手を、ミントとココアは、プリンの枕を探し始めたのであった。

第５２回　おかえり日和

「ぷわあぁ……」

朝の食堂にて、プリンがいつものように欠伸をすると、

「やー、やっぱりプリンはこっちじゃないとねー？」

と、ココアがアイスココアを口に運びながら、しみじみと言った。

「みゅ？」

欠伸の後なので、疑問を表す言葉がいつもとは若干違う、こしこしと目を擦りつつ小首を傾げたプリン。

「あはは……なんて言うか落差が激しいよね」

「激しいって言うか激しすぎるよねー」

「？？」

のほほんと会話しているミントとココアに、プリンが浮かべる疑問符を倍増させていると、

「……ネクタイ曲がってるぜェ、枕？」

プリンの対角線上にいるポトフが、朝食が終わったのか、テーブルの上に頬杖をつきながらそう言った。

「ぴっ！？　……あ、ありがとう」

突然そんなことを言ってきたポトフに驚きつつも、プリンがネクタイを直してからお礼を言うと、

「どぉいたしましてェ♪」

ポトフはにっこりと笑って返事をした。

「ぷあ？！」

いつもと対応が違いすぎる彼に、思わず寒気を覚えるプリン。

「♪」

「ポトフはポトフで超ご機嫌だしねー」

「あはは、まあ、初めて勝ったんだしね」

彼の反応を気にすることなく上機嫌なポトフと、再びのほほんと会話をしたココアとミントに、

「？？？」

疑問符をまた一つ増やす、ゴマの時の記憶がないプリンであった。

ポッポー

蒸気をもくもくと煙突から出しながら、蒸気機関車は走り出した。

「やーっと夏休みだねーっ！」

車内の個室についている窓を開けて、ココアが元気にそう言うと、

「うむ。そうだな」

「ココアちゃんと離れたくないー！！」

「あの家に帰りたくないー！！」

こくりと頷いたプリンの隣と対角線上から、何やら悲鳴が聞こえてきた。

「「！　なら家にー…」」

「あ？」

「む……」

窓の外に顔を向けて聞こえないふりをした顔が赤いココアの隣で、これだけは譲れないのか、バチバチと火花を散らし始めるポトフとプリン。

「ミント、俺の家にはお医者さんと美容師さんがいるぜェ？」

「む。ミント、僕の家なら……。……。と、取り敢えず広いし、セキュリティは万全だぞっ！」

そして、何やら自分の家を紹介し始めた二人。

「って、いやいや、何自分の家をオレに売り込んでるのさ？」

「あはは、ミントもてもてだねー♪」

呆れたように笑いながら突っ込みを入れるミントと、そんな彼を茶化すココア。

「あっはっはっ……勿論、ココアちゃんも大歓迎だぜェ？」

「よーし、じゃー私、ブドウのとこに行ってくるねー！」

流し目ポトフの左足を思い切り踏み付けた後、ココアは爽やかに個室から出ていった。

「いや、ヒールは真面目に痛いってココアちゃ……」

ヒールの高いブーツに踏み付けられたポトフは、足を押さえて震えていた。

「あはは……そう言えば、プリンの家ってどのくらい広いの？」

ポトフに気の毒そうな笑みを向けてから、ミントは疑問を投げ掛けた。

「む？　……むう……」

その問いに反応したプリンは、少しの間考えた後、

「たぶん、ミントが百人寝ても大丈夫な部屋が三十個ぐらいあるぞ」

と、さらりと答えた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……なんか、物置の宣伝みたいだね」

「ね」

彼の答えを聞き、ミントとポトフは思わずフリーズしてしまった。

「む……でも、別館もあるから……」

いくつあるんだ？　と真剣に記憶をめぐらせて指折り数え始めたプ

リンの隣で、

（（……住んでる人が把握し切れない家って一体……））

とか思うミントとポトフであった。

駅を出て、大通りを抜けて、運河の上に架ったアーチ状の橋を渡って、白亜の城と反対方向に進んで三番目の角を曲がった所に、その家は存在していた。

「……出た……」

この家を目指して此処まで歩いてきたクセに、まるでオバケが出たようなもの言いをするミント。

「「……！」」

「？」

すると、庭の方から何か声が聞こえてきたので、ミントがそっと家の門から庭を覗いてみると、

「アイ」

「アム」

「「メルヘン！！」」

（いきなり不審者おる……）

覗かなきゃよかった、と心底後悔した。
それは、彼の庭の真ん中でシルクハットを被った紳士とピエロ少女が何かやっていたから。

（よし、公園に行こう）

彼らに激しく関わりたくなかったミントは、荷物を引きながら公園に逃げることにした。

カラカラカラカラカラカラ

荷物を引く音を響かせながら、ミントは公園にやって来た。

「……！　……！」

が、此処でも声が聞こえてきた。

「？」

公園から声が聞こえてくるのは当たり前のことなのにも関わらず、ミントは入り口にある門から、先程と同じように中を覗いてみた。
――すると、

「ユウ、準備完了、です」

「よしきた」

『”よしきた”じゃないわよって言うか此処から出せって言うかこの二人なんとかしなさいよアオイいいいい?!』

「ふふ、小鳥さん、こんにちは」

『聞けえええええ!?』

「さてと、始めるか」

「はい、です」

『いやいやいやいや待て待て待て待てホントお願いします此処から出してくださいリン様ユウ様仏様あああああああ?!』

公園の木の下に、今まさにサンドバックごっこを始めようとしているリンとユウと、麻袋に入れられて木の枝にロープで吊されているウララと、小鳥を指に止めているアオイがいた。

（……本当にプリンかポトフの家に行こうかなあ）

何やら安息の地を失ってしまったかのように、心の底から溜め息をつくミントであった。

「あ、ミント！」

（！！）

「……ミントさんも参加します、ですか？」

「今なら無料承り中だ」

『キャンペーンんんんんん？！』

見付かっちゃった……。

第５３回　朝一日和

夏休み初日の朝。

「……くう……」

王都市、シャイアにある赤い屋根のお家の一室で、ミントはぐっすりと眠っていた。

バァン！！

が、しかし、

「みんとーん！　遊ぼうまろー！」

『む～！！』

彼の眠りを妨げるように、ピエロ少女、マロと、まるっこい魔物の夢魔、通称むぅちゃんが、やかましく部屋に飛び込んできた。

「……ん、後でね……」

布団に潜り込みながら、彼女たちを適当に追い払う為の返事をするミント。

「まろぉ、起きてまろ～！　後じゃなくて今遊ぼうまろ～！」

『む～む～！』

布団に潜った彼を、揺すり起こそうと試みる少女と魔物。

「……ん、分かったってば……」

ちょっとイライラしてきたミント。

「分かったならお布団から出てきてまろ～！　全然分かってないまろ～！」

『む～む～む～む～！』

なおもしつこく食い下がるマロとむぅちゃん。

「……だからぁ……」

ので、

「あーそーんーでーあーそーんーでーあーそーんーでーまーろ―…」

『む～む～む～む―…』

「黙れよテメェら」

彼女たちの要望通りにベッドから起き上がったミントは、まだ幼い少女と魔物に向けて、殺気を孕んだ低い声を発した。

――彼の可愛い顔は今、怖いを通り越して、やばい。

「あい！　ごめんなさいでしたまろーっ！！」

『むむむむーっ！！』

朝っぱらから騒ぐのは良くないということを身をもって学んだマロとむぅちゃんは、テンション高めで謝罪した後、速やかに部屋から出ていった。

緑が美しい広大な土地、アラモードの丘の頂上に、宮殿のごとく巨大な豪邸が建っている。

コッ……

何十とある部屋のうちの一室の前に、抜き足さし足忍び足でやって来た彼、

「プぅぅぅリぐはあ?!」

ビタァン!!

お高そうなスーツに身を包み、青い髪をオールバックにしてビシッときめているプリンパパは、扉を突き破ろうとしてそれに顔面から衝突した。

「なっ……何故開かないんだ?!　プリン!?　プリン?!」

鼻を押さえながら、バンバンと扉を叩き始める、復活の速いプリンパパ。

『プリン!?　お父さんだよ?!　此処を開けてくれ!!　プリン、お父さんが会いに来たんだよ?!』

バン、バンバンバンバン!

「ぐー」

扉の向こうから聞こえてくる騒音にまったく起きる気配のないプリンは、広々とした部屋にある、カーテンつきの広々としたベッドで、枕を抱えながらぐうぐうと眠っていた。

『プリン!?　私の可愛いプリン?!』

バンバンバンバン!

「ぐー」

扉の内側につくられた、真っ赤なソファーや、アンティークなテーブルなどから成る強固なバリケード越しに聞こえてくる騒音に、ぴくりとも反応せずに眠り続けるプリン。

『うわーん！！　プリンー！！』

バンバン！　バンバン！

「……む……」

ころんっ

「……ぐー」

ついに泣き出してしまったプリンパパに気付くことなく、ころんと寝返りを打つプリン。

『うふふ、あなた、会議に遅れますわよ』

『！　ママ！　プリンが、プリンが！！』

『うふふ、いつものことでございましょう？　と言いますか、つべこべおっしゃってないで、とっとと行きやがってくださいましね』

『うわーん！！』

ずーりずーりずーりずーり

「ぐー」

プリンママに強制連行されたプリンパパの泣き声も虚しく、プリンはひたすらに眠り続けるのであった。

「むぅ……ピクルス隊長」

謎の隊長の夢を見ながら。

「ん……」

爽やかな日射しが差し込み、ココアがゆっくりと目を開けると、

「あ」

目の前に、ピンク色の髪の青年の顔があった。

「お、おはようマイシスター―…」

「ダークネスサクリファイス！！」

ドカアアアアアン！！

ので、ココアは迷うことなく彼、ココア兄に、目覚めの最大魔法を

かました。

「ははは、今日も元気いっぱいで可愛いなあ、マイシスタ♪」

「もーバカキモクソ兄貴！　ヒトの部屋に勝手に入んないでって何回言ったら分かるのよー？！」

ケロッと起き上がって笑う彼に、ココアが声を荒げてそう言うと、

「駄目じゃないかマイシスタ。〝お兄ちゃんV〟って呼ばなきゃ」

何やら違う返事が返ってきた。

「うっさいバカ！！　速く出てけ！！」

「ええ？　だってまだ目覚めのキッスを―…」

「しなくていいよって言うかしたら殺すよー！？」

「ははは、照れるなマイシスタ♪」

「照れてないって言うか速く出てってよー！！」

「ん？　今から着替えるのか？　お兄ちゃんが手伝ってあげるゾ☆」

「いらないから速く出てけってさっきから言ってるでしょー？！」

「ははは、遠慮するな。お兄ちゃんとマイシスタの仲じゃないか」

「もーホント頼むから五十八回くらい死んでくれませんかー？！」

話が通じているのか疑わしいココア兄に、頭を抱えながら叫び続ける彼の妹、ココア。

「ん？」

そんなココアをよそに、ココア兄は、彼女の枕元に飾ってある写真立てに気が付いた。

「……。……ココア？」

「何よー！？」

そして、先程のバカ明るい声から一変して、真面目な低い声で、未だ頭を抱えているココアに質問をした。

「このココアと一緒に写ってる人、だあれ？」

と、写真立てを手に取りながら。

「はあ？　ポトフだけど、それがどーかしー…」

勢いのままに答えた後、ココアはハッとした。
そして、バフッと顔が赤くなった。

「……へーえ、ポトフっていうんだ～？」

「っ！　いいからもう出てってよー！！」

にっこりと笑ったココア兄の手から、写真立てを奪い取ると、

ゲシッ！！

バシィン！！

ココアは、彼を部屋の外へ蹴り飛ばした後、部屋の扉を思い切り閉めた。

「……お兄ちゃん、ポトフくんにゴアイサツしたいなぁ……はは、ははははははははははははははは」

機械的に笑いながら、ココア兄は、どす黒い殺気を垂れ流しつつ自分の部屋に帰っていった。

「ふェくしっ！！」

ミンミンと蝉が鳴く森の中で、ポトフは大きなくしゃみをした。

「……？　風邪かァ？」

鼻に右手を当てながら、寒気もしたし、とか思いながら、小首を傾げるポトフ。

「……まァいいか」

しかし、今のポトフにとって、それはどうでもいいこと。

「あっはっはっ！　鹿ステーキ鹿ステーキ♪」

何故なら、彼の左手には、しっかりと鹿が捕まえられているから。

「あ、おかえり、ポトフくん」

森の奥にある、大きな病院が特徴的な静かで小さな町、アクリウムの青い屋根のお家帰ってくると、茶髪お兄さん、ソラが笑顔で出迎えてくれた。

「ただいまァ、おにィさん！」

そんな彼に、こちらも笑顔で挨拶した後、

「朝食狩ってきましたァっ！！」

と言って、ポトフはソラに今しがた狩ってきた鹿を見せた。

「わあ、凄いね！」

立派な鹿を見て、ソラはぱちぱちと拍手をしながら、

（僕は朝食を”買ってきて”って、言ったんだけどなあ……）

とか思っていた。

「……じゃあ、どうしよっか？」

まあいいか、と半ば何かを諦めつつソラが小首を傾げると、

「生！」

とポトフが即答した。

「却下」

ので、ソラも即答した。

「えェ～？　……じゃァ、レアで」

「うん、分かった」

口を尖らせながら妥協したポトフに、ごめんね、と微笑みながらソラが頷くと、

「駄目よ。ちゃんと中まで火を通さなくちゃ」

という声が、後ろから飛んできた。

「動物のお腹の中には、数え切れない程たくさんいるんだから」

二人がそちらを向くと、金髪お姉さん、エリアがたしなめるようにそう言った。

「！　エリア」

「！　おねェさん」

何が、とは、敢えて聞かないソラとポトフ。

「お返事は？」

「……はァい」

「よろしい。じゃ、ソラ」

「うん、ウェルダンだね。バーンバニッシュ」

という具合いに、三人はいつものように朝食を始めたのであった。

「よし、ワラ人形を買いに行こう」

丁度その頃、公園に行こう的なノリでココア兄がワラ人形を買いに出かけたことなど、知るよしもなく。

第５４回　誤認日和

ピヨピヨピヨ

広大な丘の向こうから日が昇り、小鳥たちが爽やかに歌い出した頃。

「……む……」

カーテンつきの広々としたベッドからむくりと起き上がったプリンは、寝癖がついている長い髪をそのままに、近くに置いてある時計を手に取った。

「……」

その時計には、夏休み二日目の日にちが表示されていた。

「……新記録」

新記録達成。

一日と十二時間寝てのけたプリンは、別に記録に挑戦していたわけではないのだが、グッと地味にガッツポーズをした。

「ぷわ……ふむ、プリンが食べたいな」

その後、小さな欠伸をし、プリンはようやくベッドから降りて活動し始めた。

大勢の人で、いつもより賑わっている王都市、シャイアにて。

「ん？」

コーラを大量に買って店から出てきたミントは、駅の近くに人だかりが出来ているのを発見した。

「なんだろ？」

コーラのフタを開けながらそう呟いた一秒後に、その答えが出た。

「！　ミントォ！！」

人だかりの向こうから、黒髪眼帯少年が元気よく手を振ってきたから。

「あ、ポトフ」

そんなポトフに、ミントが薄ーく反応すると、

「会いたかったぜミントォ！！」

ガバーッ！！

彼は群がっていたお姉さん方をぴょんと飛び越え、ミントをガバーッと抱き締めた。

「うん。コーラ飲めないんだけど」

抱きついてきた彼にさらりと文句を言うミント。

その間に、ポトフに飛び越えられたお姉さん方は、なんだ彼女がいたのか、と、渋々その場から去っていった。

「あっはっはっ！　ミントが俺の彼女だってェ～♪」

「うん。めちゃんこ不服なんだけど」

楽しそうに笑うポトフと、さらりと文句を口にするミント。

「……で、なんなのさそのカッコは？」

「え？　かっこいい？」

「言ってない。カッコ」

何か聞き返してきた彼をばっさりと切り捨てた後、ミントが尋ねると、

「だって今日はお祭りだろォ？　だから、浴衣ァ♪」

ポトフはヒラヒラと袖を振りながら答えた。

「……前、開けすぎじゃない？」

彼の浴衣を見ながら、ミントがさらりとそう言うと、ポトフはフッと口を綻ばせて、

「ドキドキした？」

と聞きながら、ミントの右の頬に右手を添えた。

「うん。ぞわぞわした」

流し目ポトフを再びばっさりと切り捨てた後、ミントはその手を払い、すたすたと歩きながら平然とコーラを飲み始めた。

「ん？」

しばらく歩いていると、ミントは路地に二人の男を発見した。

「……はェ？」

それに反応をして顔を上げる、若干落ち込んだのか、ミントの後ろをトボトボとついてきたポトフ。

「あ、ポトフが二人いる」

「はェ？！」

ミントが前方をすっと指さしながらそう言うと、ポトフは驚いたようにそちらに目を向けた。

「キミらすっごく可愛いねぇ」

「彼女ぉ、俺たちと遊ばなぁい？」

そこには、背の高い男二人が、壁に女の子を追い込んで何か言っている姿があった。

「俺、あんなにブサイクじゃねェぞミント？」

「そっちじゃねぇよ」

「それに、あんなにナンパじゃねェ」

「あはは、どの口がそんなこと言ってるのカナ？」

ぷうっと頬を膨らませた彼に、ミントが爽やかに突っ込みを入れると、

「あんたたちとなんか遊ばないよー！」

「そうよ！　あんたたちなんかお呼びじゃない～～～みたいな～～っ！」

捕まっている女の子二人が強気な返事をした。

「「！」」

その声と口調に驚くミントとポトフ。

「このめちゃんこラブリィ～な間伸び口調とこの声は……」

「この実際今時いるのかよと思わせる口調とこの声は……」

それぞれ呟いた後、顔を見合わせて頷き会ったポトフとミントは、キッと男二人に目を向けた。

「ろうしょ―…」

ガシッ

「―…？！」

「ちょっとそこのお兄さん方？　二人とも嫌がってるじゃないですか」

そしてポトフが強烈な蹴りをお見舞いしようとしたところ、ミントにガシッと止められてしまった。

（ミント！？）

（お祭り前に街の中で変な騒ぎが起きたら、お祭りがなくなっちゃうでしょ？　だから、ここは穏便に）

（え？　ウ音便？）

（古典じゃねぇよ）

こんな非常時にもすっとぼけているポトフに、ミントがさらりと突っ込みを入れたところ、

「「あ？　んだ……と……？」」

ミントの言葉に威勢よく振り向いたお兄さん方は、振り向いたと同時にその勢いがなくなった。

「「……？」」

そんな彼らに、ミントとポトフが疑問符を浮かべていると、お兄さん方はニタリと笑ってミントに話しかけてきた。

「キミ、このコたちのお友達？」

「彼女も可愛いねぇ～。どう？　お友達と一緒に俺たちと遊ばない？」

と。

どうやら、彼らはミントを女性と認識したようだ。

ついでに言っておくと、ポトフに関してはアウトオブ眼中だ。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……。ポトフ」

ややあって、コーラが大量に入った袋をそっと道に置いたミントが、隣にいる友人の名を呼んだ。

「なんだミントォ？」

彼の言葉に、わざとらしく反応するポトフ。

「やっぱいいよ。やっちゃって」

そんな彼に、恐ろしいことをさらっと言うミント。

「……祭りは？」

フッと笑いながらポトフが問い掛けると、

「大丈夫、中止になんかならないよ。って言うかむしろ」

ミントは、その両手に薔薇の鞭と食人植物の鞭を装備した後、

「これから始まるところだしね」

と、答えた。

「りょォかい♪」

――こうして、王都市、シャイアの一角で、

「俺のココアちゃんに手を出すなァァァ！！」

「チロルにも、って言うかオレは男だあああ！！」

一足先に夏祭りならぬ血祭りが始まったそうな。

第５４回　誤認日和（後書き）

ドカンバコーン！！

ココア
「お……”俺の”って……（赤面」

チロル
「いいなぁ……。アタイもミントきゅんにぶたれたい……（うっとり」

ココア
「……っ（鳥肌」

第５５回　鈍感日和

パンパン

「……で、どうしてこんなとこにいるのさ？」

服についた汚れを払い落としながら、ミントがココアとチロルに尋ねると、

「ミントきゅんのお家に行こうと思った～～～みたいな～～～っV」

チロルは彼の右腕に抱きつきながら、キャピッと明るくそう答えた。

「……」

「……」

「……」

「？」

彼女の爆弾発言に、ぽかんと口を開けて固まってしまったミントとポトフと、にやりと楽しそうに笑うココアと、不思議そうに小首を傾げるチロル。

「……え？　えーと、オレの家に？」

「うん♪」

「い、いやでもほらオレの家は超汚いと言うか意味不明と言うか不審者が大量発生していると言うか―…」

にっこり笑って頷いたチロルに、焦りながらそう言うミント。

どうやら彼は、彼の家に大量発生している輩とチロルを会わせたくないようだ。

「……。……ダメ？」

すると、チロルがうるうるした瞳を向けてきたので、

「ウェルカムですはいーっ！！」

ミントはテンション高めで応答した。

「本当！？」

「ははは、勿論サ！　ささっ、しゅっぱーつ！」

オレのバカ、とか思いながら、彼は拳を振り上げて進み始めた。

「？」

と、その時、

「あれ？　どしたの、ポトフ、ココア？」

ミントは不思議そうに小首を傾げた。

「家、こっちだよ？」

そして、退散しようとしていたポトフとココアに、前方を指さしながらそう言った。

「……」

「……」

「……」

「？」

彼の爆弾発言に、今度はポトフとココアとチロルがぽかんと口を開けて固まり、ミントが小首を傾げた。

「……え？　いや、でも、なんと言いますかー……」

「お、おォ……ココアちゃんと俺は遠慮させていただくぜェ？」

「ほ、ホラ！　二人がこう言ってることだし……」

素で首を傾げている彼に、焦りながらココアとポトフとチロルがそう言うと、

「なんでよ？　一緒に行こうよ」

二人が遠慮する理由が理解出来なかったミントは、にこっと笑ってポトフの腕を掴みながらそう言った。

（（え、えええ～……？））

勿論、ポトフにミントの手を振り払うことなんて出来やしない。
こうして、予想外にミントが鈍感だった為、結局彼の家には四人で行くことになってしまったのであった。

ミントの家の門から、二人の少女がひょっこりと顔を出した。

「リン隊長！　只今この家にミントとポトフとココアと謎の美少女が入っていきました！」

「……だぶるでぇと、だとしても、家に行くならココアとポトフさんには空気を読んで欲しいところ、ですね、ウララ窓際隊員」

楽しそうに報告するウララと、空気読めよ、と無表情で言うリン。

「そうね……って、なんで窓際！？」

「窓の外にします、ですか？」

「リストラされたあ?!」

などと、ウララとリンが門の前で騒いでいると、

「!」

ゲシッ

「きゃあ?!」

と、後ろから何者かに蹴り飛ばされた。

が、事前にそれを察知したリンは、ひらりと華麗にかわしてみせた。

「った、いきなり何すんのよ?!」

一人だけ蹴り飛ばされたウララがバッと後ろを振り向くと、

「邪魔」

そこには、ユウが立っていた。

「邪魔って、別にこれだけ空いてるんだから通れるでしょ?!」

「気分」

「いや気分でヒト蹴るなよ最悪だなテメェ?!」

「目障り」

「さっきよりはちゃんとした理由かもしれないけどさっきより最悪

になったわよおおお！？」

「……じゃあなんとなく」

「気まぐれえええええ？！」

「うざい逝け。《暗雲の閃光は破滅をもたらす》」

ちゅどおおおおおん！！

てな具合いに、ウララがユウの魔法にぶっ飛ばされたところ、

「お待たせ、ユウ。って、あれ？　どうしたの？」

そこへ、公園で小鳥さんとさよならしてきたアオイがやって来た。

「ああ、盗賊の肩に蚊が止まっててな」

魔法発動の理由を尋ねてきた彼に、ユウがさらりと答え、

「わあ、優しいね、ユウ」

「どこがじゃボケェェェェ？！」

アオイがくすりと笑ってそう言った直後、ウララの飛び膝蹴りが飛んできた。

「回復、はえぇ、です」

「……チッ。弱かったか」

「なんか残念がってるって言うか殺す気でしたあああ?!」

「「……」」

「わざとらしく目線逸らしてんじゃないわよおおおお!?」

「痛いっ、痛いよウララっ?」

何やら残念そうなリンとユウと、はらいせにアオイをぽかぽか叩くウララ。

「ヒトの家の前で何やってんのさ?」

するとそこへ、ミントとその他三人がやって来た。

「お前の家の前でこの二人がコソコソ盗聴―…」

「なあああんでもないわよ皆さあああああん?!」

とんでもないことを言おうとしたユウの口を両手で塞ぎながら、ウララがやかましくそう言うと、

イラッ

「《壮麗なる龍はすべてを呑み込む》」

ドパアアアアアン!!

その両手を無理矢理離されたウララは再び、イラッときたユウに魔

法でぶっ飛ばされた。

「リンたち、お祭りにミントさんたちも誘おうと思った、です」

その間、しゃあしゃあとミントの問いに答えるリン。

「わ、本当？　オレたちも丁度お祭りに行くとこだったんだぁ♪　ね？」

それを聞いて、ミントがにこっと笑いながら後ろの三人に同意を求めると、

「「う、うん……」」

彼らは、引きつった笑顔で頷いた。

「それは丁度いい、です」

「ね！　じゃあ、早速お祭りにしゅっぱーつ！！」

「わあ、お祭りだって、ユウ！」

「ああ、楽しみだな」

「ごめんね、チロルー？　私たちが、先にお祭りに行く、って言ったばっかりに……」

「……いいの……席外してくれようと思ったんでしょ……？」

「……ミントって意外と鈍いんだなァ？」

そんなこんなで、七人は仲良くお祭りに出掛けて行ったのであった。

「……私、放置……？」

ズタボロになったウララを残して。

第５６回　豪邸日和

緑の丘の上、巨大できらびやかな豪邸の一室で、ミントは言われた通りにペンを動かしていた。

「詰まり、答えは４１．８％だ」

プリンがさらりと言うと、

「はへ～、ありがとう、プリン！」

しっかりと答えを書き終えたミントが、顔を上げて彼にお礼を言った。

「……照れる」

ので、いつもと変わらず枕で顔を隠すプリン。

ぽふん

「いやぁ、にしても、プリンの家っていろいろ凄いね～？」

夏休みの宿題を魔法でしまうと、ミントはくるりと辺りを見回しながらそう言った。

「む？」

「あら自覚なし？」

「ミントのお家と変わらない」

「うん。どこら辺が？」

そう言われて不思議そうに小首を傾げたプリンに、ミントが爽やかに突っ込みを入れると、

「テーブルがあって、椅子があって、クローゼットがあって、あかりがあって、ベッドがある」

彼はそれぞれを指さしながら、ミントの家と同じ点を挙げていった。

「うん。でも、どれも質と規模が違うよね」

「うむ。ミントと同じ」

ミントはほのぼのと、プリンは嬉しそうにと、二人とも笑ってはいるが、会話はどこかすれ違っている。

「オレの家か～……あ、ねぇプリン？」

「む？」

「この前ココアに言われたんだけど、オレって鈍感なの？」

ミントの家、と言われて先日の祭りの後にココアに言われたことを思い出した彼は、小首を傾げたプリンに聞いてみた。

「？」

（……。……鈍感……感覚が鈍いこと）

すると、プリンは鈍感の意味を考えた後、

「えいっ！」

つねっ

「ひたっ！」

真剣な面持ちで質問してきたミントの頬を軽くつねってみた。

すると、ミントは正常に反応した。

「うむ。大丈夫だ。ミント正常」

「本当？　よかったぁ」

ふふふ、と笑いながら言うプリンと、突っ込み役の役目を果たさずに素で安堵するミントであった。

「それにしても、ポトフ遅いね？」

「む。忘れてた」

「こらこら」

アクリウムの森を抜け、広大な丘を登るとそこに現れたアラモード邸の門の前に、ポトフは呆然と立ち尽くしていた。

「……デカすぎではありませんか……？」

屋敷も庭も敷地も門までもがデカすぎなプリンの家の前で、ポトフがぽつりと呟くと、

ピピッ

『身長１８０センチ、黒髪に右目の眼帯に左耳の十字架ピアス』

突然、ポトフ三人分くらいの高さの門が口を利いた。

「おォ？！　なんか門に分析されたァ！？」

ので、ポトフは素直に驚いた。

『該当。ようコそ、アラモード邸へ』

プリンがあらかじめ入力しておいたデータに該当したので、門は彼にアラモード邸への道を開いた。

『――馬鹿犬様』

と、言いながら。

「……馬鹿犬って……」

不満を感じたポトフであったが、ここで反論したら門を閉められてしまいそうな気がしたので、敢えて何も言わないことにした。

（だいたい、馬鹿犬って、馬だか鹿だか犬だか分かんねェじゃねェか）

代わりに、わけの分からない文句を心の中で呟きながら、ポトフはアラモード邸へと歩き出した。

カチ

「カチ？」

ちゅどおおおおおん！！

「ちゅどおおおおん?!」

突然庭から爆発音が聞こえてきたので、ミントがびっくらこいていると、

「大丈夫。地雷の音だ」

プリンはさらりとそう言った。

「大丈夫要素どこにもねえええ?!」

ので、ミントは勢いよく突っ込みをかました。

「ななな、なんで庭に地雷が埋めてあるのさ?!」

窓に駆け寄り、もうもうと上がっている爆煙を見ながら、ミントがプリンに訪ねると、

「侵入者よけだ」

彼は再びさらりとそう言った。

「そんな、猫よけみたいにさらっと言われても……」

「ふふふ、言っただろう？　僕の家はセキュリティが万全だ、と」

「確かに言ってたけどさあ……!!」

ふふふ、と慎ましく笑う彼に、なんか違うだろ、と頭を抱えながら

突っ込んでいる途中で、

「――侵入者？」

ミントは侵入者という言葉にハッとなった。

「ちょ……待って？　侵入者？」

「うむ。侵入者」

ミントの言葉に、こっくりと頷くプリン。

「……ええと、地雷はさっきの一つだけ？」

「ううむ。ちゃんとしたルート以外のほとんどの所に埋まってる」

ミントの質問に、ふるふると首を横に振るプリン。

「でも、地雷踏んだら吹っ飛ぶよね？」

「うむ。吹っ飛ぶな」

「あっ……はは……詰まり……」

プリンの答えを聞き、ミントがギギギと窓の外に目を向けると、

ちゅどおおおおおん！！

ちゅどおおおおおん！！

ちゅどおおおおおん！！

大惨事。

「ポトフううううう？！」

「ふふふ、大爆発」

叫ぶミントと、黒く笑うプリン。

やはり、二人はどこか、すれ違っていた。

第57回　手作り日和

ミントとポトフがアラモード邸を訪れる前の晩。

「はわわ……プリン、き、キッチンなんかに立ったら危ないじゃないかっ？」

プリンパパは、厨房の入り口から中をこっそりと覗いていた。

「うふふ、明日はお友達がみえるから、おもてなしの品を作るようですわ」

そこへやって来た、紺色のウエーブがかかった長い髪の淑女、プリンママが上品に笑いながらそう言うと、

「な、なんて超いい子なんだ……っ！！」

プリンパパは、感動して滝のごとく涙を流し始めた。

べきょ

「うむ。卵を割った」

卵を割ったプリンが、アラモード邸の使用人さんに報告すると、

「はい、プリン様。割れましたね。文字通り」

そりゃあ、落とせば割れるよなぁ……と、心の中で思いつつも、決して表に出さずに極力笑顔でいる、それがメイドさんの務め。

「ですが、卵はこうしてボウルに入れなければなりません、プリン様」

上っ面だけ笑いながら、メイドさんが卵の割り方を教えると、

「うむ。分かった」

コンッ

パキョ

プリンは器用に右手のみで卵を割ってみせた。

何故なら、左手に枕を持っているから。

「……お上手です。では、次はこの中に砂糖を」

何やら釈然としない苛立ちを覚えたメイドさんであったが、彼女は次の行程に進むことにした。

「これ？」

砂糖の入った袋を手に取って、プリンがぴこっと小首を傾げると、

「それです。それを量って―…」

メイドさんはこくりと頷いた。

「えいっ！」

ドサーッ

ので、プリンは砂糖をボウルの中にひっくり返した。

「―…。ご立派です」

取り敢えず褒めるメイドさん。

「……照れる」

照れるプリン。

「では、次にその中に牛乳を」

「牛乳……ウシさんは何処にいるんだ？」

「只今連れてきます」

オイオイそのまま続けるのか、とか、いや別に搾り立てじゃなくてもいいだろ、とか、って、本当に連れてきちゃうのかよ、とか、いろいろ突っ込みたいところだが、悲しいかな、この家には突っ込み役が存在しない。

「連れてきました」

『んモーゥ』

「わー！　ウシさん！」

「……やっぱプリン超可愛い……ああ、お父さん、なでなでしたく

なってきたあ！！！」

「うふふ、およしなさい。殺されますわよ？」

そんなこんなで、アラモード家の夜は更けていくのであった。

「も……ぜってェ来ねェぞこんなトコ……！」

やっとのことで、と言うよりも、地雷で上手く飛ばされてアラモード邸の玄関に辿り着いたポトフは、ボロボロズタズタな上に息切れ状態でそう言った。

「大丈夫、ポトフ？！」

「おォミント、大丈夫じゃねェぜェ」

慌てて彼に駆け寄ったミントに、爽やかに応答するポトフ。

「だ、だよね……」

ぐってりとうつ伏せに倒れているポトフを見て、ミントが彼の言葉に納得した。

「あっはっはっ……祭りの日にミントのおかァさんが言ったことが当たってんのかもなァ？」

ぐぐぐっと状態を起こしながら、ポトフが力なく笑ってそう言うと、

「そんな、ポトフが誰に呪われてるって言うのさ？」

あいつの言ったことなんか真に受けたらダメだよ、と言いながら、彼が起き上がるのを手伝うミント。

「メディケーション」

完全に起き上がってから回復魔法を唱えて自分を回復させた後、

「いやァ、もしかしたら、世界じゅうの野郎共が俺のかっこよさに嫉妬して♪」

「何言ってんのさこのナル―…」

にこっと笑ってこちらを向いたポトフを見て、ミントは思わず固まった。

「？」

首を傾げたポトフの前で、ミントはポケットから杖を取り出し、

ぽんっ

彼の手に、ミントがいつだったかポトフに貰った眼帯を呼び出した。

「――！」

ミントの動作にハッとして反射的に右目に手を当てるポトフ。
そこには、いつもの眼帯がなくなっていた。
代わりに、右目を縦一直線に貫いている傷が現れていた。

「？！　バ……ババロ――ポトフくん！？」

「「！」」

突然の前方からの声に、ミントとポトフが反応してそちらを向くと、

「ど、どうしたんだ、その傷は！？　一体何が――…」

そこにいたのは、青髪の紳士、プリンパパ。
彼は酷く慌てた様子で、彼の息子の元に駆け寄った。

「その傷をつけたのは、お前だ」

直後、彼の言葉をばっさりと遮るように、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「！？　プリン？！」

その場に現れた、枕と黒い物体を持ったプリンに、どういうことだ、とプリンパパが顔を向けると、

「……覚えていないのか？　今から十三年前のクリスマスに、自分が傷付けた狼のことを」

プリンは彼の父親に、いつもの無表情のまま、さらりとそう言った。

「？　――！」

何故その話が出てくるのかと思った直後、プリンパパはハッとしてポトフの傷を見た。

「そ、そんな……」

自分は確かに十三年前のクリスマス、黒い狼の右目を護身用のナイフで貫いた。

そしてその日は綺麗な満月で、毒の薬を飲まされたポトフは狼男。

「……っ！！　す、すまない……っ！！」

自分の子どもを傷付けた上に、右目を失わせてしまったことに対し、プリンパパは頭を深々と下げて心のそこから謝罪した。

「……」

しかしそれは、決して謝って済むようなことではないもの。

ミントが心配そうに見上げるなか、ポトフはゆっくりと口を開いた。

「あ、別に気にしないでください」

「「え」」

彼のあまりにもさらっとした言葉に、思わず間が抜けた声を発してしまったプリンパパとミント。

「だって、それは狼から枕を守ろうとしてやったことでしょう？なら、正当防衛ですし、立派なことじゃないですか」

すると、ポトフはミントから眼帯を受け取り、

「い、いや……だが、私は―…」

「自分の子どもの為に体を張って危険に立ち向かう」

「―…ポトフくん……」

プリンパパの反論を聞かずに、頭の後ろでギュッと眼帯の紐を結んだ後、

「貴方のような人が自分のおとぉさんで、俺、嬉しいです」

ポトフはにこっと笑って彼に向けてそう言った。

バキューーーーーン！！

すると、何処からか銃声が聞こえてきた。

「「バキューン？」」

何？　どっか撃たれた？　と、ポトフとミントが辺りをキョロキョロと見回していると、

……ドサ

プリンパパが倒れた。

「え、えええ?!　おとォさん!?」

「撃たれた!!　ゼリーさんが何者かに撃たれたああ!!」

「クセモノォォォォ?!」

ので、ポトフとミントはわたわたと騒ぎ出した。

「気にするな。いつものことだ」

すると、プリンがさらりとそう言った。

（（いつものことなの?!））

疑問に思ったミントとポトフはほっといて、

「テレポート」

ピュ

プリンは、倒れたプリンパパを何処かに瞬間移動させた。

「……さて、邪魔がいなくなったところで」

（（どこに瞬間移動させたの?!　ねえ今どこに瞬間移動させたの

！？））

邪魔、と聞いて、プリンが父親を何処に瞬間移動させたのか激しく心配になるミントとポトフ。

「ようこそ僕の家へ。来てくれてありがとう」

そんな彼らに、プリンは何事もなかったかのように、先程持ってきた黒い物体を差し出した。

しゅぴぴっ

「む？」

すると勢いよくミントとポトフの手が上がったので、プリンが小首を傾げると、

「「なんですかその物体は？」」

二人は綺麗に声を揃えて彼に質問した。

それを聞いて、プリンは、なんだそんなことか、とか思いながら、さらっと答えてくださった。

「プリンだ」

と。

「「嘘つけェェェェェェ？！」」

直後、勢いのいい突っ込みが飛んできた。

「嘘なものか。これは正真正銘、ちゃんとしたプリンだ」

「これのどこら辺がプリンなのさ?!」

「見えねェよ?!　アフロにしか見えねェよ!?」

「……じゃあ、アフロプリンだ」

「「アフロプリンってなんだァァァァァァ!?」」

こうして、二人はアフロプリンを食べることになったのであった。

「「食えるかァァァァァ?!」」

「……一生懸命作ったのに……」

「「え――?」」

第57回　手作り日和（後書き）

ぱくっ

プリン
「おいしい？」

ミント
「……」

ポトフ
「……」

ミントとポトフ
（（……アフロっぽい……））

アフロプリンは、アフロ味？

第５８回　植物日和

朝っぱらからすでに暑い夏のある日、シャーンは朝食を取りに一階に降りてきた。

「おお、美味そうな焼き魚だな。ジャンヌ、醤油」

自分の分の朝食が用意されている席に着いて、すでに朝食を取っているジャンヌに醤油を取ってくれるように頼むシャーン。

「合点承知！！」

それに合点承知したジャンヌは、

ぶくぶくぶくーっ

と溶け、迷うことなくシャーンの焼き魚の上に乗っかった。

「……食えってか。これを食えってか」

「さ、流石ジャンヌ様……！！　メルヘンです！　半端なくメルヘンです！！」

彼女の行動に、テンションの低い反応を示すシャーンと、瞳をキラキラと輝かせてテンションの高い反応を示すフラン。

「ゲヘヘ！！　名付けて、”謎の液体に浸っている焼き魚”！！」

「メルヘンすぎですジャンヌ様ー！！」

「どうしたまろか、パパさん？　食べないまろか？　みんとんのお料理はおいしいまろよ？」

『む～？』

「ああ、美味しかったんだろうな。謎の液体に浸る前までは」

「？　……よく分かんないけど、まろ、みんとんのお手伝いするまろ～♪」

『む～、む～♪』

「あっ！　駄目ですよ、マロ様と夢魔様！　貴女たちがお皿なんかを持って歩いたら―…」

ずりっ

「まろー！！」

『むむー！！』

バリーン！！

「ああ、もうほら言わんこっちゃないじゃないですか？！」

「……。これに醤油かけたらどうなるんだろうな？」

「ウチと醤油とが夢の共演？！　ちょ、やべぇそれメルヘンの極みね！！」

「まろー！！　転んだまろー！！　痛いまろー！！」

『むー！！　むー！！』

などと、三人と一匹と液体が朝っぱらから騒いでいると、

バキャ

何かが砕け散った音がした。

「『……っ』」

同時に、ピタッと口と体の動きが止まる三人と一匹と液体。

その後、彼らが先程の音がした方向にギギギと顔を向けると、

「……オレ、出掛けてくるから」

粉々に砕け散ったコーラのビンの先で、どす黒いオーラを垂れ流しているミントはそう言って、ブライト家から出掛けていった。

「「い、行ってらっしゃいませ……」」

『む～……』

そんな彼を、彼らは引きつりまくった無理矢理すぎる笑顔で見送った。

夏の強い日射しを受けてきらきらと輝く運河に架った橋を渡り、ミントは大通りにやってきた。

「「……っ？！」」

すると、先程まで沢山の人で埋まっていた筈なのに、大通りの真ん中に道が出来た。

「……」

それは、ミントが未だにどす黒いオーラを垂れ流しているからである。

「……」

いつもと比べ物にならないくらい通りやすくなった大通りを、ミントが無言で通り抜けると、

「……？」

彼は、人気の少ない細い道の向こうに、二人のお兄さんを発見した。

「……。あの二人は……」

ミントが呟くと、

「キミ、超可愛いねぇ？」

「どう？　俺たちと遊ばない？」

そのお兄さん方が、なんか喋った。

「……」

やはりあのお兄さん方は、お祭りの日にミントを女の子と間違えた二人組。

ただでさえイライラしてる時に更にイライラしてきたミントは、

「ドレインフラワー」

彼らに左手を向けて魔法を唱えた。

「あ、はい。いいですよ」

そして、壁に追い込まれている人物がほんわか了承したのにも関わらず、

「芽吹け」

ミントは彼らに向けた左手を右上に払った。

「ホント？」

「はい。ええと、何をして遊びますか？」

ポコッ

「―…て、あれ？」

ミントが魔法発動の合図を出すと、二人のお兄さん方の頭から双葉がポコッと飛び出した。

「わあ、可愛い葉っぱですね」

「「は？」」

再びほんわか発言をした人物――アオイの言葉に、お兄さん方が疑問符を浮かべると、

ぐぐぐぐぐ……ポンッ！

頭の双葉は急激に成長し、その先端に、綺麗な向日葵（ひまわり）の花が咲いた。

「わあ、ひまわり！」

綺麗な向日葵を見てくすりと笑うアオイ。

どうやら彼は、その向日葵に養分を吸い取られて倒れているお兄さん方に気付いていないようだ。

「て、あれ？　アオイ？」

お兄さん方がカラカラに萎れて倒れたので初めて見えた壁に追い込まれていた彼を見て、ミントはびっくり驚いた。

「あ、ミント。おはよう」

「おはよう――っ、じゃなくって！！」

くすりと笑って挨拶してきたアオイに挨拶を返した後で、

「何危ない人たちと遊ぼうとしてんのさ?!」

と、ミントは遅ればせながら突っ込みを入れた。

「わあ、朝から元気いっぱいだね」

が、しかし、アオイはくすりと笑ってそう言った。

「いやいや誰のせいだと思って―…」

「見て見てミント。ひまわりが咲いてるよ」

「―…。ソウデスネ」

ほんわかアオイに突っ込む気が失せたので、素直にこっくりと頷くミント。

「綺麗だね～」

大輪の向日葵を見て言うアオイに、

「……。アオイって、植物が好きなの？」

と、ミントが小首を傾げながら質問した。

「うん！」

アオイはくすりと笑って頷いた。

「本当？　じゃあ、ついてきて！」

それを聞いて、ミントは嬉しそうに駆け出した。

「え？　あ、待ってミント！」

ので、アオイは慌てて彼を追い掛けた。

街の門を出て、シャイアから少し離れた所にある森の近くの一本の大きな木の下に、ミントとアオイはやって来た。

「わあ……！」

「どう？　綺麗でしょ？」

驚いたアオイの隣で嬉しそうに言うミント。
彼らの目の前には、綺麗な花々で彩られた美しい花壇が広がっていた。

「これ、ミントが作ったの？」

「うん、そう。現実逃避する為に」

びっくり顔で尋ねてきた彼に、何やら悲しい答えを返すミント。

「すごいね～！」

「えへへ～♪」

アオイが感動して、ミントが照れたように笑っていると、

べろり

「わ！」

アオイは突然何者かに顔を舐められた。

「な、何？」

と、不思議に思ったアオイが横を見ると、

『ジェラ』

そこには、黄緑色の巨大な口のオバケが。

「わ、マッドが攻撃してこないなんて、アオイは本当に植物が好きなんだね！」

口のオバケ、もとい、マッドプラントは、ミントがそう言った直後、弾けるように笑い出した。

『『ジェラララララジェラジェララア！！』』

花壇の隣に生えていた大きな木は、ウサギさん寮のミントたちの部屋にいた、あのマッドプラントだったのであった。

ベビーだったマッドも、今や二階建ての家並に成長して、口も沢山ついている。

「わあ……」

棘のように鋭い牙を光らせ、紫色の分厚い舌をだらりと垂らし、狂ったように笑い続ける奇怪な植物、マッドプラントを見て、

「可愛い♪」

と第一声を発したのは、恐らくアオイとミントくらいであろう。

「だよね！？」

「うん！」

『『ジェラララァ！！』』

第５９回　叫日和（前書き）

後書きにお知らせがあります。ちなみに、サブタイは叫び＋日和で叫日和です。

第59回　叫日和

星が綺麗に瞬く夜。
パーティー会場から漏れ出た淡い光が照らすバルコニーで、彼はその手をすっと差し出した。
驚いたような表情で彼女が彼の顔に目を向けると、彼は綺麗な顔に麗しい微笑みを浮かべ、彼女だけに向けて恭しくこう言った。

「……俺と一緒に、踊っていただけませんか？」

≫≫≫

ぱちっ

「はうにゃあっ？！」

ガバーッ！！

というところで目が覚めたココアは、赤い顔で布団の中に潜り込んだ。

「あーもー、なんであの日の夢をって言うか、よくあの時普通に踊れたわね私ーっ！」

枕元に置いてあった、四十センチ大のペンギンのぬいぐるみを巻き添えにしながら。

「……そ、それで……あの後……」

そう呟き、右手で自分の唇を覆うココア。

「って！　何変なこと思い出してんのよキモイ私ーっ！！」

その後、ココアはそう叫びながら、ペンギンのぬいぐるみにボスボス八つ当たりした。

「おっはようマイシスター！！」

そんな時、元気な声が聞こえてきたので、

「還（かえ）れ！！」

土に！！　と付け足しながら、ココアは布団から飛び起きて、ペンギンのぬいぐるみをココア兄に思い切り投げつけた。

ココアからの酷い扱いに、床に転がったペンギンのぬいぐるみは、どんよりと哀愁を漂わせ始めた。

瓦屋根の、巨大で豪勢な旅館にて。

「よし、此処だねー」

涼しげな配色の着物に身を包んだココアは、襖の前で正座をし、それを静かにすーっと開いた。

「失礼いたしま―…」

襖を開き、お客様に挨拶しようとしたところで、ココアはハッとして、

「―…せん」

トン、と襖を閉めた。

が、しかし、

すっとーん!!

「ひっさしぶりィココアちゃんV」

部屋の中にいた客、ポトフによって、襖は再び開かれてしまった。

「あはは、久しぶりー」

「うむ。久しぶり」

「やー!!　なんでまた此処に来てるのよー!?」

にっこり笑っているポトフと、彼の後ろでのほほんと挨拶をしてきたミントとプリンを見て、ココアがそう叫んだところ、

「あ、ごめん。やっぱオレら邪魔だった？」

「ふむ……では、僕たちは帰るか」

と、ミントとプリンが申し訳なさそうに言った。

「違っ、そういう意味じゃないって言うか黒いの残して帰っちゃダメーっ！！」

ので、ココアは慌ててそう言った。

「……黒いの……」

ココアに黒いのよばわりされて落ち込んでいるポトフはほっといて、

「どうしてまたこんな高いとこにー？」

ココアはテーブルに三人分のお茶を置きながら彼らに尋ねた。

ちなみに、高いとは、値段のことである。

「ミントのお誘い」

すると、プリンが嬉しそうに枕で顔を隠しながら答えた。

「ふえ？　ミントがー？」

それを聞いて、ココアが小首を傾げながらミントの方に顔を向けた。

「うん。お店でコーラ買った時に福引出来るって言われたからやっ

てみたら、なんか一等が出て此処の宿泊券もらっちゃって」

すると、どこか残念そうな笑みを浮かべながら、ミントはさらさらと質問に答えた。

（……本当は五等のコーラセットが欲しかったんだけど……）

ミントは、一等賞よりも五等賞、宿泊券よりもコーラが欲しかったようだ。

「なーる。キミたちは運がいいようだねぇ」

「「？」」

「！？」

するとそこへ、桜色の髪の青年がやって来た。

彼の突然の登場に、ミントとプリンとポトフは疑問符を浮かべながら、ココアは何しゃしゃりでてんのよテメー？！　という顔で、そちらに振り向いた。

「えと……ココア、この人は？」

しばしの沈黙の後、ミントが小首を傾げると、

「はじめまして、ココアの友達にして可憐なお客様。私は”ショコラ＝パウダー”、以後お見知りおきを」

ココア兄、ショコラは、ミントの右手を取ってその甲に唇をつけた。

ぞわあっ！！

ので、ミントは一瞬にして全身に鳥肌が立ち、顔が真っ青になった。

「……キミが、ポトフくんかな？」

そんなミントに気付くことなく、ショコラは笑顔のままポトフに顔を向けた。

「……はェ？　あ、はい」

ミントにちゅーした……！　と、びっくりしていたポトフが我に返って、ぎこちなく頷くと、

「うん、そっか。ブラッドショット」

ドカアアアアアン！！

ショコラは、ポトフに向けて爽やかに闇魔法をぶっ放った。

「って、何してんのよバカ兄ー！？」

ポトフを攻撃したことと、旅館の壁に風穴を開けたことに対して勢いよく突っ込むココア。

「貴様よくも俺の可愛い妹に手ぇ出しやがったなテメェこのクソ野郎おおおおお！！」

が、聞く耳持たず。

何か良からぬものが切れたショコラは、吹っ飛んだポトフを追って

外に出て、再び魔力をぶわっと高めた。

「なっ?!　ココアちゃんのお兄様!?」

「貴様にお兄様とか呼ばれる筋合いはねえええ!!」

ドカンバコーン!!

と、何やら戦いが始まった時、

「うえーん、プリンー!」

「ぴわわっ!　ミント、水道こっち!」

気持ち悪くて泣いてしまったミントを、プリンは慌てて水道のある場所に連れていった。

「あーもー、なんなのよあのバカ兄ミントを女の子と間違えるし父親気取ってポトフと戦ってるしー!!」

その場に立ったまま、綺麗にまとめた頭をぐしゃぐしゃにして叫ぶココア。

「くたばれえええええええ!!」

「テメーがくたばれよバカ兄ーーー!!」

「妹さんをっ!!　俺にくださいお兄様ァァァ!!」

「て、いや何言っちゃってるのよポトフーーー?!」

「ブラッディーハウリング！！」

「キラキラァ！！」

ちゅどおおおおおん！！

こうして、綺麗に手入れされたココアの家の庭が派手に破壊されていったのであった。

「いやなんで今庭にポイント置くのよーーー？！」

第５９回　叫日和（後書き）

皆様こんにちは！
今回のお知らせは、４４話という微妙な回から始まった『学校日和２キャラクターズ人気投票』についてのことです。

投票の結果とキャラクターへ質問の答えは、次回の６０話に発表します。
ので、まあ、もういらっしゃらない気もしますが、締め切りは８月１２日にさせていただきます。

もし投票や質問がございましたら、お一人様二票で、学校日和２の感想欄、または、メッセージにてご投票くださいませ！
めろんは、あなたのご参加を心よりお待ちしております！

毎度ご愛読ありがとうございます！
それでは、また次回！！

第６０回　結果発表日和

ドカンバコーン！！

「お昼ごはんだよーって、まだやってるのー？」

「うむ。そのようだな」

「でも、なんか光魔法と闇魔法だから最終決戦みたいに見えるよね」

「勇者と魔王の対決みたいなー？」

「そ。お姫様を賭けての」

「ふふっ♪　何が言いたいのカナー、ミントー？」

コロコロコロコロ……

「む？　メロンが転がってきた」

ぱこっ

こんにちは。

「む。一部が割れた」

「ぴわわっ！？　メロンが喋った！」

説明ご苦労様ですプリン。

突然ですが、只今から、４４話の後書きという地味ーなところから地味ーに始まった、『学校日和２キャラクターズ人気投票』の結果発表と、皆様からいただいたご質問に答える会を始めたいと思います。

「タイトル長っ？！」

「人気投票と、質問？」

「って言うか、なんなのよこの喋るメロンはー？」

では、早速第三位からの発表です。

（（全部スルーされた！！））

第三位

ココア＝パウダーとチロル＝チョコ

「やぁん♪　アタイ三位～！」

「ふわあ！？　いつの間に私の隣に現れたのよチロルー？！」

第三位は、国立魔法学校女子の部でトップを争う彼女たちに決まりました。

エグい闇魔法と変身魔法使いの、たまに凶暴化する、カタツムリ嫌いの間伸び口調でちょこっと恥ずかしがり屋さんなココアは可愛らしいそうですよ。

「……訂正したいところと照れるところが混在してどう反応すればいいのか分からないのですがー？」

また、備え付けのティッシュペーパーで恋に落ちてしまった、雷魔法とエグい拷問器具を武器にしてしまうお茶目なチロルは、もっと暴走して欲しいそうです。

「オッケィ任せてミントきゅ～ん！！」

「にゃあああ？！　誰だよそんなこと言ったのはあああ！？」

「ミントきゅんミントきゅん、ここに混浴場があるよ～！　一緒に温泉に入ろ～Ｖ」

「誰が入るかあああ？！」

さて、チロルとミントがドタバタ走り出したところで第二位の発表です。

「……随分と他人事だねー？」

第二位

プリン＝アラモード

「……照れる」

第二位は、授業中はほとんど寝ていても国立魔法学校トップの成績を取り続けている彼に決まりました。

ちなみに、体育と家庭科に関しては触れないであげてください。

風魔法使いで、容姿端麗でカスタードプリン好きで歌がうまくてオバケが苦手な常に枕と眠気を伴っているプリンは、癒しキャラなんだそうです。

「む？　回復魔法は、馬鹿犬の役目だぞ？」

そういった意味ではないかと。

また、あなたとミントとの会話がお好きだとか。

「うむ。僕も好き」

枕で顔を隠しました。

照れてます。

あと、ゴマの方も気に入られているようですよ。

「？　ゴマ？」

ゴマ。

「……。……？　……、……」

ゴマの意味についてプリンが深ーく考え出したところで、いよいよ第一位の発表です。

第一位

ミント＝ブライト

「は……は……、……え？　わあ！？　オレが一位なの？！」

はい、チロルから必死こいて逃げてきたあなたが見事第一位に決まりました。

「わあ……！　あ、ありがとうございます！！」

植物魔法使いにして召喚魔法使いの、コーラが大好きで絵が壊滅的に下手で涙に極端に弱い学校日和のツッコミ役、ミントを選んだ理由その1、主人公だから。

「……て、え……？　い、いやぁ……確かにそうだけど……」

理由その2、シャイだから。

「……まあ……そうかもしれないけど……」

理由その3、可愛いから。

「可愛い……って、言われても……」

理由その4、和むから。

「……和むんですか……」

ですって。

超嬉しいですね。

「……嬉しいけど……いや嬉しいけどさあ……」

なんです？

「まあ、主人公とちょっとばかりシャイなのは認めるとして、オレ、男だよ？　そしてツッコミ役だよ？　そんなオレのどこが和むって言うのさ？」

突っ込んでも、報われないところ？

「うおい何その和みポイント？！　って言うかそれは和みよりも憐れみに近いって言うか本当にそれで和まれてたらオレ泣くよ！？」

どうぞ、ご自由に。

あとですね、キレたあなたも気に入られているようです。

「……今まさにキレそうだよ」

さてさて、ミントがキレそうになったところで、お次は質問に答える会を始めたいと思います。

では、まず、そこで怪しい手帳を見ているアロエさんに質問です。

「？　アロエにですか？」

Q．ミントの頭以外に興味があることは？

「って、何なのさその質問？！　怖っ！！」

「そうですね。人間の肉ってどんな味がするんでしょうね？」

「そしてその解答も怖あっ？！」

それを確かめるには、まず誰かを屠殺しないといけませんね。

「っていや何さらりとデンジャラスなこと言ってんのさ？！」

「そうですね。まずは首を刎ねて足をロープで縛って天井に吊して全身の血を」

「はいでは次の質問に参りまあああああああす！！」

お次は、プリンさんへの質問です。

「む？」

Q．この世から枕が無くなったら？

「――！？」

ややっ？　何か雷が落ちたような音が？

「……。……さようなら」

「え、えええ？！　ちょ、待ってプリン！！　何天井に吊したロープで輪っか作ってんのさ？！　これは架空！！　たとえばの話だよ？！」

「いただきます」

「そして何”待ってました”と言わんばかりにナイフとフォークを用意してんのさアロエえええ!?」

さて次は、チロルさーん?

「はーい」

んん、いいお返事。

Q.ミントのどこが好き?

「って!!　ななな、なんなのさその恥ずかしい質問はあああ?!」

「えーと……アタイのミントきゅんの好きなところは……」

「そして何真剣に答えようとしてんのさあああ?!」

シャウトアップミント。

早く言うと、シャラップミント。

「えっと、かっこいいところでしょ、優しいところでしょ、強いところでしょ、ちょっと照れ屋さんなところでしょ、えとえと、運動神経がいいところに、料理が上手なところでしょ、植物が好きなところでしょ、可愛いところでしょ、あとあと、声に瞳に鞭に……」

ふむふむ。

詰まり、

「えっとね、ぜ~んぶ大好き!」

はい、大好きいただきましたー。

続きまして、ポトフさーん？

「闇夜を照らす七つ星――輝け！！　グランシャリオ！！」

ちゅどおおおおおん！！

「……？　呼んだかァ？」

はい、まだ戦っていたこととキラキラとか擬声語以外の魔法を使えたことにびっくりしつつ、シスコンショコラを見事ぶっ飛ばしたあなたに質問です。

「はェ？」

Q．ココアのどこが好き？

「って、さっきとおんなじじゃんかー？！」

違いますよ。

名前が。

だけど？

「そりゃァ勿論、全部ゥ♪　……だけど」

「なんかなァ……ココアちゃんと初めて会ったときにビリビリってきたんだよなァ」

「え……？」

ほほう、成程。

「ベリーナーイス！　ココア、それって詰まり」

静電気が起きた、と。

「「え、なんで？！」」

バチってね。

痛いですよね、あれ。

では、ラストの質問です。

ミントさーん？

「……」

わお、真っ赤っか。

そんなあなたに質問です。

Q．まだ登場していない他の召喚獣は召喚しないの？

「……」

ぶわっ！！

うわお。

ミントが急に魔力を高めました。

「荒れ狂う青、枯れゆく茶色、染めあげる朱、冥界の灰色――」

わあ、魔法陣がいっぱい。

「同時召喚。召喚獣を一度に二体以上召喚する、召喚魔法の超高等術です」

説明ご苦労様、アロエ。

では、このままでは非常に危険ですので、召喚獣はおいおい登場させるという方向でご容赦くださいませ。

また、投票していただいたのにランクイン出来なかったキャラクターたちも、今後出番がちょびっと増えるという方向でご容赦くださいませ。

ではでは、この度は、マイナー小説のマイナー企画へのご参加、誠にありがとうございました。

「――κ（カッパ）、λ（ラムダ）、φ（ファイ）、ζ（グザイ）!!」

またのお越しを、心よりお待ちしております。

第６１回　温泉日和

もくもくと湯煙があがる広い広い温泉にて。

「覗きは犯罪ですよ、チロルさん」

「ビックーン！！」

乳白色に濁ったお湯につかったアロエがさらりと言うと、体にタオルを巻き付けているチロルがビックーンと驚いた。

「わざわざ驚きを言葉にしなくて結構です。それと、覗きというのは普通、と言ったら語弊がありますが、男性がすることでは？」

「だってそれって不平等じゃない！　今の世の中男女平等～みたいな～っ！」

「そんなレベルの低い男女平等は存在しなくて結構です」

ぷうっと膨れたチロルを、アロエはばっさりとぶった切った。

「え～？　だってだって、折角アタイのミントきゅんがあのウォールの向こう側にいるのにぃ～」

そんな彼女に向かって、チロルが口を尖らせながらそう言うと、

「……まあ、どうしても覗きたいと言うのであれば、アロエは無理に止めたりはしませんが」

アロエはどうでもよさそうに、ぱあっと顔を明るくした彼女にこう言った。

「その壁に触れたならば、あなたの息の根が中途半端に止まりますよ」

と。

「ふ〜、いいホットウォーターね、アロエ〜？」

「そうですね」

覗き防止の特別な魔法がかかった危険な壁に恐れをなしたチロルは、黙って素直に温泉に入ることにした。

危険な壁の向こう側、同じくもくもくと湯煙があがる広い広い温泉にて。

「む？　中途半端に息の根が止まる？」

アロエの言葉が聞こえてきたのか、プリンが不思議そうに小首を傾げた。

「……まあ、生かさず殺さずってとこなんじゃないかな？」

その隣でミントが恐ろしそうに危険な壁を見ながら、彼の顔に引きつった笑みを浮かべた。

「ふむ。成程」

納得したプリンが、今度ポトフをあの壁に当ててみようとか危険なことを考えていると、

「なんか、誰もいないねぇ？」

頭の上にタオルを乗せているミントが、くるりと辺りを見回しながら言った。

「うむ。たぶん、外で変質者と変質者が戦っていたからではないか？」

ので、プリンはさらりとそう返した。

「……。そだね」

変質者と変質者。

何も知らないでそれを聞いたら凄いバトルだな、とか思いながら、ミントは敢えて素直に頷いた。

ボロボロになってぐったりと仰向けに倒れているショコラに手をかざし、

「メディケーション」

と、ポトフは回復魔法を唱えた。

「……すこー」

「別にそのままほっとけばよかったのにー」

温かな光に包まれ、体力が回復していびきを掻き始めたショコラを見下ろしながら、ココアがさらりとそう言うと、

「あっはっはっ……家族は大切にしなくちゃダメだぜェ、ココアちゃん？」

その場に座り込みながら、疲れたようにポトフが言った。

「……。ポトフが言えたことじゃないけどねー？」

ポトフにそのように言われて、彼とプリンのことを思い浮かべるココア。

「い、いやァ、それとこれとは――…」

「あらあら、お庭がぐっちゃぐちゃ」

「ははは、本当だねぇ」

ポトフが何か弁解しようとした時、そこへ、のほほんとした感じの夫婦がやって来た。

「？」

「！」

ので、ポトフは疑問符を浮かべつつ振り向き、ココアは驚きながら振り向いた。

「あら、ココアちゃん。お庭がぐちゃぐちゃだけど、何故だか分かるかしら？」

すると、ココアに気が付いた濃い桃色髪の女性がおっとりと彼女に質問した。

「全部このバカ兄がやりました」

ので、ココアはそれに即答した。

「まあ、しょーちゃんったら！」

彼女の答えを聞き、女性は両手を腰に当てて、迫力なく怒った仕草をした。

「ははは、相変わらずのいたずらっ子だねぇ」

その隣で、ははは、とのほほんと笑う白い髪の男性。

「……？」

何やら置いてきぼりを喰らっているポトフが疑問符を浮かべていると、

「あら？」

ぷんぷん怒っていた女性がポトフに気が付いた。

「まあ！　ココアちゃんのお婿さん！？」

そして、随分と気の早いことを口走った。

「ふああ？！　ななな、何言ってるのよママー！？」

「その通りです、おかァ様！」

「そこも！！　何言ってるのよポトフー？！」

ので、ココアは赤くなり、彼女の口からママと聞き取ったポトフは、ばっちりと頷いた。

「え……俺じゃ、ダメ？」

ココアの反応を見て、ポトフがもの悲しそうに尋ねると、

「ふあ?!　い、いや……そういうわけじゃ――…」

傷付いた子犬のような彼の茶色い瞳に、ココアがぎこちなく首を横に振った。

「！」

「まあまあ！　やっぱりそうでしたのね！」

ので、ポトフとココアママの顔がぱあっと明るくなった。

「って、ちょ」

「うふふ、ココアちゃん好みのイケメンだものね」

「本当ですかァ?!」

「な、何言って」

「ははは、どうかうちのココアを幸せにしてやってくださいな」

「くださいな～」

「勿論です！！」

「って、聞けーーー?!」

突っ込みを入れる隙もなく話が進んでしまったので、ココアは虚空に向かって盛大に怒鳴った。

「そうだ！　ココアの話をちゃんと聞くんだ！！」

すると、いつの間に目が覚めたのか、ショコラがココアの後ろで口を開いた。

「！　お兄―…」

ナイスなタイミングで目が覚めた彼に、ココアが振り向きかけると、

「しょーちゃんは、お庭を直してなさいね？」

ココアママが、にこっと笑ってそう言った。

「い、いや、今はそれどころじゃ」

「ね？」

「って言うか、この眼帯も庭壊しに加担」

「ね？」

「……ハイ」

母親の笑顔に負けたショコラは、破壊してしまった庭を直し始めたのであった。

（使えねえ！！）

ので、乙女らしからぬ感情を抱くココア。

「うふふ、あらいけない。まだお名前をお聞きしていなかったわ」

「あ、俺の名前はポトフ＝フラントです」

思い出したように名前を尋ねられ、ポトフが思い出したように答えると、

「ポトフ＝フラント……まあ！　フラントさんって、もしかして国立病院の？」

彼の苗字を聞き、ココアママは国立病院のエリア＝フラント先生を思い出した。

「！　はい！」

「まあまあ！　それじゃ、もしかして？」

「はい、医者志望です！」

医者志望だったポトフ。

「ははは、素晴らしいね。容姿端麗、将来有望！」

「うふふ、凄いわ、ココアちゃん！　殿方をみる目があるわね～！」

ポトフの言葉に、ココアパパとココアママは、嬉しそうにのほほんと笑った。

「……」

そんな彼らに対して、何やら置いてきぼりを喰らっているココアは、

「……いやー、それほどでもー」

何かを諦めたように清々しく笑っていたそうな。

第６２回　雨と森日和

ぽつぽつと雨に窓ガラスを濡らされながら、真っ黒な蒸気機関車は国立魔法学校に向けて走っていた。

コツ

「チェックメイト」

車内の個室にて、駒を動かしたプリンがさらりと言うと、

「っだァァァァァ！！」

彼との勝負に負けたポトフは、魔法で宙に浮いていたチェスの盤を引っくり返した。

「あはは、またプリンの勝ち～」

「……照れる」

「くっそ、どぉして……」

隣でコーラを飲みながら観戦していたミントが笑いながら言うと、プリンは枕で顔を隠し、ポトフは悔しそうに自分でバラバラにしてしまったチェスの駒を拾い始めた。

「プリンってチェス強いんだね～？」

先程から勝ちまくっている彼にミントが言った。

「ううむ。こいつが弱いだけだ」

「喧嘩売ってんのかテメェ？！」

すると、プリンは首を横に振り、ポトフは拾った駒を彼に投げつけた。

「微風」

が、それらは全て向きを変え、ポトフの顔面へと向かっていった。

『はいはい、お菓子やジュースはいらんかね～？』

ガラッ

「コーラください！」

「僕はプリンだ」

駒に負けて倒れたポトフを無視して、おばちゃんからコーラとプリンを購入するミントとプリン。

「ね、じゃあ、今度はオレとやろうよ！」

「うむ。いいぞ」

その後、彼らは楽しげにチェスを始めた。

「……」

とことん無視されているポトフは、起き上がって窓の外に目を向けた時、

「……。雨」

外では雨が降っていることに初めて気が付いた。

（雨は好かねェ）

とか思いながら、だから今日はついてないんだな、とポトフが自分に言い聞かせていると、

ガララッ

「おっはよー！」

元気よくココアが現れた。

「おっはよォ、会いたかったぜココアちゃァんV」

「うん、おはよーポトフ。イービルフィアー」

同時に、彼女を抱き締めようとしたポトフは思い切り後方へとぶっ飛ばされた。

ガッシャーン！！

「ぴわ？！」

「ああ！？　何やってんのさポトフ？！　折角いいとこだったのに！！」

ので、チェスの試合を邪魔してしまった彼は、ミントに怒られた。

国立魔法学校前の駅に到着すると、生徒たちは学校へと続く森の中に入っていった。

「やーだなー。雨降ってるのにー」

荷物を引きながら、ココアが嫌そうな声を発すると、

「！　じゃァ、俺が」

「でもしょーがないかー。行こー？」

ポトフが何かしようとしたが、彼女は森の中へと歩き出した。

「あはは……どんまいポトフ」

何やら先程から可哀想な彼の背中を弱く叩くミント。

「ミントォ……」

うるりら

「！　な、泣かないの！」

うるりらと若干うるんだ彼の瞳を見て、ミントはどこからか骨付き肉を持ち出して、彼の口に突っ込んだ。

「！　……ふむ」

森に少し足を踏み入れたところで、プリンははたと立ち止まった。

「？　どしたのー、プリンー？」

そんな彼に、自分も足を止めながら、ココアが疑問符を浮かべると、

「これは、空間遮断魔法」

プリンは辺りを見回してからそう言った。

「「？」」

その言葉に、疑問符を浮かべるミントとココアとポトフ。

「この森と、この森の外との空間が遮断された」

「空間が、遮断された？」

彼の言葉をミントが聞き返すと、

「うむ。詰まり、森の外に出ることも、テレポートすることも出来なくなった」

プリンはこくりと頷いて、さらりとそう言った。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……え？　それってヤバくねェ？」

少しの間を置いてポトフが問うと、

「うむ。やばいな」

プリンはこくりと頷いた。

「え、えええー？！　じゃー、私たち、この森から出られないってことー！？」

「うむ」

「いやさらっと頷いてる場合じゃ――…」

「どぉしたらこの魔法が解けるんだ、枕？」

わたわたと騒ぎ出したミントとココアをよそに、口から骨付き肉の骨を出しながらポトフがプリンに質問すると、

「術者にこの魔法を解いてもらうか、この魔法が消えるスイッチとなるものを見付けて壊せばいい」

プリンはこくっと頷いて、さらさらと答えた。

「術者は……まァ、こんな大規模な魔法だから、複数いることになるよなァ」

「しかも、丁度私たち生徒が全員森の中に入った時に魔法がかかったんだから、たぶん先生たちの仕業だよねー？」

それを聞いて、ポトフとココアが術者を推測し、

「それじゃ、術者に魔法を解いてもらうのは無理っぽいね。……うーん、魔法を解くスイッチって、なんだろうね？」

ミントがうーんと首を捻った。

「うむ……それは術者が決めることだからな。でも、確実にこの空間の中にあるものだぞ」

その隣で、同じく首を捻るプリン。

『凄いねぇ？　一瞬の魔力の動きだけで、そこまで分かっちゃうだなんて』

「「！」」

　すると、四人の前方の茂みの奥から、少しばかりの笑いを含んだ声が聞こえてきた。
それに驚いた四人が、バッとそちらに目を向けたが、森の草木とこの雨のせいでその先は暗く、声の主の姿を確認することは出来なかった。

『たぶん、今はキミたちだけだよ？　自分が森に閉じ込められたことに気付いたのは』

少々癇（かん）に障る声が、楽しそうに言葉を続ける。

「……この感じ……魔物、だな」

「うん。でも、声がミントに似てるよねー？」

「うえぇ？　オレってあんなムカつく声？」

「ううむ。たぶん、喋り方の違いだ」

そんなことを言いながら、前方にいるであろう敵に身構える四人。

「！」

その直後、

「ココア！　危ない！！」

ミントが叫んだ。

「え」

「ココアちゃん！！」

彼の言葉をココアが理解する前に、ポトフは彼女を守る為に、彼女の前に飛び出した。

ぼわぁん

「！　ポトフ！！」

すると、巨大なシャボン玉のようなものが前方から飛んできて、それがポトフに当たると同時に力の抜ける音を発しながら爆発した。

「ポトフ！　大丈夫？！」

目の前でもうもうと上がる爆煙に焦るココア。

「嘘……どうして」

彼女の右斜め後方で、ミントは目を見開いて驚いていた。

何故なら、彼のその視線の先に、

「χ（カイ）がいるの？」

不揃いな複数の時計を自身の体の周りに浮かべて不気味に笑うピエ

ロ、召喚獣の”χ”がいたから。

『あらン？』

が、驚いたのはお互い様だったようで、

『どうしてアタシのご主人様が二人もいるのかしらン？』

χは前と後ろを高速で見比べながら、オカマ口調でそう言った。

「二人？」

χの言葉に、ミントが疑問符を浮かべると、

『あれえ？　まず、一番弱いのを潰すつもりだったのに』

彼らの前方から、こちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

『……ま、いっか。結果として回復役を潰せたわけだし』

そうして、ガサッと茂みが大きく鳴り、

「「！」」

『どうもハジメマシテ。オレがこの魔法を解くスイッチ――』

敵は、ようやくその姿を現した。

『――ミントだよ』

彼らの前に、ミントが現れた。

第６３回　樹と風日和

雨が降る森の中。
目の前には、ツバつきの白黒の帽子を左向きに被り、ワイシャツと動きやすそうなズボンを身に付け、ピンクと黒のストライプのネクタイを絞めて黒いローブをはおった、右と左でクリスマスカラーな配色の頭髪をもつ、ライトグリーンの瞳の少年が立っている。

「……っ」

まるで鏡の前に立ったかのような感覚に陥ったミントは、

「変変変変やっぱり変！　あーもー、これだから鏡の前とか極力立たないようにしてたのに～っ！！」

と、頭を抱えて悶え苦しみ出した。

「む？　ミント変くない」

「いやでもだってあの髪絶対目立つし普通じゃないしすなわち変だしおかしいし―…」

ミントの言葉を否定したプリンに彼が何か言っていると、

「……う、そ」

ココアが目を見張りながら小さく口を開いた。

「「？」」

ので、ミントとプリンがそちらに顔を向けると、

「ポトフがちっちゃくなってるーーー！？」

と、ココアが叫んだ。

「む？　――ぴわ？！」

小首を傾げた直後、彼女の言葉の意味を理解したプリン。
爆煙が治まり、ココアの目の前に現れたのは、

「あれ？　ここ、どこ？」

ちっちゃいポトフ。

「ほ、本当にちっちゃい」

「やー！　可愛いー！」

蒼い瞳をぱちくりさせるプリンと、可愛らしいポトフにエキサイトするココア。

「……。χはタイムマスターのクロノス。だからさっき、χは時を操る魔法を使ったんだよ」

同じくちっちゃいポトフを見た後、不気味に笑うピエロをキッと睨みつけると、

『いやン♪』

χは恥ずかしそうに頬に両手を当てて顔を逸らした。

『あは、流石は召喚術師サマ。大正解だよ』

その隣で、敵は邪悪な笑みを浮かべて応えた。

『じゃあ、次にどうなるかも、分かるよね？』

「当然っ。ココア、来るよ！」

「ふえええ、またー？！　カオスシールドー！！」

『ホホホ！　受けなさいン！　時のカーニバル！！』

ミントの声に、今度は反応出来たココアが、自分とちっちゃいポトフの前に闇の盾を出現させると、盾の向こう側から連続した爆発音が聞こえてきた。

「やーもー、私ばっかりー……」

闇の盾を張ったまま、ココアが、もう嫌、とばかりに肩を落とすと、

「ココア、その盾どれくらいもつ？」

薔薇の鞭と食人植物の鞭を装備したミントが質問してきた。

「へ？　しばらくは大丈夫だと思うけどー？」

「そっか。じゃあ、χが消えるまでずっと張ってて」

彼女の答えを聞き、彼はさらりとそう言った。

「うん。……うんー？！　χが消えるまでって、アイツいつ消えるのよー！？」

ので、ココアは驚いたように聞き返した。

「召喚獣が消えるのは、召喚術師の命令で消えるか、召喚術師から送られる魔力が切れて消えるかの、どっちかしかないよ」

彼女の問いに、さらりと答えるミント。

「ええー？　あれを直接倒すことは出来ないのー？」

「召喚獣を攻撃しても、代わりに召喚術師が傷を負うことになるんだ。だから、どんなに攻撃しても召喚獣は絶対倒せないんだよ」

「……って、ことはー」

「うん。オレとプリンがあの敵を倒すまで頑張って、ココア。あと、ここで重大なお知らせ」

そして、ミントはこくっ頷いた後、

「χの攻撃対象は、最初にあれの攻撃を受けた人。詰まり、あいつはもうポトフしか狙ってこないし、もう一回あのシャボン玉に当たったら、ポトフ消えちゃうかもしれないから気を付けてね」

「はあああああ？！」

と言って、勢いのいいリアクションを背に受けながら敵の元へと鞭を走らせた。

「ふむ。かも、と言うことは、あれの攻撃は時を巻き戻したり早送りしたり出来るのか」

その時、プリンが枕を抱え直しながら口を開いた。

「成程。それで”時の支配者”」

「そこー！！　何冷静に召喚獣の解析なんかしてんのよー？！」

そんな彼に、ココアが思い切り突っ込みを入れると、

「む？！　ということは、”コマ送り”や”取り出し”も出来るのか！？」

プリンは何やら変なところに興味を持った。

「いやそんなビデオ機能的な能力あるわけないでしょって言うか何を取り出すのよって言うか何キラキラした目ぇこっちに向けてんのよそんな命がけの実験やるわけないでしょー？！」

ので、ココアは三連突っ込みをかました。

「……ぶう」

「いや何ほっぺ膨らましてんのよって言うかプリンも早く戦いに参加しなさいよー？！」

ミントとポトフがツッコミ不能な今、一番大変なココアであった。

くいくい

「？」

ようやくプリンが参戦した時、ローブの裾を引っ張られたココアがそちらに目を向けると、

「あめ、やだ」

ココアのローブの裾を掴んだちっちゃいポトフが、うつ向いたまま言った。

「え？」

「……こわい……やだ……俺を……すてないで……もう、ひとりにしないで……！」

聞き返すと、ちっちゃいポトフは彼女の顔を見上げ、

「おねェちゃん……っ！」

うるんだ瞳でそう言った。

「――っ！」

儚すぎるちっちゃいポトフに、雷を受けたような衝撃を受けたココアは、

「っにゃーーーーー！！」

感情の赴くままに、ガバーッと彼を抱き上げた。

「蓮華！」

『あっは、じゃあオレも、蓮華♪』

縦横斜めから降り注ぐ、一対の薔薇の鞭と食人植物の鞭が、お互い激しくぶつかり合った。

「旋風！」

敵がミントと戦っているうちに、隙だらけのそれに風魔法を放つプリン。

『おっとぉ！』

するとそれは、一対の鞭を地面に強く打ち付け、後方に向かって大きく跳んで回避した。

「甘い！　朝顔！！」

『？！　なっ――』

「神風！！」

敵が地面から足を離したところで、ミントはそれを薔薇の鞭で束縛し、プリンは次なる風魔法を放った。

『――うわあああああああ?!』

身動きがとれないので避ける術がなかったそれは、プリンが産み出した超突風が襲いかかる直前に体から鞭が離れて自由を得られたが、その直後に勢いよくぶっ飛ばされ、

「喰らえ！　枝垂れ桜!!」

『っぐあぁ?!』

その先で、森の木々を利用して地表高く跳躍したミントが一対の鞭を勢いよく振り落とした為、文字通り地面に叩き落とされた。

「開け、破滅の扉！　吹き荒れろ――神風!!」

そこへ、とどめの一撃。
敵に向けた右手の先で、彼の魔力を得て再び産まれる超突風。

『くっ！　させるか!!』

それを喰らってたまるものかと、敵は、その手を地面に強く叩きつけた。

『ウッドウォール!!』

そしてそう叫ぶと、彼の前に何十本もの木々が地面から飛び出し、それがプリンの風魔法を受け止めた。

「うっわ、防風林って……めんどくさい魔法持ってるなあ、オレ」

敵が産み出した防風林を見て、木の枝に絡み付けた鞭に従って、その上に立ち、傍から聞けばおかしな言葉を使うミント。

『あっ、は……強いねぇ、キミのお友達』

すると、ゴホゴホとむせながら、敵はゆっくりと起き上がった。

「でしょ？　まあ、その防風林も、あと二回くらいしか持たないと思うよ」

そんな彼の言葉に同意し、ミントがそう言いつつ木の枝から跳び降りてスタッと軽やかに着地すると、

『へぇ、そうなんだ？　朝顔！』

「？！　しまっ―…」

それは薔薇の鞭と食人植物の鞭を巧みに操り、ミントをきつく縛り上げた。

『あは、じゃあね♪』

「消し飛べ――木枯らし！！」

ニタッと邪悪に笑いながら敵がミントから離れたその直後、プリンの風魔法が防風林を消し飛ばした。
そして、彼の風はそのままの勢いで、

「―…うっそ」

「!?　敵、じゃない……ミント?!」

『♪』

その先にいた、ミントへと向かっていった。

第６４回　嫌と好日和

かつて、彼はたった一度だけ、その魔法を人前で使ったことがあった。

――オレ、つかえるよ。

それは、彼がまだ初等学校に通っていた時のこと。
きっかけを作ったのは、同じクラスにいた、分厚い本を抱えている、いかにも物知りそうな女の子。
彼女が誰も使えないと言った魔法を、彼は使えると言い返した。

――じゃあ、やってみせてよ。

だから彼女はそう言って、彼は素直に頷いた。
その時、その場に居合たクラスメイトたちの目が彼に集まった。
何故なら、彼らはまだ、誰も魔法というものを使うことが出来なかったから。

――いくよ。

そんななか、彼はふっと目を瞑り、彼らの目の前でその魔法を使ってみせた。

――……！

直後、教室がしんと静まり返った。
突然静かになったので、彼が不思議に思っていると、彼らの顔はまたたく間に恐怖に染まり、その瞳からは涙が溢れ出た。

どうして泣いているの、と彼が尋ねようとした矢先に、

――バケモノ！！

どこからか、そんな言葉が飛んできた。

え、と、彼がその言葉を聞き返す前に、まるでそれが合図であったかのように、彼らは恐怖に引きつった悲鳴をあげながら、教室の外へと飛び出して、出来るだけ速く、出来るだけ遠くへと逃げ去っていった。

――……バケモノ。

ひとり残された教室で、魔法を解いた彼が呟いた。

成程、彼らの顔が恐怖に染まったのは自分のせいで、彼らの瞳から涙が溢れ出たのも自分のせい。

そして、彼らを怖がらせた自分は、バケモノなのだ。

――オレが……。

彼は知らなかった。

その魔法を使えたのは、ずっと前からのことで、それが普通の、当たり前のことだと思っていたから。

しかし、それは間違いで、彼らは彼の異常さに恐れをなして、彼の元から逃げ出した。

――……。

それ以来、彼は初等学校にあまり顔を見せなくなった。

そして、その頃から、彼はその魔法を二度と使わなくなり、涙を極端に怖がるようになった。

――その魔法を使うと、溢れる涙を見ると、あの時のように、自分のそばから人が誰もいなくなってしまうと思ったから。
もう二度と、あの時のような、つらい思いはしたくなかったから。
――それからしばらくして、街外れの森の近くに、小さな花壇が誕生した。

≫≫≫

「……もう、二度と使わないって決めてたのに」

防風林を消し飛ばした禍々しい風は、勢いをそのままに、その先にいる自分へと遠慮なく向かってくる。

「プリンのバカ」

ミントがぽつりと呟くと同時に、風は、薔薇の鞭と食人植物の鞭によって締め付けられている彼の身に襲いかかった。

「ミントおおおお！！」

ビュオオオオオオ！！

プリンにしては珍しい叫び声も虚しく、一度その手から離れた荒れ狂う風は、彼の意思など関係なく、進む先にあるものを、力の限りすべて吹き飛ばして壊して消していく。
そうして、プリンが注ぎ込んだ魔力を使い果たした後、風は、静かに消え失せた。

「……っ」

風の後に残ったものは、何事もなかったかのように降り続ける雨と、水溜まりの出来た地面に間ばらに生えた短い草と、進路の両脇に鬱蒼と生い茂っている森の木々と、

『あっは！　すごいすごい！』

木の枝の上で楽しそうに笑う、敵。

とさっ……

『？』

力なくその場で膝を地面につけた彼を見て、それは木の上から飛び降りた。

『どうしたの？』

「……」

その言葉に反応することなく、ただただ前方を見つめているプリン。

『……ああ、そっか』

彼に歩み寄りながら、先程の魔法で消し飛んでしまった薔薇の鞭を再び呼び出す敵。

『そっか。そうだよね。ショックだよね』

そして、彼の目の前で歩みをやめたそれは、

『何せ、たーいせつなオトモダチを』

口角を吊り上げながら、彼の首に薔薇の鞭を巻き付けた。

『自分が殺し』

「てない」

それでもまったく反応を示さないプリンの首を締め付けようとしたところで、それの後ろから声が聞こえてきた。

「『――!?』」

声に驚き、プリンと敵がそちらを振り向くと、

「ヒトを勝手に殺さないでよ。って言うか、何してんのさプリン？首絞められてるよ？」

その先から、再び声が聞こえてきた。

しかし、その声の主の姿は見えない。

『っどこだ!!　どこにいる?!』

それに恐怖を覚えた敵は声を張り上げた。

「どこって、ここ」

『ふざけるな!!　大体、あの状況でどうやって』

敵がそう怒鳴っている途中で、

「あら、オレの技と魔法をあれだけ知ってたクセに、ご存知ない？」

意外そうな、けれども抑揚のない声が聞こえたかと思うと、

「オレが一番、大っ嫌いな魔法を」

ぶくぶくーっ

敵の背後の水溜まりから、ミントが現れた。

『なっ――？！』

「……！　ミント……！」

目の前で起きた信じられない現象に、目を見開き言葉を失う敵と、彼の登場に瞳に生気を取り戻すプリン。

「あー、えーと、まずココアが殺されそうになって、次にポトフが殺されそうになって、それでさっきオレが殺されそうになって、今はプリンが殺されそうになった」

そうしている間に、ミントはローズホイップとマッドホイップを呼び出した。

「詰まり、次はお前の番だよね。蓮華」

ババババババババババババババッシーン！！

そう言った後、ミントは連続打ちで敵を思い切りぶっ飛ばし、

「枝垂れ桜ー」

ズバーン！！

高く跳んで、ぶっ飛んだそれを思い切り地面に叩き付け、

「曼珠沙華」

ヒュバアアアアアン！！

落ちながら最速で最強の技をお見舞いし、

「朝顔」

くんくんっ

衝撃で再びぶっ飛んだ敵を逃がすものかと着地しながら薔薇の鞭で捕え、

「プレス、ストラングジュレイト」

ミシミシミシミシミシ！！

圧迫して絞殺せんとばかりに強く絞め上げた。

「仕上げ。ブラッドパーティー」

ミントが抑揚のない声でそう言うと、鞭の至る所から十センチ程の鋭い棘が一気に飛び出し、

「……薔薇に棘あり、ってね。オレにあの魔法を使わせた、罰なんだから」

バアアアアアアン！！

それらは敵の体に深々と突き刺さり、それは悲鳴をあげる暇もなく粉々に砕け散って消滅した。

「……」

流れるような早業と極悪技に、プリンはぽかんと口を開けていた。

「ほら、立ってプリン。ズボンとローブが汚れちゃうよ？」

「う、うむ」

武器をしまった後でそんな彼を立たせると、ミントはくるりと背を向け、

「……。……って、思った？」

と、雨音に負けてしまうような、小さな声で彼に問い掛けた。

「！　……。ううむ、そんなことない。ミントはミント」

それを聞き取ることが出来たのか、プリンは首を横に振り、

「――僕の大切な、トモダチだ」

ふわりと微笑んでそう言った。

「！　プリン……！」

彼の言葉を聞き、ミントは顔を上げて振り向いた。

「……照れる」

すると、プリンは枕でさっと顔を隠した。

「い、いや、オレの方が照れるんですけど？」

「む？　じゃあ、はい」

「いや、はい、って枕出されても……」

とか言いながら、プリンからスペア枕を受け取るミント。

「「……照れる」」

そして、彼らは枕で顔を隠してそう言った。

ボワン

「ぐは？！」

「きゃあ！？」

ドシーン！！

「「？」」

すると、大きな音がしたので、怪しげなことをしていたミントとプリンが、顔から枕を離してそちらを向くと、

「……」

「……」

「……」

「……」

元のサイズに戻ったポトフの上に、ココアが倒れていた。

「こ……ココア……ちゃん……っ？」

「い、いいいいや、これはですね！？　その、さっきまでちっちゃかったのがいきなり元のサイズに戻って重くなった上にさっきまでずっと盾張ってたからもう体力なくなっちゃって重力に対抗することが――…」

珍しく顔を赤くするポトフと、焦って挙動不審になるココア。

「う～わ～……。なんか頑張って損した気分」

そんな彼らを見て、げんなりと肩を落とすミント。

「ミント、ココアは何をしているんだ？」

「さあ？　プロレスじゃない？」

小首を傾げたプリンにそう言いながら、行こ行こ、とミントは学校に向けて歩き出した。

「ふむ。プロレスか」

それに素で納得したプリンは、学校に向かって、彼と並んで歩き出した。

第６５回　復讐日和

学校に辿りつくと、いつもの大食堂で、二学期最初の課題お疲れ様会という、なんともそのまんまな会が開かれていた。

「ぷはあ♪　やっぱコーラは最高――」

そこで例のごとくミントがコーラを飲んでいると、

「ミントきゅ～んっ！！」

「――デストロイ?!」

右側から走ってきたチロルにガバーッと抱きつかれ、彼はミラクルな悲鳴をあげる羽目になった。

「ち、チロル?」

コーラが溢れないようにテーブルの上にそれを置いた後、ミントがチロルに目を向けると、

「ふえぇ、ミントきゅん、怖かったよ～」

彼女は彼に抱きついたままふえぇと泣き出した。

「！！　ななな泣かないで!?　どうしたのさ?!」

ので、ミントはわたわたと両手を上下させながら焦り出した。

「ううっ……フォレストでミントきゅんそっくりのモンスターが襲ってきて」

すると、チロルは涙ながらに語り出した。

「ミントきゅんにあまりにもそっくりだったから、アタイ、攻撃出来なくって……アタイもうダメかと思ったよ～！」

「ご、ごごっごめんね!?　大丈夫だった?!　ケガとかしなかった!?」

謝る必要があるのかどうかは分からなかったが、ミントはチロルを泣き止ませようと必死になっていた。

「あれー？　ブドウ、チロルと一緒だったんだー？」

そのすぐそばで、ココアを手に持ったココアが、紫色の髪の少女、ブドウに声を掛けた。

「あ、ココア！　うん。あと、パフェちゃんとミルクちゃんも一緒だったんだよ～」

すると、ブドウはふんわりと笑ってそう言った。

「あ！　それでね、ミントくんにそっくりさんな敵さんが出てきたんだ～」

「ふえ？　ブドウのとこにもー？」

彼女の言葉を、驚いたように聞き返すココア。

「え？　ココアのとこにも出てきたんだ？」

「うん」

同じく驚いたブドウは、彼女が頷いたのを見てから、

「そうなんだ～。あっ。でも、すごいんだよ～？　チロルちゃんがね、ミントくんの真似するなーって言って、なんかいっぱいトゲがついた鉄の入れ物にバチンって閉じ込めてすぐに倒しちゃったの～！」

と、言った。

「……」

「……」

「……」

「？」

無言になるミントとチロルとココアと、ふわふわ笑いつつ小首を傾げるブドウ。

「……チロル？」

ミントの声に、びくうっと反応するチロル。

「な、なあに、ミントきゅん？」

「ふふ、嘘はいけないよねぇ？」

「そ、そうだね――…」

「朝顔」

そんな彼女を、ミントは薔薇の鞭で縛り上げた。

「……。えへ～♪」

「……」

そのままぷんぷん怒って向こうへ行ってしまったミントと、彼に縛り上げられてえへ～と嬉しそうなチロルと、そんな彼女にジトッとした目を向けるココアであった。

「む。ミントおかえり」

「ただいまっ！」

「？　どしたんだァ？」

「なんでもないよっ！」

「「？」」

『はあ～い、みんなお疲れ様～！』

ぷんぷん怒っているミントにプリンとポトフが小首を傾げている

と、奥の方からクー先生の声が聞こえてきた。
すると、会場のざわつきが先程より小さくなった。

『うん！　全員いるね！　この雨のなか、みんなよく頑張ったね！』

此処にいる生徒の数を全部数えたのか、満足そうな笑顔のクー先生。

『みんな無事、ミントくんを倒すことが出来たんだね！』

「ちょっと待て」

続けて彼女がそう言った直後、ミントの突っ込みが飛んできた。

『？　何、ミントくん？』

きょとんと首を傾げたクー先生に、

「いや何って、みんな無事オレを倒したってどういうことですか」

と、ミントが質問した。

『あれ？　ミントくんはミントくんに会わなかったの？』

彼の質問に、質問で返すクー先生。

「いや会いましたけども。会いましたけども、みんな無事オレを倒したってどういうことですか」

それを更に質問で返すミント。

『そっか、よかった。あのね、二学期最初の課題は、四人一組で学園祭で一位だったミントくんを倒せ！　ってヤツだったの！』

そうして、クー先生はやっと質問に答えてくれた。

「……はい？」

彼女の答えを聞き返すミント。

『だから、ミントくんを倒せ！　ってのが、今回の課題だったの！』

にこっと笑うクー先生。

「……ふむ。詰まり、ミントが三十一人あの森にいたのか」

話を流れを読み取り、プリンがそれをまとめ、

『うん！　うわあ、ミントくんだらけだね！』

「でェ、三十人は先生が作った魔物だった、と？」

ポトフが話を締め括った。

『うん！　上手でしょ？　魔法と技は学園祭の時にミントくんが使ってたのをコピーしただけなんだけど、特にあのくりっとしたライトグリーンの瞳が我ながら会心の出来――』

バキャア

クー先生が楽しそうに語っていると、何かが派手に砕け散った音が

した。

「『……っ』」

直後、静まり返る会場。

冷え切る会場。

完全停止する会場。

――それでも、本能がそうさせるのか、会場の皆様の目が、ギ、ギ、ギ、と音のした方に向けられた。

シュパンシュパン

と、同時に、粉々に砕け散ったコーラの大ビンの先に立つ彼の両手に装備されたものは、薔薇の鞭と食人植物の鞭。

ぶわんぶわんぶわんっ！！

と、光輝く魔法陣×七。

「「全員逃げろお！！」」

プリンとポトフが同時に叫び、生徒たちがそれに素早く了解し会場から出ていったところで、

「――燃える赤、染めあげる朱、暮れの橙、大いなる緑、荒れ狂う青、宵の紫、古より来る琥珀――β（ベータ）、Φ（ファイ）、γ（ガンマ）、η（イータ）、κ（カッパ）、ι（イオタ）、σ（シグマ）！！」

ミントが、召喚魔法を発動させた。

『わあい、外だー！』

『めんどくさ』

『プリンが食べたいなぁ』

『ギャオース！！』

『オーホホホ！』

『ほえ？　呼んだぁ～？』

『ふむ』

『……』

『出番なんだなぁ～♪』

魔法陣から現れたのは、獅子と牡山羊と竜の頭をもつ”キマイラ”と、巨大トカゲの”サラマンダー”と、美しい女性とヘビが合わさった”エキドナ”と、緑の使いの少女”サキュロス”と、海の力を司る”ポセイドン”と、吸血鬼”バンパイア”と、鷹の頭と翼をもった獅子”グリフォン”。

「ちょ、ちょと待て？　この課題決めたのは、私だけじゃないよ？」

それらを見て顔を真っ青にしたクー先生が、両手を前に出しながら言うと、

「へぇ、そうなんですか」

ミントは、冷え切った言葉を返した。

「行け」

『『了解』』

――こうして、ミントの復讐が始まったのであった。

「きゃー！！　セルくん！　フェイくん！　ベルちゃん！　ポリーちゃん！　エルくんにリアちゃんにピッドくううううううん！！」

「「こっちまで巻き込むな馬鹿あああああああ？！」」

ちゅどおおおおおん！！

第６５回　復讐日和（後書き）

うわあ?!　偽ミントの数を素で間違えました!!　百二十一は、第三学年の生徒の数じゃないですか!!

誠に申し訳ございませんでした!!

ええと、以上がちびっこミントと現実逃避用花壇誕生までのお話でした。
い、いかがでしたでしょうか……?（不安

また、学校が始まる為とこの時期的な問題の為、大変申し訳ないのですが、今後更に更新が不定期になると思われます。

ぶぁっと。

気長ーにお待ちしてくださると、私めはこの上なく喜びます!

毎度ご愛読ありがとうございます!
では、また!!

第６６回　風邪引き日和

綺麗に晴れた秋空の下、国立魔法学校の広々としたグラウンドにて、秋らしく学校らしく、体育祭が開かれていた。

『……よし、全員位置についたな。ほんじゃあ、』

寮ごとに分かれて指定された位置に集まった生徒たちを見て、ニット帽を被ったオレンジ髪の体育担当のエル先生は、マイクを取ってクールに口を開いた。

『大玉入れの、始まりじゃあああ！！』

そして、突然オーバーヒートした。

「「？　大玉―…」」

ぼぅん

「「―…って、本当にデカあ？！」」

彼が指を打ち鳴らすと同時に現れた無数の大玉に、息のぴったり合ったリアクションをする生徒たち。

『どうした、おどれら？！　試合はもう始まってるんやぞお！？』

試合を開始したのにも関わらず、誰も大玉を投げないので、ご立腹なエル先生。

「先生」

そんななか、勇気ある少女がすっと手を挙げた。

『?!　なんじゃあ、ヨーグルト!?』

「玉が大きい必要性が分かりません、と言いますか、玉が大きくてカゴに入りません」

そして彼女、アロエは、暴走気味のエル先生にさらりとそう言った。

『気合いが足りいいいいん!!』

すると、エル先生はマイクを投げ捨て、

『うおおお!!　気合いじゃあああ!!』

とか叫びながら、自ら大玉をカゴに向かって投げ始めた。

「……!　成程、気合いか!」

「そ、そっか!　気合いかぁ!」

「よ、よし、俺たちも気合いだ!!」

「「おおー!!」」

熱血エル先生の大きな背中を前に、見事その気になってしまった生徒たちは、彼と同じように大玉を、それがとても入りそうもない小さなカゴへと、いや、夢と希望に満ち溢れた明日へと向かって投げ

始めた。

『こ、これが教育……！』

それを見て、クー先生は目を輝かせ、

『暑苦しいですね』

ポリー先生は彼女とは正反対の感想を述べた。

「……暑苦しいのは性に合いません」

「アロエは炎属性なのにねー？」

熱い闘魂に火がついたエル先生とその他の生徒たちを眺めながら言うアロエとココアと、

「ミントきゅん？　ミントきゅんはいずこ～？」

そんなことは意にも介さずきょろきょろとミントを探しているチロルであった。

「うはァ～……相変わらず無茶苦茶だなこの学校」

ウサギさん寮の男子寮の部屋の窓からグラウンドを見下ろし、ポトフは思わず苦笑いをした。

「コホ……ね、オレは大丈夫だから二人は体育祭に行ってきなよ？」

すると彼の後ろから、かすれた声が聞こえてきた。

「ヤ」

ので、その声の主、ミントの額に濡れたタオルを置きながらプリンが言った。

「いや、〝ヤ〟じゃなくて」

「ヤー」

「長音符つけたら……て、コホ、こんなの前にもあったよね？」

風邪を引いていながらも突っ込みを入れることを休まないミント。

「ミントと一緒」

ぷうっと膨れて譲らないプリン。

「珍しく同意見」

腕を組んで頷きながら言うポトフ。

「あは……ありがと、二人とも」

そんな彼らに弱々しく笑いながらミントがお礼を言うと、

「……照れる」

「あっはっはっ！　気にすんなってェ♪　それに」

プリンはいつものように枕で顔を隠し、ポトフはいつものように明るく笑ってから、

「ミントがいねェと詰まんねェもんな？」

「うむ。知らない人ばっかりで」

と、顔を見合わせながら言った。

「……え？　”知らない人ばっかりで”？」

彼らの言葉を確認するようにゆっくりと聞き返すミント。

「うむ」

「おう」

それに、プリンとポトフはこっくりと頷いた。

「え、えええ?!　コホ、さ、三年間も同じところでご飯食べてる

のに！？」

ので、ミントはむせながら驚いた。

「……ふむ。そう言われてみれば」

「そォ……だけど、食うことに集中してるからなァ」

そう言われて初めて気が付いたかのように、顎に右手を当てるプリンと、ぽりぽりと頭を掻くポトフ。

「いやでも、コホコホ、っキミらあんなに女子に自己紹介されてたでしょ！？」

喉は痛いが突っ込まずにはいられない突っ込み根性をもったミント。

「前はバッチリ覚えてたけど、今はココアちゃん一本ですからっ！」

「うむ。人間の脳は、興味がないことはすぐに忘れてしまうからな」

えへんと胸を張って自信たっぷりに言うポトフと、聞き捨てならない台詞を素で吐くプリン。

「えええ？　じゃ、コホ、本当に知らない人ばっかりなの？　ウサギさん寮の人が何人いるかも分からないの？」

驚いたようにミントが尋ねると、

「「……」」

プリンとポトフは再び顔を見合わせた。

「ミントと僕と」

「ココアちゃんと俺と」

「……」

「……」

「……」

「……」

「「……。四人？」」

「大ハズレ」

彼らの記憶にあるウサギさん寮の人物は、たったの四人だけのようだ。

「あのねぇ……ウサギさん寮には、コホ、三十一人いるんですけど？」

呆れたように溜め息をつきながらミントが言うと、

「むっ。タオル乾いちゃった」

「お、おォ、本当だ！」

彼らはわざとらしく話題転換した。

「はあ……コホコホ」

ミントの額に乗っていたタオルを濡らしにプリンがぱたぱたと走っていくと、ミントは再びの溜め息をついた。

「大丈夫かァ？」

「コホ……うん」

「……」

時々苦しそうに咳をして声が枯れている顔が赤い彼を見て、

「……。……風邪は、移すと治る……」

つらそうな表情のまま、ポトフはぽつりと呟いた。

「？　コホ、何か言っ」

「なら、俺が貰ってやる」

その後、有言実行。

至極真剣な表情で、ポトフはその綺麗な顔をミントに近付けた。

「え？」

「……ミント……」

「いやいやいやいや何を血迷っていらっしゃるんですかポトフさあああああん?!」

ので、ミントはその顔を両手でがっしりと捕まえて力の限り自分の顔から遠ざけた。

すると、

バァン!!

「「?」」

突然部屋の扉が勢いよく開いた。

「ミントきゅん!!」

「?! ゴホ、ち、チロル!?」

そして、酷く慌てた様子のチロルが現れた。

「コホゴホ、ど、どうしてここに?!」

「こ、ココアにミントきゅんがハヴァクォールドって聞いたから」

「発音いいな―…」

チロルはミントの問いに答えた後、

「……ミントきゅん……」

「―…って、オイ」

その綺麗な顔を、ミントの顔に近付けた。

「何をなさっておられるのですか？」

ので、ポトフを押さえていた左手だけを離し、それで彼女の顔を同じように遠ざけた。

「やん、照れちゃって可愛いっ♪」

するとチロルは彼の左手に自分の手を重ねながら、

「風邪は、移すと治るって言うでしょ？　だから、アタイが貰ってあげちゃう～みたいな～っ♪」

にっこりと笑ってそう言った。

「……わぁ、それさっきも聞いた」

熱があるにも関わらず、同じ理由で同じように美男と美女に迫られ、顔を青くしたミントのところに、

「ミント、おかゆ出来たっ！」

「ミントさんが動けないって本当ですか？」

爆発した何かを持ったプリンと、危険に光るメスを持ったアロエが現れた。

「わはー、愛されてるね、ミントー？」

アロエの隣でのほほんと笑うココアと、

「……ウン。超うれしー」

風邪は引くもんじゃないなあ、と、心の底から思ったミントであった。

第67回　汚名返上日和

「？　何、これー？」

きらきらと光る小さな十字架のついたピアスをつまみ上げ、

「私、ピアスホール空けてないよー？」

と言いながら、ココアは小首を傾げた。

「ううん。それはね、”しあわせのおまもり”なの。持ってるだけでもいいんだよ？」

ルームメイトにしてココアの友達の彼女、ブドウは、

「どうか、ココアとココアの好きな人が、しあわせになりますように」

顔の前で両手を組み、目を瞑ってお祈りをした。

「あ、ありがとー……え、えと、おまもりー？」

若干顔を赤くしたココアが確認するようにブドウに聞き返すと、

「うん、私の家の教会で作ってるおまもり♪　デート頑張ってね、ココア！」

彼女はふわりと笑ってココアを応援した。

「う、うん！　ありがと、ブドウ！」

それを大切に握り締めて、ココアは待ち合わせ場所へと走っていった。

≫≫≫

今日一日の授業がすべて終わり、生徒たちで賑わう食堂にて。

「……」

彼の左耳に光る十字架ピアスを、ココアはぽけーっと眺めていた。

「？」

こちらを見つめているココアに気が付いたポトフは、ふっと口を綻ばせ、

「……そんなに俺、かっこいい？」

流し目。

「寒くなってきたね、プリン」

「うむ。もう秋だからな」

ゆえに、体感温度、急降下。

ミントとプリンはほのぼのと笑いながら、夜空の向こうに目を向けた。

「ふああ?!　ななな、何言ってんのよこのナルシストー!?」

「あは、可愛い♪　ココアちゃん、口の端にケチャップついてるぜェ？」

「寄るな！　自分で取れる!!」

麗しい笑みを浮かべて近付いたポトフを右手で制し、左手でごしごしと素早くケチャップを拭う、顔が赤いココア。

「あ、あれ。流れ星だよ、ミント」

「うむ。流れ星だな、ミント」

未だ現実から逃避し続けているミントとプリン。

「折角取ってあげようと思ったのにィ」

「いらんと言っておろう!!」

「口でV」

「オーウ！　何ーも聞ーこえーマセーン!!」

ポトフの言葉に言語崩壊を起こすココア。

「……大丈夫、ココア？」

「アイムゥヲッケー!」

「ふむ。重症だな」

「かっこよすぎるって、罪だよなァ……」

「そして貴様は愁傷だな」

心配するミントと、テンションが妙に高いココアと、自分のかっこよさに罪を覚えるポトフと、突っ込みが出来るようになってきたプリン。

「はあ……まあ、ラヴラヴなさるのも結構ですけど」

ミントは呆れたように溜め息をついた後、

「ほれなら、どーひてはんはにたらひてたのひゃ？」

ココアに両頬を思い切り引っ張られながら、ふやふやと何か喋った。

「どォしてあんなにタラシてたのさって……」

それを見事に聞き取ってみせたポトフは、

「よし、じゃァ、よォく聞いてろよォ？　タイトル、〝俺物語〟」

と言って、目を瞑って語り出した。

タイトルは、〝俺物語〟。

≫≫≫

「♪」

その日、服装も髪型もばっちりきめたポトフは、上機嫌で待ち合わせ場所、ウサギさん寮の談話室の入り口付近に立っていた。

「「あ！」」

「はェ？」

すると、

「昨日食堂にいた！」

「きゃ～！　同じ寮だったなんて～！！」

「あ、あの！　お名前を教えてもらってもよろしいですかぁ？！」

ウサギさん寮の黄色い声軍団が、彼の周りに群がってきた。

「俺？　俺は」

ので、ポトフは可愛らしい彼女たちに麗しい微笑みを向けながら、

「ポトフ。ポトフ＝フラント」

自分の名前を名乗り、パキンと指を打ち鳴らした。

「……以後、お見知りおきを♪」

「「きゃー！！」」

手元に現れた薔薇と彼の素敵な笑顔にエキサイトする女子生徒たち。

ガシッ

「？」

と、その時、彼は何者かに右腕を掴まれた。

ぐいっ

「おわ？！」

その後、力いっぱい引っ張られ、

ゴゴゴゴゴ……

ポトフはそのまま寮の外へと引っ張り出された。

「な、何す―…って、ココアちゃん？！」

顔を上げると視界に入った目の前の桜色に、ポトフが驚いたような声を発したところ、

「……てい……」

ココアは彼の右腕を掴んでいた左手を離し、右手を握り締めたまま小さく口を開いた。

「へ？」

その言葉を聞き取ることが出来なかったポトフが小首を傾げると、ココアはキッと振り向いて、

スッパアアアアアン！！

何かを握り締めていた右手で、思い切り彼の左の頬に平手打ちを見舞わした。

「な――」

「最っっっ低！！　あんたなんて、この学校の女子全員と五回くらいデートして最後に全員にふられればいいのよー！！」

何が起きたのか理解出来ていないような茶色の瞳をココアに向けると、彼女は濃い桃色の瞳に涙を浮かべながらそう怒鳴り、そのままどこかへ走り去っていってしまった。

「……こ……ココア、ちゃん……」

その場に残ったものは、ぼっちりとココアの手形がついたポトフと、彼女の右手から落ちた十字架ピアス。

「……」

ポトフは、足元に落ちていたそれを無言で拾い上げ、

「分かった」

それをぐっと握り締めて、素で何かを了解した。

≫≫≫

「「・・・」」

いや、そこで了解しちゃダメだろ、と突っ込みたいところであったが、何やら口を開く元気もないココアとミント。

「ぐー」

プリンに至っては、興味がないのか、序盤の方から寝てしまっている。

「だからあの後、俺はココアちゃんに言われた通りこの学校のほとんどの女の子たちと五回くらいデートしたんだ」

あれは男を磨けというココアちゃんからの課題だったのだ、と、独断と偏見で勝手に思い込んでいたポトフはそうして話を締め括り、

「つゥわけで、俺は断じてタラシじゃねェ」

と、胸を張って言い張った。

「「うん、そうだね。ただのバカだったんだね」」

ので、ココアとミントは口を合わせてそう言った。

「おォ――って、ば、バカァ？！」

「コーラお代わりしてこよっと」

「あ、私もココアお代わりー」

「ちょ、バカって」

「ぐー」

「って、寝てんじゃねェェェ！！」

汚名返上したつもりが、新たな汚名をいただいてしまったポトフであった。

第６８回　ぐだぐだ日和

夏の暑さも和らいで、緑の葉が赤や黄色に色付いてきた森の中で。

「待てこのおサルゥ！！」

「はっ……はっ……走りにくい……」

「あーもー、ちょこまかとすばしっこすぎー！！」

「ぷぅ……ぷぇ……走るの苦手」

毎度お馴染、プリンとココアとミントとポトフの四人は、一匹のサルを追い掛けていた。

『ウキャキャ！　悔しかったらここまでお～いで！』

彼らの遥か前方を走るサル、もとい、サルのような魔物は、赤いおしりをぺんぺんと叩くという、なんとも古典的な挑発をした。

「こんのっ、調子に乗りやがって……上等だァ！！」

それにまんまと乗ってしまった彼は、流れるような水色の髪を後頭部で一つに束ね、いつもは眠そうな青い目をカッと開いているプリン。

「ああもうやだこれなんかスースーするし丈短いし肌寒いし爪先立ちしなきゃなんないし何より走りにくいしぃっ！！」

自分が着用しているスカートとブーツに対してぶつくさと文句を言っている彼女は、緩いウエーブがかかった桃色の髪のココア。

「それお気に入りなんですけどって言うかちょっとそんなに足開いて走らないでよー！？」

そんな彼女に文句を言う彼は、赤と緑の髪を隠すように帽子を被ったミント。

「ぷぅ……ぷゆ……、――ぴわ？！」

息を切らせつつトテトテと走り、遠近が分からずに木に激突してしまった彼は、少しクセのついた黒髪で右目に黒い眼帯をつけ、左耳に十字架ピアスをつけているポトフ。

「……痛い」

「「だ、大丈夫、ポト――じゃない、プリン？！」」

「枕テメェ俺の顔に傷つけてんじゃねェェェ！！」

おでこを押さえて素直な感想を述べるポトフと、彼を心配して立ち止まるココアとミントと、ポトフのおでこが赤くなってしまったことに憤るプリン。

――お分かりであろうか、彼らは中身が入れ替わっているのであった。

「しっ……仕方がないだろう。遠近が掴めないんだ」

「バカお前そんなの心の目で補え！！」

「ねぇココア、ズボンと運動靴持ってないの？」

「やだ！　それお気に入りなのー！」

おでこを押さえながら抗議するポトフはプリンで、何やらかっこいいことを言ったプリンはポトフで、頼むように質問をしたココアはミントで、ぷうっと膨れてそれを拒んだミントはココアである。

「……ったく、こんな体じゃろくに走れねぇって言うかお前なんで俺の体でそんなに走れねぇんだよ？」

彼にしたらちょっと走っただけなのに、すぐに息切れする体にイラつくプリン。

「知るか。苦手なものは苦手なんだと言うか貴様、僕の姿でそんなだらしのない格好をするな」

その言葉にイラッときたポトフは、ローブは全開でネクタイは首にかけただけの状態な上にワイシャツのボタンは開けまくりな彼に文句を言った。

「うっせぇな、暑苦しいんだよ。ってぇか、テメェこそ俺の姿でそんなだっせぇカッコすんな」

すると、ネクタイをきっちり締めてワイシャツもローブも閉まるところはしっかりしまっている彼にプリンは言い返した。

「馬鹿か貴様は？　制服は学校の指定通りにきちんと着てこそ制服だ」

「個性尊重。ヒトを見た目で判断すんなって教えたのは学校の方だろォ？」

「あはは……思考と服装正反対」

「双子なのにねー？」

体が入れ替わっていてもバチバチと火花を散らす彼らを見て、のほほんと笑うココアとミント。

『ウキャキャキャキャ！　もう終わり？　もう終わり？』

「「……」」

彼らが止まってそんな会話をしていると、頭上の木の枝の上から、腹の立つ声が聞こえてきた。

「……こんなややっこしいことになったのもォ」

「うむ。すべては」

「セル先生が魔物分布域調査の課題を出したせい」

「そんでもってー」

ので、四人はギッと上を向き、

「「お前のせいだこのバカザルううう！！」」

声を揃えて思い切り怒鳴った。

『あっかんべーっ♪』

すると、彼らに入れ替え魔法をかけた張本人、サルまがいな魔物は、再びなんとも古典的な挑発をした。

「ぶ、ぶっ殺……キラキラァ！！」

挑発に乗りやすい気質であるらしいポトフが入っているプリンは、魔物に右手を向けて魔法を唱えた。

『ウキャキャ！　風魔法使いが光魔法を使えるわけないだろバーカバーカ！』

そんな彼を、面白そうに笑いながら馬鹿にする魔物。

「なろ――そっ、そよかぜ!?」

ならば風魔法を使ってやろうと彼が疑問形で魔法を唱えると、

ぱひゅう

「「……」」

彼の右手から、微弱な風が発生した。

「っだァァァ!!　とことん使えねェェェ!!」

「し、失敬な！　貴様の使い方が悪いんだっ！」

『ウキャーキャキャキャ！　しょぼい、しょぼい！』

両手で頭を抱えるプリンとそれにムカッときたポトフと、木の上で腹を抱えて笑う魔物。

「どーやら属性魔法は属性によって勝手が違うみたいだねー。ってことはー」

魔物をキッと睨みながら、ローブのポケットから杖を取り出したミントは、その先を魔物にすっと向けた。

「！　ち、ちょっと待ってオレ、違、ココア―…」

「土偶になっちゃえー！」

それをココアが止めようとしたにも関わらず、ミントは、彼女自身が得意な変身魔法を唱えた。

――結果、

ドカアアアアアン！！

大爆発。

「な……なんでー？！」

「ゴホッ……一年の時に見てたでしょ？　オレの魔力は扱いにくいんだって」

この魔法で一度も失敗したことがないのにとショックを受ける黒焦

げミントと、黒焦げになりつつむせながら理由を述べるココアと、

『ウキャーキャキャキャ！　自爆？　自滅？』

木の上で転げ回る魔物。

「む……こうなったら」

そんな魔物を見て、ポトフはローブのポケットから、

「骨付き肉ゥゥゥV」

を、取り出した。

ぺろり

「あっはっはっ！　美味かったァ♪」

「「……」」

が、それはプリンに三秒でたいらげられてしまった。

「食べてどうする!?　馬鹿か貴様は?!」

「あァ？　仕方ねェだろ、俺は狼男だ!!」

「貴様は人間だろう!!」

「ま、枕……」

「そこで感動するな！！」

どうしようもないプリンに頭を抱えるポトフ。

「はあ……もうしょうがないなぁ……」

賑やかかつ役に立たない彼らに溜め息をつくと、ココアは、

「こっちにカモ～～～ン、おサルさ～ん♪　来てくれたら、いいコトしてあげちゃうぞ☆　みた～いな～～～っV」

両手をグーにして顎の下に持っていき、片足を上げてキャピッとお願いした。

「「……」」

ココアとミントとポトフの間に、冷たい風が吹き抜けていった。

「喜んでェV」

「喜ぶな」

喜んで彼女の元に飛んでいこうとしたプリンを、ゲシッと足で潰すミント。

「ぴわわ?!　僕の体に何をするんだココア!?」

「……お……俺の体で”ぴわ”とか言うな……」

「それはこっちの台詞！　何私の体でチロルみたいな恥ずかしいこ

としてんのよミントー？！」

「ええ？　だってチロルがこれやると大抵のことはまかり通ってたよ？　あと、話は変わりますがオレの体でその口調やめてくれませんん、ココア？」

『ウキャーキャキャキャ！　収集つかない！　ぐっだぐだ！』

そんなこんなで、彼らが元に戻るまでに、あと三時間を要したそうな。

第６８回　ぐだぐだ日和（後書き）

以上、ぐだぐだ日和でしたー。

……真面目にぐだぐだで申し訳ない上に面目ないです（泣

第６９回　遊園地日和

「はー、散々な目に遭ったねー？」

おサルさんを倒して元の姿に戻ったココアが、額に掻いた小汗を拭いながらそう言うと、

「ホント、ミントのおかげで助かったぜェ」

きっちり締まったネクタイを緩めながらポトフが言った。

「いやいや、ココアが薔薇の鞭出してくれたおかげだよ」

それに謙虚に応答しつつ、ミントはココアに目を向けた。

「ミントの魔力って、本当に扱いにくいんだねー？　……って言うか、まさか私が薔薇の鞭振り回す光景を見るなんて、夢にも思わなかったよー」

すると彼女はそう言って、手に持っていた薔薇の鞭をミントに返した。

「あはは、ごめん」

ココアの姿で、乙女にあるまじき行動をしでかしたミントは、申し訳なさそうに笑いながら彼女に謝った。

「……ト……ミント……」

「「？」」

その時、下から声が聞こえてきたので、ミントとココアが下に顔を向けると、

「ぷゆ……降りて」

ミントの足の下に、プリンがうつ伏せに倒れていた。

「うわあ?!　ごごご、ごめん、プリン!!」

「ごめんプリンー!!　ずっと踏んでたの忘れてたー!!」

ので、ミントは驚いて飛び退いて、ココアは慌てて謝った。

「ぷえ……どろんこ」

ミントが退いて、立ち上がったプリンは、服についた汚れをぱんぱんと払い落とし始めた。

「……む?」

その時視線を感じたので、プリンが顔を上げると、

「なんか、ポトフみたいだねー?」

「うん。流石は双子だね」

ユルユルな格好をしたプリンを見ながら、ココアとミントがそう言った。

「ば、馬鹿犬と僕を一緒にするなっ！」

ので、プリンはぷりぷり怒りながら服のボタンを閉めだした。

「馬鹿犬って言えば、ポトフもプリンみたいだったよねー？」

「うん。流石は双子だね」

再び同じようなことを言いながら、ココアとミントがポトフに目を向けると、

「ミント、あれなんだ？」

先程まできっちりとした格好をしていたのに、すっかり元に戻ってしまっている彼は、前方を指さしながらミントに質問をした。

「「？」」

「あれ？」

それにプリンとココアは疑問符を浮かべながら、ミントは小首を傾げながら彼の指の先へと目を向けた。

「む？　お城がある」

「本当だー」

森の向こうにあるお城を見て、プリンとココアがそのまんまな言葉を発すると、

「！　ああ！　あそこは確か、”ワンダーパーク”とかいう遊園地だよ」

ミントはピコンと思い出したようにそう言った。

「「ワンダーパーク？」」

それに、何それと小首を傾げたプリンとポトフはほっといて、

「あ！　それ聞いたことあるあるー！　私は行ったことないんだけど、確かこの国一番の大きさの遊園地なんだよねー？」

「そうそう。あんまり覚えてないけど、めちゃくちゃ広かったと思ったよ」

ぱむっと胸の前で手を叩いたココアに、ミントはこくりと頷いてみせた。

「ふえ？　ミントはあそこに行ったことあるのー？」

彼の発言を、ココアが羨ましげに聞き返すと、

「うん。だいぶ昔のことだけど、オレ、あそこにルゥ様と一緒に行ったことあるんだ」

ミントはさらりとそう答えた。

（国王様と）

（遊園地？）

（って言うか、仕事しろよ）

ご尤もな感想を抱くポトフとプリンとココア。

「懐かしいな～。確か、オレが十二歳のときだったかな？　ルゥ様が何かの乗り物に乗ろうとして」

そんな三人をよそに、懐かしげに森の向こうのお城を見るミント。

「でも身長が足りなくてルゥ様だけ乗れなくて」

（それは悲しい）

（不憫だねー）

（ふふふ、ちっちゃい）

ミントの回想に、思い思いの感想を抱くポトフとココアとプリン。

「そしたらルゥ様が癇癪起こして放電しだしてオレが必死になってルゥ様をなだめつつ係の人とかにめちゃくちゃ謝りまくって」

（そんな笑って語れる思い出じゃあない）

（十二歳に尻拭いさせる国王様って一体……）

（ふむ、成程。ミントのあの謝り攻撃はその時身に付けたものだったのか）

あははと笑いながら語るミントに、ココアとポトフとプリンは、思い思いの考えを浮かべた。

「ね、ねー、ワンダーパークって、確か、いろんな乗り物があるんだよねー？」

聞いていられなくなったのか、ココアが話題の方向性を転換させると、

「へ？　あ、うん。オレはルゥ様のせいでコーヒーカップにしか乗れなかったけど、いっぱいあったよ」

と、ミントは何やら悲しい答えを返した。

「だ、だよねー！　すごーく大きい大観覧車とかー」

負のオーラを漂わせるミントに負けまいと、明るく話を続けるココア。

「すごぉく大きい」

「観覧者？」

「どんなだよ」

ココアの言葉を聞いて、山の景色を観覧している山のように巨大な巨人を思い浮かべたポトフとプリンに、さらりと突っ込みを入れるミント。

「すごーく速いジェットコースターとかもあってー」

更に明るく話を続けるココア。

「すごぉく速い」

「コースター？」

「あっは、そんなん乗ったら死んじゃうね」

彼女の言葉に、機動力抜群のコースターを思い浮かべたポトフとプリンに、ミントは再びさらりと突っ込みを入れた。

「えーとー、あ！　あと、すごーく怖いオバケ屋敷とかもあるんだよねー？」

その時、ココアがにこっと笑って口にした言葉を聞いて、

「すごぉく怖い」

「オバケ……」

ポトフとプリンはぱきっと固まった。

「……」

そんな彼らを見て、まだオバケが怖いのか、とか、半ば呆れつつ思うミント。

「あー、なんか行きたくなっちゃったー！　ね、今からみんなで行

こ――…」

「さ、課題終わったし」

「――…え？」

「きっともうワンダーパークには行けないと思うけどまあドンマイココア」

「へ？？」

突然態度が変わったポトフに、疑問符を浮かべたココアが、ミントにポンと肩を叩かれて疑問符を倍増させたのとほぼ同時に、

「よし、そろそろ帰ろォぜェ？」

「うむ。そうだなテレポート」

彼らは何事もなかったかのように、国立魔法学校へと帰っていったのであった。

第７０回　ツキなし日和

眠い眠い社会学の授業が終わり、やっとの思いで食堂にやって来たミントは、衝撃の事実を耳にした。

「コーラが無いぃ？！」

「そうなんだよ。ごめんねぇ、仕入れの時にミスがあったみたいで」

全身から血の気が引いてしまうほどショックを受けたミントに、申し訳なさそうに謝る食堂のおばちゃん。

「そっ……そんなことって……」

「み……ミント……」

今までに無いほどがっかりと落ち込んでいるミントを見て、食後のプリンを買う為に彼の隣に並んでいたプリンは、

「！　ミント、コーヒーはどうだっ？」

その時たまたま視界の隅に映ったこの食堂のメニュー欄の、一番コーラに色合いが似ている飲み物をオススメした。

「う、うむ！　コーヒーなら色合いだけでなく何やら名前も――」

「……プリン？」

「――む？」

彼なりに一生懸命元気付けようとしている途中でミントが名前を呼んだので、プリンは小首を傾げながら返事をした。

「オレ、駅の自販機までちょっくら行ってくるね」

「ぴ」

すると、ミントはそう言って、

どぴゅーん

風のように去っていった。

「わわ……ミント……」

まったくもってちょっくらではない距離をコーラの為だけに走っていったミントを、プリンはただただ見送った。

「……カスタードプリンを頼む」

「あいよ」

こら。

「……ぷはあっ、やっぱりコーラは最高だよ～♪」

本当に駅の自販機までコーラを買いに来ちゃったミントは、幸せそうに口の周りを拭いながら森の中を歩いていた。

「ん、もう落葉舞い散る季節なんだねぇ」

赤や黄色に色付いた木の葉がひらひらと舞い落ちているのを見ながらミントがそう言うと、

「……て……」

どこからか、小さな声が聞こえてきた。

「ん？」

ので、ミントは立ち止まって耳をすました。

「……て……誰か……」

すると、

「助けてください！！」

今度ははっきりと聞こえてきた。

「――！　あっちの方からだ！！」

何やらドラマが始まりそうな台詞をキャッチしたミントは、助けを求める声の呼ぶ方へと駆け出した。

「どこですか――…って、うおわあっ？！」

ザザザッ

走りながら声の主を探していると、ミントの前に突然絶壁が現れた。

「な、なんで森の真ん中に絶壁が？」

危ねえ危ねえ、と冷や汗を拭いながら疑問を口にしたその直後、

「って、ムース？！」

「！　ミントさん！！」

絶壁の途中に突き出た岩にぶらさがっているユルふわ紫髪のお嬢様、ムースを発見した。

「なな、なんでそんなとこにいるのさ？！」

「お……落ちてしまったん……ですのっ！」

ミントの問いに苦しそうに答えた後、

「っですから！　た、助けてください……っ！」

もう限界に近いのか、ムースは切羽詰まった声で彼に助けを求めた。

「う、うんっ！　ちょっと待てて……ローズホイップ！！」

彼女を救うべく、ミントは薔薇の鞭を出現させた。

――すると、

『シャアアァァァ……』

「「・・・え？」」

絶壁のほの暗い底から、何やら蛇が威嚇の時に出すような音が聞こえてきた。

「む、む、むむっ、ムース？」

「は、は、はい？」

「ぜっ、ぜぜぜ、絶対に下見ちゃダメだからねっ？」

ついでに、絶壁を覗き込んでいるかたちになっているミントは、何かギラギラと光るものが見えちゃったようで。

「そそっ、それはどういう―…」

「あああ朝顔おおお！！」

質問の途中で冷や汗ダラダラなムースを冷や汗ダラダラなミントが

薔薇の鞭を巻き付けて釣り上げたのとほぼ同時に、

『シャアアアアア！！』

「きゃあああああ？！」

「うわあああああ！？」

規格外にでかい蛇のような魔物が、巨大な口を開けて絶壁の底から地表に飛び出した。

「「あああああ！！」」

ので、ミントはムースを担いだ状態で、迷うことなく逃げ出した。

「はあっ……はあっ……こ……ここまで、来れば……大丈夫、だよね？」

両膝に両手をつけて荒い息をしながらミントが言うと、

「な……なんだったんですの、あれは？」

彼に担がれていた為、あまり息切れはしていないムースが、青白い顔で疑問符を浮かべた。

「ああ、あれは……オレも教科書でしか……見たことなかったけど、確か」

すると、ミントは顔を上げて、

「”チャッピィ”っていう魔物だよ」

「……えらい可愛らしいお名前をしていらっしゃるのね……？」

と、答えたところ、ムースはよくある大粒の汗を浮かべながら、素直な感想を口にした。

「となると、あの絶壁は巣穴だったのか……いやぁ、冬眠前の魔物は本当に危ないんだねぇ？」

「！　ミン―…」

目なんかもうやばいくらい血走ってたし、とか言いながらあっはっはと笑うミントに、何かに気が付いたムースが口を開きかけると、

ガサガサ

『人間だ』

何やら低い声が聞こえてきた。

「「え――？」」

それにミントとムースが振り向くと、

『人間、人間だ』

二人の背後には、木で出来た仮面をつけたゴリラのような魔物が、

『人間だ』

『食べ物だ』

『肉だ』

『肉、肉だ』

いっぱいいらっしゃった。

『人間だ』

『肉』

「うわあ……なんか囲まれちゃったっぽい？」

「そ、そのようですわね」

『肉、肉だ』

不気味な低い声を発しながら、のそのそと近付いてくる魔物たち。

「はあ……なんっかツイてないなぁ今日は」

自分の運の悪さに溜め息をつきながら、薔薇の鞭を構えたミントは、

「下がって、ムー――…」

攻撃の時に巻き込んでしまわないように、ムースに下がるように頼もうとした。

「あら、お下がりになるのはミントさんの方ですわ」

が、それは強気な言葉で拒否された。

「――…ス？」

ムースの言葉に驚き、疑問符を浮かべながら彼女に顔を向けるミント。

すると、

「――雄々しき水よ、今、ここに集いて怒り狂え――タイダルウエーブ！！」

ドッパアアアアン！！

ムースが前方に突き出した両手の先から、大量の水が飛び出して、それは津波となって魔物の群を一瞬にして呑み込み、消し去った。

「……す……すごいね、ムース」

「あら、ありがとうございます」

一瞬でカタがついてしまったので、ぽかんと口を開けるミントと、彼の言葉を素直に受け取るムース。

『人間――…』

「アクアシールド」

ごぽん

背後から襲いかかってきた群れの残りを、初めから分かっていたかのように右手だけをそれに向けて水の盾に閉じ込めると、

「……さあ、参りましょう？」

ムースは何事もなかったかのようにスタスタと国立魔法学校に向かって歩き出した。

「は……はい……」

（……おっかねぇ）

水の盾の中でゴボゴボと溺れている魔物を視界の隅に捉えてしまったミントは、ムースに恐怖の念を覚えつつ、素直に彼女に従った。

第７１回　茶緑日和

「ねぇムース、どうしてあんなことになってたの？」

しゃりしゃりと小気味好い音を立てながら、乾いた枯れ葉の積もった森を歩くミントは、絶体絶命の状況にいらっしゃったムースにそのわけを尋ねた。

「飛行船から飛び降りたらそこがたまたま絶壁でしたの」

その問いに、彼より少し背が高いムースは、顔を若干下に向けながら答えた。

「飛び――？！　何故に飛行船から飛び降りちゃったのさ！？」

すると、ミントは彼女が飛行船から落ちた理由を問うた。

「船の上で少々ありまして……その、なんと言いますか、刺客に命を狙われてましたの。でも、船の上で戦うわけにもいきませんでしょう？　ですから、逃げ道を失ってしまった時に飛行船から飛び降りましたの」

ムースは、どう答えたらいいものか、と困ったように微笑みながらそう答えた。

「まったくもって少々じゃねぇ？！　って言うか刺客って何さ！？　そんでもって、どんだけ壮絶な船旅なのさ？！」

とんでもお嬢様な彼女に、三連突っ込みをきめるミント。

「いいえ、いつものことですわ」

「うん―…ええ!?　いつものことなの?!」

にこっと笑ってみせたムースに、ミントは再び突っ込んでしまった。

「ええ。まあ、お金のないお馬鹿さんたちが、わたくしを人質にして父から身代金をいただこうとしているだけだと思いますが」

やれやれと肩をすくめながら溜め息をつくムースに、

「あ……そっか。ムースのお父さんは社長さんだもんね?」

ミントは思い出したように言った。

「はい。わたくしの父は、”ジェラート社”の社長ですわ」

彼の言葉に、ムースはこくりと頷いた。

「へぇ、ジェラート社……ジェラート社?!」

それを聞いて、ミントはびっくり驚いた。

「はい、ジェラート社ですわ」

「じゃっ、じゃ……まさかこれって……?!」

再び頷いたムースに、ミントが震える右手で左手に持っているコーラのビンを指さすと、

「ええ、我が社を代表する炭酸飲料ですわ」

彼女はにっこりと笑ってそう言った。

「すっげーーーー！！」

「ウフフ、ご愛飲してくださっているようで、嬉しい限りですわ」

キラッキラな尊敬の眼差しを向けるミントに、ムースは口元にふわふわのセンスをかざしながら、ウフフと上品に笑ってみせた。

「あら、到着したようですわね」

「え？　あ、本当だ」

笑っている途中で森を抜けたことに気が付いたムースと、彼女に言われて初めてそのことに気付いた、真面目にリスペクトしていたミント。

「って、あれ？　飛行船がとまってる」

ついでに、ミントは学校の前に飛行船がとまっていることに気が付いた。

「あら、ご存知ありませんの？」

彼の反応を見て、ムースは不思議そうに小首を傾げながら、

「本日はセイクリッド校とバテコンハイジュ校の両校合同のハロウ

ィンパーティーがありますのよ？」

と、言った。

「え？　そうだったの？」

ミントは驚いたように口で答えつつ、

（……ええと、”バテコンハイジュ”ってのは隣の国の国立魔法学校だけど、”セイクリッド”ってのは……？　……あ、この学校の名前かぁ）

などと、まるでこの学校の名前を初めて聞くような考えをめぐらせた。

「おお、ここがパーティー会場か！」

「ようやく辿り着けましたね」

国立魔法学校の食堂兼大ホールの扉の前にやって来たのは、長めの緑色の髪の美男子さんと、どこか冷めた雰囲気の茶髪眼鏡の男の子。

「いやあ、流石のアセロラ君でも、やはり初めて来た所の地理までは把握していなかったようだな？」

わっはっはっと軽快に笑いながら、豊かな緑の髪を揺らしている彼は、何やら怪しげな手帳を見ている彼、アセロラにそう言った。

「いいえ。別に分かってましたけど」

すると、アセロラは眼鏡を外してそれに息を吹きかけて汚れを落としながら、

「バジルさんが馬鹿みたいに迷う様を後ろから見て楽しませていただきました」

なんの臆面もなく、彼、バジルに向けてさらりと答えた。

「ようし、早速我々もパーティーに参加しようではないか！」

しかし、基本ヒトの話を聞かないタチなバジルは、バンッと勢いよく食堂の扉を開けようとした。

「……あれ？」

が、開かなかった。

「バジルさん、それ、押すのではなくて引かなければ半永久的に開

きませんよ」

「ははは、な～んだ引くのか！」

アセロラの冷ややかな突っ込みが入り、バジルは今度こそ食堂の扉を引いて開けた。

「きゃ！？」

「うわ？！」

ドンッ！

バジルが食堂の中に入ってすぐに、彼は人とぶつかってしまった。

「いったー……」

「いたた……君、気を付けたまえ！」

起き上がりながら痛そうな声を発した相手に、尻餅をついてしまったバジルがそう言うと、

「ごめんなさーいっ」

彼女、ココアは素直に謝った。

「――！？」

バキューーーーーン！！

直後、銃声が鳴り響き、バジルの時間が、止まった。

「なんてベタな」

その後ろで、なんかボソッと呟いちゃったアセロラ。

「……？」

こちらを向いた状態からまったく動かないバジルに、疑問符を浮かべるココア。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……変な人ー」

動く気配のない彼を見て、ココアはボソッと言いながら、さっさとその場から去っていった。

「……」

「……」

「……。アセロラ君」

「はい？」

ややあって、バジルはようやく口を開いた。

「私はまた一人迷える仔猫ちゃんを虜にしてしまったようだ……」

「いえ、思い切り変人と見なされてましたよ」

何か言い出した彼に、アセロラがさらりと言うと、

「アセロラ君！　彼女は一体？」

バジルは起き上がって彼に質問をした。

「……ココア＝パウダー。セイクリッド国立魔法学校第三学年の女子生徒。ミスウサギさん寮に選ばれている成績優秀な闇魔法使い。好物はココアとオムライスで弱点はカタツムリ。趣味は菓子作りと裁縫。家は超豪華温泉旅館で……」

すると、アセロラは眼鏡をかけ直して怪しげな手帳を捲り、つらつらと個人情報を流し始めた。

「ふむふむ」

その一体どこから仕入れてきたのか謎な情報を、ふむふむと珍しく真剣に聞くバジル。

「……彼氏存在」

「ふむ―…むはあ?!」

信じられない言葉を聞き、バジルが目を見開くと、

「残念。どうやら、また貴方の迷惑極まりない勘違いだったようですね?」

まったく残念そうではない平坦な声を発しながら、アセロラがぱたんと手帳を閉じた。

「そ、そんなまさか……」

こうして、彼の恋心は粉々に砕け散―…

「あんなに可愛い仔猫ちゃんを騙す男がいるなんて、許せないじゃないか!!」

―…らなかった。

「アセロラ君!」

「はい。ポトフ＝フラント―」

自意識過剰かつ迷惑なほどポジティブなバジルに、少しは楽しめそうだと考えたアセロラは、再びつらつらと個人情報を流し始めた。

第７２回　宣戦布告日和

秋色に染まる森の奥、白壁の美しい国立魔法学校にて、

「わは～！　ハロウィンって感じだね～！」

「ええ、そうですわね」

ここ、セイクリッド校と、隣国のバテコンハイジュ校との合同ハロウィンパーティーが開かれていた。

「美味しそうなものもいっぱいあるし、このカボチャなんかまさにハロウィンだよね！」

「随分と大きなカボチャですわね～」

テーブルに並べられている様々な料理を一通り見回した後、ミントとムースは近くに置いてあった、目と鼻と口がペイントされている大きなカボチャに触れてみた。

パカッ

「！　ミント！」

「「？！」」

すると、そのカボチャの頭の部分がパカッと開き、中からプリンがひょこっと現れた。

「まあ、プリン！」

「なんでそんなとこに入ってるのさプリン！？　って言うか、その収容力がすごいよプリン？！」

彼の思わぬ登場に、顔をぱあっと輝かせるムースと、いつものごとく突っ込みを入れるミント。

「む？　ムースがいる」

カボチャの頭の部分から顔だけ外に出ている状態のプリンは、ムースの存在に薄ーい反応を示した後、

「今日は、ハロゲン？　だから、カボチャだ」

と、ミントに言った。

「……。そっか」

「うむ！」

いつものごとく難解な彼の解答に、ミントが取り敢えず納得してみせると、プリンは満足げに頷いた。

「とぉ」

むぎゅっ

「ぴぎゅ」

すると、彼は頭を強く押し込められて、再び顔が見えなくなった。

「あっはっはっ！　トリックオアミートだぜミントォ！！」

代わりに現れたのは、いつものごとく明るく笑うポトフ。

「あら？　プリンは何処へ行ってしまわれたのかしら？」

プリンが見えなくなり、素でキョロキョロと辺りを見回しているムースはほっといて、

「……猫耳つけて何してるのさ、ポトフ？」

ミントは、彼の頭についている獣耳を見ながら質問をした。

「ふっ……甘いぜミント。これは、にゃんこ耳じゃなくて狼耳なんだぜェ？」

彼の言葉に、ポトフは勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「ああ、成程。今日はハロウィンだから狼男に仮装してるんだね？」

「その通り！」

それを聞いて、にこっと笑って頷いたポトフに、

「キミもともと狼男じゃんか」

ミントはさらりとそう言った。

「――？！」

衝撃。

「……」

すぽっ

まさか無駄な仮装をしていたとは……、とか思いながら、ミントの帽子を取ったポトフは、

すちゃ

「いやいやいやいやいや」

彼の頭に、先程まで自分が装着していた狼耳のカチューシャをセットした。

「まあ！　可愛らしいですわ、ミントさん！」

「いや”可愛らしいですわ”でなくてね？」

「あっはっはっ！　にゃんこみたいでカァワイ～♪」

「あれキミさっきこれ狼耳って言ってませんでした？」

可愛いと言うムースとポトフに、ミントがカチューシャを外そうとそれに手を伸ばしながら突っ込みを入れていると、

「……君がポトフ＝フラントかい？」

彼らの背後から、低音ボイスが聞こえてきた。

「「？」」

「！　あなたは……」

聞き覚えのない声にミントとポトフは疑問符を浮かべながら、ムースは嫌そうな顔で振り向いた。

「ふん、どうやら私の予想通り、ココア＝パウダー嬢は騙されていたようだね」

そうして振り向いたその先には、赤みがかったバテコンハイジュ校の制服であるローブを身に纏っている、長めの緑色の髪を毛先の方だけちょこんと一つにまとめた爽やか顔の美男子――バジルが立っていた。

「……は？」

そんな彼を見て、先程まで子犬のようにきらきらしていたポトフの茶色の瞳が、その光を失った。

理由は、バジルが、ミントとの会話を邪魔した上に、野郎だったから。

「そォだけど？」

だからなんだよ、と言いたげに、ポトフが彼に向けて冷たく言葉を返すと、

「ポトフ＝フラント！！　この私と――ココア＝パウダー嬢を賭けて戦いたまえ！！」

バジルはズビシッとポトフを指さし、大きな声で挑戦状を叩き付けた。

「……」

「……」

「……」

「……」

しばしの沈黙。

「……はァ？」

後、わけが分からないポトフは、呆れ返った声で聞き返した。

「またあなたは、わけの分からないことを……」

「ココアを賭けて戦えだなんて、キミ、ココアのなんなのさ？」

その隣で、同じく呆れたような声を発するムースと、疑問符を浮かべるミント。

「私かい？　私は、彼女の心を虜にしてしまった罪深き堕天使――…」

「こちらは彼女に変人と見なされたバジル＝スパイスです」

真面目な顔で何か言い出したバジルを遮って、彼の隣に立っていた茶髪眼鏡の少年、アセロラが彼をミントたちに紹介すると、

「……なら、もォ勝負はついてるだろ？　戦う必要ねェじゃねェか？」

ポトフはポケットに両手を突っ込んだまま、抑揚のない声でさらりと彼に言い放った。

「俺は彼氏でお前は変人。詰まり、俺の圧勝ォ♪」

と。

「正論だね」

「正論ですわ」

「正論ですね」

それを即座に肯定するミントとムースとアセロラ。

「な、何を言う！？　君は今現在進行形で浮気ごとをしているではないか！！」

圧倒的に不利な立場に立たされたバジルは、ムースとミントを指さして、負けるものかと叫んだ。

「そこの、ムース＝ジェラート嬢と、魅惑の猫耳美少女と！！」

と。

「はァ？　何言っ」

「ポトフ」

いい加減返事を返すのも面倒になってきたポトフが、彼を追い払う為の言葉を放とうとした丁度その時、魅惑の猫耳美少女は彼に向けてこう言った。

「あんなヤツ、ボッコボコのぐっちゃぐちゃだよ」

と。

「・・・え？」

「売られた喧嘩は買うっきゃないでしょ。って言うか買え」

「え、えええェ？！」

「！　フハハ！　では、準備が整ったら中庭まで来たまえ！」

こうして、ミントの中の良からぬものが切れてしまった為、結局ポトフはバジルと戦う羽目になってしまったのであった。

第７３回　決闘日和

ぴゅるりらら

「……なんなんですかこの状況ー？」

冷たい風が吹き抜ける中庭にて、”賞”と書かれたタスキをつけている巨大カボチャの頭の上から、ココアはちょこんと顔を出していた。

「ぶう……僕のカボチャ」

カボチャを取られたことで膨れっ面になっているプリンはほっといて、

「いっけーポトフ！　ぶっ飛ばせー！」

「ポトフさん、応援しておりますわ！」

ミントとムースは、戦場に立つ彼を張り切って応援していた。

「はァ、ミントとムースちゃんが応援してくれるのは嬉しいんだけどなァ……」

二人に応援されているポトフは、倦怠感溢れる目で前方に立つ相手を見た。

「フハハ！　どうやら逃げずに来たようだな！」

そんな目で見られてもまったく平気なバジルは、腰に手を当てて不敵に笑っている。

「……兄さん、よくあんなのと一緒にいられますね？　アロエだったら、間違いなく燃やします」

中庭にある小さなテーブルに腰かけているアロエが、怪しげな手帳を片手にそう言うと、

「僕も何度か凍らせましたが、なかなか楽しいですよ？　彼を観察すること」

その向かい側に座っているアセロラが、怪しげな手帳を片手にそう答えた。

怪しげな手帳から茶髪眼鏡で顔立ちまでそっくりな彼らは、実は双子の兄妹だったのであった。

「ね……猫耳ミントきゅん……っ！？」

中庭に足を踏み入れたチロルは、は……反則……、とか呟きながら、その場に倒れた。

「……で、戦うって、どうすんだよ？」

その場に居合た人物が取り敢えず一回喋り終わった後、ポトフは面倒臭そうに質問した。

「ん？　そうだな……」

すると、そこまで考えていなかったのか、バジルは顎に手を当てて

少し考えた。

「！　にらめっこなんてどうだ！？」

「テメェの顔見てたって吐気しか催さねェよ」

「じゃあ、指相撲？」

「テメェの手なんか触れたくもねェよ」

「それならばジャンケンだ！！」

「嘗めてんのかテメェ」

何やら地味な勝負を提案するバジルに、冷ややかに応答するポトフ。

「……ならば仕方がない」

提案が全部否定されると、バジルはフッと不敵な笑みを浮かべた。

「息止め競争だ！！」

「キラキラ」

ちゅどおおおおおん！！

なんかもう、どうしようもないバジルを、ポトフは無表情でぶっ飛ばした。

「とっ、突然何をするのだ？！」

心底驚いている顔で、バジルが彼に攻撃理由を尋ねると、

「はァ？　テメェが言ったんだろ？」

ポトフは、柄の先に長い光の帯がついた光の剣、プリズムソードを出現させ、

「息止め競争、ってな」

その切っ先を向け、そう答えた。

「意味違――」

「「うまい」」

「――って、諸君？！」

それに首を横に振りかけた時、ミントとムースとアロエとアセロラが納得したので、思わず突っ込みを入れたい心境になってしまったバジル。

「遠吠」

そんな隙を見せている彼に向け、ポトフがその場で剣を振るうと、

「！　致し方ない――ロックビル！！」

光の剣の斬撃が飛んできたので、バジルは地面に手を当てて魔法を唱えた。

ドカアアアアアン！！

地表から突然突き出た大きな岩によって、彼はポトフの攻撃から身を守った。

――こうして、ようやく彼らの戦いが始まったのであった。

「……ねー、プリンー？」

「？　む？」

ドカンバコンと戦いが始まってからほどなくして、ココアはプリンに話しかけた。

「なんであの人ら戦ってるのー？」

と、ココアが小首を傾げつつ質問すると、

「ふむ。恐らく勝つ為に戦っているのだろうな」

プリンは至極当たり前の答えを口にした。

「勝つと何かいいことがあるのー？」

「むう、恐らく、何か賞品が貰えるのではないか？」

引き続き小首を傾げているココアに、小首を傾げ返しながら答えるプリン。

「……賞品って何ー？」

「……」

彼女の問いに、プリンは、彼女が入っている大きなカボチャにかけられた、賞と書かれたタスキをじっと見た。

「……」

「……」

「……」

「……」

そうして、プリンはしばらく考えた後、

「……。カボチャ？」

と、答えた。

「ポトフその調子ー！！　にゃー！！」

「けちょんけちょんですわー！！」

そんな彼らの隣で、何やら猫化し始めたミントと、お嬢様らしからぬ言葉を発するムースは、引き続き張り切ってポトフを応援していた。

「アースマジック！！」

「牙狼（がろう）」

爆発する地面を避けながら間合いを詰めたポトフは、光の刃をバジルに振り下ろした。

「ふっ、甘い甘い。アーストラップ！」

「？　――おわ！？」

しかし、バジルの魔法が発動し、突然足場がなくなったポトフは、そのまま落とし穴に落ちてしまった。

「ってェー……」

「フハハ！　どうした、そこまでかい？」

痛そうな声を漏らしながら起き上がるポトフと、上から穴の中を得意気に見下ろすバジル。

「誰がっ」

ポトフは言いながら、不敵に笑う相手に向けて光の剣を投げつけた。

「おっと」

ザクッ

バジルが軽々とそれを避けると、剣は綺麗な放物線を描き、彼が立っていた少し先の地面に突き刺さった。

「ココアちゃんは」

その剣についている帯を頼りに、器用に地表に戻ってきたポトフは、

「誰にも渡さねェェェ！！」

バジルを睨みつけて盛大に咆哮した。

「……はい？」

彼の口から発せられた言葉を、思わず聞き返してしまったココア。

「ふっ、何を言う！　ココア嬢を誰よりも愛しているのは私の方だあああ！！」

ローブをはためかせて魔力を高めつつ、吠え返すバジル。

「ふざけんな！　俺の方が愛してるに決まってんだろォォォ！！」

同じく魔力を高めつつ、更に盛大に吠えるポトフ。

「な……なあっ？！」

「ふむ。どうやらあいつらはココアを賭けて戦っているようだな」

「な、何やら、わたくしまで恥ずかしくなってまいりました……」

「ひとりの少女を賭けての愛の戦いですか」

「アロエなら絶対にやって欲しくないですね」

「にゃー！！　――…は！？　いつまで猫耳つけてんのオレ？！」

そんな彼らを前に、顔を真っ赤にするココアと、冷静な判断を下すプリンと、恥ずかしくなってしまった為に両頬を押さえて紅潮するムースと、眼鏡をかけ直すアセロラとアロエと、まだ猫耳をつけていたことにやっと気付いたミント。

「――母なる大地よ、大いなる力をここに！」

「――遥かなる時をめぐりし光よ、降り注げ！」

外野の声が微塵たりとも聞こえないのか、バジルとポトフは、いよいよ最後の一手に入った。

「グランドテンブラー！！」

「メテオストリーム！！」

彼らが叫ぶと同時に、大地が荒れ狂い、空から無数の流星が降り注いだ。

第７４回　決着後日和

荒れ果てた地へと化した中庭に、二人の男が立っていた。

「……」

「……」

両者とも無言のまま、数秒の時が流れた。

「……ふっ……」

すると、バジルは口元に薄い笑みを浮かべ、

「私の……負け、だ……」

確かにそう言うと、どしゃっとその場に崩れ落ちた。

「……ぽ、ポトフが……」

「かっ、勝ちましたわ……！」

それを見て、中庭の外へ避難していたミントとムースが口を開くと、

「……おォ……応援ありがとな」

ザクッと光の剣を地面に突き刺し、それを杖代わりにしてポトフはその場に膝をついて、彼らに向けて弱々しく笑ってみせた。

「す、すごいですわ！　ポトフさん！！」

「うん、すっごくかっこよかったよ！　お疲れポトフ！！」

そんな彼に、ミントとムースが駆け寄ったところ、

「……こんの……」

カボチャの中から出たココアが、それを持ち上げて大きく振りかぶった。

「おバカーーー！！」

どぐおおおおおおん！！

「「？！」」

そして、それを見事にポトフに命中させた。

「こんっな公衆の面前で何こっぱずかしいことやってんのよって言うか勝手に私を賞品にしないでよって言うか誰だよその緑、って、ちょっと聞いてるのー？！」

「お、落ち着いてくださいココアさん！　と言いますか、恐らく聞こえていませんわっ！」

怒りの三連突っ込みをきめたココアを、ムースは慌ててなだめた。

「……え？」

彼女によって我に返ったココアは、目の前の事態に冷静に目を向けてみた。

「……」

ぽっくり

「ポトフ！？　ポトフうう？！」

目の前では、ぽっくりしてしまったポトフをミントが必死で揺り起こしていた。

「ご、ごめーん！！」

ので、ココアは慌てて謝りながら、彼の元へと駆け寄った。

「……？　ココアに誰だか知られていないような奴が馬鹿犬にココアを賭けての戦いを挑んだのか？」

「彼女の記憶の隅にもとどまることが出来なかったバジルさん……憐れですね」

「……楽しそうですね、兄さん」

うつ伏せに倒れている緑、もとい、バジルを見下ろしながら、プリンとアセロラとアロエはそんなことを口にした。

ポトフとバジルと、何故か中庭に倒れていたチロルを医務室に運び終り、ミントたちがそこから出てきたところ、

「うっふふー♪」

医務室の前の廊下に、満面の笑みを浮かべたクー先生が立っていた。

「「っ！」」

即座にその笑みの意味を悟り、ミントとプリンがさっと顔色を悪くすると、

「中庭をめっちゃくちゃのぐっちゃぐちゃにしたの、キミたちだよね～？」

クー先生は、彼らの予想通りの言葉を放った。

「ち……違うけど……っ」

「う、うむ……ごめんっ」

予想通り、巨斧をちらつかせながら。

「うん、素直でよろしい。じゃ、ちゃあんと元通りにしといてね♪」

血の気が引いて冷や汗まで掻いている彼らを見て、クー先生は巨斧をしまうと、にっこりと笑って去っていった。

「……ぶう、やったのは馬鹿犬なのに」

ので、プリンはぷうっと頬を膨らませ、

「さて、パーティーに戻りますか」

「案内しますよ、兄さん」

「まあ、わたくしもよろしくて？」

「逃げんなコラ」

「「ごめんなさい」」

逃げようとしたアセロラとアロエとムースの身柄を、ミントは薔薇の鞭で拘束した。

ゆっくり目を覚ますと、白いベッドの中にいることに気が付いた。

「！　ポトフ！」

そしてすぐに、視界にココアがひょっこりと現れた。

「ココアちゃん？」

魔力をほとんど使い切ってしまった為に酷く疲れているポトフは、静かに起き上がった。

「ホントごめんね、大丈夫だったー？」

彼の額がまだ赤くなっているのを見て、ココアが申し訳なさそうに謝ると、

「あっは、大丈夫。それより、俺の方こそごめんね？　あんな公衆の面前で」

彼女に謝り返すポトフ。

「う、ううん！」

彼の言葉に、ココアは慌てて首を横に振った。

「え……えと……」

その後で、ココアが頬を赤く染めながら、

「勝ってくれて、ありが」

ごばあ

「「・・・」」

感謝の気持ちを伝えようとしたところ、ポトフの腹の虫に邪魔された。

「……あは……ココアちゃん、トリックオアミートォ？」

こんの、虫め！！　とか思いつつ、ポトフが誤魔化すように笑いながら言うと、

「ええっ？　お肉なんか持ってないよー？」

ココアは再び首を横に振った。

「……ふぅん？　じゃァ」

するとポトフは、今度は妖艶な笑みを浮かべ、

「！」

ココアの左の頬に、右手を添えた。

「イタズラしちゃうぞ？」

そうして彼が、そっと瞳を閉じた彼女に顔を近付けていったところ、

パアアアアアアン！！

静かな医務室に、本物の銃声が鳴り響いた。

「「・・・」」

そのままの体勢で、ポトフとココアがギ、ギ、ギ、と右に顔を向けると、丁度彼らの顔と顔の間を通り抜けた銃弾が、その先の壁にめり込んでいて、そこからゆらゆらと細い煙を上げていた。

「「・・・」」

それをしっかりと見た後、ポトフとココアが反対側にギ、ギ、ギ、と先程と同じように顔を向けると、

「うふふ♪　あのね？　医務室は、病気や怪我を治すところなの」

そこには、桃色の長い髪を頭の上でお団子にしている医務室のベル先生が、麗しい笑みを浮かべつつ、足を組んで椅子に座り、銃口を彼らの間に向けていた。

「だから、元気になったんなら」

それだけでも恐ろしいというのに、ベル先生は白衣のポケットから、

「悪いんだけど、出てってね？」

もう一丁、拳銃を持ち出した。

「「は、はい！！　ごごごめんなさいぃっ！！」」

二丁の拳銃に、それぞれの眉間を的確に狙われていることを肌で感じ取ったココアとポトフは、真っ青な顔で冷や汗を掻きながら、

「「ししし、失礼しましたあっ！！」」

ガラガラガラバシーン！！

医務室から逃げ出した。

「うふふ♪　仲のよろしいこと♪」

そんな彼らを見て、得物を両手でくるくると器用に回しながら笑うベル先生と、

「「……っ」」

そんなベル先生を見て、起きるに起きれなくなってしまったチロルとバジルであった。

第７５回　マッド日和

「ふう、あとはここの木だけだね」

オレンジ色に包まれた中庭で、ミントが額に光る汗を拭いながら言った。

「ぷえ……疲れた」

「はい、疲れました……けれど、わたくし、このようなことは初めて行いましたわ！」

彼の隣には、おぼっちゃまとお嬢様らしからず土で汚れたプリンとムースが立っている。

「……まったく、何故僕がバジルさんの尻拭いをしなければならないんですか」

「……アロエは思い切りとばっちりです」

後ろの方でぶつくさと文句を言っている双子ちゃんはほっといて、

「む。ここは、あのおっきい木があった所？」

「そ。……折角あそこまで大きくなったのに……」

小首を傾げたプリンに、ミントは悲しげに呟いた。

「……ミント……」

「……ミントさん……」

彼と同じように悲しい気持ちになるプリンとムース。

「あとでバジルを張り倒しとかなきゃ」

そんな彼らの真ん中で、ミントはどす黒いオーラを発生させた。

「うむ、僕も張り倒す！」

「わたくしも張り倒しますわ！」

すると、どす黒いオーラが三つになった。

「よし、じゃあ、ここに代わりの木を植えよう！」

どす黒いオーラを発し終わると、ミントは拳を振り上げてそう言った。

「「おー！」ですわ！」

ノリのいいお二方。

「てなわけで、いでよ、マッドホイップ！」

二人が手を挙げると、ミントは挙げていた拳を開き、

『『ジェラララララ！』』

そこにマッドホイップを出現させた。

「「……？」」

なにゆえ？　と、プリンとムースが疑問符を浮かべていると、

「アーンド……」

ごそごそ

「肉ー！！」」

ミントがポケットから骨付き肉を持ち出した。
ちなみにこれは、ポトフを黙らせる用の肉である。

『『ジェララァァ！！』』

その肉を見た、といってもマッドに目はないから……か、感じ取った？　マッドは、喜んでそれに飛び付いた。

ゴックン

「「……丸飲み……」」

ワイルドな食べっぷりに、思わず真っ青になってしまったプリンとムース。

『『ジェララァ～ジュ～シィ～♪』』

「「？！」」

マッドが喋った！！　と、二人が驚いていると、

『ジェ、ラァ！！』

鞭の先端についているマッドが、プッと何かを吐き出した。

「ほいきた！」

それを器用にキャッチするミント。

「そ……それはなんですの？」

彼の手の中にあるものについて、ムースが質問をすると、

「マッドの種だよ♪」

ミントはにこっと笑って答えた。

「……種？」

たっぷりと間を置いて聞き返すムース。

「うん！　マッドは頭がいいから、美味しくて栄養のある食べ物があった場所に種を落としてくんだよ」

ありがとう、とマッドたちの頭を撫でながら応えるご機嫌ミント。

「お……”落としてく”ということは、その植物は移動なさるの？」

そんな彼に、まさかとは思いつつ尋ねるムース。

「うん。するよ」

ムースの期待は、あっけらかんと崩された。

「食べ物がなくなったときとか、あとは……気分、かな？」

「……えらく自由奔放な植物ですのね……？」

前半は、まあ、百歩ぐらい譲れば納得できなくもないが、気分で移動しちゃうのかよ、とか思うムース。

「えっとね、オレが初めて会ったマッドは、旅マッドだったんだあ」

「……旅マッド……？」

ムースの聞き返しをさらりと受け流し、

「オレが七歳の時、学校でなんやかんやがあって、えらくブルーになった時があってね」

ミントは、自分の過去を、えらくハショって話し始めた。

「その頃、学校に行かないで街外れの森に行って体操座りしてたら、旅マッドにあったんだぁ」

≫≫≫

初等学校で溶解魔法を使ってしまったその次の日、

「……ぐすっ……」

街から少し離れた森の近くで、ミントは小さくなって泣いていた。

「けほっ……しらなかったんだもん……」

ガサ

そんな時、背後の森の中の草むらが音を立てた。

そう、ここは街の外であって、更に悪いことに、魔物が住む森の前。

「……だって……おうちでは、あれがふつうなんだもん……」

ガサガサ

そんな場所で一人で泣いている小さな子どもは、魔物の格好の標的。

『ま～みむめも～う！！』

「？　――！！」

背後に忍び寄ってきていた牛のような魔物は、ふざけた雄叫びをあげながら、容赦なくミントに襲いかかった。

「――……？」

が、反射的にきつく目を瞑ったミントには、いつまで経っても痛みが襲ってこない。

ゴックン

「……??」

それどころか、何かを飲み込んだような変な音が聞こえてきた。

「……っ」

周りで何が起こったのか非常に気になったミントは、恐る恐るライトグリーンの瞳を開けてみた。

『ジェラ』

目を開けてみると、先程の牛よりも遥かに小さい、小さくなっているミントと同じくらいの大きさのマッドが、いつの間にやら彼の前に立っていた。

そのマッドは、魔物を飲み込んだせいか、お腹がぽっこりと膨らんでいて、根を足のように動かしてその場で足踏みをしながら、ギザギザの葉っぱを手のように用いて風呂敷のぶら下がった棒を担いでいた。

――それはすなわち、旅マッド。

「……かわいい……」

それのどこら辺を見て思ったのか、ミントが本気でそう言うと、

『ジェラララ』

旅マッドはギザギザの葉で自分の頭を撫でた。

――照れている。

「キミがオレをまもってくれたの？」

ミントが尋ねると、

『ジェラ、ジェラララ』

今度はギザギザの葉っぱを前に出し、凛々しい雰囲気で鳴いた。

「れいには、およばない、って、そんなことないよ。ありがとう、口さん！」

何故かマッドの言葉が分かったミントは、マッドのことを口さんと呼んでお礼を言った。

『ジェララ……』

すると、口さんは再びギザギザの葉で自分の頭を撫でた後、

『ジェ、ラァ！』

プッと種を吐き出した。

「……？　たね？」

それを拾い上げ、ミントが小首を傾げると、

『ジェラ、ジェララララ、ジェララァ』

口さんはくるりとミントに背を向けて、森の奥へと去っていった。

「……”えがおのほうが、にあってるぜ”……」

種を持って立ち上がったミントは、口さんが残していった一言を人語に訳して繰り返した。

「か……かっこいい……」

こうして、口さんを追う彼の瞳から、悲しみの色が消え去っていった。

≫≫≫

「「……」」

彼のえらくハショった話を聞いて、プリンとムースはむしろそのえらくハショった部分の方が気になっていた。

「ミントーー」

なんやかんやって、何があったんだ、とプリンが彼に尋ねようと試みたところ、

ぽんぽん

「うし、完璧っ！」

ミントは、中庭に何かを埋めていた。

「お待ちになって?!」

ので、ムースはいつものお嬢様口調で突っ込んだ。

「？　何さ？」

「いえ、何さではなくて、今、そこに何を埋めたんですの！？」

小首を傾げて振り向いたミントに、ムースが言うと、

「何って、マッドの種」

ミントはさらりとそう答えた。

「いや、まあ、種が出た時点である程度は予想ついていましたが、中庭にマッド？！」

「中庭にマッド」

意外とツッコミ気質なムースに、ミントはこっくり頷いた。

「何か不服？」

「いえ、その、不服と言いますか、マッドが中庭にいてはいろいろと問題が発生するのではなくて？」

疑問符を浮かべつつ質問してきたミント、ムースが控えめに言うと、

「何言ってんのさ？　むしろその逆だよ」

ミントはにっこり笑ってそう言った。

「中庭で待ち合わせの時間にあの子が来ない。そんな時？」

「む！　マッドがお喋りの相手になるのだな！」

「中庭で一生一大の告白。そんな時？」

「むむ！　マッドが応援してくれるのだな！」

「アイツに負けて中庭で落ち込んでる。そんな時？」

「むむむ！　マッドが慰めてくれるのだな！」

ミントが投げ掛けた場面問題に、的確に答えてみせるプリン。

「超画期的じゃん？」

「うむ、超画期的！」

「なんと言いますか、普通の木を植えましょう？」

何やら楽しそうな彼らに、ムースはさらりと言うと、不満げな彼らと共に普通の喋らない木を中庭に植えましたとさ。

第７６回　溶解日和

中庭修復が終わった夜、ミントは自分のベッドに腰掛けて、

「……と、まあ、そんなことがあったわけですよ」

プリンに尋ねられたので、ハショらない昔話をしていた。

「「……」」

彼の話に、それぞれのベッドに座って真剣に耳を傾けていたプリンとポトフは、

「「そいつら全員ぶっ飛ばす！！」」

ババーッと立ち上がって、バックにメラメラと炎を燃え上がらせた。

「あはは……ありがと。でも、目の前でヒトが溶けたら普通驚くよね？」

そんな彼らに、ミントが弱く笑いながらそう尋ねた。

「驚く……かもしれねェけど、ミントはミントだ。バケモノなんかじゃねェ」

「うむ。それに、溶解魔法は教科書にも載っている正式な無属性魔法だ。ミントが使えたって何もおかしいことはない」

すると、両サイドの二人はいつになく真剣そのものの表情で彼に答

えた。

「あは、ありがと、二人と―…も?!」

彼らの言葉が嬉しくて、思わずにこっと笑ってしまったのもつかの間、

「えええ!?　教科書に載ってるの?!」

ミントは、プリンの口からぽろっと溢れた衝撃の事実を聞き返した。

「うむ」

ぽんっ

彼の質問にこくりと頷いたプリンは、呼び出し魔法で魔法学の分厚い教科書を呼び出し、

「ここに」

最後の方のページをパラッと捲り、溶解魔法の欄を指さしながらミントに見せるようにそれを差し出した。

「あら本当……って、えええ?!」

奥様口調で事実を確認した後、いつものミントに戻るミント。

「……とォ、何なにィ?　”溶解魔法…自らの状態を液状に変化させる無属性魔法の高等術”って、スゲェじゃねェか、ミントォ!」

彼の隣にひょこっと顔を出したポトフは、教科書を読んでからミントを讃えた。

「いや、スゲェって言われましても……」

しかし、あんな高等術が使えても……と、ミントはそれを素直に喜べない模様。

「”まず、全身を薄い魔力のベールで包み込む。次に魔力の流れを把握する。そして、その流れに身を任せることによって自らの状態を液状化させる”」

その間にプリンは、ポトフが読みあげたその先の説明文を読みあげた。

「……そんなこむずかしいこと、やってないと思うんだけど……」

あの魔法を理論的ではなく感覚的に出来ちゃっていることを知り、逆に悲しくなったミント。

「”溶解魔法は自らの状態を変化させる魔法ゆえに、失敗は死を意味する”」

すると、再びポトフが教科書を読みあげた。

「って、ここで思わぬ情報が入りました?!」

彼の低めな声がもたらした情報に、ミントは思わずニュースキャスターのような反応を示した。

「”また、戻り方を把握せずにこの魔法を使用すると一生元には戻れない”」

それに追い討ちをかけるように続きを読むプリン。

「それすなわち、一生液体!?」

想像するのもおぞましい事実に、真っ青になりつつも元気に突っ込むミント。

「”更に、状態変化中にも注意が必要である。その状態で完全に蒸発してしまうと、魂もそのまま完全に蒸発する”」

何故かプリンと交互に教科書を読むポトフ。

「完全蒸発って、どんだけ長く溶けてんのさ!?　って言うか教科書のクセに何ちょっとうまいこと言ってんのさ?!」

やがて、ミントは教科書にも突っ込み始めた。

「”更に、状態変化中に他の多量の液体と混ざってしまうと――”」

そんな彼に構うことなく、その先を読みあげたプリンは、

「……む?　続きがない」

隣のページを見て、小首を傾げつつそう言った。

「落丁おおおおお?!」

その先が非常に気になったミントは、思わず叫び突っ込みを入れた。

「お？　でも、ページは飛んでねェぞ？」

が、ポトフがそれぞれのページの一番下に書かれている数を指さしながらそう言った。

「ふむ。詰まり、故意にここで終わらせたのだな」

ので、プリンは顎に手を当てつつ結論を下した。

「どんな教科書だよって言うか命に関わる魔法の注意事項を故意に消すなよって言うかいらねえよそんな引きいいいいい！！」

教科書会社によるまったく粋でない計らいに、ミントは帽子が落ちたのも無視して、髪の毛を両手でぐしゃぐしゃにしながら三連突っ込みをかました。

……ぼて

後、おとなしくなったミントは、そのままベッドにぼてっとうつ伏せに倒れた。

「む？　ミント、どうしたの？」

突然元気がなくなった彼を見て、不思議に思ったプリンが小首を傾げると、

「……疲れたから寝る。おやすみ」

ミントはヤケを起こしたような口調で答えつつ布団を引っ張り上げ、そのまま丸くなって動かなくなった。

「うむ。おやすみ」

「おやすみーィ♪」

プリンはこくりと頷いて、ポトフは右手をひらひらと振りながらミントにおやすみの挨拶を返した。

「……」

「「……」」

しばらくの時間が経ってもまったく動かないミントを、二人は無言で見下ろしていた。

（ふむ、だからあの時……）

布団の中で丸くなっている彼を見ながら、プリンはふと思い出した。

――……。バケモノって、思った？

それは、秋雨の降る森の中での記憶。

ミントによく似た魔物を倒した後、雨の音に負けてしまいそうなほど弱々しい声で、彼がプリンに向けて尋ねた言葉。

「……ミントは、バケモノなんかじゃない」

記憶の中の彼の問いに、プリンがぽつりと答えると、

「んなの、当たり前だろォ？」

ミントの布団に入ろうとしているポトフが、ふっと笑ってそう答えた。

「うむ。そうだな」

ので、ふっと笑い返して頷いた後、プリンはポトフを枕でぶっ飛ばして、自分のベッドに横になった。

「ってェな何すんだテメェ喧嘩売っ」

「ぷわ……おやしゅみ」

抗議を始めた彼に、プリンが言うと、

「……っ、……お……おやすみっ！」

ポトフは自分のベッドに入ってそっぽを向きつつ挨拶を返し、パキンと指を打ち鳴らして部屋の電気を消した。

暗い部屋の中で、訪れたのは穏やかな静寂。

実はまだ眠っていなかったミントと、プリンとポトフの三人は、カーテンを閉めていない窓から見える星空に目を向けた。

そして、去年の七夕にミントが書いていた願いごとを心の中で繰り返し、三人は静かに瞳を閉じた。

”ずっと友達でいられますように”

第７６回　溶解日和（後書き）

ホー、ホー

ポトフ
「……ん？　いや、でも俺とミントは友達以上恋人みま―…」

ミント
「ローズホイップ」

プリン
「……ぶう、台無し……」

第７７回　思い出日和

茜色の光が差し込む放課後の学校の階段の踊り場の陰に、中学一年生の二人の少女が身を潜めていた。

「……ウララ、来ました、です」

「！」

上から足音が聞こえてきたので、そちらの様子をちらと窺った栗色の髪の少女、リンが報告すると、狐色髪の少女、ウララはびくっと顔がこわばらせた。

「……本当に行く、ですか？」

「あ、当ったり前じゃない！」

そんな彼女にリンが尋ねると、意を決したウララは踊り場に飛び出した。

「……」

どうしてあんなのがいいのやら、と思いながら、リンは彼女を文字通り陰で応援することにした。

カツン

そうこうしているうちに、上の階から目的の人物が踊り場にやって来た。

「……」

「……」

向かい合うかたちとなった彼女たちは、片や真っ赤な顔で、片や無表情。

「……ぁ……あの！」

最高に緊張しつつも、ウララは勇気を振り絞って沈黙を切り裂いた。

――が、

「邪魔」

学生鞄を右手に持ち、その手の甲を右肩に乗せている黒髪の彼、ユウは、不機嫌な声でそう言った。

「え」

「通行の邪魔だ。退け」

何を言われたのか理解出来ていない様子の彼女に、ユウは再び邪魔と言った。

「え、あ、はい、ごめんなさい――…って、ちょっと待てい？！」

うっかり道を譲ってしまったウララは、そこを通過していった彼に思わず突っ込みを入れてしまった。

「……お前」

すると、リンが座っている段で足を止めたユウは、ウララにちらりと顔を向け、

「歯に青ノリついてるぞ」

衝撃の事実を伝えて去っていった。

≫≫≫

「っだあああああ!!　し、仕方ないでしょ今日の給食焼きそばだったんだからあああああああ!!」

という三年前の出来事の夢を見たウララは、顔を真っ赤にして言い訳を叫びながら飛び起きた。

「って言うか普通あのタイミングであんなこと言わねえだろ?!気付いても流せよ!!　そこは流しとけよ!!　ったくデリバリーの欠片も存在しないわねあんちくしょおおお!!」

「……ウララ、それを言うなら、デリカシー、です」

頭を抱えて叫んでいる彼女に向けて、ノートにシャーペンを走らせながらリンが言った。

「――はっ!?　あ、あれ?　ここはどこ?」

それを聞いて我に返ったウララは、当たりをきょろきょろと見回した。

「ここはシャイアのお城の中庭、です」

彼女の問いに、リンは問題集のページを捲りながらさらりと答えた。

「中に――」

リンの答えを聞き返そうとした時、

「だりゃあああああ！！」

「――ああ、私、いつの間にか寝てたのね」

チビッコ国王の声が聞こえてきたので、ウララはようやく自分が寝ていたことに気が付いた。

キンキンキンキンキンキン

ルゥが振り回す巨大フォークを鮮やかに受け流し、その背後に回り込んだ銀髪の彼、

スッ

「首、取りました」

アオイは、彼の首筋に剣の切っ先を向けてくすりと微笑みつつそう言った。

「っにゃあああ！！　アオイ、もっかい！！　もっかい勝負！！」

「はい、いいですよ」

悔しそうに振り向いたルゥに、再びくすりと笑って答えるアオイ。

「……あの笑い、バカにしてるようにしか見えないわね？」

「アオイのくすくす笑いは昔から、です」

実は腹黒なのではなかろうか、とか思いながら言うウララに、リンは赤ペンで丸付けをしながら言葉を返した。

「まあ、そうなんだけど。でも、一国の王様に”首、取りました”っていうのはどうなのよ？」

「……流石、熱を込めて語っているラスボスを殴って黙らせただけある、です」

ウララが呆れたように言った後、リンが彼の武勇伝を口にすると、

「国王様はっけーん」

中庭の入り口から抑揚のない声が聞こえてきた。

「あ。シャーンさん、こんにちは」

「おう。こんにちはだな、アオイ」

「おお！？　邪魔すんなよシャーン！！」

現れた赤髪の彼、シャーンに挨拶をするアオイと、彼を指さしても

の申すルゥ。

「おお、悪いな。邪魔するぞ」

「な――」

ひょい

そんなルゥの言葉を無視して、シャーンは彼のマントを掴むとひょいっと彼を持ち上げた。

「テメ、は、離せこの無礼短足!!　オレは王様だぞ!?　兵士長の分際で王様にこんなこと――…」

「無礼はどっちだ。アクアシールド」

ごぽん

宙吊りにされている状態でジタバタと暴れるルゥを、シャーンは水の盾で閉じ込めた。

「ごぼお?!」

「悪いなアオイ、こんなヤツの相手してもらって」

「あ、いえ、そんな。僕も楽しかったですよ」

巨大な水滴の中でまだ暴れているルゥを無視してシャーンが申し訳なさそうに言うと、アオイはくすりと笑ってそう言った。

「そうか」

するとシャーンはふっと微笑んで、別れの挨拶を言って城の中へと歩き出した。

「ゴポ、ゴボゴボゴボボオ！！　ゴボゴボゴボ―…」

「何言ってんのか知らねぇけど、いい加減おとなしくしねぇとお前そろそろ死ぬぞ？」

「―…ごぽっくり」

「あ、死んだ」

そうして、ルゥとシャーンが見えなくなると、

「んしょ」

アオイは手に持っていた銀色の剣を、背負っている鞘に収めた。

「……ひゃあ……」

そして、小さく欠伸をすると、

「……んゆ……」

その場にころんと横になって眠り始めた。

「「……」」

そんな彼を眺めていたリンとウララは、

「懐かしいわね～、私たちが旅してた頃を思い出すわ～」

「はい、です」

彼の髪に止まった青い蝶々を見て、昔を懐かしみ始めた。

「よく、ああやってアオイがお昼寝した時」

「アオイの周りに寄ってきた小鳥やウサギなんかを、ズドンと、です」

食べたのか。

食べちゃったのか。

「まあ、生きる為だもんね～。入手方はアオイには黙っといたけど」

「……そんなこともあったな」

彼女たちがあまり微笑ましくない会話をしていると、背後からユウの声が聞こえてきた。

「あ、ユウ、どこ行ってたの？」

ので、ウララが彼に顔を向けると、

「勉強を見ろとか言ってきたヤツが真っ先に寝やがっからな」

必要な道具を取りに、と付け足しながら、ユウはドサッと麻袋をウ

ララの足元に投げつけた。

「え」

「入れ」

固まったウララに、ユウはさらりとそう言った。

「い、いやぁ……遠慮させていただきま」

「サンドバッグに拒否権があると思っているのか？」

「って、だから私はサンドバッグじゃないわよおおお？！」

「《暗雲の閃光は破滅をもたらす》」

「きゃあああああ？！」

結局麻袋に入れられてしまったウララと、袋を引きずって木の下に行ったユウを見て、

「……仲良し、ですね」

リンはふっと微笑み、再びノートにシャーペンを走らせ始めた。

第７８回　親日和

カランカラーン

王都市、シャイアの街角にある花屋の扉が、綺麗な鐘の音を響かせながら開いた。

「いらはい―…て、あら、ゼラチンじゃない」

やって来たお客に、花に水をあげていた店の主人、ミントママのジャンヌは、その手を止めて若干驚いた。

「はっはっはっ！　こんにちは、ジャンヌさん」

すると、彼、ゼラチンことゼリー＝アラモードすなわちプリンパパは、朗らかに笑いながら挨拶を返した。

「何？　また新しい浮気相手が出来たの？」

「はっはっはっ！　人聞きの悪い冗談は控えていただきたい」

小首を傾げたジャンヌの口から出た冗談に、朗らかに笑って受け答えたプリンパパは、

「ふふ、今日は妻の誕生日なのだよ」

と、オールバックにしていながらも額側に残っている一房の前髪をさらっと払いながら言った。

「何人目の？」

「三人目。って、コラ♪　はっはっはっ！」

アメリカンな雰囲気のジョークをかました後、

「ふぅん……。誕生日に花を贈るだなんて、あんた、クサザムイわね」

「はっはっはっ！　それはお花屋さんが言ってはいけない台詞だろうと言うか、クサイとサムイを肌寒いみたいに言わないでいただけるかい？」

花屋にあるまじき台詞を口にしたジャンヌに、プリンパパは朗らかに笑いながら突っ込んだ。

「そんなことより、そうねぇ。クサザムイあんたにはこれなんかどうかしら？」

彼にしては珍しい突っ込みをさらりと受け流し、

「花言葉は、”食べちゃいたいほど愛してる”」

『『ジェラララァ！』』

マッドプラントの鉢を持ち上げ、それをプリンパパに勧めてみた。

「はっはっはっ！　素敵な花言葉だけれど、遠慮させていただこう」

が、彼はそれを朗らかに笑いながら断った。

「あら、どうして？」

ので、不思議に思ったジャンヌは理由を尋ねてみた。

「はっはっはっ！　それはね、私の頭を食べているからだよ」

すると、頭がすっぽりとマッドの口の中に収まっているプリンパパが、朗らかに笑いながらそう言った。

「ゲヘヘ、あらホント♪　……そのまま食い千切っちまいな」

『『ジェラ』』

「ん？　今何か殺意が孕んだ呟きが聞こえたぞって、いたたたあ？！」

マッドの鋭い牙に首を貫かれそうになったところでテレポートし、生命の危機を脱したプリンパパは、

「か……代わりに、ここにある赤い薔薇をすべていただくよ」

と、赤い薔薇を大人買いした。

「チッ、しくじったか……へいへい。毎度あり」

「はっはっはっ！　また来るよ」

何やら悔しそうに舌打ちしたジャンヌにそう言って、プリンパパはひらひらと手を振りながら花屋をあとにした。

と言うか、また来るのか。

シャイアの街を出て、本日が誕生日である妻が待つアラモード邸に帰る為、

「♪」

プリンパパは、赤薔薇の花束を担いで、森の中を上機嫌で歩いていた。

「！」

その途中で、何かに気付いたプリンパパは、素早い動きで懐からナイフを取り出し、

ガガガッ！！

「「――っ！？」」

目にも止まらぬ速さでそれを振り向き様に投げつけ、背後の茂みに潜んでいた人物の銃を弾き落とした。

「……お引き取り願えますかな？」

驚いて固まっている、自分の命を狙ってきた輩に、すっと目を細めたプリンパパが言うと、

「「っ！！」」

彼らは悔しそうにその場から逃げ帰っていった。

「……」

その様子を見ていたプリンパパは、

「私ってやっぱり超かっこいい……っ！」

ポトフパパでもあることを思い出させるようなことを口にした。

――その時、

パアアアアアアン！！

「――っ？！」

銃弾が、彼の足を貫いた。

「くっ……まだ――」

薔薇の花束を取り落とし、撃たれたところを手で押さえながら振り向くと、

「バーンバニッシュ！！」

彼の背後の茂みに、突如として空中に現れた、灼熱の炎で形作られた巨大な剣が突き刺さった。

ドカアアアアアン！！

「大丈夫ですか?！」

そしてプリンパパの後方から、茶髪のお兄さん、

「あ、あなたは……?」

「僕はソラ。桐崎――じゃないや、ソラ＝フラントです」

ソラが駆け寄ってきた。

「エリアっ！」

「うんっ！」

ソラが名前を呼ぶと、彼に遅れてこちらにやって来た金髪蒼目のお姉さん、エリアは、

「メディケーション！」

プリンパパの傷口に手をかざし、回復魔法を唱えた。

その直後、ぱあっと温かな光がともり、彼の傷はみるみる塞がっていった。

「ど……どうもありがとうございます……」

「！　いえ」

お礼を言われたので、エリアがにこっと笑ってみせると、

「い……今……”フラント”っておっしゃいました？」

プリンパパは、彼らに向けてゆっくりと質問をした。

「「？　はい」」

彼の問いに、彼らは顔を見合わせた後にこくりと頷いた。

「そ、それではまさか、貴女方がババロ――ぽ、ポトフくんの育ての親なのですか？！」

それを見て、プリンパパはバッと立ち上がり、期待を込めた目で彼らに尋ねた。

「「は、はい。そうですけど……」」

二人は、再びこくりと頷いた。

「なんと……！　あ、は、はじめまして！　私は彼の産みの親、ゼリー＝アラモードです！！」

ので、プリンパパは青い瞳を輝かせ、ソラとエリアの手をしっかと握ってご挨拶をした。

「「え」」

彼の言葉を聞き、

「えええ?!　あ、貴方がポトフくんの!?」

「て言うか、アラモードさんって言ったら……!?」

彼がポトフの親であることに驚くソラと、アラモードという名前に驚くエリア。

「こんなところでお会いできるとは……!　あ、あの!　今お時間があるのであれば是非私の家に!」

そんな彼らに、興奮した様子でプリンパパがそう言った。

「え?　あ、えっと……」

「で、では、お邪魔させていただきます」

再び顔を見合わせた後、ソラとエリアは彼からのお誘いを受けることにした。

「本当ですか!?　では、こちらです!!」

その答えを聞いたプリンパパは、嬉しそうに彼らを先導するように歩き出した。

「！　そうだ！　先程のお礼がまだでしたね！」

「え？　あ、お礼だなんて結構ですよ」

「はい。それにしても、ポトフくんのお父様が、まさかあのアラモード社の社長様だっただなんて」

そうして、彼らはアラモード邸に向け、和やかな雰囲気で歩き出した。

「いやあ、しかし、貴女方のような心優しくてお美しい女性に育てていただけて嬉し――…」

「じょせい？」

――が、その一言がまずかった。

「バーンバニッシュ！！」

ドカアアアアアン！！

「……もう、折角回復させてあげたのに……」

ソラの魔法によって黒コゲになったプリンパパを見下ろし、エリアは何かもったいなさそうに呟いた。

第７９回　反省日和

国立魔法学校一階、チョークが黒板を走る音とペンがノートの上を動き回る音だけが聞こえてくる静かな魔物学の教室にて、

「……ぷわ……」

「……くァ……」

二人の生徒が、睡魔と戦っていた。

「……む……」

こしこしと眠たい目を擦りながらも、きちんとノートを取ろうと試みるプリン。

「……」

ところが、彼はすぐに書いた文字を消した。
そして再び黒板に眠たい目を向け、それをノートに写す。

「……」

が、またすぐに消す。
――プリンは、同じ間違いを繰り返す睡魔の罠にかかっていた。

「……っとォ……」

とろんとした目をノートに向け、先生が黒板に書いたことを書き写

そうとするポトフ。

「……」

ところが、ノートに現れたのは、とても文字としては読めない字。
そして再びとろんとした目を黒板に向け、それをノートに写す。

「……」

が、現れたのはやはり、解読不能な文字。
――ポトフは、字がまともに書けなくなる睡魔の魔法にかかっていた。

「……」

「……」

よって、まったく進まない二人のノート。

「いいか？　詰まり……」

カカカカカッ

にも関わらず、ガンガン進んでいく黒板。

「……」

「……」

……こてっ

プリンとポトフは、睡魔との勝負に敗退した。

翌日。

「……っだから……」

国立魔法学校の玄関付近にて、箒も左手に持つ彼、

「なんでオレまで?!」

友人の罰則に何故か巻き込まれたミントは、目の前の現実に心の底から突っ込んだ。

「……ごめん」

「……悪ィ」

が、返ってきたのは元気のない謝罪と、

サッサッ

彼らが地面に散らばっている枯れ葉を箒で集める音。

「……」

調子狂う。

なんか調子狂う。

「……昨日の夜からずっとそんな調子だけど、どしたのさ？」

いつものような元気のない二人に、ミントは荒げた声を元に戻して質問をした。

「……」

「……」

「……」

問いに答えない彼らの答えを、彼らの口から現れるのをじっと待つミント。

「……昨日、魔物学の授業が終わったあと」

すると、プリンがうつ向いたまま静かに口を開いた。

「うん」

「……俺と枕がセル先生に呼び出されて……」

「う、うん」

答えてくれるのは嬉しいのだけれども、どっちが喋るのか固定していただきたいとか思うミント。

「それで……いつもみたいに怒られると思ったら」

「……先生、俺らに向けてこう言ったんだ」

彼の望みは届くことなく、プリンとポトフは交互に言葉を紡ぎ、

「「”俺の授業、そんなに詰まらないのか？”って、泣きながら」」

最後は綺麗にハモってみせた。

「……。……、ええ！？　あ、あのセル先生が？！」

彼らの言葉に、ミントは驚いて目を見開いた。

そして、セル先生の泣きっ面を想像してみようと試みた。

冷たく輝く銀髪。

紫色の鋭い目。

に、涙。

――想像が、出来ない。

「……その時、初めて僕がどんなことをしていたかに気付いたんだ」

「だから、これは俺らの反省の気持ち……」

と言った後、プリンとポトフは再び掃き掃除を開始した。
――そう、これはセル先生からの罰則ではなく、彼らの反省の気持ちから出た、自主的な行動。
今日という日を機に、彼らは二度と同じ過ちを犯さないように生まれ変わろうとしているのであった。

（え？　じゃあなんで巻き込まれてんのオレ？）

やる気に満ち溢れている為に、ガンガン遠くまで箒を進める彼らの大きな背中を眺めながら、ミントはご尤もな疑問を抱いていた。

「やっほー、ミントー！」

そんな時、ミントの後ろからココアの声が聞こえてきた。

「！」

ので、

「聞いてよココア～あ！」

「うわう？！」

ミントはどわっと涙を浮かべ、それを見て驚いた彼女に強制的に話を聞かせることにした。

「なんかもーひどいんだよ本当いや心掛けは立派だと思うんだけどさぁなんで毎回オレを巻き込むんだよって言うかオレはちゃんと授業聞いてるって言うのにまあ確かにそれでも分かんないから二人に勉強見てもらったりしてるんだけどそれにしたってオレまったく関

係ないのにいっつもいっつもいっつもいっつも！！」

マシンガントークで。

「よ、よしよし。大変だねミントー？」

みーみー泣いているミントをどうどうと落ち着かせつつ、苦笑いココアは、

「あ、そだ。あのねー？　さっき廊下でセル先生に会ってねー」

たった今思い出したかのように話題を切り出し、ごく自然に見えるように話題をすりかえた。

「かなーり不自然におイモ渡されたんだけど、どーすればいーと思うー？」

ココアが持ち出したのは、サツマイモがたくさん入った紙袋。

「……イモ……」

イモの山を見た後で、ミントが背後に目を向けると、その先にあるのは枯れ葉の山。

「……」

それらを見たミントは、ふっと口を綻ばせた。

「セル先生って、いいひとだね」

「へ？」

「プリンー！　ポトフー！　焼きイモ食べるー？」

「「！　食べるー！」」

――そうして、彼らは焼きイモパーティーを開くのであった。

第８０回　個人情報日和（前書き）

今回は、サブタイ通りの個人情報を公開してみました↑

第８０回　個人情報日和

……。

……おや？

おやおや、どうやらアロエが今回のナレーターのようですね。

どうもこんにちは。

１０月１０日生まれの、身長は１５５ｃｍで、短めなクセっ毛茶髪と眼鏡が特徴的な女の子。

趣味は人間観察と解剖で、怪しげな手帳を武器にする炎魔法使いのアロエ＝ヨーグルトです。

今日はこれといって何か特別なことがあるわけではないのですが……。

「グ～ットモ～ニンっＶ　ミントきゅ～～～ん！！」

……そうですね。

では、今日はアロエの手帳を少しだけご覧に入れて差し上げましょう。

暇ですし。

　只今アロエの前方を右から左へ駆け抜けていきましたのは、８月２８日生まれの、身長は１５６ｃｍで、金髪ポニーテールと抜群なプロポーションが特徴的な女の子のチロル＝チョコさんです。

趣味はお弁当作りと綺麗に着飾ること。

雷魔法使いで、拷問、と言うより、極刑道具を武器にします。

低めな体力と標準的な魔力を持ち、高い学力とほどほどな運動能力

があります。
あと、ミントさんが相手という限定で、痛いのがお好きという、少し変わった嗜好持ちです。

「ん～Ｖ」

「おはよ……って、何してんのさ？」

「アタイはこっちから食べるから、ミントきゅんはこっちから食べてねっ♪」

そしてスティック菓子でいちゃつこうとしている彼女は、ご覧の通り、ミントさんが大好きです。

「……とう」

「きゃう？！」

そんなチロルさんの期待を綺麗に裏切り、彼女の口にスティック菓子を左手で押し込んでやった彼の名はミント＝ブライト。
４月１日生まれ。
身長は１６５ｃｍで性別は男。
左右で赤と緑に分かれた髪と、それを隠すように被った帽子が特徴的です。
趣味は植物の観察と育成。
植物魔法と召喚魔法を得意とし、薔薇の鞭と食人植物の鞭が武器です。
ツッコミ気質で、キレると非常に危険です。
標準的な体力と桁外れな魔力を持ち、まあまあな学力と結構な運動能力がありますね。

派手な髪色を気にしているコーラをこよなく愛する彼は、涙と褒められるのに弱いです。

「ぷわ……ねむねむ」

「っもー、さっき起きたばっかりだし、今から授業でしょ、プリン？」

チロルさんを継続的に黙らせる為に残りのスティック菓子を一本ずつ彼女の口に入れているミントさんの言葉に、

「うみゅ」

と頷いて、眠たそうな目を擦っている彼はプリン＝アラモード。
生まれは１２月２５日で、身長は１８０ｃｍ、性別は男。
後頭部でひとつに束ねられた長い水色の髪とピンクのひらひらがついた白い枕が特徴的。
趣味は歌うことと昼寝。
風魔法と瞬間移動魔法を得意とし、枕を武器としても用います。
天然ボケ気質で、気が付くと眠っていますね。
低めな体力と高めな魔力を持ち、ずば抜けた学力とそこそこな運動能力があり、カスタードプリンが大好きで、運動と料理とオバケが苦手。
動物好きな彼は、滅多に他人に対して敬語を使うことがありません。
ちなみに、枕がなくなるとゴマ化するので危険です。

ついでに、アラモード社の御曹司である彼の婚約者は、ジェラート社の社長令嬢であるムース＝ジェラートさんです。
彼女は６月５日生まれ。
身長は１６７ｃｍで性別は女。

ゆるふわウエーブがかかった淡い紫色の長い髪とお嬢様口調が特徴的。
水魔法使いで、趣味はピアノとドレス。
低めな体力と高めな魔力を持ち、高い学力と低めな運動能力があります。
ふわふわがついたセンスを常に携帯している、意外と強気でツッコミ気質なお嬢様です。

「はいココアちゃん、あーん♪」

プリンさんの向かい側の席で、チロルさんに便乗してココアさんにピラフを食べさせようとしている彼はポトフ＝フラント。
１２月２５日生まれ。
身長は１８０ｃｍで性別は男。
襟足長めな黒髪と右目の黒い眼帯と左耳の十字架ピアスが特徴的。
趣味は遊ぶことと食べること。
光魔法と回復魔法を得意とし、自分の足と光の剣を武器にします。
どちらかというとボケ気質で、結構なキザリストな上にナルシストであり、挑発に乗りやすく意外と寂しがり屋な人物です。
高めな体力と標準的な魔力を持ち、高い学力とずば抜けた運動能力があります。
肉が好きでオバケが苦手。
プリンさんとは双子の兄弟で、実は狼男らしいです。

「い、いらないよー！」

「？　あ、そっか。はい、あーん♪」

「そういう問題じゃなーい！！」

ピラフに入っていたグリーンピースを避けて再び食べさせようとしたので、彼に突っ込みを入れたのはココア＝パウダーさん。
3月3日生まれ。
身長は１５７ｃｍで性別は女。
肩より少し下まで伸びた緩くウエーブがかかった桜色の髪と、間伸びした口調が特徴的ですね。
趣味はお菓子作りと裁縫。
闇魔法と変身魔法を得意とし、チェーンソーを武器にします。
どちらかというとツッコミ気質で結構な恥ずかしがり屋です。
標準的な体力と標準的な魔力を持ち、高い学力と高い運動能力があります。
好きなものはココアで、カタツムリが苦手。
アロエのいとこに当たります。

「え？　……あァ、口からがよかった？」

「張り倒―…」

にやりと笑ったポトフさんに、ココアさんが真っ赤な顔で乙女らしからぬ言葉を口にしようとしたところ、

ぱくっ

彼らの間に突然現れた男性が、ポトフさんが持っていたピラフをぱくっと食べました。

「……ぺっ、甘くない」

「「・・・」」

ついでに、文句までぬかしました。

「わわわ、ワタル?!」

「ちゃお」

「死神テメェ、スプーン死ぬ気で洗ってこい!!」

……。

彼は確か……。

パラパラ

ありました。

彼についてはあまり詳しくは知りませんが、名前はシニガミ＝ワタル。

１２月２５日生まれ。

身長は１８０ｃｍで性別は男。

右目が隠れるほど伸びた紺色の髪といつも背負っている巨大な鎌が特徴的。

異世界から来た死神で、思考が読めない上に極度の甘党のようです。

「何？　オレ様のプロフィール？」

ごめんなさい。

今言いました。

「誰も聞いてねェっつうかまったく興味ねェよ!!」

「がびーん」

「バカにしてんのかテメェ？！」

ふむふむ、効果音を自ら口にするのも特徴的ですね。

「！　わ！　久しぶりだねみんな！」

「うん。久しぶりだね、ミントにプリンにココアにポトフ」

「お久しぶり、です」

「お前、きゅうり買ってこい」

「なんで私が？！」

……。

死神さんの隣にやって来た彼らも異世界組ですね。

なので、あまり詳しくは知りませんが、確か彼の名はヒュウガ＝アオイ。

５月１２日生まれ。

身長は１６３ｃｍで性別は男。

ふわふわ銀髪にくすくす笑いが特徴的。

異世界から来た剣士で、指先に蝶や小鳥を止められる特技があるようです。

そして彼女はシラトリ＝リン。

１０月２０日生まれ。

身長は１５４ｃｍで性別は女。

肩までのストレートな栗色の髪と語尾の丁寧語が特徴的。

同じく異世界から来た白魔道士で、ほとんど表情を変えない女の子です。

彼女の隣の方がイシグロ＝ユウ。
２月７日生まれ。
身長は１７８ｃｍで性別は男。
撥ねまくった肩までの黒髪とヒトを小馬鹿にしたような笑いが特徴的。
同じく異世界から来た黒魔道士で、きゅうりとヒトの不幸が大好物のようです。

で、彼に顎で使われているのがアシカワ＝ウララ。
８月８日生まれ。
身長は１６２ｃｍで性別は女。
狐色髪のツインテールところころと変わる表情が特徴的。
同じく異世界から来た盗賊で、ツッコミが絶えない女の子です。

……と、まあ、アロエが知っていることはこのぐらいですかね。
では、もうすぐ授業が始まりますのでこの辺りで失礼させていただきますね。

ふぅ、疲れました。

？　どこから情報を仕入れたのかって？

……ヒトは、いつどこで誰に見られているか分かりませんからね。

だから、油断は大敵です。

ほら、あなたの後ろにも。

第８０回　個人情報日和（後書き）

以上、アロエによる人物紹介でしたー。注）アロエはストーカーではたぶんきっと恐らくありません。

第８１回　事件発生日和

国立魔法学校三階、窓から学校の広大な森が望める生物学の教室で、

「……無属性の魔力と、その他の九つの属性のうちいずれかひとつの魔力が宿った魔晶（ましょう）」

生物学担当、狐色髪のリア先生は、教科書を読みながらさらさらとチョークを動かしていた。

「すなわち、”バース”が私たちの心臓の中心にあることによって、私たちの体をめぐる血に魔力が宿り、そうして私たちは自分の思い通りに魔法を」

ふむふむ成程、と生徒たちがそれをノートに写していると、

ガターンッ！！

と、後方から椅子が倒れた激しい音が聞こえてきた。

「……せ……せんせっ」

びっくりした生徒たちとリア先生が音のした方へ顔を向けると、その先に一枚の紙を持ったミントが、真っ青な顔で立っていた。

「お、オレ、用事思い出したので早退しますっ！！」

皆が注目しているなか、彼はそれだけ言うと、酷く慌てた様子で教

室から出ていった。

「はい。分かりました」

それにすんなりと納得し、再び教科書に目を落とすリア先生。

「……？　どしたんだろ、ミン」

それでいいのかリア先生、とか思っている皆さんをよそに、ミントが出ていったドアを見ながらココアが小首を傾げていると、

ひょい

彼女は、肩と両膝の下に素早くまわされた腕によってひょいっとお姫様だっこされた。

「……ト……？」

何が起きた？　とか思いながら、ココアが今の状況を把握しようと試みた直後、

「先生！　ココアちゃんがお腹痛いそうなので俺医務室に連れていきます！！」

彼女をお姫様だっこした人物、ポトフが、尤もらしい表情でリア先生にココアの不調を訴えた。

「ちょ？！」

クラスメイトからビシバシ浴びている視線と彼にお姫様だっこされ

ていることとに顔を真っ赤にしている彼女に構うことなく、ポトフはミントを追うようにココアを連れて教室から飛び出した。

「はい。お大事に」

だから、そんなんでいいのかリア先生、と生徒たちに思われながら、リア先生は何事もなかったかのように授業を続けるのであった。

授業中につき、生徒のいない静かな筈の中庭で、

「ちょっとぉ！　きゅうりくらい自分で買えよっつうかあんたのウチ金持ちなんでしょう?!」

可愛げな財布を上下に振りながらやかましく騒ぎ立てている少女がひとり。

「……これだけか。チッ、シケてんな」

「んだとテメェ?!　ってかどこの不良だよ!?」

「と言いますか、本当に買ってきちゃうウララにも非があると思う、です」

彼女が買ってきた袋の中身を見て舌打ちするユウと、そんな彼に食ってかかるウララと、ご尤もな突っ込みを入れるリン。

「ごろごろー」

「？　どうして転がっているんですか、死神さん？」

芝生の上を巨大な鎌を担ぎながら、どうやってかは不明だが、ごろごろと転がっている死神にアオイが小首を傾げつつ質問すると、

「フッフッフッ。暇だか」

「あ、ミント！」

彼は、自分から問い掛けたのにも関わらず、死神の返答を遮った。

「……オレ様しょんぼり」

「！　アオイ！」

しょんぼりとしている死神を華麗にスルーし、ミントはアオイに駆け寄った。

「……？　顔色が悪いけどどうしたの？」

自分の前で止まり、両膝に両手をついて呼吸を整えている彼に、ア

オイが心配そうな表情で尋ねると、

「ミントォ！！」

彼の隣に、ココアをお姫様だっこしたポトフが到着した。

「「……お姫様だっこ……」」

「ち、違っ！！　ぽ、ポトフ早く降ろしてよー！！」

リンとウララに細い目で見られ、更に顔を赤くしたココアは、彼に降ろしてもらうように頼んだ。

「……っは……こ、これ」

ポトフが渋々ココアを降ろすと、呼吸が落ち着いたミントは、自分を囲むように集まった彼らに、手に握り締めていた紙を見せた。

「「・・・」」

それに書かれた文を読み、ココアとポトフとアオイとリンとウララは、

「「えええええええ?!」」

超びっくりした。

「ね、ね、ね、どうしようどうしようどうしようどうしよう?!」

彼らと同じように慌てふためくミント。

「どどど、どぉするって言われたってっ」

「どうしよーどうしよーどうしよー？！」

「え、え、えっと、救急車？！」

「それを言うならケーサツでしょ！？　リン、１１０番よ！！」

「ウララ、圏外、ですっ」

そうして彼らがわたわたと騒ぎ出した時、

「……」

彼らの輪から少し離れてきゅうりをかじっていたユウが、ミントの手からひらひらと落ちた紙を無言で拾い上げた。

その紙には、

”プリン＝アラモードは預かった。

返して欲しければ、青の森に裏庭から真っ直ぐ行った経路で入って北に１０ｋｍ進んで南に７ｋｍ進んだ後若干西に歩いたところにある白い岩が特徴的な崖の下にある大きな洞穴の奥にある我が屋敷まで来ることだなフハーッハハハハ！！　ｂｙ怪盗Ｘ”

と、大真面目に書いてあった。

「……うざ」

自分の屋敷まで来て欲しい感ＭＡＸな怪盗Ｘからの手紙を読み、ユ

ウは至極の無表情で簡潔かつ抜群の破壊力を誇る形容詞で感想を述べた。

「えーん。ゆうこりん、慰め」

「《天空をめぐる無形の刃》」

そして、皆に相手にされない為に泣き真似しながら寄ってきた死神をぶっ飛ばした。

「……おい、お前ら」

その後、思い思いにパニック状態に陥っている愉快な仲間たちに、

「返して欲しいんなら、こいつの屋敷に行けばいいだろ？」

ご尤もなことをさらりと言った。

「「あ」」

そうして、彼らは青の森に向かうのであった。

第８２回　疾走日和

あからさまな悪役の手紙に誘われて、

「プリン……大丈夫かなぁ？」

「あ、あっはっはっ、大丈夫に決まってんだろォ？」

「そ、そうだよー！　何せあのプリンだよー？」

ミントたちは、青の森の中を歩いていた。

「「……」」

あのプリン、と聞いて、そんなに顔を会わせているわけでもないのだが、リンとウララは余計に心配になっていた。

「そ……そうだよね！　あの、枕が手から離れない限り何があってもほとんど起きないプリンだもん、大丈夫だよね！」

「そォだぜ！　あの、頭いいクセにバカでドジで間が抜けててどんくさい枕だから大丈夫だぜェ！」

「うんうん！　あの、ことあるごとに”ぷゆ”とか”ぴわ”とか言ってるプリンだし、大丈夫だよー！」

先を歩く彼らの会話を聞いて、

「「……」」

リンとウララは、ますます心配になっていた。

「わあ、すごいよ、ユウ！　森が青いよ！」

「ああ、そうだな」

その後ろで、周りの木々を見回しながら友人の袖を引くアオイと、それにふっと微笑んで答えるユウ。

「わあ、すごいぞ、ゆうこり」

「《暗雲の閃光は破滅をもたらす》」

その反対隣で彼の袖を引きながら同じ調子で死神が言うと、ユウは躊躇なく彼をぶっ飛ばした。

「……ゆうこりんのひーき……」

「……それにしても、隣の席の奴が誘拐されたのに気付かなかったのか？」

黒コゲ死神の言葉を当然のごとく無視して、ユウはきゅうりを取り出しながらぼそっと呟いた。

「あ、それ私も思った」

彼の呟きを拾い、

「ねえ、ミント。隣の席だったんでしょ？　それなのにどうして気

が付かなかったの？」

ウララは、小首を傾げながらミントに質問した。

「「――！？」」

直後、一様に見開かれた皆の目が、一斉に彼女に向けられた。

「……え？」

私、何か変なこと言った？　とか考えていると、

「……そう……だよね？」

「――！？」

彼らの先頭を歩いていたミントを見て、ウララはびっくり驚いた。

「オレの……オレのせい、だよねっ？」

何故なら、彼の肩と声が、込み上げてくる感情によって震えていたから。

「オレが……気付かなかったから……っ」

「ち、違っ！！　そういう意味じゃ」

「ごめ……ごめん……なさ……っ、ふええ～ん！！　プリン～！！」

「「！　ミント！！」」

ウララの否定の言葉も聞かずに、責任を感じたミントが泣きながら駆け出したので、ポトフとアオイは慌てて彼を追い掛けた。

「……ない……って、あ、あれ？」

最後まで言葉を紡いだウララは、

「「……」」

自分にビシバシと非難の目が向けられていることに気が付いた。

「……ウララ、ひどい、です」

「ホントだよー！　そんなこと言ったら責任感じるに決まってるじゃーん！」

「うららんサーイテー」

その次の瞬間、リンとココアと死神は、女の子な口調で彼女を責めた。

「違っ、って言うか、これはユウが――」

ので、ウララは責任転換を試みた。

「空気読め、どアホ」

が、きゅうりを持ったユウが楽しそうなお顔をしていらしたので、

「――巧妙な罠？！」

彼女は、自分が罠にはまってしまったことに気が付いた。

「っもー、兎に角、ミントに追い付くよー！」

「そしたら、ミントさんにちゃんと謝ってください、です」

「わっ、分かってるわよぉ！」

「ぷ。泣いてやんの」

「しばくぞウラァ！！」

「びゅーん」

「って、いや、走れよお前！？」

そう言ってココアとリンとユウは走り出し、死神は巨大な鎌の刃と柄に足をかけて飛び、ウララは突っ込みながら駆け出した。

一方、彼らのずっと前方で涙を散らしながら走り去っていったミントを、

「待てよミントォ！！」

「待ってミント！！」

ポトフとアオイは、必死こいて追い掛けていた。

「うわーん！！　プリンー！！」

しかし、ミントは彼らの言葉など聞きもせずに爆走する。

「っの……」

ので、ポトフはふっと体勢を低くして、

「待てェェェ！！」

「うわあ?！」

力いっぱい地を蹴って更に加速し、前方を走るミントをガシッとしっかり捕まえた。

「ほかァく！」

「わあ、ポトフすごい！」

まるで鹿でも捕まえたかのような言葉を口にするポトフと、少し息を切らせながらもくすりと笑ってぱちぱちと手を叩くアオイ。

「っやだやだあ！！　離して離してはーなーしーてー！！」

ポトフにがっしりと腕を掴まれてながらも、ミントは必死に抵抗していた。

「……離さねェよ」

そんな彼に、若干荒くなっていた呼吸を整えたポトフは、

「離したら、また走り出すだろォ？」

「だってだってオレのせいでプリンが」

「おーちーつーけ。だからミントのせいじゃねェ。って言うか」

ミントの言葉を遮って、すっと後方を指さした。

「目的地過ぎてる」

そして、衝撃の事実を口にした。

「うん。だいぶ前に通りすぎちゃったよ？」

その後、アオイが衝撃の事実を付け足した。

「……」

「……」

「……」

間。

「……え？」

「だァら〝待て〟って言っただろォ？」

「え、えええええええ？！」

「あ、で、でもほらっ！　ウォームアップ出来たよね！」

自分の迂濶さに悲しくなったミントと、小さな溜め息をつくポトフと、物事をポジティブに取ってミントを励まそうとするアオイであった。

第８３回　敵陣日和

寒色系統の植物が生い茂る森の中、白い岩が特徴的な崖の下にある大きな洞窟の奥の奥で、

「くんくん。おお、蜂蜜のにおい」

突然開けた空間に出た一行は、少し歩を進めた後に足を止めた。

「ホントね。蜂蜜のにおいがするわ」

「うん。蜂蜜だねー」

「はい、蜂蜜、です」

「んっだこの甘ったるいにおいは……っ！？」

「ゆ、ユウ、大丈夫？！」

死神の言葉に同意するウララとココアとリンと、気持ち悪そうに右腕で鼻を塞ぐユウと、彼を心配するアオイ。

「うーん、確かにこのにおいは蜂蜜だけど……」

「どォして洞窟の中で蜂蜜なんだァ？」

そんな彼らの隣で、ミントとポトフは小首を傾げていた。

「フッフッフッ。そんなことも分からないのか？」

するといつものように巨大な鎌を担いでいる死神は、

「ここが蜂の巣だからに決まっているだろう」

フッフッフッと笑った後、さらりと彼らに答えを提供した。

「ああーぁ、成程～……。……成程？」

ポン、と手を叩いて納得したすぐ後で、ミントは、ん？　と小首を傾げた。

「「！」」

それとほぼ同時に、何かの気配を敏感に感じ取ったポトフとユウは、

「……ミント」

「アオイ……」

ほぼ同時に友人の名を呼んだ。

「？　なあに、ユウ？」

「……なんでしょう？」

「「前と後ろと左と右と上だ」」

そして小首を傾げながら振り向いたアオイと嫌な予感をガンガン感じているミントに、ほぼ同時にそう言った。

「「え」」

次いで聞こえてきたのは、あの虫特有の危険な羽音。

「……わあ、いっぱい来たね♪」

「「笑いごとじゃねえええ?!」」

四方八方から現れた、一メートルほどの蜂のような魔物たちを見て、くすりと笑って言ったアオイに、ミントとウララが勢いよく突っ込んだ。

「突っ込んでる場合じゃないよー！　イービルフィアー！！」

「ココアの言う通り、ですっ。首尾一貫！」

そんな彼らに突っ込みを入れつつ、ココアは竜巻のごとく渦巻く闇魔法を、リンは鋭く尖った杖先を用いての物理攻撃を、襲いかかってきた魔物たちにお見舞いした。

「うわう……リンってば随分とエグい攻撃だねー？」

「……ココアに言われたかない、です」

そして二人は、暗黒色なココアの闇魔法と、文字通り敵の首から尾までを一直線に貫くリンの攻撃とを見ての、素直な感想を述べた。

「そうだったわねっ、集中豪雨ぅ！！」

彼女たちの突っ込みのおかげで今の状況を飲み込めたウララは、肩にかけていたポシェットから素早くボウガンを取り出し、それをズカズカと連射した。
彼女の放った矢は魔物たちの額を見事に射抜き、魔物の数をガンガン減らしていく。

「うっひゃ～！　さっすがウララちゃんだわね！」

「！　ウララちゃん後ろォ！！」

うっひゃ～と自分を褒めていると、後ろから危険を知らせるポトフの声が飛んできた。

「？！　ウララちゃ――きゃあ！？」

「キラキラァ！！」

慣れない呼称にウララが驚いていると、ポトフはすぐに動かない彼女を抱きかかえるようにして守りつつ、彼女の背後から奇襲を仕掛けた魔物たちを光魔法で消し去った。

「……あ……ありがと……ございます」

「あっは、どぉいたしまして」

びっくりしながらもウララがお礼を言うと、ポトフはふっと笑ってそれに答え、その場を離れて再び魔物たちと戦い始めた。

「……」

その場に残されたウララが若干顔を赤くしてぽけーっと突っ立っていると、

「……チッ」

ユウの舌打ちが聞こえてきた。

「え？」

見ると、彼は魔物の攻撃を避けながらポトフのことを軽く睨んでいた。

（！？　ま、まさか、ヤキモ）

「余計なことを」

（チなわきゃないですよねウフフフフ♪）

もう少しだったのに、と悔しそうに呟いたユウに、ウララは一瞬でも期待したことを激しく後悔した。

「それにしてもうぜぇなこいつら。《暗雲の閃光は破滅をもたらす》」

「月光ーう」

バリバリと轟音を立てながら落ちる白熱した雷で次々と魔物たちを消していくユウの隣で、巨大な鎌の鎌子をぶんぶんと振り回して敵を攻撃していた死神は、

「うーむ。なんか飽きてきた」

なんか飽きちゃっていた。

「んー……。……ん？　おお、閃いたぞ。ぴこーん」

後、顎に手を当てた死神の頭の上にぴこーんと電球が光った。

「逝っけー」

そして、死神は鎌子の切っ先を魔物の群に向け、

「死神ビーム」

と、相変わらず抑揚のない声で言った。

ズドドドオオオン！！

その直後、彼の言った通りに、鎌子の刃の先端から紫色のビームが発射した。

「……恐るべし死神ビーム……」

「わあ、死神さんすごいね！」

どんなネーミングだ、とか思いつつも、それが軌道上の魔物を一掃したのを見てしまった為、ミントは顔を引きつらせ、アオイはくすりと笑ってそう言った。

「にしても、何匹いるんだって感じだよね、蓮華！」

「うーん、困っちゃうね？　みじん切りっ！」

そんなことを言いながら、数に限りを見せない敵をミントは薔薇の鞭で叩きのめし、アオイは銀色の剣で切り捨てた。

「……ええと、プリンはきっとこの先にいるんだよね？　えいっ！」

技を決めた後、次の魔物に攻撃を始めつつ口を開いたアオイに、

「はあ！　……え？　あ、うん。たぶん」

ミントは薔薇の鞭を巧みに操りながら頷いてみせた。

「そうだよね。よおし、じゃあ」

ミントの答えを聞いたアオイは、ちらりとユウに顔を向けた。

「《宙を舞う三日月》」

彼の合図に頷く代わりに、ユウは三日月型の風を吹かせる呪文を唱えた。

「わあ！？」

「おわ！？」

「きゃあ！？」

その風は、ミントとポトフとココアを巻き込み、器用に彼らを奥へ

と繋がる道の方へと吹っ飛ばした。

「ここは僕たちに任せて！」

次いで聞こえてきたのは、アオイの口から出た頼もしい言葉。

「ええ？！　でも」

「大丈夫」

驚いたミントの逆接の接続詞の先を遮り、

「僕たち、伊達にろーぷれクリアしたわけじゃないから」

アオイはくすりと笑ってそう言った。

「「・・・」」

「あ、う、うんっ！」

「分かったぜェ！」

「ごめんねそしてありがとー！」

ろーぷれ？　とか疑問符を浮かべつつ、ミントとポトフとココアは、彼らに背中を任せて駆け出した。

第８４回　親玉日和

甘ったるい蜂蜜のにおいと蜂まがいな魔物で溢れ返っていた空間を抜け、三人は捕われた友人を助けるべく、狭くほの暗い洞窟の中を走っていた。

「ここは魔物がいないみたいだねー？」

「うん。しかも、ポトフのおかげで明るいしね」

「あっはっはっ！　さっすが俺って感じだぜェ♪」

先程から魔物がまったく姿を見せないので安心するココアと、友人の手に握られた光の剣を見て言うミントと、彼の言葉に嬉しそうに笑うポトフ。

「……にしても、さっきの蜂蜜が強烈すぎて鼻の調子が……」

その後で、ポトフは鼻に手を当てながら呟いた。

「えー？　それじゃあプリンのにおいは辿れないのー？」

「ん？」

それを聞いたココアが残念そうに言った直後、ミントははたと足を止めた。

「お？　どした、ミントォ？」

「きゃあ?!」

それにつられて足を止めたポトフに、彼の後ろを走っていたココアが激突した。

「あっち、なんか明るいよ?」

そんなココアを気にも留めずに、ミントは右側にある脇道を指さした後、そちらに向かって駆け出した。

「いった……っもー！　急に止まらないでよー?」

「あは、ごめん」

鼻を押さえながら文句を言うココアに、ポトフは申し訳なさそうに謝ると、

ひょい

「え?」

「俺たちも行こう、ココアちゃん!」

「おーろーせー!!」

ひょいとココアをお姫様だっこし、彼女の抗議も聞かずにミントを追って駆け出した。

「……っは……」

息を切らせながらも、光が漏れ出ている小部屋に辿り着いたミントは、

「っプリ―…」

探し求めている友人の名前を呼ぼうとしたところで固まった。

「―……ん？」

ミントが見つけた小部屋の奥の、大きくて平な岩の上に、長い水色の髪を無造作に広げた制服姿のプリンが蒼い瞳を閉じて静かに横たわっていた。

「・・・」

ここまでは、まだいい。
ここまではまだいい、の、だけれども。

『ぐふふふふ、プリン様ぁV』

ミントの視界に、国立魔法学校の制服を着た何か大きな物を背負っている危険人物が一人、

『ぐふ、素敵なお顔……』

プリンの上に跨っていた。

『ぐふふふ……プリン様、ココ、熱くないですか？』

プリンの上に、跨っていた？

「乱れ咲け！　蓮華えええ！！」

ババババババッシーン！！

自分のネクタイとプリンのしっかり締まったネクタイに手を掛けた危険人物を、目の前の状況を理解したミントは大慌てでぶっ飛ばした。

「お前、教育上よろしくない！！」

その後、そいつをズビシッと指さして怒鳴りつけた。

「？　教育上ー？　あ！」

「どしたんだァ―…って、枕！！」

彼の後ろから小部屋に入ったポトフと彼にお姫様だっこされているココアは、部屋に入るなりプリンを発見した。

「ポトフ、ココア、変態だよ！！」

「「変態？」」

そしてついでに、ミントの情報によって変態を発見した。

『ふ……不意打ちとはやってくれるわね』

すると、変態さんが起き上がった。

「……〝わね〟ー？」

その物言いに小首を傾げるココア。

『……まあ、いいわ』

彼女の仕草など気にも留めずに、変態さんは服についた汚れを払い落とし、

『遅かったわね！　でも、今日は前みたいに負けたりなんかしないわ！！　今日この洞窟に来たこと、後で後悔したって遅いんだからね！！』

三人を指さして強気発言をした。

「「・・・」」

が、しかし、

「前みたいにって、あんたなんか知らないよー？」

「ま、仮に会ったことあったとしても忘れるけどな。俺、テメェみたいなのが一番嫌いなタイプだし」

「て言うか重複表現。後悔は後でするものだよ？」

三人にさらさらと全否定された。

『……え？』

彼らの言葉を聞いた、ポトフが一番嫌いなタイプ――筋肉質で暑苦しい感じの大男である彼は、

『え、えええ！？　覚えてないの？！』

と、酷くショックを受けた。

「だから知らないって言ってるじゃーん」

誰だよお前、とでも言いたげに浅い溜め息をつくココアと、

「そそ。それに、オレの知り合いに変態はいな―…」

「……お？　どして俺の顔見て発言を中止するんだ、ミント？」

視界の隅に映ったポトフに顔を向けて言葉を詰まらせるミントと、その行動に小首を傾げるポトフ。

「……」

「え?!　ちょ!?　なんでそこで黙り込むんだミントォ?!」

などと、ミントとポトフが緊張感のないことをやっていると、

『……許せないわ……』

彼は、彼の体型ににつかわしくない口調で言葉を紡いだ。

『プリン様を独占してる上に、わたくしのことをこれっぽっちも覚えていないなんてえええ!!』

（（許せない理由は明らかに後者の方が強そうだー!））

『このわたくし、国立魔法学校第三学年ヒヨコさん寮所属イチゴ＝タルトが成敗してくれるわあああ!!』

（（なんか無駄に説明的だー!!））

タルトの発言に、ミントとココアとポトフが心の中で突っ込みを入れていると、

『ラヴ』

彼は、体勢を低くして右手を構えた。

『アターーーック!!』

そして、次の瞬間に駆け出し、三人が立っていた場所に拳を振り下ろした。

ドゴオオオオオン！！

「「？！」」

二手に分かれてそれを避けた三人は、目の前の現象に大きく目を見開いた。

「う……ウソだぁ……？」

「あぅんなヘンテコリンな名前の攻撃でー？」

「く、クレーターが、出来ちゃいましたァ？」

それは、彼が拳を振り下ろした所を中心に、半径一メートルのクレーターが出来ていたから。

『……チッ、外したか』

拳を地面から離しつつ、タルトは忌々しげに舌打ちをした。

（（……っ！！））

タルトから見て前方に跳んだ為、禍々しい殺気を放つタルトの顔を見て戦慄を覚えるポトフとココアと、

（て言うか、蜂刺さってる……！！）

彼の後ろに跳んだ為、彼の背中に蜂まがいな魔物が止まっていて、その針が彼の背中に突き刺さっていることに気が付いたミントであった。

第85回　瀕死日和

「《癒しの風》」

呪文を唱えながらリンが鋭く尖った杖先を地面に突き刺すと、温かな光が生まれて周囲の仲間たちの傷を癒していった。

「ありがとう、リン。えいえいっ！　やあっ！」

「あーもー、このでかい蜂どんだけいるってのよ、まったくもーっ！！」

「どんだけー」

「……激しく腹立たしいが見逃してやる。《壮麗なる龍はすべてを呑み込む》」

彼女を囲むように、かつ、それぞれ別の方向を向いているアオイとウララと死神とユウは、倒しても倒しても数が減っていないように感じるほどの魔物の大群と戦っていた。

「えい―…うわあ？！」

「集中―…きゃあ？！」

「オレ様へろへろ」

「くっ……きゅうりが足りん」

しかし、癒しの魔法で傷は治せても、心身ともにの疲労は治せない。

「……」

動きが鈍くなってきている仲間たちを見た後で、そんな一生懸命な彼らを嘲笑うかのようにうじゃうじゃと現れては仲間たちを傷付ける蜂まがいな魔物に目を向けたリンは、

「……まじでむかつく、です」

いつもの無表情な栗色の瞳を、更に凍てつかせた。

「「――!?」」

直後、ただならぬ魔力の高まりを感じ取ったユウと死神は、

「「伏せろ!!」」

「「?!　う、うん!」」

同時に叫びながら自分の体勢を低くし、アオイとウララの体勢も低くさせた。

「――汚れなき白、浄化の力を解き放て――」

そのすぐ後で、リンが、右手に持った杖を肩の高さで横にして、左手を自分の胸に当てながら詠唱すると、

「《滅びの翼》」

彼女の背中から、無数の白鳥のごとく白い羽がブワッと無方向に飛び散った。
真っ白な美しい羽は音もなく宙を舞い、それに触れた魔物を一瞬にして消し去った。

「わあ……綺麗だね」

「って、言ってる場合!?　あの羽マジでヤバイって言うかこれじゃ伏せてても意味ないじゃない?!」

純白の羽が辺り一面に舞う美しい光景に目を奪われているアオイの隣で、ウララはご尤もな突っ込みをいれた。
――彼女の言う通り、リンの背中から飛び散った無数の羽は、重力に従ってふわりふわりと落ちてくる。

「白鳥の羽、みたいだね」

「ほほう、りんりんの苗字がシラトリなだけに白鳥なのか」

「……まんまだな」

「だから、んなこと言うてる場合かあああああ!?」

危機感の欠片もないアオイと死神とユウに、ウララが頭を抱えながら叫び突っ込みを入れると、

「死神シールド」

死神は鎌子を掲げ、抑揚のない声で魔法を唱えた。
直後、ブン、と音を立て、半透明な紫色の盾が、五人を包み込んだ。

「……あ……」

「フッフッフッ。オレ様大活躍」

身の安全が確保され、叫ぶのをやめるウララと、彼女の隣で得意気に笑う死神。

そうして、魔物と羽が消え失せたところ、

ドサッ……

「「！　リン？！」」

「りんりん！」

魔力を使い果たしてしまったのか、リンはその場に崩れ落ちた。

そんな彼女に慌てて駆け寄ったのは、アオイとウララと死神。

「！」

その時、ユウはハッと目を見開いた。

――何故なら、死神の盾の陰にでも隠れていたのか、一匹の生き残っていた魔物が、ウララに狙いを定めていたから。

「伏せろどアホ！！」

「え？　――きゃあ？！」

そう叫びながら、ユウは彼女を突き飛ばした。

ドスッ！！

――直後、魔物の針がユウの背中を貫いた。

「「？！　ユウ！？」」

「くっ……来るな！」

痛々しい音を聞き、慌てて起き上がったウララと、リンを死神に任せて彼に駆け寄ろうとしたアオイを制して、

「っ……逃げ、ろ……」

「「――？！」」

ユウは、口から出た言葉とは裏腹に、彼らに牙を剥いた。

ドカアアアアアン！！

ミントの薔薇の鞭にぶっ飛ばされ、タルトは後方の岩壁に突っ込んだ。

「っはあ……はあっ……、こ、今度こそ……」

肩で息をしながら、ミントが願うように砂煙の向こうに目を向けると、

『ぐ、ふふ♪　だから、無駄だって言ってるじゃない？』

パラパラと岩の破片を落としながら、タルトはふらりと起き上がった。

「……っ！！」

悔しそうに相手を睨みつけて再び鞭を構えつつ、全身ボロボロになっているクセに平気で立ち上がってくる彼に恐怖を覚えるミント。

（なんで倒れないのさっ？）

「「ミン……ト……」」

とても立ち上がれるような姿ではないのに、と思いながら、もうすでに戦う力を持っていないポトフとココアを守るように、ミントは敵と対峙した。

『ぐふ♪　あんたボロボロじゃない？』

「……っは……お前こそ」

攻撃の体勢に入ったタルトを、油断なく睨みつけながら、

（ポトフの剣と足と光魔法とココアの闇魔法とオレの鞭をさんざん喰らって、その上背中に蜂まで刺さってるのにどうして……っ）

ミントは、彼が倒れない理由を考えていた。

（――背中に、蜂？）

そして、ミントはハッと気が付いた。

――それ故、彼に隙が生まれた。

ドゴオオオオオオン！！

「か――っ？！」

「「ミントっ！！」」

タルトの拳を腹に受け、ミントは吹っ飛び、岩壁伝いに力なく崩れ落ちた。

『ぐふふ♪　わたくしの勝ちね？』

「……く……っそ……」

勝者の笑みを浮かべる敵と言うことを聞かない自分の体とに弱々しい悪態をつくミント。

（折角分かったのに……！）

その後、ミントは悔しさに溢れたライトグリーンの瞳を、

「っ起き、て……プリンっ！」

捕われた友人に向け、彼の名前を呼んだ。

「……」

しかし、プリンは答えず、静かに目を瞑って横になっている。

「プリン……？」

――おかしい。

と、彼は思った。

いくらプリンでも、すぐ隣であれだけ派手にドッタンバッタン戦っていたのだから起きるだろう。

しかし、彼は無言のまま、身動きひとつせずに横たわっている。

（――！　まさか！？）

ハッと思い当たって、ミントはタルトに目を戻した。

『ぐふ♪　言ったでしょう？』

すると、彼はにやりと邪悪に口角をつり上げ、

『〝遅かったわね〟って』

と、言った。

「「な――っ！？」」

その言葉に、ポトフとココアは目を見開いて言葉を失った。

「……う……ウソだ……」

信じられない、と言うよりも、信じたくないといった顔で、ミントは再びプリンに顔を向ける。

『嘘なもんですか』

「ウソ……起きて……」

彼の言葉を耳に入れないように、ミントは必死で友人に声をかけた。

「……起きて……起きてよ……」

目を覚ましてと訴える彼の視界が、ぐにゃりと歪み出す。

「起きろプリン！！」

それを気にも留めずに、ミントは力の限りの声を出した。

『ぐふふふ♪　だから無駄だって』

彼の精一杯の言葉は、

「……ん……」

『言って』

「……うぅ……」

「『・・・』」

届いた。

「ぷわ……ねむねむ」

むくりと起き上がったプリンは、いつも通り眠そうに欠伸をした。

第８６回　逆転日和

目が覚めたプリンは、眠気が残る蒼い瞳をこしこしと擦っていた。

「起きたじゃんか！！」

『ななな、何故？！　強力な睡眠剤を打ち込んだ筈なのに！！』

すると、ミントの突っ込みと、聞き覚えのない声が聞こえてきた。

「……む？」

ので、プリンは結構な寝癖をそのままに、寝惚け眼で声のする方を見た。

「強力な睡眠剤って、いつ打ったのさ！？」

『プリン様が生物学の教室にいらして机にお座りになってすぐよ！』

「机に座ってって、お前どこにいたんだよ！？」

『プリン様の机の下に決まってるでしょ！』

「うわキッモ！　お前キッモ！！」

『な、なんですってええええ？！』

そこにいたのは、ボロボロになって倒れているココアとポトフと、彼らと同じように倒れているクセにガンガン突っ込みを入れている

ミントと、彼らより酷くボロボロになっているクセに元気にじだんだを踏んでいる見知らぬ大男。

「？」

はて？　と、頭に疑問符を浮かべるプリン。

（ふむ……朝ごはんを食べて生物学の教室に行って授業を聞いていて眠くなって馬鹿犬がゾウさんに襲われている夢を見て、それから……？）

覚えていたのはそこまでであり、そこからどうすれば岩の上で寝ているのだろうとプリンが考えていると、

「じゃあっ、そこからどうやってプリンを拐ったのさ！？」

『ぐふふ、よく聞いてくれたわね！　わたくしがどうやってこの洞窟に戻ろうとか考えていた時、プリン様が魔法を使ってくださったのよ！』

「はあ？！　睡眠剤打ったのになんで魔法が使えるのさ！？　気付けよ！　その時点で睡眠剤効いてないって気付けよ？！」

『”にゅぅ……てれぽーと”って！』

「寝言おおおおお？！」

彼の疑問の答えとなる会話らしくない会話が聞こえてきた。

「み……ミントー……？」

「あにさ?!」

ココアの弱々しい呼び掛けに振り向いたミントは、

「ゴホッ……っミント……よくそんなに、元気に突っ込めるな……?」

ポトフに弱々しい突っ込みを入れられた。

「……」

「……」

「……」

間。

「がは」

「「ミントー?!」」

急に血を吐いて倒れたミントに、そんな無茶するから！　と、ポトフとココアは駆け寄ろうにも駆け寄れなかった。

「う、動けないよー……」

「くっそ……情けねェし、カッコ悪ィ……」

そう言って、地面にへたばりながら悔しそうに睨みつける相手は、

『ぐふふ♪　ざまーみろって感じよね～♪』

身をくねらせて笑っているタルト。

（……ふむ）

ぼーっとしていた頭がだんだん覚醒してきたプリンは、もう一度目の前の状況をおさらいした。

（生物学の授業中に僕はあいつに誘拐されて、ミントと馬鹿犬とココアは……僕を助けに来て、返り討ちにされた？）

「……」

三人の友人の行動に、……照れる、と枕で顔を隠したいところだが、今はそんなことをやっている場合ではない。

”ミントたちをいじめた→ぶっ飛ばす”

至ってシンプルな式が、プリンの脳内で成り立った。

「微風」

『！？　――きゃあ？！』

直後、有言実行。

得意気にぐふぐふ笑っていたタルトを、プリンは初等魔法でぶっ飛ばした。

『な、何をなさるのですかプリン様！？』

ぶっ飛ばされた後、彼の攻撃に驚き、タルトはその理由を尋ねた。

「それは僕の台詞だ」

『っ！？』

が、返ってきたのは、氷のように冷たい瞳と言葉。

『わ……わたくしは、プリン様が好きだから―…』

怯えているような声でタルトが彼の問いに答えると、

「……以前にも同じようなことを言っていた奴がいたが」

プリンは、呆れたように溜め息をついた。

と言うか、同じようなことを言っていた奴ではなく、同じ奴だ。

「僕には婚約者がいる上に、そんな変な趣味はない。それに」

そう言って、プリンはキッとタルトを睨みつけると、

「僕の大切なトモダチを傷付けたお前は、絶対に許さない」

氷のごとく冷たい瞳に、怒りの色を滲ませた。

『ぜっ……、と、友達？』

「ミントは僕の初めての、ココアは二番目のトモダチだから大好き

で、ポトフは……まあまあ好き」

そうして、動揺し始めたタルトに、

「でも、お前は大嫌いだ」

プリンはとどめをさした。

『そ……そんな……』

「テレポート」

その場で膝をついたタルトの背後にテレポートし、彼の背中から蜂まがいな魔物を引き剥がした。

「……ふむ」

直後、突然全身に今までの痛みが駆け巡り、気を失ったタルトを見下ろし、

「……。僕のことは忘れてもらうか。神風」

ビュオオオオオオ！！

面倒臭いから、と付け足してタルトをぶっ飛ばし、向かい側の岩壁に彼の頭を激突させた。

「「・・・」」

おっかねえ……と、ミントとポトフとココアが思っていると、

「メディケーション」

「「！」」

彼らの傷が、プリンの回復魔法によって癒された。

「あっ、ありがと、プリン！！」

「よかったよー！　無事だったんだねー！」

「……あ……ありがとォ」

「うむ」

彼にお礼を言いながら起き上がってこちらに来た三人に頷いてみせた後、

「仕上げ」

ずいっと彼らに、今しがたタルトの背中から引き剥がした蜂まがいな魔物を突き出した。

『は、離せ無礼者！　我は女王、怪盗Xだぞ！』

その魔物はプリンにしっかりと捕まえられていながらも、そこから逃げようと必死でもがいていた。

「うえ、よく見ちゃうと更に気持ち悪ー……」

「へぇ……こいつが怪盗Xだったんだ？」

「つうか、喋れたんだな、この蜂？」

「どうやら、これがあれを操っていたようだな」

魔物を見ての思い思いの感想を述べた後、四人は顔を見合わせて頷いた。

「いっくよー？」

「せーのっ」

「神風」

「キラキラ」

「アームアームで」

「曼珠沙華♪」

そうして、彼らはリズミカルに魔物を倒したのであった。

ちなみに……。

『《暗雲の閃光は破滅をもたらす》《暗雲の閃光は破滅をもたらす》《暗雲の閃光は破滅を》』

「？　どしたのさ？」

「ゆうこりんが反抗期ー」

「む。それ、ユウが一番傷付く言葉を聞いたら治まるぞ」

四人は、帰り際に暴走しているユウを発見した。

「ユウが」

「一番」

「傷付く」

「言葉？」

プリンの言葉を聞き、リンとウララと死神は、小首を傾げているアオイに顔を向けた。

「……あれ？　どうしたの、みんな？」

「アオイ、ユウの悪口を言う、です」

「そうそう！　あのバカにガッツーンと言ってやんなさい！」

「ごーごーアオイー」

「ええっ！？　僕が？！」

彼らに何やら耳打ちされ、ゴロゴロバリバリ暴走しているユウに、アオイは困ったように対峙した。

「え、えと……」

そして、ちょっとの間考えた後、

「ゆ、ユウのおたんこなすー！」

迫力なさげに、彼なりに精一杯の悪口を口にした。

『――？！！』

彼の口から出た初めての悪口に、ユウは未だ嘗てないほどのショックを受けたそうな。

第８６回　逆転日和（後書き）

以上、私が寝る前、プリンが誘拐されたらどうなるかな？とか突然思い付いて書き散らしたお話でしたー。あ、空き缶のポイ捨てはよくないですよ―…って、いたたたあ？！（強制終了

第87回　持久走日和

北風の吹く寒い日の朝、国立魔法学校の玄関前に、ジャージ姿の生徒たちがやって来た。

「ぷゆぅ、ちゃぶい」

なかなかジャージというものが似合っていない彼、プリンは、抱えていた枕をきゅーときつく抱き締めた。

「わは～、今日は本当に寒いね～」

ほわっと白くなった自分の息を見て、ミントがほのぼのとそう言うと、

「なんでもっと早く言わねェんだよ、ミント？」

彼は、ポトフにきゅーっときつく抱き締められた。

「……って、何してんのさポトフ？」

「抱擁Ⅴ」

「マッド」

『『ジェラララァ！！』』

という具合いに、マッドホイップがポトフの頭に噛みついた時、

「よし、全員揃ったな」

ニット帽を被ったオレンジ色の髪の体育教師のエル先生は、出席簿を魔法で片付けた。

「……」

「……」

『『ジェラ』』

そして、頭から血をどくどく流しているポトフと目が合った。

「……大丈夫か？」

「大丈夫じゃありません」

「大丈夫か。ほんなら」

自分で問い掛けたクセに彼の解答をさらりとクールに流したエル先生は、

「持久走、始めるで」

スッとピストルの銃口を空に向けた。

「「え？」」

「”え？”やない。持久走始めるで」

一律に疑問符を浮かべたウサギさん寮の男子生徒たちに、エル先生はさらりと言い返した。

「い、いや、でもセンセ、コースはどない―…」

そんなエル先生に、彼と同じようなニット帽を被ったソバカス少年、タマゴが質問すると、

「このセイクリッド島、一周じゃ」

エル先生は、涼しげな、かつ、不敵な笑みを浮かべてそう言った。

「「い、いっ」」

「文句ある奴は、このピストル眉間に撃ち込んだるで?」

（（え?　それ本物なんですか?））

彼はクールに生徒たちを黙らせると、

「いくで」

左手と右腕で耳を塞ぎ、

「持久走の、始まりじゃあああああ!!」

ドパアアアアアン!!

と、いつも通り、オーバーヒートした。

「おォし！　どっちが先にゴールにつくか競争だぜ、ミントォ！」

「むう！　ポトフなんかに負けないんだからぁ！」

「あっは、言ったな～ァっ！」

銃声と一緒に元気よく駆け出したのは、いつの間にか回復魔法を使っていたポトフと、いつの間にかマッドをしまっていたミント。

「島一周って、どんだけあると思ってるんですかあっ？！」

「……まあ、地図で見た感じはちっさい島やけどな」

「ふにゃあ、それは縮尺の問題でするうう！！」

彼らに遅れていやいやながら走り出したのは、猫耳少年のサラダとタマゴと、その他のウサギさん寮の男子生徒たち。

「わっしゃっしゃっ！　やっぱ子どもはこうでないと―…」

だんだんと小さくなっていく彼らを見て、腰に手を当てながら軽快に笑っている途中で、

「―…な……」

「ぷわ……」

エル先生は、スタートラインにプリンが立っていることに気が付いた。

「……ねむねむ……」

しかも、かなり眠そうだ。

「何しとんのじゃアラモードおおお?!」

スッパアアアアアン!!

「ぴわ?!」

ので、エル先生は思わずスリッパで彼をどついた。

「……痛い」

「! ご、ごめんなぁ―…って、ちゃうわ!! おどれはここで何しとんのじゃ?!」

思わず謝ってしまったエル先生は、はっと我に返ってプリンに問うた。

「……。まばたき」

「なんでやねん?!」

スパアアアアアン!!

ちょっと考えた後のプリンの答えに、勢いのいい突っ込みを入れるエル先生。

「む? まばたきしないと目が乾くだろう?」

「んなこた百も承知じゃボケえ！！」

小首を傾げたプリンに、エル先生はもういっちょ突っ込みをかました後、

「……お前、またサボる気じゃあ、あるまいな？」

と、片方の目を細くして質問した。

「ううむ。サボタージュする気だ」

「一緒じゃボケえ！！」

スッパアアアアン！！

きっぱりと答えたプリンにスリッパ突っ込みをきめたエル先生は、

「体育を休むってんなら、きっちんとこの紙に理由を書いてもらうで？」

ぽんっと原稿用紙を呼び出し、ズバッとプリンにそれを突き付けた。

「む……分かった」

その紙を面倒臭そうに受け取ったプリンは、面倒臭そうにペンを呼び出し、面倒臭そうにさらさらと理由を書いて、

「はい」

面倒臭そうにそれを先生に提出した。

「おし、どれどれぇ？」

そこには、プリンの、教科書のごとく綺麗な文字で、

”走りたくないから”

と、書いてあった。

「……ほっほ～う、べらぼうに素直な理由やな～？」

「……照れる」

「って、だ～れ～が～認めるか」

それをびりびりと破ってポイッと後ろに投げ捨てたエル先生は、

「む、ポイ捨てよくない」

と、正統派な発言をしたプリンの、頭の後ろでひとつに束ねてある長い髪をしっかと掴むと、

「強制参加じゃあアラモードおおおおお！！」

「ぴわわわわっ？！」

そのまま勢いよく駆け出した。

「おおお！　なんや燃えてきたでえええ！！」

「ヤー！　ヤー！　寒いのヤー！　走るのヤー！」

「子どもは風の子おおおお！！」

「ヤーーーーーっ！！」

プリンの心の底からの力いっぱいの拒絶も虚しく、彼は両目にメラメラと盛んに燃え上がる炎が宿ったエル先生によって強制的に持久走に参加させられる羽目になったのであった。

第８８回　イブイブ日和

「？　あれー？　ミントがいないよー？」

冬の間の長期休暇の為、国立魔法学校の生徒たちで賑わう駅のホームにて、ミントがいないことにふと気が付いたココアは、きょろきょろと辺りを見回した。

「む。ミントいない」

「それさっきココアちゃんが言ったじゃねェか」

彼女に言われてそのことに気が付いたプリンとポトフも、彼女と同じように辺りを見回す。

「うーん、どこ行っちゃったのかなー？」

さっきまで一緒にいた彼がいないことによって、ココアは非常に困っていた。
と、いうのも、

（……ミントがいないと、周りからの視線が尋常じゃないくらいおっかなくなるんですけどー……）

「ミントー？」

「っかしいなァ……ミント～ォ？」

彼女が、プリンとポトフが並んで歩こうとしない為、女子生徒の皆

さんに未だ大人気な彼ら二人に挟まれるかたちになるから。

（……。よく考えたら、なんでミントがいたら視線が和らぐんだろー？）

確かに、彼女の周りにいる異性が増えることになるのに、周囲からの敵意が和らぐのは不思議である。

「あ、ごめん！　探してくれてたの？」

「「！　ミント！」」

そんなことを考えていると、人混みの向こうからミントが走ってやって来た。

（あ。和らいだ和らいだ）

同時に、周囲からの視線が和らいだ。

「ミント、どこ行ってたの？」

「もォ、心配したじゃねェか？」

「ホントホントー。プリンの二の舞になってるのかと思ったよー」

「ごめんごめん―…って、それシャレになんないよ本気で」

友人に心配してもらった彼が、本気と書いてマジと読んだ直後、

「あ。噂をすればー」

ココアがすっと前方を指さし、

「おんぎゃあ?!」

「む。ミントが産まれた」

彼らの前を、ムキムキくんが通りすぎていった。

「素通り……ってことは、ちゃんと枕のこと忘れたみたいだな?」

相変わらずむっさいなァ、とか思いながら、ポトフがぽつりと呟くと、

「あ。ポトフがプリンのこと心配してる」

「じゃー明日はホワイトクリスマスイヴだねー」

「貴様に心配される筋合いはない」

ミントとココアは物珍しそうに彼を見て、プリンはそんな彼を鼻であしらった。

「べ、別に心配なんかしてねェよ!?」

「あ。ポトフが照れてる」

「じゃー明後日はホワイトクリスマスだねー」

「ててっ、照れてもねェ! ってェか、あァもォ……おんぎゃァ!

！」

「移るのかそれは」

そんなことを言いながら、四人は蒸気機関車に乗り込んだ。

「さてと」

がたごと揺れる車内で、ミントはおもむろにナイフを持ち出した。

「「？！」」

ので、

「みみ、ミントっ?!」

「おぉお、落ち着いてよー!?」

「そぉだぜホラひっひっふー!!」

同室にいたプリンとココアとポトフは、ガタッと立ち上がって両手を前に突き出した。

「オレに何を産めってのさ?」

そんな彼らに突っ込みを入れた後、

「まあ、順番間違えたオレが悪いんだけど」

ミントは、自分のバッグの中から四角の箱を取り出した。

「はい。えっと、ちょっと早いけど、冬休みになっちゃうし。というわけで、メリークリスマス、と、誕生日おめでと~」

それをパカッと開けると、真っ赤なイチゴが載ったホールケーキが現れた。

「「!」」

それを見てびっくり顔になった三人に、

「……それと、期末テスト前に勉強見てくれたお礼デス」

ミントは申し訳なさそうに笑ってそう言った。

「「っわー！！　ありがとう、ミント！！」」

「あはは、どういたしまして」

途端に目を輝かせてお礼を言ってきた彼らに返事をした後、ミントはホールケーキを四つに切り分けた。

「はいどうぞ」

そしてパキンと指を打ち鳴らし、それぞれの手元にお皿に載せたケーキとフォークを渡した。

「わー！　ケーキだー！」

「うむ。まごうことなきケーキだ」

「おぉし！　じゃァちょっと早いけど」

ミントからのクリスマスケーキを受け取った三人は、椅子に座り直すと嬉しそうに顔を上げ、

「「メリークリスマス！」」

お決まりの言葉を口にした。

ぴくっ

――が、彼らはうっかり忘れていた。

「……クリスマス？」

このなかに一人、クリスマスという単語が嫌いな人物がいたことを。

「「？」」

彼らが顔をその人物に向けた頃には時既に遅し。

「……誰が……誰が……」

彼、ミントは、わなわなと震えながら小さな声を発したかと思うと、

「誰がクリスマスが服着てるヤツだコラアアアアアア！！」

包丁を持ったまま、ぐわーっと立ち上がって雄叫びを上げなさった。

「いいい、いや、誰もそんなこと言ってねェぞミント？！」

「って言うかその単語駅のホームでも言ったって言うかさっき自分で言ってたじゃーん！？」

「ふむ。どうやらホワイトがつくものと、自分が言うのは構わないようだな」

「「って冷静に解析してる場合かーーー！？」」

わたわたあせあせとしながらも、まったく焦った様子のないプリンに息のあった突っ込みをココアとポトフがかました後、

「おんぎゃあああああ！！」

「「おんぎゃあああ?!」」

赤子が産まれた時のような叫び声を上げながら、彼らはドタバタと汽車の中を駆け回り出した。

「……あ、移っちゃった」

「「ってだから余裕だなオイィィィ?!」」

第８９回　デート日和（前書き）

後書きにお知らせがございます

第８９回　デート日和

水溜まりが凍りつくほど寒くなった冬の日のこと、

「カッキーン……」

「メルヘン！　メルヘンですジャンヌ様ーっ！！」

水溜まりと化して凍ったジャンヌの前で目を輝かせているシルクハットの彼、

「む～……」

『む～……』

「……？　何をなさっているのですか、マロ様、夢魔様？」

フランは、ピエロ少女、マロと、丸っこい魔物のむぅちゃんこと夢魔に、小首を傾げながら声をかけた。

「……さん」

『む～』

「いち」

すると、彼女たちは突然カウントダウンを始めた。

っぽっぽーっぽっぽーっぽっぽー

「まろ～！！　十二時になったまろ～！！」

『む～！　む～！』

腕時計のクセにハト時計という、なんとも邪魔臭い代物がお昼の十二時になったことを知らせ、マロとむぅちゃんは嬉しそうに駆け出した。

「あ、どこに行かれるのですかぁ！？」

ので、フランは慌てて彼女たちを追い掛けていった。

「……普通にさみぃわね、コレ」

凍ったジャンヌは、放置という方向で。

両開きのクローゼットの内側の扉についた鏡の前に立ち、

「……こんなもんかな？」

紺色の帽子を被りながら、ミントはぽつりと呟いた。

バァン！！

「？！」

と、丁度その時、

「みんとーん！　あっそぼうまろ～～～！！」

『む～！　むむむ～！！』

マロとむぅちゃんが、勢いよくミントの部屋に飛び込んできた。

「マロ様、夢魔様！　ヒト様の部屋に入る時はノックぐらいしてください！」

それに少し遅れて、フランも姿を現した。

「まろろ～～♪　みんとん、まろ、朝っぱらじゃなくてお昼に来たまろ！　えらい？」

彼の注意も聞かずに、えへんと胸を張ってマロが言うと、

『むむむ～？』

彼女の足元で、むぅちゃんはちょこんと胸を張った。

「え？　あ、あぁ、うん。偉い偉い」

夏休みでの失敗を機に、朝っぱらではなく真っ昼間にやって来た彼女たちを、ミントはクローゼットを閉めながら褒めた後、

「まろろ、みんとん遊んでまろ～！！」

『む～！　むむ～！』

「ごめん。今日は無理なんだ」

にこにこ顔のマロとむぅちゃんに向け、口の前で左手を立てて謝った。

「ま？！」

『む！？』

直後、マロとむぅちゃんは目を見開いて、効果音ならかの有名な曲が表現なさった運命の扉を叩く音、”ガガガガーン”が、特殊効果なら”１０トン”と書かれた漬物石が降ってくるというのがベストマッチしそうな表情で固まった。

「ご、ごめんね？　今日は用事があって、マロとむぅちゃんとは遊べないんだ」

「どこかにお出掛けになるのですか？」

そんな彼女たちを見て、慌てて再び謝ったミントに、小首を傾げながらフランが尋ねると、

「あ、うん。オレ、今からデ―…」

彼はさらりと答えそうになったところで、ハッと何かに気が付いて口を噤んだ。

「？　デ？」

彼が突然停止したので、疑問符を浮かべて首を傾ぐフラン。

「―…ぇ……えと、とっ、兎に角用事があるから！」

すると、ほんのり頬を赤らめたミントはそう言って、

「て、てなわけで、じゃあねっ！！」

何かから逃れるように部屋を飛び出していった。

「……？　いってらっしゃいませ」

疑問の残ったような表情ではあるものの、フランは礼儀正しく彼を見送った。

「……まろ……」

それからしばらくして、打ちひしがれていたマロがぽつりと口を開いた。

「？　はい？」

『む〜？』

語尾だけ聞こえた彼女の言葉に、ミントが出ていった扉を見ていたフランと、彼の足元に移動したむぅちゃんは、マロにくるりと顔を向けた。

「……しいまろっ」

すると、

「うまやらしいまろうまやらしいまろうまやらしいまろおおお！！」

マロは頭を抱えて盛大に騒ぎ出した。

「マロ様、それを言うなら”うらやましい”です」

『むぅむぅ』

そんな彼女に冷静な突っ込みを入れるフランと、それにこくこくと頷く彼の肩によじ登ったむぅちゃん。

「そんな細かいことはどーでもいいまろ！！」

バッと立ち上がってズビシッと彼らを指さしそう言った後、

「まろも、まろもクリスマスデートしたいまろおおお！！」

腕と足とをめちゃくちゃに暴れさせながら叫ぶマロ。

「……。デート？」

『む～む？』

そんな彼女の言葉を、きょとん顔で聞き返すフランとむぅちゃん。

「っだあああい！　デートも知らないまろかぁ！？」

ので、マロは両手で頭を抱えつつ、

「いいまろか！？　デートっていうのは、”ごめん、待った？”ううん、今来たところ”で始まって手を繋いだり遊園地に行ったり水族館に行ったりホットドッグ食べて口の周りにケチャップつけたり特大パフェを一緒に食べたり砂浜でおいかけっこしたりたまに喧嘩したりして仲直りしてよりラヴラヴになりました、ちゃんちゃん♪　な感じの素敵タイムだまろよぉ！！」

と、早口で一気に畳み掛けた。

「い、いえ、僕が疑問に思ったことはデートそのものの意味ではなくてですね」

随分とベタだなぁとか思いながら、フランは苦笑いを浮かべて両手を前に出しつつ、

「マロ様には、その相手がいらっしゃらないではないですか？」

と、言ってはいけないことを素で口にした。

「ま……ままっ、まろだって、やろうと思えば楽勝まろ！！」

精神的大ダメージを受けたマロはそう言い返すと、

「開け！　ドリームホール！！」

右手を挙げて、高らかに魔法を唱えた。

――すると、

「わあ！？」

「っ！！」

「きゃあ？！」

「くっ！？」

「わーお」

マロとフランの目の前に異次元へと通じる穴が空き、そこから制服姿のアオイとリンとウララとユウと死神が降ってきた。

「いたた……あ、あれ？　ここは？」

「……。ミントさんの家、みたい、です」

「ってことは、また異世界に召喚されちゃったわけぇ！？」

「くっ……降りろアホ神っ！」

「フッフッフ」

彼らの立場から言うと異世界に召喚されてしまった、ミントたちの立場から言うと召喚された異世界の彼らは、思い思いに言葉を発した後、

「《暗雲の閃光は破滅をもたらす》」

思い思いに立ち上がった。

ダンッ！

「きゅうちゃん、ワタル、あおぴょん！！」

「あ？」

「え？」

「もの」

「……手当たりしだいですね」

『む～……』

すると、マロはダンッと一歩前に出て、フランとむぅちゃんに呆れられていることなんか気にも止めずに、

「今からまろとデートしてまろ！！」

と、単刀直入にお願い申し上げた。

「え？」

「は？」

「がき」

疑問符を浮かべたアオイとユウと、彼らの言葉と自分の言葉を繋げて遊ぶ死神。

「「だ、ダメ！！」ですっ！！」

そんな彼らの言葉を掻き消すように、ウララとリンが声を張り上げた。

「るっせぇな……」

「びっくりしたぁ」

「くりびつ米びつー」

ので、不機嫌に耳を塞ぐユウと、びっくりするアオイと、先程からまともな言葉を発していない死神。

「り、リンたちは明日からテストがある、ですっ！」

「そ、そうよ！　だから、あんたと遊んでる場合じゃないの！」

それぞれの反応を見せる彼らを置いて、リンとウララはそう言うと、

「ほら、行くわよユウ！」

「はぁ？　なんで俺がお前の」

「勉強教えてくーだーさーいー！！」

「アオイも行く、です！」

「え？　あ、うん。じゃあまたね、マロにフランさんにむぅちゃん。行こう、死神さん」

「はーい」

彼らを引っ張りつつ、ミントの部屋から出ていった。

「……ま……」

（全滅……ですね）

（む～）

パタムと閉じたドアを見つめて石化したマロと、まあ、当然と言えば当然の結果ですが、と顔を見合わせるフランとむぅちゃん。

「ま……まろぉ～……」

「『！』」

ぐしゅっと歪んだ彼女の顔を見たフランとむぅちゃんは、

「ま、まだ諦めては駄目ですマロ様！！」

『む～！　むむむ、むむ～！！』

「そうです！　夢魔様のおっしゃる通り、まだ手はあります！！」

慌てて彼女を慰めた。

「……手？」

『む～！』

涙を瞳いっぱいに溜めたマロの聞き返しに、むぅちゃんは力いっぱい頷いた後、短い前足でぴんぴんと窓の外を指さした。

「？」

その指示に従い、マロが疑問符を浮かべながら窓の外に目を向けると同時に、

パッチィン！！

フランの指パッチンが鳴り響いた。

その直後、ミントの家の周りに、

『『グルルルルルアアアアアアアア！！』』

フランのドラゴン（♂）が大集結した。

「……ま……」

マロ、再びの石化。

「ほらマロ様！　よりどりみどりですよ！」

『む～！　む～！』

そんな彼女ににっこりと笑いかける、悪意のないフランとむぅちゃんであった。

第８９回　デート日和（後書き）

皆様こんにちは。
そしてメリークリスマス！

またまた突然ですが、またまた読者様参加型特別企画を開催しちゃいたいと思います！

俺に任せろ！　という方、もしくは、うわウゼェ……と思いつつも、ま、まあ、内容だけなら読んでやってもいいぜ？　という方がいらっしゃいましたら、もう少し下へどうぞ。

はい、改めましてこんにちは。

ミント
「こんにちはー……って、改めて言う必要あるのかコレ？」

前回の企画に引き続き、とぷらすあるふぁな感じで、本日から学校日和２への『質問コーナー』と、『もしもコーナー』とかをやっちゃったりしてみちゃったりしたいと思います！

「質問コーナーって、６０話でちょこちょこやったやつ？」

はい。
例えば、

Q、この話、いつまで続ける気ですか？

とか。

「いきなり学校日和存続の危機？！」

Q、ミントの好きなものはなんですか？

とか。

「え？　え！？　こ、コーラだよコーラ！！　ちょ、そんなに印象薄かったのオレえええ？！」

また、もしもコーナーというのはですね、

「……なんなのさ？」

読者様からお題をいただきまして、学校日和２のキャラになんやかんやさせるコーナーです。

「うぅん分かりづらい」

はい、自覚しております。
では、例をあげてみましょう。

もしもやつらがサンタクロースだったら。

「やつらって誰さ?!」

――――

もしもミントがサンタさんだったら、

「誰がクリスマスだ!!」

いきなりキレる!!

「ぐーすかぴー」

「どんないびきだよ?!」

「……ん?　みんとん?」

起こしちゃう!!

「待ってたよ、ミントきゅんV」

「うわあ?!　ちょ、なんで起きてるのさ!?」

「やぁんっ♪　だってだって、ミントきゅんが夜にお部屋に来てくれるって聞いたから、アタイもうドキドキして眠れなかった～みたいな～っ!」

「情報漏洩いいいい?!」

捕まっちゃう!!

――――

もしもプリンがサンタさんだったら、

「ふふふ、可愛い」

トナカイに興味津々でなかなか出発できない！！

「……ぷぇ……」

ソリで酔っちゃう！！

「ぷわ……ねむねむ」

途中で寝ちゃう！！

――――

もしもココアがサンタさんだったら、

「夜間外出なんて絶対ダメだ！！」

「ふわあ！？　どっから湧いて出たのよバカ兄ー？！」

なんかお兄さんが出てきちゃう！！

「どうしてもと言うのなら私がついていこう！！」

「意味分かんないよって言うか還れよもー！！」

なんかお兄さんがついてきちゃう！！

「ほらほら、お兄ちゃんの膝の上においでマイシス」

「還れっつってんだろダークネスサクリファイス！！」

なんかもう、それどころじゃなくなっちゃう！！

――――

もしもポトフがサンタさんだったら、

「腹減ったなァ」

トナカイを肉として見ちゃう！！

「……一頭ぐらいいいよな♪」

本当に食べちゃう！！

「えェと、まずはミントのとこだな。……えへっV」

危険！！

――――

……てな感じで。

「待て。最後のヤツはなんだ最後の」

質問ともしもコーナーは、前回同様、『感想欄』または『メッセージ』にて承ります！

初見の方も一度お会いした方も常連の方も大歓迎でございますので、ご遠慮なくどうぞ！

「感想欄は、感想／評価のところで星とか選ばなければ感想だけ送れますよ」

わお、親切。

「では、皆様のご参加をお待ちしております！」

毎度ご愛読ありがとうございます！

では、また次回！

第９０回　年の瀬日和

山の奥の豪華旅館の、湯煙の沸き立つ大きな温泉にて、

「……ムッサイ……」

白濁したお湯にとっぷりとつかっているポトフは、嫌でも視界に入ってくる周囲にいる人たちにげんなりと頭を落とした。

「む？　頭のみならず気分まで悪くなったのか？」

すると、お湯につかないように長い髪をタオルでまとめているプリンが、泡で出来た枕を抱えながら小首を傾げた。

「……一言余計だ」

ここは男湯なのだから致し方ないのだが、むさ苦しいせいで突っ込みにも元気がないポトフ。

「……。ふむ」

そんな彼を見て、

「馬鹿犬」

「……ァんだよ？」

「あそこに行くと、いいことがあるぞ」

プリンは、すっと彼の後方を指さしてそう言った。

「ァ？」

その指に従い、ポトフが元気なく後ろを向くと、

「……」

そこには、木で出来た大きな壁がそそり立っていた。

「アホかァ？！」

「ぴゃわ！？」

ので、ポトフは両手を筒にしてプリンにぴゅーっとお湯鉄砲を喰らわせた。

「な、突然何をする？！」

「テメェ最っ低だな！？　レディの入浴を覗けってか？！」

声を荒げたプリンよりも更に声を荒げたポトフが怒鳴ると、

「？　馬鹿か貴様は？　女湯を覗いてなんになる？」

プリンは首を傾げて聞き返した。

「テメェがそんなヤツだったとはな――って、は？」

予想外の聞き返しに、彼に幻滅していたポトフは、彼と同じように

疑問符を浮かべた。

「覗けなどとは一言も言っていない。僕はただ、あそこに行けと言ったんだ」

プリンはきっぱりすっきりそう言うと、再び壁を指さした。

「い……行ってどうすんだよ？」

勘違いをした自分が恥ずかしかったのか、お湯につかったまま素直にその壁の近くまで移動したポトフが振り向いて尋ねると、

「たっち」

プリンはさらりと答えた。

「？　タッチ？」

ので、ポトフは疑問符を浮かべながら、浴槽から少し身を乗り出して壁にその触れた。

――直後、

バリバリゴロズパンドカンズキャアアアアアン！！

と、なんとも凄まじい轟音と黒い雷が壁全体を駆け巡り、

……ガクッ

と、ポトフがダウンした。

「遠くから見ても近付いても実際に触れるまではその存在に誰も気付かない。それにも関わらずこの破壊力……。ふむ。見事な防犯魔法だな」

オイ見たかあの壁やべぇぞ?!　と、どよどよざわざわし始めた周りどころか、ガクッとなってそれ以来まったく動かなくなったポトフすら気にも止めずに、特別な魔法がかかった壁を眺めながら、ただただ顎に手を当てて感心するプリン。

ガララッ

「何?　今すごい音がしたけど―…」

「む。ミント」

「―…って、ポトフぅぅぅ?!」

そこへ遅れてやって来た腰にタオルを巻いているミントは、真っ黒焦げになって倒れているポトフに慌てて駆け寄った。

「まったくもー！　何シャレにもへったくれにもなんないことやってんのよプリンー？！」

「い、命賭けの実験だ」

「テメェの命賭けろよテメェェェ！？」

部屋に戻って回復魔法をかけた後、ココアの突っ込みに答えるようにプリンが自分のしでかしたことを言うと、ポトフは早速彼に食ってかかった。

「でも、ポトフが無事でよかったよ」

そんな彼らを見て、

「プリンに言われて覗き防止の壁に触ってズタボロになった上にココアに女湯覗こうとしたんだと勘違いされて更にズタボロにされたからオレもうポトフは助からないんじゃないかと本気で思っちゃったよ」

ミントは胸を撫で下ろしながらそう言った。

「う、うむ……そうだな」

「ほ、ホントにねー……」

ので、プリンとココアは、ミントとポトフからわざとらしく目を逸らした。

「心配してくれてありがとな、ミント」

そう言って、ポトフはミントの頭を優しく撫でると、

「狼唱（ろうしょう）」

ドドドドドドドドドドカアアアアアアン！！

振り向きざまに目を逸らしているプリンに高速蹴りを見舞わした。

「っき……貴様、いきなり何をする？！」

「これだけで許してやるんだからありがたく思え」

「な――き、貴様を回復させてやったのは僕だし、ココアだって貴様を散々痛めつけたんだぞ！？」

「すべての元凶はお前だろ？　それに」

自分だけ思い切り蹴られて納得のいかないプリンに、

「俺がココアちゃんを蹴るわけねェだろ」

「ひゃあ？！」

ポトフはココアを後ろからぎゅっと抱き締めながらそう言った。

「……ぶう、贔屓」

「それはテメェだろ」

バチバチと火花を散らすプリンとポトフと、

「ちょっとー!?　私まで巻き込まないでよー?!」

彼らに挟まれて焦るココアと、

「ああ、ポトフはプリンに”まあまあ好き”って言われたことを気にしてて、プリンは好き度合いでココアに負けたことを気にしてるんだね?」

ぽんっと手を叩いてさらさらと言うミント。

「「な――?!」」

「ほえ?　そーなのー?」

それを聞いて、目を見開きバフッと顔を赤くするプリンとポトフと、ポトフの腕に収まりながらもミントに顔を向けるココア。

「うん。反応からしてそうみたい」

「へーえ?」

「「なーかよしー♪」」

「「ちちち、違っ――…」」

にやりと笑って言うミントとココアの言葉を、プリンとポトフが力いっぱい否定しようとしたところ、

スットーーーン！！

「眼帯テんメェェェ！！　その薄汚い手で俺の超可愛い妹に触るんじゃねえええ！！」

ココアの兄、ショコラがスットーンと襖を開けて現れた。

「……ふふっ♪　ちょっといいカナお兄ちゃーん？」

ので、ポトフの腕から抜け出したココアはにこっと笑ってそう言った。

「！　な、なんだいマイシスタ？」

「ちょっとこっち来てー」

「あ、ああ、分かったよ」

そんな彼女を見て、ショコラは勝ち誇ったような笑みを浮かべてポトフを一瞥した後、ココアに腕を引かれてミントたちの部屋から出ていった。

――直後、

バリバリゴロズパンドカンズキャアアアアアン！！

覗き防止の壁と、同じ音が聞こえてきた。

「……ふー」

そして、何食わぬ顔で部屋に戻ってきたココアは、トンっと襖を閉めた。

「……」

「……」

「……」

「？　どしたのー？」

無言のまま固まっている彼らに、ココアが小首を傾げながら声をかけると、

「……あ……な、何でもないよ？！」

「う、うむ！　何でもないっ！」

「お、おォ、それより、もォそろそろ初詣にでも行こうぜェ？」

ミントとプリンとポトフは冷や汗を掻きつつ慌てた様子でそう答えた。

「あ、もうそんな時間なんだー。うん、分かった。じゃー私、支度してくるからちょっと待っててねー？」

ポトフの言葉を聞いて、時計を見たココアはそう言ってにこっと笑うと、ぱたぱたと部屋から出ていった。

「「は、はーい……」」

彼女に向けて笑顔で手を振った三人であったが、それは彼女が出ていった先から聞こえてくる何か重たいものを引きずる音によって、ガンガン引きつっていくのであった。

第９０回　年の瀬日和（後書き）

皆様こんにちは！

プリン
「うむ」

何故にそこで頷くのか分かりませんが、それは横に置いときまして。

早速企画に参加してくださった皆様、誠にありがとうございます！

「うむ。作者の気まぐれに付き合ってくれて、どうもありがとう」

そしてそして、前回お知らせし忘れたことが一点。

今回の企画は１００話記念で開催しましたので、〆切は９９話の後書きにてお知らせしたいと思います！　ということをお知らせします！

「むぅ、くどい」

ので、私に任せて！　という方も、べ、別にあんたの為に参加したんじゃないからね！？　という方も、そこで

「……照れる」

とかやってるシャイボーイも大歓迎ですので遠慮なくどうぞー！

「うむ。僕もたまに待ってるぞ」

いや、いつも待っててくださいよ?!

……あ、これはどうもすみません。

毎度ご愛読ありがとうございます！
では、よいお年を！

「来年はウシさんだ」

……ソウデスネ。

第９１回　ヒーロー日和

たくさんの初詣客で賑わう神社にて、

「おまたせ～！」

「「！　ミント！」」

後方から聞こえてきた高めな声に、道の端で待っていたココアとプリンは振り向いた。

「ミントおかえり」

「どこ行ってたのー？」

こちらに走ってきた彼におかえりを言うプリンと、彼が今までどこに行っていたのか尋ねるココア。

「たこ焼き！」

すると、ミントはにこっと笑って手に提げていた袋を彼らに見せた。

「えへ♪　みんなの分も買ってきたよ！」

そして、その中身を彼らに一パックずつ手渡した。

「わ！　ありがとー！」

「うむ。ありがとう、ミント」

「あは、どういたしまして―…って、あれ？　ポトフは？」

それをありがたく受け取りながら感謝の気持ちを述べるココアとプリンと、彼らに応えたすぐ後に友人が一人いないことに気付いたミント。

「む？　馬鹿犬なら、ミントがお店に行ってすぐどこかに行ったぞ」

「あ！　噂をすれば帰ってきたよー」

その問いにプリンが答えると、ココアはすっと前方を指さした。

「お待たせ～ェ！」

「あ、ホントだ。どこ行ってたのさ、ポト―…」

彼女の指の先に友人を発見したミントは、発言の途中で思わず固まった。

「ウシ！」

すると、ポトフはにこっと笑って、縄で縛って引っ張ってきたウシを彼らに見せた。

「あは♪　みんなの分も狩ってきたぜェ！」

そして、彼らにそれらを一頭ずつ手渡した。

「わー！　ウシさんだ！」

「いやこれどこで捕まえてきたって言うかここに連れてきてどうする気なのよー?!」

「いやこの際それは後回しにしてどうしてキミは初詣に行くとそうやってどこからともなく今年の干支を捕まえてくるのさ?!」

それをありがたく受け取りながら目を輝かせるプリンと、受け取り拒否をしつつ突っ込みをかますココアとミントと、

「あっはっはっ！　肉は生がオススメだぜェ♪」

肉を目の前にした為か、彼らの突っ込みを綺麗に無視するポトフ。

「「って食えるかあああ?!」」

「うむ。イタダキマス」

「「そして乗るなあああ!?」」

ぽんっとフォークとナイフを呼び出したポトフとプリンに、ミントとココアは全力で突っ込みを入れた。

「―…って、あれ?」

その時、視界の隅に何かを捉えたミントは、突っ込みを中止してそちらに目を向けた。

「！　あれは――！」

そして、ハッと目を見開いたミントは、

「ココア、これとあとのツッコミ任せるねっ！」

「え？」

ココアにポトフの分のたこ焼きとあとのツッコミ役を任せると、人混みの中へと消え去った。

「ちょ、ちょっとー！？　この状況下で私だけにしないでよー？！」

「「イタダキマース！」」

「って、いただくなあああ？！」

干支の生命の危機を捨て置いて、酷く慌てた様子で駆け出したミントは、

「念の為っ、ローズホイップ！」

シュパァン

人混みを掻き分けながら、薔薇の鞭を装備した。

「は……は……、……！」

人混みの中を突っ切って、人気のない森の入り口に辿り着いたミントは、人影を見付けて足を止めた。

そこで彼のライトグリーンの瞳が映し出すものは、だんだんと暗くなって先が見えなくなっているこの先に広がる森と、

「よう、ねーちゃん可愛いなぁ？」

「えへへ、お嬢ちゃんひとりかい？　それならおっさんたちと一緒にどうですかーい？」

「「うーぃ」」

酒気帯びと見られるおっさん六人と、

「ちょっ、は、離しなさいよ～？！」

彼らに囲まれている金髪美少女。

ガサッ

――やっぱり、先程彼らに連れて行かれていたのは、と思うと同時に、

「たーこー焼ーきー」

ミントは、手に提げていた自分のたこ焼きのパックを開けて鉛直上向きに投げ上げ、

「「あ？」」

「アターーーック！！」

バシーーーーーーン！！

彼の声を聞き、あ？　といい感じに口を開けて振り向いたおっさんたちに向け、彼はパックから飛び出したたこ焼きを薔薇の鞭でホームランした。

「「ほごぉ？！」」

そして、焼きたてにつき激アツなたこ焼きを口内にぶち込まれて動きが鈍ったおっさんたちの隙を見て、

「チロル！！」

「！　ミントきゅん！！」

ミントは金髪美少女――チロルの手をしっかりと握ると、彼女と共

にその場から逃げ出した。

「ふぅ……このくらいで大丈夫かな？」

チロルの手を引いてしばらく走った後、ミントは後方を確認してからそう言って足を止めた。

「大丈夫だったチロル？」

そして、彼につられて足を止めたチロルに、ミントは心配そうな表情で質問をした。

「うん……助けてくれてありがと、ミントきゅん」

すると、チロルは斜め下を見つめながらお礼を言いつつ頬を赤らめた。

「あ、あは、どういたしまし」

「……あのね、ミントきゅん」

チロルは彼の手を両手で包み込み、そのまま自分の胸元に移動させながら口を開いた。

「へ？　……あ……な、何？」

そんな彼女に、顔を赤くしたミントが話の続きを促すと、

「アタイ、さっきね？　心の中でミントきゅんのこと、いっぱいいっぱい呼んだの」

チロルはそう言って彼の手を離し、

「だから、本当に来てくれて、アタイすっごく嬉しかった」

彼をふわりと抱き締めた。

「ありがとう、ミントきゅん大好き！」

――そして彼の胸の中で、幸せそうに告白した。

「へ？！　……あ……う、うん……オレも」

「！　ホント！？」

「うえ！？　え……え、えぇっとぉ……」

慣れない展開に直面してしまい、

「――あ！　そっ、そう言えば、さっきたこ焼き食べそびれちゃったなーあははははー…」

ミントは、無理矢理な話題転換を試みた。

「……ねえ、ミントきゅん？　助けてくれたお礼とたこ焼きの代わりに」

――が、

「アタイを食べて？」

彼を見上げてにこーっと笑ったチロルの口から飛び出た言葉によって、それは見事に失敗に終わった。

「――…は？！」

直後、無理矢理な笑いを止めたミントは赤い顔を更に真っ赤に染め上げ、

『モー』

彼の背後から、ウシの声が聞こえてきた。

「……」

「……」

彼の背後から、ウシの声が聞こえてきた？

「……え？　ウシがいるの？」

突然聞こえたウシの鳴き声に、当然のごとく驚くチロルと、

「……。……そんなところで何してんのさ？」

「「――っ！？」」

それに心当たりがあり、彼女から少し離れて非常にゆっくりと後ろを振り向きながら、非常にゆっくりとその先にいるであろう人物に質問を投げ掛けるミント。

ガ、ガサガサ……

彼に存在を見抜かれ、観念したように彼が振り向いた先にある茂みが動き、三人の人物が姿を現した。

「え――？！」

「ねえ……ココアにポトフにプリン？」

彼らの登場にびっくり顔になったチロルをよそに、非常にゆっくりと彼らの名を呼ぶミント。

「や……やっほー、ミントとチロルー♪　え、えと、誤解しないでねー？　私たちは、たまたまここを通りかかったんだよー？　ね、ポトフー？」

すると、冷や汗を掻きつつ両手をわたわたと振りながらココアが言い、

「お、おォ！　ウシを返しに来たらたまたまミントとチロルちゃんに会ったんだぜェ？　な、枕？」

冷や汗を掻きつつ引きつった笑みを浮かべながらポトフが続き、

「ふむ。ミントがチロルちゃんを食べる？」

冷や汗など一滴も掻いていないプリンがぴこっと小首を傾げ、二人の言い訳を蹴散らした。

「……」

「……」

「……」

その問いに、真っ赤になるチロルと真っ青になるココアと真っ青になるポトフ。

シュパァンシュパァン

その音に、更に真っ青になるココアと更に真っ青になるポトフ。

「しっかり聞いてたんじゃんかもーこのバカバカバカあああああああ！！」

「「ごっごごごめんなさあああああああい！！」」

直後、二人の嫌な予感が的中。
彼らは、ローズホイップとマッドホイップを装備している上に怒り狂っているミントに、追われる身となったのであった。

「っやーもープリンのバカーーー！！」

「まったくだ！！　いやまァ何を言おうと最終的にはこォなると思いましたけど自ら死期早めてどォすんだァ？！」

「むう、殺人ダメ」

「「しかもそのままの意味で取るなあああ？！」」

第９１回　ヒーロー日和（後書き）

どうも明けましておめでとうございます！
今回の話を書いていて、なんか全身がかゆくなったためろんです。

新年早々、あちゃ～な感じですが、どうぞ今年もよろしくしてやってくださいませ！

「「あああああけおめえええええええええええ！！」」

→ミントから必死こいて逃げる三人

「こおおおとおおおおよおおおおろおおおおおおお！！」

→凶器を振り回しながら彼らを追う狂気に満ち溢れたミント

以上、メイン四人からのやかましいことこの上ない新年の挨拶でした☆↑

毎度ご愛読ありがとうございます！
ではまた！！

第９２回　免許皆伝日和

旅館から帰る途中の、バスという名の大型の馬車に揺られながら、

「……はぁ……」

ミントは溜め息と共に、がっくりと頭を落とした。

「む。ミント、頭落ちた」

ので、プリンがそれを拾い上げ―…って、怖い怖い。

「どォしたんだァ？」

力なくうなだれた彼に、ポトフが小首を傾げながら尋ねると、

「……や……なんか、つくづくカッコ悪いなぁって思って……」

ミントはうなだれたまま、呟くように質問に答えた。

「む？　馬鹿犬がか？」

「ん？　何そのカッコ悪い＝俺的な思考回路？」

「びっくり。よく出来マシタ」

「あっはっは、なんか鈍器とかねェかな？」

そんな元気のない彼を挟んで、いつものように会話するプリンとポ

トフ。

「……ゆえに、オレもかっこよくなりたいなと」

ほのぼのと喧嘩腰になり始めた彼らの間で、ミントはぎゅっと鞄を握り締めてそう言った。

「え？　俺みたいに？」

それを聞いて、ポトフは黒い髪をふぁさっと払いながら聞き返した。

「うん」

すると、ミントはこっくり頷いた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「「……。え？」」

ので、プリンのみならずポトフまでもが目を見開いて固まった。

「オレ、ポトフみたいにかっこよくなりたい」

びっくり仰天顔で停止しているポトフに、顔を上げたミントは真っ

直ぐな目を向け、

「だってオレなんてチロルと一緒にいると何かあるとすぐ赤くなっちゃって返答すらろくに出来なくなっちゃうのに、ポトフはさっき別れ際にココアにあけおめことよろ的なことを言った後にちゅーしても」

「んだとこの眼帯ヤ――」

「全然赤くなってなかったし普通ににっこり笑ってたでしょ？　だから、オレもそんなふうになりたい！」

途中で何故かバスに乗っていて後方から不良のように絡んできたショコラを振り向きもせずにグーで伸しつつ、真剣そのものの表情で彼に弟子入りを志願した。

「ぴわわ……み、ミント、熱でもあるの―…」

「ふっ……俺に任せろ、ミント」

本気でミントの頭の状態を心配するプリンの口を左手で封じつつ、ポトフはふっと微笑んで頼もしい言葉を返した。

「！　本当?!」

「あっは、俺がミントの頼みを断るわけねェだろ?」

「む～っ！」

そんなこんなで、目を輝かせたミントとにこっと笑うポトフと彼に

口を押さえられてむぅちゃん化したプリンは、

『アクリウム前ーアクリウム前ー』

「お。じゃァ、まずは俺の家に行こォぜェ？」

「うん！」

「む～っ！！」

ポトフの家に向かうのであった。

アクリウムにある青い屋根の家の中の、

「……なんか、何もないねぇ？」

「うむ。びっくり」

ガランとしたポトフの部屋にちょこんと座ったミントとプリンは、

意外そうに部屋の中を見回した。

「なんかこう……もっとすごいのかと思ったのに」

「うむ。何かこう、ぐちゃぐちゃーな感じで」

「バリバリーな感じで」

「ちかちかーな感じで」

「ノリノリーな感じで」

「趣味悪ーな感じで」

「趣味悪ってなんだ趣味悪って」

と、ミントとプリンが抽象的な会話をしていると、何かがたくさん入った箱と飲み物を載せたお盆を持ったポトフがやって来て、聞き捨てならないことを口にしたプリンをごすっと箱で黙らせた。

「ぴわ?!」

「……つうか、なんで枕までいるんだよ?」

いきなり後頭部を殴られ前のめりになった彼に、ポトフがテーブルにお盆を置きながら尋ねると、

「……。……、……さあ?」

プリンはしばらく真剣に考えた後、疑問符を浮かべて小首を傾げた。

「お前、もっと自分の意思をもって行動しろよ？」

そんな彼に、ポトフがさらりとそう言うと、

「うむ、分かった。牛乳ヤー」

プリンはこくりと頷いて、目の前に置かれた牛乳に文句を言った。

「まァこんなバカはほっといて、本題に入るぜミント？」

「う、うん……」

牛乳ビンを口の中に突っ込まれたプリンを、気の毒というか自業自得というか、取り敢えず複雑な気持ちで横目に見ながら、ミントはポトフの言葉に頷いた。

「こほん、ミントはすぐ顔が赤くなるのと返答が出来なくなるのを治したいとな？」

「えっと……そ、そうぞなもし？」

ポトフのキャラに合わせようと言葉を選んだが、若干自信がない様子なミント。

「まァそォいうとこも可愛いんだけ――ゴホンッ！　えェと、顔が赤くなるのは恥ずかしいとかそういう感情、もしくは風邪を引いて熱が出てることが理由で、返答が出来なくなるのは緊張している、もしくは返答したら自分にとって不利益なことが生じるというのがまァ大体の理由だ」

ミントの微妙な努力も虚しく、さららといつも通りに語り出したポトフは、

「恐らくミントの場合はどっちも前者だな」

「……え？　ええ、まあ、そうですね？」

文脈と状況から考えて単純明快でありそうなことを真剣に推測した。ちなみに、ミントは彼の最初の呟きは無視という方向にしたようである。

「詰まり、ミントはそういう状況に慣れていないということだ」

そしてピンと人さし指を立てて、彼なりの結論を下した。

「！　な、成程……」

その言葉にハッとして、こくこくと頷くミント。

「てなわけで」

すると、ポトフはコホンと咳払いをして、

「はいどぉぞ」

彼が持ってきた箱をどさっとテーブルの上に置いた。

「？　これは？」

フタがしまっている為に中身が見えないので、ミントが小首を傾げると、

「おねェさんイチオシの純恋愛ストーリー映画ズだぜェ♪」

ポトフはパカッとフタを開けながら、にこっと笑ってそう言った。

「……はい？」

「ぷはっ」

ミントが彼の言葉を聞き返すと同時に、プリンの口から牛乳ビンが取れ、

バァン！！

「そう！　これを見たらいい勉強になるわよミントくん！！」

金髪お姉さんのエリアが、茶髪お兄さんのソラを引き連れやって来た。

「って、ええ！？　僕も？！」

ちなみに、ソラは巻き込まれただけの模様。

「あ、おねェさん。まずはどれからがいいと思います？」

「そうね、やっぱり〝ボブとアリエッタ〟からがいいんじゃないかしら？」

「そぉですね。はいスタァト♪」

――こうして、

『大丈夫……キミは何があっても俺が守るよ、アリエッタ……』

『ボブ……！！』

「うふふ～、素敵ね～♪」

「はい！」

「……なんかオレ、すっごく寒くなってきた」

「あは……僕もだよミントくん」

「ぷわ……ねむねむ」

彼らは仲良く華々しくも寒々とした映画を、長時間に渡って鑑賞することになったのであった。

第９３回　冬森日和

粉雪が舞う森の中を歩きながら、

「成程ねー、ポトフを師匠に……」

ミントの話を聞いていたココアは、白い息を吐きながらこう言った。

「ミント、明らかに人選ミスだよー？」

「あっは、オレもちょっとそう思った」

彼女の言葉に、爽やかに笑いながら頷くミント。

「でもよかったー。駅で会った途端ポトフみたいなことをポトフと一緒に言い出したから、私、ミントが頭おかしくなっちゃったのかと思って本気で心配しちゃったよー」

「あはは、出来れば忘れていただきたい記憶だね？」

マフラーを巻き直しながら言うココアと、彼女から顔を背けながら言うミント。

「うーん……でも、そんな無理してかっこつける必要ないと思うよー？」

すると、ココアは赤い手袋をつけた右手の人さし指を顎に当てながら、

「だって、チロルはミントがすぐそうなるのを知っててていっつもミントの名前を呼びながら走ってきていっつも引っ付いてくるんでしょー？　それって、そんないつものミントが好きだから一緒にいたいんじゃないのかなー？」

え？　と、こちらに顔を向けたミントに、至極真剣な表情でそう言った。

「……！　こ、ココア」

それを聞いて、ほんのりと顔を赤らめた直後、

「それに、キャラ被っちゃうしねー？」

「……うわぁ、それは是非とも避けたいねえ……？」

彼女の現実的な言葉に、感動がえらく冷めた様子のミント。

「あは、でしょー？　しかもミントには似合わない似合わない♪」

「はは……じゃあ、ポトフなら似合ってかっこいいの？」

楽しそうに笑う彼女に、仕返とばかりにミントが尋ねると、

「なっ？！　そ、そそそんなこと言ってないじゃーん！？」

「でも、そんなポトフが好きだから一緒にいたいんじゃないのかな？」

「っ！！　もー、ミントのバカー！！」

ココアは顔を真っ赤にしてボスボスと彼に向けて雪玉を投げ出した。

ボスボスボスガツーン！

「いった――って、ガツーンっておかしくない！？　何入れたのさココア？！」

「絵馬」

「うわぁ、ご利益ありそう♪　って違う！！」

絵馬の角が直撃して赤くなった額を押さえながら、さらりと言ったココアに、ミントは乗り突っ込みをかました。

「神社に引っ掛けとかなきゃダメでしょ！？」

それも何か違うと思う。

「ミントミント！」

「ココアちゃァん！」

ミントとココアがそんなことをしていると、彼らの前方から、プリンとポトフの声が聞こえてきた。

「！　雪玉転がしてどこ行ったのかと思ったらー」

「オレらの前にいたんだね……って」

ので、ココアとミントがそちらを向くと、

「「どっちが凄い？」」

プリンとポトフは、似たようなタイミングで似たような声で似たように彼らに勝敗を尋ねた。

「い、いやー……」

「どっちが凄い……って言われても……」

ので、彼らの間に立っている、どう見てもミントとココアにしか見えない雪の像に、ミントとココアは、

「「……どっちも凄いと思います」」

としか、言えなかった。

「「え～――…」」

「わは～、これプリンが作ったの？　すっごい、超器用だね～！」

「じゃー、こっちはポトフがー？　すごーい、私に超そっくりー！」

彼らの言葉に超不満げなプリンとポトフであったが、

「「すっごーい！」」

「「……」」

自分が作った雪の像の前で目を輝かせるミントとココアの姿に、

「……照れる」

「あっはっはっ！　照れるぜェ♪」

最終的には納得した。

と、その時、

『グオオオオオオ！！』

「「――――！？」」

彼らの頭上から、大地を震え上がらせる雄叫びが聞こえ、

バサバサ

ドシィィィン！！

「うわあ？！」

「ぴゅ！？」

「きゃあ！？」

「おわ？！」

その声の主――腹以外を赤い鱗に覆われた黄色く鋭い目を光らせているドラゴンは、彼ら四人の目の前に降り立った。

『グオオオオオオ！！』

「うっそ、ドラゴンー？！　って」

「ちょ、これ前と展開被ってない！？　って」

「わー、おっきい。って」

「こいつが今回の課題なのかァ？！　って」

巨大な敵の姿を見て、思い思いの感想を述べた四人の瞳は、

「「あ」」

自然とその足元に流れた。

――そう、そこは、雪で出来たミントとココアがいた場所。

「……」

「……」

「……」

「……」

『？』

突然の長い沈黙に、ドラゴンが小首を傾げた直後、

「キラキラァ！！」

「神風！！」

『――？！』

ちゅどおおおおおん！！

ポトフとプリンの最大魔法が炸裂した。

「……ミントと」

「ココアちゃんのォ……」

吹っ飛んだ標的に向けた右手をそのままに、プリンとポトフはそいつをギッと睨みつけ、

「「仇（かたき）！！」」

「「死んでないよ」」

怒鳴りつけたすぐ後に、ミントとココアから突っ込みが飛んできた。

「テメェは……テメェだけは絶対許さねェ！！」

「うむ、行くぞポトフ！」

「おォ！！」

そんな突っ込みが聞こえないのか、なんかもう、その気になっているポトフとプリン。

「ランランコウコウキラキラァ！！」

「微風旋風神風！！」

『グオオオオオオ！？』

どかあああんばこおおおんちゅどおおおおおん！！

「「……」」

なんか、ドラゴンに向けてガンガン魔法を放っている彼らを見て、

「プリンって、たまにちゃんとポトフのことポトフって呼ぶよねー？」

「うん。って言うか死んでないのに」

ココアとミントは、呑気にココアとコーラをいただいていた。

「……って、ミントは参戦しないのー？」

「いや、オレの武器は鞭だから基本中距離か近距離型だし」

「私もチェーンソーくらいだから近距離だねー」

どかあああんばこおおおんちゅどおおおおおん！！

戦う気が更々ないような会話をする間にも、まだまだプリンとポトフの激しい攻撃は続いている。

「あんなのに近付いたら巻き込まれちゃうよねぇ。植物魔法もあるけど、プリンの魔法の威力が分散されちゃうかもだし」

「まー、闇魔法も使えるっちゃ使えるけど、ポトフの光魔法を弱めちゃうおそれもあるしねー」

どかあああんばこおおおんちゅどおおおおおん！！

そして、たまにドラゴンに押し返される。

「……でも、大変そだね。――枯れゆく茶色――」

ぶわんっ

「おー！　久々の召喚まほー！」

どかあああんばこおおおんちゅどおおおおおん！！

プリンとポトフとドラゴンによる戦いのさなか、ミントは茶色の魔法陣を出現させ、

「λ（ラムダ）！！」

λ――茶髪でトンガリ耳を持った上半身は人で下半身は馬――ケンタウロスを召喚した。

『ひゃあ？！』

――が、

「「え？」」

『な、なななんでボクを呼んだんですか主ぃ！？』

λは召喚されたと同時に、ミントの背中に隠れて涙目涙声におなりになった。

「い、いや、だってλは弓の、すなわち長距離攻撃が得意で」

『無理です無理です無理です無理です！！　あんなおっそろしいのにボクが勝てるわけないじゃないですかぁ？！』

「「……」」

「……じゃあ、帰る？」

『はい！！！』

そんなわけで、

「ぷはぁ、コーラ最高♪」

「やっぱ冬はココアだよねー♪」

どかあああんばこおおおんちゅどおおおおおん！！

ミントとココアは、呑気にコーラとココアを引き続きいただくのであった。

第９４回　悪戯日和

国立魔法学校一階の魔物学の教室にて、

「「……」」

授業がまだ始まっていないのにも関わらず、ウサギさん寮の生徒の皆さんは、勉強道具一式を机の上にばっちりと置き、先生が来るのを静かーに待っていた。

キーンコーンカーンコーン

「「っ！」」

始業のチャイムが鳴り、びくっと肩をあげたのは、三年経っても慣れることのない恐怖、

キーンコーンカーンコーン

ガララッ！

この教室に、セル先生が、

キーンコーンカーンコーン

「いよう♪　おっまたへ～！」

せ……セル先生が……、

キーンコーンカーンコーン

「おお、全員出席オレうれぴい☆」

せ、セル先生??

（（せ、セル先生が……））

教室に現れたセル先生を見て、

（（ち、ちっちゃくなってる……ッ!?））

ウサギさん寮の生徒の皆さんは、キャラより何より、１８０を軽く超える長身だった先生が、１５０強くらいにチビッコ化していることに驚いていた。

（ルゥ様だ。あれ絶対ルゥ様だ）

白銀の髪に紫の瞳はいつもと変わらないのでクラスメイトたちが彼をセル先生だと認めているなか、ミントはひとり、心の中で突っ込んでいた。

「おし、全員教科書の二百三十八ページを」

真ん丸おめめになっている彼らに気付いていないのか、セル先生、もとい、この国の国王、ルクレツィア＝シャイアルク、通称ルゥは、教科書を開

「開くと思いきや全員武器を持て!!」

「「って、えええ?!」」

くと思いきや、いきなりフォークを巨大化させてそう言った。

「えええじゃねぇぞ!!　オレと戦ええい!!」

「「えええええ?!」」

当然のごとく驚いた生徒たちに、フォークを振り回しながら戦いを挑んできた彼を見て、

「どーしたんだろ、セル先生ー?」

「つうかちっちゃくなってねェか?」

「ふふふ、ちっちゃい」

（ルゥ様だ。あれ絶対ルゥ様だ）

小首を傾げるココアとポトフと、何やらご機嫌なプリンと、この教室の中でただ一人だけ彼の正体に気付いているミントであった。

ピーチチチチ……

一方その頃、

「……は？」

王都市、シャイアの中心に位置する白亜の王城の最上階にある国王の部屋の広々とした、まさしくキングベッドから身を起こした彼、セル先生は、目覚めの一言を発していた。

「こ……ここは確か、父上様の……いや、今はあいつの部屋か」

彼は辺りをくるりと見渡して呟いた、

「って、何故俺がここにいるんだ？！」

後、珍しく混乱かつ慌てた様子で珍しく大きな声を放った。

コンコン

と、丁度その時、

「失礼致します、ルクレ――」

豪華な装飾が施してある王室の扉が開き、緑色の髪の紳士――国王におつかえする人々の中で最も上の立場にいる国王の側近かつこの城の総長、

「――！！」

「！　お、お前、この城の者か――…」

「ルクレツィア様！！　やっと……やっと貴方のお父上様のようにご立派に成長なさったのですね！？　私めは、フィーナは感激でございます！！」

フィーナは、感動の涙を滝のごとく流した。

「ま、待て。俺は」

「あんなにちっさかったのにこんなにご立派に……これぞ牛乳パワー！！　胃腸が弱い貴方様の頑張りを、天にまします神様はちゃんと見ていてくださっ……うっ、すみません……うわーん！！」

「い、いや、俺の名はルクレツィアではなくて”セルシオ＝ヴォルグランダム”」

「うわーん！！」

セル先生の何やらご立派なお名前を、涙のせいで聞き取れないフィーナ。

「お、おい、そんなに泣くな？」

と、意外に優しいセル先生。

コンコン

ガチャ

「失礼しまー……って」

なかなか泣き止まないフィーナにセル先生がほとほと困っていたところ、王室の扉が再び開き、撥ねまくった赤い髪が特徴的な、この城の兵士たちの頂点に立つ兵士長、

「うわーん!!」

「何泣いてんだよフィーナ?」

ミントパパ、シャーンが現れ、珍しく泣いているフィーナを見て驚いた。

「! 極短足!!」

「極?!」

そして、セル先生からの酷い呼び名に、言葉では言い表せないほどの傷を心に負った極短足、もとい、シャーンは、

「って、セルシオ?!」

この王室に、国王のルゥではなく国立魔法学校の先生であるセル先生がいることにびっくり仰天した。

「お前、なんでこんなところに？」

「それはむしろ俺が聞きたいって言うかコイツどうにかしろ」

「あ、ああ、分かった。アクアシールド」

「うわ―…」

ごぽん

どうやら二人は知り合いらしく、目の前の出来事に驚きつつも普通に会話をしてみせた。
ついでに、わんわん煩いフィーナは、水の盾に閉じ込めた。

「……まあ、多分ルゥの仕業だろうな」

「当たり前だ。こんなことをする馬鹿など他に誰がいる？」

「……。そうですね」

取り敢えずは静かになった部屋の中で、口を開いた途端に鋭い突っ込みを受けて落ち込んだ、意外とナイーヴなシャーン。

「ったく、ふざけた真似を……！！」

「はは……まあ、しばらく待ってたらそのうち帰ってくるだろ」

こらえがたい怒りを滲ませた表情で拳をギリギリと握り締めているセル先生をなだめようと、

「アイツ、たまに許しがたいほど悪戯好きではあるけど、ヒトの人生を略奪するような悪いヤツじゃ――」

困ったように笑いながら言い聞かせている途中で、

「――ないといいなぁ」

「希望かよ?!」

自分の発言に自信をなくしたシャーンに、セル先生は珍しく突っ込んだ。

その頃、

ぴょんぴょんぴょんぴょん

「か、返せ返せ返せ返せぇ！！」

ぴょんぴょんぴょんぴょん

「ふふふ、ちっちゃい」

「ば、バカにすんな！！　返せ返せ返せ返せ！！」

ぴょんぴょんぴょんぴょん

プリンにフォークを取り上げられてその手を上に高く挙げられたルゥは、ぴょんぴょんと必死こいてジャンプして、フォークを取り返そうと試みていた。

「ふふふ」

「ば、バカにすんなよぅ……」

ぴょんぴょん……

――が、

「ちっちゃい」

「うわーん！！」

最終的には、泣かされた。

（（な、泣いてるッ！？　セル先生が泣いてるッ？！））

そんな彼を見て、未だ彼をセル先生だと信じて疑わないウサギさん寮の生徒の皆さんと、

（ルゥ様だ。あれ絶対ルゥ様だ）

最初からその正体に気付いているにも関わらず、始終なんの動きも見せないミントであった。

第９５回　相談日和

お日柄の大変よろしい本日は、ところ変わって隣国へ。

「やーん、やっぱりかっこいいねー！」

「ホントホント！」

「こんなにかっこいい上に頭がよくて次期社長でお金持ちだなんて、羨まし～い！」

豪雪地帯に位置する隣国の王都、ケセンディアから南へ山越え谷越えずっと進んだ先にある亜熱帯の土地、バテコンハイジュに、国立魔法学校が存在していた。

「ウフフ♪　わたくしも、彼のような殿方とめぐり会えて幸せですわ！」

セイクリッド魔法学校では季節はまだ真冬だというのに、日当たりのいいテラスにあるパラソルつきの白いテーブルで、淡い紫色の髪のお嬢様、ムースは、彼女の友人たちと午後のお茶を楽しんでいた。

「フハハ！　聞いたかい、アセロラ君？　いやあ、私の美麗さには私自身がまいってしまうよ！」

「僕はバジルさんの自意識過剰さにまいってしまいます」

彼女たちから少し離れたテーブルに座っていた緑のロン毛でなかなかのイケメンボーイ、バジルは、彼女たちの会話を聞いて自己に

陶酔し、茶髪クセ毛の眼鏡っ子、アセロラは、財布にお金をしまいながら、どうでもよさそうに彼に言葉を返した。

「……ところで、なんの用ですか？　あなたがそこにいると、僕の営業が激しく妨害されるのですが」

分厚い財布を懐にしまった後、眼鏡をかけ直しながらアセロラは氷のようにひやりとした視線を、自分の目の前に座っているバジルに向けた。

「フハハ！　なんの用かって、ここは君に相談しにお客さんが来るところだろう？」

すると、バジルは軽快に笑いながらそう言った。

「いえ、正確には僕が集めた情報を欲しがる方に高値でご指名の人物の個人情報その他を売ってさしあげるところです」

そんな彼に、アセロラは何やら悪質な行為をなんの臆面もなくさらりと言ってみせた後、

「が、まあ、それは横に置いておきまして。と言うことは、バジルさんは僕に何か相談があってここに来たんですか？」

無表情ながらも疑問符を浮かべつつ質問をした。

「その通りなのだよ。実はだね」

ので、バジルは話を促すまでもなく、自分の悩みを打ち明けだした。それも、先程相談相手の口から、高値で個人情報その他を売るって

言われたばかりなのに。

「自分のかっこよさについ――…」

「知ってますかバジルさん？　世間一般では、あなたが今からほざこうとしているそういった類のものを総称して”ウザイ”と表現するんですよ」

何かウザイ話を始めようとしたバジルの語りを、出だしもそこそこにぶった切るアセロラ。

「――という冗談は置いておいてだね」

彼の言う世間一般のウザイの枠組みに入りたくなかったのか、バジルはそれを華麗に迂回して、

「実は、どうやら私は恋という名の迷宮に迷い込んでしまったようなのだ」

と、何やら面倒臭い表現を用いつつ、真剣に悩んでます的な表情でそう言った。

「……。相手は誰なんです？」

まあ、そう言うだろうな、とまるで初めから分かっていたかのように、アセロラが次の質問をした。

「ココア＝パウダー嬢」

「あなたは何ヵ月迷宮入りしてるんですか」

彼の口から飛び出した名前に、アセロラはさらりと突っ込みを入れなさった。

「そう、彼女に逢ってからはや二ヶ月と二十五日と二時間十三分……」

「うっわ、そこまで細かく覚えているといっそ気持悪いですね」

アセロラの突っ込みが聞こえていないのか、バジルは切なげに右手で胸の辺りの服を握り締め、

「それ以来、私の……私のこの胸を締め付け続けているこの気持ちはなんなのか……っ！？」

と、劇場チックに疑問を吐き出した。

「今現在あなたの胸を締め付けているのはあなたの手ですが、まあ、恐らく、世間一般ではそれを”恋わずらい”と表現するでしょうね」

そう言って、アセロラは眼鏡をかけ直すと、

「ついでに”未練がましい”とも言うんでしょうね」

と、先程とは打って変わって、バジルに矢印的な何かが突き刺さるような言葉を付け足した。

「そうか……やはりこれが”恋わずらい”……」

「……と言いますか」

やはり良いことだけしか聞いていないと見えるバジルに、

「ココア＝パウダーには、もう既に両親公認の相手がいるじゃないですか」

アセロラは、恋わずらっている相手にとっては破壊力抜群の言葉を投下した。

「そこで、お、お手紙とかを出したいと思うのだが、いかんせん住所が分からないのだよ」

しかし、それは不発に終わった。

若干赤くなりながらも、ココアにお手紙とかを出したいと思っていることを、バジルは思い切って打ち明けた。

「……。成程。僕に彼女の住所を教えろと」

すると、どんな心境の変化が起こったのか、アセロラは羽ペンを呼び出し、怪しげな手帳の一番後ろのページにサラサラと文字を書き始めた。

「！　ま、まさか知っているのか！？」

「僕を誰だと思っているんですか？」

「……！　で、では、お金はいくら――？」

驚きつつもぱあっと顔を明るくしたバジルが、財布を呼び出しながら金額を尋ねると、

「いやですね。僕が親友にお金を請求するとでも？」

アセロラは、ココアの住所を記したページをビリッと破り、それを二つ折りにしてスッと彼の親友に差し出した。

「……っ！！　アセロラ君……っ！！」

彼の慈愛に満ち溢れた笑顔に、バジルは水色の瞳をうるませた。

「健闘を祈りますよ、バジルさん」

そんな彼にメモをしっかり握らせると、アセロラはにっこりと笑って右手を差し出した。

「ありがとう！！」

君こそが真の親友だ……っ！！　と心のそこから感じながら、バジルは、差し出されたその手をしっかりと握り返すのであった。

数日後。

「……」

ぐしゃっ

青筋立ちまくりな右手に握られたのは、バジルからの手紙。

「……はは……ははは、悪い虫は、お兄ちゃんが退治してあげなきゃなぁ……はは、ははははははははははははははははははははははははははは」

――無事にココアの実家に届いたそれを読んでしまった彼女の兄、ショコラがどす黒い狂気を垂れ流しながらバテコンハイジュに向かったのは、また別のお話。

第９６回　カオス日和

日当たりのいい中庭で、

『『ジェラジェラァ♪』』

「ふふっ♪　もうちょっとで終わるからね？」

植物学の先生が彼に出した課題、植物のスケッチを、彼、ミントは、植木鉢にはえている彼のお気に入りの植物であるマッドプラントを対象に取り組んでいた。
ちなみに、植物学は選択科目であり、プリンとポトフとココアは現在、それぞれ別の科目を受講している。

『『ジェラララァ！』』

……動く上に笑うだけでなく、遠くにいた虫を茎をにゅっと伸ばしてぱくっと食べたそれは、はたして本当に植物なのか。

「♪」

そんな疑問などまったくもって頭にないミントは、上機嫌でマッドの姿を紙に描き写していく。

『『ジェララジェラ―…ジェラ？』』

そんな時、マッドはふいに首……茎を傾げた。

「おお、この世界は不思議がすっぱいだな」

と同時に、背後からいつものごとく抑揚のない、かつ高いのか低いのかいまいち分からない声が聞こえてきた。

「！　……それを言うならいっぱい、でしょ？」

その声に反応し、ミントは突っ込みながらそちらに振り向いた。

「久しぶり、ワタル」

「ん、ちゃお」

そこには紺色の髪の彼、死神が、いつものごとく巨大な鎌の鎌子を担いで、いつもとは違って随分とカジュアルな服装で立っていた。

「……。ワタル、いつものカッコと違うくない？」

いつもは襟が高く袖と裾の長い、まさしく死神ちっくな黒いローブを着ているのに、あのローブはどうしたの？　とミントが珍しそうな様子で尋ねると、

「フッフッフッ」

死神は不敵に笑ってこう答えた。

「クリーニング中だ」

「……そ、そう……」

どこか現実離れしている彼の妙に現実感溢れる理由を聞き、あれ自

宅で洗えないんだぁ、とミントは妙に現実感溢れる感想を抱いていた。

「あ。じゃあ、ついでに聞くけど、どしていつもそんなおっきい鎌しょってるの？」

ついでに、彼に会う度にいつも疑問に思っていたことを、鎌子を指さしながら質問した。

「鎌子は体の一部です」

死神はまるで当然とでも言うかのごとく、えへんと胸を張ってそう言った。

「そっか……で、どうして学校に？」

んな眼鏡みたいに言われても、とか思いつつも、まあ、いっか、ワタルだし、と何やら諦め半分な気持ちで、ミントは自分の横に、

「すとん」

と座った死神に、学校に来た理由を尋ねた。

「ん、実はみんとんに聞きたいことがあってな」

『『ジェラ、ジェラ！』』

「？　聞きたいこと？」

彼の問いに、死神はマッドを指でつつきながら、

「一年生になったら、友達百人出来るかな？」

「え、そんなことを聞く為にわざわざ異世界からここに？」

と質問したところ、ミントに質問で返された。

「百人で食べたいな。富士山の上でおにぎりを。ぱっくんぱっくんぱっくんと」

「キミとキミの友達百人総出でおにぎりを食べたいの？　しかもなにゆえ敢えておにぎり？　って言うかフジさんって誰さ？　そんなに大勢で上ったらフジさんぺっちゃんこだよ？」

抑揚のない声でさらさらと言う死神に、ミントはさらさらと突っ込んだ。

「ん？　ミントは富士山を知らないのか？」

『ジェラファァァ』

すると、死神はマッドに頭を噛みつかれながら、

「富士山はな、日本一高いんだ」

と、特に痛がる様子もなく淡々と答えた。

「ニホンって、ワタルが住んでる国の名前だっけ？」

「ん」

「へぇ、そんなにおっきい人なんだ」

そんな彼の言葉に、明らかにとんでもない誤解をしているミント。

「それで、ひとたび噴火すると日本のほとんどが壊滅状態になるらしい」

『ジェラルラァ』

そんな誤解に気付くことなく、鼻から上をマッドにくわえられながら話を続ける死神。

「ええ?!　そんなに危険な人なの!?」

噴火、という単語を比喩表現として受け取り、怒っただけで一国を滅ぼしてしまうのか、と驚くミント。

「ん。でも多分大丈夫だ。もうすぐ噴火するって昔からずっと聞いてるけど、未だに噴火してないからな」

『ジェジェララファ』

頭がすっぽりとマッドの口に収まっていても、特に慌てることもなく普通に会話する死神。

「昔からって、随分と気が長いんだね―…って、ワタルううう?!」

えらく気が長いんだなと思いつつ、でも昔からずっと噴火しそうって言われてるなんてどんだけ情緒不安定なんだよ、とか考えている

と、マッドがゲフッという音を発したので、ミントはようやく死神の非常事態に気が付いた。

「い、今の今までその状態でどうやって会話してたのさあああ?!」

と思いきや、ミントは違うポイントに驚いていた。

「フッフッフッ、未知の体験をしちゃったゾ☆」

「わっは、ポジティブすぎる♪」

マッドに吐き出してもらった死神の第一声に、ミントは爽やかに突っ込んだ。

「もう、食べられてるなら普通にしてないで慌てて欲しいんだけど?」

呆れたように言いつつも、消化の為と思われるねっとりとした未知の液体でベトベトになっている彼に、ミントはタオルを呼び出して渡してあげた。

「ん？　オレ様かなり慌ててたぞ？」

彼の言葉を聞き、ん？　と小首を傾げる死神。

「え、そうだったんだ……え、そうだったんだ？！」

危うく納得しそうになったところで、

「いや、普通に会話してたじゃんか！？　あれの具体的にどこが慌ててたって言うのさ？！」

ミントは元気に突っ込みをかました。

「んー、と言うか」

すると、死神はタオルで顔を拭きながら、

「みんとん、オレ様の横にいて会話までしてたのに気付かなかったのか？」

と、ご尤もな質問を投げ掛けた。

「え？　い、いやだってオレマッドのスケッチしてたしいや確かにマッドの茎が一部伸びてるなーとは思ったけどワタルがあまりに自然にオレと会話してたから気付かなかったんだよ」

ので、それに対してのミントの言い分をさらさらと長文で述べると、

「ん？　スケッチ？」

死神は、長文の一部だけに興味と関心を示した。

「うん。ほら」

ので、ミントはその物的証拠を提示した。

「……」

「……」

『『……』』

間。

「……。カオスだな」

死神の感想を聞き、

「……。でしょ？」

カオスな彼にカオスって言われるオレの絵って一体……？　とか思うミントであった。

第９７回　嘘つき日和

ウサギさん寮の男子寮の一室にて、

「むぅ……」

プリンは自分の机に置いてある紙を見つめつつ、むぅと首を捻っていた。

その紙のタイトルは、”始末書”。

「ったく、どぉやったら恵方巻き作る過程で家庭科調理室の三分の一ぶっとばすような爆発起こして」

「どうやったら全身包帯だらけになるほどの切り傷だらけになるのさ？」

そんな彼の後ろから、呆れたように言うポトフとミント。

「む？　だって普通爆発」

「「しねえよ」」

「満身創痍に」

「「ならねえよ」」

椅子越しに振り向いたプリンが不思議そうに言うと、それを同時に、かつ、即座に否定する二人。

「……てェか、お前なんで手先が器用なのに料理が出来ねェんだよ？」

「オレ、あの温厚かつ奥ゆかしいピッド先生が怒ったところ初めて見たよ？　やんわりとだけど」

技術の時間はスゲェのに、とポトフは疑問を抱き、彼曰く温厚かつ奥ゆかしいらしい家庭科担当のピッド先生を怒らせたプリンに、ミントは小さく溜め息をついた。

「ぶぅ……じゃあ」

彼らの様子にご気分を損ねた様子のプリンは、

「二人はどうして料理が出来るの？」

ぷーと頬を膨らませながら逆に彼らに質問した。

「……」

「……」

「「……」」

プリンの問いに、ミントとポトフは目をぱちくりさせた後、互いに顔を見合わせて、哀愁を漂わせ始めた。

「？」

突然どっぷりと暗くなった二人に、小首を傾げるプリン。

「……料理が出来る……と言うか、まあそこそこ作れる人にはね」

「二種類のヒトがいるんだぜェ、枕？」

疑問符を浮かべてこちらを見ている彼に、ミントとポトフは台詞を分担し、

「「本当に料理が好きなヒトと、料理が下手な親をもったヒト」」

最後は綺麗にハモってみせた。

「……」

うむ、僕はどちらにも当てはまらないな、とかプリンが思っていると、

「っも、聞いてようちのバカ親片方が群青色のカレー作ったかと思うと片方が実はまともな料理が作れるくせに敢えてなんか幼虫的なものがメインの炒めものとナメクジのフライなんか作ってるんだよ？！」

「おにィさんの料理は半端なく美味しいけど、おねェさんの料理はなんか確実に色おかしいし奇声発するしこの世の食べ物とは思えない未知との遭遇みたいな味がするんだぞォ？！」

「しかもたまに”隠し味はウチよ！！”とかもう本気でぶちのめしてやろうかと思うほどワケわかんないこと言いながら鍋に入ろうとするし！！」

「だからおねぇさんの為を思って俺がさりげなく料理の本とかあげたら本気でぶちのめされるし！！」

「「しかも”残さないで食べてね♪”って笑顔で死刑宣告されちゃうし！！」」

ミントとポトフが涙目になりながら、何やらプリンにグチグチ言い出した。

「ぴ、ぴわわ……それは大変」

「「大変なんてもんじゃねえよ！！」」

「ぴわ！　ご、ごめんっ」

あれ？　僕が怒ってた筈なのに、とお怒りの彼らに焦るプリンと、

「だから……これは自分が料理作れるようにならなきゃと……ね、ポトフ？」

「あァ、何せ死活問題だからな、ミントォ？」

哀愁を漂わせつつガシッと手を握りあうミントとポトフ。

「で、では、二人はどうやって作れるように？」

泣き出しそうなほど暗い二人に、プリンが慌てて話題をふると、

「「聞いてくれる？」」

「ぴ?!」

彼らはバッと彼に顔を向けた。

≫≫≫

赤い屋根の家を出て、運河にかかったアーチ状の橋を渡り、大通りを抜けて機関車に乗り、森を抜けてやって来たのは、綺麗な水と国立病院で有名な街、”アクリウム”。

「おばあちゃーん!」

その街にある青い屋根の家の隣に、ちっちゃいミントはてってけやって来た。

「あらミントちゃん。よく来たわねぇ」

扉が開き、現れたのは赤い髪の女性。
彼女はミントのお祖母さんである。

「あら、一人で来たのかい?」

「うん!」

「ま、凄いわねぇ!」

「えへへ~♪」

お祖母さんに褒められ、ミントはえへへと照れた後、

「遊びに来てくれたのかい？　嬉しいわねぇ」

「あ、あのね、おばあちゃん？」

ニコニコ笑顔のお祖母さんに、

「ん？　なんだい？」

「オレ、おばあちゃんにおねがいがあるんだ」

あのね、と話題を切り出した。

――一方、その頃、

「行ってきまーす」

「いってらっしゃァい！」

「気を付けてね」

そのお隣さんの家から金髪のお姉さんが出発し、黒髪の少年と茶髪のお兄さんがそれを見送った。

彼女はエリアで、彼はポトフで、その隣にいるのがソラである。

ぱたむ

エリアが角を曲がって見えなくなったところで、ソラは戸を閉めた。

「よし、後片付けしなくちゃだね」

「あ、俺もてつだう！」

「あは、ありがとポトフくん」

腕捲りをして気合いを入れたソラにてけてけくっついていくちっちゃいポトフ。

「……ねェ、おにィさん」

「？　なあに？」

テーブルから椅子を引っ張ってきてその上にちょこんと乗ってお皿拭きをしながら、

「あのね、俺、おにィさんにおねがいがあるんだ」

ポトフはあのね、と丁度ミントと同じタイミングで同じ話題を切り出した。

「「もうすぐ母の日でしょ？　だから、おりょうりおしえて！」」

≫≫≫

「「ごめんなさい嘘ですあの料理という名の殺人兵器をあの人につくらせない為ですすいませんすいませんすいません」」

「ぴわわ……ご、ごめん」

昔を思い出しながら語っていくにつれてガンガン暗くなっていったミントとポトフに、プリンは慌てて謝った。

第９８回　乙女日和

「ぐー」

「すかー」

「……ん……」

むくり

「！　――寒っ！」

もふっ

「……。……くぅ」

目が覚めてむくりと起き上がったと思いきや、寒さで布団の中に潜ったミントが、両サイドのベッドで寝ているプリンとポトフのように再び眠りに落ちた頃、

「グッモーニン、アロエ～♪」

「……おはようございますチロルさん」

国立魔法学校の食堂にて、長い後ろ髪の上の方だけをひとつにまとめた金髪ガール、チロルが、茶髪眼鏡っ娘、アロエに挨拶をしつつ隣の席にちょんと座った。

「ふふ～♪　今日もヴェリーコールドね～？」

「なら何故そんな短いスカートをはいているのですか？」

とても寒いとホットチョコをいただきながら言うチロルに、オムレツを食べる手を止めたアロエはさらりと言った後、

「……ところで、なんの用ですか？　あなたがそこにいると、ヒトの目が集まってアロエの人間観察が激しく妨害されるのですが」

と、どこかで聞いたことのあるような声と口調で彼女に質問した。

「ミスヘビさん寮のヒトが何言ってるのよ？　アロエもヒトの目が集まるくらい十分キュートよ？　ま、それでもアタイには負けちゃうけど、みたいな～♪」

「……。まあ、ヒトは誰しも自分が一番ですからね」

恐らく悪気はないと見られるチロルに、アロエはどうでもよさそうに眼鏡をはずして拭き始めた。

「でねでねアロエ？　今日はアロエに聞きたいことがあるの」

そして再び眼鏡をかけた彼女に、チロルは珍しく真剣な表情で、

「ミントきゅんは、スウィートとビターのどっちが好きなのかな？」

と、至極真剣に尋ねた。

「……」

バレンタインか。
バレンタインの話か、と容易に推測できたアロエは、
「そのくらいご自分で彼に聞いてください」
と言って、再びオムレツを食べ始めた。
「聞いたもん！　聞いたんだけど……」
「……？」
すると、チロルはホットチョコが入ったカップを両手で包むように持ちながら、疑問符を浮かべたアロエに切なげに語り始めた。
――それは、去年のバレンタインデーのこと。
≫≫≫
「はい、ミントきゅん！」
「へ？」
唐突にぱっと差し出された可愛げに包装されたそれを見て、ミントが小首を傾げると、
「ふふ、オープニット♪」
チロルは、何故か英語でそれを開けてみてと彼に言った。
「！　わあ……これ、チロルが作ったの？」

「うん！」

言われた通り包みを開けたミントは、自分の質問に元気に頷いた彼女を見て、

「あ、ありがとう」

と、顔を赤らめつつ嬉しそうにお礼を言った。

≫≫≫

「ピュアミントきゅんラヴ～～～！！」

「いいから早く続けてください」

≫≫≫

「ね、食べてみて食べてみて！」

にこっと笑ってチロルが彼に食を促すと、

「え？　……なんかもったいないけど……うん。じゃあ、いただくね？」

ミントは困ったような顔でそう答えた後、彼女のお願い通り袋の中に手を伸ばした。

≫≫≫

「ピュアピュアミントきゅんラヴラヴ～～～！！」

「ええからはよ続けてください」

≫≫≫

「ミントきゅんミントきゅん、これとこれ、どっちが美味しい？」

ぱくっと食べたミントに、チロルが袋の中の二種類のチョコを指さしながら質問すると、

「へ？　うーん……」

ミントはちょっとの間考えた後、

「どっちも美味しいよ」

にこっと笑ってそう答えた。

≫≫≫

「もう、ミントきゅんったらジェントルマンなんだからっ♪　……ね、どっちが好きなんだと思う？」

「どっちも好きなんじゃないですか」

話が終わると再び質問してきた彼女に、アロエはこの上なく適当に答えた。

「へーえ、ミントってそんなふうなんだー？」

「ピュアですわ！　とってもピュアですわミントさんっ！」

ついでに、彼女たちの向かい側の席にいつの間にか座っていたココアとムースがするりと話に加わった。

「ワッツ？！　いつの間にそこに現れたのココア！？　そしてなんでここにいるのムース？！」

ので、別に驚いた様子もなく普通にオムレツを食べているアロエの隣で、チロルが普通に驚いた。

「えへ♪　ついさっきだよー」

「わたくしは遊びに参りました」

ココアを持ったココアと、ムースを持ったムースは、彼女の突っ込み質問にさらりと答えた。

「そっかー。そー言えばもうすぐバレンタインデーだよねー」

「そうですね」

「そうそう。だからアタイはアロエにミントきゅんの好みを聞きにきた～みたいな♪」

その後、一名を除いてキャッキャと盛り上がり始めた彼女たちを見て、

「そ、そうですわね。もうすぐバレンタインデーですわね」

（バレンタインがわたくしのお父様の陰謀だとは、口が裂けても申し上げられませんわね……）

ムースはやわらかな表情とは裏腹に、バレンタインデーが食品製造会社の社長である彼女の父が売り上げをアップさせる為に考え出した大作戦だとは絶対に口に出すまいと心の中を凍りつかせていた。

「ねー、じゃー結局チロルは今年スイートとビターのどっちをミントにあげるのー？」

その間、ココアは乙女な質問をチロルに投げ掛け、

「うーん……ここは間をとって、ア、タ、イV」

「アロエは今年誰かにあげるのー？」

彼女の答えを華麗にスルーしてアロエに質問を投げ掛け、

「そうですね。最近アロエが作ったばかりの試薬がうっかり混入してしまったチョコを誰からも好意という名のプレゼントを貰うことが出来なかった負け犬男子に」

「ムースはプリンに何かあげるのー？」

彼女の答えも鮮やかにスルーして、ムースに質問を投げ掛けた。

「え？　あ、え……そ、そうですわね……」

自分に質問がくるとは思っていなかったのか、ムースはあわあわと焦りながら、

「え、ええと、プリンは甘いものはあまり好まないようなので……」

どう答えればいいか考えながら答えだした。

「え？　そーなんだー？」

「！　は、はい。そーなんだ、ですわっ」

すると、ココアが別のところに興味を持ったので、ムースはよかったと笑顔で頷いた。

「あれ？　でも、プリン、プリン食べるよー？」

紛らわしいというかややこしいことを言いながら小首を傾げるココア。

「ああ、それは昔わたくしが唯一つくれたプリンを召しあがってから好んでいただけるようになりまして」

「え、何それ何それ？！」

「ステキステキー！！」

「……帰らせていただいてもよろしいですか？」

ムースの言葉に食い付いたチロルとココアをよそに、アロエが何やらうんざりし始めた頃、

「ぐー」

「すかー」

「くぅ」

プリンとポトフとミントは、未だ眠りこけていた。

第９９回　雪遊日和（前書き）

後書きにお知らせがあります。ちなみにサブタイは、雪遊び＋日和で雪（略

第９９回　雪遊日和

朝、薄暗い部屋のカーテンを開けると、窓の向こうには眩しく輝く世界が広がっていた。

「――！　ミントォ！！」

それを見たポトフの瞳は眠そうな状態から一転してきらきらと輝き、その輝きを保った状態でまだ眠っている友人の名を呼んだ。

「ん……分かった。タマネギが嫌いなんだね」

すると、ミントは布団に潜ったままふやふやと返事を返した。

「何の話？！　俺タマネギ大好きだぞォ！？」

突っ込む箇所が多少ずれていることも気付かずにミントの枕元に移動したポトフは、

「……今思い付いた秘奥義……」

わざわざ口にしなくてもよろしいと思われる言葉を用いつつ、フッと精神統一の為に瞳を閉じた。

「お布団没収！！」

ガバーッ！！

「って寒ううううう？！」

先程の精神統一をした意味が分からないほど至ってシンプルな文字通りの秘奥義をミントにお見舞いした。

「寒っ、ちょ、寒っ、布団布団!!」

「んなことより外見ろよ外!!」

寒い寒いと訴えるミントをんなことよりで片付けながら彼を窓際に引っ張って行ったポトフは、

「な?!」

と、彼に同意を求めた。

「な?　って、何さ?」

そんな彼に、小首を傾げるミント。

「ヒント。〝ゆ〟で始まって〝き〟で終わる二文字の言葉です」

「いやそれ答え言っちゃってるじゃん」

ポトフの親切すぎるヒントに突っ込みを入れた後、

「雪がどうしたのさ?」

ふああと欠伸をしながら、ミントは指をパチンと鳴らして暖かい服装に一瞬にして着替えた。

「何言ってんだよ？　雪があればなんでも出来るだろ？」

「いやなんでもは無理だと思います」

呆れたように小さく息を吐いたポトフは、ミントのさらりとした突っ込みをさらりと無視して、

「スキー出来るしスノボも出来るしソリも出来るし雪合戦も出来るし雪だるまも作れるし雪うさぎも作れるしかまくらも作れるしかまぼこも作れるしおにぎりも作れるしお寿司もつく」

「ちょっと待てちょっと待てちょっと待て」

指折りながら雪の万能性を挙げていったところで、再びミントの突っ込みが飛んできた。

「お？」

俺なんか変なこと言った？　的な顔をこちらに向けてきたポトフに、

「雪を食うな」

ミントは禁止の命令文を言い放った。

国立魔法学校の入り口に立ち、まっさらな雪原を目の前に、

「俺は雪が大好きだ……っ！」

ポトフはキラキラに瞳を輝かせていた。

「そしてミントも大好きだ……っ！！」

「そりゃどーも」

その瞳を向けられたミントが適当に彼からの告白を受け流すと、

「そしてココアちゃんがだァーい好き――」

「イービルフィアー」

ポトフはココアを抱き締めようとしたところで、いつものごとく彼女にぶっ飛ばされた。

「まーたく、雪の何が珍しいのー？」

「あは、ココアの住んでるところは雪がよく降るもんね？」

呆れたように言うココアに困ったように笑いながら応えるミント。

「ぶう……寒いし眠い」

「あは……あの技は寝起きの悪いヒトには使わない方がよろしいという結果が出たね」

不機嫌なプリンに、ポトフの秘奥技の短所を発見したミント。

「おォ！　俺一番！！」

「あは、ヤッタネ、ポトフ」

バフッと雪の中から顔を出し、辺りを見回した後に嬉しそうに言ったポトフに、ミントは爽やかに同調してみせた。

「てなわけで早速！　おりゃァァァ！」

立ち上がったポトフは頭に載っていた雪を基に、ごろごろと転がして雪だるまを作り始めた。

「……なんかあれだね。雪が降るとホントに犬は喜んで庭を駆け回るんだね」

「ホントにねー」

「……」

その様子を眺めながらのほほんと言うミントとココアの隣で、

ころころ

（（って、お前もかー？！））

プリンがおもむろに雪玉を雪の積もった地面の上をころころと転がし始めたので、二人は心の中で同時に突っ込んだ。

――直後、

ヒュッ

「む？」

ドカアアアアアアン！！

「「ってプリンー？！」」

何かが風を切る音が聞こえて顔を挙げたプリンの顔面に、何やらでかい雪玉が直撃した。

「あっはっはっ♪　どーおだっ！」

衝撃に耐えきれずに後方に吹っ飛んだ彼の名を叫ぶミントとココアと少し離れたところで、ポトフは楽しそうに笑っていた。

どうやら彼が作っていたのは雪だるまではなく、先程プリンに直撃した巨大な雪玉だったようだ。

「き……貴様……っ！！」

痛みと冷たさをこらえて、久々に頭に分かりやすい怒りマークを出現させつつ立ち上がったプリンは、

「ハンドルマター！！」

と、久々に無属性魔法を披露した。

「あっはっはっ！　上等だァ！！」

ので、久々な台詞を用いながら、ポトフは、いつの間にそんなにこさえた、と思わず突っ込みたくなるような数の巨大な雪玉を、プリンに向かって次々と投げ始めた。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド！！

ドカアアアアアアンドカアアアアアアアンドカアアアアアアン！！

と、明らかに普通の雪合戦ならば発生しないであろう音が絶えず鳴り響く中、

「はい、焼けたよー」

「わは～、かまくらの中でホントに餅って焼けるんだね～」

我関せず、な勢いで、自分たちで作ったかまくらのなかに入ったミントとココアは、のほほんと餅をいただくのであった。

第９９回　雪遊日和（後書き）

皆様こんにちは！
こちらは雪が大好きなめろんです！

学校日和は皆様のおかげで次回でめでたく１００回を迎えます！
ので、次回は８９回という微妙な数字の回から始まった、読者様参加型特別企画第二弾の結果つくられたお話をお送りしたいと思います！
ののでで、もういらっしゃらないかもしれませぬが、最後のあがきということで、２月１２日を〆切にしたいと思います！
ののでのでで、まだ参加してない人、もしくは追加したい人は感想／評価欄に急げ☆↑

毎度ご愛読ありがとうございます！
では、１００回でまたお会いいたしましょう！！

第１００回　もしも日和（前書き）

コロコロコロ

ぱこっ

皆様こんにちは。

この度、学校日和２は皆様のおかげで１００回を迎えることが出来ました。

その記念として、今回のお話は前回の後書きでお知らせしたように、特別編をお送りします。

予想外にお題をたくさんいただいた為、作者の独断と偏見と強引な解釈でお題の内容が異なる、または、お題とお題が一緒になっている、はたまた、内容によってひとつのお題についての長短の差が激しかったりしますが、そのあたりはどうかご容赦くださいませ。

では、本文へどうぞ。

第１００回　もしも日和

皆様こんにちは。
びよってますか？

「うわ出たその変な動詞」

「って言うかまた現れたねー、その喋るメロンー」

「うむ。一部が割れたメロンが喋ってる」

「腹減ったなァ」

そこはかとなく殺気を感じつつ、長くなりそうなので早速始めたいと思います。

びよびよ放送局

「……何なのさそのなんか汚いものが滲み出ちゃってる感じの放送局は？」

さあ、始まりましたよ『もしもコーナー』。
進行役はこの喋るメロンで、ゲストは学校日和の面々です。

「はーい。もしもコーナーって何ー？」

「む？　電話？」

「それ”もしもし”な？」

百聞は一見にしかず。
では、早速一発目ー。
タイトル”Mの悲劇”
「……なんかパクりっぽいなぁそのタイトル」
――
キーンコーンカーンコーン
薬草学（クー先生）
「あれ？　キミだぁれ？」
キーンコーンカーンコーン
体育（エル先生）
「ん？　なんや新人かぁ？」
キーンコーンカーンコーン
魔物学（セル先生）
「誰だお前は」
キーンコーンカーンコーン

「……。……カツラ被ってみただけなのに……」

「「み、ミント……」」

茶髪のカツラを握り締めつつ体操座りしているミントがあまりに憐れすぎて、プリンとポトフは掛ける言葉が見付からないのであった。

――――

はい、こんな感じでお送りします。

「成程ー」

「「み、ミント……」」

「なっ、なんなのさこれは?!」

ああ、説明不足でしたね。
只今のお題は、『もしもミントがカツラを被ったら』です。
では、この調子でガンガンいきましょー。

『もしもミントがコーラのビンを持った瞬間爆発するんだったら』

”Mの悲劇2”

「って、またオレネタなの?!」

――――

～学校日和　第1回～

「コーラ10本ください」

「あいよー」

ちゅどおおおおおん！！

ミント、初回にて死す――

――――

「いやいや初回でオレ死亡ってそれ以降話進まないじゃんかあああ？！」

『もしもミントの髪に更に金がついたら』

”Mの悲劇3”

「あれ！？　もしかしてこれイジメなのちょっとおおお？！」

――――

～学校日和　第1回～

「君の髪の毛はどうなっているんだ？」

「あ……やっぱ目立つ？」

蒸気機関車に揺られながら、プリンが目の前の少年の不思議な頭

髪について小首を傾げると、ミントは帽子を深く被りながら聞き返した。
すると、

「うむ。輝いているな」

特に真ん中が、と赤と緑の真ん中にある金髪を見ながらプリンが言った。

（お婿に行けないッ！！）

「ぴわわ?！　ごめんミントっ！！」

シートの上で体操座りして高速で”の”の字を書き出したミントに、プリンは慌てて謝った。

――

Mの悲劇シリーズ、いかがでしたか?

「……帰りたくなってきた……」

「み、ミント、まだ始まったばっかり」

「そだよー！　まだまだこれからだよー！」

そうそう、まだまだこれからです。
では続いて、ココアシリーズにいってみましょー。

「え?！　私ー！?」

『もしもココアとショコラの性格が逆になったら』

「!?　何それちょっとやめてよ有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない有り得ないーーー!!」

”攻守逆転”

――――

「お兄ちゃーん!!」

「ちょ、部屋に入って来るなって言っただろ!?」

「えへへー♪　今日はお兄ちゃんと一緒に寝るんだー♪」

「いや一人で寝られるだろ?!」

「えー、やだやだー」

「っあーもー、ダークネス!!」

ドカアアアアアン!!

ココアのキャラ、崩壊。

――――

「んな妹いるわけないでしょー!?　漫画の読みすぎだよー!!」

『もしもポトフとココアの性格が逆だったら』

「って、また同じようなネターー？！」

”攻守逆転２”

――――

「えへへーー♪　ポトフだーい好きーＶ」

「ちょ、な、何言ってんだよバカァ！！」

「？　ポトフだーい好きーＶ」

「そのままの意味で取るなァ！！　キラキラァ！！」

ココアとポトフのキャラ、大崩壊。

――――

「はわわ……俺がココアちゃんを攻撃してる！？」

「有り得ない有り得ない有り得ないあーりーえーなーいー！！」

ささ、続いては仲良し二人組、プリンとポトフシリーズです。

「「仲良しじゃないっ！！」」

『もしも病院にいったら』

”病院に行こう！”

――――

～学校日和　第７２回～

「ず～っとともだち！　約束だよ？」

負傷した右目から流れ出る真っ赤な血を気にも留めずに、ポトフはにこっと笑ってそう言った。

「……うん！　またね！」

彼の言葉が嬉しくて、プリンはにこっと笑い返してみせた後、

「テレポート！」

ピュッ

ポトフを助ける為、彼を瞬間移動させた。

しゅぱんっ

――動物病院へと。

（え、えええええええ？！）

――――

「待て。なんで俺が動物病院に強制送還されな」

「む？　実際どっちに送ろうかちょっと迷ったぞ？」

「って迷うなァァァ！！」

『もしもプリンが寝なくなったら』

「む？」

”プリン＝眠気＝？”

――――

「今日の魔法学は人身瞬間移動魔法、テレポートについて学習します。テレポートは使用できる魔法使いが極めて少ないのですが、この理由を説明出来ますか、プリンさん？」

「うむ。テレポートは現在地と目的地の空間座標を正確に特定し、更に自分自身の今現在の残りの魔力の量と移動の際の魔力消費率を正確に割り出すまでの間、一般に長い時間がかかる上に消費する魔力が莫大で、更に僅かな誤差や失敗が取り返しのつかない事故、または、最悪の場合、死を意味するからだ」

「すばらしい。完璧です」

「……照れる」

なんて言うか、普通に真面目な優等生。

――――

「……照れる」

『もしもポトフが肉を食べられなくなったら』

「お？」

”ポトフ＝肉食＝？”

――――

～学校日和　第７１回～

「ごめんな、ミント……」

「ぽ、ポトフ……？」

突然うつ向いて肩が震え出したポトフに、ミントが彼の名前を心配そうに呼ぶと、

「俺、ヤギ男なんだ」

と、ポトフが言った。

（ヤギ男？？？）

シリアスな雰囲気に、突っ込んでいいものかどうなのか悩むミントであった。

――――

「ちょっと待て。ってことはあれか？　満月見たら」

「黒ヤギさん！？」

「て何目ェキラキラに輝かしてんだテメェェェ？！」

「ふふふ、メー」

「メーじゃねェェェ！？」

『もしもプリンの普段の性格がゴマだったら』

「？　ゴマ？」

「「……っ」」

”切実な願い”

――――

「ククク……」

朝も、

「ククク……」

昼も、

「ククク……」

夜も。

「「クー先生、部屋変えてください」」

「もう、仕方ないなぁ」

――――

「た、確かに切実な願いだね」

「あァ、なんで笑ってるのか分かんねェしな」

「分かったー？　あれがゴマだよプリンー？」

「ぐー」

「ってあららー、寝てたかー」

さてお次はミントシリーズです。

「は？　出だしに三連発やったじゃん？」

それはMの悲劇シリーズです。

では、参りましょー。

『もしもミントが龍二くんのような性格だったら』

「って、いきなり著作権その他でヤバいの来ちゃってますよおおお！？」

”最強降臨”

――――

「ミント、今日たなぼた！」

「ん、そだね」

「いや七夕でしょー？！」

「気にしなーい」

ツッコミ放棄。

「やるか？」

「上等だァ！！」

「上等だ」

ズバアアアアアン！！

「「……すみませんでした……」」

プリンとポトフの喧嘩も一発解決。

「ミントきゅ～ん！！」

「よっと」

ズバアアアアアン！！

「きゃっはーV」

チロルも大喜び。

――――

「うあああ……オレ知らないよ？」

『勇者以上魔王以上』、大人気連載中です。

「って、何宣伝してんのさ？！」

勇者以上魔王以上＋学校日和の『勇魔以上日和』も連載中です。

「だから何宣伝してんのさあああ！？」

『もしもミントとジャンヌの性格が入れ替わったら』

「？！　ちょ、は！？　ふざけんなよふざけんなよふざけんなよふざけんなよおおお？！」

”ミント異常”

「って何さっきの宣伝ノリしたサブタイつけてんのさあああ！？」

――――

「み、ミント？　なんで倒立してんだァ？」

「なんとなくだよ！！」

「み、ミント、どうしてＹ字バランス？」

「熱い魂に火がついたんだよ！！」

「ミントー、頭おかしくなっちゃったのー？」

「ゲヘヘ♪　メルヘンの極みだね！！」

「ミントきゅ～ん！！」

「ボディブロー！！」

「え？　え？！　きゅ、急にどうしたのミントきゅん！？」

「知るか！！」

「やぁん♪　もしかして本能？　インスティンクト～！？」

と、ジャンヌ化したミントが散々暴れまわったところで、

ガシィッ！！

「ちっと来いや」

「……あい……」

ミント化したジャンヌが現れ、彼をずりずりと引きずって、何処かに連れていったとさ。

――

「ぴわわ……」

「ミント……」

「ご愁傷さまー……」

「うわーん！！」

『もしもミントが女だったら』

”あれ？　ジャンル違うくない？”

――

――出会いは学校へ向かう汽車の中。

「相席願う。他がいっぱいなんだ」

相手は、流れるような水色の髪と切長の蒼い瞳を持ったとびきりの美男子さん。

「大丈夫。僕が君を守ってあげる」

ラブストーリーは、突然に。

「大好きだぜェ？」

そして、波乱も突然に。

「可愛いなァミントォ♪」

気になる彼は、黒髪眼帯のイケメンボーイ。

「ミント離せっ！」

「ミントは俺のだ」

はたして、ミントの恋の行方はいかに――？

――――

「いやおかしいでしょ？　プリンにはムースがいるしポトフはココア一筋―…」

スパアアアン！！

「そー言えば、私はー？」

ミントが女の子だったら、恐らくココアもムースも登場してませんよ。

て言うか作者が恋愛ものなんて書けるわけないから恐らく学校日和自体なかったんじゃないですか？

「……」

かっくり

「「ミント!?　ミントー?!」」

『もしもミントの両親がミントが赤ちゃんの時に亡くなっていたら』

”追憶”

――――

「……ルゥ様、オレの両親って、どんな人でした?」

両親の墓の前に座りながら、ミントは隣に立つルゥに質問した。

「ん?　……そうだな」

すると、ルゥは昔を懐かしみつつも悲しげな表情になった。

「お前の父さんは足が短くていつもみんなにいじられててよく体操座りして”の”の字書いてて、お前の母さんはいつもぶくぶく溶けて”ゲヘヘ♪　メルヘン!!”とか言いながら無意味に倒立したりY字バランスしたり」

「もういいです」

ルゥの思い出話を聞き、いなくてよかったとかちょっと思ってしまったミントであった。

――――

「……。あれがいなかったら、かぁ……」

物思いに耽っているミントでした。

では続きまして、ミントとチロルシリーズです。

「やぁん♪　やあっとアタイの出番～みないな～！！」

『もしも初詣のときに邪魔が入っていなかったら』

「「！？」」

「何その興味津々なお題～！！」

「ちょ、なんなのさその見るからに何か欲してそうなお題はあああ？！」

”一難去ってまた一難”

――――

～学校日和２　第９１回～

「は？！」

チロルの口から飛び出した言葉に、ミントは赤い顔を更に赤くした。

対し、チロルはにこーっと笑ったまま彼の答えを待っている。

「……。……ょ……」

「え？」

小さすぎて聞き取れなかった彼の言葉を、チロルが小首を傾げつつ聞き返すと、

「ダメだよ」

ミントはチロルの両肩に両手を置いて彼女を自分から少し遠ざけると、

「そういうことは、結婚してからすることでしょう？」

赤い顔のまま、彼女の目を真っ直ぐ見てそう言った。

――すると、

「結婚してくれるの！？」

チロルの瞳が、輝いた。

「え」

「嬉しい！！　ミントきゅん大好き～！！」

「あ、あれえええええ？」

なんでいつもこうなるんだろう、とつくづく不思議に思うミントであった。

――――

「やぁん♪　アタイ照れちゃう～！！」

「……」

「む？　ミント真っ赤」

『もしもミントもチロルに対して積極的だったら』

”ミントチェンジ”

――――

「ミントきゅ～ん！！」

「チロルた～ん！！」

「「ラヴーーー！！」」

ウザイ。

――――

「え？　ちょっと理想みたいな……」

「いやえええ！？　今のが？！」

『もしもチロルがウブで純情な女の子だったら』

「え？　アタイはいつもウブで純情～みたいな～？」

「うーん、そーでもないよー？」

”チロルチェンジ”

――――

「……」

「……」

「「あの……」」

「あ……な、なあに、ミントくん？」

「や、ち、チロルこそなあに？」

「え？　ミントくん先でいいよ～」

「いやいやここはチロルが先で――…」

これもこれでウザイ。

――――

「やぁん♪　ウブウブもなかなか～みたいな～！！」

ふむ、長くなってしまいましたね。

「そーだねー。普段と比べると倍近く長いねー」

「その分ココアちゃんと長くいられて俺は幸せだけ」

「ダークネスサクリファイスー！！」

てなわけで、次回に続きます。

「って、続くの？！」

「ツッコミミントきゅんも素～敵～V」

「ぷわ……ねむねむ」

第１００回　もしも日和（後書き）

出来がかなり不安なノリと勢いだけの１００回記念ですが、そんなわけで、次回に続きます。

そしてコロコロ様、誠に申し訳ございませんでした！！！！

第１０１回　劇場日和

♪び～よびよびよびよ～び～よび～よ放～送～局～♪

「……なんなのさその変な歌は？」

びよびよ放送局のテーマです。
　さて始まりました。
びよびよ放送局、進行役は引き続きこの私で、ゲストは学校日和の面々です。
では、引き続き『もしもコーナー』を始めたいと思います。

『もしも魔法が存在しなかったら』

「わは～、いきなり学校日和の”学校”の存在が否定されたね～」

”学校日和＝魔法＝？”

――――

「ぷわ……ねむねむ」

プリンはいつも眠そうな学年トップの成績保持者に。

「あっは、ココアちゃァん♪」

ポトフはスポーツ万能くんに。

「ちょっとやめー！！」

ココアは料理と裁縫が得意な家庭的な女の子に。

「ぷはぁ、コーラ最高♪」

ミントは……。

――――

「え？　何？！　オレは何！？」

『もしも学校日和キャラの性別が変わったら』

「シカト？！　シカトですか！？」

”えくすちぇんじ”

――――

ミント

「蓮華」

ババババババッシーン！！

「……なんか喋った？」

なんか、危ない女王様っぽい。

プリン

「ヤー」

「ふふふ、わんわん♪」

「ぷわ……ねむねむ」

「くー」

なんか、普通に可愛い。

ポトフとココア

「ココアくぅぅぅん！！」

「うわあ？！　ぽ、ポトフ！？」

なんか、チロルとミントっぽい。

――――

「私が男だとなんかヘタレっぽいねー？」

「……それは暗にオレがヘタレだって言ってると取ってよろしいですか？」

「へ！？　ちちち、違うよミントー！！」

『もしもミントがツッコミキャラじゃなかったら』

「ほ、ほら、ミントネタが来たよー？」

”ミント一ツッコミ＝？”

――――

ミントとプリン

「ミント、今日は父の日だっ！」

「わは～、鼻眼鏡似合ってるよ、プリン」

「……照れる」

ミントとココア

「もー、ミントのバカバカバカー！！」

ボスボスボスガツーン！

「いたっ！」

「そりゃー最後のは絵馬入りだからねー」

「あ、じゃあ痛いのは当たり前だね」

「……。そだねー」

ミントとポトフ

「雪があれば、スキー出来るしスノボも出来るし雪合戦も出来るし雪だるまも作れるし雪うさぎも作れるしかまくらも作れるしかまぼこも作れるしおにぎりも作れるしお寿司も作れるし」

「わは～、雪って万能だね！」

「だろォ！？」

結論

ボケが垂れ流し状態に。

――――

「ほら、学校日和崩壊！　ミントは最重要キャラなんだよー！」

「……はっ」

（鼻で笑ったー？！）

続きましてー、……お？

次からは口答の方が早いですね。

では行きます。

『もしもチロルがSだったら』

どうしますか、ミント？

「へ！？　チロルってSだったの？！」

「え?!　も、もしもの話だよ~?」

「そっか。てことはMなんだよね?　よかった」

「……。ミントってMの人が好きだったのー?」

「?　服のサイズに好きとかあるの?」

「「……」」

「やー、クリスマスプレゼントがサイズ間違ってるのかと思ったよ~」

SとMの意味が分かっていない模様のミントでした。

『もしもルゥがもっとちっさかったら』

どうしますか、みなさん?

「え?」

「そりゃー」

「うむ」

「もち」

「「視界に入らなくなる」」

「んだとコルァァァ?!」

「わあ！？　ルゥ様？！」

既に視界に入っていないルゥでした。

『もしもミントが死んでしま

「サンドラルエクセキューション！！」

「神風！！」

「キラキラァ！！」

ちゅどおおおおおん！！

「「そんなこと、冗談でも言うな！！」」

「！　みんな……！」

……失礼しました。

では、

『もしもシャーンが死んでしまったら（笑）』

どうしますか、ルゥとジャンヌ？

「”（笑）”ってなんだあああ？！」

「シャーンが死んだらどうするパー子？」

「がっかりんこー」

「ヤッタなシャーン。まったくもってがっかりしてねぇぞ？」

「いいもんいいもん。こういう扱い慣れてるから」

体操座りしていじけてしまったシャーンでした。

『もしもコーラが飲めなくなったら』

「引きこもる」

「「ミント？！」」

『もしもマッドが大繁殖して学校に押し寄せてきたら』

「え？　何その楽園？！」

「ふむ」

「いやー」

「なんてェか」

「「キッツイ」」

『もしもミントに双子の妹がいたら』

「あー、いたらいいね」

「ミントって妹が欲しかったのー？」

「いや、オレと双子ならツッコミ手伝ってくれそうじゃん？」

「……。成程ねー」

『もしも死神が真面目になったら』

「ん？　オレ様はいつも真面目だぞ？」

「え？　そうだったの？」

「ふむ。真面目……本気であること、誠実」

「詰まり、あの意味不明な言動は本気で言ってたんだとー？」

「それはそれで問題じゃねェのか？」

『もしもミントの召喚獣が暴走したら』

「んー……暴走かあ……」

「ふむ、召喚獣は暴走するのか？」

「ううん。召喚獣にとって召喚術士の命令は絶対だから普通そんなことないんだけど……あ。あの召喚獣なら暴走するかも」

「？　それってどんな召喚獣なのー？」

「お酒を司る召喚獣”バッカス”」

（（……なんか結果が目に見えてる……））

『もしも作者が現れたら』

実は私が作者でーす。

「よし、潰そっか」

「「賛成ー」」

え？　何故に？

ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ

ごふっ……はい、では、次のお題は一気に長々と行きたいと思います。

『もしも学校日和キャラで昔話シリーズをやったら』

「わは～、いかにも作者が好きそうなお題だね」

「ふむ。だから長いのか」

”昔話で劇場日和”

――――

『白雪姫』

むかーしむかし、ある所にポトフ王様がいました。

「鏡よ鏡。この世で一番イケメンなのはだァれだ？」

ポトフ王様はこのように、飽きもせずにいっつも魔法の鏡に向かって質問をしていました。

「……えっとですね……」

ので、いい加減うんざりしてきたミント鏡は、

「森にいる白雪さんが一番イケメンでございます」

と、言いました。

「なっ？！」

それを聞いたポトフ王様はびっくり仰天。
早速りんごに毒を塗り始めました。

「って、行動はえぇ！？」

「どこのどいつだか知らねェがイケメン気取ってられるのも今のうちだぜェェェ！！」

「いやどこのどいつだか知らないのに住所分かるんですかあああい？！」

ミント鏡の突っ込みも聞かずに、ポトフ王様は黒いローブをはおり

つつ物凄い速さで森に向かってどぴゅーんと駆けてゆきました。

「ぷわ……ねむねむ」

一方その頃、ミント鏡がイケメンと言ったプリン白雪は、森の中の小さな家の中で欠伸をしていました。

「ふむ。お昼寝しよう」

コンコン

「む？」

プリン白雪がお昼寝しようとしたところ、誰かが家のドアをノックしました。

「……」

コンコン

「……」

コンコンコンコン

「……」

コンコンコンコンコンコン

「……はーい」

居留守をきめこもうとしていたプリン白雪でしたが、ノックがあまりにしつこい為、プリン白雪は眠そうな目を擦りつつお客さんに応じました。

「あっはっは、リンゴいらねェ？」

そこには、なんかチャラい感じのリンゴ売りがいました。

「いらねー」

プリン白雪は同じ調子かつ棒読みでそう言うと、ドアをぱたむと閉じました。

「ってちょっと待てェェェ？！」

『煩い。僕は眠いんだ』

「いやだからリンゴ！　リンゴ食えよ！？」

『冷えてなくて綺麗に洗ってなくて一口サイズに切ってない上に皮を剥いてないリンゴは食べない』

「こんのおぼっちゃまヤロォォォ！！」

『……でもリンゴのウサギさんは例外』

「知らねェェェ！？」

『……ぐー』

「って寝るなァァァ?!」

プリン白雪が予想外におぼっちゃまだった為、リンゴ売り、もといポトフ王様はプリン白雪を消すことが出来ませんでしたとさ。
ちゃんちゃん。

『赤ずきんちゃん』

むかーしむかし、ある所に、赤ずきんを被った女の

「オレは男だ!!」

……男の子、ミント赤ずきんがいました。

「いってきまーす」

ある日、ミント赤ずきんは森に住むおばあさんをお見舞いしに家を出ました。

「赤ずきんちゃん赤ずきんちゃん♪」

「……」

森の中を歩いていると、ポトフ狼と出会いました。

「……何さ?」

妙に面白そうなポトフ狼に妙に面白くなさそうなミント赤ずきんが用件を尋ねると、

「赤ずきんちゃんって、今日ヒマ？」

ポトフ狼は、ナンパ口調でミント赤ずきんの今日の予定を尋ねました。

「ヒマじゃないよ。今から風邪を引いたココアおばあさんのお見舞いに行くの」

ので、ミント赤ずきんはさらさらと今日の予定を答えました。

「！？　マジで？！」

「え？　ま、マジだけど」

すると、ポトフ狼は目を見開き本当かどうか確認した後、

「こ、ココアちゃァァァん！！」

風邪を引いたココアおばあさんを心配し、森の奥へとどぴゅんと駆けてゆきました。

「……。ん？　わあ！　綺麗！」

ぽかんと口を開けてその場に突っ立っていたミント赤ずきんは、綺麗な花畑を発見したので、そこで寄り道することにしました。

コンコン

「どーぞ」

バァン！！

「ココアちゃん！！」

「！？　ポト―…違、お、狼？！」

「風邪引いたって、大丈夫？！　喉痛い！？　咳出る？！　熱ある！？」

「は？　何言って……って近い近い近い近い近いよーーー！？」

「！　ココアちゃん顔真っ赤！！　ちょっと待ってて氷持ってくる！！」

「そりゃおでこで熱測られたらっていや待ってちょっと違うってばーーー？！」

と、ポトフ狼とココアおばあさんがドタバタやっている時、

「ミント、あれは？」

「ん？　あれは”ポポイ”っていって、紫の花も綺麗だけど葉っぱが毒消しになるんだよ」

「ミント物知り！」

「えへへ～♪」

ミント赤ずきんはプリン猟師と一緒にお花畑でゆっくりまったりしていましたとさ。

ちゃんちゃん。

『鶴の恩返し』

むかーしむかし、ある所に、

「い、痛いよー……って、鶴喋るんかい」

罠にかかってしまったウララ鶴がいました。

「……」

そこをたまたま通りかかったユウおじいさんは、そのウララ鶴を見て、

「ぷ。ダッサ」

と、小馬鹿にしてそのまま通過していきましたとさ。

「ダサ――?!　んだとテメェ喧嘩売ってんのかウラァ!!」

ちゃんちゃん。

「え?!　終わり!?　ちょ、恩返ししてないって言うか返す恩がないって言うかこれリアルに外れないんだけどおおお?!」

『シンデレラ』

むかーしむかし、ある所に、ウララシンデレラという女の子がいました。

ウララシンデレラは、何故か足が罠にはまっていました。

「って、引き続き罠にかかっとんのかい?!」

ある日、ウララシンデレラが家を掃除していると、そこに継母と義理の姉と兄がやって来ました。

「つー。あら、埃がこんなに。ふっ。うららんって、お掃除がとってもお上手なのね?」

「ご……ごめんなさい、わっ、ワタルお姉様……」

何故か巨大な鎌を担いでいる義理の姉は、テーブルに指を走らせ、その指についた埃をふっと吹き飛ばしながら姑のような皮肉、アイロニーでウララシンデレラを攻めました。

がっしゃん

「おっとヤッタな。仕事が増えたぞ」

「……わ……かりました、ユウ……お兄様……」

一方義理の兄は、彼女が使っていたバケツを蹴り倒し、ウララシンデレラの仕事を嬉々として増やしました。

「パーティーに言ってくるからお前は留守の間この家を徹底的に綺麗にしてろ、です」

とどめに継母はウララシンデレラにそう言い放つと、義理の姉と兄を連れてお城で開かれている舞踏会へと出かけていきました。

「って、ちょっと。なんでユウがもうすでに登場しちゃってるのよ？」

ゴシゴシ

ウララシンデレラは意味不明な文句をグチグチ言いつつ、家の中を掃除しました。

「じゃあ誰が王子様役なのよ？」

ゴシゴシ

夜になりました。

「……って言うか、魔女遅くない？」

ゴシゴシ

真夜中になりました。

ガチャ

「ただいま、です」

継母たちが帰ってきました。

「って、魔女おおおおお？！！！」

「煩い黙れ」

「オレ様が魔女ですって？　キーィ！」

「近所迷惑、です」

一方その頃、魔女はと言うと、

「……すぅ……」

銀髪のアオイ魔女は良い子だった為、九時に就寝していましたとさ。
ちゃんちゃん。

『桃太郎』

むかーしむかし、ある所に、ポトフおじいさんとココアおばあさんがいました。
ある日、ポトフおじいさんは山へ芝刈りに、ココアおばあさんは川へ洗濯に行くことになりました。

「いってきます」

「いってらっしゃー…」

ので、ポトフおじいさんは出かけ際にココアおばあさんにいってきますのちゅーをしました。

「……ココアちゃんもいってらっしゃい。気を付けてね」

「っ、ちょ……な、ななな何するのよー？！」

「？　分かんなかった？　じゃァ、もォ一回♪」

「違う違う違う違う！！」

「んな全力で否定しなくても……そんなにイヤ？」

「そ、そういう意味じゃ……じゃ、なくってー！！　どーこの世界にじーさんばーさんになってもいってきますのちゅーする万年新婚ほやほや家庭があるのよー！？」

「！？　俺、ココアちゃんと結婚したらそのつもりだったんだけど？！」

「何本気で驚いて――ってどさくさに紛れて何言ってんのよもーこのバカバカバカーーー！！」

と、万年新婚ほやほやを志しているポトフおじいさんと顔を真っ赤にしているココアおばあさんが家の前で長々といちゃこいていた為、

「えぐえぐっ、助けてー」

大きな桃の中に枕と一緒に入っていた泳げないプリン桃太郎は、ココアおばあさんに途中で拾われることなく、若干浸水してきた桃に怯えつつそのままどんぶらこーどんぶらこーと川を流れてゆきましたとさ。

ちゃんちゃん。

――――

昔話シリーズ、いかがでしたか？

「うむ」

「いやー」

「なんてェか」

「ひとつもまともな話がないよね？」

まあ、作者ですからね。

「でも、ココアちゃんとラヴラヴ出来」

「ダークネスサクリファイスー！！」

「なんで私っていっつもこんな扱いなのよ？」

「サンドバッグだからだ」

「ふあ……あれ？　終わっちゃったの？」

「はい、アオイが寝てる間に終わった、です」

「んー、何故ゆうこりんが義理の兄でオレ様が義理の姉なんだ？」

ではでは、また長くなってしまったのでまた次回に続きますね。

「てまた続くんかい？！」

「ぷわ……ねむねむ」

第１０１回　劇場日和（後書き）

そんなわけで、またまた次回に続きますー

第１０２回　格付け日和

さあ始まりました。
学校日和２、１００回記念まさかの第３弾は、びよびよ放送局を出て、セイクリッド魔法学校のグラウンドにやって参りました。

「グラウンドに来て何するのさ？」

はい、只今より、

『もしも両校合同の文化祭が開かれたら』

『もしもキャラ全員でトーナメントをしたら』

というお題のもと、学校日和２に登場した作者シリーズメインキャラたちでトーナメントを、

「トーナメントって時点で文化祭じゃねえって言うか本当にやるの？！」

やろうと思ったのですが、まあ、考えてみたら全部で１７試合もありますし、書いてみたら予想外に長くて途中で飽きましたし、読み返してみたら予想以上に詰まらないしで、それならば違う方法で一番を決めようと思いまして。

「まあ、詰まんなかったのは作者の力量のせいだろうけど……賢明な判断だね」

只今から、『一撃必殺☆一番強いのはだーれだ』大会を開催したい

と思います。

「何その間にある星！？」

星じゃありません。

”きらりーん”と読んでください。

「うわぁい、更にうざくなっちゃった？！」

ささ、プリン。

例のものを。

「うむ」

ぼわんっ

「？　何これ？　サンドバッグ？」

今から始まる『一撃必殺☆一番強いのはだーれだ』大会で使用する、一撃必殺の威力測定用サンドバッグでございます。

はい、今ちゃんと”きらりーん”と読みましたか？

「いちいち長いって」

強力な攻撃にも耐えられるよう、プリンに頑張ってもらいました。

「うむ。頑張った」

「へーえ、プリンすごいね！」

「……照れる」

ささ、では始めましょー。
あのサンドバッグに向かってドカンと一発かましましょう。
ただし、一発というルールを忘れずにー。

ウララ

「い、一発？　私の攻撃、連射するものしかないんだけど」

誰がどんな攻撃が得意だろうと、一発は一発です。

「……。しゃーないわね。じゃあ、行くわよ」

おお、ウララ選手、ポシェットからナイフを一本取り出し、

「うりゃあああああ！！」

投げたー。

ばいん

『いたっ』

はい、ウララ選手、〝いたっ〟。

「いやいや〝いたっ〟って何よ？」

痛い度合いの判定結果です。

（分かりづらっ！　めちゃくちゃ分かりづらっ！！）

ムース

「あら、次はわたくしですの？　では」

ムース選手、両手を前に出して魔力を高め、

「雄々しき水よ、今、ここに集いて怒り狂え――タイダルウエーブ！！」

大津波を産み出したー。

どっぱあああああん！！

『ちょ、マジでやめろって！！』

はいムース選手、〝ちょ、マジでやめろって！！〟。

「……。あの判定もプリンが作られたんですの？」

「ううむ。喋るメロン仕様だ」

シャーン

「一発って……召喚獣の攻撃もほとんど連続技だしな……」

ささ、さくっと行ってみましょー。

「打撃しかねえな。おりゃあ！！」

シャーン選手、箒で思い切り殴りかかったー。

どかっ！

『いたっ』

「……ですよね」

シャーン選手、”いたっ”。

「……なんか、俺が痛いみたいに聞こえるな？」

バジル

「ふぅむ。私の強力な方の技は一撃ではないから……致し方ない」

バジル選手、右手をサンドバッグに向けー、

「ロックビル！！」

その地面から巨大な岩を飛び出させたー。

ドゴーン！！

『いった！』

バジル選手、”いった！”。

「フハハ！　すごいのかすごくないのかいまいち分からないな！」

リン

「行きます、です」

リン選手、木製の杖の尖った方をサンドバッグに向けて、

「首尾一貫っ！！」

突き刺したー。

ドシュッ！！

『あいったあああ！？』

リン選手、〝あいったあああ！？〟。

「……理解に苦しむ、です」

アミュ

「にゃふ～ん♪　いっくにゃ～！　穿（うが）て！」

アミュ選手、魔力を極限まで高めー、

「サイクロン！！」

風属性最高魔法のひとつを放ったー。

ガ

『いたっ』

「――にゃれ？」

って、だから言ったじゃないですか。
一発だって。

「にゃにゃ？！　あれって連続攻撃だったのにゃ！？」

はい、アミュ選手、”いたっ”。

「にゃ～！　あんまし痛がってないにゃ～！！」

アセロラ

「やれやれ、氷魔法は一撃と言うより相手を凍らせる攻撃が主なのですが……」

アセロラ選手、サンドバッグに右手を向けて、

「アイスバーグ」

やる気なさそうなクセにどでかい氷山をサンドバッグの上に出現させたー。

ドシャアアアアン！！

『あいったあああ！？』

アセロラ選手、”あいったあああ!?”。

「……。愉快なメロンですね」

ユウ

「……。《壮麗なる龍はすべてを呑み込む》」

おおっと、ユウ選手、いきなり水龍を呼び出しー、

「!?　なんでえええええ?!」

ウララ選手にどーん。

って、ユウ選手、サンドバッグはこっちですよ。

「おお、悪いな。サンドバッグ違いだったか」

「だから私はサンドバッグじゃなあああああい!!」

「《壮麗なる龍はすべてを呑み込む》」

ドパアアアアアン!!

『あーうちっ!!』

はい、ユウ選手、”あーうちっ!!”。

「……腹立たしいな。《天空をめぐる無形の刃》」

「八つ当たりいいいいい?!」

エリア

「……私、治療専門なんだけど……」

まま、ストレス発散だと思ってやっちゃってくださいな。

「あ、そゆことなの？　じゃあ、ペリッシュオーシャン！！」

ドッパアアアアアン！！

『痛い痛い痛い痛い！！』

エリア選手、”痛い痛い痛い痛い！！”。

「なんだか、つねられた感じの痛がり方ね……？」

ポトフ

「単発ってことは、あれだな」

ポトフ選手、右手をサンドバッグに向けー、

「キラキラァ！！」

出たー。

キラキラー。

ちゅどおおおおおん！！

『あいったあああ！？』

ポトフ選手、”あいったあああ！？”。

「……分かんねェ」

チロル

「アタイの番ね！　――紫電の断罪」

チロル選手、右手を挙げてー、

「サンドラルエクセキューション！！」

放ったー。

ドガアアアアアアン！！

『痛い痛い痛い痛い！！』

チロル選手、”痛い痛い痛い痛い！！”。

「……ちょっと羨ましいかも……」

ココア

「次は私だねー。いっくよー、終焉の闇！」

ココア選手、両手を挙げて頭上に巨大な漆黒の十字架を出現させー、

「ダークネスサクリファイス！！」

サンドバッグにぶち当てたー。

ちゅどおおおおおん！！

『ちょ、マジでやめろって！！』

ココア選手、”ちょ、マジでやめろって！！”。

「この企画の方がちょ、マジでやめろってって感じだよねー」

アロエ

「行きますよ」

アロエ選手、サンドバッグに両手を向け、

「裁きの業火――ジャッジメントフレア！！」

巨大な火炎弾を放ったー。

ドッガアアアアアン！！

『ちょ、マジでやめろって！！』

アロエ選手、”ちょ、マジでやめろって！！”。

「……ココアさんに同感です」

ルゥ

「うっしゃー！　あんなサンドバッグ、オレがぶっ壊してやるぜー！！」

ルゥ選手、自身の周りでバチバチとショートを起こしはじめー、

「轟け！　ヴォルテックホープ！！」

雷属性最高魔法のひとつをサンドバッグにお見舞いしたー。

ドキャアアアアン！！

『あーうちっ！！』

ルゥ選手、”あーうちっ！！”。

「……バカにされてる気がするのはオレだけか？」

ソラ

「僕の番みたいだね。じゃあ」

ソラ選手、すっと右手を高く挙げー、

「焼き尽せ――メテオフレア！！」

炎属性最高魔法のひとつを披露したー。

ドッカアアアアン！！

「あ。壊しちゃった……」

そしてサンドバッグが壊れたー。

「む、予備あるぞ」

ぼわん

もう一個出てきたー。

ジャンヌ

「ゲヘヘ♪　ようやくウチの番のようね！！」

ジャンヌ選手、おもむろに首をぐるぐると回し始めたー。

「メルヘーンパーンチ！！」

首を回した意味なかったー。

どごおおおおおおん！！

『いたっ』

音の割には痛くなかったー。

「ゲヘヘ♪　メルヘン＝メル＝変！！」

意外に自覚してたジャンヌ選手、〝いたっ〟。

死神

「おお、オレ様か」

死神選手、メロンキャンディーを地面に立てるとー、

「あむ」

再び口に含みー、

「ひみはみひーむ」

恐らく”死神ビーム”と言ったー。

ズドオオオオオオン！！

『のおおおおおお?!』

死神選手、”のおおおおおお?!”。

「ふっふっふっ。はふはほへはま」

アオイ

「あ、僕の番だぁ」

アオイ選手、手の平に乗っていたリスさんとバイバイするとー、

「いくよ」

背負っていた鞘からすらりと銀色に輝く剣を抜きー、

「はあっ！！」

気合いとともにサンドバッグを一刀両断ー。

スパアアン！！

「あ。壊しちゃった……」

って、本当に一刀両断しちゃったー。

「あう……ご、ごめんなさいごめんなさいっ」

「む、予備あるぞ」

ぼわん

もう一個出てきたー。

「あ……よかったぁ」

プリン

「ふむ。僕の番か」

プリン選手、眠そうな目を擦った後にサンドバッグに右手を向け、

「神風！！」

来ました。
神風ー。

ビュオオオオオオオ！！

『あいったあああああ！？』

プリン選手、”あいったあああ！？”。

「……ぶう。馬鹿犬とおんなじ……」

ミント

「オレで終りだね」

ミント選手、薔薇の鞭を呼び出すと、

「花開け――ブラッドパーティー！！」

サンドバッグを締め付けると同時に鞭からはえ出た無数のトゲを突き刺したー。

バアアアアアアン！！

サンドバッグ壊れたー。

「あらー、壊しちゃった」

「ふむ、品切」

では、サンドバッグもちょうどなくなったところで結果発表です。

ソラとアオイとミント
↓サンドバッグが壊れた為測定不能

死神
↓のおおおおおお?!

プリンとポトフとリンとアセロラ
↓あいったあああ!?

ルゥとユウ
↓あーうちっ!!

ココアとアロエとムース
↓ちょ、マジでやめろって!!

チロルとエリア
↓痛い痛い痛い痛い!!

バジル
↓いった!

シャーンとジャンヌとアミュとウララ
↓いたっ

でしたー。

「いやだから激しく分かりづらいってばさ」

発表順と思っていただければよろしいかと。

「ああ、成程」

『一撃必殺☆一番強いのはだーれだ』大会、いかがでしたか？

「意味不明だったね」

「右に同じだぜェ」

「……ぶう。馬鹿犬とおんなじ……」

「まーだプリプリしてるしー」

では、これにて三回に渡ってお送りしてきた学校日和2、１００回記念をお開きにしたいと思います。

「こんな作者の気まぐれに長々とお付きあいしてくださって」

「誠にありがとォございましたァ♪」

「うむ。そしてこれからも」

「飽きない程度に学校日和2をよろしくお願いいたしまーす！」

毎度ご愛読ありがとうございます。

では、また。

第１０２回　格付け日和（後書き）

１００回記念、やっと終わりました（笑

少しでもお楽しみいただけたなら幸いでございます。

最後になりましたが、企画に参加なさってくださった読者様、楽しいお題を誠に誠にありがとうございました！！

第１０３回　双子日和

「詰み」

パチンと駒を将棋の盤に打ちながらプリンがさらりとおっしゃると、

「うにゃァァァァ！！」

ポトフは猫のような叫び声をあげながら盤の上の駒をめちゃくちゃにした。

「貴様は狼男だろう」

その叫び声を聞いて素朴な疑問を抱いたプリンに、

「もォ一回だ枕ァ！！」

ズビシィっと指さしながらポトフが挑戦状を叩き付けた。

「む……そんなに僕に負けたいのか？」

「んなわきゃねェだろ?!　こちとら勝つ気満々だぞテメェェェ！！」

呆れたような目を向けてきた彼にポトフが怒鳴り突っ込みを入れると、

「む!?　そうだったのか?!」

プリンは素で驚いた。
恐らく彼に、悪気はない。

「っ……このヤロ……人バカにしやがって……っ！」

が、当然のごとくバカにされたと受け止めたポトフは当然のごとく悔しそうな声を発した。

「む……では」

悔しそうな彼を目の前に、プリンは申し訳なさそうに、

「僕、六枚落ちする？」

と、自らハンディキャップをつけようかと提案した。
恐らく彼に、悪気はない。

「……。……お……お願いシマス……」

が、ポトフが素直にお願いしたので、

「うむ。分かった」

プリンは自分の駒を最初から六枚なくすというハンデつきで、再び彼と将棋を始めたのであった。

「ぴわわ……詰み……」

「っだァァァァァ！！」

恐らく彼に、悪気はない。

「♪」

ポトフが有利極まりない状態からあっけなくプリンに負けた頃、ミントはコーラがたくさん入った袋を抱えて上機嫌で廊下を歩いていた。

「れ？」

が、途中で柱の陰に見覚えのある人物を見付けたミントは、

「アセロラ？」

と、彼の名前を小首を傾げながら呼んでみた。

「！？」

すると、彼はびっくり仰天といった様子でバッとこちらを振り向いた。

「こんなところで何してんのさ？」

彼の様子に構うことなくミントが質問を口にすると、

「い、いえ、ちょっとした個人情報を収集していただけです」

アセロラは手に持っていた怪しげな手帳を指さしながらそう答えた。

「それってだいぶちょっとしてないよね？」

とか突っ込みながらも、アロエも同じことやってる上に趣味だからまあいっか、と何やら彼の行動を受け止めたミント。

が、恐らく、まあいっか、で済ませられることではない。

「それにしても、僕の存在に気が付いたのもそうですが、よく僕がアロエではなくアセロラだと分かりましたね？」

彼が自己完結していると、アセロラは驚いた様子でそう言った。

「あはは、双子とは言え、男の子と女の子の違いくらい誰だって分かるよ」

「いえ、ミントさんが初めてです」

「って、えええ？！」

すると、今度はミントが驚く羽目になった。

「そ、そうなの？」

「はい。こうして何度かここに来ているのですが、一度も僕だって気付かれたことはありませんよ」

「へえ……って、何度かここに来て何してんのさ？」

「いつも同じ範囲の人間を観察していたら飽きるでしょう？」

「あは……成程……」

飽きるとかそんな理由で国境を越えてきたのかこの人は、とか思ったミントは、

「あれ？　じゃあ、アロエは今あっちの学校に言ってるの？」

と、ふと思ったことを聞いてみた。

「はい。ですが、妹があちらに行くと、大抵消し炭になっているバジルさんが焼却炉から発見されるんですよね」

「はあ、生理的に受け付けないんだね」

「外見はまあいいとして、中身があれですからね」

「うんうん」

何やら今頃バテコンハイジュ校にバジルのくしゃみが木霊していそ

うな会話の途中で、

「あ。そう言えば、どうしてアロエとアセロラは別々の、しかも国違いの学校に行ってるの？」

ミントがバジルの話題をどこかに投げ捨てた。

「ああ、はい。それは、僕たちの両親が……」

「！」

するとアセロラが突然うつ向いたので、まずいことを聞いてしまったのか、とミントが気まずい心境に陥った。

「”国立は学費がお得だけど制服が同じだと区別がつかない”とのことで」

直後、アセロラは、ほどけていた靴紐を結び直しながらさらりと答えた。

「っ……さいですか……」

靴紐を縛っている彼を蹴り飛ばしたくなった気持ちをミントが無理矢理抑え込んでいると、

「まあ、僕と妹は二卵性の双子のくせに顔も背丈も似てる上に僕の声変わりと妹の二次性徴があまりかんばしくないことも手伝って」

「ロックンロール！！」

「「？」て、うわあ？！」

アセロラの言葉を掻き消すように、呪文と巨大な岩がミントに向かって飛んできた。

ドゴオオオオオオン！！

「あ、ミントさんが」

岩にぶっ飛ばされたミントに、アセロラが薄ーいリアクションを示した。

「ったた……はっ！　コーラ？！」

ガシィ！！

吹っ飛ばされて倒れていた状態から起き上がると同時に、ミントはガシィと胸ぐらを掴まれた。

「あ、よかった。コーラ無事だった―…て、あれ？」

抱えていたコーラの無事を確認した後に、只今の事態に気付くミント。

「ぱ、パセリ？」

「ミント＝ブライトてめえええ！！　ミスおサルさん寮のチロルちゃんとミスウサギさん寮のココアちゃんだけでは飽きたらずミスヘビさん寮のアロエちゃんまでも手にかける気かあああああ？！」

「わは～……なんかオレが超悪い男に聞こえる～」

怒りの形相のパセリに苦笑いを浮かべていると、

「……ああ。彼はいつだったか、泣きながら逃げるミントさんを必死に追い掛け回しながら”唇をよこせ”と叫んでいたパセリ＝ジュース……」

「なんで知ってるのとかそんなこと今はどうでもいいとしてなんかすっごい誤解招くよその発言?!」

アセロラの呟きが聞こえてきたので、ミントは透かさず突っ込んだ。

「ヒトはいつどこで誰に見られているか分かりませんからね」

アセロラはそう言って眼鏡をかけ直した。

「そんなことより、僕は男性と女性とを間違えるような失礼な方と」

後、彼は氷のように凍てついた瞳と右手をパセリに向け、

「とある人物を思い出させるような地属性魔法を使う方は許せないんですよね」

その瞳のごとく凍てつく魔法をお見舞いした。

「アイスエイジ」

パキンッ

彼の声と共に、パセリは一瞬にしてパキンと凍りついた。

どさっ

「……大丈夫ですか、ミントさん？」

「あ、う、うん。ありがとうアセロラ」

氷像と化したパセリの手から落ちたミントは、アセロラにお礼を言った後、

「あの……バジルとアセロラって友達じゃないの？」

と、冷や汗を掻きながら聞いてみた。

「はい？　……ああ」

すると、

「大親友ですよ」

アセロラは、にっこりと笑ってそう答えた。

「そ、そだよね。って言うか一緒！　男の子と女の子を間違えるヤツって許せないよね！！」

「はい。灰も残らないくらいに滅びればいいと思います」

「だよねだよね？！」

素敵な笑顔が真っ黒だった気もしたが、バジルだし、まあいっか、なノリで、ミントはアセロラと仲良く男性と女性とを間違えるような人物について語り合うのであった。

第１０４回　凍結日和

「ぴわわ……真っ白」

「わは～、オレ初めて見た～」

驚いたプリンと遠い目をしたミントの目の前には、

「……僕の勝ちですね？」

「……ありえねェ……」

眼鏡をかけ直しているアセロラと、がっくりとうなだれているポトフと、一面真っ白になったオセロのボードが。

「あーもー、俺のがひとつもないってどぉいうことだよ途中まで俺が勝ってたのにィィィ！！」

「でも、こういうので一番大切なのって結果だよね」

「うむ。結果だ」

「結果ですね」

「っだァァァァァ！！」

頭を抱えて悔しがるポトフとそれを見て笑うミントとプリンとアセロラ。

ぶおん

そんな和やかな空間に、

「？　あれ何、プリン？」

「ふむ。ワープホールだ」

ワープホールが現れた。

「兄さん！！」

と同時に、そこから飛び出してきた、半円形の手を守る役割をする大きなナックルガードがついた、炎のような大きな刃の双剣を逆手に持ったアロエが、それを思い切り振るったので、

ガキィン！！

「……おやおや、随分なご挨拶ですね？」

アセロラは同じ形の、氷のような大きな刃の双剣でそれを難無く受け止めた。

「ぴわわ、そっくり」

「分け目反対なんだなァ」

「でもやっぱり違うよね」

目の前で剣を交差させている双子ちゃんを見て、プリンとポトフと

ミントがほのぼのとした会話をしていると、

「なんなんですかあの変態?!」

「バジルさんがどうしたんですか?」

憤っているアロエにアセロラがさらりと聞き返した。

（（……変態＝バジル……））

変態という単語を即座にバジルと変換した彼に、三人は顔を若干引きつらせた。

「ハニー!!」

「「?!」」

ところ、まだ開いていたワープホールからバジルが飛び出してきたので、アロエとミントとプリンとポトフはびっくぅと驚き、

「ああ……成程」

アセロラは一人で何かを理解した。

「フハハ！　照れ屋さんだなぁハニーは♪」

「誰がハニーですかって言うか死ね変態!!」

満面の笑みを浮かべて言うバジルに、珍しく冷静さを失っているアロエが珍しく丁寧語を用いないで言い返すと、

「フハハ！　そう照れずにダーリンと呼びたまえ！」

と、バジルが言った。

「双炎連剣舞（そうえんれんけんぶ）！！」

「フハハハハハハハ！」

目にも留まらぬ速さで炎の双剣を舞うように振るいまくるアロエと、それを笑いながら避ける意外とすごいバジル。

「あわわわわ……ここ部屋の中なんだけど……」

「ふむ。ぐちゃぐちゃ」

彼らによってぐちゃぐちゃになっていく自分たちの部屋を傍観するミントとプリン。

「……さあ、乙女のピンチですよ、ポトフさん？」

「狼唱ォォォ！！」

その隣でアセロラがさらりと言うと、はっとしたポトフがバジルに高速連続蹴りをお見舞いした。

ドドドドドドドドドドドドドドドッカアアン！！

「扱い易くて助かります」

（（ポトフ使い……！！））

眼鏡をかけ直しながら言うアセロラに、ミントとプリンはそんなことを思っていた。

げしっ

「がふっ！？」

存分に蹴られまくって地に伏したバジルの背中に右足を乗せ、

「大丈夫、アロエちゃん？」

ポトフは爽やかにアロエに声をかけた。

「はい、ありがとうございます」

ピンッ

「あっは、当然のことをしたまで――って、ピン？」

目を瞑って爽やかに決めている途中で、ポトフはおかしな音に気が付いた。

「では、アロエはこれで」

そう言って、アロエがぱたむとドアを閉めてミントたちの部屋から出ていったと同時に、

「アイスウォール」

アセロラの防御魔法が発動し、
ちゅどおおおおおん！！
アロエの手榴弾が、爆発した。
「「……がは」」
バジルの目の前に落ちたそれは、彼と彼のすぐ近くにいたポトフを真っ黒焦げにした。
「ありがとうアセロラ」
「うむ。ありがとう」
「どういたしまして」
一方、アセロラが産み出した氷の壁によって、彼と彼のすぐ近くにいたミントとプリンは無傷だった。
「うわちゃ～……部屋ボロッボロ」
「ぶう……僕のベッド」
「いや部屋より俺の方心配して?!」
ボロッボロになった自分たちの部屋を見回しているミントとプリンに、ポトフは必死に自分の負傷を訴えた。

「メディケーション」

「！」

すると、いつの間にかこちらに移動していたアセロラが、ポトフの傷を魔法で回復させた。

「あ、ありがとォ……」

「いえ。僕の方こそ、妹を助けてくださってありがとうございました」

びっくりフェイスなポトフに、アセロラはふっと微笑んでお礼を言った。

「ハニー！！」

ガバアッ！！

直後、倒れていたバジルがアセロラに抱きついた。

「……」

「……」

「……」

「……」

数秒の沈黙。

「アイスエイジ」

後、瞬間凍結。

「では、今日は僕なんかと遊んでくださってありがとうございました」

べりっという効果音が似合いそうな様子でバジルを引き剥がすと、

「え？　あ、や、そんな、オレたちでよかったらまた遊びに来てよ。ね？」

「う、うむ」

「おォ、次は負けねェからな」

ミントとプリンとポトフはやわらかな表情でそう応えた。

「！　あ……ありがとう、ございます……」

返ってきた言葉に驚きつつも嬉しそうにお礼を言い、

「では皆さん、おやすみなさい。バジルさんが大変失礼しました」

ぶおん、とワープホールを産み出したアセロラは、凍りついたバジルを小脇に抱えて、バテコンハイジュへ帰っていった。

「……」

「……」

「……」

手を振った体勢のまま、再びの沈黙。

「……」

「……」

「……。寒いね」

「「ね」」

分厚い氷に覆われた部屋の中で、ここでどうおやすみしろと？　とか、吐く息を真っ白にしながら思うミントとプリンとポトフであった。

第１０５回　お昼寝日和

緑豊かな森の中、暖かな日差しが差し込む日溜まりにて、

「いい天気だねぇ」

『なんだなぁ～♪』

真ん中で綺麗に分かれた赤と緑の髪を隠すようにいつものごとく帽子を被っているミントと、彼の召喚獣、グリフォンのσ（シグマ）が、木々の間から見える青い空を見上げてそう言った。

「こんな日に森にいると、なんだか眠くなっちゃうよねぇ」

『なんだなぁ～♪』

ミントがくりっとしたライトグリーンの瞳をとろんとさせると、σがもともととろんと半開きになっていた目を更にとろんとさせた。

『！』

が、再び元の半開きに戻ったσは、黒く大きな翼をバッとひろげ、

『フェザーショット！　なんだなぁ～♪』

ズドドドドドドド！！

前方に現れた大型の魔物数体に向けて勢いよくはばたき、それはもう、羽がなくなっちゃうのではないかと思うほどの勢いで無数の羽

鉄砲をお見舞いした。

「……森は好きだけど、魔物がいるからねぇ」

『でもオイラはご主人様に呼んでもらえるから嬉しいんだなぁ～♪』

ありがとう、と、大きな黄色いクチバシを撫でながらミントが言うと、σは翼を折り畳みつつ、嬉しそうにそう言った。

「……」

それを聞いたミントは、

「そう言えば、召喚獣って召喚術師に呼ばれるまではどこで何をしてるの？」

と、ふと思ったことを質問してみた。

『家でゴロゴロしてるんだなぁ～♪』

すると、思わぬ解答が返ってきた。

「……家？」

σパパとσママを想像しつつ、たっぷりと間を置いてから聞き返すミント。

『ご主人様たちとは異空間の、オイラたち召喚獣が住む場所のことなんだなぁ～♪　ちなみに、オイラたちにパパとママはいないんだなぁ～♪』

鷹の漆黒の頭と翼をもったたくましく大きな獅子の姿に似合わず、大きな瞳を半開きにしてのんびりとした口調で家の説明をしつつ、さらりとご主人様の心を読んだσ。

「え？　そうなの？」

『オイラたちは全部で２４体で、それ以外はいないんだなぁ～♪』

「へえ、じゃあ、二人の召喚術師が同時に同じ召喚獣を呼んだらどうなるの？」

説明を聞きながら、新たな疑問を抱いたミントが小首を傾げると、

『その場合は、より好きなご主人様の方に行くんだなぁ～♪』

σは、もちろんオイラはご主人様のところに行くんだなぁ～♪　と付け足しながら彼に頭を擦り付けた。

「あは、ありがとσ」

主人になついた犬のような行動をしているσの頭を、ミントがよしよしと撫でていると、

『な！』

σが急に全身の毛を逆立てて固まった。

「！？　σが目を半開きじゃなくて全開いてる？！」

ミントが驚きポイントをやや外していると、

「ふふふ、ふさふさ」

背後から、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あ、プリン？」

「うむ。僕はプリンだ」

振り向いた彼に、プリンはこくりと頷いてみせた。

「……って、何掴んでるのさ？」

「しっぽ！」

σの尻尾を掴みながら。

『あ～や～や～！！　は～な～し～て～なんだなぁ～！！』

すると、σが気の抜けるような叫び声をあげた。

「む？」

「あは……プリン、はなしてあげて」

小首を傾げたプリンに、

「σ、尻尾が弱点で、掴まれると動けなくなっちゃうんだ」

ミントは困ったように笑いながらそう言った。

「む、そうなのか」

それを聞いたプリンが、尻尾を握っていた手をはなすと、

『……ほ』

σはほっとして毛と瞳を元の状態に戻した。

「……わー……！」

それを見て、青い瞳をキラキラに輝かせたプリンは、

ギュッ

『な！』

パッ

『ほ』

ギュッ

『な！』

パッ

『ほ』

「って遊ぶな遊ぶな」

てな具合にσで遊んでいたところ、ミントにさらりと注意された。

「ふふふ、面白い」

『……獅子肌にも鳥肌なんだなぁ～……』

それを了承した様子で彼の隣に移動したにこにこプリンと、どんより涙目になったσ。

「ごめん。お詫び」

そんなσの目の前に、プリンはぴりっとフタを開けたプリンを置きながらそう言った。

『？』

クチバシにある鼻を近付けてそのにおいをかいでみた後、

『……？』

クチバシを入れてそれを食べようとしたものの、容器が小さい上にクチバシが大きい為、食べられない。

『？　！　……？　！　！　……？』

そうして、σがプリンと悪戦苦闘している時、

「そう言えば、どうしてここに？」

「む。魔科学が終わって食堂に行ったらミントがいなかったからミントの魔力を辿ってここにきた」

ミントとプリンは大きな木の下に座ってお話ししていた。

「あれ？　もう授業終わってたの？」

「うむ。終わってたの」

ミントの問いに、同じ調子で答えるプリン。

「そうなんだ……。探してくれてありがと、プリン」

くっそう植物学ティーチャーめ放置ですか、とか思いながらミントがお礼を言うと、

「……照れる」

プリンはいつものごとく枕で顔を隠した。

「あは、……あ、確か次って、休講だよね？」

そんな彼を見て笑いつつ、ミントが思い出したように言うと、

「む？　そうなのか？」

プリンはぴこっと小首を傾げた。

「うん。ポリー先生のピノキ花粉症が酷いみたいで」

その問いに答えた後、

「てなわけで、お昼寝しよっか」

ミントはにこっと笑って提案した。

「！　うむ！」

そうして、木に寄りかかるようにお昼寝を始めたミントとプリンの前で、

『！　！　……食べられないんだなぁ～……』

σはしょんぼりと肩を落とすのであった。

第１０５回　お昼寝日和（後書き）

そう言えば今日で一周年じゃんとか思って慌てて書いたお話でした。

……？

この話のどこが一周年記念なのか？

……。

毎度ご愛読ありがとうございます！

ではまた！！（逃走

第１０６回　会話日和

どんよりとした曇り空の下、国立魔法学校と蒸気機関車の駅とを結ぶ広大な森の中を歩きながら、

「一年の時からずっと学年トップだなんてすごいよね～」

「……照れる」

コーラ片手にミントが言うと、プリンはさっと枕で顔を隠した。

「しかも今回の学年末テストも全部パーフェクト」

「……照れる」

遠い目ミントの言葉に、プリンは一旦照れた後、

「む。でもミント、植物学１００点」

枕を下ろしてそう言った。

「いやまあそうだけど……でも、じゃあ魔科学の平均点いくつでキミは１００点取ってるのさ？」

するとミントが尋ねてきたので、

「む？　３２点」

プリンはさらりと答えてみせた。

「……こっちは平均６４点でだよ？」

どんだけ魔科学取ってるみんなと差ぁつけてんだよ、とか思いながら、ミントはさらりと言い返した。

「む……で、でも、１００点は１００点だっ」

ので、プリンは少々慌ててそう言った。

「そだね。まあ学科の方は終わったことだし、今は実技だよね」

それに頷きながら、ミントは極自然に話題を切り替えた。

「う、うむ！　今回の課題は、この地図に書かれた洞窟の中で見つけた魔晶を取ってくるんだったな」

話題が元に戻って来ないうちに慌てて話に乗っかるプリン。

「えっと、魔晶って、オレたちの心臓の中心にあるっていうあれと同じ？」

「うむ。魔晶は魔力が宿った光る石のことで、その魔力のおかげで人間や魔物、極稀に他の動物たちが魔法を使うことが出来るんだ」

疑問を浮かべたミントにこくりと頷いてみせた後、

「あと、自然界にある魔晶は、その属性ごとに加工することによって、例えば光属性ならスイッチを押せば部屋の明かりがついて、水属性なら蛇口を捻れば水が出るようになるんだ」

プリンはさらさらと説明した。

「魔晶って、いろんなところで使われてるんだね～」

「うむ。ちなみに、自然に存在している魔晶は別名バースといって、これに対して人工的に作った魔晶はリバースというんだ」

「はへ～」

勉強になりました、と付け加えたミントに、

「ふふふ、どういたしまして」

と、プリンは笑顔で応えた。

「あ。そう言えば、今日はひな祭りだね」

すると、突然話が明後日の方向にすっ飛んだ。

「？　ひな祭り？」

「……。さっきまでさらさら答えてたのにこの落差って……」

何それと小首を傾げたプリンを見て、ミントがぽそりと呟くと、

「！　ひよこさんのお祭り！？」

彼は、期待に満ち溢れた青い瞳を向けてきた。

「え？　あ～……う～んと……そうじゃない？」

その目があまりにも真っ直で綺麗すぎて、否定することが出来なかったミント。

「わー……！　ミント、それどこでやってるの！？」

すると、厚意から嘘をついてしまった彼を窮地に追いやる質問が飛んできた。

「へ？！　え、えっと……それは……」

「それは！？」

プリンが目をキラキラに輝かせ、ミントが冷や汗をダラダラと高速で流している時、

「誕生日おめでとォ、ココアちゃん」

彼らから5メートルほど後ろを歩きながら、ポトフはにこっと笑って長方形の箱を差し出した。

「ほえ？　……。！　あ、ありがとー！」

自分の誕生日を忘れていたのか、ココアはしばらくの間を置いてからプレゼントを受け取った。

「……え、えっとー……」

「あっは、開けてみて？」

「！　うん！」

受け取ったプレゼントを開けていいものかどうかココアが困っていると、ポトフがそれを開けてみるよう促した。

「！」

リボンを解いてフタを開けたココアは、

「わー……！　ね、ポトフこれって……」

箱の中に入っていた首飾りを手に取って彼を見た。

「うん、お揃い♪」

ので、ポトフは自分の左耳にある十字架ピアスを指さしながらそう答えた。

「貸して？」

「？」

後、ココアからそれを手渡してもらうと、

「はい」

ポトフは彼女の首にそのネックレスを装着させた。

「わー……！　あ、ありがとうポトフー！」

「あっは、どぉいたしまして♪」

ネックレスについた小さな十字架を両手で包み、若干顔を赤くしながらお礼を言うココアと、それを笑顔で返すポトフ。

「らぶらぶしてるとこ悪いんですけど、着きましたよ～？」

「「！」」

すると、前方からミントの声が飛んできた。

「ら、らぶらぶなんかしてないもんーーー！！」

「それは悪うござんした」

「むーかーつーくー！！」

気持ちがまったくもってこもっていない謝罪にむかついたココアは、ミントの両頬をしっかと掴んで左右にびろーん。

「ここが俺たちのコースの入り口なのかァ？」

「うむ。地図によると」

そんな彼らの隣で、小首を傾げたポトフに、

「この先が”海底洞窟”」

と言って、プリンは前方に目を向けた。

ザパーン

白波が寄せては返る波打ち際の岩山に、ぽっかりと開いた大きな入り口。

その先に広がる不気味な闇の中で、彼ら四人の実技試験の課題が始まるのであった。

「いふぁいいふぁいいふぁいいふぁい！！」

「あは、なーに言ってるのか全然分かんなーい♪」

「いふぁいいふぁいいふぁあああああ？！」

やっぱり、まだ始まらなかった。

第１０７回　お約束日和

大海原に浮かぶ二つの大陸の丁度真ん中に位置するセイクリッド島には、森をはじめとする様々な自然が溢れている。
その自然のうちのひとつ、荒波叫ぶ海岸にそびえたつ岩山の入り口の先に広がる海底洞窟に先程入っていったミントとプリンとココアとポトフの四人は、

「きゃあああああ！？」

「うわあああああ？！」

洞窟に入って早々、物凄い速さで落下していた。

「んで入った瞬間こんなことになるんだァァァ？！」

「馬鹿か貴様は？　そんなこと、入る前から分かっていたことだろう」

今の状況に叫ぶポトフに、

「ここは”海底洞窟”だぞ？」

プリンはさらりとそう言った。

「あァ成程そら落ちるわ」

「ってそんな簡単に納得しないでよって言うか海底に行くんだとしてももうちょっと方法あると思うでしょ普通ーーー？！」

ポンと手を叩いたポトフにココアが叫び突っ込みをかますと、

「――はっ！？　えらい調子よく納得するとこだった！！　おい、落ちる前からこォなるって分かってたならなんとかしろよ枕！？」

はっとしたポトフが、まさにまっ逆さまに落下しているプリンに向けて叫んだ。

「テレポートはもとといる場所が固定されていないと使えないと何度言えば学習するんだ貴様は？」

すると、彼はさらりとそう言った。

「あ、そっか」

「ってだからそんな簡単に納得しないでよって言うか分かってたのに考えなしだったのプリンーーー？！」

再びポンと手を叩いたポトフに、ココアが盛大な叫び突っ込みをかました。

「ジャックと」

そんな愉快な仲間たちの会話に珍しくツッコミ役として参加せずにいたミントは左手を大きく振りかぶり、

「豆の樹！」

落下した先にあるであろう地面に向けて、左手に出現させた種を投

げつけた。

ぼわーん

「「!?」」

すると、四人は、地面に当たって物凄い勢いで急成長した巨大な豆の樹の先端の巨大な葉っぱの上に、トランポリンのごとく何度かはね返ってから着地した。

「……ふう」

「あ……あああありがとうミントー!!」

「ありがとォ、助かったぜミントォ!!」

「うむ。ありがとう」

「どういたしまして」

心の底からお礼を言ってきた友人に、額に掻いた汗を拭いながら応えるミント。

「ホントに死んじゃうかと思ったよー……」

「うむ。僕も」

「”僕も”じゃねェェェ!!」

「あは……。じゃあ、取り敢えず降りてみよっか」

元気な彼らに笑ってみせつつ、ミントは豆の樹に指示を出した。

巨大な豆の樹によって安全に海底洞窟に着地したミントは、

「わは～、真っ暗だね～」

辺りを見回しながら素直な感想を述べた。

「うむ。この辺りの海底は全体的に深いからな」

冷静なことを冷静に言いながらも、ミントのローブをしっかりと握っているプリン。

「きゃ？！」

「！　ココアちゃん！？」

珍しくココアの方からひっついてきたので驚いたポトフは、

「プリズムソード！」

彼女が怖がらないように、慌てて光の剣、プリズムソードを出現させた。

「大丈夫？」

それによって明るく照らされたココアに、ポトフが心配そうに声をかけると、

「う、うん、ありがとー。大丈夫だよー。なんかさっき急に寒気がして……」

彼女は顔を上げてそう応えた。

「――はっ」

直後、今の状況に気付いて横を向くと、

「……はっ」

その先にいた、ミントに鼻で笑われた。

「ちっ、ちちち違うもーん！！」

「はいはい分かりやした」

顔を赤くして何かを否定した彼女をミントがさらりと受け流すと、

「っもー、ミントのバカっ！」

ココアはぷりぷり怒りながら歩き出した。

カチッ

「かち？」

そしてそのままぷりぷり歩いていると、足元からおかしな音が聞こえてきた。

「……」

そっと足を上げてみる。

「……」

そのままの状態で数秒間停止。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

「……」

すると、後方から不吉な音が聞こえてきた。

「……み、みんなー？」

ので、ギギギと三人に顔を向け、

「ごめーーーーん！！」

「ごめんで済むかあああああ？！」

「わー、おっきい」

「って言うとる場合かァァァ？！」

と謝ると、ゴロゴロと転がってきた大きな岩から逃げる為、彼らと共に死ぬ気で走り出した。

「だってまさかこんなベタな罠があるはと思わなかったんだもーーーん！！」

「確かにベタな罠だけどそれに引っ掛かるココアもベタだよねええええ！？」

「む。前方に分かれ道」

「これまたベタですなァァァ？！」

ベタな展開に会話しながら必死こいて逃げていると、四人はこれまたベタな展開に遭遇した。

「え？　え！？　え？！　どうするのどうするの右？　左？　右ーーー！？」

「うああ……この展開からするとどっちかはあの岩に引き続き追い掛けられちゃうんだよね？！」

「ベタベタだなオイィィィ！？」

「ふむ。そうなのか」

そうこうしているうちに右か左かの決断の時が訪れた四人は、

「あー」

「もう」

「むう」

「おし」

と、半ばヤケクソに意を決し、

「「右!!」」

「「左!!」」

ベタに二手に分かれてしまったのであった。

第１０８回　二人組日和

深い深い海の底、自然の岩で出来た海底洞窟にて、

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

「うわあああいオレの選択大ハズレえええ！！」

「納得いかねェェェ！！」

左の道を選んでしまったミントとポトフは、迫り来る巨大な岩から必死こいて逃げていた。

「ああもうなんでオレってこう不幸体質ううう？！」

「なんでこの俺じゃなくてしかもよりによって枕と一緒なんだココアちゃァァァん！！」

「あ、そっち！？　そっちに納得いってなかったんすかあああ？！」

「ココアちゃんと俺は運命の赤い糸で結ばれてる筈なのにィィィ！！」

「わぁおとってもメルヘンちっくううう！？」

「は？！　そっか俺ミントとも赤い糸が」

「はさみプリィィィィズ！！」

「そんなヒドォォォォォイ！！」

なんと言うか、本当に必死で逃げているのかどうなのか怪しい二人であった。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

「?！　ほらポトフのせいでスピードアップしちゃったじゃんかああ！？」

「えええ俺何もしてないじゃんかァァァ？！」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

「「って更に加速しちゃいましたああああ？！」」

「ぴわわ!?　まっくまっく!」

辺りを照らしていた光がフッと消えて真っ暗になった為、プリンは思わず立ち止まった。

「”まっくまっく”って……”真っ暗”って普通に言いなよ可愛いなもー……ダークブレス」

そんな彼と同じ道を選んだココアは、小さく息を吐きながら魔法を唱えた。

「……む?　まっくまっくでも見える」

「闇の加護をつけたんだよー。だからまっくまっくでも見えるのー」

不思議そうに小首を傾げたプリンに、ココアはさらりと説明した後、

「んー、ミントとポトフと岩はあっちに行っちゃったみたいだねー?」

と言いながら、道の向こうに目を向けた。

「ふむ。そのようだな」

目が利くようになって落ち着いたのか、プリンはこくりと頷いた。

「……。ココア、さっき本当に寒気を感じた？」

ゴロゴロという音がだんだんと小さくなっていくのを聞きながら、プリンは道を見つめたまま質問した。

「なっ！？　あ、当たり前じゃーん！　何！？　プリンまで私がかわいこぶって故意にポトフに抱きつい」

「ふむ。では、敵の狙いは間違いなくココアだな」

必要な答えが聞けたので、怒り出しそうなココアの発言を平気でぶった切ったプリン。

「とでも……って、え？」

彼の言葉に、ココアが疑問符を浮かべると、

「僕もミントも馬鹿犬も気付かないほどの敵の気配をココアだけが感じ取ったと言うことは、敵の狙いがココアだけだということだ」

プリンはさらりとそう言った。

「え？　で、でも、岩はこっちじゃなくてあっちに行っちゃったんだよー？」

私が狙いならこっちに来るでしょー？　とココアが更に質問すると、

「恐らく殺すことが狙いではないのだろう。その狙いがココアだけならば、他は邪魔だということだ」

プリンはふわりと静かに魔力を高め始めた。

「で、でも、邪魔って言ったって、プリンたちみたいに私だってどっちの道に行くかとっさに決めたことだし、さっきの罠だけでプリンたちを消そうとするのは効率悪すぎないー？　しかも現にプリンが私といるじゃん……て、え？　プリンー？」

重ねて質問をしようとしたところで、ココアは彼が魔力を高めていることに気が付いた。

「あの岩からは魔力を感じた。詰まり、あの岩を操っている奴がいる。だからあれは、ココアと反対方向に進んでいった」

プリンはさらさらと質問に答えた後、

「もちろん、あの罠で消せなかった邪魔は別の方法で消しに来る――神風！！」

振り向きざまに最大魔法をお見舞いした。

「！？　魔物がいっぱいー？！」

それに少し遅れて振り向いたココアのその先には魔物がずらり。

「うむ。しかも全部闇属性だ」

その魔物たちにざっと目を通したプリンが言うと、

「ええ？！　ってことは、私の魔法あんまり効かないじゃーん！？」

闇魔法を放とうとしていたココアの動きが止まった。

「旋風！　……ふむ。ここは闇属性の魔物の巣窟なのか」

そんな彼女に、迫ってきた魔物を吹き飛ばしたプリンは、だからまっくまっくなのか、とか思いながら、

「どうやらあいつらに気に入られたようだな、ココア？」

ふっと笑ってそう言った。

「いやまったくもって嬉しくないですよーーー？！」

「ふふふ、ではココアがくっついていた馬鹿犬はもっと酷い目に遭うかもな」

「！？　なんか黒いよプリンー？！」

「ぴわ！？　でもそしたらミントが！！」

「何その扱いの違いー？！　って、カオスシールドー！！」

そんなことを言いながら魔物と戦う、こちらもこちらで緊張感というものが感じられない二人組であった。

「ぴわわ……ミントー！」

「ミントの心配はいーから戦いなさいよーーー？！」

第１０９回　未了日和

「疾風！」

「ダークネスサクリファイスー！！」

ちゅどおおおおおん！！

真っ暗な洞窟の中で、熊のような、あるいは狼のような、更にはコウモリのような、はたまたよく分からないような姿形をした魔物たちと、プリンとココアは必死で戦っていた。

とは言っても、魔物に狙われているのはプリンのみ。

「っもー！　何体いるのよー！？　ダークネスサクリファイスー！！」

ドカアアアアアン！！

彼に襲いかかる魔物に最大魔法をお見舞いするも、同じ属性な為あまりダメージを与えられていない上に次々とやって来る魔物たちにイライラするココア。

「！　……ふむ」

そんななか、新たな気配を感じ取ったプリンは、

「囲まれたな」

後ろを振り向きもせずにそう言った。

「?!　うそ――」

聞き捨てならない言葉に、ココアは辺りを見回した。

「えええ!?　ずるいよこんなの勝てっこないじゃないーーー?!」

後、自分たちをぐるりと囲んだ魔物たちに向けて泣きそうになりながらも思い切り叫ぶと、

ふわっ

「……そう思うか?」

そんなココアを、プリンはふわりと抱き寄せた。

「え――?」

「――巻き起これ――台風!!」

次の瞬間、二人を中心に暴風が巻き起こった。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

「は……は……、っ！！」

自分たちをしつこく追いまわしている巨大な岩から逃げる為、ポトフは息を切らしながら必死で走っていた。

「ごめんっ！！　本当に人並み程度の足と体力でホントごめんっ！！」

プリズムソードを持ったミントを背負いながら。

「あっは……ミントだってはえェじゃねェか？　それに」

心の底から申し訳なさそうな彼に、

「ミントの魔法のおかげであの岩もだいぶ遅くなったしな」

ポトフは足を休めることなくそう言った。

「でも、オレの”防風林（ウッドウォール）”じゃ少ししかあの岩のスピードが落ちな――」

こんな状況でも自分を褒めてくれるポトフに対して、あまり力になれていないことを申し訳なく思っている途中で、

「――！　そっか！　そうだよオレのバカ！！」

はっとしたミントは、バッと岩を振り向いた。

「ドレインフラワー！！」

そして、岩に左手を向けて魔法を唱えた。

めこっ！！！！

「？！」

直後、何やら不思議な音がしたので、ポトフが思わず振り向くと、

「……れ？　マッド？」

めこっと根っこに締め付けられて停止した巨大な岩の上に、大きな口が咲いていた。

「そうだよあれは岩なんだから栄養があるんだからこれがあったじゃんもー本当オレのバカ」

そんな彼の背中で盛大な溜め息をついたミントは、

「本当にごめんね、ポトフ？」

ポトフに降ろしてもらいながら、本気で彼に謝った。

「いやミントのおかげで助かったんだぜ？　ホントにありがとな、

ミント」

すると、ポトフはにこっと笑ってそう言った。

「うっ、よく出来た子……！！」

口を左手で押さえて奥様のごとく感動するミント。

「あっは♪　あ。なァ、ミント、これ砕けるかァ？」

彼の反応に笑顔を見せつつ小首を傾げながらポトフが言うと、

「岩を？　うん分かった。じゃあ、もっと吸っていいよ」

『ジェラア！！』

ミントはマッドプラントに向けてそう言った。

めこめこめこめこ！！！！！

バキバキバキバキ！！！！！

ぐんぐん成長するマッドプラントと、それに締め付けられバキバキ砕け散る岩。

「……」

それを見ながら、”栄養あるんだからこれがあったじゃん”というミントの言葉を思い出し、あれヒトでも出来るんだァー、と、ポトフは顔色を悪くした。

コーン！

「？」

「！」

が、その途中で、何か固いものが地面に当たってはね返った音が聞こえてきたので、ポトフは顔色を正常に戻した。

「何これ？」

「それが魔晶だぜ、ミント？」

疑問符を浮かべながらそれを拾ったミントに、ポトフは、さっき根っこの隙間から見えたんだと説明した。

「！　じゃあ、これで課題終了！？」

「おォ、ココアちゃんと、ついでに枕にも知らせに行こォぜ？」

ぱあっと顔を明るくしたミントに、ポトフはにこっと笑って言葉を返した後、

「……と、わりィ。動けねェや」

どしゃっとその場に座り込んだ。

「！　ううん、謝らなくていいよ。ポトフが疲れたのってほとんどオレのせいだし……あ！　ちょっと待ってて！」

そんな彼に自分のローブを布団代わりにかけた後、

「はいこれ！　美味しいよ？」

ててと駆けていったミントは、戻ってくると同時にポトフに紫色の実を数個差し出した。

「！　ホントだ！」

お礼を言ってぱくっと食べてみると、驚いたようにポトフが言った。

「でしょ！？」

「おお！　ミント、これ何の実なんだァ！？」

よかった、と笑顔になった彼にポトフが尋ねると、

「マッド！」

眩しい笑顔のまま、彼はそう答えた。

「……」

「……？」

「……」

「……」

「……。マッド？」

「マッド」

たっぷりと間を置いた聞き返しに、こくりと頷いてみせるミント。

「へ、へ～ェ、マッドって実ィつけるんだァ……？」

「うん！　いっぱい栄養を吸収すると、ぽんって生るんだよ！」

複雑な表情になったポトフと眩しい笑顔のミントが地面に座ってそんな会話をしていると、

ぶわん！！

「「――？！」」

彼らの足元に、魔法陣が現れた。

凄まじい風が吹き荒れるなか、

「……あ……あああ、あのー、ぷ、プリンさん？」

「？　む？」

プリンと彼の枕を持っていない方の手の間、詰まり、彼に片腕で抱き締められているかたちになっているココアが口を開いた。

「あ、あの……な、何と言いますか、その、こ、こういったことはムース限定でお願いしたいなーなんて私は思うわけでしていや別にそーゆーつもりじゃないのは分かってるんですけどなんだかこの状況って激しく誤解を生みそうなんですけどって言いますか何やら顔が熱いと言いますかあのそのえーとー……」

友達と言えどもバリバリのイケメンボーイに抱き締められている為、顔を赤くしたココアが何やらごにょごにょ言いながら彼から離れようとした。

「め」

ガシッ

「ひゃい？！」

め、と注意されながらガシッと動きを止められ、結果的に更にくっつくことになってしまったココアが顔を真っ赤にしていると、

「ここは僕の魔法の台風の目。少しでも外に出ると消し飛ぶぞ？」

プリンはさらりとそう言った。

「は、はい――はい？！」

真っ赤な顔が、真っ青に変わる瞬間だった。

ビュオオオオ……

「む。終わった」

台風が止むと、ココアの格闘も知らずに、プリンは彼女をパッと放して辺りを見回した。

「うむ。どうやら片付けられたようだな」

「……」

まるで何事もなかったかのように平常通り冷静な彼を張り倒してやりたいとか思いながらも、あれだけの数の魔物を片付けてくれた彼にはそんなこと出来ない、と心の内で新たな格闘を始めたココア。

「ぷう……ギリギリ大丈夫だな」

そんな彼女の気持ちなどまったく気付いていないプリンがぷうと一息つくと、

ぶわん！！

「「――！？」」

彼の足元にも、ミントとポトフと同様の魔法陣が現れた。

第１１０回　帰還日和

足元に突然現れた、紫色に光る複雑な模様が描かれた魔法陣を見て、

「ま、魔法陣！？　ちょ、プリン大丈夫――？！」

その上に立つプリンに、ココアは慌てて声をかけた。

「ぷわ……ねむねむ……」

「って、いやいくらなんでも大丈夫すぎるでしょそれはー？！」

すると彼が呑気に欠伸をしたので、彼女は思わず突っ込んだ。

「ぷゆ……昨日、遅くまで起きてたから……」

「？　遅くまでってー？」

「九時三分」

「いやそれその歳で考えたら充分早いよー？！」

「いつも九時なのに」

「うっわ超よい子ー？！　って、いつもより三分遅いだけで夜更かししたと思ってるのー！？　って言うかむしろ何が原因で三分遅れたのー？！」

「……ぐー」

「私のツッコミ聞いてないでしょあんたーーー?!」

彼女なりに結構頑張った突っ込みも虚しく、立ったまま眠ってしまったプリン。

「……結局なんなのよこの魔法陣の効果はー?」

そんな彼を見ながら疲れたように肩を落とすココア。

ぶわん!!

「!」

すると、プリンの隣に、彼と同じ魔法陣が二つと、

「すかー」

「くぅ」

その上に座って眠っているポトフとミントが現れた。

「ポトフ!!　ミントもー!?」

あの岩に潰されてお煎餅になって現れるよりは遥かにましなものの、二人もまた眠っていたので驚いたココアは、

「……あ、もしかすると、この魔法陣に催眠効果がー?」

ふと思い付いたそれっぽいことを口にした。

『その通りだぜベイベ☆』

すると、彼女の後ろからそれを肯定する声が聞こえてきた。

「……」

うわウザイ。

と、一言聞いただけで声の主の人格を判断したココアは、絶対に振り向かないと心に誓った。

『ワッツ？　どうしたんだいマドマゼール？　ユーのそのビューティフォーなフェイスをミーに見せておくれよ？』

ココアの直感は正しかったようで。

「ポトフー、ミントー、プリンー、おーきてー」

シカトシカト。

ココアは後ろにいるであろうウザイ奴をガン無視して眠っている彼らを起こそうと試みた。

『はっはーん、さては照れてるんだなシャイなプリティガール？』

それでも奴は傷付かない。

「ねー起きてー起きてよ三人ともー」

無視無視。

意地でも振り向いてやるものか。

『ハハハ、無駄だよプリティガール。ユーのナイト様たちは、ミーのマジックにかかってドリームの中、さ☆』

チロルより度の強い横文字の混じり具合いな上に、だいぶウザイ。

「ねーねー、もー帰ろうよー」

本当にお願いします、という感じでポトフを揺らすココア。

『……あー、ごほん。お困りのようだねプリティガール？　ユーが望むなら、そのマジックを解いてあげようか？』

度重なる無視で流石に傷付いたのか、別の方法で必死に彼女を振り向かせようと試みた。

「ホン――」

それを聞いたココアが振り向くと同時に、

「――？！」

彼女はいきなり口を塞がれた。

『……ユーがミーのお嫁さんになってくれるなら、ね？』

彼女の口から自分の口を離すと、敵は不敵に笑ってそう言った。

「っダークネスサクリファイスー！！」

突然の出来事に乙女らしく顔を赤くするどころか顔を真っ青にしたココアは、そいつに向けて最大魔法を放った。
何故なら、たった今自分の唇を奪った奴が、

『ハハハ、そう照れ』

「ダークネスサクリファイスダークネスサクリファイスダークネスサクリファイスー！！」

『るぐほわっと！？』

「死ねカタツムリ！！　ダークネスサクリファイスー！！」

ちゅどおおおおおん！！

――巨大カタツムリだったから。

「はー……はー……うー、汚い気持ち悪い最低最悪有り得ないー！！」

最大魔法五連発をお見舞いした後、涙目になりながら必死で口を拭うココア。

『ハハハ』

「！」

が、しかし、

『残念。可哀想だけど、この程度の闇魔法は、ミーには利かないよ』

爆煙の向こう側から、敵の声が聞こえてきた。

『何せミーは、この洞窟のプリンスだからね！！』

えっへん。

「っどこの世界にそんなカッコ悪い王子がいるのよー！！　ダークネスサクリファイスー！！」

いちいちウザイ敵に再び闇の十字架を振り下ろす。

ちゅどおおおおおん！！

『ハハ、だから効かないって』

それに吹っ飛ばされたと思いきや、カタツムリのくせにケロリと起き上がった敵は、

『さあ、どうする？　ユーの一番強いマジックはミーには通用しない。詰まり、ユーはミーに勝てない』

ニヤリと笑っているような声でこちらに向かって近付いてきた。

『そしてユーのナイト様たちはミーのマジックでドリームの中で、ユーを助けてくれはしない』

ずるりずるりとゆっくりと。

『それに、例え起きたとしても、ミーの手下とトラップのせいでもう体力も魔力も残ってないだろうね』

目と目の間に乗っている、黒と金色の王冠を光らせながら。

『ハハハ、どうやらユーはミーのお嫁さんになるしか』

「ひとつ、自分は何もしてないのに偉そーなヤツ。ふたつ、勝手に決めつけるヤツ。みっつ、相手のことを考えないヤツ。更にその上カタツムリ」

『――？』

前進の途中で突然ココアが口を開いたので、敵は疑問符を浮かべて停止した。

「おめでとー。パーフェクトで大っ嫌いだよ」

そんな彼に向けてそう言うと、ココアは両手をそれに向けた。

バチィ！！

『――！？』

それと同時に、地面に刺さっていた六つの闇の十字架から黒い雷のようなものが発せられ、それが繋がって大きな円と二つの三角形が上下に重なって出来た星が描かれたひとつの魔法陣が完成し、

「闇の鉄槌――ブラッディクラーシュ！！」

彼女の声に応えるように、ちょうど中央にいる敵に鉄槌を下す漆黒の雷が、魔法陣全体から放たれた。

バリバリゴロズパンドカンズキャアアアアアン！！

洞窟じゅうを震わせるような轟音とともに黒く輝く雷は、プリンスカタツムリを存分に穿ち貫き焼き付くして消し去った。

「女の子だからって、嘗めないでよねー」

ドカアアアアアン！！

ついでに、魔法陣から上に向かって闇の雷が放たれたので、洞窟の天井をぶち抜いた。

「……って」

洞窟の天井を、

「……」

ぶち抜いた？

「プリンーーー！！」

スッパアアアアン！！

「ぴぐわ？！」

渾身のビンタによって強制的にお目覚めになった、魔法陣が消えて

もまだ眠っていたプリンの胸ぐらをガシッと掴むと、

「さっき”ギリギリ大丈夫”って言ってたでしょだから私の魔法が消える前に早くテレポートーーー！！」

前後にがっくんがっくんさせながら、ココアは彼に向かって必死の形相でそう言った。

「ぴっ、ぴわ、わ、だっ、だから、て、テレポートはもといる場所が」

「おーっと、そーでしたー！！」

「ぷゆっ」

後、ぱっと手を放されドサッと地面に倒れたプリンは、

「……うむ。テレポート」

ミントとポトフとココアと自分の位置を確認すると、テレポートを発動させた。

ドバアアアアアア！！

直後、ココアの魔法によってぶち抜かれた天井から大量の海水が押し寄せ、辺り一面を呑み込んだ。

しゅぱん

「っあー、死ぬかと、ホントに死んじゃうかと！！」

「……ぴゆ……痛い」

海底洞窟の入り口に戻ってきたココアがバクバク煩い心臓を押さえながら叫んで、プリンが彼女に思いっ切り打たれた頬を押さえながら呟くと、

「くァ……れ？　外？」

「ふあ……あれ？　オレいつの間に寝てたんだろ？」

彼らの隣で、ポトフとミントが目を覚ました。

「っもー、バカバカー！　三人揃ってアホ面全開で寝てる間にヒドイ目に遭ったんだからねー！？」

それと同時に、ココアに怒られた。

「「は、はいゴメンなさい！？」」

「……僕、ぶたれた」

ので、わけも分からず謝るミントとポトフと、ぶうと膨れて文句を言うプリン。

「はっ？！　しかも課題どーしてくれるのよー！？」

そんな彼らに、課題のことを思い出して理不尽にキレるココア。

「あ、魔晶ならここにあるよ？」

すると、ミントがズボンのポケットから黒く光る魔晶を引っ張り出した。

「それを早く言いなさいよー！！」

スッパアアアアン！！

「ぐわは？！」

それを引ったくると同時に何故か彼にも平手打ちをお見舞いしたココアは、ズカズカと学校に向かって歩き出した。

「……あれ？　なんでオレ今ぶたれたの？」

「ぶう……僕もぶたれた」

「なんか、機嫌悪いみたいだなァ……？」

そんな彼女の後を静かについていく三人。

カチッ

「かち？」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

「……」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

「ごめーーーーん！！」

「ごめんで済むかあああああ！？」

「ぷわ……ねむねむ……」

「って寝とる場合かァァァ？！」

課題が終わったばかりなのに、随分と元気な四人であった。

第１１０回　帰還日和（後書き）

ココアの活躍！　的なものが書きたかったのですが、……活躍……出来てましたでしょうか（不安

第１１１回　ウフフ日和

学年末テストも終わって春休み。
視界に入ると取り敢えず飛び付いてくる金髪ガールと正論で突っ込む割には助けてくれない間伸び口調ガールと仲がいいくせに仲が悪そうな双子ボーイズとお別れしたクリスマスボーイ、ミントは、王都シャイアにある庭付き一戸建ての赤い屋根の家に荷物を引きながらやって来た。

「ただいまー」

溜め息もつき飽きたのか、至って普通に帰宅時の挨拶を言いながらガチャリとドアを開けると、

「あ！　おかえりなさいませ、ミントさん！」

可愛らしいカエルがどでかくプリントされた緑色のエプロンをつけたシルクハットボーイ、フランがパタパタやって来て、メイドさんのごとく出迎えた。

「……。随分とかわゆいエプロンだね、フラン？」

バッチーン☆　とウインクしているカエルさんを見ながら言うミント。

「あ、え、ええと、これは決して僕の趣味ではなくてですね？　先日、マロ様と夢魔様がわざわざ僕の為に買ってきてくださったものでして……」

若干顔を赤くして、さりげなくカエルさんを手で隠しながら説明するフラン。

（フランって、いいひとなんだね）

とか、恥を覚悟の上でそのエプロンを身につけた勇者を見て思うミント。

「ほ、ほら！　このカエルさんの下側半円形の口がポケットになっていてとても実用的――」

「フラン、もう頑張らなくていいよ？」

「――うっ……ありがとうございますミントさん……っ」

必死にカエルさんエプロンのいいところを探している彼にミントが言うと、フランは口を右手で押さえて感謝した。

「ところで、エプロンつけて何してたの？　あと他の連中は？」

そんな彼の隣に移動して背中を優しく叩きながら、ミントがふと思ったことをそのまま口にすると、

「あ、はい。マロ様と夢魔様はジャンヌ様とご一緒にお出掛けになられていて、シャーンさんはお城でお仕事をなさっています。そして僕はミントさんが今日のお昼にお戻りになるとシャーンさんから聞いたので、以前ミントさんに美味しいとおっしゃっていただきました特製ハンバーグを作っていました」

フランはつらつらと質問に答えた。

「！　わ！　あのハンバーグ！？」

「はい、あのハンバーグです」

ぱあっと顔を明るくしたミントに、フランはにこりと笑って彼をテーブルへとご案内した。

「フランが作るものってなんでも美味しいけど、あのハンバーグは特に美味しいよね～！」

「ありがとうございます」

「ね、どうやって作ってるの？　材料に秘密があるとか？」

そちらに向かいながらミントが問うと、

「はい。作り方は至って普通ですが、材料には秘密がありますよ」

にこやかに答えるフラン。

「？　秘密って？」

席につき、ナイフとフォークを手に取りながら尋ねるミント。

「ウフフ、知らないほうがいいですよ？」

するとフランは、それはそれは素敵な笑顔でそう言った。

「……え？」

「ウフフ」

そんなに素敵な笑顔を見せられたら食べにくくなるんだけど、とか思いながら固まっている途中で、

「あれ？　フラン、手袋に青い液体が」

ミントは、彼が手につけているぴっちりとした白い手袋が汚れていることに気が付いた。

「はい？　ああ……ただの返り血です。お気になさらず」

すると、フランはさらりとそう言った。

「返り血……」

返り血って時点で”ただの”じゃないって言うか今そんなことを言われたら目の前にある肉はまさか……？　とか、様々な思考をめぐらせているミントをよそに、

「ウフフフフフフフ」

フランはただただお上品に笑っていた。

青い返り血が気になってハンバーグの味を楽しむどころではなかったものの、取り敢えず昼食を終えたミントとフランは、ミントの部屋に移動した。

「あ、ねえ、フランってまだ弟子入りしてるの？」

「はい！　ジャンヌ様は、こんな僕にメルヘンの極意を教えてくださいますからね！　掃除しろとか炊事しろとか洗濯しろとか肩揉みしろとか風呂沸かせとか溶けろとか！」

ベッドに座ったミントの質問に、椅子に座ったフランはキリッと答えた。

「……」

（いいように使われてるなぁ……）

そんな真っ直ぐな彼から目を逸らして窓の外を見るミント。

なんかもう、つらくて。

「そのおかげで僕もマロ様も夢魔様も、ちょっとですけど、溶解出来るようになったんですよ」

心を痛めている彼に気付くことなく、フランは嬉しそうに報告した。

「へ……へえ、よかったね！」

ちょっと?!　ちょっと溶けちゃったの!?　って言うかむぅちゃんも溶けちゃったの?!　とか心のうちで三連突っ込みをかましながら上っ面だけ同調してみせたミントは、

「そう言えば、どうしてマロ〝様〟？」

彼の言い回しに小首を傾げた。

「あ、はい。マロ様は、僕が産まれた世界では第１０ステージ――最後のボスキャラ、詰まり、魔王様なんです」

「?!　魔王!?　マロが?!」

あのちんちくりんピエロが!?　とか、非常に失礼なことを思いながら驚くミント。

「はい。ちなみにアオイさんとリンさんとユウさんとウララさんは勇者様ご一行で、ワタルさんは第９ステージのボスで、僕は第８ステージのボスをやらせていただいてました」

「は、はへ～」

フランの説明を聞き、なんなんだそのロープレ的な世界は、とか思うミント。

「あれ？　じゃあ、どうしてむぅちゃんに〝様〟？」

「はい。それは夢魔様がマロ様の一番のご友人、というのもありますが」

ミントの問いに、フランはにこりと笑って、

「ミントさんは、裏ボス、というものをご存知ですか？」

と、質問で返した。

「え？　……あ、えーと、確か、一般的にストーリーにはほとんど関してないけどラスボスよりも強い……って」

その質問に答えた直後に、

「ウフフ、よくご存知でいらっしゃる」

「……え？　まさか？」

ミントは質問の意味にハッとした。

「ウフフ、さて、どうでしょう？」

「え？　冗談？　それとも本当なの？」

「ウフフフフフフフ」

「いやだからその笑いはなんなのさあああ！？」

丸くて小さくて耳が長くて足が短いつぶらな瞳が特徴であるマスコット的なむぅむぅ鳴くあの魔物は、はたして何者なのか。

答えは、フランとマロと、むぅちゃんのみぞ知る。

「フッフッフッ。オレ様も知ってるぞ」

「ってどっから出てきたのさワタル？！」

第１１２回　計画日和

豪華絢爛なアラモード邸の一室で、天蓋つきの広々としたベッドから枕を抱えたまま上体を起こした彼、

「？　日付？」

寝惚け眼のプリンは、寝癖が立ち放題の長い水色の髪を気にも留めずに、疑問符を浮かべながら小首を傾げた。

「いやそれデートだから、って、あれ？　変わんないや」

それに突っ込みを入れようとしたものの、珍しく失敗してしまったミントが、

「そっちのデートじゃなくて、違う方のデート……って、わけ分かんないね。んー、なんて言えばいい、ポトフ？」

「まァ、率直に言うと、明日は一日ムースちゃんとらぶらぶするってことだな。ほら、チケット」

どう説明すればいいのか助けを求めると、ポトフはさらりとそう言って、寝起きプリンに一枚のチケットを差し出した。

「……わんだー……ぱーく？　ぷわ……どうして？」

ワンダーパークという名の遊園地のチケットを受け取った後、むにむにと眠たそうに言うプリンに、

「どうして？　って、帰りの汽車の中で言われただろォ？」

「”本当に一回もデートしたことないの？！”ってココアとチロルに。そしたらキミが頷いたから”じゃあホワイトデーは二人の初デートで決まり！”って話になって」

「そしたらコックンコックン頷いてたじゃねェか？」

ミントとポトフが呆れたように小さく息を吐いた後にさらりと理由を説明した。

「……？」

そんな話したっけ？　的な表情のプリン。

「……。まさか」

「プリン……」

「「……寝てた？」」

いやーな予感がしたので恐る恐るポトフとミントが尋ねると、

「うむ。恐らく」

プリンはこっくり頷いた。

彼氏側が幸先の悪すぎるスタートを切っている頃、

「あ、あの……で、デートというものは、どのような格好で行けばよろしいのでしょうか……？」

海の近くの豪邸の一室で、ムースがおずおずと質問した。

「そりゃー」

「オフコース！」

すると、ココアとチロルは互いに顔を見合わせて頷いた後、

「可愛く！」

「出す！！」

同時に別のことを自信たっぷりに答えた。

「……？　”だすいく”……？」

悲しいことに、思い切りタブって聞き取ってしまったムース。

「……。出す、って……何を出すのよー？」

疑問符を浮かべたムースをよそに、ココアがチロルに尋ねると、

「出せるところは出す！　これってコモンセンス～みたいな～！！」

彼女は自信たっぷりにそう答えた。

「そしてそして～、彼をその気にさせたらこっちのウィンっ♪」

「その木……どの木でしょうか？」

「あーあったま痛い……」

何やら危険なことを言っているチロルと、きょろきょろと部屋に置いてある観葉植物を見回すボケボケなムースに頭を抱えるココア。

「……まー兎に角ー、自分なりにオシャレしていけばいいと思うよー？」

チロルの危険な口を押さえながらココアが言うと、

「！　分かりましたわ！」

ムースはぱあっと顔を明るくして、少しここでお待ちになって、と言い残して部屋から出ていった。

「……はー、何？　ミントとデートする時はいっつも露出狂なわけー？」

立派な扉が閉じると同時に口を解放したココアが尋ねると、

「と～ぉぜんっ！」

えへんと胸を張って答えるチロル。

「成程ー。となると、ミントはだいぶ強敵と言うかかなり鈍いと言うかむしろよく平気で一緒に歩いてられると言うか……」

顔もスタイルも抜群な彼女をしげしげと眺めながらぼそぼそ呟くココア。

「ココアは出さないの？」

そんな彼女の視線を気にも留めずに、チロルが質問を返すと、

「ふえ？！　えー……えー……っとー……ふ、普通だよ、普通ー！」

矛先が自分に向かうとは思ってもみなかったのか、びっくりフェイスでココアが答えた。

「フツー？」

「う、うん。普通ー」

「ホントに～？」

「ほ、ホントだよー」

じーっと見つめてくる彼女に、冷や汗を掻きながらココアが言うと、

「ふぅん。今のアタイとおんなじような格好なわけね？　詰まんな～い」

「う、うん――って、はいい？！」

とチロルが言ったので、彼女は思わず聞き返した。

「どうしたの？」

「い、いやいや、だから私はそんなに出さないってばー！」

小首を傾げた相手に慌ててココアが訴えると、

「？　何言ってるの？　これだけしか出してないじゃない？」

チロルは更に首を傾げた。

「え？　ええ？！　えええー！？　じゃ、じゃー、デートの時はそれ以上に露出してるわけー？！」

「へ？！　も、もしかしてココアってば、これっぽっちも露出しないわけ！？」

「「えええ！？　信じらんなーーーい！！」」

と、何やらお互いに驚き呆れていると、

ガチャ

「こ、このような感じでよろしいでしょうか？」

彼女なりにめ一杯オシャレをしてきたムースが部屋に戻ってきた。

「……」

「……」

同時にそちらに目を向けた二人は、固まった。

――何故ならば、

「わあ、どこかのお姫様～みたいな？」

「うんうん。真っ赤なドレスで情熱的ー」

「ココアに言われた通り、耳飾りも首飾りも腕輪もきらっきらでおっしゃれ～みたいな？」

「そんでもってチロルに言われた通りに背中もばっくりあいててとってもセクシーって言うか」

「「どこに行くおつもりですかお嬢様？」」

彼女がパーティードレスも足元に及ばないような、すこぶる派手な格好で現れたから。

「何をおっしゃってますの？　遊園地とやらに決まっておいででしょう？」

ご尤もな質問が冗談に聞こえたのか、ふわふわセンスを口元にかざしながらウフフと笑って見せた後、

「あ、そうですわ。ココアさんとチロルさんに、もうひとつお聞きしたいことがあるのですが」

思い出したようにこう尋ねた。

「護衛の者は何人ほどつければよろしいのでしょうか？」

「服は、まあ、遊園地だし普通でいいと思うよ」

「うむ」

「あとは最低でも十分前行動な？」

「えー」

「”えー”じゃねェ」

一方その頃、ベッドの上に座っているプリンは、ミントとポトフの説明を聞いていた。

「レディィを待たせるなんて許されねェと思え」

「……ぶう」

「あと、使う言葉も気を付けなきゃだね」

「ぷえぇ？」

「欠伸も絶対すんなよ？」

「むむ……」

「居眠りなんかもってのほかだからね？」

「ぷわ！？」

「その枕も持っていくべきじゃねェな」

「ぴわわ？！」

が、説明を聞くに連れて、だんだんと顔が青くなるプリン。なかでも、どうやら一番ご尤もなポトフの最後の意見が強烈だったようで。

「でも、枕がないとゴマ化しちゃうんじゃない？」

「いやでもデートに枕持ってくヤツってどうなんだァ？」

「まあ、それもそうなんだけど……」

「うーん、やっぱりあれだな」

「うん」

枕を持っていくかどうかで少しの会議を設けたミントとポトフは、

「「もうそろそろって言うかいい加減枕離れしろ」」

プリンを見据えてそう言った。

「ヤ」

が、あっさり拒否。

「〝ヤ〟じゃねェ」

「ヤー」

断固拒否。

「長音符つけたら、って、ああもう」

ぷいっとそっぽを向いてしまったプリンに、

「……そんなに嫌？」

「うむ。ヤー」

「どぉしても？」

「どうしても」

「「ど～～～してもっ？」」

「ど～～～してもっ」

一応は粘ってみたものの、やっぱり彼は枕を手放す気はないらしい。

「……はァ、じゃ」

「しょーがないね」

二人が溜め息をつくと、

ぽふっ

「む？　ミント宛て」

同時に、プリンと彼らの間に手紙が出現した。

「オレ？」

ので、それを受け取り早速内容を読んだミントは、丁度いいとばかりにポトフに目配せし、

「「デート中止」」

ポトフとご一緒に、チロルからの手紙に書いてあった一言を読みあげた。

「む！　ほんとう！？」

「そこ。喜ばないの」

「ふふふ、はーい」

こうして、プリンとムースの初デート計画は敢えなく失敗に終わってしまったのであった。

「……つか、なんで枕放すのが嫌なんだよ？」

「ふふふ、ないしょ」

第１１３回　朝食日和

朝早く起きて、いつものごとく朝食を用意した後のこと。

ガチャガチャ

二階に上がって向かい合う二つの部屋、シャーンとジャンヌの部屋のドアを開けたミントは、

ポイポイッ

何やら大きめの植物の種をそこに投げ入れた後にドアを閉め、廊下の真ん中で両耳を塞いだ。

カッチカッチ

ドカーン

名付けて、ミント流、強制目覚まし術。

「おはよ」

「「……おはようございます……」」

『……む～……』

彼がさらりと挨拶すると、黒焦げ家族が顔を出した。

イスに座って両手を合わせ、頭を下げてご挨拶。

「いただきます」

お行儀よく挨拶した後、左手で箸を持ち、ミントの静かな朝食が始まった。

「おかしいまろ!!　絶対おかしいまろ!!」

「いいえ、おかしいのはマロ様の方です!!」

「何言ってんのよ?　おかしいのはウチでしょ?」

「いや認めちゃうのかよ」

『む〜!　む〜!!』

ただし、静かなのはミントだけであって。

その他の黒焦げ族の方々は、朝で、しかも寝起きだというのにも関わらず、いつものごとく元気にやかましく騒いでいた。

「だから、ぜぇ～ったいおかしいまろ!!　目玉焼きにかけるのは、マヨネーズが常識まろ!!」

という、定番のネタで。

「……」

ああ、タマゴにタマゴかけてどうする、とか突っ込みが入るヤツだね、とか思いながらも、敢えて突っ込まずに黙々とごはんを食べるミント。

「何を言いますか!?　目玉焼きにはドラゴンの血が一番でしょう?!」

マヨネーズ派のマロに食ってかかるフラン。

「……」

お前は本当にドラゴンマスターか、とか思いつつ、お味噌汁をいただくミント。

「あんたこそ何言ってんのよ?　目玉焼きには墨汁に決まってるでしょ?」

ファンタジーなフランに意見するは、ミントママ、ジャンヌ。

「……」

食べ物に食べられない物をかけるな、と、ご尤もな意見を抱きながら、サラダをいただくミント。

「別に何かけたっていいだろ？　まあ俺はソース以外はありえねえけど」

平和主義と見せかけ、はたし状を叩き付けるミントパパ、シャーン。

「……」

まったくもってどうでもいい、とか思いながら、漬物に箸を伸ばすミント。

『む～！　むむむ～！』

ケチャップを頭の上に乗せて何かを必死に訴えるむぅちゃん。

「……」

ケチャップの重みでちょっと潰れてるむぅちゃんすらスルーして、再びごはんを食べるミント。

「フッフッフッ。甘いな。目玉焼きにはチョコレートに決まってるだろ」

すると、突然現れたのは、新たな参戦者、死神。

「……」

確かに甘いな、とか思いながら、チョコレートがかかった目玉焼きを想像してしまい、大幅に食欲を損なうミント。

「マヨネーズまろ！！」

かければいいじゃん。

「ドラゴンの血です！！」

だから、かければいいじゃん。

「唾液よ！！」

汚いよ。

「それはわざわざ事前にかけなくても口の中で誰しもやることだ」

珍しくまともだよ。

『む～む！　むむ～！！』

だから、かければいいじゃんってば。

「ホイップクリームも捨てがたいな」

それは捨てろよ。

そんなミントの心の中での突っ込みが炸裂するも、当然それは彼らの耳には聞こえないわけであって。

「マヨネーズ！！」

「ドラゴンの血！！」

「歯磨き粉！！」

「お前、別にこだわりねえだろ」

『むむっむ～！！』

「蜂蜜もチョベリグ～」

お互いに一歩も譲らない黒焦げ族とプラスα。

「『むむむ……っ』」

まさに、一触即発の睨み合い。

「……」

己の食についての好みとプライドをかけてバチバチと火花を散らす彼らの目の前で、

ちょー

ミントは、目玉焼きに醤油をおかけになった。

「……」

「……」

「……」

「……」

『……』

マロとフランとジャンヌとシャーンとむぅちゃん、沈黙。

「ナウいな」

死神、古い。

「ごちそうさまでした」

何食わぬ顔で醤油がかかった目玉焼きを食べ終えたミントは、自分の箸と茶碗と皿を重ねて台所へと消えていった。

「……」

「……」

「……」

「……」

『……』

「……」

「……。食べよまろ」

「……はい」

「そうね」

「おう……」

『む～……』

「フッフッフッ。オレ様の分がない」

こうしてブライト家の朝食は、平和に終わるのであった。

第１１４回　不敵日和

ウグイスも鳴き始めた春の日の朝、

「うー……」

『アイ』

『アム』

『『メルヘン！！』』

『む～！』

「……ん……」

爽やかに目を覚ましたところ、窓の外から変な掛け声が聞こえてきたので、ミントの爽やかテンションは急降下した。

（マロとむぅちゃんならまだなんとなく分かるけど、どうして結構まともでいい子なフランまであんなことを……？）

そんなとこを思いながら、ミントがカーテンを開けた後に帽子を取る為に反対側を向くと、

「ぐーすかぴー」

右側の前髪が右側の顔を隠すほど伸びた長身の男、死神が、大鎌の鎌子とともに彼の横でぐっすりと眠っていた。

「……」

「ぐーすかぴー」

死神が、鎌子とともに彼の横でぐっすりと眠っていた？

「あっ、危なぁぁぁ！？」

寝起きにつき、突っ込みポイントが若干ずれているミントであった。

「ごふっ……みんとんヒドイ……」

あれからものの一分も経たないうちにミントにぼっこぼこにされた死神は、薔薇の鞭によって縛り上げられていた。

「ご、ごめんね？　なんか本能的にキミをぼっこぼこにしなきゃダメだと思って……」

申し訳なさそうに謝りながらも、ほどいてやる気は更々ない様子なミント。

「オレ様ちゃんと許可貰ったのに。ぶーぶー」

縛られたままゴロゴロ転がりながらぶーぶー不満を言う死神。

「？　許可？」

彼の言葉に、ミントが小首を傾げると、

「”みんとーん”、”んー”、”ん？　起きないのか？”、”んー”、”フッフッフッ。じゃあ、オレ様も一緒に寝るー”、”んー”って」

「いやそんなのまったく記憶にございませんって言いますか本気にしないでくれますか？！」

どうやら死神が眠っているヒト相手の会話を本気にしたらしいので、彼は思い切り突っ込んだ。

「それで、鎌子も寝たいかって聞いたら寝たいって答えたから」

「いやいやいや待て待て待て？」

鎌子を操り、その刃でぶちぶちと薔薇の鞭を切りながら言う死神に、

「寝たいって答えた？」

ミントは疑問に思ったことを口にした。

「鎌子って、喋れるの？」

すると、死神はフッフッフッ、と不敵に笑ってみせた後、こう答えた。

「鎌が喋るわけないだろ」

「ごふっ……みんとんヒドイぱあと2……」

あれからものの一分も経たないうちに更にぼっこぼこにされた死神は、鎌子とともに、

『『ジェラララァ！』』

マッドホイップによって縛り上げられていた。

「ごめん。寝起きにつき、少々機嫌が悪いところにイラっと刺激がやって来たから、つい」

寝起きにつき、ついつい縛り上げてしまったうっかりミント。

「フッフッフッ。も～みんとんったら、うっかりさん☆」

「はははははは」

バッチーン☆　とウインクして言った死神に、取り敢えず笑って返した後、

「……で？　キミはここに何しに来たのさ？」

ミントはマッドホイップをほどいてやりながら質問をした。

「おお、そうだ。オレ様、みんとんに聞きたいことがあってな」

すると、死神は思い出したようにそう言った。

「……ん？　何故ふしぎ植物をオレ様に向ける？」

「え？　あ、いやー、また”友達百人出来るかな？”とか聞いてきた時の為にね」

首を傾げた死神に、しまいかけたマッドホイップを構えたミントは爽やかにそう答えた。

「……ち」

すると、死神は小さく舌を打った。

（聞く気だったんすか）

が、ミントは敢えて聞き流した。

「……フッフッフッ。甘いな。それもあるが、オレ様が聞きたいのは」

これは振り下ろすべきなのか？　とか、鞭を握っているミントが悩んでいると、

「みんとん今日ヒマ？」

死神は小首を傾げて質問した。

「へ？　どして？」

突然今日の予定を尋ねてきた彼に、ミントが小首を傾げ返すと、

「フッフッフッ。実は、みんとんにオレ様のお仕事を手伝っていただきたくて」

いつものごとく不敵に笑った後、何故か急に下手に出た。

「……？　ワタルの仕事って？」

仕事？　学生じゃないの？　と、ミントが疑問符を浮かべていると、

「ん？　それはオレ様を見ればすぐ分かるだろ？」

今度は死神が疑問符を浮かべ返した。

「ワタルを見れば……」

「いやん」

言われた通り目を向けて、恥じらう彼を無視してミントは死神をよーく観察してみた。

右目を隠す右側の前髪以外は長くない紺色の髪に、不健康そうな白い肌。

眠そうな紺色の瞳と、先が少し尖った耳。

襟が高くて、袖と裾の長い黒ローブ。

とどめに刃渡り一メートルほどの巨大鎌。

「……ま、まさか……」

彼をしみじみ眺めた後で、青ざめたミントは恐る恐る口を開いた。

「フッフッフッ。そう、そのまさか」

すると得意の不敵笑い。

死神は、彼の仕事の主役である巨大鎌を肩に担ぎ、クールボイスでこう言った。

「草刈りだ」

その後、ミントは一対の鞭で、この上なく思わせ振りな死神を三度

締めあげた。

第１１４回　不敵日和（後書き）

死神
「フッフッフッ。ちなみにオレ様は学生で、草刈りはみんとんのマンマンにやっといてって頼まれごふあっ」

ミント
「くあ……二度寝しよ」

第１１５回　転送日和

「お誕生日おめでとう、ミント」

汽車に乗り込み、友人のいる個室を発見したプリンは、素敵に笑って誕生日をお祝いした。

「あは、ありがとプリン」

すると、にこっと笑い返してお礼を言った後、

「でも四月一日が誕生日って、今更ながら嘘で生まれてきたみたいだよねオレ」

自分の誕生した日にちを考えて苦笑いした。

「ぷゆ？」

すると、向かい側の座席に座ったプリンが、ぷゆ？　と疑問符を浮かべた。

「……」

今更ながら、何故にプリンが半濁音をやたら用いるのか不思議に思いながら、

「四月一日はね、エイプリルフールって言って、んーと、嘘をついてもいい日？　なんだよ」

ミントは、自信のない感じの説明をした。

「む？　嘘ついたら、め」

それを聞いたプリンは、小首を傾げながら応えた。

「いやまあ普通はそうなんだけど今日は特別と言うかなんと言うか？」

まともな発言ではあるのにどこかまともでない発言を聞いて、ミントが苦笑いを浮かべていると、

「ふむ、そうなのか」

プリンは納得した様子で頷いた。

「……では、これから僕の言うことは嘘だ」

後、そう明言した。

「へ？」

「と、言ったら、さてさっきの僕の言葉は嘘？　本当？」

きょとん顔で聞き返してきた友人に、プリンが問題を出すと、

「え？　えーと、これから僕の言うことは嘘だって言ってるんだから、本当？　あれ？　でも本当だったら嘘だっていうのが嘘になるから……いやでも嘘だったら嘘だって本当のこと言ってるし、って、あ、あれえ？」

「ふふふ」

考えれば考えるほど混乱するミントを、プリンが楽しそうに眺めていると、

バァン！！

「ハッピーヴァースデーイ！！」

個室の扉が勢いよく開き、ポトフが勢いよく飛び込んできた。

「ミント――」

「うっさいちょっと黙ってて」

そしてミントにガバーッと抱きつこうとしたところ、彼にさらっと止められた。

「――？！」

パリーン！！

ので、ポトフのガラスハートが砕け散った。

「いちいち煩い」

聞こえる筈のない効果音まで聞き取ってしまい、ぼそっと文句を言うプリン。

「……久しぶりに会ったのに会うの超楽しみにしてたのになのになのに……」

抱きつき攻撃を止められた立ち位置の都合上、プリンの隣の席に座り込んだポトフは、席の上でどんよりと体操座りをし、頭にキノコを発生させた。

（きのこ……！）

彼の頭に生えたキノコにキラッキラな興味をもったプリンは、それを取ってみたいという衝動に駆られ、気持ちの赴くまま、そのキノコに手を伸ばした。

「おっはよ―…」

「おはよォ、ココアちゃァん！！」

スカッ

「ぴわ！？」

が、ココアの登場によりポトフのテンションが急上昇した上に彼が彼女に抱き付いた為、プリンはキノコの収穫に失敗した。

森と砂漠と山と川と海を越え、大陸から見ると小さな島に辿り着いたのは、真っ黒な蒸気機関車と国立セイクリッド魔法学校の四年生。

「えっと、だから嘘だってのが嘘で、でもそしたら本当で……」

「……ぶう、きのこ……」

「ちょっと降ろしてってばもーっ！」

「オッケイ任せてココアちゃァん♪」

ミントが引き続き答えの出ない問いについてぶつぶつ言って、プリンがキノコを取れなかったことでご機嫌斜めになって、ココアが顔を赤くしながら腕の中で暴れて、ポトフが先程とは打って変わってエイプリルフールを満喫していると、

『はーい、みんなー！　久しぶりだね！』

拡声器から、クー先生の声が流れ始めた。

「嘘が本当で本当が嘘で」

「……ぶう、きのこ取りたかった」

「だから嘘じゃなくて真面目に言ってるのが分かんないのー？！」

「うん、超分かる♪」

しかし、四人は彼女の話を聞いていない。

『いつも同じだとマンネリしちゃうよね？　だから、今回は新しいことをやってみようと思うの！』

が、クー先生も彼らに気が付いていない、と言うか、気にしていない。

『てなわけで、今からそれぞれ二人一組になって』

だが、この言葉には反応したらしく、

「コっコアちゃ～ァん♪」

「ふやーーー？！」

「「ミント！」きゅん！」

ポトフとココアが騒ぎ、プリンと、どこからともなく現れたチロルがペアになりたい彼の名前を同時に呼んだ。

「む……」

「……何よ？」

バチィッと火花を散らし始めた二人の間で、

「えーとだから詰まりえーとんーと」

ミントは、未だに思考をめぐらせていた。

『自力で学校に帰ってこられたら百点満点だよ！　ただし、人に魔法使ってるとこを見られたら、その時点でアウト！　強制送還だからね！』

その間、説明を進めていたクー先生は、にっこりと素敵な笑顔でそう言うと、

『じゃ、行ってらっしゃ～い♪』

両手を高々と上げて空中に大きな魔方陣を出現させ、その魔法で生徒たちを課題の舞台へと送り込んだ。

第１１６回　理想日和

カンカンと踏み切りの音が響く街の中、高いビルに囲まれた路地の片隅で、

「いっ……たぁ～……」

金髪美少女、チロルは目を覚ました。

「――！」

直後、彼女の視界のど真ん中に、ピンクと黒のストライプのネクタイ――ウサギさん寮の生徒の印であるネクタイが飛び込んできた。

（こ……これは……！）

うつぶせに倒れている自分の状態から判断して、自分は誰かの上に乗っかっている状況にあることを知る。

（もしかしてっ！　もしかしなくてももしかして――？！）

何かを期待してか、彼女はその金色の瞳をきらきらに輝かせ、色の白い頬を赤く染めながら、ネクタイのその先にある、自分の下にいる人物の顔へと彼女の顔を向けた。

「ぅ、……む？」

そこには、今しがた目を覚ました、これでもかと言うほどに整った顔があった。

「……」

「……」

「「……」」

金と青の視線がバッチリぶつかって、流れたのは数秒の沈黙。

「っなんでアンタなのよおおお?!」

「むぅ、重い。チロルちゃん退いて」

後、魔法学校のその他大勢の女子生徒ならしないであろう反応と、魔法学校のその他大勢の男子生徒ならしないであろう反応を、それぞれチロルとプリンが同時にしてみせた。

「しかもなんでちゃん付けなのよおおお!?」

「む？　女の子にはちゃんをつけろと父が」

ばばっと飛び退いたチロルと、起き上がってローブについたしわと汚れを払うプリン。

「アタイは、アタイはミントきゅんとペアになりたかったのに～～～!!」

「うむ。僕もミントとペアになりたかった」

「アンタなんてお呼びじゃない～みたいな～!!」

「うむ。僕も別に呼んでない」

そして更にその他大勢の生徒ならしないであろう言葉を、片やお怒りの表情で、片や無表情で交わした後、

「っ、フンだっ！」

「？　どこに行くんだ？」

「ミントきゅんを探しに行くに決まってるでしょ！　アンタとペアなんてノーキディング～みたいな！！」

古典的な表現を用いてくるりとプリンに背を向けたチロルは、すたすたとその場から去っていった。

「……？　ミントを探しに？」

小さくなっていく彼女を見ながら、プリンは小首を傾げていた。

「ミント、ここにいるのに」

そして、彼の隣にあった、ミントの魔力を感じられるゴミ袋の山の中に目を向けた。

ゴミ袋を退けて、プリンがまだ目を覚ましていないミントと既にご対面していることも知らずに、

「ミ～ントきゅ～ん？」

チロルは、彼の名前を呼びながら、見知らぬ街の中を歩き回っていた。

「……。ヒトを指差すだなんて、失礼しちゃうみたいな」

道行く人々に時たま指を差され、ぷくっと頬を膨らませながらも、

「それにしても、随分と黒髪が多いわね～？」

視界に入った彼らを見て、珍しそうに呟いた。

「んぅ？」

他にも見慣れない柱やお店や建物などをきょろきょろ見回しつつミントを探していると、歩き始めてからしばらくして、彼女は初めて見慣れた人物を発見した。

「……う？」

ヒト気のない公園の片隅で、優しい風に撫でられ、彼女は濃い桃色の瞳をゆっくりと開いた。

「お目覚めですか、お姫様？」

すると、目の前には見知った顔が。

「ん、おはよーポト……」

くしくしと目を擦りながら目覚めの挨拶をした直後、

「……ふえ？」

ココアは、目を擦っている体勢で固まった。

「……」

そして目から手を離して、もう一度ゆっくり目を開けてみた。

「おはよぉ、ココアちゃん♪」

そこには、やっぱり見知った顔が。

「……」

彼の顔から視線を外し、横になっている自分の頭の下にあるものを見る為、頭を上げてそこを見てみると、

「……うで……」

ココアは、自分が腕枕してもらっていたことに気が付いた。

「……」

沈黙。

「……」

バフッ！！

後、赤面。

「ひっ、ひゃいあああああああああああ？！」

自分の状況を理解したココアは、奇声をあげながら近くにあった木の向こう側へダッシュ。

「な、ななな何っ、な、なな何するのよーーー！？」

後、ひょこっとこちらに顔を少しだけ出しつつ、どもりまくった言葉で質問をした。

「何って、腕枕」

そんな彼女を見て面白そうに笑いながら、上体を起こしたポトフはさらりと答えた。

「そっ、そんなことは分かってるのーーー！！」

彼の様子に腹を立てつつココアが叫ぶと、

「？　他のことはなんにもしてないけど」

ポトフは素敵に笑ってこう言った。

「……何かして欲しかった？」

「っ！！」

ので、

「か、カバーーーー！！」

赤い顔を更に赤くしたココアは、お腹の底から力いっぱい叫んだ。

「あっは、ココアちゃん逆ぎゃく♪」

「うっさいこのカバカバカバーーー！！」

という具合にいちゃこいているココアとポトフを見て、

「百点満点みたいな……」

ポトフのキャラをミントに求めるチロルであった。

第１１７回　黒髪日和

「異世界ぃ？」

街の中を歩きながら、ウェーブのかかった胸の辺りまである黒髪と茶色の瞳をもつ少女がびっくりフェイスで聞き返すと、

「この辺り全体的に魔力が全然感じられないし、あのクー先生が棄権の仕方まで教えるくらいだからね」

少しくせのついた黒髪に白いガーゼのついた眼帯をした彼が、頷いた後でそう言った。

「？　棄権の仕方なんて言ってたっけー？」

その言葉に、彼女が小首を傾げると、

「”ヒトに魔法を使っているところを見られたら強制送還”、詰まり、ヒトに見てもらえば学校に帰れるってこと。で、前におにぃさんが言ってたんだ。”僕の住んでいる世界では魔力が使える人なんていない”って」

先生の言葉を聞いていないようで実は聞いていた彼がさらさらと説明した。

「あそっかー。ポトフのお兄さんは異世界の人だったねー。えーとー、それで、魔法を使ったらダメってクー先生が言ったのは、こっちに魔法を使える人がいなくて、むしろ使える方が珍しい人になっちゃうからで、その上、この辺り全体的に魔力が感じられないから、

ここは異世界だって判断したってことー？」

「ココアちゃん頭い～♪」

「ひゃわあ？！」

頭に手を当てながら彼女、ココアがまとめると、彼、ポトフは彼女をぎゅーっと抱き締めた。

「……あ、頭で思い出したんだけど、なんで黒くしたのー？」

「ん？　魔法♪」

「いや、んなこた百も承知なんだけどー」

が、他のことが気になったせいか、魔法が使えないという条件のせいか、いつものようにぶっ飛ばすことなくそのままの公衆の面前を歩くココア。

「俺は元々のココアちゃんの方が可愛いし綺麗だし大好きなんだけど、この世界では黒髪と茶色の瞳が主流らしいから」

「……。じ、じゃー、眼帯変えたのもー？」

「そ。あの黒い眼帯をしてるのはタルに入った黒髪のオッサンだけみたい」

「……タルに入った黒髪のオッサンー？」

彼の言葉に顔を赤くしつつも、謎な発言にココアは疑問符を浮かべ

た。

「！」

が、またしても他のことが気になった模様。

「わあ！　可愛いー！」

「お？」

通りかかったお店の中のガラスの向こうに積まれたぬいぐるみに興味を示したココアと、

「じゃァ、入ってみよっか？」

「え？　でもここ異世界なんでしょー？　お金使えるのー？」

「大丈夫。何故か同じお金使ってるから」

「ええ？　そなの？　じゃー、このお札のオッサンの謎はこの世界で解けちゃうかもー？」

「あっは、フクザワって何者なんだろォね？」

「顔立ちもなんか違うよねー」

「名前が漢字で苗字が先だし」

「ニホン銀行券って印刷されてあるしねー」

知らない人物がプリントされた、異世界なのに共通という摩訶不思議極まりないお札の謎について会話しながら、ポトフはお店の中に入っていった。

ガタンゴトンと電車が走り過ぎ、街が少し静かになると、

「で、ここは異世界だと」

「うむ」

ゴミ袋の上に座りながらミントが確認して、プリンはこくりと頷いた。

「それでプリンがオレの髪を真っ黒にしてくれたと」

「うむ」

「しっかしプリンって髪黒くして目を茶色にするとポトフにそっくりだね」

「うむ」

テンポよくこっくりこっくり頷いている途中で、

「む？　――そ、そっくりじゃないっ！」

プリンははっとして否定した。

「れ？」

が、ミントは別のことに気を取られていた。

「ね、あれポトフじゃない？」

「だ、だから僕と馬鹿犬を一緒に――…」

「いや、そうでなくて。あのお店にいるの、ポトフと……ココア、かな？」

プリンの後方を指差しながら、ミントはぷりぷり怒っている彼にそう言った。

「む？」

彼の指に従って、後ろを振り向いたプリンは、その先にポトフとココアらしき人物を確かに発見した。

クマさんがぽとっとクレーンから落ちて、ポトフの頭もがっくりと落ちた。

「うーん、もーちょっとなのにねー」

「……カッコ悪ィ……」

クレーンゲームの前で落ち込むポトフと、その隣で苦笑いを浮かべるココア。

そんな彼らを、かっこいいとか可愛いとか言いながら遠巻きに眺めるお客さんたち。

「馬鹿か貴様は」

「「？」」

と、そこへ、

「そんなところで支えられる筈がないだろう。全体のバランスを考えろ」

「わは～、変な機械～」

プリンとミントが現れて、お客さんたちは更に騒ぎだした。

「！　ミント！？　プリンも髪真っ黒ー！」

「えへ♪　プリンに魔法で染めてもらったんだ～」

「んだと枕？！」

「一度で聞き取れ馬鹿」

しかし、そんなことはアウトオブ眼中な四人。

「っ、じゃァ、テメェがやってみろよ！」

「む？　別に構わないが、これで僕が出来たら貴様の面目丸潰れだぞ？」

「でも、プリンに元の色の方が好きって言われて」

「あ、それ私もポトフに言われたー」

ぎすぎすな二人とほのぼのな二人。

「なんかプリンにそう言われたら、ちょっとだけあの髪のこと嫌いじゃなくなったかも」

「うんうん。だってあれが本当のミントだもんねー」

「っの……やれるもんならやってみろォ！」

「ふ、上等だ」

和やかな雰囲気のミントとココアをよそに、ポトフがズビシっとクレーンゲームの機械を指差して言うと、プリンは不敵に笑って応えてみせた後、

ぽすっ

「取った」

「え、一発でー！？　プリンすごーい！！」

難なくクマさんをゲットして、ココアがぱあっと瞳を輝かせた。

「……照れる」

「ねね、じゃー、あのブタも取れるー！？」

「む？　ブタさん？」

ウイーン

ぽすっ

「はい」

「きゃー！　すごいすごーい！」

余裕なプリンと、はしゃぐココアと、

「……俺カッコ悪……」

「げ、元気だしてよポトフ？」

落ち込むポトフと、励ますミント。

「……俺なんて……どうせ俺なんて、何やったって枕に勝てねェんだ……」

「そ、そんなことないってば……ほら！　体育と家庭科は余裕でポトフの方が上だし！」

「それは詰まり魔法学と語学と数学と理科と社会科と音楽と技術と美術は枕の方が上ってことだよな？」

「へ？！　い、いや、そうではなくて……」

「はァ……やっぱりどォせ……どォせ俺なんて……」

「って、ああもう」

店の隅で体操座りしているどんよりポトフに、

「そんなんじゃ、プリンにぬいぐるみどころか景気よくココアまで取られちゃうよ？」

ミントはさらっと何やらうまい感じのことを言い放った。

「――！！」

衝撃。

「ココアちゃんは、誰にも渡さねェェェェェ！！」

後、復活。

「……。単純だねぇ」

たちまち復活してすぐさまプリンに真っ向勝負を挑んだポトフを見て苦笑いを浮かべながら、ミントは外にある販売機でコーラを買いに行くのであった。

第１１８回　初恋日和

車が行き交う街の中を歩いていると、

「！　アロエ？！」

「？　ああ、チロルさん」

チロルは、茶髪眼鏡の女の子、アロエと、

『わぉん』

ついでに、白くてモコモコした大きな犬を発見した。

「何？　アロエのペアってこのワンちゃんなの？」

「この犬は気が付いたら隣にいただけです。と言いますか、あなたはこの犬が魔法学校の生徒に見えるんですか？」

『わぉん』

チロルがしゃがんで犬と目線を合わせると、アロエはさらさら言葉を返し、彼女の腰くらいまでの大きさがある犬はわぉんと吠えた。

「ふぅん。あ、ねぇアロエ？」

「ミントさんなら見かけてませんよ」

するとチロルが犬から目線を外してこちらを見上げてきたので、ア

ロエは彼女が質問を言う前に、彼女の質問に答えてみせた。

「そっか……って、え？　まだ何も言ってないのに、なんで分かったの？」

「なんでって、あなたがアロエに持ちかけてくる話題はほとんどいつもミントさん絡みじゃないですか」

「えへ♪　だってだって、アタイの頭の中はミントきゅんでいっぱいなんだも～ん♪」

「お幸せそうで何よりです」

両頬に両手を当てながら言うにこにこ彼女を、アロエがどうでもよさそうに祝福すると、

「アロエはそういう彼はいないの？」

チロルが彼女に別の話題を持ちかけた。

「……さあ？　いたんじゃないですか？」

一応話題の中心は変わったものの、相変わらず恋愛関係の話だったので、アロエがかなり適当に質問に答えた。

「”いた”？　どうして過去形なの？」

「！」

しかし、ここで思わぬ落とし穴。

「……っ」

話を聞くまで逃がしてくれなさそうなチロルに、己の迂闊さを呪いながら、

「そのままの意味です」

アロエは極力いつも通りの口調と声で簡潔に答えた。

「そのままの意味って」

「……好きになった彼の隣には、アロエなんて足元にも及ばないほど素敵な女性がいた。ただ、それだけのことです」

彼女が再び尋ねてくるとすぐに、アロエはさらりとそう言った。

「！　……ご、ごめんなさい……」

興味本位の質問が彼女に嫌なことを語らせてしまい、チロルは申し訳なさそうに謝った。

「いいえ、もう過ぎたことです」

するとアロエは眼鏡をかけ直しながら、

「そんなことより、その犬、チロルさんに何か言いたいみたいですよ？」

さらっと話題を転換した。

「え？」

彼女の言葉通り、チロルが視線を犬に戻すと、

くんくん

『わん！』

彼女に鼻を近付けていた犬が、わんと吠えた。

「え？」

後、犬はててと彼女から離れたかと思うと、

『わんわん、わぉん！』

振り向いて再び元気に吠えた。

「……？」

「ついてこい、って感じですね。ミントさんの居場所でも分かるんじゃないですか？」

「！　ホント！？」

『わぉん！』

ぱあっと顔を明るくしたチロルの問いに、犬が元気に答えて走り出すと、

「あ、待ってワンちゃ～ん！」

彼女も慌てて駆け出した。

「……」

そんな彼女の後ろ姿を眺めながら、

「ふぅ、鈍くて助かりました」

アロエは弱く微笑んだ。

「……あの頃は、我ながら柄にもないことをしていましたね……」

彼ともっと一緒にいたいが為にゆっくりと走ってみたり、落ち込んでいた彼を励ましてみたり、バレンタインデーに手作りチョコレートをあげてみたり。

「何してるの、アロエ？　早く早く～！」

『わんわん！　わぉん！』

彼女が昔を思い出していると、振り向いたチロルが元気に手を振って、犬が大きく吠えたので、

「本当に鈍いですね」

苦笑いを浮かべつつ、アロエは彼女と一緒に走り出した。

すると、

ウイーン

前方にあるお店から、帽子を被った黒髪の少年が現れた。

「「！」」

ので、

「ミントきゅ」

『わぉん！』

「？　――うわあ？！」

すぐにミントだと分かったチロルが彼に飛び付こうとしたところ、犬が先に飛び付いた。

「……ん……って……」

不測の事態に、思わず固まるチロル。

『わんわん！　わぉん！』

「ちょ、ま……く、くすぐったいってば」

『わん！　わんわん！』

「っもう、この犬～っ！」

『わんわんわんわん！』

その間にも、犬はミントとじゃれあっている。

「おやおや、チロルさんより積極的な犬ですね」

その様子を見て、アロエがふっと笑いながら口を開くと、

「あ、アタイだって負けないんだから～！！」

チロルの何かに、火が点いた。

「ワンちゃん！！」

『？』

「あ、チロル？」

「勝負！！」

『わん！　わぉん！』

「へ？　勝負って何――って、何考えてるのさあああ？！」

犬とチロルの真剣勝負に叫ぶミント。

「お幸せそうで、何よりです」

賑やかな彼らを見て微笑みながらも、怪しげな行動をしている彼らとは、アロエはしっかりと部外者ぶっていた。

第１１９回　質問日和

「ったく……」

襲い掛かってきた大きな犬とチロルをおとなしくさせた後、ミントがパンパンと手を叩いていると、

ウイーン

「ふむ。追い出された」

「……俺なんて引き止められたぞ……」

「ま、まー、プリンはこれだけ取って、ポトフはあれだけ取られたからねー？」

大きな紙袋を提げたプリンと、がっくりとうなだれているポトフと、紙袋を抱えつつ苦笑いを浮かべているココアが、お店の外にやってきた。

「あ、みんな」

「「！」」

自動ドアの音を聞いたミントが振り向くと同時に、三人はびっくり驚いた。

「おっきいわんわん！」

「み、ミント……？」

「や、やっぱそんな趣味がー？」

プリンはおっきいわんわんに、ポトフとココアはミントとチロルの状況に。

「へ？」

「えへへ～♪」

ちなみに、ミントは襲われた為に、チロルは襲い掛かった為に、彼らの制服は乱れていて、彼女の両手はもう暴れないようにと鞭代わりにウサギさん寮印のネクタイで縛られている。

「趣味？」

「いや、だってそれー」

小首を傾げた彼に、ココアがチロルの腕を封じているネクタイを指差すと、

「……？　それ、暴れるなって言ってるのに言うこと聞かないからお仕置きしただけだけど？」

ミントは、これをどう取ったら趣味になるんだろうと疑問符を浮かべながらそう言った。

「「……っ」」

よって、ココアとポトフが何やら変な誤解が、彼らの中で確信に変わった。

「えへへへへ～♪」

「……そんなににやけていると、いい加減危ない人に見られますよ？」

「あ、アロエ久しぶり」

「お久しぶりです、ミントさん」

そして何やらご機嫌なチロルに向けて、部外者面していたアロエがさらっと言うと、ミントは彼女に挨拶をした。

「ふふふ、わんわん♪」

『わん！　わぉん！』

彼の隣では、プリンがご機嫌な様子で犬の頭を撫でている。

「あ！　モコモコ！」

そんな随分とまとまりのない六人と一匹の耳に、中性的な声が聞こえてきた。

「「？」」

ので、六人は疑問符を浮かべながらそちらを向き、

『わぉん！』

犬は元気に返事をした。

「もうっ、勝手に走っていったらダメだよ？」

『わん！』

「って、アオイ？！」

やんわりとその犬、”モコモコ”を叱っている銀髪の彼、アオイの登場に驚くミント。

「え？　……。あ、ミント？」

名前を呼ばれ、アオイは彼の顔を少しの間眺めた後に応答した。

「わあ、こっちに遊びに来てくれたの？」

「え？　や、そうじゃなくて実は……」

くすりと笑って嬉しそうに尋ねるアオイに、ミントはことの経緯を説明した。

「そうだったんだ……大変だね」

ミントの説明を聞き、アオイが言うと、

「あ、ねー、私たちの世界に来てたってことは、アオイはあっちに行く方法を知ってるのー？」

ココアが小首を傾げながら質問した。

「ううん。僕たちはマロに呼ばれてあっちに転送されてるだけから」

「……そっかー」

「うん、ごめんね」

少し間を置いてから答えたので、かなりがっかりしたのだと思い、申し訳なさそうに謝るアオイ。

しかし、ココアはがっかりしていたのではなく、自分の都合を完全に無視されて強制召喚されていた彼を気の毒に思っていたのであった。

「あ、でも死神さんは好きなときに行けるみたい」

「……」

「では、その死神さんはどこに？」

思い出したように情報提供したアオイに、だからあんなくだらない質問をしにわざわざ異世界から……とか思ったミントをよそに、アロエがさらっと質問した。

「あ、うん。ちょっと待ってて」

するとアオイはズボンのポケットからケータイを取り出して、死神に電話をかけた。

「「？」」

何あれ？　的な視線をケータイに向ける六人。

「……うーん、ごめんね。ダメみたい」

電波が届かない、とのお知らせを受け、アオイはぱたむとケータイを閉じて謝った。

「アオイ、それ何？」

「え？」

が、モコモコを撫でていたプリンに質問されたので、

「あっ、これは携帯電話だよ」

「けいたいでんわ？」

「えっとね、携帯する電話なんだよ」

アオイはそのままな説明をしてみせた。

「ぴわわ……すごい」

しかし、流石はものづくり会社の御曹司といったところか、自分の世界にはない便利道具に、プリンは驚きながら感心していた。

「それじゃァ、おにィさんの……えェと、キリサキ美容院って知ってるかァ？」

感心ついでに何か考え出したプリンの隣で、ポトフがアオイに質問した。

「え？　あ、うん。知ってるよ」

その問いに、彼はこくりと頷いた。

「！　ホントかァ？！」

「うん。僕の家の隣だよ」

「本当！？　それなら、オレたちをそこに案内してくれないかな？」

「うん、いいよ」

ぱあっと顔を明るくしたポトフにアオイは再び頷いた後、ミントのお願いにくすりと笑って答えると、みんなを案内する為、モコモコのリードを握って回れ右をした。

「……あれ？」

が、彼はそこで動きを止めた。

「「？」」

どうしたの？　と停止した彼に六人が疑問符を浮かべていると、

「……え……ええっと……ここ、どこだろう？」

アオイは、案内役が言ってはいけない言葉を口にした。

第１２０回　制服日和

右も左も後ろも前も、

「えっと……ええっと……うーんと……ええと……」

まったく知らない街並に、アオイは嫌な汗を浮かべだした。

「……詰まり、ここがどこだか分からない、と？」

そんな彼の隣で、ミントがゆっくり尋ねると、

「……ごめんなさい」

アオイは、しょぼんとうなだれて謝罪した。

「ぅえ？！　え、えええっと、そ、そんなお気になさらず！！　道に迷うことなんて誰でも一日に一回や二回や三回や四回くらい余裕でありますですよ！？　って言うかはいコーラ！！」

子犬ばりにウルウルしだしたアオイに、ミントは慌てて両手をぶんぶん振りつつコーラを差し出した。

「うん……ごめんね。ありがとう、ミント」

ぷしゅー

よって、コーラが勢い良く噴き出した。

「わあ？！」

「ってごめんアオイいいい！？」

という具合に、主にミントがドタバタしている間、

「うーん、どーしよっかー？」

「むう……わんわんの鼻は？」

「それはそのわんこに言ってんのか？　それとも俺に言ってんのか？」

「はいはーい！　アタイ、ミントきゅんに腕枕―…」

「少し黙っててください、チロルさん」

ミントと同じようにアオイを責めることが出来ない五人は、ポジティブに他の方法を探していた。

「ちょっ！？　う、腕枕って、チロル、アンタ、まさか――？！」

「ココアってばもったいないわよね～？　あんな質問されたらアタイはもちろんオフコ～ス～みたいなV」

「――！！　い、いつから見てたのよー！？」

「お目覚めですか、おっ姫っ様～っ♪」

「一部始終じゃねえかコラーーー！？」

「しばらく黙っててください、そこ二人」

「む、わんわんに魔力を探ってもらうとか」

「だから、わんこに言ってんのか？　俺に言ってんのか？」

と言っても、真面目に考えているのかどうかは定かではないが。

「……？　アオイ？」

「ふ？　あれホントだ。こんなところで何してるの、アオイ？」

そんな時、後方から聞き覚えのある二人の少女の声が聞こえてきた。

「！　リン！　ウララ！」

ので、アオイの顔がぱあっと明るくなった。

「成程。急発進したモコモコを追い掛けていたら、いつの間にか知らない場所にいた、ですね」

「まあ、そうでもなきゃアオイがゲームセンターの前にいるわけがないわよね」

状況を説明すること約一分、彼らはぞろぞろ並んで目的地を目指し、通行人の多い道の上を歩いていた。

「……？　ゲームセンターって、僕が行ったらおかしいの？」

彼女たちの言葉に、行ったことないけど、と付け足しつつも、きょとん顔でアオイが聞くと、

「おかしいって言うか」

「危ない、です」

いろんな意味で、と付け足しつつ、ウララとリンはそう答えた。

「？」

深まる謎。

「ねね、それってリンたちの学校の制服ー？」

疑問符をぽこぽこ浮かべているアオイをよそに、ココアが二人に問い掛けた。

「はい、です」

ので、リンがこくりと頷くと、

「「へー、可愛いー！」」

ココアとチロルがきゃいきゃいしだした。

「でしょでしょ？！　私、この制服着る為に一生懸命勉強してきたんだから！」

「……制服と、ユウと同じ高校に行くたー…」

「はいリンちゃんお口チャーック！！」

えへんと胸を張った彼女の隣でリンが何か言いかけると、ウララは即座にそのお口にチャックした。

「同じ制服なのに、随分と丈が違うねー？」

そんな彼女を助ける為か、ココアは違う話題をふってみた。

「あ、スカートのこと？　リンが学校指定の長さで、私が校則違反」

「……よくもまあ堂々と」

さらりと答えた友人に、リンは呆れたように呟いた。

「ねぇ、リンも短くしてみたら？」

「……何故リンがわざわざ先生に注意される以外何も起こらない行

為を好き好んでやらなければならない、ですか？」

「何をおっしゃる。短い方が可愛いじゃない？　それに折角色が白くて長くてほっそい足なんだし」

「それは詰まり、自分の足がそんなだと言っている、ですね？」

「え？　えへへ、そう？」

「嫌味が通じねぇ、です」

照れ笑いするウララに、無表情ながらも腹立たしげに呟くリン。

「……。スカートの長短についてお聞きします」

仲が良いのか怪しい二人の会話を基に、アロエが男性陣に問い掛けると、

「へ？　……まァ、どちらかと言うと短い方が」

「ポトフううう？！」

「えっと、寒くない？」

「む？　貧富の差？」

ぶっ飛ばされた一名以外、お話にならない回答が返ってきた。

「ウララ、男性には効果がないみたい、ですよ」

「寒さは気合いでなんとかなるし別にお金がないから生地が短いわけじゃないわよおおお?!」

どうでもよさそうに言うリンと、頭を抱えつつ突っ込むウララ。

「……効果がない……は！　そう言えばミントきゅんがくれたお洋服って露出してない……もしかして、逆効果?!」

だいぶ参考にならない回答に、衝撃を受けるチロル。

「……何を言っているんですか、チロルさん？　逆ですよ」

「え?」

「それは他の男性にあなたを見られたくないから。詰まり、独占欲です」

そんな彼女にさらりと何か吹き込むアロエ。

「はにゃあああああ!?」

彼女の言葉に真っ赤になるミント。

「助けに来たんじゃないのかミントォォォ?!」

思わぬ流れ弾を喰らうポトフ。

「いい天気だね」

「そーだねー」

「ぷわ、ねむねむ」

『わん、わぉん！』

平和なアオイとココアとプリンとモコモコ。

そんなこんなで、彼らは、無事、ではない気が、約一名においてしないでもないが、元の世界に戻ることが出来たのであった。

第１２１回　先生日和

きゅーっと絞ったタオルを彼女の額に載せると、

「……もう、具合が悪いなら来なくてよかったのに」

と言いながら、ミントはベッドの横にあるイスに腰を下ろした。

「うふふ♪　ねぇ、ミントくん？」

「？　はい？」

すると彼に話し掛けてきたのは、綺麗な桃色の髪と赤い瞳をもつ医務室の先生、ベル先生。

「彼女に熱出されるようなことしてきたのかしら？」

「？　待ち合わせ場所に来た時にはもうフラフラだったって言ったじゃないですか」

「うふふ、面白くない回答しないでくれるかしら？」

彼女がベッドの上に横になっているチロルを見ながらにやりと笑って尋ねると、ミントが素で答えたので、ベル先生は笑顔のままそう言った。

「面白くない回答……？　って、言いますか、具合悪い人が来たのになんでそこにずっと座ってるんですか先生？」

何故にボケる必要がある？　とか思いながら、ミントとチロルが医務室に来てからずっとイスに足を組んで座っているベル先生にその理由を質問すると、

「だって私、治療は専門外だもの」

「だったらなんであなたが医務室の先生をやってるんですか？！」

予想だにしなかった答えが返ってきたので、ミントは思わず突っ込んだ。

「それはあれよ。ほら、医務室の先生って言ったら、美人でスタイルよくて白衣の似合う人って決まってるじゃない？」

「いや、んな変な固定観念で医務室の先生になっちゃったんですか！？」

「えー？　じゃあ、ミントくんはセルシオに看病とかしてもらいたいと思うのぉ？」

「いや、何故にセル先生が出てくるんですか？！」

「だって、この学校の教師でまともな回復魔法が使えるのはアイツだけだもの」

「いや、……って、えええ！？　セル先生って、回復魔法使えるんですか？！」

ベル先生の言葉から得た豆知識に、ミントが若干失礼ながらも驚くと、

「そうよぉ。セルシオって闇魔法と暗剣の他に回復魔法が得意だったりするの。まあ、見た目によらず、って言うかシャイでツンツン野郎だから他人にそれが伝わらないんだろうけど、子ども好きと言うか動物好きと言うか、そんなんだから得意なのね。きっと」

彼女も若干失礼な答えを返してきた。

「……なる、ほど……？」

動物好き、と聞いて、セル先生がプリンのように犬と戯れている姿を思い浮べた後、

「って、他の先生は回復魔法使えないんですか？　えっと、ピッド先生とか」

ミントは思い出したように質問した。

「ステイピッドも使えないわよ。アイツ、料理と裁縫は出来るけど、度胸と魔力があんまりないし」

「……度胸？　……あ、えと、ポリー先生とかは？」

「ポライトも使えないわ。まあ、初歩的なヤツなら魔法学教えてるだけあって使えるみたいだけど。あと、変態カーフェイとかお馬鹿クロレカとか無愛想リアラとか熱血クルーエルとか、校長のオーブとかも使えないわよ」

何か余分な言葉が入っていたように思えてならなかったミントが聞き返すと、ベル先生は肩をすくめつつ、ピッド先生とポリー先生と

フェイ先生とクー先生とリア先生とエル先生と、校長も回復魔法を使えないと答えてみせた。

「はへ～……」

それに頷いているのかと思いきや、

（校長の名前、初めて聞いた）

ミントは別のことに関心がいっていた。

「まあ、校長、って言っても、実質この学校を仕切ってるのは、あのチビッコ国王様なんだけどねぇ」

「はへ～……。……え?!　チビ――!?」

「あの子、お金持ちなところとカワイイところはいいんだけど、戦闘好きで困るのよねぇ」

「へ!?　や、ち、チビッ?!」

おかげでバトルイベントが多くて、私が回復魔法が使えないのがバレちゃうじゃない、とかぶつくさ言っているベル先生をよそに、ミントは思わぬ黒幕に動揺していた。

「……」

「?」

が、ベル先生がじーとこちらを見ていることに気付き、ミントは

冷静に疑問符を浮かべて小首を傾げた。

「チビッコ国王様で思い出したんだけど、ミントくんのご両親って、あの短足くんとブクブクちゃんなのよね？」

そして、彼女の質問に、彼の頭の上にデカイ漬物石が二つ降ってきた。

イメージ的に。

「ふぅん。あんまり似てないのね」

が、その言葉で漬物石は吹っ飛んだ。

イメージ的に。

「あの内気な炎くんとまな板ちゃんに育てられたとは思えないほど眼帯くんは積極的だし、あの積極的な猫ちゃんの子どもの子猫くんは消極的だし、あのお子様メニューが好きなセルシオと明るいのが取り柄のクロレカとの間の子どもはこの上なく無表情で無口だし」

そんな彼に構うことなく、顎に右手の人差し指を当てながら呟くベル先生。

「……え？」

彼女の口から飛び出した言葉に、え？　セル先生とクー先生って結婚してたんですか？　って言いますか、セル先生ってお子様メニューがお好きなんですか？　とミントが、どちらかと言うと後者を重点的に聞き返そうとしたところ、

「似てない家族も多いのね……ま、その点チロルちゃんは、髪と目

の色こそ変態カーフェイに似ちゃったものの、私にそっくりの美少女よねぇ♪」

ベル先生は、実はチロルのお母さんだった事実が発覚した。

「え、えええええ?!」

ので、ミントは本気で驚いた。

第１２２回　まとも日和

授業変更や行事のことなど、今後の予定とお知らせが張り出されているウサギさん寮の掲示板の前にて、

「……」

「……」

「……」

「……」

ミントとプリンとココアとポトフは、ある一点に視点を集中させていた。

「だしもの……ふむ、味噌汁か？」

「だし違いだバカヤロォ」

「か、各自がグループを作ってそれぞれ自由にだしものをするだなんてー……」

「なんてまともな学園祭なんだ……っ！」

そのある一点、学園祭のお知らせを見て、プリンは疑問符を浮かべてポトフは突っ込みを入れてココアとミントは驚いた。

「む？　じゃあ、だしってなんだ？」

「そりゃお前……えーとォ……わっしょーい？」

プリンとポトフがだしについて間違った解釈をしている隣で、

「クー先生……大丈夫かな？」

「うん……熱とか出して頭がまともになっちゃったのかなー？」

ミントとココアは、失礼な心配を募らせていた。

ぱーんぱーんぱーんぱーん

学園祭のお知らせが掲示された次の日、お空に花火が打ち上げられた。

「わは～、即興でやれってか～」

まさかと思って学校の外に出てみたのだが、そのまさかの学園祭翌

日決行に、もう笑うしかないミント。

「って、ええー？！　普通に考えてまだみんな何も考えてないでしょー！？」

「む、わたあめ屋さんだ」

「あっちには焼きそば売ってるぜェ？」

「かき氷屋さんもあるね」

「ノリよすぎだろみんなー？！」

びっくりしている隣で、プリンとポトフとミントが、自分たちが今いる玄関へ続く階段の下から始まるグラウンドにたくさん開かれているだしものを指差したので、ココアは頭を抱える羽目になった。

「あーもー、だしものって何やればいいのー？」

「ベタにいきたいけど、飲食店はほとんどもう他のみんながやってるしねぇ」

「それにこっちには枕もいるしなァ」

「むっ、どういう意味だっ！」

「「うんうん」」

「――！？」

喧嘩腰で聞き返したところでミントとココアが頷いたので、衝撃を受けたプリンは、

「……」

ちーん、と落ち込んだ。

「飲食店はなしってことにしてー、そーすると他に何があるかなー？」

「んー……あ！　ココアちゃんがお姫様で俺が王子様とか！」

「却下」

「はい、プリン」

「！　わー！　ありがとうミント！」

だしものを考えるココアとポトフと、落ち込んだ友人にプリンを差し出すミントと、プリンを貰ってたちまち機嫌を直すプリン。

「えェ？　じゃァ、ココアちゃんが王子様で俺がお姫様？」

「だから劇はやりたくないってば……って、なんで逆にしたのー？！」

「おいしい？」

「うむ！」

という具合に四人がごちゃごちゃしている間にも、他の生徒のみなさんは、楽しそうにものを売ったり買ったり。

「飲食店も劇もなしってなるとぉ……」

「なんかもーいいやって感じだねー？」

「別に絶対だしものをやらなきゃダメってわけじゃないしねぇ」

そんな彼らを見て、ポトフとココアとミントが早くも開き直りムードに突入しかけていると、

「……む？」

プリンを食べ終えたプリンが、ちょっと待ったというように小首を傾げた。

「でも、売り上げが最下位のグループは、一ヶ月間校内の掃除とか敷地内の手入れとか食堂の手伝いとか、そんな雑用をすることになっているぞ？」

ザ・罰ゲーム。

「待とう？　校内の掃除って、どんだけ広いか分かってる？」

「うむ。地下三階の七階建てで、計十階だな」

「えっとー、敷地内っていうのはー？」

「うむ。このセイクリッド島全域だな」

「食堂の手伝いとなるとォ……」

「うむ。全員が食べ終わるまで食べられないな」

こっくんこっくん頷いて、プリンがさらさら答えると、

「さあ考えよう！」

「えっと、さっきまでの話で飲食店と劇はなしだよねー！」

「となると、他には何があるんだろォなァ！」

ミントとココアとポトフは慌てて再び考えだした。

「む。アリさん」

その隣で、プリンは足元のアリさんを観察しだした。

「他……他には……」

「うーんとー……」

「学園祭って、普通どんなことをやるんだァ？」

うーんと首を捻るミントとココアに、ポトフがそのように質問すると、

「そーだねー、やっぱり飲食店やったり小物店やったりっていうイメージだけどー」

「うん。それで他には劇とか展覧会とか演奏とかライブとか――」

「「あ」」

答えの途中で、ミントとココアは顔を見合わせた。

「？　あ？」

何が”あ”なんだァ？　と、ポトフが疑問符を浮かべると、

「ウッドウォール！」

ミントは地面に左手をつけて魔法を唱えた。

ぶわっ！！

すると生まれる、玄関と階段を囲むような小規模な森。

「ココア！」

「うん！　シャドウエッジ！」

その森の手前と奥の一部だけを、ココアの闇魔法が切り裂いて、

「ポトフ、客よせ！」

「お？　お、おォ？」

ミントに腕を引かれて、ポトフはわけも分からず切り裂かれた奥の

一部、このステージの入り口へと移動した。

「ねー、プリンー？」

「む？」

その間、アリさんを観察していたプリンに、ココアはにっこり笑ってお願いした。

「歌って？」

バケツプリンをちらつかせながら。

綺麗な歌声とうっとりとした視線と悔しそうな視線で満ちたステージの入り口に、

「大成功だねー」

「満員御礼だねぇ」

ココアとミントは、入場料がいっぱい入った箱の隣に立っていた。

「この歌って、風の歌のパートと光の歌のパートがあったんだねー」

「”俺この歌知ってる”って言ってポトフがいきなりステージに上がって別パート歌いだしたからびっくりしたねぇ」

いつものごとく、ココアとコーラを頂きながら。

彼らの言葉通り、今、玄関先の階段のステージには、プリンとポトフが立っていて、二人一緒に歌を歌っている。

「綺麗な歌だねぇ」

「うん。かっこいいねー」

彼らの歌声を聞いてミント言うと、ココアはうっとりそう言った。

「あ」

が、すぐにはっと我に返ったココアは、

「あは、そうだね、かっこいいねぇ？」

「ち、違うよバ」

にやりと笑ったミントに何かを否定しようとしたところ、

ギッ！！

「っ、……ご、ごめんなさい」

複数のお客さんに睨み付けられ、おとなしく謝った。

第１２３回　出会い日和

冷たい風の吹く帰り道、白いコートを着て赤いランドセルを背負っている栗色の髪の少女、リンは、

「……なんでついてくる、ですか？」

つかず離れず隣を歩く黒いコートを着た黒髪の少年、ユウに、この冬の季節の気温に負けないくらい冷たい視線を向けた。

「おまえこそ、ついてくるな」

するとユウは、まだ新しく見える黒いランドセルを背負っているくせに、随分とさめた表情で、彼女の方を見もせずに冷たく言い返した。

「この道、リンのつうがくろ、です」

「きぐうだな。俺もだ」

「……ついてこられるのがいやなら、リンより先に行くか、後から帰ればいい、です」

「なんで俺がおまえのつごうに合わせてやらなければならない？と言うか、むしろおまえがそうすればいいだろ」

なんと言うか、小学一年生らしくない小学一年生ズである。

「このペースで帰れば、リン、ベストなタイミングで”イガグリの

おたけび”が見られる、です」

どうやら、謎なタイトルのテレビ番組を見る目的があるらしいリン。

「きぐうだな。俺もだ」

お前もか。

「あのイガグリのイガは、はんぱねぇ、です」

「ああ、はんぱなくしぶいな」

渋みを理解した小学一年生は、何やらテレビの話題で盛り上がる様子もなく盛り上がる。

タイトルから判断して、主人公のイガグリのイガが、二人曰く半端なく渋いらしい。

「でも、何ものかにさつがいされた、です」

主人公、死亡。

「まあ、黒まくはあの納豆だろ」

犯人、浮上。

「うらで糸を引いていた、ですね」

「納豆だけにな」

おあとがよろしいようで。

「……それはそうと、あなたといっしょにいると、リンがひがいをこうむる、です」

どうやらサスペンスものらしい、主人公が被害者というなんとも斬新な設定のテレビ番組の話題をぶった切り、リンは話を最初に戻した。

「は？」

たいして興味を示しているわけでもないが、ユウが疑問符を浮かべると、

「”アイらぶユウ隊”とか、ふざけた名前を名乗る三人組に、なぜかトイレで滝うちしゅぎょうみたいなことをさせられる、です」

リンは、さらりとそう言った。

「させられたのか？」

ので、ユウは聞き返す。

ただし、それは彼女を心配しての言葉ではない模様。

「まさか。となりの個室から、何食わぬ顔で出ていってやった、です」

リンは、再びさらりとそう言った。

「……おまえ何ものだ？」

詰まらなそうな顔をしつつも、どうやったら隣の個室から出てこられるのか疑問に思うユウ。

「リンは痛くもかゆくもないから別にかまわない、ですが、めんどうなのは、きらい、です。とくに、今日は」

そんな彼に、リンはランドセルを背負い直しながら、

「アイらぶユウ隊のバレンタインチョコを、あろうことか、あなたはクラスの男子ＡＢＣにゆずっていました、ですから」

と、相変わらずの無表情で言った。

「？　……ああ、何か知らんがあいつらがほしがってたからな」

「気持ちがこもったチョコレートをもらったのに、かのじょたちの目の前でいやがらせ、ですか？」

「は？　いやがらせしてきたのはあっちだろ？」

「……？」

何を言っているのか分からない様子のリンに、

「あんなまずいものを食えとか、ありえないだろ」

ユウは、さらりとそう言った。

「……。そんなことを言っていると、痛い目みる、ですよ？」

彼女たちの手作りチョコを全否定しているのか、それとも単純に甘いものが嫌いなのか、リンはそんなことを考えている途中で、後方から近づいてきた気配を察知して警告した。

「は？　――！」

その意味を理解する前に、ユウは何者かに右斜め後方から突撃された。

バシャーン！

ゆえに、川沿いを歩いていた彼は、川の中に弾き落とされた。

「ほらみたことか、です」

川に落ちた彼を見て、ノーリアクションなリンと、

「やば、やりすぎた？！」

「ほ、ほっとけよ、あんなやつ！」

「オレたちのことバカにするからわるいんだよ！」

顔を青くするといったリアクションを示すクラスの男子ＡＢＣ。

好きな女の子の名前とともに”ユウくんへ”とバッチリ書かれたバレンタインチョコを彼に渡されるという、なんとも屈辱的なことをされた彼らは、そのまま逃げるように走り去っていった。

「よそう外のことがおきたためにあせってもくげきしゃを放っておくとは、つめがあまい、ですね」

走り去る彼らの後ろ姿を見て、まあ別に告げ口なんかする気はないけど、とか思いながら、流石はサスペンスもののテレビを見ているだけあるような言葉を口にするリン。

「だいじょうぶ?!」

バシャーン！

「?」

その直後、リンの隣を何者かが駆け抜けていったかと思ったすぐ後に、背後で水に飛び込んだ音が聞こえてきたので、彼女は不思議に思って振り向いた。

――すると、

「……。おまえが、だいじょうぶか……?」

「う、わ、わ?!　ぼ、僕っ、そう言えばおよげないんだった!!」

そこには、水面から頭を出してぽかんとしているユウと、川で溺れている見知らぬ白髪の男の子がいた。

「けほこほ……っ、あ、ありがとう」

助けようとした彼に溺れているところを助けられ、その上彼女に岸にあがるところ手伝ってもらった少年は申し訳なさそうにお礼を言った。

「およげないのに、どうしてとびこんだ、ですか？」

そんな彼に、行動には実力を伴わなければならないという厳しい現実を理解させる意味を込めてリンが問うと、

「……ごめんなさい……」

彼は、しょぼんとうなだれて謝った。

「っ！？」

よって、言葉で表現することの出来ない胸の奥の痛み――良心の痛みを初めて覚えるリン。

「……あやまらなくていい」

「え？」

突然の痛みに混乱し、彼女が背中を向けて胸を押さえている時、ずぶ濡れのユウにも、何かの変化が起きていた。

「たすけてくれて、ありがとう」

ユウが、笑った。

「え？　そ、そんな！　僕の方こそ！　たすけてくれてありがとう、えっと……？」

ユウにお礼を言われ、慌ててもう一度お礼を言い返した彼は、発言の途中で疑問符を浮かべた。

「ユウだ」

「……リン、です」

「ユウと、リンだね。僕はアオイ。よろしくね」

昨日この町に引っ越してきたんだ、と付け足しつつ、彼、アオイは、二人に自己紹介をした。

――こうして、彼らは出会ったのであった。

≫≫≫

「みーつけた！」

「ふあ？！」

大きな木の幹にぽっかりと空いた穴の中に隠れていた彼を発見したアオイは、

「あれ？　寝てたのミント？」

驚いて起き上がったミントを見てそう尋ねた。

「え？　えっと……そうみたい」

すると、ミントは帽子を被り直しながらぎこちなく答えた。

「ごめんね。僕が探すの下手だから」

ので、退屈させてしまった責任を感じたアオイが、申し訳なさそうに謝った。

「へ？！　あ、いや、か、かくれんぼの途中なのに寝ちゃったオレが悪いんだよっ？」

ゆえに、慌ててフォローする、かくれんぼの途中で寝た不届き者、ミント。

「アオイ」

「見付けた、ですか？」

「あ、ユウ、リン。うん、今見付けたよ」

「では、これで終わり、ですね」

アオイの元にやってきた二人を見て、

「……ねえ、イガグリのおたけびって、知ってる？」

ミントは、先程見た妙にリアルな夢に出てきた謎番組のことを質問してみた。

「「は？」」

「あ、や。やっぱなんでもないよ。あはははは……」

すると二人が聞き返してきたので、やはりただの夢だったんだと思うミント。

「お前、あれを知ってるのか……！？」

「あの、傑作を……？！」

「……はい？」

が、ユウとリンは、驚いたような、それでいて仲間を見付けて喜んでいるような目をミントに向けてきた。

「え、えーと、イガグリのイガが最高に渋いっていう……？」

「「仲間」です」

試しに言ってみたところ、ミントはユウとリンにがっちり手を握られた。

「イガグリのおたけび？」

彼らの隣で、仲良しな三人を見てくすりと笑いつつ、謎なタイトルに小首を傾げるアオイであった。

第１２４回　散髪日和

緑豊かな森の奥に存在する小さな町、アクリウム。

カラコロカラン

その町外れの森の近くに位置する青い屋根の家の一階にある美容院に、二人の客がやってきた。

「いら――って、あれ？　シャーン？」

「おう、久しぶ」

ドアが開いた音を聞いて、客に対する典型的な挨拶をしようと振り向いた直後、茶髪お兄さん、ソラは、少し驚いたように客の名前を口にした。

「で、あってるよね？」

後、確認した。

「……。ええ、シャーンであってますとも勿論……」

久しぶりに会ったのにも関わらず、相変わらず扱いが酷いと言うか、そんなことを思いながら肯定するミントパパ、シャーン。

「……相変わらずだな、いろんな意味で」

「シャーンこそ、相変わらず……だね」

「一応伏せてくれたみたいだけど視線が如実に何が相変わらずなのか物語っている気がするんですがそこんところどうなんでしょうかねえソラさん?!」

文字通り、足元見てそう言ったソラに、シャーンは一気に突っ込んだ。

「いようソラ兄、ひっさしっぶり~♪」

すると彼の後ろから、もう一人の客、国王のルゥがひょっこり現れた。

「! ルゥ! 久しぶりだね」

「あれ、どして中腰になったのちょとねえソラ兄?」

彼に笑顔で挨拶を返したソラであったが、ルゥは彼の挨拶の仕方が気になった模様。

「こんなところになんのご用事ですか、国王様と兵士長様?」

そんな彼らを見て懐かしそうな笑顔を浮かべながら、ソラは二人の用件を丁寧に尋ねた。

「おお、久々にちょっと切ってもらおうと思っ」

「かしこまりましたー」

「ハハハ、何ゆえ剣をお抜きになられたのですかソラさん?」

答えるとすぐに了解してすらりと剣を抜いたソラに、シャーンは爽やかな笑顔で質問した。

「”さん”だなんて、そんなよそよそしい。僕とシャーンは、はじめまして以上こんにちは未満の仲でしょう？」

「え？　俺とソラってそんな挨拶もままならない関係だったの？　この人誰だか知らないけどよく見かけるなー的な？　って言うか、それならむしろその表現の方が適当だと思われるのですが？」

「うん。それで、僕に切ってもらいにわざわざシャイアから来たんでしょ？」

「うんまあ。て言うか、否定はしないんだ？　まあいいや。それはそうなんですけど、その立派な剣でどこ切る気なのか非常に気になりまして」

「手足三千、胴体二千、首千円になりまーす」

「うわぁ、もはや美容院に来た理由が分からない。て言うか、命に関わるところほど安くなるのはおかしいのでは？」

「それは勿論、こんにちは以上友達以下のシャーンだもん。友達プライス♪」

「いやいや、よく見かける人から一応友達レベルにランクアップしたのは嬉しいんですけども、そんなことガッツポーズしながら満面の笑みで言われましてもねえ……？」

お互い笑顔で会話をしながらも、きらきら輝くソラとは対照的に、シャーンはガンガン青くなる。

「そ、ソラ兄？　オレら、髪の毛を切ってもらいに来たんだよ……？」

青い顔のまま笑っているシャーンの隣で、ルゥは引きつりまくった笑顔でそう言った。

「あは、やだなぁ、そんなの分かってるよ。じょーだんじょーだん♪　……ち」

（（笑顔で舌打ちしなさった?!））

素敵な笑顔が印象的なかつての旅の仲間に、ガクガクブルブル震える国王と兵士長であった。

白銀の髪にはさみが入って、それがぱさりと床に落ちると、

「じゃあ、また城を抜け出してここに来たの？」

ソラは疑問符を浮かべながら質問をした。

「おう！　オレ、ソラ兄に会いたかってん♪」

「いや、それは嬉しいんだけど」

きゃぴっと脱出してきた理由をルゥが答えると、

「髪をこんなに切っちゃったら、バレバレなんじゃない？」

ソラが、ご尤な意見を口にした。

「あ」

今気付いたのか。

「う、ああ！　ソラ兄やっぱ短くするの変更変更！」

「えー？　もうこんなに切っちゃったのにー？」

「ってもう既に後戻り出来ない状況？！」

鏡に映った自分を見て、言うの遅いよ！　と嘆く、気付くの遅いルゥ。

「くそう！　こうなったらすべてシャーンのせいにしてやる！」

「いや最初からその気で俺を強制連行したんだろお前？」

「え、なんのこと？　自意識過剰じゃね？」

「諦めろ。俺なんかとうの昔に、お前が城から抜け出すとか言い出した時からもう既に諦めてるんだぞ？」

「まあ、シャーンは人生も諦めてるしな」

「張り倒すぞテメェ」

そんな会話をするルゥとシャーンを懐かしく思いながら、休まずに手を動かすソラ。

「あ。そう言えば、昨日シャイアに買い物に行った時に、妙にご機嫌なジャンヌを見かけたんだけど、何かいいことでもあったの？」

懐かしついでに思い出したのか、ソラは紅茶をいただいているシャーンに質問した。

「お？　ああ、昨日は」

「ソラ兄、パー子がテンション高いのはいつものことだよ？」

「あながち外れてねえけど黙ってろ」

ので、シャーンはルゥを黙らせた後、

「昨日、母の日のプレゼントが届いてな」

ミントから、と付け足しつつさらりとそう答えた。

「うええ?!　ミント病気なのか!?」

「へえ〜、プレゼントって?」

ミントの頭を心配するルゥと、母の日のプレゼントをあげたミントに感心するソラ。

反応は違えど、二人とも、実はジャンヌを母親と認めていたミントに、失礼ながら驚いていた。

「カーネーションと、凝固剤」

そしてジャンヌに贈られた、意味深なプレゼント。

「……」

「……」

「いい子だねぇ」

「深いぜミント」

数秒の沈黙を経て、ほのぼのしたソラと、プレゼントの内容の深さに感心するルゥ。

「シャーンは去年の父の日に何か貰ったの?」

そのついでに、ソラは再び質問した。

「……っ」

すると、シャーンはボーンと落ち込んだ。

「あれ？　貰えなかったの？」

突然うなだれた彼を見て、ソラがきょとんとしていると、

「……や、貰いましたよ？　貰いましたともええ勿論……」

シャーンはうなだれたまま、消えそうな声で呟いた。

「？　何を貰ったんだ？」

貰ったのに喜んでいないということは、内容に問題があったのかと思ったルゥが尋ねると、

「……シークレットブーツ」

シャーンはぼそりとお答えになった。

「「うわ、超いい子」」

それを聞いた二人は、声を揃えてそう言った。

「パー子は溶けないように、シャーンは足が長く見えるように、って、おまっ、ミントって実は超親想いじゃねぇか？！」

「想ってくれるのはありがたいんだが露骨すぎると言うか直球すぎると言うか、とにかくもう少しオブラートに包んでいただきたいん

だようわーん！！」

感動するルゥと、ナイーヴなシャーンと、

「……」

現在手にしているはさみを見て、嬉しそうに微笑むソラ。

「って、え？　ソラ兄、なんか思い出しちゃった感じ？」

「父の日のプレゼント、かあ……」

「いや、思わず笑みがこぼれるほど素敵エピソードがあったんだとしても上の空でのカッティングはやめていただきたいんですけどねえソラ兄いいいいい？！」

息子からのプレゼントに、片や泣いて、片や笑うパパ二人と、よく言えば元気いっぱいの、悪く言えばやかましい国王様であった。

第１２５回　ちび日和

夜の薄暗い校舎を歩きながら、

「コーラを切らしちゃうなんて、オレとしたことが、だよ。まったく……」

コーラを持ったミントは、自分に対して呆れたように呟いた。

「ただいまー」

そうして寮に戻った彼が、彼の部屋のドアを開けると、

「ぐー」

いつものように、友人のいびきが聞こえてきた。

「……ん？」

が、首を傾げるミント。

「プリン、声高くなってない？」

そんなことを言いながら、ミントが彼の元に移動すると、

「って」

「ぐー」

そこには、いつものような体勢で眠っているプリンがいた。

「え？　あれ？　何ゆえ縮んでるのさプリン？」

ただし、元の身長から、１００センチメートル以上縮んでいる状態で。

「――はっ！？　まっ、まさかプリン、全身真っ黒な人たちのなんか悪い取り引き現場を目撃しちゃって背後から近づいてきたその人たちの仲間に何か鈍器的なもので殴られて気絶している間に毒薬を――？！」

と、何やら危険な推測をミントがしている途中で、

『ェ～ん……ふえェ～ん』

どこからか、泣き声が聞こえてきた。

「これでよし……って、え？」

何故だかは分からないが、ちっちゃいプリンに眼鏡をかけさせたミントは、その声に反応して振り向いた。

『ふえェ～ん……ごほこほっ……ふえェ～ん』

泣き声は、どうやらお風呂の方から聞こえてくるようだ。

「……」

まさか。

「ぽ、ポトフ？　開けるよぉ？」

嫌ーな予感がビシバシ伝わってきながらも、ミントはそーっとお風呂場のドアを開けてみた。

「「！」」

すると、姿を現したちっちゃいポトフにミントはびっくり。
ミントの登場にポトフもびっくり。

「えええ！？　なんでポトフまでちっちゃくなってるのさ？！　あれか！？　まさかあの毒薬を作った人なのか？！」

などと、ミントが再びわけの分からない上に危険極まりないことを口にすると、

「ふえェ～ん！！」

ちっちゃいポトフはててとこちらにやって来て、ひしっとミントの足にしがみついた。

「うわお？！　な、なんで泣いてんのさ！？　どしたのさ？！」

そう言えば泣いてたんだったと思い出したミントが、慌てて彼に尋ねると、

「ふえっ……っ……お、おねがい……」

ちっちゃいポトフは茶色の瞳いっぱいに涙を浮かべ、彼のズボンを

ぎゅうっと握り締めながらこう言った。

「ひとりにしないで……っ！」

ないで、ないで、ないで……。

流石、お風呂場だけあってエコーもばっちりである。

「――っ」

なんなんだこの儚い生命体は?！　と思いながらも、生憎、今しがた買ってきた風呂上がりの冷え冷えのコーラを左手に持っていたミントは、

「あ。ほら、これでもう淋しくないよ?」

その時、偶然視界の隅に捕えた、脱衣場のカゴの上に乗っていたアヒルちゃんを渡しながら、彼に向けてそう言った。

「……！　うん！」

わぁ単純。

「……。成程。だからポトフは毎回アヒルちゃんを浮かべたがってたのか……」

部屋に戻ってベッドに座り、小さく呟きながらコーラを一口。

きっと昔、ソラさんかエリアさんがオレと同じことをしたのだろう。

……。

……、昔?

「って、だからなんでちっちゃくなってるのさあああ?!」

思考の途中で、ようやくミントは話の中心に突っ込んだ。

朝日が眩しい校舎を歩きながら、

「……なんで……」

ミントはがっくりと頭を落とした。

「ぷぅりぃん♪　ぷぅりぃん♪」

「ハンバーグ♪　ハンバーグ♪」

（なんでちっちゃくなったら早起きになるのさぁっ?!）

理由は、未だちっちゃいプリンとポトフに叩き起こされたから。

「?　どうしたの、おにいさん?」

元気のない彼に気が付き、プリンコールをやめたプリンが下からミントを見上げると、

「へ？　あ、いや、なんでもないよ？」

彼は困ったように笑いながらそう応えた。

（なんか記憶もおかしくなってるみたいだし……）

と言うのも、プリンとポトフがミントのことが分からなくなっているから。

「おにぃたん、おんぶー！」

といっても、すっかり懐いている様子ではあるが。

「じぶんであるけ！」

「やだ！　おにぃた～ん」

「はいはい」

ちっちゃくなっても相変わらずな二人に苦笑いを浮かべながら、ミントがひょいっとポトフを背負った。

「むー、僕もー！」

「ダメー。おまえ、さっきじぶんであるけっていってただろォ？」

「そ、それは……」

「じぶんでいったんだから、おまえはあるけよな？」

「……っ」

「いこ、おにぃたん。ハンバーグ♪　ハンバーグ♪」

すると、二人が口喧嘩し始めたので、

（おお、プリンがポトフに口喧嘩で負けている）

目の前の珍しい光景を、ミントは黙って眺めていた。

「……ぅ……」

「――？！」

が、そういうわけにはいかなくなった。

何故なら、プリンが今にも泣き出しそうになっているから。

「ぴえ―…」

「よーしよしよしいい子だねえええ！？」

ぴえーんと泣き出す前に、ミントは高速でプリンをだっこした。

第１２６回　生物日和

「……うそ……」

ウサギさん寮を出ると、その先に広がっていた光景に、ミントは思わず動きを止めた。

「おお、おまえヒゲまではえてるやん！」

「ひにゃあ？！　ややややめてくださいーっ！！」

「アタイがつまで、あなたがしゅうとめ。で、あなたはおっとのあいじんやくね？」

「どこでおぼえてきたと言いますか、どんなドロドロおままごとをしたいんですか、あなたは？」

「しゅうとめとあいじんってなーにー？」

「ぜんぽうにカワイイ女の子はっけん！　いくぞみんな、スカートめくり隊ー！」

「「スカートめくり隊ー！」」

ミントの先に広がっていた光景、それは、何やら見たことがあるって言うかむしろ名前も知っている気がするちびっこたちが、それぞれ楽しそうに騒いでいる様子。

「タマゴとサラダはおいかけっこしてるしチロルとアロエとココア

はなんか壮絶な設定のおままごとしてるし元チロルファンクラブはスカートめくり隊とか意味不明なもの結成してるし……ん？」

みんながみんなちびっこ化している事態に茫然としているミントの前を、周りより一際ちびっこ化している人物、四足歩行している一人の赤子が通りかかった。

「！　ま、まさか……？」

銀髪に紫の目に、おしゃぶり。

「……。ふっ」

（ベビーセル先生に鼻で笑われた？！）

さして興味なさそうに再び歩き始めたセル先生に、ミントは衝撃を受けていた。

「わー、ちびっこ、いっぱい」

「いっぱいだなァ」

いや、お前らもな。

そんな突っ込みも忘れるほどに、ミントがぽかんと口を開けて立ち尽くしていると、

ぶわんっ

彼の目の前に、紫色の丸い穴が出現した。

「みんとーん！！　遊んでまろー！！」

『む～む～！』

そして、ちびっこがまた増えた。

「僕のーっ」

「俺のォ！」

『む～～～』

プリンとポトフによって左右に引っ張られ、みょーんとむぅちゃんが伸びている隣で、

「まろ……詰まり、一夜にしてみんながちびっこになっちゃったまろね？」

「うん、そうみたい」

ミントがマロに状況を説明していた。

「まろろ、こっちにもいたまろね」

すると、マロは驚いたように呟いた。

「？　いたって、何が？」

ので、ミントが小首を傾げて聞き返すと、

「これは夢魔の仕業まろ」

マロは、ピエロ鼻をミントに向けてそう答えた。

「……」

「……」

「「……」」

間。

「……え？　夢魔って、あれ？」

ライトグリーンの瞳をぱちくりさせながら、ミントがみょーんと伸びているむぅちゃんを指差すと、

「そうまろ。あれまろ」

ルビーの瞳をみょーんと縮んだむぅちゃんに向けて頷いた。

「……」

「……」

「「……」」

間。

「えええ?!　むぅちゃんにそんな能力が!?」

「まろ。夢魔は夢を吸収して獲物を弱体化させる能力をもつ魔物まろ。夢魔に夢を吸収されると獲物はちびっこ化して、ちびっこ化は吸収された獲物の夢が大きければ大きいほど進むまろ」

驚いたミントに、夢魔の説明をするマロ。

「夢を?」

するとあれか?　ポトフはお風呂場でうとうとしてたのか?　とか思いながら、ミントは彼女の言葉を聞き返した。

「そうまろ」

「そうなんだ。……でも、相手をちびっこ化させてどうするのさ?」

こくりと頷いたマロに、ミントが再び質問すると、

「……」

マロは、ぽかんと口を開けてミントをまじまじと見つめてきた。

「？」

ので、ミントが小首を傾げると、

「みんとん、そんなことも分からないまろ？」

「え？」

マロは、驚き呆れたように口を開いた。

「仕留める相手を弱らせるのは、基本中の基本まろ」

「……へ？」

「ちびっこ化させれば、獲物はほとんどの場合弱くなるまろ。だから、そこを叩くまろ」

何やら危険なことをさらさら語るマロに、

「ちょ、ちょっと待ってよ？　仕留めるってどういうこと？」

ミントは慌てて口を挟んだ。

「何言ってるまろ？　魔物が人間や他の動物を襲うのは、当たり前のことまろよ？」

が、マロは当たり前のように切り返してきた。

「そんな」

「みんとんたちも他の動物を食べてるまろよ？　魔物だって生き物まろ。何か食べないと死んじゃうまろ」

「それは……そうだろうけど……で、でもむぅちゃんは――」

「むぅちゃんは人間型のマロと一緒にいるから街で食物を買えるまろ。だからみんとんたちを襲わないまろ」

彼の言葉を遮って、マロは至極当然のことのように説明を続ける。

「だから、みんとんたちが魔物を返り討ちにするのも当然まろ。やらなきゃ、やられちゃうまろ」

自分が生き残る為に戦う。

何やらずっしりと重い話である。

「……まあ、当然と言っても、魔物はずるいまろね。勝負に負けたら栄養になる死体を残さずに消えちゃうまろ」

てへっと頬を掻きながら、マロは話を締め括った。

「……。人間型？」

筋の通った説明に納得している途中で、ミントはどこか引っ掛かった言葉を聞き返した。

「まろ？　気付かなかったまろか？」

すると、マロはくるりと回ってこう言った。

「まろ、魔物まろよ？」

「え？」

「ついでに、フランも魔物まろ」

「えええ？！」

知られざる事実に驚くミント。

「まろろ♪　さあ、イケメンセクシーフレンドをもとの姿に戻す為にも、夢魔の根城に殴り込みまろー！」

そんな彼を見て面白そうに笑いながら、マロは拳を高々とあげて、重たい空気をぶっ飛ばした。

第１２７回　むむむ日和

『むぅむぅ……むう！』

ちょこちょこちょこちょこちょこ

「「わー……！」」

辺りのにおいを嗅ぎ分けながら、ちょこちょこ歩く淡い紫の丸い魔物、むぅちゃんの後を、目を輝かせながら追い掛けるのは、プリンとポトフ。

「夢を吸収するなら、なんでオレだけなんともないんだろ？」

そんな一匹と二人を見ながら、ふと疑問を口にしたのは、その後を歩くミント。

「それは、みんとんが見た夢に関係があるまろ。夢魔は、幸せな夢を好むまろ」

ミントの隣を歩きながら彼の疑問に答えたのは、ピエロ少女、マロ。

「詰まり、みんとんは夢魔が嫌いな不幸な夢を見てたまろ」

「わは～、夢まで不幸体質なのオレ？」

見た夢を覚えているわけではないけれど、マロの言葉に爽やかに落ち込むミント。

「じゃあ、弱体化させたのに襲ってこない理由は？」

が、落ち込んでいる場合ではない。

ミントは再びマロに質問した。

「人間は夜から朝にかけて夢を見るまろ？　夢魔は本来、夜行性まろ。だからきっと、今日の夜に奇襲するつもりまろ」

その問いに、マロは、目の前を短い足でちょこちょこ歩く、本来持っていた筈の習性がすっかり狂ってしまったむぅちゃんを見ながらそう答えた。

『む～！』

そうしてしばらくすると、むぅちゃんは足を止めて大きく鳴いた。

「「！」」

それに従って足を止めたミントとマロは、目の前にある、山の中の急な斜面にぽっかり空いた、大きな穴に目を向けた。

「え？　何この不自然な洞窟？」

明らかに自然にできた感じのしない洞窟に、ミントが疑問符を浮かべると、

「ここが夢魔の根城まろ。ね、むぅちゃん？」

『む～』

マロが質問に答え、むぅちゃんが前足で洞窟の中をピンピンと指差した。

「どうくつだ！」

「どうくつ！」

「キミらはここでお留守番」

「「ええ～？」」

洞窟に入る気満々のプリンとポトフの襟首を引っ掴んでミントが言うと、彼らは口を尖らせた。

「むぅちゃんもここでお留守番まろ」

『むぅ？』

その隣でマロが言うと、首がないむぅちゃんは全身を傾けた。

「だって他の夢魔が一緒にいたら、区別がつかなくなっちゃうまろ」

マロは、さらりとそう言った。

『――？！』

むぅちゃんのバックに、ピシャーンと勢い良く雷が落ちた。

「ほら、飴あげるから。ここでいい子にして待ってるんだよ？」

「「……はーい」」

飴を貰って渋々了解したプリンとポトフと、

「行こまろ、みんとん」

「うん」

『むぅ……むぅ……』

たれ耳を更に垂らして短い足で”の”の字を書く、親友に他の夢魔と区別がつかないと言われて言いようのないほど落ち込んだむぅちゃんであった。

「あ、ここ、山のなかなんだっけ！」

洞窟の中を進んでいる途中で、ミントはふと足を止めた。

「プリンとポトフ、大丈夫かな？」

そして、ちっちゃい友達を心配して振り返る。

「まろろ、心配しなくて大丈夫まろ」

薄暗い洞窟の中で、サンタクロースのトナカイさながらに真っ赤なお鼻を光らせているマロは、

「イケメンセクシーフレンドには、むぅちゃんがついてるまろ」

にこっと笑ってそう言った。

「え？　いや、そうだけど――」

イケメンセクシーフレンドって長ぇって言うかむぅちゃんじゃちょっと不安でない？　とか思ったミントが口を開きかけると、

「――！　下がるまろ！」

「うわあ？！」

ぴくんと何かを察知したマロが、彼の上着のフードを引っ掴んで後ろに引っ張った。

――直後、

びゅおん！！

彼らの目の前、詰まり、先程までミントが立っていた場所を、旋風が駆け抜けていった。

「へ？　な、何……？」

びっくりフェイスのミントに、

「友達の心配してる間に忘れちゃったまろか？　ここは敵陣まろよ？」

マロは、油断なく辺りを警戒しながらそう言った。

「！　来るまろ！」

そんなわずかな間にも敵の気配はどんどん増え、そのうちの一つがこちらに向ってくることを感じ取ったマロがミントにもそれを教えてあげたとほぼ同時に、

『む～』

ほの暗い洞窟の向こうから、一匹のまん丸生物が現れた。

「あれ？　むぅちゃ」

それを見て驚いたミントが近づこうとしたところ、

「何やってるまろ、みんとん！？」

マロは再び彼のフードを引っ掴んで後ろに引っ張った。

ヒュッ

ミントが一秒前よりも短い時間、先程まで立っていた場所に、まん丸生物、もとい、夢魔が、長いたれ耳で作った拳を振り下ろした。

ドゴオオオオオオン！！

すると、見事なクレーターの出来上がり。

「……え？」

目の前で起こった信じられない出来事に、ミントが顔を青くして目を見開き、口を引きつらせて冷や汗を浮かべていると、

「もう、むぅちゃんは洞窟の入り口でお留守番してるまろ。だから、あれはむぅちゃんじゃないまろ」

腰に手を当てたマロが、呆れたように小さく息をついた。

「い、いやいや、いやいやいやいやいやいや」

すると、ミントは何かを否定し始めた。

「？　何をそんな必死に否定してるまろ？」

縦にした左手と首を左右に振っていやいや言っている彼に、マロが疑問符を浮かべると、

「おかしいでしょ。絶対おかしいでしょ」

ミントは、目の前の現実を拒絶した。

「何がおかしいまろ？」

「すべてがおかしいでしょ」

マロの問いに即答するミント。

ドゴオオオオオオン！！

勿論、敵も悠長に会話する時間なんて与えてくれはしない。

「何まろ？　何が不満まろ？　何が不服まろ？」

「あのちょこちょこ歩いてむぅむぅ鳴くあの子がこんな怪力」

ドゴオオオオオオン！！

「な上にこんな俊敏なのは絶対おかしいでしょおおお？！」

仕方がないので、野生の夢魔のパワフルかつスピーディーな攻撃を避けながら会話するマロとミント。

「？　むぅちゃんだってこのくらいできる」

ドゴオオオオオオン！！

「し、みんとんもこの洞窟入る前に分かってたでしょまろ？」

ピエロ的な動きで軽やかに避けられ、標的を失った耳パンチが地面や壁にクレーターを作っていく。

「え？」

「夢魔は、己の拳で山に根城を作るまろ」

うぅん、パワフル。

「見た目とギャップありすぎだろおおお？！」

「まろろ、力だけならドラゴンと夢魔は張り合えるまろからねぇ～」

「弱体化させる意味ねえええええ！？」

ドゴオオオオオオン！！

こうして、ご尤な突っ込みをぶちかますミントと、ほのぼの笑いをぶちかますマロと、渾身の耳パンチぶちかます夢魔たちとの戦いが始まったのであった。

第１２８回　ピエロ日和

国立魔法学校の裏山の中にて。

「……むぅ……」

夢魔の拳によって作られた洞窟を覗き込みながら、ちっちゃいプリンは帰りの遅いミントを心配していた。

「ヒ～マ～だァ！」

その近くにあった枯れた木の上に何故か登ったちっちゃいポトフは、枝の上に腰掛けて、退屈そうに足をぶらぶらさせていた。

『む～』

それに同意するように鳴いたむぅちゃんは、彼の頭の上に乗っている。

「てなわけで」

何か考え付いたのか、ポトフは枝の上から飛び降りて地面にしゅたっと着地した後、

「あそぼォ？」

いつもと違って、何やらえらく素直にプリンに遊びのお誘いをした。

「！　……、あそぶ？」

彼の口から出た言葉を、びっくりフェイスで聞き返すプリン。

「そォだなァ……」

その反応を、何で遊ぶのかという疑問と解釈したポトフは、うーんと少し考え始めた。

「サッカーやろォ！」

人数的に無理があるかと。

「……？　サッカー？」

彼の提案に、何それ？　的な表情で小首を傾げるプリン。

「サッカーは、ボールをけるんだよ」

そんな彼に、ポトフは物凄く漠然としたルールを説明した。

「でも、ボールない」

ふむふむと頷いてから、プリンは蹴るようなボールがないことを指摘した。

「あ、そっか。う～ん、なにかないかなァ？」

そうして、ポトフとプリンはボールの代役になるものをキョロキョロと探し始めた。

「う〜ん……まるいもの、まるいもの……」

きょろきょろ。

「むぅ……まるいもの」

きょろきょろ。

『むぅむぅ、む〜』

きょろきょろ。

「「……」」

てんてんてん。

『？　むぅ？』

こちらに向けた目をきらーんと光らせた二人に、からだ全体を傾けるむぅちゃんであった。

一方その頃、夢魔の根城に侵入したミントとマロの二人は、

「ちょ、待ってよ!?　出来るだけ平和的に！　そう！　平和的に話し合いで解決」

ドゴオオオオオオン!!

「しましょうよおおおおお?!」

ちっちゃいボディから繰り出される強烈パンチを必死に避けていた。

「は……はあ……聞く耳なしですか」

軽く息切れしながらミントが呟くと、

『む～!!』

ドゴオオオオオオン!!

殴る耳が飛んできた。

「ああ、もう！　だからなんで急に学校を襲っちゃえ大作戦を企てたのさあああ?!」

それを走って避けながらミントが叫ぶと、

『むむ～!!』

夢魔が声を発したが、悲しいことに理解不能。

「だからそんな一音で微妙に強弱と長短を変えて表現されたって何言ってるのか全然分かんな――はっ！　マロ！！」

言葉の壁に頭を抱えている途中で、何かにはっとしたミントは、マロにバッと顔を向けた。

「まろろ……みんとん、意外と平和主義」

「そりゃあ、っ話し合いで解決出来るなら戦う必要ないでしょう？！」

意外そうに呟いた言葉に、ミントが夢魔の攻撃を避けながら応えた。

「分かったまろ。夢魔の言葉を訳せばいいまろね？」

マロは、タンッと地を蹴ってくるりと宙返りして夢魔の拳を躱(かわ)すと、

「うん、お願い！」

頷いたミントの隣に着地して、彼に向かってくる夢魔の言葉を待った。

その間に間合いを詰めた夢魔は、伸縮自在らしい耳を思い切り引いてパンチに勢いをつけ、

『む～！！』

鳴いた。

「”歯ぁ食い縛れえ！！”」

ドゴオオオオオオン！！

そして、ミントがぶっ飛んだ。

「って、みんとーん？！」

マロの訳を聞いて思わず動きが止まってしまったミントが夢魔の拳をまともに腹に受けたので、彼女が慌てて彼に駆け寄ると、

「みんとん、大丈夫まろか？！」

「嘘だ！　嘘だぁ！！」

「何必死に現実逃避してるまろか！？」

ミントが痛みも忘れて現実逃避していたので、マロは心配も忘れて突っ込んだ。

「そんな、あの”む～”がそんな番長的な意味合いの言葉だっただなんて……」

「いや、すべての”む～”がそういうわけじゃないまろよ？」

「これじゃあ百パー話し合いで解決出来ないじゃんか！？」

「まー話し合い以前に会話にすらなってないまろからね」

深刻な表情で頭を抱えるミントに、のほほんとした表情で受け答え

るマロ。

「……じゃあ仕方ない。ここは実力行使といくしか」

腹を括ったミントは、そう言いながらなんかかっこよく立ち上がると、

ぼてっ

「みんとーん?!」

倒れた。

「みんとん、大丈夫まろか?!」

「ズッキーンてきた。今更ながらすっげーズッキーンてきた」

「はう!?　そう言えば、みんとん、夢魔の攻撃をもろに!」

うつぶせに倒れたまま言うなんかカッコ悪いミントを見て、マロは、彼が夢魔の耳パンチを食らっていたことを思い出した。

「まろろ……なら、ここはまろが」

そう言って、マロは立ち上がるとキッと夢魔たちを振り向いた。

『『む〜!!』』

すると、やんのかコラ、とでも言うように耳を振り上げる夢魔たち。

「魔王の実力、魅せてやるまろ！！」

そんな威嚇をものともせずに、マロは両手を広げて一気に魔力を練り上げた。

「――ラスカルクラウン！！」

彼女が叫ぶと同時に、水玉模様の巨大な玉がどこからともなく転がってきて、巨大な流れ星がいくつも降り注ぎ、最後に巨大なピエロが地面からびっくり箱のごとく飛び出した。

第１２９回　主役日和

ピエロ少女、マロの、えらくリアリティーのない攻撃魔法が終了すると、

「どーおだっ♪」

もうもうと立ちこめている爆煙を見ながら、マロはえへんと胸を張って仁王立ちした。

「な、何やらすごい魔法だったね？」

痛みが治まってきたのか、ミントがゆっくりと立ち上がると、

「当然まろ。今のはまろの中で一番魔力を消費する一番強い魔法まろっ！」

マロは、こちらを向いてにこっと笑いながらそう言った。

――直後、

『むぅ……む～』

「え」

夢魔の鳴き声が、聞こえてきた。

『むむ』

『……むぅ』

『む～……』

しかも、複数。

「マロさんマロさん。魔王様が最強魔法をお使いになりはったのに、まったく倒せてませんよ？」

それを見て固まったマロにミントが言うと、

「そ……そんな筈は……、あ！　そ、そうまろ！　きっと数が多かったからまろ！　さっきの魔法はもともとは対勇者御一行用の魔王お約束の一撃でパーティー全員の体力をギリギリまで減らす為の魔法まろ！　だから四人以上になるとキツかったんだまろ！」

彼女は冷や汗を掻きながら言い訳を言い出した。

「へ～え？」

「ま！？　な、何まろその目は？！　信じてないまろな！？」

必死に弁解する彼女をじとーとした目で見るミント。

「まろ～、こうなったら、秘奥義を使ってやるまろっ！」

すると魔王のプライドというものがあるのか、マロは、残り少ない魔力を振り絞り、秘奥義なるものを持ち出した。

「勇者召喚！！」

と思いきや、プライドもへったくれもなかった。

ぶわんっ

「うわあ?!」

魔王が勇者を喚(よ)んじゃった。

「！　アオイ!」

「いたた……あ、ミント。おはよう」

ミントが勇者、アオイの、ワープホールからの登場に驚いていると、彼はくすりと笑ってミントに挨拶をした。

「あ、うん。おはよ」

ので、思わずつられて挨拶を返してしまったミント。

「あおぴょん、助けてまろ!!」

プライドなんてくそ食らえなマロ。

「え?」

突然助けを求められ、小首を傾げるアオイ。

「どうしたの―…」

「伏せてアオイ!!」

「…―？！」

バシーン！！

事情を聞こうとしたアオイに襲い掛かろうとしていた夢魔を、ミントが呼び出した薔薇の鞭で迎え撃った。

「え？　むぅちゃんが増えてる？」

吹っ飛んだ夢魔と、その先に見える複数の夢魔たちを見て、ぽこぽこと疑問符を浮かべるアオイに、

「あれはむぅちゃんじゃなくて何故か凶暴化した夢魔まろ！」

「それで、取り敢えずおとなしくしてもらう為にアオイに来てもらったんだよ」

マロとミントが、簡潔に状況を説明した。

「？　あの、むぅちゃんのそっくりさんたちを、おとなしく？」

が、やはり伝わらなかったようで。

「いい？　見ててアオイ」

まあ、それは仕方がないと言ってしまえば仕方がないと思ったミントは、再び向ってきた夢魔をギリギリまで引き付け、

『む～！』

ドゴオオオオオン！！

夢魔に、クレーターを作らせた。

「……わあ……」

思いもしなかった光景に、くすくす笑いが特徴的なアオイの顔も、流石に引きつった。

「だから、お願い！」

タッと彼の後ろに着地したミントが、油断なくローズホイップを構えながらお願いすると、

「う、うん。分かった」

アオイは、こちらの世界に召喚されたと同時に装備された、銀色に美しく輝く剣を背負っている鞘からすらりと抜いた。

こうして、お互い背中を任せる形になったミントとアオイを見て、

「……。やっぱり女の子に見えるまろ」

マロは何か呟いた。

「オレは男だ！」

「僕は男だよぅ！」

それが聞こえてしまったらしく、ミントとアオイが同時に反論した。

『『むむ～！！』』

そんな隙を見逃してくれるほど優しくはない夢魔たちは、全方向から一斉攻撃を仕掛けた。

「って、言ってる場合じゃないね」

「うんっ」

ので、二人はそれぞれの武器を手に、夢魔たちに立ち向かっていった。

そうして、夢魔の拳の音とそれを剣で防ぐ音や鞭で弾き返す音が洞窟内に響き始める。

「まろろ……」

そんな彼らを見て、魔力がなくなって地面に座り込んでいるマロは真紅の瞳を輝かせ、

「まろ、囚われのお姫様みたいまろー！！」

テンション高めで何か叫んだ。

ヒュバアアアアン！！

「まろほぉ？！」

すると、流れ弾ならぬ流れ鞭が飛んできた。

「あ、ごめん。当たっちゃった？」

彼女に謝りつつも、再び真剣な表情で鞭を夢魔に向けて走らせるミント。

どうやら、本当に流れ鞭だったらしい。

「マッド！」

『『ジェラファ！！』』

薔薇の鞭でぶっ飛ばし、先程のマロの攻撃魔法のおかげもあってか、洞窟の壁に激突して、きゅ～と伸びた夢魔を、右手に装備したマッドホイップで回収するミント。

ごっくん♪

夢魔がマッドに丸呑みされる、なかなかのショッキング映像。

『む～！！』

「っ、えいっ！」

そんな彼の後方で、振り下ろされた拳を剣で弾き返した後、アオイは隙の出来た夢魔に剣を振り下ろした。

『むむぅ！』

が、

パシィッ！！

夢魔に、見切られた。

「え？」

長い耳で剣を挟んだ、詰まり、真剣白刃取りを見事に決められ、驚いたアオイは隙だらけ。

『むむ～！！』

「――！」

ドゴオオオオオオン！！

よって、そこにやって来た別の夢魔の拳が思い切りヒットした。

『『むむぅ？！』』

夢魔に。

「あ、思わず盾にしちゃった……」

殴られた方の夢魔と殴った方の夢魔が不測の事態に驚いているなか、自分の剣を挟んでいた夢魔を盾にしたアオイは、

「えっと……ごめんね。えいっ！」

動きが止まっている二匹に剣を振り下ろした。

「はあっ！」

「えいえいっ！」

「蓮華！！」

「みじん切り！！」

そんなこんなで、やがて鞭と剣を振るう音しか聞こえなくなると、

「ま、ろろ……これも一重に、最初のまろの最強魔法があったおかげまろね！」

流れ鞭を食らって腫れ上がった頬を押さえながら、マロは自分の強さを誰にともなくアピールした。

「これでぇ」

「最後だよっ」

「「たあ！」」

その声が聞こえなかったのか、そんなマロを相手にすることもなく、ミントとアオイはそれぞれ同時に最後に残った夢魔をぶっ飛ばした。

『『……きゅ～……』』

「……ふうっ、お疲れアオイ」

「うん。ミントもお疲れ様」

くるくると目を回している夢魔を確認した後、武器をしまいながらお互いを労うミントとアオイ。

「じゃあ、怒ってた理由を聞かなくちゃね」

そう言って、ミントはマッドホイップを見た。

『ジェロロロロ』

夢魔がマッドから吐き出される、なかなかのショッキング映像。

「さ、どして学校を襲ったのさ？」

何やらベトベトした未知の液体まみれになっている夢魔を見て思わず身を退いてしまったアオイとマロをよそに、ミントは彼らに理由を尋ねた。

第１３０回　実り日和

『む～む、むむむむぅ、む～むぅ、むぅむむむ、むぅむむ～むぅむ～むむぅむむむぅ、むむ～むむ～む、むむむむぅ、む、む～む』

あれ？　”む”ってなんだっけ？　と、軽くゲシュタルト崩壊を引き起こしそうな長文を初っぱなからかましてくれたのは、”む”しか言えない丸っこい魔物、夢魔。

「えっと……何を言っ、むぐ？」

「マロ」

そんなこと言ったら繰り返されるか更に分かりやすく説明する為に”む”が増えるだけだろ、と、ミントは素直に聞き返そうとしたアオイの口を左手で塞ぎ、夢魔語を解読できるマロに助けを求めた。

「まろ。その子の話をまとめると、黒い服を着た人、詰まり、魔法学校の生徒まろね。その人たちがしばらく前に、夢魔たちにとっての主食が成る木の幹に埋まっていた、緑色に光る石を取っていったそうまろ。そしたらだんだん実が成らなくなって、ついには木が枯れちゃって食糧難になったから、原因を作ったと思われる学校を襲った、って言ってるまろ」

こくりと頷いた後、マロはすらすらと夢魔語を和訳した上に、彼女なりに分かりやすく説明してくれた。

「？　緑色に光る石？」

疑問符を浮かべながら小首を傾げるアオイの隣で、

（……。バース……）

ミントは、魔力を宿した不思議な石の回収という、いつぞやの課題を思い出していた。

「！　おにいさん！」

「おかえりなさァい！」

洞窟を出ると、ちっちゃいプリンとポトフはぱあっと顔を明るくしてミントに駆け寄った。

「むぅちゃん何があったまろかあああああ？！」

同時に、マロは何故かズタボロになって目を回している夢魔に駆け寄った。

「ただいま。ちゃんといい子にしてた？」

「「うん！」」

元気いっぱいに頷いた二人の頭をよしよしと撫でるミントの隣で、

『……きゅ～……』

「むぅちゃん！　目を覚ますまろ！！　傷は浅いまろよ！？」

くるくると目を回しているむぅちゃんを起こそうと、マロは彼女の頬をペチペチ叩いている。

『む～』

そんななか、ミントたちとともに洞窟から出てきた夢魔が、洞窟の前にある枯れた木の前まで来ると、そこで歩を止めて小さく鳴いた。

「ミント、この木みたいだよ」

ので、夢魔の後ろを歩いていたアオイが、ミントを振り向いてそう言った。

「あ、うん」

それに応答し、立ち上がって枯れた木まで移動するミントと、彼にててとついていくちっちゃい二人。

「むぅちゃん?!　むぅちゃーん!?」

その間にもむぅちゃんを覚醒させようと試みるマロ。

『むぅ?!　むぅ!?　むぅ?!』

彼女の平手打ちにより、徐々に原形を失っていくむぅちゃん。

「……なるほど。ここにあった石を取っちゃったんだね?」

『む～』

木の幹に小さな窪みを発見し、そこに手を当てたミントが確認すると、夢魔はこくりと頷いた。

「?」

それを見たミントが更に木の様子を調べている間、アオイは、彼の足に隠れながらこちらを見ているちっちゃい二人に気が付いた。

「こんにちは」

「「こ、こんにちは」」

そんな彼らと目線を合わせながらくすりと笑って挨拶をすると、緊張が解けたのか、二人はミントの足から手を離してアオイに挨拶を返した。

「他に原因らしい原因が見当たらないとなると、この木はやっぱり

バースに依存してたんだね。詰まり、この木を枯らしちゃったのはオレたちのせい。勝手なことして、本当にごめんね」

ほのぼのとした空間が足元で漂うなか、ミントは夢魔にごめんなさいと謝罪した後、木に触れている左手に魔力を込めた。

ぶわっ！

「『！』」

その手がぱあっと黄緑色に光ったと思った次の瞬間、枯れた木は緑を取り戻し、青々とした葉の間に瑞々しい赤い実を実らせた。

『むむ～！』

「……でも」

目の前で起こった不思議現象に、円らな瞳を輝かせて喜んでいる夢魔に、

「この木に頼ってばかりじゃダメだよ。木の実を食べたなら、種があった筈でしょう？」

ミントは木から手を離してそう言った。

「プクゥは改良されてない自然の木。だから、種を蒔いたらある程度は芽を出してくれるんだよ？」

『むぅ？』

ミントの説明にからだ全体を傾けて疑問を表現した夢魔を見て、

「はい」

彼は、プクゥという名の木に成った赤い実をひとつ積み、それを夢魔に差し出した。

『むむぅ♪』

すると、喜んでそれを食べる夢魔。

もくもくもくもく

ぺっ

「それ」

『むゅ？』

ぺっと吐き出された小さな種を、ミントはズバっと指差した。

「それを日当たりのいいところに捨てておくとアラ不思議。だんだん成長してプクゥの実がぎょーさんぎょーさん」

『むむ？！　むむむぅ！？』

「そそ。ぎょーさんぎょーさん」

『むむむ～む、むむ？！』

「ホントのホントだよ」

『むむむぅ、む～！！』

「あはは、どういたしまして」

勿論、何を言っているのか分からないミントは、雰囲気だけで会話する。

「じゃ、約束通り、みんなを元に戻してくれる？」

その後、ミントは大切な約束を切り出した。

『むぅ！　むむ～！』

すると夢魔は頷いて、青空に向かって大きく鳴いた。

ぼわん

「……む？」

「はェ？」

すると、プリンとポトフが元の姿に戻ったので、

「まろとデートしてまろおおおおおおおおおおV」

「おおォ？！」

「ぴわわ！？」

むぅちゃんそっちのけで、マロはミントのイケメンセクシーフレンドに飛び付いた。

第１３１回　吉日日和

「ストップ」

「まろほぉ？！」

飛び付こうとしたところをミントに後ろから見事に猫掴みにされ、マロはおかしな声を発する羽目になった。

「ゴホッ……な、何するまろ、みんとん？！　邪魔しないでまろ！」

襟首を掴まれることで若干絞まった首を押さえながらも、マロがミントにそう言うと、

「見なさい」

彼は、すっと目を細め、彼女に前方を見るように促した。

「まろ？」

何やら落ち着き払った表情で落ち着き払った声を出した彼に従い、マロは前方に目を向けた。

「むぅちゃんっ！」

「くっそぅ、一体誰がこんな酷いことを？！」

その先には、ズタボロむぅちゃんの近くに膝をついたプリンとポトフの姿があった。

「あれは、オレがあなたの動きを止めると、ここぞとばかりにあなたから逃げた二人の姿です」

「ま――?!」

ミントの言葉に、目を見開いて固まるマロ。

「プリン＝アラモードには十年以上も前から正式な婚約者、かの有名なジェラート社の社長令嬢であるムース＝ジェラートが。ポトフ＝フラントには彼が毎日のように口説き落としている上にミスウサギさん寮のココア＝パウダーが。詰まり二人には既に心に決めた女性がいるのです。ですから彼らのことは、諦めなさい、諦めなさい……」

落ち着き払った口調で、まるで催眠術のようにミントが彼女に言い聞かせると、

「そ……そんな……そしたら……っ」

うつむいたマロは、震えたような小さな声を発した。

「まろがミス魔法学校になればいいんだまろね!!」

「オレの語り総無視だなオイ」

後、バッと顔を上げたマロが、とんちんかんなことを言い出したので、ミントは悟りキャラを放棄した。

「あのねぇ?　どこをどうしたらそんな結論にいたるのさ?」

呆れたように溜め息をついたミントが、呆れたように尋ねると、

「だってだって、ここっちがミスウサギさん寮なんだまろ？　だったら、まろがミス魔法学校になれば、まろの勝ちまろ！」

爛々と顔を輝かせながら、マロはそう答えた。

ちなみに、ここっち＝ココア。

「勝ちって……て言うか、そもそもマロは魔法学校の生徒じゃないじゃんか？」

そんな彼女に、ご尤な指摘をするミント。

「まろ～！　燃えてきたまろ～！　やってやるまろ～！」

聞いてないマロ。

「そうと決まれば思い立ったが吉日まろ！　早速ミスコンを開くまろ～！！」

ミントの腕から離れてぴょんっと着地したマロは、ミス・コンテストを開催する為、どぴゅーんと魔法学校に向けて走っていった。

「……。いい天気だなぁ」

ので、ミントは青く綺麗な空を見上げ、諦めたように呟いた。

『む～』

「お？」

「む？」

「ん？」

そんな彼の後ろで、洞窟の奥から聞こえてきた鳴き声に、むぅちゃんを回復し終えたポトフとプリンと、彼らの回復魔法を見ていたアオイが反応した。

『むぅ』

すると洞窟の中から、ビニール傘を頭に載せた夢魔が出てきた。

「！　むぅちゃんが増えた！」

それを見て、プリンがぱあっと目を輝かせ、

「あ、もしかしてそれ、僕の傘？」

アオイが見覚えのある傘に気が付いた。

『むぅむぅ』

「わあ、ありがとう」

こくこくと頷いた夢魔を見て、アオイがそれを受け取ると、

『む～』

と鳴いて、夢魔は洞窟の中へちょこちょこと帰っていった。

「むぅちゃんの洞窟……！」

「この辺りにもむゥちゃん以外のむゥちゃんがいたんだなァ」

『む～』

その後ろ姿を見ながら、きらきらに目を輝かせるプリンと、むぅちゃん以外の夢魔がいたことを初めて知ったポトフと、その夢魔と同じように鳴くむぅちゃんと、

「……」

雨でしっかり濡れている傘を見つめて、何かを心配して表情を曇らせるアオイであった。

ザーザー降りの雨の中、

「……」

傘もささずに道に立っている彼女は、当然のごとくびしょ濡れに。

「ん？　りんりん？」

栗色ストレートの髪が雨水のせいで更にストレートになっている彼女、リンのところに、バッグを頭に載せて雨を凌いでいるくせにゆっくりと歩いてやって来た彼は、ブレザー姿の死神。

「どうしたんだ？　風邪引くぞ」

そう言って、死神は自分の頭に載せていたバッグをリンの頭の上に載せた。

傘だったらよかったのに。

「……」

頭に載せられたバッグの重みも手伝ってか、リンはずっとうつむいたまま。

「……。わっといずとぅどぅ？　ゆーうぃるきゃっちあこーるど」

ので、死神は何故か英語で言い直した。

「……あんの、腐れピエロ……」

すると、リンはかすかに音声を発した。

「？　ぱーどぅんみー？」

「ワタル！！」

引き続き、がーいこーくじーんな死神が、バッと頭の上に載せられたバッグを払ってギッとこちらに顔を向けた彼女に対して、

「おーう、雨ニモ負ケーズ」

と、よく分からない反応をすると、

「リンを、あの腐れピエロのところに連れていってください、ですっ！！」

いつもは無表情なリンが、珍しく怒りを露にした様子でそう言った。

「ずぁーつおぅけーい」

彼女のお願いを、死神は発音よく了承して、どこからともなく巨大鎌を呼び出した。

第１３２回　混乱日和（前書き）

後書きにて、お知らせがございます。

第１３２回　混乱日和

雲ひとつないほどのいい天気にも関わらず、室内――国立セイクッリド魔法学校四階の、校舎からそれぞれの寮へ行く為の分岐点となっているほどよく広いホールにて、

『そんなわけで、只今からミス・コンテストを開催しちゃうよ～！』

いつも通り元気いっぱいなクー先生のアナウンス通りに、ミス・コンテストなるものが開催されていた。

『いままではミス寮だったけど、これからミス学校、詰まり、ミスセイクリッド、すなわち、聖女をみんなで決めちゃうよ～！』

どんなイベントでも、基本クー先生はノリノリで、

『……氏名と背の高さと成績以外で生徒に番号をつけるのは、ちょっとどうかと思うのですが』

基本ポリー先生は冷めている。

「俺もポリー先生と同意見。レディの基準はそれぞれだろォ？」

ざわざわとざわめく会場の壁に寄りかかりながら、ポトフが不機嫌に呟いた。

「ってェか、そもそも”ミス”ってなんなんだァ？」

レディに順位をつけることが不満らしい彼が、隣に立つ友人に尋ね

ると、

「え？　ああ、ポトフは初めの方はいなかったもんね。えっと、”ミス”っていうのはオレたちが寮分けされたその日に”寮の女子ひとり選んでください”って書かれた紙が配られて、まあ、オレとプリンはココアしか分んなかったからココアにしたんだけど、それで票が多かった人がなったんだと思うよ。で、選ばれた人は、学校案内？　みたいなのの一ページを作らされるみたい」

コーラのビンを持ったミントが、さらさらと彼の疑問に答えた。

『それでは、聖女候補を紹介します！』

ポトフの不満に気付かないまま、クー先生によってミス・コンテストが始まった。

『まずは、料理と裁縫はお手の物、闇魔法使いのミスウサギさん寮、ココア＝パウダー！』

彼女がコールすると同時に、薄暗くセッティングされた会場に立つココアがスポットライトに当てられた。

「……腹立つなァ……」

わあっと歓声をあげる観客とは反対に、彼女を見世物にされているようなこの状況にますます機嫌を悪くするポトフ。

『続いて、スタイル抜群金髪ガール、雷魔法使いのミスおサルさん寮、チロル＝チョコ！』

コールに合わせてココアの隣にライトが当てられ、チロルが登場する。

「……まあ、確かにあんまりいい気はしないね」

それを見て、ミントもポトフに同意した。

『続きまして、セイクリッド魔法学校一の情報屋、炎魔法使いのミスヘビさん寮、アロエ＝ヨーグルト！』

彼らを構うことなく、スポットライトは増えていく。

『植物魔法使いのミスヒヨコさん寮、オリーブ＝オイル！』

ライトが増える度に盛り上がる会場。

――が、

『最後にこの企画を持ちかけたピエロ少女、マシュー＝マロ！』

最後の聖女候補の登場では、会場が静寂に包まれた。

――お前、誰やねん。

「♪」

生徒全員の心が一つになっている時、マロは会場でただひとり、この反応をプラスに捉えていた。

『ルールは単純。より票が多かった人が勝ちだよ！　さぁみんな～、レッツ投票♪』

静寂を切り裂いたのは、クー先生。
彼女が合図をすると、会場を薄暗くしていたカーテンがすべて開けられ、会場全体が明るくなった。

「ふふん♪　さっきの間、確実にまろに悩殺されてたまろね！」

ざわざわと再びざわめき出した会場に用意された小さな円形の台の上に立っているマロが上機嫌でそう言うと、

『いやー、最後だけえらく会場の反応が違いましたねポリー先生！』

『まあ、明らかに部外者ですからね』

「ま――？！」

隣から、ポリー先生の的確な言葉が飛んできた。

「こんなイベントを持ちかけたマロもマロだけど、それを採用して即日決行した先生も先生だよね、ポト」

そんな彼女たちを見て、ミントは肩をすくめながら発言している途中で、

「フ、って、あれ？」

自分の隣から、ポトフがいつの間にかいなくなっていたことに気が付いた。

「あれ？　ポトフ？」

「ミント。馬鹿犬なら、あそこにいるぞ」

きょろきょろミントに、プリンはすっとポトフの居場所を指差した。

「ったくもー、なんだってのよー？」

石化したマロから一番離れた台の上に立つココアが、心底嫌そうに頭を抱えていると、

「まったくだぜ」

真正面から、聞き慣れた声が降ってきた。

「「え？」」

ミントはプリンの言葉に、ココアはその声に反応してそちらに目を向けた。

「ココアちゃんは、俺だけのお姫様なのにィィィィ！！」

「ひあああああ？！」

「って、さっきまでのシリアス顔はどうしたのさあああああ！？」

直後、彼、ポトフがぎゅーっとココアを抱き上げたので、ミントは思わず遠距離突っ込みを披露した。

『おっとー？！　何やらポトフくんが見せ付けちゃってくれちゃってますよポリー先生！』

「テメェら俺のココアちゃんに投票したらぶっ飛ばすぞ！？」

『しかも完全に企画を放棄した脅しをかけてますね』

「ちょ、何言って……って言うかっ、何してるのよー！？」

ポトフが彼女を抱き締めたまま大きな声を発し、更には先生二人に中継されたので、ココアはすっかり注目の的。

ついでに、すっかり極寒の視線の的。

「わあ、ポトフとココアって、すっごく仲良しなんだね」

「……そーですね」

ポトフは男子から、ココアは女子からの冷ややかな視線をビシバシ向けられているそんな状況で、ほのぼのと笑っていられるのは、恐らく彼、アオイくらいであろう。

そんなことを思いながら、あんな状況にだけはなりたくないミントが相槌を打った。

の、だが、

「ミ～ントきゅう～～～ん！！」

ガバーッ！！

ミントの思いは、儚く砕け散った。

『おっとー！　ここでチロルちゃんが負けじとミントくんに文字通り熱烈アタァーック！』

「アタイもミントきゅんの票しかいらない～みたいな～！」

『そしてこちらも企画放棄しましたね』

「ってゆ～か～、むしろミントきゅんそのものが欲しい～みたいな～～～っV」

「って、いや何言ってんのさチロ―…」

『簡単に言いますと、チロルさんはミントさんと』

「―…計り知れないほど有難迷惑ですせんせえええええ！？」

飛び付いてきたチロルの言葉を簡潔に言い換えようとしたポリー先生の言葉を、ミントは全力で遮った。

「わあ、ミントもすっごく仲良しなんだね♪」

男子からの一点集中的な極寒の視線を浴びる羽目になったミントを見てくすりと笑ったアオイが、少し天然なところがあると分かっていても何故か腹黒に見えてしまう不思議。

「くそぅ……くそぅ！！」

「「も、元隊長っ！！」」

もうそんな関係になっているのかと、何度も何度も床を叩く元チロルファンクラブの隊長と、彼の行動を慌てて止めようと試みるその会員のみなさん。

「ほな、ココアとチロルはんはあかんな」

その集団に極力関わらないように距離を置いて口を開いたのは、ソバカス少年、タマゴ。

「そ、そうですね」

ココアかチロルを選んだりしたら後が怖い、と、彼の意見に同意した猫耳少年、サラダ。

「すると、残るはあの二人か」

「は、はい。そうなりますね……」

石化してるピエロは、アウトオブ眼中。

「そやなぁ……アロエはんにしとくか？」

アロエとオリーブを見比べながら、タマゴがさらりと尋ねると、

「――？！」

サラダは、一瞬にして顔が真っ青になった。

「ん？　どないした―…」

「あああああ、ああ、あっ、アロ、アロアロアロ」

「―…って、尋常じゃない汗と震え？！」

サラダの急変に焦っている途中で、

「……は！　せやった！　アロエはんはあかんわなぁ！！　やっぱりオリーブはんにしとこ？！　な！？　な？！」

ダンスパーティー解剖事件を思い出したタマゴは、慌てて彼にそう言った。

「……ふむ」

騒がしい周りを気にも止めずに、一点を見つめているプリンは顎に右手を当てて何やら熟考中。

「？」

その視線にふと気付いたのか、彼女、オリーブは、そちらに目を向けた。

「！」

すると、必然的にがっちりぶつかるプリンとオリーブの視線。

（ぷ、プリンくんが私のことを……っ！）

自分がプリンに見つめられていることに気付いたオリーブが、若干顔を赤らめながらも瞳を逸らせずにいると、

『大丈夫か？！』

蘇ってきたのは、去年の学園祭での出来事。

「――っ！！」

バフッと顔を赤く染め上げたオリーブは、今度は瞳を逸らさずにはいられなくなった。

そんな具合にふいっと素早く顔を逸らしたオリーブを見て、プリンは一言。

「……。誰だっけ？」

どっかで見たことあるような気がするんだけどなー的な表情で、彼は素で乙女の純情を踏み躙った。

ぶわんっ

「『？』」

そんな様々な感情と状況がグダグダと入り乱れている会場の空間が、突如として切り裂かれた。

「あ」

みんなが疑問符を浮かべるなか、アオイは見覚えのあるそれに思わず口を開いた。

「とーうちゃーく」

「『？！』」

すると、空間の裂け目から巨大な鎌を手にした死神が現れた。

「……覚悟、です。腐れピエロ……」

「ま、まろ？」

それだけでも十分怖いというのに、

「……。首尾、一貫……」

「ど、どうしたまろ、りんりん？　びしょ濡れだ」

彼の後ろから、鬼が現れた。

「っ連射モード！！」

「まろろろろろぉ？！」

「おお～」

目にも止まらぬ速さで繰り出される攻撃に関心を示した死神は、

「死神ビーム」

早速、鎌の先に紫色の光を集めだした。

会場は、嫌な予感でいっぱいになった。

「フフン♪　連射モード」

「『いやいやいやいやいやいやいやああ？！』」

――こうして、グダグダ極まりないミス・コンテストは、

「傘がなくなって困ってたから僕の傘を使ってたのに、途中でこっちに呼ばれちゃってごめんね、リン」

一人を除いて、大混乱の末に強制終了させられたのであった。

第１３２回　混乱日和（後書き）

皆様こんにちは。
学校日和２に毎度お付き合いしてくださり、誠にありがとうございます。
学校日和２を多少なりとも楽しみにしてくださっている、そんな皆様にお知らせがあります。
諸事情につき、大変申し訳ないのですが、今後、更新が更に遅く更に不定期になってしまうと思われるのです。
え？　別にそんな楽しみにしてない？
……ふふふ、それはそれで申し訳ないです。
とにかく、わざわざ来てやったのにも関わらずまだ更新してねぇじゃんこの丸い野菜ヤロー的な状況が続くかと思われます。

そこで。

皆様の暇を少しでもつぶせるよう、またまた企画をやっちゃおうかと。

はい、性懲りもなくまた変なこと言い出した丸い野菜ヤローの思い付きに、みたびお付き合いしてくださる寛大なお心をお持ちの方は、もう少し下へどうぞ。

いらっしゃいませー。
てなわけで、学校日和２読者様参加型企画パート３の内容をお知らせしたいと思います。

『キャラ投票と、質問コーナーと、もしもコーナー』

はい、ただ単に前々回と前回の企画を合わせただけですね。
前々回と前回と同様、『キャラ投票』は、あなた様のお気に召したキャラクターに、お一人様３票までを、『質問コーナー』は、突っ込みどころ満載なキャラクターたちにあれやこれやの質問を、『もしもコーナー』は、あなた様が思い付く限りの”もしも”を、これまた前回同様、『感想欄』と『メッセージ』にて承りたいと思います。
〆切は、１４９話の後書きにてお知らせ致します。
特に条件とかそんな面倒くさいものは存在しませんので、お気が向いたときにでも参加なさってくださると嬉しいです。

皆様のご参加、心よりお待ち致しております。

では、まーた次ー回ー。

第１３３回　お告げ日和

雨上がりの静かな午後、撥ねまくった赤い髪と、黄緑色の瞳と意外と整った顔をもつ彼、シャーンは、

「……ふう」

紅茶を片手に、久々の平和で普通な休日を楽しんでいた。

『アイ』

『アム』

『『メルヘン！！』』

『む～！』

「……」

庭から聞こえてくる変な声と、

「いびき～、いびき～」

「……」

”いびき～”という変ないびきを掻きつつ、ブリッジの体勢で目を開けたまま昼寝をしている嫁を除けば。

「いびき～、いびき～」

「……」

明らかに不自然な点が多すぎる、緑色の長い髪を三本の三つ編みにしている眼鏡をかけた彼女、ジャンヌを極力気にしないようにしながら紅茶をいただくシャーン。

彼は、彼女に突っ込みを入れることは切りがない上に無駄だということを、長年の経験上分かっているのである。

「寝返り～、寝返り～」

だから、ジャンヌが”寝返り”と言いながら寝返りを打って逆ブリッジの体勢になっても、

「鼻提灯～、鼻提灯～」

”鼻提灯”と言いながら鼻で提灯を膨らませていても、

「寝言。むかしむかしあるところに白髪チビとその従者の短足がいました。彼らは公衆トイレに出かけたところメルヘンなマフィアに右側頭部を」

”寝言”と一言断ってから謎の物語を語り始めても、彼は断じて突っ込まな、

「お前百パー起きてるだろってかメルヘンなマフィアってどんなだってか鼻提灯は鼻息で膨らませると思われるものなのにどうやって喋りながら拡大縮小させてんだよってかブリッジ大好きだなお前ってか寝てるんなら目を閉じろよってか眼鏡外してから寝ろよフレーム曲がっちゃうだろおおお?!」

……いと思ったら、どうやら我慢の限界を超えてしまったようだ。

「っはぁ……っはぁ……」

一気に突っ込みを入れたせいか、息切れ気味になりながら、知らず知らずのうちに立ち上がっていた彼はゆっくりとイスに座った。

「いびき～、いびき～」

「ってまだやるか？！」

が、ジャンヌが再びいびきを掻き始めたので、シャーンは再び突っ込んだ。

ガチャ

「まろ～！　おやつの時間まろ～♪」

『む～！』

「マロ様も夢魔様も、ちゃんと手を洗ってくださいね？」

「はーい♪」

『む～う♪』

そこへ、メルヘン特訓をしていたマロと夢魔とフランがやってきた。

「あ、シャーンさん。紅茶のおかわりをどうぞ」

「お？　お、おう……どうもな」

手を洗った後に空になっているティーカップを見たフランは、手慣れた様子でカップに紅茶を注いだ。

「……？　っ！」

後、

「め、メルヘンすぎですジャンヌ様ーーー！！」

逆ブリッジの体勢で目を開けたまま寝ているジャンヌに食い付いた。

「……」

あんないい子なのにもったいない、とか思いながら、シャーンは彼に淹れてもらった紅茶を一口。

「フラン、おやつー…」

『む～―…』

すると、手を洗ったマロとむぅちゃんがやって来て、

ぱちんっ

「んあ、ミントの兄弟つくるわよシャーン！！」

どうやら先程まで本当に寝ていたらしい、鼻提灯が弾けたジャンヌは、すっくと起き上がって仁王立ちしながらそういった。

「ぶっ？！」

「……」

「……」

『……』

彼女が切り出した唐突な話題に、紅茶を飲みかけていたシャーンが思わずそれを噴出させ、マロとフランとむぅちゃんが固まった。

「ごっ、ゴホッ……っ何言って」

「だから、ミントの兄弟つくるわよ」

むせながら聞き返してきたシャーンに、さらりと言い返すジャンヌ。

「え……え……っと……」

「ま、まろろ……、まっ！　まろ、アイスが食べたくなっちゃったまろ！　フラン、買いに行こうまろ？」

「そ、そう……ですね！　では、僕たちはこれで」

「ご、ごゆっくりまろ～」

『む、むむ～！』

話の内容的に、慌てて退散したフランとマロとむぅちゃん。

「五時までには帰ってくるのよ～？」

「「は、はーい」」

『む～う』

ガチャ、ぱたむ

そうして二人と一匹がいなくなると、こちらに向き直ったジャンヌは、

「さあ、張り切ってつくるわよ！」

腕まくりしながらそう言った。

「いや、待て？　だから、何を作る気だ？」

彼女を落ち着かせるように両手を前に出したシャーンが尋ねると、

「だーから、ミントの兄貴をつくるのよ」

「いやどう考えても無理だろそれは」

ジャンヌがそう答えたので、シャーンは迷わず突っ込んだ。

「そんなの、やってみないと分からないじゃない？」

「いーや無理ですね。どうやったらいきなり１８歳以上の子どもが出来るんですか」

「フフン♪　そこは気合いと根性とメルヘンがあれば朝飯前よ！」

「どんな解釈をして”メルヘン”って名詞を使ってるんだお前は？」

「だす・めーあひぇん」

「いや、本場っぽく発音されても」

そんな具合にさらさらと言葉を交わした後、

「……大体、なんでそんなことといきなり言い出したんだよ？」

シャーンは、頭を抱えつつ小さな溜め息をついた。

「パッパラパーの神様のお告げがあったからよ！」

「なんだそのいかにも頭がおめでたい神様は？」

しかし、彼女は彼に休む暇を与えてはくれない。

「”おめぇ、ガキいっぺ？　あんちゃんこさえたほーがえーど？でねーと、おめぇらにいぐないことがおきっと？”って！」

「そしてなんで妙になまってるんだよその神様？」

「だからウチ、そいつみたいなミントの兄貴をつくることに決めたの！！」

「むしろお前がパッパラパーだな」

なんだかめちゃくちゃなことを言うジャンヌを前に、ガンガン頭が痛くなるシャーン。

「てなわけで、いくわよっ☆」

「オー♪　っていやちょっと待て!?　爽やかなノリだったからうっかり乗ってしまったけどちょっと待て?!」

左手を振り上げたジャンヌは、右手を振り上げたシャーンの左腕を右手でしっかと掴むと、彼の静止も聞かずに、彼を自分の部屋へと強制連行した。

ぱたむ

「……」

「……」

部屋の扉が閉まり、訪れたのは、沈黙。

「……」

その沈黙を守ったまま、ジャンヌは戸棚へと歩を進めた。

「！　ジャンヌ、お前……！」

そして――。

「ぷわ……ねむね、む？」

雨が止んですっきりと晴れたお昼すぎ、ようやく目を覚ましたプリンは、窓をつついている一羽のフクロウに気が付いた。

「む。ミント、お荷物」

「へ？」

窓を開けると５０センチ四方の箱をフクロウから渡されたプリンは、その箱に書いてある宛名を見て友人を呼んだ。

「オレに？」

「うむ」

彼に呼ばれてポトフとのチェスを中止してこちらにやって来たミントに、プリンは頷きながら荷物を手渡した。

「……？　なんだろ？」

自分に荷物が届くような覚えのないミントが、疑問符を浮かべながら箱を開けると、

”親愛なる我が息子へ。彼があなたのお兄さんよ”

”兄弟が出来てよかったな。仲良くするんだぞ”

と、ジャンヌとシャーンの文字で書かれたカードと、

「……」

取り敢えず、誰が見てもブサイクと形容できる粘土で作られた人形が入っていた。

ぱたむ

「？　何が入ってたんだァ？」

無言で箱に蓋をした彼を見て、ポトフが小首を傾げながら尋ねると、

「バカとアホの結晶」

愛の結晶もしくは汗と涙の結晶とは雰囲気は似ているものの、意味合い的にはとても似つかない言葉を用いた後、ミントは振り向きもせずに彼のお兄さん入りの箱を後方にあるゴミ箱に投げ捨てた。

第１３３回　お告げ日和（後書き）

英語のテスト終わったー！　なノリで書いたら、こんなわけのわからない話に仕上がりました☆↑

第１３４回　無言日和

「……相変わらずだねぇ」

いつものごとく左手にコーラを持ったミントは、いつものごとく順位表のトップ３に名前を挙げられている友人三人に向けてそう言った。

「……照れる」

「いやいやいや―…」

「ま、これもココアちゃんと三人の子どもの為だしな♪」

「―…って、何言ってんのよー！？」

すると、学力ベスト１と２と３が、思い思いにコメントした。

「？　やっぱり四人がいいかな？」

「いや何が”やっぱり”なのって言うか数の問題じゃないって言うかあーもーバカバカバカー！！」

いつものごとく何か言っているポトフとココアと、

「む、でもミント十番」

「いや、でもそれ九割型プリンのおかげだし」

「ううむ。ミントの実力」

「あーもー、いいひとだなもぉ」

「……照れる」

いつものごとく会話するプリンとミント。

「えーと？　他にはアロエがココアと同じ順位で、次にサラダとチロ――…」

ピュッ

そして、いつものごとくハプニングが発生した。

「む。ミント消えた」

「って消えたーーー？！」

何やらプリンのリアクションがえらく薄かったので、ココアが仕切りなおしという具合に驚くと、

「うむ。今の感じから、魔法の失敗による空間の歪みが原因だな」

プリンは、敵意ある者の仕業ではない為か、落ち着いて状況を説明した。

「失敗による空間の歪みー？」

「魔法を失敗すると、ごく稀に空間に歪みが出来るんだぜェ？　で、

その歪みが生じたところにたまたま立ってたミントが、……ミントが……」

小首を傾げて疑問符を浮かべたココアに、ポトフは優しーく説明している途中で、

「っミントォォォォ！！」

どぴゅーん！！

何かが限界に達したのか、回れ右して駆け出した。

キキッ

と思いきや、急ブレーキをかけて停止した。

「枕テメェ、俺がいないのをいいことにココアちゃんに手ェ出したらただじゃおかねェからな?！」

くるりと振り向いてプリンのことをズビシっと指差してそう言った後、

「じゃァ、ちょっと行ってくるぜココアちゃん♪　っミントォォォォォ！！」

にこっと笑ってココアに行ってきますを言い、必死な形相でミントを探しに駆け出した。

「相変わらずだねー、ポトフはー?」

「……。手？」

「……相変わらずだねー、プリンもー？」

ころころと表情を変えるあわただしいポトフを見送った後、素で自分の手を見て小首を傾げたプリンに、苦笑いを浮かべるココア。

「でも、プリン、ミントが消えちゃったのにぴわ顔にならないなんて珍しいねー？」

「うむ。魔力の感じから、ミントは王都、シャイアに向かっている上に」

ぴわ顔？　と疑問を抱きつつ、プリンは枕を抱えなおした。

「テレポートは元いる場所だけではなく、移動先も固定されていないと使えないからな」

しゅぱんっ

「―…ルが続いて……て、え？」

順位表を見ていた筈が、突然風が吹き抜ける船矢倉の上に立っていたので、ミントは素直に驚いた。

びゅう

ついでに、強風に煽られて帽子が飛んでいった。

「って帽子いいい？！」

それを慌てて追い掛けようとして一本踏み出そうとしたところで、

「って、うわおい！？」

すぐ目の前に一人の少女が座っていることに気が付いた。

「……」

船矢倉から降りる為の梯子（はしご）のかかっているところにちょこんと座っているミントと同い年くらいのその少女は、白銀の見事なまでのおかっぱ頭に紫色の大きなリボンをつけていて、膝の上に何故か水晶玉を載せている。

彼女は、半開き状態の紫色の無機質な瞳を突然横に現れたミントに向けていた。

「あ……こ、こんにちは」

ので、ミントが取り敢えず挨拶をすると、

「……」

少女、無言。

「え、えーと……ここってどこなんですか？」

予想外のシカトに若干傷つきつつも、ミントが現在地を質問すると、

「……」

少女、再び無言。

「あ、あの……オレ、何故かいきなりこんなとこに移動しちゃったんですけど」

「……」

少女、更に無言。

「……。いいお天気ですねぇ？」

度重なるシカトに若干泣きそうになりながら、ミントは青い空を見上げながらそう言った。

「……」

こくり

「！」

すると、少女がこくりと頷いた。

「よかったぁ、これもシカトされるんじゃないかと思ったよ。流れ的に」

安堵のあまり心の声がだだ漏れているミントは、

「えと、オレはミント。キミの名前は？」

ようやく質問が出来るような気がして、取り敢えず自己紹介した後で名前を尋ねた。

「……」

が、しかし、

「……」

「……」

「……」

「……」

超無言。

「……もしかして、キミ、喋れないの？」

無言かつ無表情な彼女に、ミントがもしやと思って聞いてみると、

「……」

ふるふる

少女は、ふるふると首を横に振った。

「じゃあ、どして喋らないのさ？」

その答えを見て、ミントが疑問符を浮かべながら更に聞いてみると、

「……」

「……」

「……？」

「いや、分からないのかよ？！」

少女が顎に右手を当てて少し考えたような素振りを見せた後に首を傾げたので、ミントは思わず突っ込んだ。

「……」

すると、

「……バニラ」

少女がぽつりと呟いた。

「へ？」

突然の発言に、ミントが、へ？　と聞き返すと、

「……」

少女は、相変わらずの無表情。

「……えっと、それが、キミの名前？」

どうやら多くは語らない、と言うか、滅多に口を開かないらしいと彼女のひととなりを判断したミントは、敢えてイエスかノーかで答えられるように聞き返した。

「……」

こくり

イエス（頷き）かノー（首振り）か。

「そっか。よろしく、バニラ」

「……」

こくり

こうして、突っ込み少年、ミントと極度の無言少女、バニラは出会

ったのであった。

第１３５回　銀髪日和

青い空と青い海が果てしなく広がる海の上、潮風の吹き抜ける船矢倉に、銀と赤と緑が乗っていた。

「……」

こくり

しかし、それは別に三人いるわけではなく。

「……なるほど。詰まり、魔法に失敗したらオレがここに現れた、と？」

「……」

こくり

この結論に到るまでどれほどの時間がかかったのか、赤と緑、ミントは、銀、バニラが頷いたのを見ると、

「……さいですか……」

疲れたように船矢倉の柵に寄りかかった。

「えーと、バニラ、魔法が苦手なの？」

「……」

ふるふる

「？　じゃあ、何か難しい魔法を？」

帽子が吹っ飛んだことを忘れているのか、赤と緑の髪を風に踊らせているミントが尋ねると、

「……」

少女はこくりと頷いた後、難しい魔法って？　と聞きたそうな彼を見て、珍しく発声した。

「……。……呪い」

と。

「……」

ので、思わずバニラのごとく無言になってしまったミント。

「……。え？　呪い？」

「……」

こくり

聞き返した言葉に文字通りおとなしく頷いたバニラを見て、

「だ、誰に呪いをかけようとしてたのさ？」

ミントは恐る恐る聞いてみた。

「……」

「……？」

その問いに、バニラは海の向こうに目を向けた。

「……」

「？」

その後に彼女が何も言わずに船矢倉の下、船の甲板に目を向けたので、ミントは疑問符を浮かべながらそれを追った。

「ご昼食の用意が出来ましたよバニラ様……って、ミントさん？」

「！　フラン！？」

そこには、彼女、バニラを呼びに来たシルクハット紳士、フランが立っていた。

「え、フランを呪い殺そうとしてたの？」

彼から離した目をバニラに向けて質問するミント。

「……」

何故に”殺す”がプラスされたのか若干疑問に思いつつも、バニラはふるふると首を横に振った。

「……」

ひょい

「……？」

後、彼女はひょいっと頭の上に持っていた水晶玉を載せて、

「……」

船矢倉から甲板へ、梯子を伝ってスルスルと降りていった。

「……」

す、すげぇ、あの球体を載せたまま……と、思わず感心してしまったミント。

ちなみに、彼女が水晶玉を手放さない点については、よく似た例が身近にいるのでまったく不思議には思わなかった。

「……」

「ミントさんも、よろしければご一緒にどうぞ？」

彼が彼の友人であるねむねむボーイを思い浮べていると、水晶玉を頭から降ろしたバニラが船矢倉を無言で見上げ、フランがミントを食事に誘った。

「へぇ、魔法でそんなことが起きるのですか」

「うん。て言うかさ」

フランにことの成り行きを簡単に説明した後、

「何この優雅な昼ご飯？」

ミントは、目の前の大きなテーブルいっぱいに並べられた豪華絢爛なお昼ご飯を見てそう言った。

「そんでそれをバニラは普通に食べてるし」

ついでに、上品でいながらもごく自然に食事をしているバニラに軽く突っ込みを入れた。

「！　や、やはり何かおかしいところがありましたか？！　僕、失礼のないようにと頑張ってはみたのですが……」

するとフランは素でショック。

あわあわとミントと昼ご飯とバニラとに視線を往復させた。

「いや、そうでなくて。て言うかフランってここまで料理上手だったのかと驚きつつ」

そんな彼を落ち着かせるべく、ミントはさらさらとそう言った後、

「なんでこんな豪華絢爛なのさ？」

と、まるで王宮で出されるような豪華絢爛なお昼ご飯について質問した。

「いえそんなもったいない……ええと、それに、国王様の大切なお姫様をおもてなしするには、このくらいしないといけないと思いまして」

豪華絢爛と言われて恐縮したフランは、困ったように笑いながらそう答えた。

「……」

「……」

「……」

間。

「……え？　お姫様？」

さらっと言われた単語を聞き返すミント。

「え？　ご存知ではなかったのですか？」

それを、更に聞き返すフラン。

「……」

「……」

「……」

間、再び。

「あ、で、では、これは秘密にしてくださいね？」

うっかり口外してしまったフランは、慌ててしーっと口の前に人差し指を立ててそう言った。

「えええええええ？！」

「〝しー〟ですってばミントさぁん！？」

びっくらこいて思わず叫んだミントに、あわあわと思わず突っ込みを入れたフラン。

「いやいやいや、だってルゥ様結婚してないじゃんか？！」

彼にしては珍しい突っ込みを無視してミントが言った。

「え、ええと、国王様は年を取らない体であるからして子どもをつ

くることが出来ないのでしてそれでやむなく国王様のご兄弟のお子様を」

「……」

「はう?!　すみませんすみません、これも”しー”でお願いしますミントさんっ!!」

びっくりミントに事情を説明している途中でバニラの無言の視線に気付き、またもや内部事情を口外してしまったフランは大慌てでミントに口を閉じさせた。

「……年を、取らない?」

彼の話を聞いたミントは、自分の今までの記憶を振り返った。
言われてみれば、記憶の中にあるルゥは、まったく姿が変わっていない。
――しかも、しょっちゅう”何歳ですかあなたは?!”と突っ込むと”永遠の１２才でぇす☆”とか言っていた。

「……っ」

その事実に驚くよりも、今までそれに気付かなかった自分に驚いた上に、最後のいらないエピソードにミントが頭を抱えていると、

「……。……写し身の、呪い」

バニラは、フォークとナイフを置いてぽつりと呟いた。

「え?」

それを、頭から手を離したミントが聞き返す。

「……脱け殻は、年を取らない。術者の魔力が消えるまで、そのままの姿で生き続ける。そして、本当のルクレツィア＝シャイアルクは、父の、セルシオ＝ヴォルグランダム」

するとバニラは珍しく長い発言をした後、食事を終えた為か、自室へと帰っていった。

「……呪いを受けた父は、二度とルクレツィアには戻れない」

ぱたむ

「……」

「……」

バニラが部屋を出ていった後の数秒の沈黙を経て、

「……っ、な」

「な……っ」

「セル先生の子ども?!」

「バニラ様だって喋(ぺら)っちゃってるじゃないですかぁ!?」

ミントとフランは、お互いに話の筋から若干ずれた感想を口にした。

「って言うかなんでフランが内部事情をって言うかお姫様の護衛みたいなことやってるのさあ?!」

「お姫様であるバニラ様が悪い人たちに狙われないようになるべく目立たないようにとシャーンさんの代わりに僕が国王様の、この船のところに呼ばれて、その時にいろいろ質問したら国王様がぺらぺらーっと!」

「まあアイツはいろんな意味で目立つからねぇって言うか、かっる?!　ルゥ様口かっる!?」

「本人曰く”聞かれなかったから言わなかったんだっちゃ♪”だそうです!」

「うわぁ、なんか無駄に腹立つなぁ!!」

と、何故か怒り口調で会話を交わした後、

「はぁ……はぁ……って、あれ?」

ミントは息切れの途中で、あることに気が付いた。

「なるべく目立たないようにしてるのに、ルゥ様の自家用船を使って大丈夫なの?」

彼の疑問文で、フランもあることに気が付いた。

「あ」

第１３６回　秘密日和

セイクリッド島を挟んだ二つの大陸を隔てている海洋に、派手というわけではないが、立派な船が走っている。

「国王様の自家用船……ということは……」

その船内に立つシルクハットボーイ、フランはあわあわと右手で口を覆った。

「あ、で、ですが、別にこの船に王国の印があるわけではありませんし、たとえこれが国王様の船であると分かったとしても、一般公表されていないバニラ様が狙われるなんてことは」

顔色が悪いながらも、プラス思考で話をうまい具合に持っていこうと試みるフラン。

「でも、ルゥ様の船に乗ったバニラの銀髪見たら、何か繋がりがあると思われない？　オレたち、さっきまで甲板にいたわけだし」

彼の考えに対して言葉を返しているミントは、

「それに、バニラは海の向こうを見て誰かに呪いをかけようと―…」

重大なことを思い出した。

「？！　そん」

「って、そだ！　帽子ぃぃぃ！！」

「な、って、ああもうっ」

なかなかスムーズに話が進まないことからか、帽子が風にさらわれたことを思い出して騒ぎだしたミントの頭に、フランはヤケを起こしたかのように自分が被っていたシルクハットを被せた。

「詰まり、バニラ様は何者かの敵意に気付いているかもしれないということですねっ？」

「へ？　あ、う、うんっ」

帽子を被って安心していた彼にフランが確認すると、ミントはこくこく頷いた。

ガタン！

「「！？」」

直後、外で何かが落下した音が聞こえてきたので、ミントとフランは顔を見合わせてから駆け出した。

デッキに落下した水晶玉が転がって、壁にぶつかりその動きを止めたとほぼ同時に、

「……っ」

「おやおや、随分と攻撃的なお嬢さんだねぇ？」

右手で首を掴んでそのままバニラを宙吊りにした軽装の男が、ニヤニヤと笑いながら口を開いた。

「うふふ、あたしたちは別に危害を加えるつもりはないのよ、お嬢ちゃん？」

その後に、乗り付けた自分の船からゆっくりとこちらの船に乗り移った女が続く。

「あたしたちはただ、この船にある宝と食料をいただきに来ただけなのよ」

首を絞められているバニラの顔に、パイプから吸った煙をふぅっと吹き掛けながら。

「バニラ！！」

「バニラ様！！」

そんな見るからに悪役な彼女たちに捕らえられているバニラを発見したミントとフランは、驚いて彼女の名を叫ぶ。

「「あん？」」

すると、バニラと、彼女の首を絞めている男と、その隣にいるいかにも姐御な女と、彼女たちの周りにいるその他大勢の男たち――海賊がこちらに顔を向けた。

「……」

ちなみに、バニラはこんな状況でも無表情。

「って、こんな時でも無表情？！」

その表情に気付いたシルクハットミントが思わず突っ込むと、

「！　いえ、見てください！」

別の何かに気付いたフランがそれを指差した。

「え？」

ので、ミントが疑問符を浮かべながらそれに目を向けた。

――そこには、”へるぷ”という文字が浮かび上がったバニラの水晶が。

（分かりづらっ！！）

と、素直な感想を抱いたミントの隣では、

「護衛を任されたというのにバニラ様が捕われてしまった挙句彼女の助けを呼ぶ声に気が付かないとは……っ！！」

フランが情けなさそうに、かつ、悔しそうに拳を握り締めた。

「いや、あれは普通に気が付かないって。しかも助けを呼んではないよね」

彼を落ち着かせようとしているわけでもなく、普通に突っ込みを入れるミント。

「っ、バニラ様から手を離しなさい！！」

勝手に盛り上がる節があるフラン。

「あら、カッコイイ。いいわ、離してあげる」

ズビシっと海賊たちを指差して言い放ったフランを見て、海賊船の船長らしき女がにこっと笑って応えた。

ドサッ！

「っ」

「「な――！？」」

船長の言葉通りに船員が手を離すと、バニラは当然のごとく落下した。

「「バニラ――…」」

「おっと、そこまでよ」

慌てて駆け出そうとしたフランとミントを制したのは、船長の一言と船員たちから向けられた銃口。

「三分あげるわ。その間にこの船にある宝と食料を全部渡しなさい」

動きが止まった彼らを見ると、船長は邪悪に口角を吊り上げ、

「このお嬢ちゃんを、返して欲しかったらね」

「っ！」

ヒールの高いブーツで、バニラを踏みつけた。

「お前――…」

見事な悪役っぷりを見せ付けてくれた船長に食って掛かろうとしたミントを、フランは右手を出して黙らせた。

「――？　フラン……？」

「……すみません、僕」

疑問符を浮かべてこちらに顔を向けたミントに対してかは分からないが、フランは一言謝った後、

「あまり気の長い方ではないんですよね」

向けられた銃口に構うことなく思い切り地を蹴った。

「「――?!」」

それにミントと海賊たちが驚くや否や、

ドガアアアアアン!!

一瞬で距離を詰めたフランの拳によって、バニラを踏みつけていた船長が海の向こうにぶっ飛ばされた。

「「!? キャプテン?!」」

海賊たちがそれに気を取られた隙に、思い切り空気を吸い込んだフランは、

ゴオオオオオオオオ!!

「「――!?」」

比喩表現とかではなく、文字通り火を吹いた。

「……。口程にもありませんね」

海に背を向けたフランがそう呟いた直後、

ドパアアアアアン!!

彼にぶっ飛ばされた海賊たちが、豪快に水しぶきをあげて海に落っ

こちた。

「大丈夫でしたか、バニラ様？」

「……」

こくり

「そうですか。よかった」

その後、何事もなかったかのような問いに、何事もなかったかのようにバニラが頷くと、フランは安心したように微笑んだ。

――そんな彼を見て、

『フランも魔物まろ』

（……。……まさかドラゴンになろうとは……）

マロの言葉を思い出しながら、ミントは、ドラゴン化したフランにただただ驚いていた。

第137回　占い日和

たくさんの船が停まっているシャイアの港に到着すると、

「お手をどうぞ、バニラ様？」

「……」

こくり

フランが紳士的に差し伸べた手に、バニラはごく自然に自分の手を重ねて船から降りた。

「……」

そんな二人の後ろで、

『フランも魔物まろ』

――いや、確かにマロもそう言ってたけども。

『なんだよ、あのドラゴンとフランスパン！　めっちゃ強いじゃねえか！』

――ルゥ様、あの手紙の”めっちゃ強い”は、ドラゴンマスターとしてじゃなく、フランそのものに修飾されていたのですか？

ミントは思考をめぐらせていた。

それもその筈、近所の奥様方に評判で、何に付けても紳士的で、料

理が上手で家事も出来て非常に気が利いていて、

（……メルヘン崇拝者……）

の、フランが、先程、茶色の硬い鱗に覆われていて、大きな翼を背に持ち、鋭い牙が生え揃った口と蛇のような鋭い目を持った巨大な魔物――ドラゴンに変身したのだから。

「？　どうしました、ミントさん？」

船から降りてこない彼に、フランはきょとん顔で声をかけると、

「へ？　あ、や、なんでもないよ」

ドラゴンのイメージが若干崩れたミントは、引きつった笑みを浮かべながら船から降りた。

「ミントォォォォォ！！」

ガバーッ！！

……ところ、どこからともなく走ってきたポトフに飛び付かれた。

「無事だったんだなミントォ！　心配したんだぞォ！？　食事も喉を通らなかったんだぞォ？！　一睡も出来なかったんだぞォ！？」

「あー……うん。ありがとポトフ」

確かに食事を取る時間帯ではあったが睡眠を取る時間帯ではないという突っ込みよりも、今度柔道でも習おうかなぁ、とよく抱き付か

れる彼は逆にその勢いを利用して相手を投げ倒すようなことを考えながら、ミントはこの上なく適当に心配してくれたお礼を言った。

「離して離して」

「ふふふ、やー♪」

「プリンかお前は」

ぺしぺしと腕の下に回された彼の腕を叩きながら、ミントがポトフと何か言い合っていると、

「！　……」

何かを感じ取ったバニラは、水晶玉を覗き込んだ。

ぽんっ

すると、水晶玉から一枚のカードが飛び出した。

ちょんちょん

「お？」

それをぱしっと掴んだバニラは、ポトフの服の裾を弱く引っ張ると、

「……」

こちらに顔を向けた彼に、無言で差し出した。

「？」

無言な上にまったく表情がない為、当然のごとく疑問符を浮かべるポトフ。

「……」

すると彼女は、相当口で説明するのが面倒だったのか、

さくっ

無言で彼のおでこにカードを刺すと、

すたすたすた

「あ、ま、待ってくださいバニラ様！」

無言でシャイア城に向けて歩き出した。

「……」

「……」

「「……」」

慌てて二人に一礼をした後に彼女を追っていったフランの姿が見えなくなった頃、

「刺さったァァァァァ？！　なんか”さくっ”て俺のおでこにカードが刺さったァァァァ！？」

「とう」

すぽっ

「そして”すぽっ”て抜けたァァァァァ！！」

ポトフが騒ぎだし、ミントが彼のおでこからカードをすぽっと引き抜いた。

セイクリッド国立魔法学校の食堂で、

「本当にサラサラストレートでいい髪だよねー？」

タマゴサンドをいただきながら、ココアが目の前の彼の髪の毛に目を向けた。

「私なんてこんなくりんくりんになっちゃうのに……シャンプーに

秘密でもあるのー？」

と、くりんくりんな自分の髪とサラッサラなプリンの髪とを見比べながら尋ねると、

「む？　僕の髪は生まれつきこんなだ。それに」

彼は、彼女に向けてさらりとこう言った。

「シャンプーなんて、何を使っても変わらないだろう？」

「それは喧嘩を売っていると取ってよろしいでしょうかー？」

どうやら言ってはいけないことを言ってしまったらしいプリンに、ココアがにっこりと笑いつつ右手をグーにしていると、

「枕テメェ、ココアちゃんに手ェ出すなって言っただろォォォ？！」

ドカアアアン！！

「ぴわ？！」

ポトフの飛び蹴りが飛んできた。

「っ、何をする！？　僕は手なんか出していない！」

「何言って―…」

透かさず起き上がって抗議してきた彼の言葉を遮ろうとしたところで、

「……」

ポトフは、プリンの手が袖口より引っ込んでいることに気が付いた。

「っ、くァあァ……っ！」

心の底からあふれ出るどこにぶつけていいのか分からないようなどうしようもない感情に、ポトフが頭を抱えて苦しんでいると、

「あ、ミントー」

「む。ミントおかえり」

「ただいま」

こちらにやって来たミントに気が付いたココアとプリンが、彼と普通に挨拶を交わした。

「ねぇ、プリン、ココア、これ読める？」

「む？」

「？　何なにー？」

苦しむだけ苦しんどけ、と言わんばかりに、悶え苦しんでいるポトフをスルーして、ミントはプリンとココアにバニラのカードを見せた。

「あ！　ミント、バニラに会ったのー？」

「え？」

すると、質問に首を傾げて答えたミントに、

「ココア、バニラのこと知ってるの？　って言うか、なんで分かったの？」

「知ってるよー！　去年のハロウィンパーティで会った時に私もバニラに占ってもらって、その時にそれと似たカードをもらったんだもんー♪」

ココアはにこっと笑ってそう言った。

「……。でも、このカードの絵はちょっと不吉な感じだねー？」

「ええ？！　バニラって、バテコンハイジュの生徒なの！？」

カードに描かれている絵を見て言ったその前の彼女の言葉に、何故にこの国のお姫様が隣国の学校に通っているんだと驚くミント。

「？　そだよー？　で、この文字は古代語だよー。私がもらったカードは、ムースに読んでもらったんだけどー……」

それをさも当然のことのようにさらりと流したココアは、このカードに書かれた見たこともないような不思議な形の文字の解読法について考え始めた。

「うーん、図書室に行って調べ―…」

「……。言霊の呪い」

直後、プリンがさらっと訳してみせた。

第１３８回　呪い日和

「「言霊の、呪い？」」

カードに描かれている、見えない鎖で拘束された白い石の絵と同様に、あまり感じがいいとは思えない言葉を、ミントとココアとポトフは聞き返した。

「うむ。詰まりは、貴様は言葉の魔力によって呪われているということだ」

すると、プリンはさらりとそう言った。

「！？　ポトフ、呪われてるのー？！」

「ちょ、言葉の魔力ってなんだよ枕！？」

「それは」

彼の言葉に驚いたココアとポトフがしたそれぞれ別の質問にプリンが答えようとしたところ、

「フッフッフッ。それはオレ様が教えてくれようぞ」

「「？！」」

彼らの前に、突如として死神が現れた。

「っび、びっくりさせないでよー？！」

「し、心臓に悪いぞテメェ!?」

自分の登場の仕方にいちゃもんをつけられているのにも関わらず、彼は大鎌を持っていない方の手でピストルを作り、その銃口をポトフの胸の辺りに向けた。

「？」

その行動に疑問符を浮かべたポトフに向けて、死神は不敵に笑ってこう言った。

「ずっきゅーん」

と。

ずっきゅーん!!

「――?!」

「!?　ポトフー?!」

すると、彼の指先から魔法の弾丸が本当にずっきゅーんと発射され、ポトフは死神にずっきゅーんとハートを射ぬかれた。

「って、誤解招く表現すんな?!」

「フッフッフッ。オレ様に惚れると、火傷するぞ?」

先程のナレーションに突っ込みを入れたポトフと、自分なりにかっ

ちょいいポーズを決めた死神と、

「……」

密かに死神と同じようにピストルの形にした自分の右手をじっと見るココアであった。

セイクリッド魔法学校の三階にあるのは、無数の書物が棚という棚にずらりと並んだ部屋。

「わは～、オレ、図書室なんて初めて来たよ」

ポトフとココアが死神の相手をしている隙に、ミントとプリンは、その部屋、図書室にやって来た。

「うむ。僕も」

彼の言葉に頷きながら、プリンはきょろきょろと本棚を見回す。

「それにしても、古代語を読めるなんてすごいね、プリン？」

「ううむ。小さい時に、たまたま絵本で読んだことがあったんだ」

「？　絵本で、古代語？」

すごいと誉められたことを偶然のこととして片付けた友人に、ミントが、そんな本あるの？　と疑問符を浮かべて小首を傾げると、

「む。これ」

プリンは、はいっと彼に本を手渡した。

「へ？　わっ！？」

何気なく受け取ったミントは、予想外の重さにそれを落としそうになったところで、

「！　……これって……」

見たこともないような不思議な形をした文字――古代語が、その本の表紙に使われていることに気付いた。

「……うわぁ……」

そして、おもむろにその本のページをパラパラと捲ってみる。

そこには、思わず目が痛くなるような紙いっぱいに並んだ古代語と、

「……」

何十ページのうちの一ページにあるかないかの、挿し絵が。

「……。ねぇ、プリン？」

「む？」

「小さい時って、いつ？」

まさかとは思いつつ、ミントがゆっくりと尋ねると、

「むぅ……五歳くらい？」

プリンは、さらりとそう答えた。

「……へぇ……」

そのまさか――プリンは小さな挿し絵しかないようなこんな分厚い本を”絵本”と称していた事実を知り、ミントは爽やかな笑顔で窓の向こうに目を向けた。

うぅん、今日も実にいい天気。

「む、あった」

そんな彼をよそに、プリンは棚のひとつから、これまた分厚い本を何冊か引っ張りだした。

「む？　ミント、読まないのか？」

その本を持ってこちらに戻ってきたプリンは、古代語の本を棚に戻そうとしているミントを発見した。

「へ？！　あ、いや、ちょっと遠慮しとこうかなと」

「ふむ、そうか」

引きつった笑みを浮かべてそう答えた彼に、確かにそんなにたいした内容でもなかったからな、と思いながら、プリンはイスを引いて腰を下ろした。

「それ、なんの本？」

そんな彼が持ってきた本の種類を、恐る恐る尋ねるミント。

「……。……呪魂魔法」

すると、プリンがそう答えたので、

「！　もしかして、さっきの？」

驚いたミントは、バニラのカードに書かれた文字のことについてここに調べに来たのかと問うた。

「うむ。……恐らく、その呪いのひとつは僕のせいだから」

彼の問いに、プリンは分厚い本をパラパラと捲りながら答えた後、

「……それに」

独り言のように、ぽつりと呟いた。

「あいつは僕の、弟だから」

――そう言った彼、

「！　……。ね、オレも手伝っていい？」

「！　うむ！　ありがとうミント！」

大切な弟の為に頑張るプリンを手伝うべく、ミントは彼の隣のイスに座り、見ただけで頭が痛くなるような分厚い本を手に取った。

「あ、その前に”言霊の呪い”って？」

「呪文を使わない呪い、詰まり、言葉が魔力を持って呪いになってしまった、言わば事故魔法のことだ」

「え、それって確か呪いを解除する為の魔法がないんじゃなかったっけ？」

「うむ。だから、それを解く他の方法を――」

ポトフにかかった呪いを解く為に、ミントとプリンは分厚い本を読み漁るのであった。

第１３９回　解答日和

天気のよろしい本日は、日の当たる中庭に出てお昼ご飯。

「おいしいね、ユウ」

「ああ、最高だな」

の、きゅうりをポリポリ。

（いやいやいや。何故に近頃では滅多にないお天気のよろしい日にわざわざ中庭に出てきゅうりをポリポリせにゃならないのさ？）

ほのぼのときゅうりを食べているアオイとユウの向かい側で、きゅうりを齧りながらミントがそんなことを思っていると、

「むう……」

「んー……」

輪になって座っている彼らの真ん中に堂々と置いてあるきゅうりがいっぱいなカゴを見て、プリンと死神が同時に口を開いた。

「僕、プリンの方が」

「オレ様、プリンの方が」

「うっわあ！！　このきゅうりめちゃくちゃ美味いよプリン、ワタル！！」

ふっと微笑んでいるユウの機嫌を最悪にする虞（おそれ）のある彼らの言葉を掻き消す為、ミントは彼らの口にきゅうりをそれぞれ突っ込んだ。

「ふう……、て、あれ？」

その後でユウをチラ見して、彼のご機嫌を損ねなかったことに安堵したのもつかの間、

「……はァ……」

ミントは、隣で溜め息をついている元気のない眼帯くんに気が付いた。

「ポトフ？　どうしたのさ？」

ついでに彼がきゅうりを食べていないことに気が付いたミントは、ポトフに声をかけながらきゅうりを差し出した。

「はェ？　……あァ」

彼の声に反応したポトフは、ありがとな、とお礼を言いながらきゅうりを受け取った後、

「俺、最近思うんだ」

それを握り締めた右手を額に当てて、うつむき加減にこう言った。

「”嫌よ嫌よ”は、ホントに嫌なんじゃないかなァ、って」

念の為言っておくが、彼は至極真剣である。

「……あー……ココアの話？」

突然そんなことを言い出したポトフの話題についていく為の確認に、

「んーと、そんなことはないと思われるよ？」

小さく頷いた彼を見て、ミントは控えめな笑顔でそう答えた。

「でも、ココアちゃん、俺が抱き付いたり抱き上げたり抱き締めたりすると必ず”嫌”って」

すると、ポトフが切り返してきた。

「いや、それはキミがＴＰＯをわきまえないからだと思われるのですが」

ので、ミントは的確な突っ込みを入れた後、

「それかあれだよ。ポトフは押しがちょっと強すぎるんじゃないかな？　ほら、よく言うでしょ？　押してダメなら」

それでも元気の出ない、何やらスキンシップが激しい友人を励ますように笑いかけた。

「諦めろ」

「うん。ちょっと潔すぎるかなプリン？」

すると、ポトフとミントの会話に、きゅうりを齧っていたプリンが参加し、

「えーと、開くまで待ってる？」

「うん。ちょっと気長すぎるかなアオイ？」

きゅうりを食べ終えたアオイが続き、

「……。蹴破る」

「うん。ちょっと力技すぎるかなユウ？」

きゅうりをお代わりしながらユウも続いて、

「すりぬける」

「うん。何が起きたのかなワタル？」

チョコレートフォンデュできゅうりをいただいている死神まで繋がった。

「あーもう、押してダメなら引いてみるでしょ？」

「「ああー」」

「いやなんなのさそのわざとらしい反応は？！　つか何このみんなしてきゅうり食べてる光景！？　そんでもってワタルそれフォンデュになってないよ！　それきゅうりが刺さった溶けたチョコレート飲んでるだけだよ！！」

「今漬け込んでるの」

「チョコレート漬けえええ?!」

ミントが正解を言うと、ああー、と言いながらポンと手を叩いたプリンとアオイとユウと死神に、ミントは思い切り突っ込んだ。

「押してダメなら、引いてみる……。！　そうか！」

そんな彼の隣で、ポトフはぱあっと顔を明るくした。

「……あ、解決した？　よかったよかっ」

元気を取り戻した彼に、ミントはホッと一安心、

「詰まり、攻め方を変えればいいんだなァ！？」

「た……って、あれー？　ポトフさーん？」

出来なかった。

「む？　貴様に頭脳戦が出来るのか？」

「え、何？　ボードゲーム？」

「えっと、じゃあ、ロブを上げて相手を左右に振ってみるとか？」

「あの、テニス？」

「……ディフェンスに回るか」

「いや、バスケ？」

「フッフッフッ。最初にグーじゃなくてパーでいく気だな？」

「ジャンケン？　しかも反則？　て、ああもう……。まあ、ユウのが一番本文中の主旨に沿った答えだね」

突っ込みを入れる相手が複数名いると流石に疲れるのか、頭を抱えながら諦めたようにミントが言うと、

「ありがとな、みんな！　おォし、決めたぜ！」

ポトフはきゅうりを一気に食べ終えた後に立ち上がった。

「ここは敢えて、チョキでいくぜェェェェ！！」

どぴゅーん！！

そして、そう叫びながら、彼は彼女の元へどぴゅーんと駆け出した。

「フッフッフッ。成程、チョキでいくか」

「……。チャレンジャーだな」

「頑張ってね、ポトフ」

「ふむ……敢えて負ける気か」

ポトフを見送りながら言う死神とユウとアオイとプリンをよそに、

「……」

何故に敢えて死神の意見を採用したのか、とか、何故に最初はグーの段階で負けるつもりなのか、とか突っ込まずに、もう何も言うまいと心に決めたミントであった。

第１３９回　解答日和（後書き）

まったく、ボケの割合に対してツッコミ役が少なすぎるんだよあーもー……。

……。

……？

！　あ、み、みなさんこんにちは！

えっと、何やらレポートやら試験勉強やらで、今後、更新が遅れはじめるそうです。

……まあ、お恥ずかしながら注意散漫な作者なので、ちょこちょこ更新すると思われますが。

そこで、学校日和２では、只今読者様参加型の企画を実施中です。

参加すると、もれなくコーラが！　……ついてくればいいんですけどね。作者が喜ぶ以外何もないんで申し訳ないのですが、お暇なときに是非参加してみてくださいね！

詳しくは、１３２話の後書きへどうぞ！

では、また次回お会いしましょうね！

……ん？　何この紙？

”問題。今喋ってたのは誰でしょう？”

いや、そんなん分か―…え？　あ、あの、分かってましたよね？ね？！　いやあのオレですよオレ（了

第１４０回　眼鏡日和

昼食の時間帯を少し過ぎて、生徒の数が減った食堂にて、

「ラーメン……ですか？」

「ええ。いけませんか？」

栗色ストレートの髪の少女、リンは、茶色くせっ毛眼鏡っこ、アロエがテーブルに運んできたものを見て思わず口を開いた。

「い、いけなくはないけど……あんた、眼鏡じゃない？」

すると、リンの隣に座っている狐色ツインテールの彼女、ウララも後に続いた。

「眼鏡をかけている人は、ラーメンを食べてはいけないのですか？」

すると、アロエはレンズ越しにその鋭く冷たい茶色の瞳でウララを見据えた。

「い、いや、だからいけないとかそういうんじゃなくって……」

「では、いただきます」

すると、両手を前に出した彼女がそう言ったので、アロエは遠慮なくラーメンをいただくことにした。

（あ、あのままでは、曇ってしまう、です……っ！）

（え、ええ、あのままじゃクールビューティーキャラが台無しに……っ！！）

などと、リンとウララが顔色を悪くして焦っていると、

「……。ヒトの食事を凝視されるのは、どうかと思うのですが？」

一口食べたアロエは、そんな二人にさらりと言い放った。

ので、リンとウララは慌てて謝る、

「「く、曇ってない……っ？！」」

のかと思いきや、顔を上げた彼女を見て、何やら別のポイントに衝撃を受けていた。

「当然です。何年眼鏡つけているとお思いですか？」

すると、アロエが再びさらりと言い放った。

（こ、この子、タダ者じゃないわ？！）

（め、眼鏡マスター、です……っ！）

ウララとリンは、何故か戦慄していた。

「……。あなた方の世界では、眼鏡をかけた人がそんなに珍しいのですか？」

何やらリアクションが大袈裟な彼女たちに、アロエが無表情で質問すると、

「い、いえ、そんなことはない、ですが……」

「え、ええ、まあ、コンタクトしてる人もいるけど、伊達眼鏡の人もいるわけだし」

完全に勢い負けしている二人は、控えめに答えた。

「そうですか。まあ、伊達眼鏡とかクソ食らえですけど」

その答えに、アロエはさらっと毒づいた後、

「なら、何故そのようにアロエを観察するのですか？」

再び彼女たちに質問した。

「え？　いや、て言うか、伊達眼鏡……嫌いなの？」

すると、ウララに質問で返された。

「……嫌い、とまでは言いませんが、不快ですよね。こっちは眼鏡がないと生活できないからかけているのに裸眼で生活できるような方がかけているのを見ると。こっちは好きでかけてるわけではないのになんなんですかねあのお洒落感覚のエセメガネ？　眼鏡をかけたら外見がよくなるとでも思って」

（（否定しておきながら、この子、伊達眼鏡大っ嫌いだー！！））

そう尋ねられるとアロエがぶつくさと伊達眼鏡に対する不満をながったらしく言い出したので、ウララとリンは、彼女が相当な勢いで伊達眼鏡を嫌っていることを確信した。

「あ、あのさぁ？　眼鏡が嫌なら、コンタクトにすれば―…」

「別に眼鏡は嫌いではありません。と言いますか、あなたはこの長年一緒に過ごしてきた体の一部を裏切るようなことをアロエにしろと言うのですか？　そもそも何故コンタクトレンズというものに付け替えなきゃならないんですか？　それは詰まりあれですか？　眼鏡を取ったら見栄えがよくなるというフィクション限定の設定を本気で信じて」

（（そしてコンタクトも否定派だー！！））

などと、クールな筈のアロエがクールな口調はそのままにして熱く語っているのを目の前にして、ウララとリンが心の声をぴったり揃わせていると、

「と言いますか、”眼鏡を取った方が可愛い”とか誉め言葉になってないですよね。詰まりそれって暗に眼鏡をかけてたら可愛くないと言ってるんですよね？　詰まり眼鏡をかけた人そのものを否定して」

「あ、こ、ココア！」

「え？　あ、ココア！　遅かったじゃない！」

食堂に帰ってきたココアの姿を発見し、未だにくどくどと語っているアロエの愚痴を遮って、リンとウララは彼女に向けて大きく手を

振った。

「何なに？　彼氏に呼ばれたっきり帰ってこないから心配してたのよ？」

そして、眼鏡の話題をぶった切るべく、先程やって来たポトフに呼び出されたココアをいじろうとした。

「……れた……」

「え？」

――ところ、

「……振られた……」

ココアは、震える声でそう言った。

「え？」

「え？」

「えええええええ？！」

「な、何かの間違い、ではない、ですかっ！？」

ので、ウララとリンはびっくり仰天し、

「……。何があったのですか？」

いつの間にやらクールダウンしていたアロエが静かに問い掛けた。

「……成程。あなたは彼に、もうあなたには迷惑をかけないと言われた後、じゃあまたねと別れの挨拶をされた、と？」

さらさらとした口調のアロエの確認に、ウララとリンの間に座らせられたココアは、うつむいたままそれを肯定した。

するとアロエは、

「よかったじゃないですか？」

さらりとそう口にした。

「「？！　何言って」」

ので、ココアを慰めていたウララとリンが食って掛かった。

「何故そう言われて悲しんでいるのですか？」

突き刺さるような冷たい声でそれを遠慮なく遮った彼女は、

「ポトフ＝フラントは、あなたの願いを了承しただけではないのですか？」

と、言った後、手元にある器が気になり出した。

「――！」

その言葉に疑問符を浮かべた二人の間で、ココアは、はっとあることが思い当たった。

――それは、ひっついてくる彼を拒絶しつづけていたこと。

「……で……っ、でも、だって……」

「だって、なんですか？」

うつむき加減になった為、何故か悪役っぽい彼女の眼鏡が光を反射し、更に悪役っぽくなったアロエ。

「だって、付き合ったのはポトフが初めてだし、恥ずかしくってどうしていいのか分かんな―…」

彼女の言葉に、うつむいたままぎゅっとスカートの裾を握り締めたココアが答えた。

「――それは彼も同じなのではないですか？」

「え……？」

それを遮った言葉に反応して、顔を上げたココアに向けて、

「他の女性にココアさんのように拒絶されたことがなかった、詰まり、初めての経験だったから、分からなくなってしまったのではないですか？」

アロエはいつもの冷たい声を和らげてそう言った。

「……。だから……お別れ？」

すると、いつもは強気なココアが今にも泣き出しそうになったので、

「違いますよ。ココアさんは、彼の別れの挨拶の意味を取り違えているのです」

アロエは小さな苦笑いを浮かべながら、こう言った。

「振った相手に、〝またね〟なんて普通言いますか？」

と。

「……」

「……」

「……」

「「あ」」

そのことに、今更ながら気付いたのは、親身になってココアを慰め

ていたウララとリンと、ココア自身。

「あ、え？　え？　で、でも」

ちょっと待ってよ今本気で涙ぐんでたんですけど？　と、ココアがだんだんと恥ずかしくなっていると、

「まあ、ポトフさんが普通でなかったら言うかもしれませんが。気になるのであれば、本人に直接確認してみたらいいのではないですか？」

アロエはふっと微笑んでみせた。

「う、うううん！　私、行ってくる！」

すると、ココアは立ち上がり、勘違いであったのが嬉しいのかこの場にいるのが恥ずかしくなったのか、すぐさま食堂の外へと駆け出した。

「「お、おお～」」

「……？」

ココアが見えなくなったところでパチパチと拍手を贈られたアロエが、疑問符を浮かべながら、拍手を贈っているリンとウララに顔を向けると、

「アロエ、すごい、です」

「ホントホント！　私も相談してみちゃおうかしらっ？」

見事にココアを復活させたことに対して、彼女たちはアロエに尊敬の眼差しを向けていた。

「何を言っているんですか？　アロエは恋愛経験がまったくない上に」

そんな彼女たちに、

「アロエが手帳を見ないで言っていることは、すべて適当ですよ？」

アロエは、さらりとそう言った。

「……」

「……」

「「……え？」」

オイオイオイちょっと待って、さっきまで真剣にココアの相談に乗っていたのではないんですかい？　的な顔になったリンとウララを見て、

「……まあ」

アロエは、珍しく面白そうにふっと笑った。

「双方がこの上なく素直じゃないという厄介な関係にあるあなたと」

「へ？」

「それ以前にまず恋愛感情というものを持っているのかが定かではない相手が好きなあなたには」

「!?」

そして、ウララとリンに順に顔を向けた後、

「今後の発展は厳しいのではないでしょうか?」

疑問符を浮かべたウララとぽんっと顔を真っ赤にしたリンに向けて、いたずらっ子な笑みを浮かべてそう言った。

「え?　え?　どういう意味?　ってか、リンに好きな人が――って、リン顔あっか?!　え、え、え?　ちょっとずるいわリン、誰のことが好きなのよ?!」

「いいい言わない、ですーっ!!」

「ふふ、応援してますよ」

そんなこんなで、異世界の友達が遊びに来た日のお昼は、ゆっくりと過ぎていくのであった。

第１４０回　眼鏡日和（後書き）

……と。

……おやおや、ココアさんの話の辺りから気になってはいたものの、やはり完全に伸びてしまいましたね。激辛ラーメン。

……？

おやおや、これは失礼しました。

みなさんこんにちは。

前回に引き続き、ここは、”誰が喋っているでしょう”後書きです。

今回はアロ……あ、自分のこと呼べないことに気が付きました。

えー、テスト期間が迫る上に科目が多いことから、今更ながらひー ひー言い出した為、七月の更新は難しくなるそうです。

ならなんでこの話を更新したのかって話になりますけれど、作者曰く現実逃避だそうです。

そんなことやってるから後で大変なことになるって、いつになったら学習するんでしょうね？

おっと、完全なる私事になってしまいましたね。

企画はまだまだ募集中ですので、そちらもどうぞよろしくお願いしますね。

では、ご縁があればまたいつか。

第１４１回　海水浴日和

白く輝く太陽に、空と海の青が映え、白い砂浜に白波が寄せては帰るこの場所は、隣国の国立魔法学校がある大都市、バテコンハイジュの南の外れに位置するジェラート邸。
海に臨む南国の風情溢れるその屋敷では、

「あれー？　珍しいね、チロルー？」

水着に着替え終わった少女たちが、お互いの姿を見合わせていた。

「ふふっ、ミントきゅんは純情可憐な男の子～みたいな♪」

露出度控えめな水着を見て小首を傾げたココアに、チロルは両手を重ねて右の頬に当てた後、

「ココアの彼とは違ってね～♪」

にやりと笑ってそう言った。

「なっ、ポトフだって別に……別に……？　いやいや、確かにそれはないねー」

彼女の言葉を強く否定しようとしたものの、その途中でポトフに純情可憐なんて言葉はとてもじゃないけれども使用できないということに気付いてしまったココア。

「ねね、この水着、どうかしら、リン、アロエっ？」

そんな彼女の隣で、頭の上の方で二つにまとめた狐色の髪を揺らしながら、ウララが自分の水着に対しての意見を求めた。

「……。よろしいのではない、ですか？」

露出度高めな水着を着た彼女を上から下まで眺めた後、栗色の瞳でウララを真っすぐ見たリンは、

「ユウ、むっつりっぽい、ですし」

と、無表情でそう言った。

「！　やっぱそうよねっ？　アイツむっつりっぽいわよね？！」

「……好きな人にどんな評価をつけているんですか、あなたは？」

リンの発言に共感したウララに、アロエはさらりと突っ込みを入れた。

「でも、ウララ、羨ましい、です」

「「？」」

すると、リンは瞳を伏せて呟いた。

「……リン、ぺったんこ、です」

自分の胸に、手を当てながら。

「つあ！　何言ってるのよリンって言うかむしろ控えめと言うより

も奥ゆかしい胸を気にするその姿が可愛すぎるわよリンっ！！」

「その表現はどうかと思うのですが」

何やらきゃわ～んと瞳を輝かせながら騒ぎだしたウララに再びさらりとした突っ込みを入れた後、

「……それに、彼はヒトの体型を気にするような方ではないと思いますよ？」

「！」

とアロエが言うと、リンは顔を赤らめながらも嬉しそうにこくこくと頷いた。

「ぷ、プリンはわたくしのこのような姿を見て、どう思われるのでしょうか……？」

その更に隣で、水着姿の自分を鏡で見ながら、高鳴る胸を押さえているムースがいた。

「……。……道端の、小石……」

そんな彼女の隣で、バニラが何やら残念な意味のカードを引いてしまっていた。

一方、その頃、ジェラート邸前の綺麗な海辺では、

「フハハ！　これがムース嬢のプライベートビーチというものか！」

「脇役がいきなりしゃしゃり出てこないでください」

グラサンにアロハシャツという、どこか怪しげな格好をした緑色長髪男子、バジルが、茶髪眼鏡男子、アセロラの冷ややかな突っ込みを受けていた。

「脇役とは？　私はいつでもヒーローさ！」

「グラサンとかき氷をひっくり返したアロハシャツを着ているヒーローがどこにいるんですか」

「フハハ！　君のように焦げ茶色の瞳と比べて、私の水色の瞳は眩しさの度合いが違うのだよ！」

「すみません、僕の言い方が悪かったですね。グラサンはともかくさっさと着替えてきてください」

「それにしてもレディたちが遅いね、アセロラ君？」

「健全でよろしいとは思いますけれど、ほぼ１００％に近い確率であなたは彼女たちの眼中にないと思いますよ」

テンションの差が激しい会話が繰り広げられているその場から少し離れたところでは、

「お水……」

「お水……」

似たような顔色で海を覗き込んでいるプリンとアオイが。

「大丈夫だって。ほら、入ってみてよ？」

彼らが立っている砂浜の少し先、海の中にいるミントが彼らに声をかけると、

「う……うむ」

「う……うん」

それに頷き、二人は顔を見合わせて頷いた後、恐れながらも海の中へと歩きだした。

一歩、また一歩と進んでいくのにつれて、海はほんの少しずつ深くなる。

そうして、アオイの膝の辺りまで水に浸った時、

「ね？　大丈夫でしょ？」

どぱあん！！

「って、言ってるそばから溺れたあああ?!」

ミントがにこっと笑ってみせたところ、二人は急に溺れだした。

「ぴわっわ、みんとっ！」

「た、たすっ、たすっ！」

ばしゃばしゃと必死でもがくプリンとアオイの目の前で、

「え、え、え？　何っ？　何が起きたの!?　何、奇跡?!」

溺れる筈がないと思っていた位置で溺れている不思議に、ミントは酷く混乱していた。

「なんでなんでなんで?!　キミらさっきまで普通に立ってたじゃんか!?　ねぇなんで?!」

しつこく質問してくるミントであったが、そんなことより、早く助けて欲しい心境の二人であった。

「あっはっはっ！　相変わらず枕はいろいろと残念だなァ！」

「くっ……耐えろ。耐えろ俺……っ！」

助けて助けてと溺れているプリンを見てポトフは笑い、アオイを見てユウは奥歯を噛み締める。

態度は違えど、二人は彼らが水に慣れてくれるように願い、敢えて手を差し伸べないのであった。

――が、

「フッフッフッ」

「っ！？　お前は――」

「し、死神さんっ？！」

二人が溺れていた原因が、死神が文字通り彼らの足を引っ張ったからだと分かると、

「「あ、成程ォ」」

「《壮麗なる龍はすべてを呑み込む》」

ミントとポトフはぽんっと手を叩いて納得し、ユウは遠慮なく死神をぶっ飛ばした。

「お待たせー！」

死神がユウの魔法で生み出された海水で出来た龍に派手にぶっ飛ばされたすぐ後、ジェラート邸からココアたちがやってきた。

「！　ココアちゃ――…」

それに答えようと右手を挙げたポトフは、彼女のばっくりと開いた胸元に、自分の左耳に光る十字架と同じものが光っていることに気が付いた。

「……」

そして、そのままの目線で一時停止。

「……。……はっ！？」

再生。

「お、俺のバカァァァァ！！」

後、早送り。

ポトフは、激しく自己嫌悪しながら海の中に飛び込んでいった。

「あうち」

その際、ぶっ飛んだ死神に激突し、彼が二度打ちならぬ二度ぶっ飛びを経験したことはほっといて、

「おお！　マイハニー―…」

「バーンバニッシュ」

「……懲りませんねぇ」

砂浜ではバジルがアロエに黒焦げにされた上にアセロラに呆れられ、

「ぷ、プリン、わわわ、わたくし、ど……どうでしょうか？」

「ゆ、ユウっ、私はどうっ？」

「「……？　どうって？」」

波打ち際ではムースとウララが撃沈し、

「ミントきゅんっ！」

「あ、アオイ……」

「「わあ、可愛いね」」

「「！　ホントっ？」ですかっ？」

一方ではチロルとリンが喜んでいるなかで、

「ポトフ、どーしたんだろー？」

「……。……海の、藻屑……」

ココアが疑問符を浮かべながら小首を傾げ、その隣では、バニラがまたしても残念な意味のカードを引いてしまっていた。

第１４１回　海水浴日和（後書き）

……ふぅむ、オレ様の扱いが悪いのは気のせいか？

……ん？
おお、久しぶり。
ちゃお。

何やら作者の都合で２ヶ月近く更新が止まってしまったな。
長いこと待たせてしまってかたじけない。

ん？　別に待ってない？
フッフッフッ、ツンデレだな。

ともかく、これからはもう少し早く更新していきたいとのことで、
今後も気長にお付き合いしてくれると嬉しいぞ。……ぽ。

では、またのご来店と、ついでに企画へのご参加もちゃっかりしっかりお待ちしているぞ。
ちゃお。

第１４２回　夏夜日和

「……やべ、なんか出そぉ……」

と、顔色を悪くしたポトフがことの発端。

「お、オバケなんかいないっ！」

彼の言葉にプリンがそう切り返し、

「そー言えば、この山のもっと奥ーの方にある廃墟でオバケが出るって話だよー！」

ココアが楽しそうに話に乗ったもんだから、

「何を言ってるんだマイシスタ！？　可愛くてか弱い女の子が一人で夜間外出するだけでも危ないっていうのにその上ケダモノを連れて行くだなんてっ、お兄ちゃんは絶対の絶対の絶対の絶対の絶対の絶対に認めないぞ！！」

ケダモノ（ポトフ）と可愛い妹（ココア）を夜にデートさせるものかと、突然彼らの部屋に現れたショコラが猛反対したので、

「だ、大丈夫ですよ、ココアのお兄さん。オレ――ごほんっ！　…わ、私もついていきますからっ♪」

ココアに目で訴えられた、ショコラに未だに女の子だと思われているミントが、女の子のふりして説得する羽目になり、

「ここだよー♪」

――現在に至る。

「わは～、いかにもって感じだね～？」

涼しげにくさむらで虫が鳴く夜、ココアの家の旅館に毎度のごとく来ていたミントとプリンとポトフは、ココアに導かれて山奥にやってきた。

彼らの目の前には、焼け跡の残る古い城が、いかにもと不気味な雰囲気を纏いながらそびえ立っている。

「うん。何十年も前にね、このお城、火グマに襲われてー」

ちなみに、火グマとは、ヒグマではなく、文字通り、火を吹くクマ、のような魔物のことである。

「周り一帯を巻き込んでの大火事。その時このお城の中にいた人は、みんな助からなかったんだってー」

と、目の前にそびえ立つ城が、現在の姿になった理由を説明した後で、ココアはプリンに目を向けた。

「ふむそうなのかそれは悲惨だったなテレポ――」

「そんなに早くお城に入りたいのー？　もー、しょうがないなー♪」

「っぴわあ？！」

冷静沈着を装っていながら冷や汗を滝のように流し、テレポートで

トンズラぶっこいてやろうとしていたプリンを、ココアはにっこりと笑って古城へと押し飛ばした。

バカァン！！

よってプリンは古城の扉を勢い良く開けて中に入り、

ドサドサドサ！

どのくらい強い力で押されたんだと思うほど転がっていったかと思うと、

「みみみみみんとっ！」

彼なりに猛ダッシュでミントのところまで戻ってくると素早く彼の背中にしがみついてガクガクブルブル震えだした。

「あは……。大丈夫、プリン？」

彼の怯えように、苦笑いを浮かべるミント。

「てれっ、てれぽっ、てれぽっ！」

必死に瞬間移動魔法を試みるプリンであったが、テレポートは正確な計算と精密な魔力のコントロールが必要な魔法の為、冷静さの欠片もない今の彼には到底使用できそうにない。

「あはは、いつものクールさが台無しだねー♪」

プリン語と枕を除けば見た目も中身もクールな彼の、見事なまでの

怯えっぷりを見て、ココアはお腹を抱えて楽しそうに笑っている。

「ほらほら、もうその辺にしときなさい、ココア」

泣くから、とミントはココアにプリンをからかうのをやめるように言った後、

「時に、お腹は大丈夫、ポトフ？」

何か出そう、と顔色が悪かったポトフに声をかけた。

「おォ、完全回復だぜミント♪」

夕食をちょっと食べ過ぎた為にそんなことを口にしたポトフは、あとで、結果として肝試しに行くきっかけを自分で作ってしまったプリンから、理不尽な制裁を加えられる羽目になったそうだが、それはまた別のお話。

「……」

そんな彼、

（やっぱり、ポトフはオバケよりも真っ暗になることが怖いのかな？）

特にオバケが出そうな古城に対して怯えた様子を見せていないポトフを見て、ミントはそんなことを思っていた。

（……もっとも、ココアの前でポトフがこんなふうになるわけないか）

こんなふうに。

「てれぽ、てれぽ……っ、おうち帰るうっ！」

古城に入る気満々の二人と帰る気満々の一人と中立な一人は、中立な一人を除いての多数決により、帰る気満々の一人を引き摺りながら、いざ、肝試しへ。

「みんと、おうち帰るっ」

帰る気満々の一人はもちろんプリンで、

「大丈夫だよー、オバケなんていないってー♪」

「そぉそぉ。まァ、いたとしても、ココアちゃんは俺が守るぜ♪」

入る気満々の二人はココアとポトフで、

「あは……一人じゃ帰れないんでしょ？　でも、今オレとプリンが帰ったら」

中立な一人はミントである。

「ここがポトフのお墓になっちゃうよ？」

「縁起でもねェなミント」

「別にいいっ！」

「むしろテメェの墓にしてやっかコノヤロー」

「貴様ここになんの文句あるっ！　広いし静かだし見晴らし最高だぞ？！」

「立地条件うんぬんの話じゃねェよ」

「お友達もたくさんできそうだしねぇ」

「ってだから縁起でもねェってば」

と、古城に足を踏み入れたポトフが前を行く二人にさらさらと突っ込みを入れたところで、

ヒョオオオ……！

「「！」」

古城が、啜り泣いた。

ガシィ！！

「「？！」」

直後、それぞれ背中とお腹をがっしり掴まれたので、ミントとポトフは驚いてそちらにバッと顔を向けた。

「「ヤー！」」

「……て、プリン？」

「なァんだ、ココアちゃんかァ♪」

そこには、引き続き泣きそうなプリンと、先程まで彼をからかっていたココアが。

よって、プリンにひっつかれたミントは苦笑いを浮かべ、ココアにひっつかれたポトフはご機嫌上々。

「あっは、大丈夫だぜココアちゃん？」

「そそ。ただの風だよ、プリン？」

「「風―…」」

ポトフとミントの言葉に、プリンとココアが顔を上げた途端、

バコォオン！！

「「ヤー！？」」

と古城の扉がひとりでに閉まり、

ボワッ！！

「「ヤー？！」」

次いで、ひとりでに廊下にあるすべての燭台に紫色の炎がともった。

「ヤー！　ヤー！　おばけヤー！！」

「……」

プリンに耳元で悲鳴をあげられ、煩いったらありゃしないミントと、

「ヤー！　ヤー！　おーそーわーれーるー！！」

「ちょ、待ってココアちゃんそんなくっつかれたらむしろ俺が襲っちゃ――」

ココアと違う意味で危機に陥るポトフ。

――直後、

「ちゃお」

彼らの目の前に、忽然と巨大な鎌を担いだ死神が現れた。

「「っ、ヤーーーーーー！！！！」」

ので、それぞれミントとポトフの腕を掴んだプリンとココアは、古

城の扉を突き破ってそのまま走り去っていった。

「……むう、ノックもしないで入ってくるわ、扉は開けっ放しで閉めないわ、夜中に騒ぐわ、ヒトの顔見て悲鳴あげるわ、挨拶もしないで帰っていくわで、失礼だな。ぷんぷん」

ガンガン小さくなっていく彼らを見送りながら、勝手にこの城に住み着いていた死神は、むくれながらそう呟いた後、彼らに再び開け放たれた扉を魔法でバコォオンと閉じて寝室へと帰っていった。

第１４３回　尾行日和

夏も終わりに近付いて、だんだんと涼しくなってきた今日この頃、

「……お前ってホント相変わらずだよな。年甲斐もなく」

撥ねまくった肩下までの赤髪を後頭部でひとつにまとめて伊達眼鏡をかけている、ミントの父親でシャイアの兵士の長である彼、シャーンは、本来敬語をふんだんに使うべきである人物に、テーブルに頬杖をつきつつ溜め息混じりにそう言った。

「いひひ♪　だってオレ、永遠の十二歳だもーん♪」

それをまったく気にすることなく、彼の向かいの席に座り、新聞を広げている帽子を被ってサングラスをかけている銀髪の国王、ルゥがにやりと笑って答えた。

「緊急の用事だって言うから慌てて言う通りに変装してやったと思ったら……」

こういうことか、と呆れたように付け足しながら、シャーンは自分たちの席からほどよく離れたところでお茶しているわが息子にライトグリーンの瞳を向けた。

「ふっふっふっ、彼女ができたんならオレに早く言えよな～ミント？」

ルゥは、広げた新聞を読むふりをしながら顔を隠し、ミントの向かいの席に座っている金髪美少女、チロルにブラウンのグラス越しに

紫の瞳を向けた。

「じゃあ、次はお店見てまわろっか」

「うんっ♪」

――この国においてトップクラスの権力を持つこの二人は、本来の仕事をほったらかしにしている上に、デート中のミントとチロルを尾行しているのであった。

「おお！　目標に動きが！　シャーン、行くぞ！」

「……。見つかっても知らねーぞ？」

そして、なんだかんだ言ってもルゥの従者であるシャーンは、彼に逆らうことができないのであった。

（こいつ、はやくも周りが見えなくなってるしな。今こんな見る奴が見ればバレバレな変装してるルゥを一人にしたら危険……なんだが……）

ドキドキわくわくと顔を輝かせているルゥに腕を引っ張られながら、シャーンはちらりとミントに目を向けた。

（見つかったら、俺、確実に殺されるんだろうなぁ）

と、何かを諦めたように、爽やかに微笑みながら。

「つ～まんね～……」

駅の近くでお食事してシャイアの大通り沿いの店を見て回り、今度は映画館にやってきたルゥは、

「お年頃な選択したわりには清いデートしくさりおってからに……っ」

顔は可愛くてスタイルも抜群なチロルを彼女に持つミントに、期待はずれだと言わんばかりに念を送っていた。

「……何を期待してたんだお前は？」

そんなルゥの隣で、頬杖をつきながら大画面に目を向けているシャーン。

「そりゃもちろん、十八禁的なドキドキきゃっきゃウフフいやんばかんって感じのピンク色な展開を」

「お前もあの二人も十八じゃねえだろ」

「これじゃつけてきた意味ねーじゃんかー！」

ぶーぶーとブーイングをかますルゥに突っ込みを入れながら、

『し！　静かに！　追っ手がやってきた！』

『怖いわボブ！』

『安心しろ、あれはただの宇宙人だ、アリエッタ！』

（これ、確か恋愛ってジャンルだったよな？）

シャーンは、疑問符を浮かべていた。

彼の思った通り、この映画は、感動の超大作”ボブとアリエッタ”のファイナルエディションで、ジャンルは恋愛。

『ゲヘヘ、甘いな。我々は地底人だ！』

（地底人て、ジャンヌと同じ笑い方すんのな）

『な、何っ？！』

バキュンバキュン

『ゲヘヘ、甘い、甘いぞ人間！』

ぶくぶくーっ

『とっ、溶けて避けただと！？』

（……。つーかむしろジャンヌが地底人なのか？）

『貸して、ボブ！』

『アリエッタ！』

（ヒロインが戦っちゃうんすか）

バキュンバキュンバキュン

ズバババババババババ

ドカーンドカーンドカーン

ズドオオオオオオン！！

バコオオオオオオン！！

ドキャアアアアン！！

（……。最近の恋愛映画ってすごいのな）

爆発音が激しさを増し、恋愛というジャンルがいよいよ怪しくなってきたシャーン。

が、しかし、この映画館でその点を気にしている人物は、不思議なことに彼と彼の息子しかいなかった。

『やったわ！　地底人を倒したわ！』

『すごいよアリエッタ！』

だから、

『……ボブ……』

『……アリエッタ……』

と、急に恋愛モードに切り替わっても、

（いやいやいやいやいや）

なんて思ったのは、シャーンとミントだけ。

（お？　いつの間にやら盛り上がってんなー）

変な念を送るのに飽きたルゥが画面に目を戻すと、大画面上でボブとアリエッタが熱烈きっす。

（！　まさかこれが狙いだったのかミン）

そのまま倒れこんで画面から外れたボブとアリエッタから目を離して、この映画は雰囲気作りの為だったのかと気付いたルゥは、期待に輝いた瞳を再びミントに向けた。

（ト……って）

しかし、ミントは夢の世界へと旅立っていた。

（……ホント似てるなぁ、お前ら）

すかーっと眠るシャーンとミントを見比べながら、苦笑いを浮かべるルゥであった。

「はいチロル、誕生日おめでとう」

「わあ！　ありがとう、ミントきゅん！」

映画の途中で寝たことがバレていないのか、二人は特に気分を悪くした様子もなく家の近くの公園へ。

「家に連れ込んで獣のごとく襲い掛かると思ったら、このピュアミントめ……」

「いや家にはメルヘン崇拝者のフランとマロとそのペットの夢魔がいるから無理だろ」

そして二人は、同じく家の近くの公園へ。

夕暮れ時もあってか、ひとけのない公園には、ヒグラシの鳴く声だけが響いている。

「屋外で襲う気なのか！」

「……。永遠に若いって大変なんだな？」

茂みに隠れながらミントとチロルの様子を窺っているテンションの高いルゥとは対照的に、突っ込み疲れたのか、テンションの低いシャーン。

「わあ！　可愛い！」

「て、今度は何を始めたんだよお前？」

突っ込みを入れ続けるシャーンをよそに、ルゥはチロルの動作に合わせて声を吹き込み始めた。

「ありがとうミントきゅん！　アタイとっても大切にするね！」

「そしてなんで彼女の口調知ってんだよ」

「気に入ってくれてよかったぜよゲヘヘ」

「そしてなんでミントがジャンヌ口調なんだよ」

「アタイが大好きなミントきゅんから貰ったんだもん、気に入るに決まってる～みたいな♪」

「ホントにそんないつぞやのコギャル口調なのかミントの彼女は」

「だ、大好きって……照れるでごわす」

「いや、口調統一しろよ」

「あ～あ、今日は帰りたくないなぁ～」

シャーンの突っ込みを鮮やかにスルーしながら、何故かチロルの口調を知っている、チロルの名前も知らないルゥは、感じたまま思いついたままに台詞を勝手に付けていく。

「な、何言ってるでアルか?!　大歓迎でアルよ!」

「……。後半は言ってないと思うぞ」

「ホントに?!　アタイ嬉しいっ♪　じゃあ、今夜は泊まっていくね♪　……あっ!　やばっ、もうこんな時間!」

「いろいろと支離滅裂だなオイ」

「え?　もう帰っちゃうでヤンス?」

「……はあ……」

楽しそうなルゥに、もう好きなだけやっててくれ、と背中を向けてその場に腰を下ろして空を見上げるシャーン。

一番星見ー付けたー。

「うん、もうそろそろ帰らなきゃ……ごめんねミントきゅん。――用事があるなら仕方ないザマス。――うん……あ、ねえ」

ルゥの瞳に、ミントに顔を近付けてにっこりと笑ったチロルが映る。

「記念にちゅーしよっV」

「なんの記念だ」

一番星を見上げながらも、やっぱり突っ込まずにはいられなかったシャーン。

「へ!?　……もう、しかたないぴょん。ゲっへっへっ♪」

「うっわぁ、台詞だけ聞いてると俺の息子超変態」

「……っも〜、ミントきゅん、アタイ、今日の映画みたいなぶっちゅ〜〜〜って熱烈なヤツがいい〜みたいな〜」

「その表現はどうだろう」

「にゃにゃっ!?　そそそんにゃことしたら、オレもうどうにも止まらなくなっちゃうにゃーよ?!」

「なんで猫だよ」

「は〜や〜くぅV」

「つかお前、そんな顔出してていいのか?」

「……どうなっても、知らないぜ?」

シャーンの疑問が耳に入らないくらい盛り上がっているルゥは、声のトーンを落として自分なりにかっこいい声を出してそう言った。

「……？　？！　る、ルゥ様っ！？」

そして、ミントの動きに合わせて彼に台詞を吹き込んだ後、

「「って、……え？」」

シャーンと一緒に、只今の事態に気が付いた。

「ししゃ、しゃしゃしゃ、シャーン？」

直後、滝のように流れる冷や汗。

「おおおお、おう、なんだルゥ？」

伝染する冷や汗。

「な、なんかな？　今オレすーげぇヤバイ気がすんだけど」

青を通り越して白くなる顔色。

「お、おう。気がしなくてもすーげぇやべーと思うぞ？」

伝染する顔色。

そんな二人に向けて、顔を真っ赤にしているチロルのお隣で、ミントがにっこりと、それはそれはとっても素敵に笑ってみせた。

「ななな、なあ、オレの変装に希望を持っていいかなぁ？」

「は、ははは、そんな希望は捨てた方がいいぞ？」

「そこの二人」

「「は、はいいっ！！」」

そして、話し掛けられた。

「こんばんは」

「「こ、こんばんは」」

「だいぶ涼しくなってきましたねぇ」

「「そ、そうですね」」

「風邪引かないように気を付けなくちゃですね」

「「そ、そうですね」」

「では、オレ、これからチロルを駅まで送ってきますので」

「「そ、そうです――」」

「さようなら」

人生に。

「さ、行こっか」

「う……うん……」

夏の公園の茂みの中に、一足先に突如咲き誇った二輪の彼岸花を残し、ミントとチロルは何事もなかったかのように去っていったのであった。

第１４４回　大蛇日和

夏休み明けの国立魔法学校の森の中で、

「……」

「……」

「……」

プリンとココアとポトフの三人は、いずれも綺麗と形容できる顔で驚き、それぞれが青と濃い桃色と茶色の瞳をぱちくりさせていた。

「？」

彼らの正面には、右半分は赤で左半分は緑という派手な髪を真ん中わけにして、ぶかぶかの帽子を被っている男の子が、こちらも黄緑色の瞳をぱちくり。

「あ、ちょーちょ！」

おめめパチクリ対決を先に放棄したのは、ひらひらと飛んできた蝶々に興味を示した彼、ちっちゃいミント。

「まってー！」

まったくもって届いていない両手を蝶々に向けて伸ばしながら、彼はてけてけ走りだした。

「わあっ？！」

そして転けた。

「……ふえっ……」

後、涙じわ～。

「ヒール」

「！」

軽く擦り剥いた膝に、彼の隣に膝をついたポトフが回復魔法をかけると、

ぷわ

「わあ……！」

ぷわっと光が傷を包むように光ったかと思うと、綺麗に傷が治ったお膝がこんにちは。

「おにいちゃん、おいしゃさんなのっ？」

すると先程の涙はどこへやら、ミントは瞳を輝かせて自分の膝とポトフを交互に見た。

「それがお兄ちゃんの将来の夢なんだぜェ？」

彼の質問に首を横に振った後、にこっと笑って答えると、

「すごーい！　がんばって！」

「あっは、ありがとな♪」

更にミントの瞳が輝いたので、ポトフは彼の頭にポンと右手を載せた。

「ミントの将来の夢は？」

「ん、オレ？　オレは……んーとね、んーと……、おはなやさん！」

「お花屋さんかァ。お花が好きなのか？」

「うんっ！」

「じゃァ、ミントはなんのお花が一番好きなんだ？」

「えっとね、マッ――」

ガサガサ

「――ド……？」

微笑ましい会話の途中で、彼の回答を掻き消すように背後で茂みを掻き分けたような音がしたので、不思議に思ったミントが振り向くと、

『『シャアアア……！』』

平均的な成人男性並にでかいヘビ型の魔物がずらり。

「ふえぇぇぇんっ！！」

それにびっくりしたミントが泣きながらポトフにしがみつくと、

「キラキラ」

彼を抱き上げたポトフは、立ち上がるとすぐに魔物たちに向けて光魔法を放った。

ドカアアアアアン！！

彼の右手の先から放たれた光線に、魔物たちが一掃されたのを見て、

「わあ……！」

ミントは、再び瞳を輝かせていた。

「おにいちゃん、すごい！　やさしいしつよいしかっこいいしで、すごいすごーい！」

「あっはっはっ♪　だろォ、ミント？」

「うん、すごい！！　……て、あれ？　そういえば、おにいちゃん、どうしてオレのなまえしってるの？」

「ふふん♪　それは俺が超能力者だからだぜェ？」

「すごーい！！」

何やら楽しそうに会話してキャッキャと盛り上がっているポトフとちっちゃいミントの後方で、

「……ポトフって、意外と子ども好きなんだねー……？」

「……ふむ」

すっかり忘れられていたココアとプリンが、彼らの様子を眺めていた。

「これなら子どもができても……――って！　何考えてんのよ私のバカバカバカーっ！！　だいたいそこにいくまでの過程がまだなのに……――ってぇ！！　更に何考えてんのよ私のバカーーー！！」

何やら自分の頭をポカポカ叩きだした愉快なココアの隣では、

「弱体化の魔法……あの魔力は魔物で、魔法陣を使わない魔物は確か……さっきのヘビ……？」

プリンは、森に入ってすぐにがきんちょ化したミントの謎解きをしようと試みていた。

「――！　下がれ馬鹿犬っ！！」

後、先程の魔物を倒した筈なのに元に戻らないミントを見てはっと何かに思い当たったプリンは、慌てて前方にいる彼らに下がるよう訴えた。

「？　どうし――……」

流石に真剣な様子のプリンに食って掛かるようなポトフでもないらしく、ミントを抱えたまま素直に後ろに下がった彼が理由を尋ねようとしたところ、

ドカアアアアアン！！

『シャアアアアア！！』

先程と見た目は同じだが規格外にでかいヘビが、大口を開けて地面から飛び出してきた。

「ふわあああぁあん！！」

迫力満点な登場の仕方をしてくれた上に、迫力満点な姿形を見て、ミントは大泣きしながらポトフにしがみつく。

「……っ……」

その一方で、嫌な予想が的中してしまったとばかりに奥歯を噛み締めたプリンと、

「……ち……」

ポカポカやりすぎて左側頭部と右側頭部が若干痛いココアと、

「……ちっ……」

耳元でミントに泣き叫ばれて耳の奥が若干痛いポトフは、戦慄を走らせながら、その魔物の名を口にした。

「「チャッピィ……！！」」

台無しである。

『シャアアアアア！！』

鱗状の皮膚には毒々しい色彩を、ゾウさんくらい余裕で収まってしまいそうなほど大きな口には本物の毒が滴る巨大な牙を持った、かわゆい名前に似付かわしくないその魔物、チャッピィは、ただでさえ細い瞳孔を更に細くして目の前の獲物に鋭い眼光を向け、先の割れた舌をちらつかせながら鎌首をもたげている。

「おい、なんとかしろ超能力者」

「そーだよ超能力者ー！」

「ごほんっ！　……なんとかしろったって、おにぃさんじゃあるまいし……」

聞いてたのか、と若干顔を赤くしてわざとらしく咳払いした後、チャッピイを見上げたポトフの言葉を、

「？　ポトフのお兄さんならなんとかできるのー？」

ココアが疑問符を浮かべながら聞き返した。

「……まァ、なんて言うか、爬虫類使い？」

それに頷いてみせたポトフは、苦笑いを浮かべながら答えた。

その苦笑いの原因はもちろん、トカゲどころか最近ではなんかドラゴンとまでも仲良くなった彼の育ての親にしてお兄さん的な存在である、爬虫類を見るとついついはしゃいでしまう節がある笑顔が素敵な茶髪お兄さん、ソラ。

「確か、チャッピィって無属性だったよなァ？」

彼がこの場にいたらすぐに万事解決だっただろうにとか思いながら、ポトフはココアを挟んで隣にいるプリンに確認した。

「うむ。ついでに、あいつの毒牙をくらうか締め付けられたら最期だ」

すると、プリンはさらりとそう言った。

「ちょ、最期とか言わないでよー？！」

ので、ココアから反発をくらった。

「む？　じゃあ、もって十秒？」

「じゅっ？！　もつって……もつって言われたって、十秒で一体何ができるのよー！？」

「ぶう……だから最期だって言ったのに」

「膨れてる場合じゃないでしょー？！」

「ぷわあ！？」

ぶうっと膨れたプリンの頬を両手で挟んで破裂させたココアは、

「あ」

ピコーンと何かを思い付いた。

「ポトフ！　私、いいこと思い付いた！」

ので、ぱっとポトフの方に向き直ってそれを報告した。

「?！　こ、ココアちゃん子どもの前でそんな刺激的なこと――」

「おいでミント♪　ダークネスサクリファイス」

何やら変な勘違いをしたポトフからミントを没収した後、ココアはおっかない表情で彼をぶっ飛ばした。

「いーい、プリンとポトフ?　あれはおっきくて魔物でもヘビで爬虫類なのー」

ふわあああんと泣き続けているミントにいーこいーこしながら、ココアは獲物に狙いを定めているチャッピィをズビシっと指差した。

「詰まりー♪」

「「……詰まり……?」」

プリンは思い切り挟まれた頬に手を当てながら、ポトフはお腹を押さえて起き上がりながら先を促すと、

「”北風と太陽”作戦だよー♪」

温度変化に弱いでしょー？　と、ココアはえへんと胸を張ってそう言った。

「北風と……」

「太陽……？」

プリンが左を向き、ポトフが右を向くと、ばっちりぶつかる二人の目。

「……ふっ、北風の圧勝だな」

「あっは、太陽が勝つに決まってんだろ？」

その後、例のごとくバチィッと火花を散らす二人。

「神風！！」

「キラキラァ！！」

ドカアアアアアン！！

こうしてチャッピィと戦い始めたプリンとポトフの後方で、

「単純単純ー♪」

ココアは引き続き、ちっちゃいミントの頭をいーこいーこと撫でていた。

第１４５回　体育祭日和

国立セイクリッド魔法学校で、夏休みが終わるとすぐにやってくる行事が体育祭。

「ミントさん、ちょっと」

「？」

玉入れやら大玉転がしやら綱引きやらといった体育祭の定番メニューが終わり、お次は、なんかもういろいろと面倒臭くなったのか、学年全員障害物競走というめちゃくちゃな種目。
それが始まる前に、魔法学担当のポリー先生に呼ばれたミント。

「なんですか？」

「左手を出してください」

「？　はい」

言われるがままにミントが左手をポリー先生に向けて出すと、

くるっ

と手の甲を上にされ、

バッシーン！！

と、叩かれた。

「いった――」

「はい、結構です」

「――って、ええ?!　何――」

「では、障害物競走、頑張ってくださいね」

手をぶっ叩いてミントをスタートラインに戻し、何事もなかったかのようにスタスタと去っていったポリー先生の後ろ姿を見ながら、

「――……オレ、何か悪いことした?」

ミントは疑問符を浮かべながら、ぶたれた左手の甲を右手で擦っていた。

『ほな、学年全員障害物競走を始めるで～！　全員、気合い入れて天辺の赤旗を手に入れるんじゃぞ!!』

すると、体育担当のエル先生のアナウンスが流れて、

（（てっぺん……？））

どこまでも平らなグラウンドを見て、生徒たちが一様に疑問符を浮かべたところで、

『イッツ、ショウタ～イム!!』

ピストルではなく、エル先生の華麗なる指パッチンが鳴り響いた。

瞬間移動したその先は、ジャングルでした。

「って、えええええ?!」

久しぶりのようなそうでないような展開に、取り敢えず叫んでみるミント。

「あっは……、見事にしてやられたって感じだなァ」

「！　ポトフ！」

すると、後ろにポトフがいたことに気が付いた。

「天辺てのは、たぶんあの山の頂上っていう意味だろな。一緒に頑張ろうな、ミント♪」

彼ににこっと笑いかけながら言った後、

「って、あああああ！？」

ポトフも叫んだ。

「え、リアクション遅くない？」

と、ミントが疑問文で対応すると、

「こ、これは……」

「これは？」

ポトフは、青い顔で頭を抱えてうつむいた。

「ココアちゃんと枕パターン……？！」

「……ふむ。やられたな」

海の向こうに沈みかけている夕陽を眺めながら、ジャージというものがなかなか似合っていないプリンがさらりと言うと、

「いや、なんでそんなに冷静なのっていうかどこよここはー？！」

ポトフの予想通り、彼と一緒にワープしたココアが喚きだした。

「少なくともセイクリッド島ではないな」

辺りを見回した後、再びさらりと答えるプリン。

「だったらどこなのよー？！」

再び同じ質問で返すココア。

「……。呼び出し魔法圏外だから、僕たちの生活圏から半径５０キロメートル以上離れた場所だな」

呼び出し魔法を試してみた後、三度さらりと答えるプリン。

「！　そうだ、プリン、テレポート！」

さらさらと答え続ける彼にぱっと顔を向けたココアが提案すると、

「僕が今いるこの場所の座標が分からない」

プリンはまたまたさらりと答えた。

「えええ？　じゃー、どーするのよー？」

困り果てた様子で、ココアがへたりこむと、

「……大丈夫だ。これは障害物競走なのだろう？　それなら」

プリンはふっと微笑んで見せた後、ジャングルの向こうに見える山の頂上をすっと指差した。

「！　そっか！　あの山の天辺にある赤い旗を！」

「うむ。その旗を」

この状況の打開策が見付かり、ぱあっと顔を明るくしたココアに、プリンが頼りがいのある返事をしてみせた。

「誰かが取れば帰れる」

「めちゃくちゃ他力本願ー？！」

ミントがいない今、めでたくメイン突っ込み役となったココアであった。

第１４６回　お月見日和

海の向こうに沈んでいくきらきらとした夕陽を眺めながら、

「綺麗だねぇ」

「そォだなァ」

半袖にハーフパンツで、頭にウサギさん寮のクラスカラーであるイチゴミルクのようなピンク色のハチマキを身につけている、なんとも体育祭ルックな二人がほのぼの。

「って、ああもォ、ここは”ココアちゃんの方が綺麗だぜ☆”って言う場面じゃねェか?!」

していたかと思いきや、ポトフが力任せに頭から取ったハチマキを地面に叩きつけた。

「あは、野郎でごめんね」

その隣で、同じく帽子で隠れたハチマキを取るミント。
ミントのハチマキの意味、皆無。

「いや、ミントは全ッ然悪くねェ……けど」

申し訳なさそうでもなさそうに謝るミントに、ポトフは笑ってみせた後、

「ココアちゃんに手ェ出したらぶっ飛ばすぞ枕……」

この島のどこかにいる筈のプリンに向けて殺気を送り出した。

「まま、あの山の天辺まで行けば万事解決なわけだし」

殺気立つポトフをなだめようと、ミントがあははーと笑いながらするっと話題を変えてみせた。

「でも、あそこまで行くのには」

めちゃくちゃ時間がかかるだろ？　と弱気なポトフの目の前で、

「そこはオレに任せてよ。――古より来たる琥珀」

ミントは頼もしげに呪文を唱えた。

「！　そうか！　グリフォンを呼べば！」

「そゆこと。――σ（シグマ）！」

グリフォンならあの山頂までひとっ飛びだ、と顔を見合わせて頷く二人。

「……。あれ？」

――しかし、そうは問屋が卸さない。

「ありゃりゃ。これはポリー先生にしてやられたね」

いつものように魔法陣が出現しない不思議にポトフが疑問符を浮か

べると、ミントは自分の左の手の甲を彼に見せた。

「……？　これは……召喚魔法の魔法陣？」

それをじっと見た後、ポトフが記憶を辿りながら首を傾げると、

「の、逆魔法陣」

ミントは肩をすくめて彼の答えを補足した。

彼の言う通り、ミントの左手の甲には、召喚魔法を使用するときに現れる魔法陣と左右対称の魔法陣が浮かび上がっている。

「逆魔法陣、って、確かホントの魔法陣の魔法を相殺して……」

「そ。だから召喚魔法使用不能デス」

お役に立てなくて申し訳ない、とハハハと笑いながらミントが謝ると、

「となると、徒歩かァ」

ああ、ココアちゃんと枕の二人きりの時間が長く……と、彼の頭の中で勝手に確定したペアに、ポトフはどんよりと肩を落とした。

「……」

そんな彼を見て、

「体育祭の後だから、もうすっかり遅くなっちゃったねぇ？」

「？　遅い……？」

「汗も掻いちゃったから、お風呂にも入りたいよねぇ？」

「！？　お風呂……？！」

「ヘトヘトだから、今日は早めに寝たいよねぇ？」

「寝っ――」

「でもって、秋の夜は寒いよねぇ？」

「――寒？！」

ミントはポトフのことを、軽ーくおちょくってみた。

「さんはいっ」

「枕ぶっ飛ばァァァァす！！」

「あはは♪　ポトフってホント扱いやすいねぇ？」

おちょくり作戦大成功。

自分の想像力のたくましさを呪いながら、太陽が完全に沈んではっきりと姿を現した満月に向かって吠えるポトフであった。

「「――？！」」

今宵は満月。

それはそれは、最高のお月見日和であった。

一方その頃、ココアはというと、

（訴えてやる訴えてやる訴えてやる訴えてやる）

告訴上等になっていた。

「……ふむ」

理由は、今が日が暮れる時間帯なのと、一緒にいるのが異性だということ。

（訴えてやる訴えてやる、絶対にＰＴＡに訴えてやるわー！！）

セイクリッドの教員どもめえぇえ……！！！！　と、怒りの炎を燃え上がらせながら、ココアが己の心に絶対に訴えてやると誓っていると、

「ココア」

前方を歩いていたプリンが立ち止まって振り返り、彼女の名前を呼んだ。

「うったーい？！」

心の声と反応の声が融合して、わけの分からない声を発してしまったココア。

「……？　今日はこれ以上進むのは危険だ」

それに対して疑問符を浮かべながらも、暗くなってきた辺りから判断してプリンがさらりとそう言った。

「ええ！？　ど、どーしてっ？！」

ので、その状況になるといろいろと困るココアは慌ててその理由を尋ねた。

「この時間帯とあたり一面の植物のせいで視界と足場が悪い上に、夜行性の魔物と動物に襲われる危険性もある。それに」

その疑問に、プリンはもっともらしい理由を並べた。

「眠い」

後、本音を曝け出した。

「いや、どー考えても早すぎでしょー？！」

すると始まるココアの突っ込み。

「む？　今日は体育祭で疲れただろう？」

「いや、プリン、明らかに疲れるようなことしてなかったよねー！？　ほとんどの種目ずーっとつっ立ったまんまだったよねー？！」

「ううむ。たまに座ってたぞ」

「いや、なおさらタチ悪いよねー！？」

「そして寝てたぞ」

「いや、更に最悪だよねー？！」

「だから眠い」

「いや、全ッ然脈絡が見つからないんですけどねー！？」

「……むう」

ガンガン突っ込んでくる彼女に、プリンは逆に聞き返してみた。

「ココアは眠くないのか？」

と。

「わ、私は……」

眠くない、と言えば嘘になる。

もちろんそれは、彼女は彼と違って体育祭に真剣に取り組んだから。
――が、しかし、

（この人だけは大丈夫だなんてうっかり信じたらダメダメなのよー！）

男は狼なのよー！　と何やら危なっかしい台詞を用いながら、ココアはプリンを警戒していた。

「ぷわ……」

が、

「……ねむねむ」

しかし、

「ぐー」

「って、ちょ、寝ないでよー！？」

欠伸をした後、そのまま眠りだしたプリンを見て、ココアは慌てて彼を起こしにかかった。
理由は、一人にされても困るから。

「……む？」

何？　と、睡眠を邪魔されて明らかに先程より機嫌が悪くなっているプリン。

「え、っと、その、こんなジャングルのど真ん中で立ったまま寝てたら、狙ってくださいーって言ってるようなものじゃないー？」

その様子に焦りながら、わたわたと彼を宥めるココア。

「……、うむ。それもそうだな。ぷわ……」

すると、プリンは素直に納得し、欠伸混じりにきょろきょろと辺りを見回した。

「む。じゃあ、あそこ」

そうして発見したのが、人が二人入ってちょうどくらいの、大木の根本付近に空いた空洞。

「ぅええ？！　ちょ、っと狭ーくないー？」

そのサイズに、気持ち控えめに注文をつけるココア。

「……ふむ……大丈夫だ。あの大きさなら二人くらい入るぞ」

んなことよりも眠いプリン。

「や、でも私、えーと、ほら、寝相悪いしー？」

無理無理無理狭い狭い狭い、と引きつった笑顔を浮かべながら両手を前に出すココア。

「ぷあわ……あれだけのスペースなら寝返りも打てないだろ」

とにかく眠いプリン。

「っあ、そ、そーだ！　それより私、お風呂入りたいなー？」

だからそれがまずいんだってば！！　と心の内で突っ込みながら、ココアは、本人的にはごく自然に、実際的にはかなり不自然に話題をすり替えた。

「……、お風呂？」

彼女の突然の提案を、プリンはかなり眠そうな青い目を擦りながら聞き返す。

「そ、そう！　お風呂！　今日は体育祭だったし汗掻いちゃったからさっぱりしたいなーって♪」

無事話題を逸らすことができた、と喜びながら話を進めるココア。

「……」

するとプリンは、

「汗、掻いたのか？」

僕は掻いてないぞ的なきょとん顔で聞き返してきた。

「う、うん、むちゃくちゃ掻いたよー！　だからちょーベトベトで気持ち悪くってー！」

こんのミスターさぼり魔め！　とか思いながら、ココアはこくこく

頷いた。

「……。そ……ぷわ……、じゃあ」

その答えを聞いて、プリンは眠い目を擦りながら、先程自分たちが渡ってきた浅い川まででてこてこ戻ると、

「ええ?!　こんな水も冷たい上に浅い川じゃ――」

「モルディング」

ココアのリアクションを遮り、泡枕を作る要領で川の水を集めて宙に浮く大きな水滴を作った。

「熱風」

その後、熱を伴う風魔法でその水を温めると、世にも奇妙な宙に浮くお風呂の完成。

「できた」

「あ、ありがとー……」

作ってもらっちゃった、と作ってもらっちゃった後のことを考えていなかったココアは、新たな問題が発生したことに気が付いた。

「あ！　私、タオルと着替え持ってなーい！」

「……。微風」

すると、プリンが右手を動かしてお湯の球から小さなお湯の球を切り取るようにして作った後、生み出した微風を操って小さなお湯の球の中に渦を生み出し、更にその隣に人一人分の風の球を作った。

「え……と、これはー？」

目の前にある三つの不思議な球を指差しながら、ココアがプリンに顔を向けると、

「一番右が体、二番めが服を洗うところで、三番目で乾かせ」

彼はさらさらと説明した。

「あ、ありがと、プリンー！　……で、あのー」

三つの球を見て魔法のすごさを改めて実感しつつお礼を言ったココアは、恥ずかしそうに再びプリンの方を向いた。

「のぞ――……って、あれ？」

が、そこにプリンはいなかった。

「ぷわ……じゃあ、僕は先に寝てるぞ」

そしてその代わりに、背後から遠退いていく彼の声が聞こえてきた。

「……うん、オヤスミ」

ここまで完全に興味がないとそれはそれで何か釈然としないものを感じながら、ココアは解放感ありまくりなお風呂と洗濯機？　と乾

燥機？　の周りに真っ黒な闇の盾を張った。

「ぷわ……ふむ、女の子は面倒臭い」

それに背を向けて、プリンは何やら失礼なことを呟いて先程見つけた寝床に向かって歩きながら、先程から連発している欠伸を更にもうひとつ。

「む？」

するとプリンの青い瞳に映ったものは、一点の曇りもない見事な満月。

そして、

「――！！」

彼の耳に、狼の遠吠えが聞こえてきた。

第１４７回　黒狼日和

月明かりだけが頼りの夜のジャングルで、

「ば、馬鹿犬っ……」

寝る為に解いた流れるような水色の長い髪を上下させながら、プリンは微弱に感じられる魔力を辿って必死に走っていた。

「……は……は……」

ジャージ姿が似合わない彼は、走る姿もどこか似合っていない。

「……っ」

そう思えるほどのことだから、やはり彼は持久力というものが乏しかった。

「……はあ……」

だってこんなに長い距離は走ったことがない。

急いで移動するときはいつも瞬間移動魔法。

体育なんか大嫌い。

――そんな日頃の運動不足がたたって、プリンは走り出して五分後についには足を止め、近くにあった木の幹に背中を預けた。

「……は……」

月夜をバックに汗を拭いながら肩で息をしている姿は様になってい

るが、足の速さからして彼はそんなに走っていない。
何故か闇の盾で周りをガチガチに固めていたココアは一人にしても大丈夫だとして、問題は狼に変身したであろう馬鹿犬と、

「……！　ミント……！」

ミント。
辺りがジャングルということもあって気が付くのが遅れてしまったが、光の魔力の近くに確かに感じる樹の魔力。

「っ……！」

こんなことをしている場合じゃない、と足を動かそうにも、喘息ばりに乱れた呼吸と早々と襲ってきた筋肉痛により、かなわない。
悔しがる姿は様になっているが、悔しがる理由はまったくもってかっこよくない。

ガサ

「！」

プリンが自分の体力の無さを痛感していると、心と身体が悲しいほど呼応していない彼の正面から、茂みが動いた音がした。
そして、それに次いで聞こえてきたのは、

「！　プリン？」

ミントの声。

「……！　ミント！」

その声に顔を上げ、その姿にぱあっと顔を明るくするプリン。

「だ、大丈夫?!　なに、発作!?」

そんなプリンの呼吸から、喘息の発作でも起こしたんじゃないかと思ったミントは、慌てて彼の近くに移動して背中を撫で始めた。

「……」

そこで、プリンが初めて気付いたことが一点。

『ヘッヘッヘッ』

ミントの薔薇の鞭に、黒い狼が繋がれていた。

『クゥン?』

――え、えええええ?!

「み、ミント?」

そんなコメディ的な反応をすることなく、彼はミントに目を向けて狼を指差す。

「ん?　ああ、それ?　ポトフだよ」

ポトフ、それ扱い。

ミントはプリンの背中を撫でながら、黒い狼化したポトフに目を向けた。

「野性の動物って、お腹がいっぱいのときはほとんど狩りしないでしょ？　それと同じみたいで、こうなる前に鹿を捕まえてほとんど丸々一頭食べてたからおとなしかったんだ」

オレも足の方のお肉を貰ったけど、と言って、ジャージのポケットからその骨を持ち出し、ポトフに与えてみるミント。

『♪』

するとカリカリぱりぽりバキバキと楽しそうに鹿の骨を噛み砕き始めるポトフ。

「もし食べてなかったら、これがオレになってたんだろうね♪」

シャレにならないことを言うミント。

「……」

――走ってきた意味ねえええ！！

「……よかった」

そんなコメディ的な反応をすることなく、ミントが無事で、ポトフが誰かを傷つけていないことを知ったプリンは、胸を撫で下ろしてふっと微笑んだ。

「ふう、さっぱりしたーっ♪」

お風呂からあがったココアは、洗って乾かしたジャージを着て闇の盾を解除した。

「水洗いだったけどねー」

どうせならシャンプーとか欲しかったなー、とか思いながらテクテク歩いている途中で、

「――って、はぅ?!」

ココアは、はぅっと何かを思い出した。

（お、お風呂が終わったってことは、次は就寝?!）

なんの気なしにプリンが見付けた寝床にやってきてしまったココアは、ぼっと赤くなった頬を押さえて背を向けた。

（あーもー、なんでプリンなのよー？　いや、ポトフでも困るけどー！　私だって女の子だよー？）

一緒になんか眠れないよー！　とココアが苦悶していると、

くんくん

彼女の膝の後ろに、何かが接触した。

（だからといってミントでも……、……。……まあ、ミントはいっか。――て、へ？）

悲しいことに、ミントはココアにいまいち男性として認められていないということが判明した直後、それに気付いた彼女は、ぱっと後ろを振り向いた。

『へッへッへッ』

そこには、蔓のようなもので繋がれた、舌を出して呼吸している黒い狼が。

「おっ、狼ーっ？！」

ので、ココアはびっくり仰天。

このジャングルには狼なんているのかとか思いながら、首を物凄い勢いできょろきょろさせてプリンを探す。

へるぷみー。

『へッへッへッ』

（怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い）

が、

『クゥン？』

（かぅわいーい♪）

ココア、ノックアウト。

恐怖で怯え切っていた顔をうっとりにっこりさせると、彼女は狼と視線を合わせるようにしゃがみこんだ。

「えへへ♪　おすわり」

そして、何故か犬扱い。

しゅたっ

「わっ、お利口さんだねー！　お手！」

しゅたっ

「おかわり！」

しゅたっ

「伏せ！」

しゅたっ

「三回回ってワーン！」

くるくるくる

『アオーン！』

「きゃー！　すごいすごーい！」

完璧に言うことをきく黒い狼を、ココアはすごいすごいと撫で回す。

もはや、完全に犬扱い。

『♪』

狼も狼で、それを素直に喜んで彼女の顔をペロペロと舐め始める。

「きゃっ！　もー、くすぐったいよー♪」

そんな可愛らしい狼を撫でていると、ココアはこちらに近付いてくる足音に気が付いた。

「あ、プリン！　どこ行ってたのー？　と、ミントも一緒だったんだー？」

ので、顔をあげると、そこにはぽかんとした顔をしたプリンとミントが。

「……。ココアの寝る場所を探しに」

ココアの質問に、汚そうに眉を顰めつつ答えるプリン。

「え、ホント？！　ありがとー！」

これで寝る場所の問題は解決したと、彼の表情に気付くことなく喜

ぶココア。

「……ココア、それは」

まだ狼と楽しそうに戯れている彼女に、今度はプリンから話し掛けると、

「あ、この子？　すごいんだよー？　なんでも言うことをきくの！　おすわり！」

しゅたっ

「ほらねー♪」

ココアは狼の頭の良さを見せ付けた。

「ね、私の寝る場所にこの子連れてってていいー？」

「……。別に、構わないが……」

「やたー♪」

狼が蔓のようなもので繋がれていたので彼らが捕まえたものと判断したのか、プリンの許可を得て喜んだココアは、

「あっ、そー言えば。ミント、ポトフは一緒じゃなかったのー？」

私とプリンがペアなら、と思い出したようにミントに向けて質問した。

「それだよ」

ので、ミントは頷いて答えた後、すっとココアを指差した。

「へ？」

私？　と疑問符を浮かべたココアの頬を、

『♪』

ぺろっと舐める黒い狼。

「それ」

ポトフ、それ扱い。

「……」

「……」

「……」

『クゥン？』

間。

「っきゃあああああああああああああああ？！」

夜のジャングルに、ゆでダコのごとく顔を真っ赤にしたココアの悲鳴がこだました。

第１４８回　戦隊日和

東の空に日が昇り、ジャングルに朝がやってきた。

「……むう。まだ誰も取ってないのか」

「まーまー、目指すはあの山の天辺だよー！」

人一倍ぐっすり眠っていたにも関わらず、まだ誰も旗を取っていないことに不満を顕にするプリンと、そんな彼を宥めながら自分たちが目指す山の天辺を指差すココア。

「あは、大丈夫ポトフ？」

「お……おォ……」

その隣で、ミントは、狼から人間の姿に戻り、先程ココアに挨拶よろしく破竹の勢いでビンタされてしゃがみこんでいだポトフをつっついていた。

「えーと、ここの、座標？　が分からないからテレポートは出来ないんだよねー？」

「うむ。ミントの召喚魔法も使えないらしいからな」

あくまでも他力本願なココアとプリン。

「呼び出し魔法も使えねェから箒も使えねェし」

ぶたれた左の頬を押さえながら話し合いに参加するポトフ。

「ごちそーさまっ。さ、行こっか」

すると、自分で見つけてきた木の実とポトフが狩ってきた鹿さんの右の後ろ足を食べ終えたミントが、一度地面に手を付けた後、ぱんぱんと手を叩きながら立ち上がった。

「む？」

「へ？」

「はェ？」

と、三人が疑問符を浮かべながらこちらに顔を向けたのとほぼ同時に、

「ジャックと豆の樹♪」

ミントが植えた魔法の豆の樹が急成長し、四人を乗せて山の天辺に向かっていった。

大きな豆の樹の葉っぱに乗って、山の頂上までひとっ飛び。

「ミントすごーい！！」

「スゲェぜミントォ！」

「うむ。ミントすごい」

後はゴールの赤旗を探すだけだと、豆の樹から降りたココアとポトフとプリンはミントを誉め讃える。

「あは、この魔法があったことすっかり忘れてたよ」

豆の樹を消してふうっと一息ついたミントが額の汗を拭うと、

「……よ、よくぞここまで辿り着いたな」

「「？」」

どこからともなく、非常に棒読みな低い声が聞こえてきた。

「だが、これが”競争”だということを忘れているようだな。詰まり、勝者はただ一人」

辺りをきょろきょろと見回す四人に向け、再び棒読みな台詞を発し

た後、

ザッ

と、かっこよく彼らの目の前にその姿を現した。

「こ、この旗が欲しくば、この俺っ……、……ふ……”不思議仮面”を倒すことだな……っ！！」

不思議仮面、見参。

「……」

「……」

「……」

「……」

「「……」」

突然現れた不思議仮面、短めながらも左側にボリュームのある銀髪で、黒を基調とした怪しげな衣服を身に纏い、顔が鼻の頭から上を隠す仮面で半分隠れている背の高い人物の登場に、四人はポカーン。

「……て、何してんですかセ」

明らかに”セ”のつくあの先生だと、早々に不思議仮面の正体を見破ったミントが口を開きかけると、

「「ふ、不思議仮面……っ？！」」

プリンとココアとポトフが、戦慄した。

「って、いやいや何乗ってんのさ？　明らかにセ」

「ミントくん、プリンくん、ココアちゃんにポトフくん！」

ミントの声は、彼らの背後に現れた薬草学担当のクー先生により、再び遮られた。

「！　クー先生っ？」

クー先生の登場に驚くココアとプリンとポトフに、クー先生は素敵に笑ってこう言った。

「びよレンジャーに、変身よ！！」

と。

「……」

「……」

「……」

「……」

間。

「いやいや、何わけの分からないことを」

「「びよレンジャー？」」

「って、何興味持っちゃってんのさちょっと」

何か突っ込んでいるミントをよそに、聞いたことのない単語を聞き返すプリンとココアとポトフ。

「うんっ！　悪と戦う正義の戦士、五人合わせてびよレンジャー♪」

紫色の瞳をきらっきらに輝かせて、クー先生は楽しそうに説明する。

「”びよ”って何さって言うかオレたち四人だしって言うか悪ってもしかしてあのセ」

「赤と青と黄色と緑とピンクがあるから、好きなのを選んでね♪」

ミントの突っ込みをことごとく無視して、クー先生は五色のマフラーを持ち出した。

「……」

ここまで無視されたものだから、ミントはくるりと向きを変え、不思議仮面に話し掛けた。

「あの、セ」

「不思議仮面だ」

「いや、セ」

「不思議仮面だ」

「だから、セ」

「不思議仮面だ」

「……」

「……」

「セ」

「不思議仮面だ」

不思議仮面は、一歩たりとも譲ってはくれなかった。

「……。クーせ」

「ミントくん、何色がいいっ？」

（もみ消そうとしてるッ！　”セ”に反応しすぎて”先生”の”せ”を遮っちゃうくらいむちゃくちゃ必死でオレの発言をもみ消そうとしてるッ！！）

にっこりと笑顔を見せながらも、その先は言わせねえぜオーラを放出しているクー先生を目の前に、ミントはついに発言を続けることができなかった。

「私ピンクー♪」

「って、ちょっとお?!」

が、びよレンジャーになりたくはなかった。

「?　何ー?　ピンクは譲らないよー?」

「いや、別にオレがピンクがいいからってツッコミを入れたんじゃなく!!」

「じゃァ、俺は黄色♪」

「って、言ってるそばから!!」

「僕は青だ」

「いやいやいやプリンまでええええ?!」

何やらいつもに増してツッコミが不発に終わっているミントの肩を、

「ミントくん」

「!　クー先生……」

クー先生が、優しく叩いた。

「ミントくんは、びよレッドとびよグリーン、合わせてびよクリスマスねっ♪」

後、彼の首に赤と緑のマフラーを巻き付けた。

「……はい？」

――かくして、びよレンジャーは誕生した。

「この旗が欲しくば、この俺を倒すことだな」

謎の悪役、不思議仮面。

「びよレンジャー、出撃よ！」

天真爛漫司令官、クー先生。

「別にカレーはそんなに好きじゃないけど、びよイエロー！」

斬り込み隊長兼回復役びよイエロー、ポトフ。

「闇属性で武器はチェーンソーだけど紅一点、びよピンク！」

戦場に咲く花びよピンク、ココア。

「ぷわ……ねむねむ、びよブルー」

冷静沈着びよブルー、プリン。

「……じ……人件費削減、びよ……く……クリスマス……」

一人二役びよクリスマス、ミント。

「「四人合わせて、びよレンジャー！」」

シャキーン！

（なんでこんなにノリがいいのさ、って、言うか）

シャキーンとポーズを決めたびよレンジャーに、

「か、覚悟しろ。デビルズドライヴ！」

律儀に待っていてくれた不思議仮面が、先制攻撃を放った。

ドカアアアアアン！！

爆発型の闇魔法は、ポーズを決めていたびよレンジャーに直撃。

「大丈夫、ピンク？」

「う、うん、ありがとー」

その攻撃をピンクをお姫様だっこして難なく避けたイエローと、

「ぷわ……」

同じく軽がると避けた後、欠伸が出るわ、と挑発的な態度を見せるブルーと、

「……っ」

直撃したクリスマス。

「「！　クリスマス！」」

まさかあの攻撃をくらうなんて思ってもいなかった三人は、慌てて彼のもとに駆け寄った。

「クリスマス、大丈夫？！」

その様子から、彼が先程の攻撃をまともに受けてしまったことを知るクー先生。

「どうした、この程度かクリスマス？」

手始めにと放った魔法が当たってしまい、内心軽く動揺しつつもその様を嘲笑う不思議仮面。

「……」

「「……？」」

仲間の呼び掛けに答えもせずに、クリスマスはゆっくりと立ち上がった。

「……て……」

そして魔力を高め、利き手の左手には薔薇の鞭を、

『『ジェラララ！！』』

反対の右手には、自らが多少動きを補ってくれる食人植物の鞭を。

――ヤバイ。

そうプリンとココアとポトフが思ったのとほぼ同時に、その予感は的中することになった。

「クリスマスって呼ぶなあああああああ！！！！」

ヒュバアアアアアン！！

戦場に、びよピンク以外に綺麗なお花が咲きました。

第１４８回　戦隊日和（後書き）

以上、お昼寝してたら夢に出てきた変な戦隊もののお話でしたー。↑
……ぐだぐだで申し訳ございません

第１４９回　プロフ日和（前書き）

後書きにお知らせがあります。ちなみにプロフィール日和を略してプロフ（略

第１４９回　プロフ日和

みなさんこんにちは。
こちらは、隣国の国立セイクリッド魔法学校の食堂でかき氷をいただいている真っ最中のアセロラです。
何故僕がここにいるのかと言うと、別にここのブルーハワイのシロップが格別だからとか、かき氷にサクランボのオマケがついてくるとかそういう理由ではなく、

「ウフフ、プリン♪」

「オウ、マイハニー！！」

「……」

僕の隣にいる彼らが、ここに行きたいと言い出したからです。
いえ、正確には二人が言い出して一人に無言で訴えられたのですが。

「ぐー」

「バーンバニッシュ」

「ええ?！　バニラってセル先生とクー先生の子どもだったのー！？」

「……。塩もなかなかいけるな」

「でしょっ？　きゅうりには味噌もいいけど塩もいいよね♪」

「オレ様は断然チョコレート派だけどな」

「剣の練習？　うん、いいよ。一緒に頑張ろうね♪」

「ホントかァ？！　ありがとォ、アオイ！」

「ぅえぇ！？　いっ、いつから？！　ねえ、いつからあんなツワモノを好きになっちゃったのよリン！？」

「……リン、分からない、です」

「きゃあっ！　じゃあじゃあ、気付いたら恋が始まってたみたいな？！　素～敵～っ♪」

……。

賑やかですねぇ。

僕は基本、食事は静かに取りたい派なのですが。

しゃくしゃく

まあ、この人数的に仕方がないのかもしれませんが。

しゃくしゃく

……。

そうですね、脇役ながらナレーター役を任せてもらいましたが、正直この人数を相手にナレーションするのは、ちょっと。

しゃくしゃく

というわけで、妹と同じ策でいきたいと思います。
まあ、まったく同じっていうのも芸がないので、ここは僕なりに学園ものっぽく個人情報を公開してみようかと。
では、学園っぽく名前の順でいきますよ。

「こりゃ下手すりゃ私のより強敵だわね？」

アシカワ　ウララ
８月８日生まれの血液型はＡ型で１６２ｃｍの女性です。
得意科目は体育で、苦手科目は数学。
将来の夢は保育士だそうです。
盗賊だった経験があるせいか、ピッキングという犯罪行為を特技に持つ彼女は、意中の男性の前ではなかなか素直になれない絶賛恋する乙女中。
しかし、若干鈍いようですね。
まあ、相手にも問題があると思いますが。
ツッコミやすく打たれやすいという性質を持つ、いわゆるツッコミやられキャラです。

しゃくしゃく

アセロラ＝ヨーグルト
１０月１０日生まれのＡ型で１５５ｃｍの男性です。
得意科目は情報を扱う技術で、苦手科目は体育。
将来の夢は情報屋です。
これといって特長とかはないと思われますが、強いて言うなら魔法学校の生徒の大体の個人情報を把握していることですかね？

「次は本当に消し炭に沈めますよ？」

アロエ＝ヨーグルト
１０月１０日生まれのＡ型で１５５ｃｍの女性です。
得意科目は同じく情報を扱う技術で、苦手科目も体育。
将来の夢も僕と同じみたいですね。
かつてミントさんに想いを寄せ、只今バジルさんに迫られ中。
僕の双子の妹で、二卵性で性別も違うのに何故かそっくり。
しかし、どちらかというと甘党の僕とは違って辛党なようです。
探求心が強いらしく、すぐ解剖したくなる癖がありますね。

「……。浅漬けもなかなか……」

イシグロ　ユウ
２月７日生まれのＯ型で１７８ｃｍの男性です。
得意科目は数学で、苦手科目は国語。
将来の夢は歯科医だそうです。
きゅうりをこよなく愛する彼は、歯科医の息子とあってか、甘いものを嫌っているようです。
アオイさんには無償の友人愛を、それ以外には基本的に毒を、そしてたまーに優しさを。
まあ、最近ではミントさんにもなかなか友好的なようですね。
硬派でクールな彼は、どうやらオバケと犬猫と高所恐怖症らしいです。

「そー言われてみれば、目とかセル先生にそっくりだねー！」

ココア＝パウダー
３月３日生まれのＯ型で１５７ｃｍの女性です。
得意科目は家庭科で、苦手科目は音楽。
将来の夢は看護師だそうです。
彼女は照れ屋と言いますか恥ずかしがり屋と言いますか、ポトフさ

んに何か言われると、すぐ顔が赤くなってしまうようです。
その右手から繰り出される平手はなかなかの威力。
ごく稀に見境を失って狂い始めますけれど、それを除けばカタツムリが苦手という可愛らしい一面を持つ家庭的な女性で、いまだに何人もの男子生徒が想いを寄せているのも納得できますね。

「チョコレート漬けもなかなかだぞ」

シニガミ　ワタル
１２月２５日生まれのＯ型で１８０ｃｍの男性です。
得意科目は美術で、苦手科目は体育。
将来の夢はチョコレート、ってどういうことなんでしょうか？
謎多き男性、と言えば何かミステリアスで素敵ですが、取り敢えずわけの分からない言動を頻発させています。
しかし、ふざけているようで、それでいてヒトの気持ちを分かっているような、なんとも不思議な方だと思います。
極度の甘党で、なんにでもチョコレートをかけたがる傾向があるようですが、何か甘党を履き違えている気がするのは否めませんね。

「……リン、恥ずかしい、です」

シラトリ　リン
１０月２０日生まれのＡＢ型で１５５ｃｍの女性です。
得意科目は生物で、苦手科目は社会科。
将来の夢は看護師だそうです。
語尾に無理やり敬語を用いる表情の変化に乏しい彼女は、片想いの真っ最中。
可愛いものとお金が大好きでカエルが苦手、自分の体型を気にしているといった女の子らしいところもありますが、たまーに黒い顔を見せるようですね。

イチゴミルクが好きという可愛らしいところを持つ一方で、敵とあらば問答無用で文字通り首尾一貫する恐ろしく攻撃的な一面を持つようです。

「やぁん、リンちょー可愛い～♪」

チロル＝チョコ
８月２８日生まれのＯ型で１５６ｃｍの女性です。
得意科目は魔法学で、苦手科目は技術。
将来の夢は素敵なお嫁さん、とかなんとか。
備え付けのティッシュペーパーからミントさんに夢中になってしまった模様の彼女は、彼限定で被虐趣味というちょっと危ない嗜好持ち。
そして自分の恋路を邪魔するヤツは容赦なく処刑する勢いで攻撃してきます。
まあ、要するに、とっても一途な女の子ってことですね。

「ふ、フハハ……もう……消し炭に沈んでいると思うのは、私の、気のせいかい……？」

バジル＝スパイス
６月１７日生まれのＢ型で１８５ｃｍの男性です。
得意科目は社会学で、苦手科目は数学。
将来の夢は弁護士、らしいんですけど、こんな弁護士ってどうなんでしょう？
ゴーイングマイウェイな彼は、迷惑なくらいタフなハートをお持ちのようです。
ココアさんのお兄さんに会ってから、アロエを好いているようですが……。
……ココアさんのお兄さんとは違って、僕はアロエが誰と付き合お

うと彼女の勝手だとは思いますが、はっきり言って血縁にはなりたくないのは秘密です。

「……」

バニラ＝ヴォルグランダム
１月２３日生まれのＡＢ型で１４８ｃｍの女性です。
得意科目は魔法学で、苦手科目は語学。
将来の夢は権力者、と言っていますが、恐らく王位継承のことをさしているのかと。
感情の起伏というものがあるかどうかが疑わしいほどに小さい彼女は、実は隣国の次期女王。
呪魂魔法に長けていて、占いという特技があります。
必要最低限の言葉しか発声しない、クールで寡黙なさきイカ大好き少女です。

「ふふっ、どういたしまして」

ヒュウガ　アオイ
５月１２日生まれのＯ型で１６３ｃｍの男性です。
得意科目は化学で、苦手科目は音楽。
将来の夢は学校の先生だそうです。
くすくすふわふわした独特のほのぼのワールドをほとんど毎日展開している彼ですが、剣士の経験がそうさせるのか、彼の後ろに立つと非常に危険です。
水とオバケが苦手な彼は、天然混じりの博愛主義者。
滅多に怒ったりはしませんが、言うときはきちんと言うようです。

「ぐー」

プリン＝アラモード
１２月２５日生まれのＢ型で１８０ｃｍの男性です。
得意科目は魔科学で、苦手科目は体育と調理を扱う家庭科。
将来の夢は技術者、ということは、家を継ぐんでしょうね。
頭脳明晰で容姿端麗、手先が器用で美的センスと美しい歌声を兼ね備えている彼ですが、赤ちゃん言葉まがいな発言と日頃の運動不足からくる体力不足と運動音痴さがいつもその足を引っ張っているようです。
いつも抱えている枕には理由あり。
弟想いのツンデレお兄さんです。

「前から思ってたけど、剣を背負ってるって、なんかかっこいいよなっ！」

ポトフ＝フラント
１２月２５日生まれのＢ型で１８０ｃｍの男性です。
得意科目は魔医学で、苦手科目は社会学。
将来の夢は医者だそうです。
狩りというワイルドな特技を持つ彼は、幼い頃に誘拐されたことがきっかけで実は狼男。
そのせいもあってか、身体能力と食欲は抜群。
ナルシストのくせに他人想い。
そしてプリンさんに対してはミントさんやココアさんとは違ってツンデレ反応を示します。
綺麗に整った顔を重宝するも、いつもそこを攻撃されてしまうやられキャラな一面もあるようです。

「いや、チョコレート漬けって何さ？」

ミント＝ブライト

４月１日生まれのＡ型で１６５ｃｍの男性です。
得意科目は植物学で、苦手科目は美術。
将来の夢は花屋だそうです。
突っ込まない日はないんじゃないかって勢いで毎日突っ込んでいるツッコミ根性と、家事全般をそつなくこなすところは、どうやらご両親の影響らしいです。
しかし相手に問題もあるのか、彼のツッコミは不発に終わることもしばしば。
ついでに、矢継ぎ早の謝罪とコーラ好きは国王様の影響らしいです。
植物が好きで涙が苦手な、友達想いで基本的には平和主義の心優しい男の子です。

「うふふ、この抑揚のないいびきが素敵ですわ♪」

ムース＝ジェラート
６月５日生まれのＡ型で１６８ｃｍの女性です。
得意科目は音楽で、苦手科目は体育。
将来の夢は社長夫人、らしいですけど、これって既に決定事項じゃないんでしょうか？
食の分野で活躍しているジェラート社の社長令嬢で、刺客に狙われることもあるようですが、それがプリンさんの嫁候補だった企業の者たちだということは、はたして知っているのかいないのか。
常に持ち歩いているふわふわセンスは、ときに降り掛かる武器をはねのける盾となり、相手を殴り突き飛ばす矛となります。

しゃく……

……っ。

あ、ちょうど紹介し終わりましたね。
では、今日はこの辺で失礼させていただきますね。

……べ、別に、かき氷が頭にキーンときてナレーションが不能になったわけじゃありませんよっ。

第１４９回　プロフ日和（後書き）

以上、個人情報第二弾でしたー。

さて、次回は１５０回を迎えると言うことで、１３２回の後書きで企てた特別企画の結果発表を開催したいと思います。

というわけで、『もしもコーナー』と『キャラ投票』と『質問』の感想欄、メッセージでの募集は９月１８日をもって締め切ります。

詳しくは、１３２回の後書きで。

それでは、またのご来店と企画へのご参加を心よりお待ちしておりますね。

第１５０回　架空日和

真っ赤な幕がゆっくりと開くと、真っ暗なステージが顕になり、舞台に立つメンバーに、ひとりずつスポットライトが当てられた。

「ぷわ……むぅ」

ドラム、プリン。

「欠伸すんな」

ベース、ポトフ。

「ええっと、こうこう……で、次はこうだっけ？」

ギター、ミント。

「……」

ボーカル、ココア。

――今、彼らによって、びよびよ放送局のテーマが流される。

カンカンカンカンカン

とプリンによって指揮が取られ、

♪

ミントとポトフによって曲が始まり、

すうっ

と息を吸ったココアによってメロディが完全に――

「びーよびよびよびよーぅ♪」

――崩壊した。

――――

と、言うわけで始まりました。

五十回ぶりのびよびよ放送局でーす。

「わは～、ココアって歌へったくそなんだね～？」

「わ、悪かったわねー？！　もー、だからやりたくないって言ったのにー！！」

一発目のお題は『もしもバンドを組んだら』、結果は生き地獄。

「え、私の歌そこまでひどかったー？！」

ではではこの調子で、『もしもコーナー』の始まり始まりー。

『もしもミントがハゲたら』

「いきなり聞き捨てならねえ？！」

タイトル、〝ミントの秘密〟

――――

「ふあ……はよー」

撥ねまくった髪を寝癖で更に撥ねまくらせたミントパパ、シャーンが欠伸をしながら二階から降りてくると、

「”はよー”じゃないよ。もうみんな食べ終わってるんだよ？　早く食べてよね。テーブルが片付かないじゃんか」

ミントは食器を洗いながら、何やらオカンみたいな言葉を口にした。

「おー」

生返事をしながらテーブルにつき、麦茶の入ったコップを手に取るシャーン。

なんだか息子と父親の会話のようには思えないが、これは、ブライト家で送られている日常。

「……で、今日は何時に帰ってくるのさ？」

「んー……」

夕食を考えてミントが質問すると、シャーンはコップを口から放して、

「7時。つーかお前、家の中では帽子被んなって言ってるだろ？」

さらりと答えた後、室内でも帽子を着用しているミントにこう言っ

た。

「はあ？　誰のせいだと思って」

「ハゲるぞ？」

と。

ガシャーン！！

直後、ミントの手からお皿が滑り落ちた。

「……」

「……」

「「……」」

静寂。

「……え？　おま……まさか……？」

完全停止したミント以上に動揺を隠しきれないシャーンであった。

――――

「「み、ミント……」」

「ハゲてねえよ！！！！」

帽子を取って友人らの誤解を解く必死なミントくんでした。

『もしも”メルヘン”と言うたびに爆発したら』

”歩く爆発物”

――――

「メルヘン！」

ドカーン！！

「メルヘン！」

ドカーン！！

「メルヘン！」

ドカーン！！

「……」

ことあるごとに爆発する母親を見兼ねて、ミントは一家に一台ある黒電話のダイヤルを回した。

「あ、もしもし？　危険物処理班の方ですか？」

――――

「ゲヘヘ♪　メルヘン！」

「爆発しとれ」

『もしもマロとフランがメルヘンをマスターしたら』

”特訓の成果”

――――

バァン！！

と部屋の扉をノックもせずに勢い良く開け放ったのは、

「みんとん！」

「ミントさん！」

ジャンヌの弟子の、マロとフラン。

「な、何さ？」

ドライヤーで髪を乾かしていた風呂上がりミントが、驚きながらも用件を尋ねると、二人は得意げに笑ってみせた後、

ぶくぶくーっ

溶けた。

「……」

それを見たミントは、おもむろにドライヤーの向きを変えた。

ブオー

「「あ、や、やめっ、やめっ！！」」

干上がる干上がる！　と焦るマロとフランであった。

――――

以上、ブライト家の住人シリーズでしたー。

「改めて思ったんだけど、ろくなのいねえな」

続きまして、仲良し四人シリーズです。

「ミント、こっち」

「あ、うん」

『もしもオーケストラをしたら』

”楽器と言えば”

――――

「オーケストラって、何やるの？」

ミント、素朴な疑問。

「さあー？　取り敢えず、歌わないよねー？」

ココア、首を傾げる。

「自分が弾ける楽器弾いてればいいんじゃねェ？」

ポトフ、適当。

「……。そうだな」

プリン、訂正するのも面倒。

――そうして、四人が手にしたのは、伝家の宝刀。

「「リコーダー」」

結果。

学校の音楽会になる。

――――

「管弦楽っていうけどねー？」

「なんかパッとフルートとかバイオリンなイメージだけどなァ」

「そういう楽器使ったことすらないしね、オレら」

「む？　弾けないのか？」

「「……」」

何やら素敵ポイントが増えた模様のプリンでした。

『もしもお鍋をやったら』

”すき焼き日和”

――

「今夜はすき焼きだよー」

と、すき焼きセットをココアが持ってくると、

「おォ！　生肉！！」

「ポトフ生で食べない！」

「む！　おとうふ！」

「プリンはスプーン持ち出さない！」

「でもちょっと薄すぎねェ？」

「って、だから生で食べない！」

「おしょうゆ！」

「だから冷奴の準備しない！」

「しかもどっちかってェと俺牛じゃなくて鹿肉派――」

「ミント、しょうがーーー」

「だから聞けえええええ?!」

「勝手にやってるよー?」

ミントとプリンとポトフが騒ぎだしたので、ひとりでテキパキとすき焼きの準備を進めるココアであった。

ーーーー

「鍋奉行はミントだねー」

「いや鍋になってすらないから」

「鹿肉鹿肉♪」

「おとうふおとうふ♪」

結果、生肉好きとぷるぷる好きのせいで鍋になりませんでした。

『もしもお料理教室を開いたら』

(((惨劇の予感……)))

「む?　僕の顔に何かついているのか?」

”ひとりでできるもん”

ーーーー

「じゃあ、今回はおにぎりをつくってみましょー」

「はーい」

ミントが言うと、エプロンに三角巾というお料理支度のプリンが元気よく返事をした。

「では、まずはお米をといでください」

「？　とぐ？」

ミントの言葉を聞いて、早速初歩的な用語を聞き返すプリン。

「お米を洗えってこと」

さらりと答えながら、ミントは彼にお米を渡した。

「む、分かった。お米を洗えばいいのだな」

それを受け取って腕まくりをしたプリンは、蛇口を捻って水を出し、

ガシィッ！！

スポンジと洗剤に手を伸ばしたところを、ガシィッとミントに止められた。

「む？」

「んな懇切丁寧に洗わんでよろしい」

「む？　水洗いでいいのか？」

「あたぼう」

「ふむ、漂白剤も使わないのか？」

「わは～、そしたらきっと真っ白なごはんが炊けるね♪」

「うむ♪」

「食えるか」

お米を食器どころか洗濯物か何かと同じように洗おうとした彼に、ミントは既に炊き上がったごはんを持ち出した。

「ここに炊き上がったごはんがあります」

「うむ。炊き上がったごはんがあるな」

彼の言葉に頷くプリン。

「では、手に水をつけてください」

「うむ。手に水をつけたぞ」

言う通りに両手を水で濡らしたプリンに、

「じゃあ、手に塩をつけてください」

ミントはさらりと指示を出した。

「ふむ、何塩？」

「へ？　普通に食塩だけど？」

「うむ。分かった」

すると、プリンは指を打ち鳴らし、

ぽんっ

と塩酸と水酸化ナトリウムを出現させた。

ガシィッ！！

すると、再びガシィッと止められるプリンの腕。

「む？」

小首を傾げるプリン。

「何する気だ」

「食塩を生成しようと」

「わは～、出来たてほやほやの食塩が作れるね♪」

「うむ♪」

「食えるか」

結果。

おにぎりすら作れない。

――――

「むぅ、料理って難しい」

「何？　オレなの？　オレのやり方が悪かったの？」

「い、いやいや、悪いのは明らかに枕の方だぜ、ミントっ？」

「そ、そうだよー？　火も包丁も使わないかなーり初心者向けの、料理？　を、選んだミントは偉いと思うよー？」

お次はなんちゃって恋愛シリーズです。

『もしもミントとココアがくっついたら』

「へ？」

「え？」

”ミント×ココア＝？”

――――

「ごめん、ココア。待った？」

「あ、ううん。私も今来たところだよー？」

「ふぅん？　じゃあ、ココアも遅刻したんだ？」

「ええ？！　ち、ちが」

「あはは、じょーだんじょーだん♪　遅れてごめんね？」

「もー……まーいいや。行こー？」

「うん！」

なんだかお友達感溢れるとってもピュアなお付き合い。

――――

「「……」」

「ちょ、も、もしもの話だよー？！」

「て言うか、もうすぐ二人もそんな目出来なくなると思うけど、ポトフとチロル？」

「はェ？」

「ふぇ？」

『もしもポトフとチロルがくっついたら』

「「――？！」」

”ポトフ×チロル＝？”

――――

「あれ？！　もう待っててくれてたの！？」

「あっは、早くキミに会いたくて」

「！　ポッティー……！　やぁん、アタイ、今日は帰りたくない～みたいな～っV」

「もちろん」

ふわり

「……帰さないぜ？」

「やんV　……ポッティー……」

「……ちーたん……」

なんだかとってもらぶらぶなお付き合い。

――――

「「……」」

「ももも、もしもの話だって！！」

「そそそ、そうだよ～！　アタイはミントきゅんだけ～みたいなっ？！　ほ、ほら、次でそれを証明して見せるんだから～！」

『もしもミントとチロルがマジ喧嘩したら』

「って、マジ喧嘩ぁ？！」

”ミントＶＳチロル”

――――

それは、いつもの朝の静かな食堂での出来事。

「何それ？！　ちゃんと謝ってよね！？」

「「！？」」

突然聞こえてきた大きな怒鳴り声に、朝食をいただいていた生徒たちの目が集まった。

「はあ？　意味分かんないよどうしてオレが謝んなきゃいけないのさ？！」

その視線の先には、怒りを顕にした表情のミントとチロルが。

「な、なになに？」

「喧嘩か？」

「あの二人、いつもはらぶらぶしてるのに」

「珍しいねぇ」

「よし、破局しろ破局！」

怒鳴りあう二人を遠巻きに見物しながら口々に呟く生徒たち。
ちなみに破局希望は元チロルファンクラブ。

「だから悪いのはそっちの方でしょう？！」

「何言ってんのさそっちの方が絶対悪いに決まってるじゃん！！」

その間にも、二人の口喧嘩はヒートアップしていき、

「はあ？！　もう信じらんない！！　そっちが謝るまでもう絶ッッッ対に口利いてあげないんだから！！」

「それはこっちの台詞！！　そっちが謝るまで口利く気なんてさらさらないよっ！！」

バァン！！　と力任せにテーブルを叩き、オーバーヒート。

「ごめんなさいっ！」

「って、早過ぎるわ」

「「どーも、お騒がせしましたー」」

後、チロルが謝りミントが突っ込みを入れると、二人は周りのみなさんに向けて深々とお辞儀した。

（（え、漫才だったの？））

（くそぅ、くそぅ……っ！）

ので、生徒たちは心の内で突っ込んだ。

ちなみに、悔しがっているのは元チロルファンクラブ。

――――

「二人も喧嘩するんだなァ？」

「なーにが原因であそこまで喧嘩してたんだろうねー？」

「ふむ……、おにぎりの具？」

「……何？　オレは誰がなんと言おうとツナマヨ派だー的な？」

「ミントきゅんがツナマヨって言うならおにぎりの具は全部ツナマヨにする～みたいな♪」

『もしもチロルがミントのことを嫌いになったら』

「って、だからなんで破局希望みたいな？！」

”本当の気持ち”

――――

「……成る程。それでチョコレートケーキのヤケ食いを」

ある日の午後、突然食堂に呼び出されたアロエは、話相手にされていた。

「もうミントきゅんなんて大ッ嫌い！！」

目の前でチョコレートケーキのホールをがつがつ食らっている、チロルの。

「では、アロエはこれで」

よくそんな甘ったるいものを飲み物なしでがつがつ食べられますねぇとか思いながら、なんだか見ているだけで気持ち悪くなってきたアロエはこの場を去ろうと腰を浮かした。

「大ッッッ嫌いなの！！」

すると、その腕をガシッと掴んで引き止めるチロル。

「……。……そう、ですか」

慰めて欲しいんだなと分かってはいたが再認識させられたアロエは、小さくため息をついて腰を下ろした。

「確かに、そこまで言うのはどうかと思います」

「でしょ？！」

「それではチロルさんが彼を嫌いになってしまったのも当然」

「でしょ！？」

「なら」

自分の意見に同意してくれる彼女に、チロルがホールケーキを食道にたたき込みながら相槌を打っていると、

「アロエがミントさんをいただいても、なんら問題ありませんね？」

アロエはさらりとそう言った。

「――――え？」

その言葉に、思わず止まるチロルのフォーク。

「大嫌いなのでしょう？　口も利きたくもないのでしょう？　それなら、アロエがミントさんの彼女になって」

そんなチロルを気にも止めずに、アロエは眼鏡を掛けなおして静かに立ち上がると、

「あなたが好きという感情と、あなたと口を利く理由とを、なくして差し上げますよ」

彼女に背を向けて歩きだした。

「だ、ダメぇっ！！」

直後、思わず立ち上がって彼女を呼び止めるチロル。

「……。……分かりましたか？」

するとアロエは立ち止まって振り向いて、

「それがあなたの、本当の気持ちです」

ふっと微笑んでそう言った。

「……！　アロエ……！」

目を見開いて驚いていると、彼女が微笑んだまますっと食堂の出口を指差したので、チロルは頷いて走りだした。

「ありがとう！　これお礼！！」

食べかけのチョコレートケーキを、プレゼントしてから。

「……。……アロエは辛党、ですよ」

そんなチロルを見送りながら、アロエは切なげに微笑んだ。

――――

「やぁん、やっぱり心の底からアイラブユーみたいな～っV」

「”そこまで”って……オレはチロルに何を言ったのさ？」

「ふむ、やはりおにぎりの具か」

「そこから離れろよ枕」

「アロエ、もしかして……？」

「さて、長くなってしまったので次回に続くみたいですよ、ココアさん」

「って、ええ？！　またー！？」

そんなわけで、次回に続きまーす。

第１５１回　感謝日和

さあ始まりました。
『もしもコーナー』ｉｎびよびよ放送局、続いてはアナザーストーリーシリーズです。

『もしも夢魔の魔法が解けなかったら』

”選択肢”

――――

～学校日和２　第１３０回の、後～

「……話、違くね？」

ミントの目の前に、がきんちょの大群が現れた！

1、子守をする

「1日経たないと解けないのかな？」

ミントは子守を開始した！

ちょんちょん

「ん？　何――」

ミントは早速がきんちょに用事を頼まれた！

「……。……まんま」

（せ、セル先生……っ！！）

ベビーセル先生に耐えられる自信がなかった為、ミントは作戦を変更した！

2、放置

（は、無理だよなぁ……）

3、道具

（何を使うんだよ）

4、逃走

（したい気持ちでいっぱいです）

5、攻撃

（幼児虐待?!）

6、魔法

（だから、幼児虐待!?）

7、保護者に届ける

（……。これが一番かな？）

ミントは、がきんちょたちを保護者に届けることにした！

「てなわけで、キミたちのおうちはどこにあるのかな？」

「「しらな～い♪」」

結果、八方塞がり。

――――

「……。悪夢以外の何ものでもないね」

どんなときでも苦労が絶えないミントでした。

『もしもミントがネコ化から戻らなくなったら』

「？　ネコ化？」

「ミント、暴走すると”にゃー”ってしか言わなくなるんだぜェ？」

”にゃーにゃーにゃー”

「捻りのなさが滲み出てるねー？」

「にゃんにゃん」

――――

～学校日和２　第７２回～

「そこの、猫耳美少女と！！」

ポトフに宣戦布告をしにきたバジルは、猫耳をつけたミントをズビシっと指差した。

「にゃあああああ？！」

その聞き捨てならない台詞に、ネコミントは食って掛かった。

「にゃーにゃー？！　にゃーにゃーにゃー！　にゃーにゃにゃにゃー！！」

「「……」」

が、悲しいことに理解不能。

「にゃーにゃー！　にゃーにゃーにゃーにゃー！！」

ネコミント、必死に訴える。

「み、ミントさん？」

ムース、困惑。

「どこか悪いところを打ったのかァ、ミントォ？！」

ポトフ、心配。

「か、可愛い……」

バジル、めろりんこ。

「「……。……にゃ？」」

彼の言葉を、ムースとポトフは思わずネコミントと一緒になって聞き返した。

「フハハ！　ココア嬢は君に譲るとするよ、ポトフ君！」

すると、バジルはネコミントを小脇に抱えて去っていった。

「にゃ、にゃにゃにゃにゃにゃ！？　にゃーにゃーにゃー！！」

「フハハ！　今日から君は私のみーちゃんだ♪」

「にゃあああああ？！」

結果、バジルにテイクアウトされる。

――――

「いやいやいやいや何さらっと問題発言しちゃってるのさあああ？！」

ネコになってもみーみーやかましいミントでした。

「いや別に全然うまくないからね！？」

……、じゃあ。

『もしもミントがバニラ並に無口だったら』

「つっ、突っ込めねぇ……？！」

”……”

――――

～学校日和　第１３４回～

大海原に浮かぶ船の上で、いくつもの偶然が重なり合って二人は出会った。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「「……？」」

誰かなんとかしてください。

―――

「これじゃあ、フランが来るまでずっと無言じゃんか?!」

「……」

はいはい、続きましては一問一答シリーズです。
では、早速いってみましょー。

『もしもセル先生がむっちゃ笑顔になったら』

「……。……気持ち悪い」

バニラに気持ち悪いと言わせた強烈なお題でしたー。

『ジャンヌ（17）がミントに恋をしたら』

「気持ち悪い」

今度はミントに気持ち悪いと言わせた強烈なお題でしたー。

『もしも科学技術も発達していたら』

「む、それは僕の仕事だ」

夢はでっかく、プリンでしたー。

『もしもミントもプリンとポトフに並ぶイケメンくんだったら』

「入学初日に声かけてないと思うよー？」

実はミントが女の子だと思って相席をお願いしていたココアでしたー。

『もしもポトフが天変地異を起こせるくらい強かったら』

「んー……どちらかと言うと攻撃魔法より回復魔法を強くしてェんだけど」

立派なお医者さんを目指すポトフでしたー。

『もしも世界が植物で覆われたら』

「無数の樹の魔力の中からミントきゅんを必ず探し当ててみせる～みたいな♪」

最後に愛は勝～つ！　と、ご苦労なチロルでしたー。

『もしもチロルがアロエ並に腹黒かったら』

「おやおや、腹黒とは心外ですねぇ？」

自分は腹黒ではないと言い張るアロエでしたー。

『もしもマロがメイクを落としたら』

「まろ？！　こ、これはメイクじゃなくて生まれつきまろ！！」

落とそうものなら顔面の表皮組織が根こそぎなくなるマロでしたー。

『もしもむぅちゃんがア○ゴさんの声になったら』

『む～？』

ア○ゴさんを知らないむぅちゃんでしたー。

『もしもミントとチロルの子どもが生まれたら』

「父さんは好きだけど、母さんにはもっとしっかりして欲しいなぁ」

髪はちゃんと金一色でしたー。

「「って、ちょっと待ったあああ?!」」

？　なんですか信号機？

（（信号機?!））

「な、なんか今さっき流れに乗ってするっと出てきた金髪の男の子は何者なのさ?!」

「そうよ！　さっきの金髪緑目の男の子は誰なの～みたいな～っ！？」

さてはて、なんのことやら。

「「とぼけー…」」

では次に参りたいと思います。

（（華麗にスルー？！））

……。

聞きたくないなぁ、これ。

「「？」」

『もしもミントが余命』

「神風！！」

「キラキラ！！」

「サンドラルエクセキューション！！」

ちゅどおおおおおおん！！

……だから聞きたくないって言ったのに。

『もしも読者様からキャラクターを募集したら』

あー……まず来るかどうかという時点で怪しいのですが、どちらかと言うと賛成できませんね。

「？　なんでさ？」

キャラクターの好き嫌いが激しいから。

「……。とかなんとか言って、ただ単に面倒臭いんでしょ？」

設定とか設定とか設定とかネ☆

「ダメ作者で申し訳ございません」

ではでは、数少ない『質問コーナー』に移ります。

Q、ミントが召喚できる召喚獣の数は？

「んーと……２４体中……１５、かな？」

「……へぇ？　お前、全部は召喚できねぇんだ？」

「！　……う、煩いなぁもう」

息子に威厳を見せ付けられてちょっぴり満足げなシャーンでした。

Q、押して駄目なら？

「え？　この質問ってまさか……」

「諦めろ」

「うん。ちょっと潔すぎるかなプリン？」

「えー？　帰るー」

「うん。だからちょっと潔すぎるかなココア？」

「誘(おび)きだす」

「うん。鹿とかいたら絶対出てきそうだもんねポトフ？」

「えーと、開くまで待ってる？」

「うん。ちょっと気長すぎるかなアオイ？」

「裏口を探す、です」

「うん。見つかるといいねリン？」

「……。蹴破る」

「うん。ちょっと力業すぎるかなユウ？」

「もちろんピッキングよぅ♪」

「うん。ちょっと警察行ってこようねウララ？」

「すりぬける」

「うん。何が起きたのかなワタル？」

「炙（あぶ）り出そうかな」

「うん。意味違うと思いますよソラさん？」

「じゃあ、私は洗い出そうかしら」

「うん。だから意味違うと思いますよエリアさん？」

「請けだしてやるぜぃ！」

「うん。金持ちは違いますねルゥ様？」

「抜け出すのは得意にゃ～♪」

「うん。この場合は外側の立場なんですけどねアミュさん？」

「泣き出す」

「うん。それは成人男性としてどうかと思うけどね？」

「ゲヘヘ♪　引いてみるに決まってるじゃない！」

「うん。空気読もうね？」

結果、ジャンヌが正解しました。

さてはて、いよいよ最後となりました、『キャラ投票』のコーナーです。

「「わー」」

はい、テンションのひっくいエキサイトをありがとうございます。

では、まず第二位の発表です。

「なるほどー。二人しか投票されなかったとー。マイナーだねー」

「うむ。マイナー小説がなせる技だな」

「これだからマイナーが調子こくなっつったろぉ？」

に、二位が二人いて三位がいなくなっちゃっただけだもんっ！

というわけで。

第二位

チロル＝チョコとアロエ＝ヨーグルト

「やぁん、ランクアップみたいな～っ♪」

「！　……。どうも……ありがとう、ございます……？」

第二位に選ばれたのは、こいつらの出る話を書いていると作者の全身が痒くなってくる彼女たち、チロルとアロエでございまーす。

さてさて、主要メンバー三人を押し退けて二位に輝いた二人に一言いただこうと思います。

「もちろん、アタイはプリンの位置を♪」

「では、アロエはポトフさんの位置を」

「「取って代わろうと思います」」

「「な――？！」」

というわけで、次回からミントとプリンとポトフとココア、ではなく、ミントとチロルとアロエとココア、と、主人公の周りに美少女しかいないという、少年漫画でありがちなシチュエーションで行こうかと検討しております。

「「ちょっと待て?!」」

ポトフのみならずプリンまでもが思わず突っ込みを入れたところで第一位の発表です。

第一位
ミント＝ブライト

「わは～！　ありがとうございます！！」

第一位は、学校日和の一応主人公兼メインツッコミ役を務めておりますミントに決定しました。
と言っても、他のキャラたちと大差なかったんですけどね。

「って、ええ?!　何その裏情報チラリ!?」

マイナーですし。

「いやまあそれはこの話が完全に作者の趣味の領域だからねえ?!」

ではでは、この辺りでお開きにしようと思います。

「っえ、唐突!?」

前作その他を合わせると、４００話くらいある小説のまがいものをご愛読してくださり、ありがとうございます。
今後も、飽きない程度にお付き合いしてくださると嬉しいです。

最後になりましたが、企画に参加してくださったみなさまに、心からの感謝を。

さんはい。

「「企画へのご参加、誠にありがとうございましたぁ！！」」

第１５２回　脇役日和

体育祭を終えて、通常の授業に戻ってからしばらく経ったある秋の夜。

「おお！　ピクルス三枚入ってるわ！」

夕食のハンバーガーの中にピクルスが三枚入っていたことに喜ぶ彼は、キャラメル色の短めに撥ねた髪と緑色の瞳をもつ、背は低めだが八重歯が素敵ななかなかのイケメンそばかす少年、タマゴ＝サンド。

「……はい……」

その隣で、膝から下もそうであるが、肘から先は猫になっている手で器用に箸を使いこなし、サンマ定食をいただいている茶色の瞳の彼は、撥ねまくった短めの赤髪に黒い猫耳を生やし、頬にはご丁寧に三本ずつネコ髭を生やし、更にはお尻にある尾てい骨の辺りから黒くて長い尻尾を生やした半獣種族”ルポ族”の少年、サラダ＝ヴァレンタイン。

何やら長々と説明されているが、彼らは新キャラではなく、これまでのスクールデイズの中でちょこちょこ登場していた人物である。

「やっぱバーガーと言うたらピクルスやな！」

ピクルスにかける情熱が半端じゃないタマゴが、むしろ肉の分をピクルスに変えて欲しいわ！　とか付け加えながらハンバーガーに噛り付くと、

「……はい」

サラダは、サンマにポン酢をドボドボ掛けながら受け答えた。

「ん？　お前、掛けすぎとちゃう？」

身を開いたサンマにドボドボとポン酢を掛けている彼に、タマゴがもぐもぐしながら疑問符を浮かべた。

「……はい」

ドボドボ

「いや、”はい”って。むっちゃ掛かっとるで？　大根おろし全滅やで？」

「……はい」

ドボドボ

「いやいや、だから”はい”じゃなくて。たぶんもぉそれ塩焼きした意味どころかサンマである意味なくなってるで？」

「……はい」

ドボドボ

「いやいやいや、だから”はい”やあらへんて。つかもぉ、こぼれてまうこぼれてまう」

そうして、サラダはポン酢を一瓶掛け終えた。

「お、おまっ……ぽんラーだったのか……っ?!」

マヨラーならぬぽんラーに戦慄したタマゴは、サンマが浮くほどポン酢を掛けまくったぽんラーの顔に目を向けた。

「……はい」

しかし、ぽんラーは、どこか別の場所に目を向けていた。

「……?」

空になったビンを傾けたまま一点を見つめている彼の茶色の瞳の先を、まさかまだ掛け足りないのか?!　とか思いながら恐る恐る追ってみると、

「いただきまーっす♪」

そこには、オムライスを食べようとしているピンク少女が。

「……」

おめめパチクリ。

「まだ好きなん?」

タマゴのさらりとした質問に、

「?!　にゃにゃにゃ、にゃにを言うてるんでっしゃろかでごわす

にゃあ?!」

我に返ったサラダは、顔を真っ赤にしてそう返してサンマ定食に箸を伸ばした。

「って、なんですにゃこりはぁぁぁ?!」

「諦め悪いなぁ。ココアにはポトフって彼氏がおるやろ?」

サンマどころかお盆に載っているものすべてがポン酢まみれになっていることに衝撃を受けるサラダを受け流して、呆れたように小さくため息をつくタマゴ。

「……。……ぼく、戦います」

すると突然箸を置き、ポン酢定食を食すことを諦めた後に決心したように呟いたサラダ。

「ポトフと? やめとけやめとけ。自分、炎使いやろ? あいつの父親も炎使いで、青いバーンバニッシュ使うてるて話やで?」

どうやら赤い炎の上の青い炎が使えるらしいソラ。
そんなのが家族にいるヤツに炎使いが適うわけない、とバーガーを食べながら言っている途中で、

「て、もぉおらんのかい」

サラダがいなくなっていることに気付いたタマゴであった。

「……これ、どないすんねや?」

ポン酢定食を気に掛けながら、彼はサラダを追って駆け出した。

「……で、俺を？」

お代わりをしに席を外したのを見計らって呼び出されたポトフは、ローブのポケットに両手を突っ込んだままというふてぶてしい態度で質問した。

「は、はい！　ですから、ぼくと戦ってください！」

「敬語かいな」

若干びびりつつもサラダが言うと、ただ一人の見物人のタマゴがさらりと突っ込んだ。

「……まァ、分からなくもないけどな」

すると、ポトフは小さく溜め息をついた後、

「ココアちゃんは、めちゃくちゃ可愛いからな」

「うわ出た彼女バカ」

「で、ですよね？！」

「って、お前も乗っちゃうんかい」

真剣な顔で言った後、サラダと同様にタマゴにさらりと突っ込まれた。

「だから、お前がココアちゃんを彼女にしたいって気持ちはよぉく分かる」

「「……？」」

何やら予想に反して落ち着き払っている彼に、サラダとタマゴが疑問符を浮かべていると、

「けどな」

ポトフはまっすぐにサラダとの目線を結んだ。

「なんでそれが俺に決闘を申し込む理由になるんだ？」

そうして紡がれたポトフの質問に、

「はにゃ？」

サラダは、きょとん顔で小首を傾げた。

「例えばだ」

すると、ポトフは両手をポケットから出し、例え話を始めた。

「お前の彼女――……ごほんっ。おかァさんが、お前のおかァさんになりたいと言ってきたレディとの戦いに負けました。だからその人がいきなりお前のところにやってきて、今日から自分がお前のおかァさんだと言いました。さァ、お前はその人がおかァさんだってすんなり認められるか？」

「――！　そ、それは……っ」

「おい、彼女をお母さんて言い直されてっぞサラダ」

ポトフの優しさを優しさのまま受け取ったサラダに、階段の柵に寄り掛かって頬杖をつきながら突っ込むタマゴ。

「詰まりだ。ココアちゃんと付き合いたいなら、ココアちゃん本人にそう言え」

「……！」

タマゴの突っ込みが聞こえていないのか、彼の言葉に目を見開いたサラダ。

「そ、そんなこと言って、万に一つって言うか兆に一つもあり得ないどころかあり得なさすぎけど」

「えらい控えめやな」

「ぼ、ぼぼぼくと付き合うとかそんなふうに取れなくもないような言葉をちょろっと口にしたような気がしてそそそそんなことになっちゃったとしたらどうするんですかっ？！」

「例え話に動揺しすぎや」

「そォすればいいだろ？」

「「――……え？」」

遠距離な突っ込みをかますタマゴと一緒に、再び疑問符を浮かべていると、

「他に好きな人がいるなら、わざわざ好きでもねェヤツと一緒にいる必要なんてねェだろ？」

ポトフはふっと静かに閉じた瞳を、

「無理やり引き止めて縛り付けるより」

再び開いて力強くこう言った。

「俺は、ココアちゃんが幸せになる方を選ぶ」

――瞬間、サラダとタマゴの視界上で、ポトフがきらきらと輝きだした。

「「か……かっこいい……！！」」

そして、きらきらの視線を彼に向けた。

「ポトフさん！」

「？」

「ココアさんと」

「末永くお幸せにな！！」

後、二人の恋を応援した。

「お、おォ……ありがとな……？」

二人からの熱い視線と声援を受け、取り敢えずお礼を言うポトフ。

「あ、あの、もしもよかったら」

「どうしたらそんなかっこよくなれるのか、教えてください！！」

おめめパチクリさせているポトフに、タマゴとサラダがお願いすると、

「お、おォ、俺でよければ……？」

未だ展開にいまいちついていけていない彼がぎこちなく承諾した。

「ほ、本当ですか？！」

「野郎には冷たいかと誤解してたで！！」

「や、別に野郎には全員冷たいとかじゃなくて。初めて会ったときから敵意向けられてたら仲良くする気にもならねェだろ？」

「にゃにゃ？！　で、ではっ、ぼくらが悪かったのですね！？」

「ごめんなぁ、ワイらポトフみたくかっこよくないからひがんでただけなんやっ！！」

「！　そ、そォだったのかァ？！」

「はい！　あ、そう言えばお食事の途中で呼び出したりしてすみませんでしたっ！！」

「お詫びと言ったらなんやけど、何かおごらせてもらうなっ？！」

「マジで？！」

「「マジっす！！」」

「あは、ありがとォ！」

「「笑顔が眩しいですぜ兄貴～！！」」

こうして、よく分からないがポトフに新たなお友達と弟子が二人出来たのであった。

――一方、その頃、

「ポトフ遅いねー？」

「お代わりにどんだけ時間かけてるんだろね？」

「ぷわ……。ミント、僕眠い」

「「……」」

「「じゃ、帰ろっか？」」

「うむ！」

いつまで経ってもお代わりから戻ってこないポトフはほっといて、寮に戻ることにしたミントとプリンとココアであった。

第１５３回　憑依日和

中庭の大きな木の下で気持ち良さそうにお昼寝しているプリンを、

「ぐー」

「……」

水晶玉を抱えてしゃがんでいるバニラは、何をするわけでもなくただただ無言かつ無表情でじ～っと見つめていた。

「プリンさんが苦手なものは、運動に料理に牛乳に水にオバケですね」

その近くで、アセロラが眼鏡を掛け直しながらさらりと言うと、

「「……」」

オバケというワードにぴくっと反応を示したアオイとユウはほっといて、

「オバケ、ですか？」

リンは小首を傾げながら、いつもの口調で聞き返した。

「あァ、オバケって聞くといつもの冷めた態度が嘘みたいに動揺し始めるんだぜェ？」

そんな彼女に、やれやれといった感じで付け加えるポトフ。

「ふぅん、変なの。魔法がない私たちの世界ならまだしも、こっちは普通に魔法が使えるし魔物だっているんでしょ？　それなら別に物がひとりでに動いたって不思議じゃないし、オバケみたいな魔物だっているんじゃないの？」

すると、ウララが不思議そうに意見をし、

「……。確かにそうだね」

そう言われてみれば、とミントがそれに納得した。

「てことは、入学初日の夜にプリンが見たって言ってたのは、魔物だったのかな？」

この学校での初めての夕食の帰り道、ふと姿が見えなくなった彼が戻ってきた時に口にした言葉を思い出しながらミントが呟くと、

「そうですね。俗に言うオバケのような姿をした魔物は、半透明の無定形からヒト型まで実際にいますからね。ちなみに、彼らに物理攻撃は効きませんが、彼らも僕たちに物理攻撃を加えることは出来ませんよ」

魔物の特性を補足しながらアセロラは頷いた。

「スケスケなんだもん、触れるわけないわよね」

腕組みをして頷きながら納得したウララは、

「いたとしても私たちにはなんにも出来ない相手なのに、何がそん

なに怖いのかしらねぇ？」

にやりと笑ってアオイとユウに目を向けた。

「で、でも、取り付かれたりしたらどうするのっ？」

「そ、そうだ、アオイの言う通りだっ！」

その言葉に対抗するアオイとユウ。

「……。……取り付かれてる」

すると、バニラがぽつりと呟いた。

「「？」」

彼女の言葉に、騒いでいた七人は思い思いの表情で振り向いた。

「……取り付かれてる」

皆の注目を受けるなか、いつの間にかカードを手にしていたバニラは、再びぽつりと呟いた。

「悪魔の、人形」

そのカードが指し示す人物は、

「ぐー」

大きな木の幹に背中を預けてぐうぐうと眠っている、プリン。

「プ、プリンが取り付かれてる？」

驚いたミントが確認するように聞き返すと、

「……深すぎて、気付かなかった」

バニラはカードを魔法で消し、しゃがんでいた状態から立ち上がった。

「深い、と言うことは潜伏期間が長いということですね」

それを受けて、何やら病原体のような言葉を口にしたアセロラは、

「ミントさん、ポトフさん。今までにプリンさんに何か変わったところ……例えば、人格が変わったことなどはありましたか？」

プリンと一緒にいる期間が長いミントとポトフに質問した。

「！　た、確かに！」

「あったよ――……って」

はっとしたポトフとミントがアセロラの質問に答えている途中で、

「バニラ？」

ミントは、バニラが水晶玉を大きく振りかぶっていることに気が付いた。

「取り付いた魔物が宿主を支配できるのは、宿主の意識が薄いとき。詰まり、怒りで我を忘れたときや」

アセロラは、バニラの変わりに説明した。

「寝起きです」

どごおっっっっっっ！！

直後、バニラがプリン目がけて豪速球を投げつけ、鈍い音が辺りに響き渡った。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

間。

「……」

静寂のなか、バニラは水晶玉を取りにてくてくと歩いていった。

「ば、ばばばばば、バニラ？」

「い、今、すごい音がしたけど……？」

「ななな、何もそこまでやらなくてもいいんじゃねェ……？」

「……死んで、ないか？」

水晶玉をメジャーリーガーのごとくぶん投げたバニラに、ミントとアオイはおろか、ポトフとユウまでもが思わずプリンを心の底から心配した。

「……っ」

リンとウララが未だに開いた口が塞がらない状況下で、プリンはぴくりと反応を示し、非常にゆっくりと立ち上がった。

「「！」」

よかった生きてた！　と皆が顔を明るくした直後、

「っ……いい……度胸だな……？」

ヘアゴムが千切れて解けたプリンの長い水色の髪が、風もないのにゆらゆらと動き出した。

それと同時に、彼を取り巻くどす黒いオーラと禍々しい魔力。

いつもはのんびりと眠そうな青い目は完全に据わっていて、長い前髪の奥で危険な光を宿している。

大切な枕を邪魔そうに投げ捨て、敵とみなした目の前の友人たちに、
これ以上ないほどの殺気を放ちながら牙を剥く。
――今ここに、邪悪に支配された暗黒の美男子、

「「ご、ゴマプリン……っ！！」」

ゴマプリンが現れた。

第１５４回　ゴマ日和

転がっていった水晶玉を回収し、汚れを拭き取ってからそれを抱えて振り向くと、

「微風」

びゅおおおおおお！！

「……」

中庭の中心では、微風らしからぬ微風が吹き荒れていた。

「……」

くるり

バニラは再び中庭に背を向けて、

コツ、ゴロゴロゴロゴロ

「……」

うっかり手を滑らせて学校の中に入っていってしまった水晶玉をゆっくりと追い掛け始めた。

「……。逃げましたね」

分厚い氷の壁を出現させてゴマプリンの魔法を防いでいるアセロラ

は、バニラの様子から、彼女は先のことは考えていなかったということを理解した。

「さて」

まあ、バニラさんの攻撃は主に生命に関わる呪いか水晶玉ストライクですし、とか彼女が逃走したことを納得しながら、アセロラは氷の壁越しに敵を見た。

「首尾、一貫っ！」

「テレポート」

「キラキラァ！！」

「烈風」

ちゅどおおおおおん！！

リンが直接接近して攻撃すると瞬間移動して回避されて、ポトフが魔法で攻撃すると風魔法で止められる。

「どうしたものでしょうか？」

瞬間的に移動されてしまったら物理攻撃を当てることや凍り付かせることなどできないし、厄介なことに魔力もこの中ではプリンが一番上。

ポトフとユウの光魔法は風魔法で掻き消される上に、アセロラの”氷”といった実体のある魔法では、掻き消されるどころか逆に利用されて風と共にこちらが攻撃されてしまう。

「瞬間移動されるなら、その出所を叩けばいいじゃない？　集中豪雨ぅ！！」

「な――」

対策を練っている隣で、アセロラが止める間もなくウララはポシェットから取り出した特製ボウガンで豪雨のごとく矢を放った。

「向風（むかいかぜ）」

瞬間移動先を魔力の動きで直感的に察知したウララの矢は、ゴマプリンを貫く直前で、

「え」

風向きが、変わった。

「きゃあああああ？！」

「《凍り付く壁》」

「アイスウォール」

百八十度向きを変えてこちらに向かってきた矢は、ウララにではなく分厚い氷の壁に突き刺さった。

「あ、……りがと」

糸が切れたかのようにへなへなと座り込みながらウララがお礼を言

うと、

「今のは風使いに対して一番やっちゃいけないパターンですよ？」

「お前、なんの為に頭がついてるんだ？」

アセロラとユウから、冷ややかな言葉と視線が返ってきた。

「な、何よ――」

「飛び道具使いは下がってろ」

「――……！」

ユウに自分を守るように背中に回されて、ウララがときめいていると、

「邪魔な壁だな。舞風」

学校の壁にポトフとリンを強力な風魔法で叩きつけたゴマプリンは、指先に風の刃を生み出した。

そしてそれらの刃を放った後、

「かまいたち」

彼が氷の壁に向けた右手をぐっと手を握ると、

スパンッ！！

「「！」」

分厚い壁は、いとも容易く見事に切り裂かれた。

「旋風」

後、切り裂いた氷の塊を利用して、風魔法と共に、鋭く尖った氷をアセロラとユウに向かわせた。

「――爆(は)ぜろ」

直前、ユウの魔法で形づくられた灼熱の剣が爆発するように裂けて開き、見事に氷を溶かしてみせた。

「……。助かりました」

「どーいたしまして」

異界の魔法使いは何種類の魔法が使えるんだ、と驚きながらお礼を言った後、

「壁も張れなくなってしまいましたね」

「……。そうだな」

敵を警戒しつつもアセロラは考え込み、ユウは敵に目を向けた。

「……なかなかやるな」

漆黒の瞳と青い瞳がぶつかって、ふっと面白そうに笑ったゴマプリンがそう言うと、

「そー言えば、お前カナヅチなんだろ？　《壮麗なる龍はすべてを呑み込む》」

ユウは、氷が溶けて出来た大量の水を操り、全身が水で出来た龍を生み出した。

「神風」

大口を開けてこちらを飲み込もうとしているそれに向けてゴマプリンが最大魔法を放つと、水龍は脆くも飛散した。

「――！？」

が、彼の周りに飛び散った水は再び龍を形づくった。

「テレポート！」

腹の中に入れられる前に、ゴマプリンは現在の場所から瞬間移動した。

もちろんその移動先に攻撃を仕掛ける水龍であったが、

「！」

「……？」

突然、水龍の動きが鈍った。

それを不思議に思ったゴマプリンが後ろを向くと、

「あ」

その先には、見付かっちゃったとばかりにビクッと声を発したアオイが立っていた。

「って、んなところで何やってるのよアオイ?!」

ユウの影から顔を出し、そう言えば今まで戦闘に参加していなかった彼にウララが勢い良く突っ込むと、

「だ、だって、僕の武器は剣で、相手はプリンなんだよっ?」

友達は切れないよ！　といった感じでアオイが切り返してきた。

「何甘っちょろいこと言ってんのよ?!　そいつはリンとポトフを戦闘不能にまでしちゃったのよ!?」

「そ、そうだけど……でもプリンだよっ?」

「あーもー、プリンはプリンでもそいつはゴマプリンなの!!」

「ゴマプリンはゴマプリンでもプリンだよぅ!」

「だからプリンはプリンでも」

という具合に、ウララとアオイがプリン合戦を開始したなかで、

「ふ……あれがお前の弱点か」

ゴマプリンは、邪悪な笑みをユウに向けた。

「……っ」

プリンもカナヅチだがアオイもカナヅチ。
そんな彼を巻き込むことなど出来ないし、それ以前に大切な友人を攻撃出来るわけがない。
しかし、そんな考えが意味する先のことが嫌でも分かるユウは、ぎりっと奥歯を噛み締めた。

「ならば、簡単なことだ。テレポート」

そんな悔しそうなユウを見て邪悪に笑ったゴマプリンは、彼が予期した通り、

ピュッ

水龍の盾にするべく、アオイの背後に瞬間移動した。

ズバンッッッッッッ！！

――瞬間、ゴマプリンの首すれすれのところを銀色の閃光が走り、その先にあった彼の長い髪が切り落とされた。

「なっ――？！」

銀色の閃光の正体は、

「……あ」

瞬間的に抜刀して突き出されたアオイの剣。

「す、すっげェ……！！」

「！　ポトフ、リン！　もう大丈夫なのっ？」

「自分の傷くらい、自分で回復出来ます、です」

「……これで遠慮なくお前を攻撃できるな？」

「ご、ごめんねごめんねついクセでっ！」

凶悪だった顔に初めて恐怖の色を浮かべたゴマプリンを見て、

「……。大丈夫、そうですね」

この調子なら、ミントさんが戻ってくるまで間がもちますね、と胸を撫で下ろすアセロラであった。

第１５５回　落着日和

食堂で大好物のさきイカを購入したバニラは、さきイカをくわえてもぐもぐしながら適当な席を探してきょろきょろと辺りを見回した。

「……」

すると、見覚えのある人物を見つけ、ついでにその隣が空いていたので、バニラはそちらに移動することにした。

てくてくてく

「んふ～♪」

「……」

てくてく歩いていくと、見覚えのある人物、魔物学の宿題のプリントに頭を乗せてペンを握ったまま寝ている金髪美少女のチロルが、んふ～♪　と何やらご機嫌に笑いだした。

「……」

すとん

が、それを気にすることなく、遠慮なく彼女の隣に座ったバニラは、再びさきイカをくわえてもぐもぐし始めた。

「えへへ～♪」

「……」

学校一の美少女とも囁かれているチロルが寝ながら不気味に笑っていても、バニラはひたすらさきイカをもぐもぐ。

「やあん、ミントきゅんのえっち～♪」

「……？」

が、彼女の寝言は気になったようで。

「……」

えっち……エイチ？

何かの略語か？

H、詰まり、は行で始まる言葉のことか。

は行で始まる、しかも”やあん”ということは害をなすものであることを意味するから――……。

「……！　犯罪者……？」

ピーンときたバニラだが、とんでもない勘違い。

「……」

国民に害をなすものならば排除しなければ、とバニラが危険な事を考えながら、真偽を確かめる為に水晶玉を覗き込むと、そこからぽんっと勢い良くカードが飛び出した。

「……」

ぱしっと慣れた手つきで捕まえてそのカードを見たバニラは、

ちょんちょん

「やん、そんなとこ触っちゃ……」

ちょんちょん

「えへへへへ……ふえ？」

まさに夢心地なチロルの服を引っ張って彼女を現実世界に引き戻し、真剣な顔でこう言った。

「犯罪者じゃない」

と。

「は？」

いや、寝起きに突然犯罪者じゃない宣言されても。

「犯罪者じゃない」

二回目。

「は……はあ……？」

そ、そうですか、とチロルは一応納得しておいた。

「チロル！」

バニラが満足したように再びさきイカをもぐもぐし始めて、チロルがおめめパチクリ状態になっていたところ、遠くの方からミントの声が聞こえてきた。

「！　ミントきゅん！？」

いつもなら喜ぶ彼の声に驚いたのは、いつもなら自分が彼の名前を先に呼ぶからなのと、

（ま、まさかの正夢ッ？！）

彼女が先程まで見ていた夢のせい。

明るい顔でこちらに駆け寄ってくる彼に、チロルはみるみる赤くなる。

（つ、ついに……ついにアタイは大人の階段を掛けのぼるのね～みたいな～～～っ！！）

エキサイトしながらそんなことを思っていると、

「――は！」

チロルは、あることに気が付いた。

（の、ノット勝負服……！）

そんなショックを受けているうちに、ミントはもう目の前に。

「チロルーー」

「ま、待ってミントきゅんアタイ今ノット勝負服みたいなっ！」

彼の言葉を遮って、チロルが慌ててそう言うと、

「？　いや、服は別に関係ないんだけど」

ミントは疑問符を浮かべながらもさらりと返した。

「え？！　あ、あ、そっ、そうだねっ、服は関係ないよねっ」

どうせ脱ぐんだし、って、きゃーっミントきゅんったらなんて大胆なのーっ！　とか思いながら、チロルは赤い顔を更に赤くする。

「……？　大丈夫？　顔が真っ赤だよ？」

そんな彼女を心配するミント。

「お、おおおオフコース大丈夫みたいなっ！！」

焦らされてる、焦らされてるわーっとか思いながらテンション高めで答えるチロル。

「そう？　じゃあ、聞きたいことがあるんだけど」

大丈夫だと受け止めたミントが本題に移ろうとしたところ、

「わ、わわわ分かってる～みたいなっ！」

チロルは両手で顔を覆いながら、みなまで言うなとばかりにそう言った。

「ホント!?　じゃあ」

彼女の言葉に顔を明るくしたミントに、

「う、……うん。ど……どど、どこで?」

チロルは手で顔を隠したまま小さな声で尋ねた。
どこか素敵な場所に連れていってくれるに違いない、そう思って。

「へ?　いや、どこじゃなくて」

が、しかし、ミントがきょとん顔で聞き返してきたので、

「えっ?　――こっ、……ここぉ?!」

チロルは弾けるように顔を上げて、素っ頓狂な声を出して更に聞き返した。

「うん」

すると、ミントはそれにこくりと頷いてみせた。

「――!?」

(だ……、だだだ大胆にもほどというものがあるのではないですかミントきゅん?!　いやでもそんなケダモノミントきゅんにめろり

んこ～みたいな～みたいな～みたいな～っ！！）

とケダモノミントを目の前に、エコーまで自演してくれたチロルは完熟トマトのごとく真っ赤っか。

そんなチロルに、ミントはさらりとこう言った。

「ココア知らない？」

――瞬間、チロルは石化した。

「こほっ、ごほっ……」

校舎に思い切り叩きつけられたアオイが、剣を杖代わりにして立ち上がると、

「……まだ……動けたか」

ゴマプリンは、忌々しげに彼を睨み付けた。

「……っ、負けないよ」

左手の甲で口を拭った後、アオイはしっかりと右手に持った銀色の

剣の切っ先を彼に向けた。

「ふ……お前一人で、何が出来る？」

それを嘲笑うかのように、ゴマプリンが口を開いた。

「俺をまともに攻撃することすらできないお前に」

「……っ」

ゴマプリンの言葉に、アオイは中庭に倒れている友人たちを見て悲痛に顔を歪めた。

六人で力を合わせてゴマプリンを追い込んだところまではよかったのだが、最後に一斉攻撃を仕掛けたのがまずかった。

彼が一方向しか防げないと踏んで周りから一斉に攻撃を仕掛けたところ、ゴマプリン自身の真上以外の全方向攻撃、”台風”が炸裂し、自身の魔法を跳ね返された上に存分に切り裂かれて仲間たちは地に伏したのだった。

「……みんながこんなに傷付いたのは……僕のせい」

痛々しい傷を負って力なく倒れている彼らからそっと目を外すと、

「僕の剣に、まだ迷いがあったから……だからっ！」

右手で握っている剣に左手を添えて、強い光を宿した灰色の眼で敵を射た。

「僕はもう、迷わない！」

アオイが彼を切り伏せようと地を蹴り、ゴマプリンが彼にとどめを刺そうと右手を向けた。

「みんなー、クッキー焼けたよー！」

――直後、ココアの元気な声が中庭にこだました。

ズザザザザザザアッ！！

よって、アオイが豪快にずっこけた。

「なんとー？！　アオイ大丈夫ー！？」

エキセントリックなズッコケを披露してくれた彼をびっくりしつつも心配している途中で、

「て、なんでゴマー？！」

ココアは、中庭の真ん中にゴマがいることに気が付いた。

「ふえぇ？！　そしてみんな大丈夫ー！？」

ついでに、ボロボロになって倒れているポトフとアセロラとリンとユウとウララにも気が付いた。

「……貴様もこいつらの仲間か」

戦場にクッキーたっぷりバスケットと紅茶入りポットを抱えてやってきた場違いお嬢さんに、ゴマプリンがすっと右手を向けると、

「！　こ、コレが目に入らぬかーっ！」

確か甘いもの好きじゃなかったよねとか冷や汗流しながらココアはビシィッとココア特製ココアクッキーを彼に見せ付けた。

「――っ？！」

直後、彼は顔面蒼白になった。

「……え？」

嘘、効いた？　とココアがびっくらこいていると、

「そこまでだよ」

彼女の後から、ミントの声と、

「ちゃお」

死神の声が聞こえてきた。

「し、死神……だと？！」

ココアクッキーにびびったわけではなく、死神の登場に驚いていたゴマプリン。

――そう。死神の仕事は、魂を刈ること。

「テレポ――……っ？！」

瞬間移動で逃げようとしたゴマの口を薔薇の鞭で塞ぐと、

「ワタル」

ミントは、ココアのクッキーを摘み食いしていたところを引っ張ってきた助っ人の名前を呼んだ。

「らじゃ」

名前を呼ばれた死神は、青い空に向かって得意げに刃渡り一メートルほどの巨大鎌の刃こぼれした不規則な刃を振りかざす。

――こうして、プリンを支配していた魔物は消滅したのであった。

第１５６回　ヘア変日和

秋の日の昼下がり、国立魔法学校の中庭の中央で、一陣の風が生まれた。

ザンッッッッッッ！！

――その刹那の出来事は、ミントとアオイとココアにとって、とてつもなく長い時間に感じられた。

身の丈ほどもある巨大な鎌の柄を両手でしっかりと握り締め、からだ全体を上手に使うことによって生み出された斬撃と太刀風。

その勢いを殺すことなく、三日月型の不揃いな刃は、口を塞ぐと同時に五体の動きを封じている薔薇の鞭によって身動きが取れないプリンの首を、風を切る音とともに真一文字に掻き切った。

ドサ……

全身の力の支配を失った彼の体は、勢いを殺すように刃の軌跡に従って倒れ、

バサァッ

それに少し遅れて、首を通った際に一緒に切れてしまった彼の長い綺麗な髪が、宙を舞って地に落ちた。

「「――――！？」」

その瞬間の出来事を、ミントとアオイは為す術もなくただただ目を見開いたまま眺めていて、

「――っ、きゃあああああ！！」

バスケットとポットを取り落としたココアは、その両手で視界を遮り、恐怖に引きつった悲鳴をあげた。

「……ん？」

彼女の悲鳴に疑問符を浮かべて振り向いた死神は、

「ああっ！　もったいない！」

クッキーがココアの足元に散らばっていることに気が付いてそう言った。

「し……死神……さん……っ？」

上体を起こしてこちらを見ていたアオイの、酷く震えた声に死神が反応したところ、

「ん、で……、っ、なんでプリンを殺したのさ？！」

がっとミントに胸ぐらを掴まれた。

「？　何を――」

「オレはっ！！　オレは、プリンを……助けて……って……」

吊り上げた眉が力なく下がり、ミントはライトグリーンの瞳いっぱいに涙を溜めてその場にへたりと座り込んだ。

「？　……おお。めんご、めんご」

ぼろぼろ泣いている彼を見て、ようやく今の状況が飲み込めた死神は、

「オレ様の鎌子は、オレ様が斬ろうと思ったものだけ斬れるんだ」

そう言って、ちゃんと首がくっついているプリンを彼らによく見せた。

「え？」

その言葉に、プリンに恐る恐る目を向けた三人は、

「……」

「……」

「……」

ちゃんとくっついているプリンの首を、凝視した。

「オレ様が狙ったのは、魔物の魂。詰まり、プリッツは死んでないぞ」

えへん虫！　と、死神が胸を張ると、

「……む？　……ぷわぁ」

プリンが目を覚ましてむくりと起き上がった。

「！　枕っ！」

手元にある筈の枕がなく、慌ててキョロキョロして遠くにそれを発見し、プリンが枕を取りに行こうとしたところ、

「プリンーーーー！！」

「ぴわぁ？！」

呼べばいいのかと魔法で手元に枕を移動させた彼の胸に、泣きながらミントが飛び込んだ。

「み、ミント？」

「うわーん！！　よかったよー！！」

「うむ？　何が――」

「ふえええん！！　よかったー！！」

「こ、ココア？」

「よかった、よかったぁっ！」

「あ、アオイ……？」

「フッフッフッ。流石オレ様」

「「うわーん！！」」

「？？？」

一人が不敵に笑って三人が泣いて六人が気絶という混沌とした状況下で、ただただ疑問符を浮かべてわけも分からずひっついているミントの頭を撫でていたプリンは、

「――？！」

自分の髪が、辺りに散乱していることに気が付いた。

「か、髪がないっ！？」

そして、ある筈の髪がないことにも気が付いた。
何やら先程から誤解を招きそうなことを言っているのは、気のせいなのかどうなのか。

「フッフッフッ。プリッツの髪が左だけ短いという不自然な長さだったからオレ様が揃えてやったんだぞ？　一瞬カットで」

首の付け根辺りで一直線にぶった切られた髪に驚くプリンをよそに、死神は、十分カットに勝ったとばかりに、何故か誇らしげだったという。

「将来はチョコレートはやめて床屋さんになろうかな？」

「いや、ハサミの代わりに大鎌使う床屋さんなんて誰もこないから！　前髪とか絶対切れないから！　そしておかっぱヘアー大流行しちゃうから！　って言うかチョコレートってなんなのさ？！」

「ちちち。切るだけじゃない。オレ様は、〝刈る〟のも得意だ」

「〝刈る〟の意味違って言うか怖ぇぇぇ！？」

元気なミントと死神と、いまだに泣いているココアとアオイと、ボロカスで倒れているポトフとアセロラとリンとユウとウララをよそに、

「す、すーすーするっ！」

今までが伸びまくっていた分、短髪の涼しさに青くなるプリンであった。

優しい風に木々が揺れる静かで小さな街、アクリウム。

森で囲まれたその街の外れにある青い屋根の家の一階にある美容室に、

「ぴ、わ……」

プリンは座っていた。

「わぁ、これは思いっきり切られちゃったねぇ」

あんなに綺麗な髪だったのに、と残念そうに今やセミロングと化した水色の髪を梳いている途中で、

「わわ……」

茶髪お兄さんのソラは、プリンが固まっていることに気が付いた。

「？　……もしかして、こういうとこに来たの初めて？」

というソラの問いに、プリンがこくりと頷いたのを見て、

「はェ？！　じゃァ、お前今まではどォしてたんだよ！？」

驚いたポトフが更に質問した。

「自分で」

ハサミを使って適当な長さにちょっきんと。

「ああ」

「成程ねー」

だからたまに後ろ髪が短くなってたのか、とか思いながら、ぽんと手を叩いたミントとココアの隣で、

「おま……そんなずぼらなクセにモテモテだったのかァ？！」

制服はきちんと着るくせに私服のみならず身だしなみもずぼらだった彼に、ポトフは衝撃を受けていた。

「ず、ずぼらじゃないしモテモテでもないっ！」

プリン、否定。

「バカかお前よくレディたちの間で俺と比べられてんだぞ?!」

ポトフ、具体例。

「知ってる知ってるー。付き合うならポトフで結婚するならプリンってやつだよねー」

ココア、複雑。

「なんなのさその議論?」

ミント、げんなり。

「ホント綺麗な髪だなぁ」

ソラ、うっとり。

そうして和やかに時間が過ぎ、

バサッ

「はい、おしまい」

ソラの仕事が、終了した。

「……」

「……」

「……」

「……」

今、鏡の前に座っているプリンは、以前の長髪でもなければ、さっきまでのセミロングでもない、

「……ふ」

「ふっ……」

「「双子……っ！！」」

――ポトフヘア。

「ちょ、おにぃさん?!」

「わあ、双子双子♪」

「双子じゃな――いや双子だけどって言うかなんでストレートだったのにちょっと撥ねてんですか?!」

「いやぁ、短くしたら自然と撥ねちゃって♪」

「ぴわわ、だ、だから僕は短くしたくなかったんだっ！」

「僕、プリンくんとポトフくんが双子だって聞いたときから、二人を同じ髪型にしてみたかったんだぁ♪」

「「ヤーーーーー?!」」

こうして、プリンのながったらしい髪は、見事に短くなりましたとさ。

「プリンが短くしたら撥ねるってことは、ポトフが長くしたらサラサラストレートになるのかなー?」

「……。それってどうなのさ?」

第157回　危機日和

「わは～、なんか随分感じ変わったねぇプリン？」

「むぅ……背中が寒い」

美容室の奥に入り、フラント家のリビングキッチンにお邪魔したミントとプリンは、

「はい、どうぞ」

と、ソラにお茶を出してもらっていた。

「ありがとうございます。……って、感じ変わったと言えば」

ソラにお礼を言った後、ミントは思い出したように彼を見た。

「あは、老けたでしょ？」

すると、ソラが笑ってそう言った。

「え、や、老けたって言うか何と言うか……」

「あはは、気を使わないでいいよ。ポトフくんに聞いたんだけど、アオイくんたちが頻繁に来るようになったでしょ？　それで多分、こっちの世界とあっちの世界の繋がりが強くなって、時間の流れも一緒になっちゃったみたいなんだ」

その言葉にどう反応していいのか困ったミントをよそに、

「すごかったんだよ。ある日突然、一夜にして老けちゃって」

「っえ、一夜にして!?」

あははと笑いながら、ソラはびっくり極まりない出来事を口にした。

「おかげで二十代前半からいきなり三十後半に飛び級だよ？　いやぁ、びっくりびっくり」

「いや、全然びっくりしてませんよねソラさん?!　ちゅーかそれ飛び級言いませんよね!?」

「いやぁ、まさか二十代にして成長期が来るなんてねぇ」

「いや、それ絶対に成長期とは違いますよねソラさん!?　つか、成長期だとしても年齢は変わりませんて!」

「いやぁ、一気に寿命が縮まっちゃったんだよねぇ」

「いや、だからそれ笑い事?!　十年以上寿命が、って全然笑えませんよソラさん!?」

ほのぼのと笑うソラにガンガン突っ込むミント。

「あはは、ミントくんと喋ってると、なんかシャーンを思い出すね♪」

「出来れば思い出さないでください」

楽しそうに言うソラにさらりとお願いした後、アオイたちが世界を変えちゃったんだ、とか思っている途中で、

「あれ？　でも、向こうの世界の人は魔法が使えないんですよね？」

リンとユウとワタルはマロに力を与えられたらしいけど、アオイとウララからは魔力というものをまったく感じられないことを思い出し、ミントは目の前にいる怖いくらいに灼熱の魔力を感じる異界人に質問した。

「うん。僕も元々は使えなかったんだけど」

ふーっと息を吹き掛けてミントが紅茶を頂いた直後、

「心臓に直接バース突っ込まれてから使えるようになったんだ♪」

そんなことを笑顔でソラが言ったものだから、ミントは危うく紅茶を噴きそうになった。

「ち、直接?!」

「うん、ラリアットで。あの時は本気で死んじゃうかと思ったなぁ」

「いやいやいや、それ普通死にますよね?!」

「で、気付いたら空からこの世界に向かってものっそい勢いで落ちてて」

「いやいやいやだからそれ普通死にますよね?!」

「シャーンとルゥとエリアに会って、なんか操られて自分の心臓刺しちゃって」

「いやいやいやだからそれ普通死んじゃいますよねってば！！」

「アミュにも会って、なんか群青色のカレーとかふざけたもの食わされて」

「いや……て、えええ?！　あなたもあれの被害にっ！?」

「で、ジャンヌに会って」

「いやいやいや死線さまよいまくりですかソラさんんん?！」

波瀾万丈な彼の過去に、ミントは盛大な突っ込みをかました。

「あはは、いろいろあったねぇ」

「いやそんな他人事な！」

「ふむ。すると異世界結婚か」

国際どころの騒ぎじゃないことをやってのけた彼を前に、プリンが時計を見ながら口を挟むと、

「そうそう。姉さんと弟に異世界にいるエリアと結婚するって言ったとき、なんだか知らないけどすんごい哀れみの目で見られちゃってさぁ」

とソラが言ったので、驚くなら分かるけど何故哀れみ?　と、揃っ

て疑問符を浮かべるミントとプリン。

「なんか僕が、二次元？　に、逃げた、とかなんとか？」

「いや、それものっそい誤解されてますよソラさんんんんんんんんん！？」

とんでもない誤解をされているのだが、意味が分からなかったプリンと同様に疑問符を浮かべているにこやかソラに、笑ってる場合じゃねえええ？！　とミントは渾身の力で突っ込んだ。

「ふぇっ……えっ……」

美容室も兼ねた青い屋根のお家の二階にある、南向きの綺麗に片付いた部屋のカーペットの上に座って、白いクッションを抱えたココアが、その濃い桃色の瞳からぽろぽろと涙を零していた。

とどまることを知らないその涙は、頬を伝ってクッションへと落ちていく。

だって、だってこんなの悲しすぎる。

こんな、こんなのって――……。

「……ココアちゃん……」

そんな彼女の名前を、隣に座っているポトフが優しく呼ぶと、

「ふえええん！　アリエッターーー！！」

ココアは彼の名ではなく、女性の名前を叫びながら彼の胸に飛び込んだ。

アリエッター――その名の女性が、彼女がこんなにも泣いているそもそもの原因。

ココアは、最近発売されたばかりの感動の超大作恋愛映画、”ボブとアリエッタ”のファイナルエディションで感動しまくっていたのであった。

「アリエッタが、アリエッタがぁっ！」

ミントとシャーンが爆睡をかましたこの映画のエンドスクロールが流れる画面の前で、ココアは悲しみに涙を流す。

「きのこアレルギーで死んじゃうなんてーっ！」

どんな恋愛映画だ。

「自分のアレルギーはちゃんと把握しなきゃダメだぜ？」

どんな慰めだ。

「ふえええん！　怖いよきのこアレルギー！！」

念の為に言っておくが、これは、しつこいながらも恋愛映画の、しかも感動の超大作の感想である。

ふえんふえん泣いているココアをふわりと抱き締めて、彼女の頭を優しく撫でるポトフ。
そうしてだんだんと落ち着いてきたココアは、とあることに気が付いた。

（――は！？　私ったらミントたちの前で何――……て、れ？　いない……？）

彼女が気付いたこと、それは、一緒に映画を見ていた筈のミントとプリンとソラの気配がこの部屋からなくなっていること。
彼らは映画の序盤で退室していたのだが、ココアは画面に夢中になっていて気が付かなかったようだ。
ちなみに退室の理由は、ミントとソラはこの映画に耐えられないからで、プリンはひとえに興味がなかったから。
早々に退室した彼らは、現在一階のリビングでのんびりお茶している。

（よかったー……）

見られてないことに喜んだのも束の間、

（って、よくないよくない全然よくない！！）

ココアは、もう一つのことに気付いた。
彼らがこの部屋にいないということは、現在彼女はポトフと二人きり。
しかも、ここはポトフの部屋。
更に、結末はどうあれ二人は恋愛映画を見た後で、とどめに今のこの状況。

（こ、これは一体どーすれば……）

変な汗を掻きながら、ココアがこの場を切り抜ける最善の方法を考えていると、

（！）

ドアの隙間から、救いの手のごとくカレーのにおいが漂ってきた。

（〝あ、夕御飯が出来たみたいだね。下に降りてみよっかー♪〟、よしっ！　万事解決ー！！）

打開策を見つけたココアは、心の中でぐっと右手を握ると、その作戦を実行しようと顔を上げた。

「――！」

が、するとポトフの顔が目の前に。

ぱっちりとした桃色の瞳と切れ長の茶色の瞳が真っ直ぐに結ばれて、思わず紅潮した彼女の耳に、彼の低い声が響く。

「ココアちゃん」

聞き慣れた筈の彼のその声に、胸を締め付けられたココアはあらがうことが出来ずに瞳を閉じた。

シュパンッ

直後、背後で空気を切り裂いたような音がした。

（しゅぱん？）

どこかで聞いたことがある音に疑問符を浮かべた瞬間に、ココアはどこで聞いたのかを思い出して勢い良く振り向いた。
そこにいたのは、予想通りの瞬間移動魔法で現れたプリン。

「「な――？！」」

彼の突然の登場にポトフが驚いて、彼に目撃されたことにココアが顔を真っ赤にすると、

「ふふふ、二人の分だ」

プリンは無邪気に微笑んでカレーを二人に手渡した。

「……」

「……」

「「……」」

手渡されたカレーは、見事に群青色。

「僕がつくった」

初めてつくったんだぞ！　と褒めて欲しいオーラ丸出しのプリンに、ココアとポトフはぶつけるべき言葉を失い、

ドサドサッ

「「……っ」」

加えて下の階から聞こえてきた何か重いものが二つ倒れた音に、ポトフとココアは得体の知れない恐怖にさいなまれるのであった。

第１５８回　平日日和

枯葉が舞い始めた学校の校庭に、箒を持ってたたずんでいる少年が一人。

「……はぁ……」

さっさっと箒で枯葉を掃きながら、彼は小さく溜め息をついた。

「……アオイ、元気ない、です」

その様子を少し離れたところで見ていたリンが、ちりとりを持ち上げながら口を開くと、

「そうねぇ。いつもにましてボーッとしてるし、溜め息ばっかりついちゃって」

箒を持ったウララも彼を見た。

「……恋かしら？」

ガターンッ！！

直後、リンがちりとりを取り落とし、辺りに回収した落ち葉が散乱した。

「ああ！　せっかく集めたのに――って、リン？！」

せっかく綺麗にしたのに再びばらまかれてしまい、ショックを受け

るウララ。
しかし、初めて見たかもしれないリンのショック顔に、彼女はショック顔をびっくり顔に切り替えた。

「こ、こここっ、ここ」

何故ならば、いつもはポーカーフェイスな彼女が、今やこんなにも錯乱しているからだ。

「もも、もしかしたら！　もしかしたらの話だからねリンっ？！」

「こここ、こけーっ！！」

「こけーっ！？」

ニワトリ化したリンに焦るウララ。
そこへ、教室の掃除を終えた死神とユウがやってきた。

「こけーっ！！」

「こけーっ！！」

「……何やってんだお前ら？」

コケコケ騒いでいるリンとウララに、冷ややかな目を向けるユウ。

「くっくどぅーどぅー」

アメリカンなニワトリで仲間に入る死神。

「こけーっこここ」

「こけーっ」

「くっくどぅーどぅーくっくどぅー」

愉快なニワトリフレンズをスルーして、

「アオイ」

ユウはアオイの元へ移動した。

「あ、ユウ」

彼の声に反応して、アオイがゆっくりと振り向くと、

「……？　どうした？」

ユウは、アオイ以外の人間ではあり得ない彼の気持ちを敏感に感じ取った。

「！　ユウ、すごいね」

自分の感情にすぐさま気付いた彼にびっくりした後、

「……。あのね？　ユウ、僕……」

アオイは、箒をぐっと握り締めてうつむき加減に口を開いた。

「！」

「こけ？」

「ぴーんひょろー？」

彼の声をキャッチしたリンは耳をそばだて、ニワトリウララとニワトリからだんだんと離れた死神が疑問符を浮かべる。

「プリンの髪、切っちゃったからどうしようかとずっと思ってて…
…っ！」

そんななか、アオイが灰色の瞳に涙を浮かべながら悩みを告白した。
直後、リンが胸を撫で下ろし、

「気にするな」

ユウが彼の頭にポンと右手を優しく置いた。

「そのうち伸びる」

ご尤。

「いやいやいやそりゃそうだけどそういう問題じゃ」

「！　うん、そうだね！」

「って、ええんかそれでえええ？！」

ウララのツッコミがいつものごとくスルーされ、元気を取り戻したアオイが掃除を終わらせると、

「……日が短くなった、ですね」

暗くなってきた空を眺めながら、リンがぽつりと呟いた。

「うん。それにだんだん寒くなってきたね」

それに頷き、秋の訪れをアオイが実感していると、

「こんな日はおでんに限るわよね！」

と、突然ウララが意見を出した。

「きゅうりだろ」

「チョコレートがいい」

「いやそれ秋関係ないじゃない？！」

さらりと意見したユウと死神に、おでんも冬よりな気がしながらも突っ込むウララ。

「おでん、ですか」

「僕はちくわが好きだな」

「リン、はんぺん、です」

ほのぼのとおでんトークを始めるリンとアオイ。

「いやいやここは昆布でしょ？」

「……。銀杏だろ」

それに加わるウララとユウ。

なんとなくメインでない気がする品をチョイスする彼らに、

「チョコバナナ」

死神が、進撃を仕掛けてきた。

「……」

「……」

「……」

「……」

静寂。

「さ、帰りましょ」

「うん」

「はい、です」

「そうだな」

ある平和な午後のことであった。

ずりずりずり

「ゆうこりんひどいー」

「何故俺だ？　と言うかその呼び方やめろ」

足を掴んだ為にずりずりと引きずられながら死神が訴えると、ユウはさらりと切り返した。

「断る」

「何故譲らない？　と言うか離れろ鬱陶しい」

「断る」

「いやそこは承諾しなさいよ？！」

ユウの命令をきっぱりすっきり断った死神を、ウララがユウの足からひっぺがすと、

「だいたい、あんた絶対甘党を履き違えてるわよ！」

彼女のツッコミモードが再燃した。

「……。ウララ、ワタルがユウとひっついてるのが気に食わなかった、ですね」

「あ、鱗雲だぁ」

その傍らで、彼女の行動を分析するリンと雲を眺めるアオイ。

「何を言う。オレ様は人類の歴史を塗り替える甘党、死神ワタルだぞ」

「何政党っぽくキャッチコピーつけてんのよって言うか人類の歴史を塗り替える?!」

「公園のベンチを、チョコレートで」

「甘ーい☆　って、さすなあああ!!」

「……今のは完全に自発的発言だろ」

賑やかな死神とウララに、冷ややかな目を向けるユウと、

「……。ユウ、ワタルとウララが騒いでいるのが気に食わなかった、ですね」

「わあ、赤トンボだぁ」

その傍らで、彼の行動を分析するリンと、飛んできた赤トンボを人差し指に止めてみせるアオイ。

――秋の涼しい風が吹く、ある平和な午後のことであった。

第１５９回　友劇日和

群青色カレーの継承者がめでたく誕生した次の日のこと。

「ジャガイモとニンジンとタマネギと肉を切って炒めて」

「……うむ」

ミントは食堂で朝食兼昼食に、茶色のカレーを注文した。

「水入れてルゥ入れて」

「……うむ」

彼の正面に座っている短髪プリンは、何やら周囲から熱視線を浴びながら、目の前のカレーに目を落とす。

「そこまでまあ多少っていうかかなり流血沙汰にもなってたけど、鍋のフタを閉めるところまでちゃんとソラさんとオレが見てたよね？」

「……うむ」

ミントの言葉に、うつむいたまま相槌を打つプリン。

「っ、じゃああの色とあの味はどこから来たのさ?!　インディゴか!?　インディゴ入れたのか?!」

すると、ミントが痺れを切らしたかのように思い切り突っ込み始め

た。

「い、インディゴは入れてない」

彼の突っ込みをまともに返すプリン。

「んなこと百も承知だよだから茶色が群青色になるって言うのさ?!」

「ふ、不足している栄養素を補おうと」

「いやなんでオレたちがちょっと目を離した隙に化学実験的なことしちゃうのさ?!」

「ぼ、僕は――」

「あーもーこんなんだからダメなんじゃんかぁ!!」

食堂の隅っこでぎゃーぎゃーと主にミントが騒いでいると、

「? どしたんだァ?」

鹿サンドを持ってやってきたポトフが、その騒ぎに首を傾げた。

ガタンッ!!

すると、テーブルに両手をつけて乱暴にイスを鳴らしながら立ち上がったプリンは、

「っ、ミントのばかぁ!!」

そう言って、食堂から走り去っていった。

「……」

「……」

「「……」」

しん、と静まり返った食堂。

テーブルに残されたミントは、プリンの背中を見送った後、席に座ったまま無言でうつむいた。

「ミント……」

そんな彼の名前を呼びながら、ポトフが隣の席に腰を下ろすと、

「……。……そりゃあ、学年トップからしたら、学年平均なんてバカに決まってるじゃんか……」

「っえ、そこ?!」

ミントがぼそっと呟いたので、落ち込みポイント違うくない?!と彼はミントの代わりに突っ込んだ。

「あーもー、ホント何やってんのさ?　こんなんだから」

すると、ミントはこつんと頭をテーブルに乗せ、

「……オレのバカ……」

食堂の床に向かって自己嫌悪。

「あは、ミントは喧嘩がへたくそだなァ？」

彼の隣でテーブルの縁に背中を預けたポトフが、困ったように笑いながら鹿サンドの包みを開けた。

「……へた？」

床とにらめっこしたままの状態で、ミントが弱々しく聞き返すと、

「喧嘩ってのは、謝ったら負けなんだぜェ？」

はぐっと鹿サンドをいただきながら、ポトフが優しくそう教えた。

「ああ……だからキミらは絶対に謝んないんだね」

「おォ！？　そ、そう、だな？」

俺の話にされたっ？　と、びっくりしつつも、ポトフが肯定すると、

「……じゃあ、オレは自分から仕掛けといて負けちゃったわけだね？」

喧嘩慣れしていないミントは、顔をあげないまま呟いた。

「んなことより」

するとポトフは話をぶった切り、

「今気付いたんだけど俺、ミントと喧嘩したことなくねェ？」

と、鹿サンドの包みをくしゃっと丸めながら、どうでもいい話を持ち出した。

「……。そだね」

ミントもミントで、その話題に素直についていく。

「滅多に喧嘩しねェのに、するときは枕とばっかだよなァ」

「……何？　オレと喧嘩したいの？」

くーるくーると包み紙を丸めながら口を尖らせている彼に、ミントが無気力に質問すると、

「だって、喧嘩するほど仲が良いって言うだろォ？」

とうっとゴミ箱に向けて包み紙ボールを投げたポトフがそう言った。

「……。詰まり、キミはプリンと仲良しということを認めると？」

見事にシュートを決めた彼に、一向に顔をあげないミントが尋ねると、

「え？！　い、いいいやっ、そォいう路線ではなくてっ！」

慌てたポトフはわけの分からない否定をした後、

「そ、それに。ミントはまだ負けてないぜェ？」

自分でねじ曲げた話を強引に修正した。

「……へ？」

「だって、まだ枕には謝ってねェだろォ？　それに」

ようやく顔をあげてくれたミントに、ポトフはにこっと明るく笑ってみせた。

「あいつ、バカみたいに単純だから」

『そー。それであとは煮込むだけだよー』

『うむ』

家庭科調理室の扉の前に長いこと座っていると、扉の隙間から漂ってきたのはカレーのかおり。

「な？　単純だろォ？」

「……」

ポトフの問い掛けに答えずに、扉に背中をつけて体操座りしながら腕の間に顔を埋めていたミントは、すくっと静かに立ち上がった。

「あは……」

喧嘩向きじゃねェなとしみじみ理解したポトフも、つられて一緒に立ち上がる。

ガラッ

「「？」」

突然ノックもなく開いた扉に、室内にいたプリンとココアが驚いてそちらに顔を向けると、

「プリン」

そこには、ミントが立っていた。

「ごめんね」

泣きながら。

「……！　ううむ、悪いのは僕だっ！」

それに驚いたプリンは、慌てて首を横に振ってそれを否定した。

「プリン……！」

「ミント……っ」

互いに涙目になりながら名前を呼び合った後、

「プリンーーーっ！！」

彼らは互いに駆け寄った。

「ミン」

ドカアアアアアン！！

――ところ、プリンの腹にポトフの右足がめり込んだ。

「「ってプリンーーーー？！」」

飛び蹴りによって勢い良くぶっ飛んだ彼を心配するミントとココア。

「っ、き、貴……様……っ突然何をするっ！？」

腹を押さえながらよろっと立ち上がるプリン。

「……前からな。テメェに言いたかったことがあるんだ」

そんな彼を、真剣な眼で睨み付けるポトフ。

「ぽ、ポトフ？　悪いのはオレなんだよ―…」

彼の剣幕に、自分の為に怒っているのかと思ったミントの発言の途

中で、

「ミントと仲直りする為にちゃんとしたカレーを作るのはいい。だがな」

ポトフは、それを遮った。

「ココアちゃんと、いちゃつくなァァァァ！！」

という、理由で。

「えぇ？！　カレー作るの手伝ってただけで別にいちゃついてないよー！？」

「……。……ああ、オレがドアの前で座ってる間ずっと隣で我慢してたんだね。ごめんポトフ」

ドカンバコンと喧嘩を始めたプリンとポトフを眺めながら、焦るココアと謝るミントであった。

第１６０回　革命日和

風が冷たくなってきた秋の放課後。

「うん、また明日。ばいばーい」

掃除を終えて友人と別れたウララは、

「……は～ぁ……」

中身が入っていなさそうなバッグを肩にかけ、盛大な溜め息をついた。

「３キロ……３キロも増えてただなんてぇ……」

原因は、本日の身体測定の結果にあり。

「ダメだわ。こんなんじゃ絶対ダメだわ」

見た目は変わっていないのだけれど、体重が増えたことが許せないウララは、

「よぅし、今日からダイエットするわよ～！！」

ぐっと握り締めた拳を振り上げて気合いを入れてダイエット宣言をした。

「トリックオアトリート」

――直後、彼女にお菓子を求める声がかけられた。

「うはあ?!　わ、ワタル!?　あんたいつからそこにいたのよ!?」

真後ろから話し掛けられ、驚いたウララが質問すると、

「3キロ増え――……」

死神は、さらりと禁句を口にしようとした。

「だりゃあああああ!!」

「あうち」

ので、ウララは渾身の肘鉄砲を彼にお見舞いした後、

「そこから聞いててよくもぬけぬけと私にお菓子を要求できたわねぇぇぇ?!」

バキボキと手の骨を鳴らしながら、バックに怒りの炎を燃え上がらせた。

「……。お菓子をくれないのか?」

そんな彼女に、死神がさらりと質問する。

「あたぼうよぅ!!　燃えろ脂肪ーーーっ!!」

ダイエット宣言、再び。

「……そ。なら」

すると、死神は詰まらなそうに膨れた後、

「イタズラしちゃうぞ」

ダイエットに燃えるウララにかろうじて聞こえるくらいの声で、そう言った。

目が覚めると、そこは保健室のベッドの上。

「……はれ？」

さっきまで教室にいた筈なのに、いつの間に？　と思いながらウララが身を起こすと、

「！　ウララ！　大丈夫っ？」

ベッドの脇から、アオイが身を乗り出した。

「へ？　ああ、だいじょぶよ、アオ」

ので、大丈夫と返事を返そうとしたところ、

「イィィィィィィ?!」

ウララは、びっくり仰天しすぎてベッドからずっこけた。

「ウララ?!　どうしたのっ!?」

それに慌ててアオイが駆け寄ると、

「それはこっちの台詞！　何こんなところで女装してんのよアオイ?!」

女子高生ルックのアオイにウララは勢い良く突っ込みを入れた。

「……え?」

すると、アオイは灰色の瞳をぱちくりさせた後、

「私、もともと女の子だよ?」

小首を傾げてそう言った。

「――?!」

衝撃。

「い、いつからよ!?　いつからそんな道を踏み外したのよアオイ?!」

「え？　あ、あうぅっ、ウララ、やめ、やめっ」

自分は女の子だと言うアオイの肩を掴み、前後にがっくんがっくんさせながら問い質すウララ。

――直後、

「アオイ？！」

撥ねまくった黒髪の、女子高生がやってきた。

（うわ、美人――）

なんて、ウララが目を奪われていると、

「！　ユウ！」

と、涙目でアオイが彼女の名前を呼び、

「……死にたいようね？」

彼女、ユウは、ウララに鋭い漆黒の瞳を向けた。

（――へ？）

へ？　ユウ？　と、彼女の名前に混乱するウララ。

ユウって名前の女の子は確かにいたけれど、ユウなんて名前で黒髪黒目でアオイの為に私に向けてこんなこと言うのは――。

「ユウゥゥゥゥゥゥ？！」

ウララの衝撃、再び。

「っさいわねこのバカアホボケナス」

バカアホボケナス?!　とトリプルに酷いニックネームに反応しつつも、この辛辣な感じは、確かにあのユウ。

ガラリ

「ウララ、大丈夫、です?」

更に、保健室に入ってきた男の子の、この口調。

「そしてリンンンン?!」

女子生徒の格好をしたセミロング銀髪のアオイちゃんと黒髪ロングのユウちゃんと、男子生徒の格好をした栗色短髪リンくんに、気が狂ったかのようなリアクションを示す、男子生徒の格好をした狐色短髪のウララくんであった。

「って、私も男になってるうううううううう?!」

「……。ウララ、何を言ってる、です?」

「う、ウララ、倒れたときに頭ごっちんってしちゃったのかなっ?」

「コイツがおかしいのはもともとよ」

ちなみに、そんな彼にホットな対応を示してくれたのは、アオイだ

けだったそうな。

第１６１回　反対日和

「……ん」

カーテンの隙間からやわらかな朝日が差し込み、ミントは温かな布団の中で目を覚ました。

「ふわぁ……」

靴を履いてベッドから離れて、クローゼットの前に移動したミントは欠伸をしながらパジャマを脱いでワイシャツとスカートを身につけた。

「……。……、……ん？」

そのまま自然な流れでローブをはおったミントは、はたととある異変に気が付いた。

「オレ、何スカートなんてはいてんだろ？」

ミント、素朴な疑問。

「……ぐぅ……」

「……すぅ……」

「……」

答えが返ってこないまま、穏やかな寝息が聞こえること十二秒。

寝呆け眼で見渡せば、やたらと少女趣味な内装と、ベッドで眠る綺麗な長髪の美少女が二人。

「って、えええええええええええええええ?!」

朝の静かな女子寮に、ミントの仰天ボイスがこだました。

パンケーキとイチゴパフェと紅茶を載せたお盆を手に、プリンとポトフ振り向いた。

「じゃァ、席探しとくねミント♪　行こ、お姉ちゃんっ」

「……ん。ミント、先行ってる……」

妙に可愛らしいメニューをお揃いでチョイスした二つ縛り元気っ娘ポトフと頭にでかいリボンをつけたお嬢様プリンは、仲良くカウンターから離れていった。

「……う、うん……」

性別もそうだが、いつもとは正反対でオープンに仲良しな友人に並々ならぬ違和感を抱きつつ、

（なんでこんなに長髪なのさオレ……？）

ミントは、自分の髪の長さに甚だ納得がいかないでいた。

（こんな前のプリン並に長いとか、帽子被ってる意味皆無だしって言うかよくここまで伸ばせたもんだよって言うかそのおかげで静電気炸裂だよって言うか）

友人を見送ったミントは、腰まで届く自分の髪にイライラしながら、

（〝あ、オレの髪って二つに縛るとき便利～♪〟とか本気で思っちゃった自分が許せないよオレのバカオレのバカオレのバカオレのバカあああああああ！！）

左右で色がくっきり違う為にきっちりと真ん中で分けられた二つ縛りの髪にしてしまい、彼女は激しく自己嫌悪していた。

ちなみに、カウンターの前でそんなことをしている彼女は、当然ながら敵意の的になっている。

「うにゃあぁぁあ……っ！！」

そのことに気付いていないのか、ミントは頭を抱えて奇声をあげている。

「グッモーニンっ」

と、そこへ、

「ミント～～～～～っ！」

金髪イケメンが、飛び込んできた。

「ふみゃあ?!」

猫のような奇声をあげていたミントは、猫のような情けない悲鳴をあげつつ、金髪イケメンとともに勢い良く床に体当たり。

「ったた……ごめんミント――……」

彼女にのしかかっている状態の彼が、ゆっくりと起き上がりながら謝ると、

「……にゃ？　――！」

ミントの猫化が治まった。

「も、もしかして……チロル？」

イケメンオーラを放ちまくっている彼に、確認するように尋ねるミント。

「……」

その問いに、何も答えずに彼女のライトグリーンの瞳を見つめるチロル。

「？　って、ああ！　ちょっと待って次はオレ――」

そんな彼に疑問符を浮かべた直後、いつぞやの時と同じように列を

詰められたミントが、いつぞやの時と同じようにチロルを退かそうとした。

「――!?」

が、しかし。

（う、動かない……っ?!）

男女の差が、彼女の前に大きく立ちはだかった。

「……ミント。俺、ぞくぞくしてきた……」

彼女の危機顔に構うことなく、チロルはいつぞやと同じ台詞を口にする。

「な、ななな、何言ってんのさチロル――……」

いやな予感をすぐさま肌で感じ取るミント。

ガッ!!

「――……っ?!」

瞬間、彼女の両腕は、彼の両手によって力強く塞がれた。

「……チロル”きゅん”、だろ?」

（え、この場合それオレが言うの?!）

なんて、呑気に突っ込んでいる場合ではない。

「……おバカさんには、お仕置きが必要だな？」

ふっと意地悪く素敵に微笑んだチロルは、ツッコミ中毒なミントにケダモノのごとく襲い掛かった。

「いっ、いやいやいやいや何考えてんのさチロルさん？」

「チロル”きゅん”だって言ってるだろ？」

「いやだからなんでオレが”きゅん”とか言わなあきまへんのん？」

「……ミント……」

「って、止まれ？！　何オレの疑問点を総無視されてんの！？　って言うか無理無理無理止まって止まってって言うかありえないって言うか止まれってば？！　くっ、意地でも止まらぬ気かっ？　やめておけ、さもなくばおぬしの大切な何かに禍が降り掛かるであろうて！！」

必死に抵抗するあまり、言葉がおかしくなっているミント。

「……煩い口だな？」

そんな彼女の口を、彼は自分の口を使って塞ごうとした。

「とうっ」

瞬間、チロルの大切な何かに禍が降り掛かった。

ドサリ

「さてと」

ドサリと地に伏してぐってりしている彼はほっといて、すっくと何事もなかったかのように立ち上がったミントは、

「どうしたもんかね、この状況？」

うーむ、と何故に性別が変わっているのかを考えだした。

「あ、コーラください」

目の前の惨劇に無意識のうちに身を退いた男子生徒たちの前に割り込んで、何食わぬ顔でコーラを注文しながら。

第１６２回　活躍日和

「はあ……」

中庭の木の下に座って、ミントは小さな溜め息をひとつ。

「プリンとポトフは仲良しだしココアとチロルはイケメンだしアロエはアセロラだしみんな性別逆転してるし……」

理由は、性別が逆転している現実と、

「……誰も相手にしてくれないし」

それについてまともに取り合ってくれる相手がいない現実に対して。

「……このまま戻らなかったらどうしよう……？」

見た目は女の子で中身は男の子なミントは、ネガティブオーラを放ちながら再び溜め息をついた。

「お困りのようだね、お嬢さん？」

すると、隣から低音ボイスが降ってきた。

「？」

それに反応して、ミントがしょげていた頭を持ち上げると、そこには緑色の長髪を毛先だけを纏めているなかなかの爽やかイケメンボーイが。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

さわさわと木の枝が風に揺れ、静かな時間が穏やかに流れた。

「ぁ。久しぶり、バジル」

「フハハ、今の長ーい間はなんだねお嬢さん？」

長ーい間を置いて久しぶりの挨拶をしたミントに、バジルは今にも泣きそうだ。

「って、バジル？！　なんでここにって言うかなんで男のままなのさ！？」

ガラスハートを華麗にスルーして、ミントは性別が逆転していない彼に疑問をぶつけた。

「なんでと言われても、私の方が驚きなのだが」

その問いに、バジルは肩をすくめてみせた後、

「ちなみに、目が覚めたら同室のアセロラ君がいなかったから探しに出かけて、気付いたらここにたどり着いたのさ！」

ぐっと親指を立てて、爽やかに答えた。

「そっか。分かんないか」

「あれ？！　スルー！？　君は確か炎のツッコミ役ではなかったかい？！」

「う～ん」

「ほら、なんでアセロラ君を探してたのに海を超えたんだーとか！　と言うか今自分でボケの説明しちゃったよ？！　これ一番寂しいパターンだよ！？」

ミントが突っ込まない為、急遽ツッコミ役になるバジル。

「……。……んんっ」

一通り突っ込んだ後、バジルは咳払いすると、

「……詰まり、目が覚めたら性別が逆転していたんだね？」

真面目に現状を確認した。

「うん。でもみんな聞いてくれなくて」

オレ頭よくないのに、と、ミントがほとほと困った表情で呟くと、

「私でよければ、協力するぞ？」

バジルはふわりと微笑んでそう言った。

「……！」

驚いたように顔を上げたミントは、彼の顔をまじまじと見つめ、

「バジルって、いいひとだったんだね……？！」

「フハハ、私は軽く傷ついたぞ？」

びっくりフェイスで発言すると、バジルは笑顔で傷ついた。

「ともかく現状の整理だ。学校の生徒全員に、しかも見た目だけではない完全な性別逆転魔法をかけたとなると、相当な魔力の保持者だ。しかしこの魔法を使える魔物はこの地域には存在しない筈で、これほどの魔力を持った魔物を国が放置するわけがない。とするとこれは強力な魔法使いが」

が、意外とタフだったバジルは顎に右手を当てて真剣に考え始めた。

「……」

そんなバジルを見て、

「……？　なんだい？」

「バジルって、意外とまともだったんだね？」

「フハハ、君は今まで私を一体なんだと思っていたんだい？」

「色ボケナルシス残念キャラ」

「……。も少しオブラートに包めなかったのかい？」

ミントは思ったことをそのまま発信し、バジルの心を深々と傷つけた。

「だってだって、たまにしか見ないし、その度にアホみたいなことして残念な結果に終わってるじゃん？」

「会ったときに思い出せなかったわりにはそういうことをバッチリ記憶しているのはどうしてだい？」

「それなのにスラスラスラーって解析しちゃって、なんかかっこいいじゃん！」

「か――」

「それでそれでっ？」

彼に尊敬の眼差しを向けつつ、ミントは立ち上がって話の続きを促した。

「……そうだね。ここからは私の仮説なんだが」

彼女から期待の眼差しを身に受けながら、バジルはすっと人差し指を立てた。

「その魔法使いは、お菓子が貰えなかったからいじけたのではないだろうか？」

その推測に、

「は？」

当然のごとく疑問符を浮かべるミント。

「ほら、昨日はハロウィンだっただろう？　だからお菓子が貰えなかった代わりにイタズラを仕掛けて」

別にふざけている様子がこれといってあるわけではなく、バジルは真剣な顔で言葉を続ける。

「いやいやいや、確かに昨日はハロウィンだったけどそんなわけ」

そんな彼に、お菓子が貰えなかったってだけで性別逆転魔法なんて超高度な呪魂魔法使うヤツなんて流石にいないだろう、と突っ込むミント。

「ぎっくり腰」

――が、

「？　ワタル？」

ぎっくり腰のごとくギクッとした死神が突然登場し、

「な、何故分かった?!」

バジルの推測が、現実のものとなった。

「って、ええ!?　ホントにお菓子が貰えなかったくらいで性別逆転魔法なんて超高度な呪魂魔法使っちゃったの?!」

「いかにも」

「無意味に偉そう!?」

「だってだってぇ、うららんがお菓子くれなかったんだモン」

「”モン”じゃねえよ?!　つか、ウララが原因ならオレたちの世界は関係なくね!?」

「は。うっかりんこー」

「”うっかりんこ”じゃねえええええ?!」

うっかりんこな死神に、ミントの制裁が下ったのは言うまでもなく。

「ふう、これで一件落着だな」

ミントにボッコボコにされた後、死神が魔法を解くと、バジルはふうと胸を撫で下ろした。

「フッフッフッ。オレ様の巧妙なトリックを見破るとは、なかなかやるな、緑少年」

すると、ボロボロなのにきりりとカッコつけて死神が彼を讃えた。

「フハハ！　なあに、私にかかればこの程度の謎などおちゃのこさいさいといったところだよ」

そんな彼に、バジルはすっと右手を差し出した。

「それに、私は緑少年ではない。バジルだ」

「！　……そうか。では改めて、なかなかやるな」

その手をしっかりと握り返し、死神はバジルを真っ直ぐに見た。

「ばじりこ」

という、ニックネームを添えて。

「友情を深めてるとこ悪いんだけどさ」

「「？」」

キラキラとした友情が生まれた二人の間に、ミントの声が割って入ってきた。

「なんでオレだけ戻ってないの？」

ミント、素朴な疑問。

「うっかりんこー」

死神、うっかりんこ。

「フハハ！　いいじゃないか、そのままで」

バジル、めろりんこ。

「……」

「……」

「……」

「……は？」

たっぷりと間を置いて、ミントが疑問を顕にすると、

「どうやら私は、ミント嬢に恋をしてしまったようだ……！」

バジルは、ときめく胸に手を当てながらそう言った。

「……」

「……」

「……」

静寂。

「おお。ひゅーひゅー」

死神、古い。

「はあああああああ?!」

「私のこの気持ちを受け止めてくれるかい、ミント嬢!」

「ふざけんなこの色ボケそして早く元に戻せボケボケえええええ!?」

色ボケ（バジル）とボケボケ（死神）に振り回され、ミントが無事に男の子に戻ったのは、その翌日のことだったそうな。

第１６２回　活躍日和（後書き）

ウララ
「っえ、終わり?!　私たちのくだりはなんだったの!?」

死神
「フッフッフッ。ただの問題提起といったところだ」

ちゃんちゃん。

第１６３回　雑談日和

ムスッとした表情で座っているポトフに、

「ったく、もう……」

ミントは呆れたように溜め息をついた。

「プリンもプリンだけど、ポトフもポトフだよ？」

兄弟喧嘩でズタズタに切り裂かれた彼に、すり潰した薬草をつけながら。

「ったァ？！」

「これに懲りたら、もうそんな兄弟喧嘩なんてほのぼのした語句で片付けられないような流血沙汰の喧嘩はしないことだね」

切り傷に相当しみたのか、思わず声を上げた彼にそう言った後、

「ってか、回復魔法が使えなくなるくらい張り切って喧嘩しちゃったわけ？」

ミントは疑問符を浮かべて尋ねた。

「……いや使えるけど」

「いや使えるのかよ」

ぼそっと返ってきた答えに、じゃあ今のオレの頑張りはなんだ、とミントは乳鉢の中身をわしっと掴んでポトフの顔面に投げつけた。

「ったァァァァァ?!」

「夜に大声出さない」

「ミントヒドイ!!」

「読みにくい。って言うかなんで使えんなら回復魔法使わんのさ?」

どばっとかかった最高にしみる傷薬に悲鳴をあげたポトフは、

「だって、なんか喧嘩して回復魔法使ったら負けな気がするだろォ?」

と、答えた。

「まったくもって無駄な男気だね」

そんな彼の解答をばっさり切り捨てた後、

「無駄――……」

「はあ……昨日はあんなに仲良しだったのに」

「――……昨日?」

ミントが再び溜め息をつくと、今度はポトフが疑問符を浮かべた。

「あ、覚えてないか。昨日はワタルのせいで学校中が性別逆転魔法にかかっちゃって大変だったんだよ？」

その様子を見て、ミントは大まかに昨日の出来事を彼に話した。

「朝起きたら女の子になっててポトフとプリンは仲良しでなんか朝っぱらからパンケーキとイチゴパフェとか甘ったるいもの頼んでて性別逆転魔法の相談してもポトフは”それよりココアくんがね～♪”とか言ってオレの話ガン無視するしプリンは眠ったまま歩きだしてなんか危ないお兄さんたちにつれていかれそうになるしで全然話にならないし連れ戻したら連れ戻したでポトフにのろけ話の続きを延々と聞かされるしプリンはまた寝ながらふらふら歩きだすしもう一回連れ戻したら連れ戻」

主に、愚痴を。

「……た、大変だったんだなァ？」

記憶がない以上、それ以外の感想を述べられないポトフ。

「ホントだよ」

「ったァ！？」

怒りをぶつけるように傷薬をつけたミントは、

「我慢しなさい。つか、二ヶ月の苦しみを耐えぬいたキミが何言ってんのさ？」

呆れたように溜め息をつきながら質問した。

「はェ？」

ので、ポトフはそれを疑問符で返した。

「いや蝿じゃなくて。ポトフ、入学したときから二ヶ月くらい地下を彷徨ってたんでしょ？」

回復魔法は使えるらしいが、ここまできたら最後まで傷薬つけてやる、と傷薬を付け終えたミントが顔を上げると、

「……。ミントって、本気でピュアなんだな？」

ポトフはおめめをパチクリさせていた。

「へ？」

その反応に、素で疑問符を浮かべるミント。

「え、あれ、冗談だったの？」

問うと、当然のごとく頷いた彼を見て、

「ええ？！　壁を食べて二ヶ月生き延びたんじゃなかったの！？」

「えェ！？　俺そんなこと言ったっけ？！」

ミントとポトフは、互いの衝撃的事実に驚いた。

「え？　え？　じゃあ、二ヶ月ちかくどうしてたのさ？」

言った言った、と肯定しながら、ミントが空白の二ヶ月間に何をしていたのか尋ねた。

「え？　おにぃさんがご兄弟にとんでもない誤解されてるって聞いたから、その誤解を解きに異世界に行って。そしたらおにぃさんのおねぇさんからなんか流れで温泉旅行に誘われて」

それで帰ってきたら二ヶ月遅刻してたんだぜ？　とポトフは頭を弱く掻きながら答えた。

「ええ？　じゃあ、なんでそう言わなかったのさ？」

誤解ってあれか、”二次元に逃げた”ってやつか、とか思いながらミントが聞くと、ポトフは真面目な顔でこう言った。

「だって、初対面で”異世界に行ってました☆”なんて言ったら、頭が残念な人に思われちゃうだろォ？」

正論。

「いや、壁食ってた方が頭が残念な方に思われちゃうかと」

ご尤。

「えええ？　じゃあポトフの武勇伝一個消えたよ？」

「いやむしろ消えてくれてありがたいけど……俺の武勇伝て、他にどんなんがあるんだァ？」

「プリンとの喧嘩でことごとく負けたとかクサイ台詞連発したとか雪食べたとか鹿と女子生徒狩りしたとか?」

「あっはっはっ、武勇伝なのに全部聞こえが悪ィのはなんでだ?」

若干の刺と毒を交えつつ楽しく会話するミントとポトフ。

ポトフの空白の二ヶ月間の謎が解けた秋の夜の、プリンがお風呂に入っている間の一時のことであった。

第１６４回　図書室日和

分厚い本をぱたんと閉じると、

「終わった？」

「！」

背後からミントの声が聞こえてきた為、プリンはパッと振り向いた。

「ぴわわ……ごめん、ミントっ」

気付けば夕陽でオレンジ色に染まった図書室で、彼は読み耽ってしまったことを謝った。

「いやいや、プリンは凄いよねぇ？　オレなんて一冊の途中で挫折したのに」

すると、当初の目的である古びた分厚い本を脇に置き、代わりに趣味全開の植物図鑑を眺めていたミントがすっと指差した。

「こんなに読み終わるまで集中できるなんて」

プリンのテーブルの上に築かれた、分厚い本の山を。

「ううむ、凄くない。言葉の呪いの解き方、結局分からなかった」

それを首を横に振って否定するプリン。

「いやいや、凄いって。だってプリン、本を読んでる間は何しても反応しないんだもん。呼んでも揺らしても叩いても引っ張っても首を絞めても」

「む？　そんなことをされ――首を絞めても？！」

「生命の危機すら無視するなんて、半端ない集中力だよねぇ」

「しかも殺す勢いで絞めたのかっ！？」

などと、珍しくプリンが突っ込んでいると、

「でもそれだけ読んで見付からないなんて、言葉の呪いってのは相当凄い魔法なんだねぇ」

彼の突っ込みを聞いて何故か満足気なミントは、さり気なく首を絞めた話をうやむやにした。

「前に呪魂魔法が得意らしいバニラに聞いてみたんだけど、”かける専門”、って一言で片付けられちゃったし」

次期王女が呪魂魔法かけるのが専門ってどうなんだ、とか思いながら、ミントはやれやれと溜め息をつく。

「……」

しかし、そんな急遽本題に戻した話で誤魔化される彼ではなく、

「えいっ」

プリン、ささやかな逆襲。

「った!?」

ぷちっと髪の毛一本を引っこ抜かれ、ミントは地味なダメージを受けた。

「ご、ごめんってば」

「ふふふ、許す」

一言謝ると、あっさりと許した彼。

「……。ポトフの時とはえらい違いだね?」

首を思い切り絞めた罰として髪の毛一本抜くというなんとも不釣り合いな刑に、ミントはぽかんとした顔になった。

「む? ミントに”かまいたち”なんてやるわけないだろう?」

すると、プリンは当然のことのようにそう返した。

「あ、”かまいたち”で思い出したんだけど、あれって凄い魔法だよね?」

ポトフだったら”かまいたち”なんて大業使うのか、と、若干顔を引きつらせるミント。

「む? ……ああ、学園祭の時の?」

”かまいたち”使用の記憶をめぐらせ、プリンが小首を傾げると、

「や、あれも凄かったけどさ。この前プリンが取り付かれてる時に使ったのを見て。厚さ一メートルくらいの氷の壁をスパーって斬っちゃってたから、もし学園祭で本気出されてたらオレ死んでたな～とか思って」

ミントは、ほのぼのと笑いながらゾッとした。

「な――ぼ、僕がミントを殺すわけないっ！　それに、流石に学園祭で死者を出すほど先生も考えなしではないだろう？」

その気になれば鉄筋コンクリートづくりな学校の壁もストンな切れ味をもつ風の刃がミントを襲うところを想像してしまい、プリンもつられてゾッとした。

「あは、そだね。……あ、だからジャッジがセル先生だったのか」

魔法は使い方次第で殺人兵器。

それをぶつけ合って戦う学園祭のジャッジを務めていたセル先生を思い出し、ミントはふと口にした。

「む？」

彼の言葉に、プリンが疑問符を浮かべると、

「セル先生って、回復魔法が得意で、防御魔法にも長けてるんだって」

ミントは、医務室でベル先生に教えてもらったいつぞやの情報を伝

えた。

「む、そうなのか？」

「そうそう。それにね、ルゥ様が言ってたんだけど」

意外そうな顔をしたプリンに、ミントは意外情報を付け足した。

「セル先生、身分違いだったクー先生を追って、愛ゆえに家出したんだって」

「ミント＝ブライト」

すると登場、セル先生。

「うわはっ？！　せ、せせセル先生っ！？」

突然の声にびっくらこいて振り向くと、

「その話、ルクレツィア＝シャイアルクから聞いたんだな？」

泣く子も黙る鬼の形相。

「え……あ、ははははいぃっ！！」

冷や汗を滝のように流しながら、ミントはぶんぶん頷いた。

「そうか。悪い。邪魔したな」

それを見て、セル先生は首と右肩の骨を鳴らしながら図書室を出て

いった。

「ちなみに」

「「っ？！」」

と思いきや、彼は突然立ち止まり、首が回る分だけ振り向いた。

「他言無用だ。ブライト、アラモード」

「「は、はいぃっ！！」」

今度こそ図書室から去っていったセル先生。

捉え方によれば、ミントとプリンは彼の弱味を握ったも同然なのだが、この場合は少し違う。

「……る……ルゥ様、ごめんなさい……っ」

何故ならば、

「うっ、うむ。ご愁傷さま……」

口にしようものなら、この国の国王と同じ末路を辿ることになるのだから。

――その夜、シャイアに悲鳴がこだました。

第１６５回　観賞日和

駅から学校にかけて広がる広大な森の中で、ミントは目に涙を浮かべてこう叫んだ。

「ピョーーーーーー！！」

彼がこのように叫んだのは、別に彼の頭やテンション等がおめでたいことになったからではない。

「み……ミント……？」

しかし、そうは思わなかったココア。

彼女は、なんの前触れもなく顔面蒼白になってボリューム最大で奇声を発した彼にどん引きした。

「ああ……あぁあぁぁあ」

「！？　ミントー？！」

奇声の直後、恐る恐る振り向いてミントを見ると、彼はガクガクと震えだしていた。

「どっ、どうしたのミントー？！　進化！？　進化するのー？！」

流石にただごとではないと思ったココアは、慌てるあまりにわけの分からないことを口にした。

すると、

「ココアのバカぁっ！！」

と、ミントが怒鳴った。

「え？　私ミントより五十位上だよー？」

すると、ココアのインテリ発言が返ってきた。

「ちっがう！！　いや確かにそれは事実で中間テストでココアは三位でオレは五十三位だったけどちっがう！！」

彼女の言葉を事実として素直に認めた後、ミントはココアの足元をズビシッと指差した。

「？」

それに従い、ココアが下を向くと、

「あ、やだ靴ひもほどけてるー。ありがとミントー」

彼女は、靴ひもがほどけていることに気が付いた。

「ちっがあああう！！」

すると炸裂ミントの突っ込み。

「え、違うのー？」

「て言うかそれ見て”ピョーーー”て叫ばないよ変人かオレはああ？！」

「え、違うのー？」

「二度同じことをしかも違う意味合いで言うなあああ！！」

きょとん顔の彼女に頭を抱えながらミントは突っ込みを入れた後、

「足！　その足の下！」

「え？　やだ、ミント靴裏マニアー？」

「んっだそのオレの常識の範疇にない愛好家はぁ？！　オレはその右足を上げろって言ってんの！！」

更に突っ込みを上乗せすることで、ようやくココアの右足を地面から離すことができた。

「へ？」

彼の言う通り、ココアが右足を上げたついでに後ろへ一歩下がると、

「ピョウ！！」

ミントは、その場所に咲いていた小さな青紫色の花の近くで膝をついた。

「あ。私それ踏んでたのー？」

「そうだよ！　ココアは今ピョウをっ！　正式名称プリパピピルプルプンピョウをがっつり踏んでたんだよ！！」

「……えらく半濁音が多い花だねー？」

それでやっと、自分が花を踏んでいたことに気付いたココア。

「珍しい花なのー？」

彼女は、彼が急いで自身の樹の魔力を注ぎ込んで回復させた花を見て小首を傾げた。

「珍しいも何も、万能薬ゆえに絶滅危惧種で、これを置いてる数少ない薬草店でも取り敢えず他の薬草とは桁外れに高いとんでもなく貴重な植物だよ？」

元通りに美しく咲き誇ったピョウにホッと胸を撫で下ろしながら、ミントは彼女にそう教えた。

「絶滅――？！」

「それをたった今キミは絶命させようと」

「ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！」

彼の言葉に、青くなったココアは慌ててピョウに謝った。

「でもまあ無事だったし」

その謝罪をピョウの代わりに寛大に許したミントは、

「オレも初めて本物見れたし♪」

うっとり顔でピョウの前に座り込んだ。

（ちょ、長時間モード……）

花を観賞する為に体操座りをした彼の体勢を見て、ココアは勝手に命名した。

「ミントは植物が好きだねー？」

「うん♪」

こうなったら彼はしばらく動かない為、仕方なしに座るついでに靴ひもを結びだしたココア。

「でもそんな珍しい花が学校の森に咲いてるなんてねー？」

「うん」

「この森のこんな奥の方まできたことなかったもんねー？」

「うん」

「クー先生の言ってた薬草見つからないねー？」

「うん」

といった調子で、聞いてるか聞いていないか分からない会話を続けるココア。

「プリンとポトフは仲良くしてるかなー？」

「どうだろね」

あっ、ちゃんと聞いてたんだ、とココアはちょこっと驚いた。

「ケンカとかしてないかなー？」

「してそうだね」

「昨日もケンカしてたもんねー。なんであんなケンカ好きかなー？」

「兄弟だからじゃない？」

オレは一人っ子だから分かんないけど、とミントが返すと、

「兄弟ゲンカなら、普通一撃で終わらせると思うんだけどー？」

ココアが物騒なことを口にした。

「や、それはココアのみの常識だと思うよ？」

それゆえ、ミントはピョウを眺めたままながらに突っ込みを入れた。

「えー？　でもそーでもしないと、お風呂とかお布団の中まで入ってくるかもなんだよー？」

「それはもはや犯罪ですよお兄さん」

後、ここにはいないココアのお兄さんにも突っ込みを入れた。

「だから一撃で片付けないとねー」

「あは、今度プリンとポトフに教えてあげたるといいよ」

お兄さんを一撃で片付けられるココアに恐怖を覚えつつ、ミントが言うと、

「あ、そー言えば、なんで二人はケンカしてるのかなー？」

ココアは思い出したように疑問を抱いた。

「プリンがポトフのお風呂とかお布団の中まで入ってくるかもなのー？」

「それ絶対にプリンの前で絶対に言わないでね？」

とんでもない言葉を発した彼女に、ミントはさらりと注意した。

「て言うか全国のお兄さん方に謝りなさい」

「ごめんなさーい」

謝りながら、やっぱうちは特殊なんだー、と実感させられたココア。

「それに、昨日喧嘩してたのは、午前中の野外授業のペアがプリンとココアだったからだよ」

お兄さんの全部が全部そうであってたまるか、とミントは理由を教えてあげた。

「なっ?!　別にいちゃついてないよー!?」

するとすぐさま返ってくる反論。

「まぁ、なんでもココアのお母さんに”ココア好みのイケメン”なんて言われたらしいから?　ポトフは双子のお兄さんのプリンを警戒してるんじゃない?」

バッとこちらを向いたココアにそう言ったミントは、相変わらずピョウを眺めている。

「……何それー?　信用ないなー。あっちの方がぜんっぜん信用できないってゆーのー」

あんなに女の子いっぱいつれてて、とココアがぷうっと膨れると、

「あはは、確かにね」

ミントは笑いながら、ようやく長時間モードを解除した。

「でも、あんなにたくさん連れてたのは、何もできないようにする為だって」

「?　何もできないー?」

同じく立ち上がったココアは、ローブについた汚れを払いながら聞き返した。

「ポトフ、エリアさんの影響で純情乙女な恋愛ものの主人公の思考

を植え付けられちゃってるからさ。だから」

すると、ミントはニヤリと笑って言葉を繋げた。

「初めてのちゅーは、一番好きなひとと♪」

と。

「え――？」

その言葉に、ココアは顔を赤くした。

「――……あっ、で、でもっ、それってウソじゃないー？」

後、はっと何かを思い出してそう続けた。

「？　どうして？」

「だ、だって少なくとも」

そのように思った理由をミントが尋ねると、ココアは真剣な顔でこう言った。

「ポトフ、プリンとちゅーしてたもん！」

ガシャーン！！

――直後、ガラスが割れた音がした。

「え……？」

と、ココアが振り向くと、

「……」

「……」

そこには、薬草回収用のガラスケースを取り落としたプリンとポトフが、いつの間にやら立っていた。

「あ」

「あ～あ」

なきものとして封印してきた記憶の扉が、今、古めかしい音を立てて開け放たれた。

「お……っ俺の唇を返せ枕ァァァ！！」

「気持ちの悪いことを言うな馬鹿！！」

ドカアアアアアン！！

今日も今日とて仲良く喧嘩するポトフとプリンと、

「え？　ってことは、本当にー……？」

「喧嘩するのは別に構わないけど、少しでもピョウを傷付けたら血祭りにあげるからね♪」

顔を朱に染め上げるココアと、にっこりと笑いながら忠告するミントであった。

第１６６回　笑顔日和

今年一年の最後の月とともにやってくるのは、闇と光で彩られた聖なるイベント。

「でェ、ここを微分して」

と、定期テスト。

「っにゃあああああ！！」

軽快なクリスマスソングが流れる食堂で、ミントは頭を抱えて盛大に叫んだ。

「なーにーがー楽しいクリスマスやねん?！　オレ毎年イヴからクリスマス当日にかけて何やらもてはやされるけど全然嬉しくないっちゅーねん！！　しかもクリスマス過ぎると”いつまでやってんの？”的な目でみられるし！！　いやこれクリスマスで羽目外しちゃった結果生まれた残念な産物じゃなくて自毛だっつーの！！」

と、ミントがキシャーっと叫んだところ、

「クリスマスをけなしても数学のテストはなくならねェぞミントォ？」

彼に数学を教えていたポトフにさらりと突っ込みを入れられた。

「だってさだってさ？　だいたいクリスマスなんて外国のイベントじゃん？　それに何調子こいて便乗しちゃってんの？　って感じじ

ゃない？　つかむしろクリスマスって何なのさ？　外国の神様のお誕生日会して何が楽しいのさ？」

「はい、部分積分法を言ってみょォ」

「ポトフヒドイ！！」

「読みにくい」

などと、ミントとポトフの立場がいつもと逆転している様子を、

「毎回恒例だねー」

「うむ。そうだな」

ココアとプリンはココアとプリンをいただきながら眺めていた。

「……。クリスマスは、外国の神様のお誕生日会だったのか？」

カスタードプリンをスプーンですくいながら、プリンが初めて知ったように呟くと、

「まー、私も詳しくは知らないんだけどー。世間一般的にはこの世界の創造主が誕生した日ーとか言われてるねー」

ココアの入ったマグカップで両手を温めながらココアが説明した。

「ふむ。では、ジェラート社がケーキの売り上げを上げる為に始めたというのは冗談だったのか」

「うん。あんま夢をぶち壊すような発言は慎もうねー？」

するとプリンが素で裏情報をちらつかせたので、ココアは爽やかに注意した。

（つか、バレンタインもそうじゃなかったっけー？）

注意すると同時に、ジェラート社の陰謀に思わず顔が引きつるココア。

「ケーキを高値で売る為ではないとすると、クリスマスは具体的に何をする日なんだ？」

そんな彼女に、プリンは純粋な疑問を発信した。

「……。クリスマスってのは、……まー、お祝いだからご馳走やケーキを食べたりプレゼントを渡したり貰ったりして楽しむ日かなー？」

図らずも利潤上等なプリンの問いに、ココアは苦笑いを浮かべてそう答えた。

「あ、それとホラ、サンタさんがプレゼントをくれる日とか、そんなイメージだよねー？」

後、夢のある発言を敢えてした。

「……？　サンタさん？」

が、しかし、プリンは疑問符を浮かべながら小首を傾げた。

「え？　サンタさんを知らないのー？」

「うむ。どちら様だ？」

サンタさんを知らないことに、ココアは意外だと驚いた。

（あのプリンパパなら張り切ってプレゼントすると思ったのにー）

あの、プリン大好きなプリンパパだけに。

「えと、クリスマスの朝起きたら枕元にプレゼントが置いてあったーなんてことは一度もなかったのー？」

不思議に思ったココアが、夢と希望に満ちあふれた質問をしてみると、

「……？　うむ。僕の部屋のセキュリティは万全だからな」

人の侵入は勿論、魔法対策も完璧だぞ、と、夢も希望もあったもんじゃない答えが返ってきた。

「え、えーと……じゃ、じゃー、お父さんかお母さんからクリスマスプレゼントをもらったーとかはー？」

サンタさんがプレゼントを置きに入ろうものなら警報が鳴っちゃうのか、とか思いながら、ココアは更に質問する。

「うむ。ないぞ」

すると、プリンはこくりと頷いた。

「え」

「父と母は基本仕事で忙しいからな。だから、家にいてもほとんど会わない」

ココアの聞き返しと、

「それ、お前が小さかった時もかァ……？」

「うむ。昔からずっとだ」

何気に話を聞いていたポトフの問いに、さも当然のようにさらさらと答えるプリン。

「え……じゃあ、プリン、ずっと一人でお留守番してたの？」

というミントの問いに、

「うむ」

プリンは再びこくりと頷いた後、昔を思い返した。

「でも、留守番の間一人で暇だったから、父の書斎にあった本を読みあさって」

それは、彼が文字を読めるようになった時から始まった、

「その中のいくつかの本に書いてあったことしかやらない保育所も

初等学校も中等学校も、詰まらないから眠っていて」

小さい頃の、淋しかった記憶。

「そのせいで周りから遠ざけられて、トモダチが一人もいなくて」

相変わらずさらさらと自分の過去をかなり簡単にまとめあげたプリンは、同じテーブルに座るミントとポトフとココアを見て、ふっとやわらかく微笑んだ。

「だから僕は、トモダチがいる今が一番好き」

もう、淋しくないから。

――初めて聞いた、幸せな想像とは全く違った人生を送ってきた大企業の御曹司の物語。

その後の素敵な笑顔に、彼の友人たちは胸を詰まらせた。

「「――……っ、プリンっ！」」

「枕っ！」

「？」

数秒の間を置いた後、三人はそれぞれガシッと彼の両手と肩を掴み、

「「今年はいいクリスマスにしよう！！」」

と、目に涙を浮かべつつ約束した。

「ふふふ、うむ。約束」

そうして、彼らに温かな笑顔が広がった。
――風も少なくよく晴れた日の、穏やかな午後のことであった。

第１６６回　笑顔日和（後書き）

以上、最近の某フライドチキンのＣＭを見てふと浮かんだお話でした！。↑

第１６７回　出題日和

筆記試験が終わって実技試験。
毎度のごとくワープさせられた彼らは、珍しいところにやってきていた。

「わあ……！」

そこは、薬草学と植物学の併用の教室。
ガラス張りの大きなハウスの中の、様々な種類の薬草が育てられている薬草園であった。

「む？　ここは？」

「なんだか不思議なにおいがするねー」

「珍しく森じゃねェのな」

と、言うからには、

「薬草園だよ！」

一番喜んでいるのは、瞳をきらきらに輝かせているミントなわけで。

「「薬草園？」」

「そう！　オレも植物学でまだ一回しか来たことなかったんだけどさ」

友人たちの聞き返しに、辺りをきょろきょろ見渡したりパタパタ行ったり来たりしながら、ミントはそう教えた。

「……。嬉しそうだねー」

「だなァ」

「うむ」

わーとか言いながらあちこち見て回っているミントをほのぼのと眺めつつ、

「ふむ、今回の課題はなんだろうな？」

「さー？　魔物を倒すとかではなさそうだけどー」

「まァ、ここに来たってことは、薬草に関係したことなんじゃねェ？」

プリンとココアとポトフは、課題について考えた。

「む。それなら」

「今回は楽勝だねー」

「そォだなァ」

ポトフの言葉を受けて、彼らは、再びミントに目を向けた。

「「こっちにはミント――が？！」」

――瞬間、彼らは驚きに目を見開いた。

「「ふ」」

何故ならば、植物に夢中になっている彼らの友人の背後に、

「「不思議仮面っ！？」」

いつぞやの、謎の悪役が立っていたから。

「？　なんか言っ」

遠くから聞こえた気がした友人の声に反応し、ミントが後ろを振り向くと、

「た」

彼は、不思議仮面と再会した。

「……」

「……」

紫色の仮面で鼻から上を隠しているものの、黒が似合う銀髪長身の細身な彼はやっぱり、

「セ」

「不思議仮面だ」

セから先は断じて言わせない不思議仮面。

「み、ミントっ！」

「一旦逃げてー！」

「びよレンジャーに変身だぜェ！」

苦ーく笑ったミントに追い打ちをかけるように、彼の耳に友人たちの声が届く。

「「打倒！　不思議仮面っ！」」

「だからなんで気付かないのさ、みんな？」

不思議仮面を謎の悪役だと信じて疑わない学年トップの成績を誇る彼らが、甚だ疑問であるミント。

「ったく、何をもってセ」

「不思議仮面だ」

「を認識してるんだか」

どんな小さな呟きも見逃さない不思議仮面。

「……」

（まあ、確かに授業中と比べたらキャラ違いすぎだけど？　でも、

あの悪戯好きなルゥ様のオリジナルなんだよ？　ついでにルゥ様と同じでお子様メニュー大好きなんだよ？　こないだなんてアレだよ？　食堂の隅っこで国旗が刺さってるハンバーグとエビフライがついたスパゲティセットをニコニコしながら食べて）

「ミント＝ブライト」

ミントの思考を遮るように、心なしか顔の赤い不思議仮面が口を開いた。

「……コーラやるから黙っていろ」

不思議仮面、贈賄の疑い。

「合点承知です不思議仮面！」

ミント、収賄の疑い。

「いただきま～す♪」

彼がどちらについて黙っていろと言ったのかは定かではないが、ミントはいただいたコーラをありがたく一気飲みした。

「？！　ミント！？」

「知らない人からコーラもらっちゃダメだよー！？」

「ミント、ぺってしろ、ぺって！」

その光景を見て、プリンとココアとポトフは慌てて叫んだ。

「――っ!?」

からんっ

が、時すでに遅く。
ついつい一気に飲み干してしまったミントの手から、空のコーラのビンが滑り落ち、

ドサッ……

ミントはその場に倒れこんだ。
超即効性である。

「「――!?　み、ミント?!」」

「ふっ、ブライトには毒を飲ませた」

「「な、何っ?!」」

「なんですとー!?」

不思議仮面の言葉に、三人の友人は衝撃を受けて思わず仰け反り、

「お前たちの課題は、この薬草園の中から解毒薬を見付けることだ。
ここから外に出る必要はないぞ。危ないからな」

謎の悪役は、マントを翻すと同時にかっこよく消え去った。

「「し」」

そんな彼を見て、三人は取り敢えず一言。

「「親切……っ！」」

ですね。

第１６８回　薬草日和（前書き）

後書きにお知らせがあります。

第１６８回　薬草日和

親切ながらも悪役らしい仕事をしっかりやっていった不思議仮面が消え去った後、

「脈も問題ねェし……呼吸も、正常だな」

倒れたミントの状態を確認したポトフは、ゆっくりと彼から離れた。

「「本当っ？！」」

「おォ」

彼の言葉に、ひとまずは胸を撫で下ろしたココアとプリンは、

「じゃ、なんでミントは倒れたのー？」

「ミントはなんの毒を飲まされたんだっ？」

再びポトフに質問した。

「そ、それは……」

と、そこで口ごもったポトフ。

「えええ、分からないのー？！」

「き、貴様医者志望だろうっ！？」

すると、ココアとプリンが再び慌てだした。

「っせェな、あくまでも志望だ！　んな魔医学を二年習ったくらいで医者と同じことが出来てたまるか！」

「開き直るな馬鹿！　ミントは毒を飲まされたんだぞ!?　薬草で解毒しようにもその原因が分からなければ出来ないだろう?!」

「だからその原因の原因が分からねェんだよ！　経口摂取した毒ってのはだいたいが生体内で消化されて反応が起こって初めて効果が出るもんだろ?!　こんな飲んだ瞬間ぶっ倒れるよォな超速効性な毒は知らねェんだよ!」

「……。なら、毒を飲まされたわけではないのかもしれないな」

「だァら――……っへ?!　あ、そっ、そォだな?」

ヒートアップした会話の中でプリンが急にクールダウンした為、ポトフは自分に急ブレーキをかけた。

「え?　でも、不思議仮面は”毒を飲ませた”って言ってたよー?」

急ブレーキで前のめりになっているポトフをよそに、疑問符を浮かべるココア。

「ふむ……。飲ませなければならない毒で、消化吸収されるような毒でないとしたら……」

プリンは口元に手を当てて思考をめぐらせ、すぐに一つの答えに結び付けた。

「……惚れ薬――……」

と。

「えええ?!　ちょっと待ってよあの声の低さと体型はどう考えたって男の人な上にたぶん歳も親並みに離れてるでしょー!?」

「お、おおおい、そしたらアレか?!　もし課題がクリアできなかったらミントはあの不思議仮面に死ぬほどめろりんこなままなのかァ!?」

その予想だにしなかった単語に、ココアとポトフはサアッと顔を青くした。

「いやー?!　そしたら本気で今後の友達付き合い考えちゃうよー!?」

「嫌だ!　俺はそんなミントなんか絶対に見たくねェ!!」

「――……に、似たようなもの?」

「「て、人騒がせ?!」」

ぴこっと小首を傾げたプリンに、ココアとポトフの突っ込みが綺麗に決まったところで、

「ミント、ミント」

おもむろにしゃがんだプリンは、倒れたまま動いていないミントを

揺らしてみた。

「ミント、起きて」

（（なんか新鮮……））

ミントを起こすプリンの図に、新鮮さを覚えるココアとポトフ。

「……」

しかし、ミントはまったく反応しない。

「……。……めんどくさい」

「「！」」

と、思いきや、うっすらと目を開けた彼がボソッと一言そう呟いた。

「うむ。分かった」

それを聞いたプリンは立ち上がり、期待の眼差しを向けている二人の友人に向き直った。

「〝めんどくさい薬〟だ」

「「そのまんま?!」」

自信たっぷりにそう言った彼に、ココアとポトフは再び突っ込みをいれた。

「えいっ」

そんな突っ込みを華麗にスルーして、迷うことなく近くにあった薬草をぷちっとちぎったプリンは、

ぺちっ

と、ミントのおでこに薬草を載せた。

「……」

「……」

「……」

「……」

そのまま、数分の時が流れた。

「……。それ、効果あんのか？」

沈黙に負けたポトフが、それ以上は何をするでもなくミントをただじっと眺めているプリンに質問すると、

「……。かぶれた」

彼は、さらりとそう答えた。

「ってアホかァァァ？！」

「ぷわぁ！？」

直後、プリンはポトフによってサッカーボールのごとく蹴飛ばされた。

「ったく何無駄なことしてんだよ、トリート！」

ミントのおでこに出来たかゆそうな湿疹を治してあげるポトフ。

「もー、迷うことなく処方したからそれが薬だと思っちゃったじゃなーい！」

プリンはなんでも知ってるんだと感心して損したココア。

「まったくだぜ、あんななんの躊躇もなく！！」

彼女に続いて、ポトフが言うと、

「馬鹿か貴様は？　薬草は僕の専門外だ」

しれっとプリンが言い放った。

「じゃァなんで迷いなくこれをミントのおでこに載せたんだよ？！」

「なんとなく」

「ミント、ミントー！」

「ざっけんな！！　薬と毒は紙一重なんだぞテメェ何の為の天才設定だよホント使えねぇな？！」

「ぼ、僕は天才じゃない！　と言うか、設定ってなんだ!?　しかも毒の種類も分からなかった医者志望の貴様にそんなこと言われたくない！　使えないのは貴様だろう?!」

「ミント、起きてよー！」

「だァらあくまでも志望だって言ってんだろォって言うか貴様貴様言うな!!」

「貴様ごときに”貴ぶ（たっと）”と”様”をつけているんだ最高の敬称だろう!!」

「ミントー！」

「え、そっか」

「馬鹿か貴様は?!」

「ミントがいないとすぐ話題が逸れちゃうよー！」

そんなこんなで、ミントの解毒が済むのには、もうしばらくの時間を必要としたのであった。

第１６８回　薬草日和（後書き）

皆様こんにちは。
学生の方はもう冬休みですね。
かくいう私も学生なのですが、ここで皆様にお知らせがあります。

大学の定期試験の一ヶ月前につき、勝手ながら試験終了まで休載させていただきます。

多少なりとも学校日和を楽しみにしてくださった方には本当に申し訳なく、その上、今年の夏に同じことをして読者様がごっそり減ってしまった現実があるので本当はこのようなことはしたくないのですが、ここは趣味と現実の差で……。

留年したくないんです（切実）

というわけでして、誠に申し訳ないのですが、休載させていただきますね。

もしも待っていてくださるのであれば、来年の二月には必ず……！

ではでは少し早いですが、よいお年をお迎えくださいませ！

第１６９回　解毒日和

今回の課題は楽勝。
なんたって自分たちには、植物に詳しいミントがついているのだ。
――そんなことを思っていた矢先に、そのミントが倒れてさあ大変。

「……めんどくさい」

としか、何を言っても口にしないミント。
今の彼は、ツッコミさえも完全に放棄していた。

「むう……」

「うーん……」

「えェとォ……」

いくら頭がいいと言っても専門外の知識はほとんどない。
授業で習った簡単な薬草以外はさっぱりな三人は、更に未知の魔法薬、めんどくさい薬にも頭を抱えていた。

「……あ！　何も薬草で解毒しなくても、めんどくさいとか言ってられねェ状況にすればいいんじゃねェか？」

停滞した状況からまず初めに一歩踏み出したのは、ポトフ。

「む。なるほど」

「そーだねー。でも、血反吐はいてまで入れてたツッコミも入れな

くなっちゃったんだよー？」

彼の提案に、プリンとココアが顔を上げると、

「そりゃァ、ここはココアちゃんがチロルちゃんに変身して♪」

ポトフの、チロルちゃん大作戦。

「えぇ！？　私がチロルのマネをするのー？！」

「だって」

自分はあんなキャラじゃないと拒否反応を示したココアに、

「――俺だったら、大好きな人に呼ばれたらいつだって喜んで会いに行くぜ？」

ポトフの、第二のキラキラ攻撃が炸裂した。

「え……そ、それじゃー変身するよっ？」

「……」

効果覿面な彼女に、プリンの呆れたような視線が突き刺さる。

きっとココアがポトフなら彼は言っただろう。

馬鹿か貴様は。

ぽわんっ

それに気付くことなく、ココアはローブから杖を取り出してチロル

に変身した。

「え、えと」

変身魔法が得意なココア。

姿形だけでなく声までもそっくりそのままチロルになりきった彼女は、コホンと咳払いをしてから腹を括った。

「み、ミントきゅんっV」

後、後悔を伴う赤面。

しかし、これでミントは喜んで飛び起きる、

「めんどくさい」

筈、だったのに。

「……」

「……」

「……」

ぽわんっ

無言で変身魔法を解いたココアは、こう一言。

「倦怠期じゃなかろうか……？！」

彼女の呼び掛けを即答で一蹴したミントに対してのいらぬ心配。

と言うか、ミントが馬鹿犬と同じ反応をするわけないだろう、とか思うプリン。

「ぽ、ポトフー、ミント倦怠期だよー？」

倦怠期確定。

ココアが作戦失敗を報告すると、

「ココアちゃん」

ポトフは、にこっと笑ってこう言った。

「俺のことも呼んでみてっ？」

チロルちゃん風に。

「チロルじゃ効果なかったねー？」

「うむ、そうだな」

スパコーンとぶっ飛ばされたポトフを無視して、プリンとココアは再び解決法を考え始めた。

「んー、私たちが知ってる解毒効果の薬草は、体のビリビリとお腹のゴロゴロを和らげるやつくらいだよねー？」

「うむ。あとは薬草の一般的な効果と育て方と見分け方くらいだ」

薬草学のくせに、種類はあまり教えないらしい。

「ここにあるヤツは教科書でも見たことないヤツばっかりだしー」

不思議な色と形をした様々な薬草を見回しながら、

「……よし」

ココアは、何かを決心した。

「プリン、あっちの薬草全部とってきて」

「む？」

「私はこっちの全部とってくるから」

下手な鉄砲数打ちゃあたる大作戦。

「……。分かった」

了解しちゃった。

「よーし、片っ端から試すよー！」

こうして、抵抗しないことをいいことに、ミントは薬草園の薬草を片っ端から無理矢理飲まされた。

「……めん、ど……くさい……」

結果、

「顔色が悪くなったな」

「そーだねー」

大失敗。

「って、更に症状が悪化しちゃったぜェ?!」

悠長にぶっ飛ばされているうちに、とんでもないことになっていたことに驚くポトフ。

「……むう」

だって、とほっぺを膨らませたココアにやんわりと注意しているポトフ。

その隣で、プリンは顎に当てていた手を離し、

「致し方ないな」

一旦閉じた瞳を開けて、覚悟を決めた。

「? どうするのー?」

と、尋ねるココアに、

「馬鹿犬の案と同じだ」

プリンはさらりとそう返した。

「えぇ?! だってミント倦怠期だよー!?」

一緒の考えだったことに万更でもなさそうな顔になったポトフの隣で、ココアが再び倦怠期予想を口にした。
正味な話、もうあんな恥ずかしいマネはしたくない。

「違う。僕は馬鹿犬の考えに同意したんだ」

それをスッパリ否定したプリンは、

「〝めんどくさいとか言ってられない状況にすればいい〟」

右手を口元にかざし、風もないのにローブをはためかせ始めた。

（（きょ、強行突破……！））

――こうして、ミントは無事、でもなく、結構なひどい目にあって、結果的には解毒されたのであった。

第１６９回　解毒日和（後書き）

一先ずはテスト終わりましたー！
お待ちしてくださった方、お待たせいたしました！
そして、お待ちしてくださりありがとうございました！

これからはまた、お話が思い付きしだい更新させていきますね！↑

第１７０回　口論日和

――今年はいいクリスマスにしよう。
そんな友人と交わした素敵な約束は、どうやら果たせそうになかった。

「……」

医務室のベッドに横になって、ミントは白い天井をただ無言で見つめていた。
今、彼は、解熱剤やら解毒剤やら制酸剤やら下剤やら止瀉剤やら睡眠薬やら消毒薬やら被服薬やらの、様々な薬草の作用と副作用がごっちゃになって、どうしようもないくらい具合が悪かった。
明らかに服用するものではない薬草も混ざっているのは、彼の友人によって薬草園の薬草を片っ端から飲まされたから。

「ぴわわ……ミント、本当にごめんっ」

顔色がやばいミントに、ベッドの横に立つプリンが申し訳なさそうに謝る。

（本当にね）

が、口が利けないくらい具合が悪いミント。

「〝かまいたち〟、痛かったっ？」

（そっちかい。いや、確かにそっちもそうだけどさ）

虚ろな瞳の彼をあわあわと心配するプリンに、ミントは頭の中だけで突っ込む。
ちなみに、彼にはめんどくさい薬が作用していたときの記憶もばっちり残っている。

（プリンが最初にオレのおでこに載せたヤツが正解だったんだけどなぁ……）

ゆえに、あの時動けなかった自分が悔しい。

（おでこじゃないんだよ。それこそ無理矢理飲ませて欲しかったんだよ）

服用する薬をおでこに置いた彼にクエスチョン。
更に服用すべきではない薬を大量に飲ませた彼らにエクスクラメーションマークをプラス。

「痛いの痛いの飛んでいけっ！」

（それよりも）

必死に痛いの痛いの飛んでいけをやっているプリンをよそに、

（何故にオレを医務室に連れてきたのさ？）

と、ミントは疑問を抱いていた。
具合が悪い生徒を医務室に連れていくことは、なんらおかしいことはない、

「あーもーっ！」

筈、なのだが。

「アンタちょー邪魔！　早くどっか行きなさいよ～みたいなっ！！」

医務室の住人、チロル＝チョコ。

「む、だってミントは僕のせいで具合が悪くなったんだぞっ？」

ミントの付き添い、プリン＝アラモード。

「だからなんでココアとポトフみたいに気を利かせないのよアンタう～っとおしいみたいな～！！」

「そっちこそ静かにしたらどうだ、ここは医務室だぞっ？」

ミントを挟んでの、口喧嘩が始まった。

（だから、なんでオレを医務室に連れてきたのさ？）

うるさい、とか思いながらも、ミントはただひたすらに天井を眺めている。

別にめんどくさい薬が作用しているわけではなく、止めに入るまでの元気がないからである。

「アンタがいるから何も出来ないって感じぃ！」

（病人に何する気だよ）

「む、何かできるならどうして何もしないっ？」

（違う違う違うんだよプリン）

ケダモノチロルとピュアプリンの口論に、頭の中では忙しいツッコミミント。

「だからアンタがいるからだって言ってるでしょみたいな?!」

「だからどうして僕がいると出来ないんだっ?」

「この変態っ!!」

「??」

（噛み合ってない、噛み合ってないよお二人さん）

医務室でやかましく口喧嘩するも、ベル先生は楽しそうにニコニコしながら眺めている。

「み、ミントに何をする気だっ!」

（おお、その調子だよプリン）

「はぁ?!　今日はクリスマスよそれくらい察しなさいよみたいな!!」

（だから何を察しろと）

「??　僕の誕生日?」

（いやいやいやいや）

元気な娘とにぶにぶプリンと、彼らに挟まれて困り果てているミントを。

「アンタの誕生日なんて知らないわよ！！」

「だから今日だ」

「知らないわよ！！」

噛み合わなさすぎな彼らは、なおも続ける。

「あーもーっ、アンタがいると襲えないって言ってるの～みたいな！！」

（っていや何言っちゃってんですかチロルさん?！）

「?！　ミントになんの恨みがある！?」

（いいぞプリン！　なんか違うけどいいぞその調子っ！）

「恨みなんかないわよ！！　あるのは愛だけっ、みたいなV」

（いやいやいやよくそんな恥ずかしいことを人前で）

やかましさと恥ずかしさで耳を塞ぎたいミントをよそに、チロルはこう続けた。

「それに、アンタだってムースを襲ったことあるでしょ?！」

（い、いや、だから何言っちゃってんですかチロルさん！？）

「？　どうして知っているんだ？」

（プリンさん？！）

まさかの急展開。

ミントとベル先生は彼の言葉にびっくり仰天。

「ほらみなさいよ！」

（え、えええぇえええ……？）

「む、でもあれはムースが悪い」

（ちょ、何言ってるのさプリン……？）

そんなことに気付くことなく、プリンはズバっと言葉を続けた。

「夜中に僕の部屋に忍び込んだから不審者だと思ったんだっ！」

（何してんのさムースさんっ？！）

やっぱり噛み合ってない口喧嘩。

突っ込みを入れる対象がころころ変わるミント。

そんなこんなで、今年のクリスマスも騒がしく過ぎていったのであった。

第１７１回　疑問日和

暗い暗い闇の中、小さな体いっぱいに確かに感じるものは、震えるような恐怖と気を失いそうな痛み。

――金にならねえガキなんて、いらねえんだよ。

「――っ？！」

ガバァ！！

とても怖い夢を見ていた少年は、茶色の双眼を開けて飛び起きた。

「……、……ゆめ……？」

起きるとそこは、だんだんと見慣れてきたフラント家のリビング。カーペットの上でどうやらいつの間にか眠っていたらしい彼には、きちんと布団がかかっている。

「……！　いいにおい！」

かけてくれたのはきっと、現在キッチンで夕飯を作っている茶髪のお兄さん、ソラ。

彼は起き上がると、てこてことそちらに移動した。

「あ、起こしちゃった？」

彼に気が付くと、リビングとキッチンが繋がっているため、包丁を止めたソラが申し訳なさそうに尋ねてきた。

「ううん。おにぃさん、なにつくってるの？」

それに首を振って答えた後、彼は別の疑問文をお返しした。

「カレーと、ポテトサラダだよ。はい」

答えながら、にこっと笑ったソラは、切っていたソーセージの切れ端を彼の口に入れた。

「♪」

食欲旺盛な彼は、こうしてつまみ食いさせてもらうのが大好き。

「おにぃさん、なにかてつだえることないっ？」

そしてその後、決まってそう質問する。

「うーん、そうだね……」

何を手伝ってもらおうかとソラが考え始めたちょうどその時、

「ただいま～」

玄関の方から、金髪のお姉さん、エリアの声が聞こえてきた。

「じゃあ、エリアをお迎えに行ってくれる？」

「うん！」

ソラのお願いに、彼は元気に頷いた。

「おかえりなさァい、おねェ――」

パタパタと玄関へやってきた彼は、

「ただいま♪」

「にゃにゃにゃっ?!　エリたん、その子はもしや……!?」

エリアの隣に、大きな猫を発見した。

「うふふ、さあアミュ、あがってあがって♪　その体じゃ立っているのも疲れるでしょう?」

否、猫耳と猫ヒゲと猫尻尾を生やした妊婦さんを発見した。

「ただいま、ソラ」

「お邪魔しますにゃ、ソラソラ!」

突然のお客さんにびっくりしながらも、彼は彼女たちをキッチンへとご案内した。

「おかえり、って、あれ?　アミュ?」

お皿にカレーライスを盛り付けていたソラ。

彼は、アミュの姿を見るなり手元のカレーに目を向けた後で、

「アミュが来るなら、群青色にしとけばよかった」

何かボソッと呟いて、エリアとアミュの顔を青くさせた。

「にゃ、にゃはは……それよりソラソラ、いつの間ににゃ～？」

ぐんじょういろ？　と疑問符を浮かべている少年を見ながら、アミュはさらっと話を変えた。

「え？　ああ、いろいろあって」

いろいろ、とは、雨の日にエリアが彼を捨て犬みたいに拾ってきてからそのままここにおいているということで、

「にゃ～ん♪　ソラソラ、今はお食事前にゃ～♪」

決して食欲が削がれるような意味は含んでいない。

「……にゃんこ……」

その間、楽しそうに動くアミュの尻尾に興味津々な少年。

ぎぃーって引っ張ってみたい。

「も、もう、アミュ？　子どもの前で何言ってるのよ？」

「……？」

顔を赤らめながらも注意するエリアと、小首を傾げるソラ。

「あ、子どもって言えば、おめでとうアミュ」

今のどこがいけなかったのかな？　とか思いながら、ソラはアミュのお腹に目を向けてそう言った。

「にゃ、ありがとにゃソラソラ～♪」

「ふふふ、サラダくんに妹ができるのね」

幸せそうに笑って返すアミュとエリア。

「？　いもうと？」

そこで疑問符を浮かべる少年。

「そうにゃ～。お姉さんのお腹には赤ちゃんがいるのにゃ～」

彼の小さな手を取り、自分のお腹にくっつけながら教えるアミュ。

「おなかの、なかに？」

「そうにゃん」

彼女の猫の手のふわふわの毛とふにふにの肉球にも興味を持ったものの、

「どうしておなかのなかにあかちゃんがいるの？」

彼が唯一口にした疑問は、その場をぱきっと凍り付かせた。

「そっ……それはあれにゃ～。お父さんとお母さんが結婚すると生まれるのにゃ～。にゃっ、にゃはははは……」

数秒の間を置いて、アミュがぎこちない笑いを伴う回答をした。

「そうなの？」

それに、少年は素直に納得した。

「そ、そうにゃそうにゃ～！」

「さ、さあ、ごはんにしましょ！」

「うん。沢山食べてね」

よって解凍されたフラント家で、楽しい夕食が始まった。

第172回　家出日和

「こんなところで何をしてるの？」

冷たい雨が降りしきる冬の日の夜。

町外れのゴミ捨て場で、エリアと少年は出会った。

「……！　酷い怪我……っ！」

暗くて近づくまで分からなかったが、酷くやつれた少年の顔や体には、無数の痛々しい痣や傷ができている。

「一体何があったの？！」

と、傘を取り落としたエリアが少年の肩に手を置こうとしたところ、

「――っ！」

虚ろな瞳を彼女に向けたまま何も言葉を発しなかった少年が、突然ビクッと身を退いた。

「え？」

彼はエリアから身を守るように自分自身を抱き締めると、

「ごめ……なさい、ごめんなさい……っ」

か細い声で、必死に謝り始めた。

――虐待。

「お、驚かせてごめんなさい。大丈夫よ。私はあなたをぶったりしないわ」

そんな言葉がすぐに浮かんだエリアは、彼をそっと抱き締めて、

「メディケーション」

回復魔法の高等術で、彼の体の傷を癒した。

「……！」

温かな光とエリアに包まれて、全身の痛みが引いた少年は、

「……ゥ……」

何かの糸が切れたように眠りだした。

「……ふふ、こんなところで寝ちゃったら」

そんな彼に、エリアは取り落とした傘を拾い上げ、

「風邪引いちゃうよ？」

優しく笑いかけながら、温かな家へと彼を連れて帰っていった。

≫≫≫

「あ！」

それからしばらくの時が流れ、

「おにィさん、これ！」

「ん？　あ。あの飴だね」

最初は警戒していたものの、今やすっかりエリアとソラになついた少年は、ある日、ソラと一緒に初めてのお買物に出かけていた。お店のなかで少年が見つけたものは、彼がソラからよく貰っていた棒付きの飴。

「それ、欲しい？」

「うん！」

「じゃあ、買ってあげるね」

元気に頷いた彼に、ソラがにこっと笑ってそういうと、

「？　かう？」

少年は、疑問符を浮かべて小首を傾げた。

「そこに数字が書いてあるでしょう？」

その反応を見て、ソラは飴が並ぶ棚を指差した。

「うん」

少年は、こくんと頷く。

「それは値段っていって、そこに書いてあるお金を払うとそれが貰えるんだよ」

それにソラが説明を付け加えると、

「おかね……。おにぃさんが、おきゃくさんからもらってるやつ？」

彼は、辺りに溢れた値札を見回した後で、そう聞き返した。

「そう。エリアも病院から貰ってるやつだよ」

そう言って、ソラは彼にお金を手渡した。

「？」

「あそこにいるお姉さんにこれを渡すと、この飴と交換してくれるんだよ」

少年、初めてのお使い。

「えっと、あの、これください」

「あら、もうお買物ができるなんてすごいわねぇ。はい、どうぞ」

レジのお姉さんに褒められて、彼のお使いは無事成功した。

夜にふと目が覚めると、廊下の向こうから声が聞こえてきた。

「……？」

そっとドアを開けて階段を降りると、玄関でソラとエリアが何か話していた。

「おねぇさん、今からおしごとなんだ」

バタバタと慌てているところから、病院から緊急で呼び出されたことを察した少年は、

「……おしごと……」

眠そうな目を擦りながら呟いた。
エリアは大きな病院のお医者さん。
どんな病気も怪我も、魔法を使って治してくれる。
だから、自分のぼろぼろな体を治してくれた。

「……？」

ソラは町の美容師さん。
みんなをかっこよく可愛くしてくれる。
だから、自分のぼさぼさだった髪を綺麗に切ってくれた。

「――っ！」

何かに気付いた少年は、フラント家から飛び出した。

リビングの窓から外に出た少年は、暗い森のなかを走っていた。

森に囲まれた町に住んでいるがゆえに、町の中心部以外の家からは、すぐに森に行き着くことができる。

「……は……は……」

パジャマ姿のまま走る彼に、冷たい風が吹き付ける。

「っわァ？！」

それでも必死で走っていた彼は、何かに足を取られて勢い良く転倒した。

「……？」

痛さを我慢しながらも、彼が自分の足に目を向けると、

『グルルルルルル……』

低い唸り声をあげている大きな虎のような生物の、長い尻尾が巻き付いていた。

「？！」

月に照らされて浮かび上がったその姿に、少年は目を見開いた。
家の外へは、お姉さんの病院と、お兄さんとよく行く公園くらいしか行ったことのない彼。
初めて見るその巨大な生物は、魔物。

「い……いや、こないでっ！」

体は小さいが肉は肉。
よだれを垂らしながら近づいてくるその魔物から、足を取られている少年は逃げようにも逃げられない。

『ガオオオオオオ！！』

「うわァァァァァ！！」

鋭い爪と牙を剥いて襲い掛かってきた魔物に、少年は目をきつく瞑った。

「バーンバニッシュ！！」

――直後、突如として天空に現れた炎のつるぎが、魔物の体を貫いた。

ドカアアアアアン！！

そして爆発。
それに巻き込まれないように透かさず少年を抱えて前に跳んだ彼は、

「……！　おにィ、さん……っ？」

間違いなく、彼の大好きなお兄さん。
火も収まり、魔物を倒したことを確認すると、ソラは少年に目を向けた。

「こら」

抱えていた彼を地に降ろすと、ソラは喝を入れた。

「ちゃんとあったかくしなきゃ、風邪引いちゃうでしょ？」

そして、持ってきたコートを彼に着せた。
――何かが、ズレている。

「おにィさ……どうしてここに？」

マフラーと手袋までしっかり装着してもらった少年は、彼が自分の居場所が分かって理由を尋ねた。

「どうしてって、キミの魔力を追って」

この世界では、どうやら家出ができないらしい。

「こんな夜遅くにどうしたの？」

最後に毛糸の帽子を被せたソラは、夜に家から外に出た少年に質問した。

「……。……いえで、しようとしたの」

すると少年は、うつむいたままそう答えた。

「え……？　ど、どうして家出しようとしたの？」

彼の予想外の答えに戸惑うソラ。
彼は、いろいろと鈍いらしい。

「……」

答えない少年。

「……。……僕のこと、嫌いになっちゃった？」

そんな彼に、ソラが残念そうに尋ねると、

「ち、ちがうよっ！」

少年は慌てて首を横に振ってそれを否定した。

「俺、おにィさんのこともおねェさんのことも、だいすきだよっ」

「じゃあ、どうして？」

家出なんて、とソラがもう一度尋ねると、

「……」

「……」

しばらくの間を置いてから、少年は口を開いた。

「だいすき……だから」

彼は再び下を向き、小さな手をぐっと握り締めた。

「……？」

その矛盾した答えに、ソラは疑問符を浮かべながらも黙って耳を傾ける。

「ずっと、いっしょにいたいから」

自分の子どものように温かく接してくれたソラとエリア。

「……でも……」

いろいろ教えてくれて、いっぱい遊んでくれる二人のことが、彼は大好き。

「俺、おかねもってないんだ」

でも。

「だから、おねェさんになおしてもらったおかねも、おにィさんにきってもらったおかねも、ごはんのおかねも、ぜんぶ、はらえない

から」

――金にならないガキはいらない。

他の記憶は飛んでいるが、確かにそう言われて捨てられたから。

「そんな、何言って――」

「それに」

口を挟まなくてはいられなかくなったソラの言葉を遮って、

「おにィさんとおねェさんは、けっこんしてるでしょう？」

少年は、震える声でそう続けた。

「けっこんすると、あかちゃんがうまれるんでしょう？」

茶色の瞳いっぱいに涙を溜めて、

「そしたら俺、いらなくなっちゃうでしょう……？」

それでも止まらないそれは、彼の頬を伝って地面に落ちた。

「……俺、もう、すてられたくなくて……っ！」

それを引金に、少年はぼろぼろと泣き始めた。

「おにィさんとおねェさんに、っすてられるのが……こわくて……！！」

そんな少年を、ソラは強く抱き締めた。

「――！」

「バカだな」

驚いた彼に、ソラは優しく語り掛けた。

「僕やエリアが、キミのことを捨てると思う？」

冬の澄み切った空気の中、

「そんな半端な気持ちで、エリアがキミを拾ってきたと思う？」

満点の星空の下で、ソラは白い息をはきながら、こう言った。

「僕たちは、キミを本当の子どもだと思ってるんだよ？」

「――え？」

本当の、子ども。

「だから、キミの怪我を治してあげるのも髪を切るのもごはんを食べさせてあげるのも、全部当たり前のことでしょう？」

その言葉に、少年は思考が停止した。

「……まあ、眠っているところを持ち帰ってきたわけだから、ちょっと誘拐じみてる気がしないでもないけどね。あ、そうだ。ちなみにね、エリアは赤ちゃんが出来ない体なんだって。ああっ、でもだ

からキミを拾ってきたわけでも捨てないわけでもないからね？　うん。それになんて言うかホラ、キミが嫌じゃなかったらうちの子どもにしたいなって思って」

どうやらシリアス向きではないらしいソラがごだごだと何か言っていると、

「ごめん……なさい」

小さな手で彼の服をぎゅっと握った少年が、小さな声で謝った。

「！」

それに、ながったらしい言葉を止めてふわりと微笑んだソラは、

「帰ろっか」

彼をだっこして立ち上がり、くるりと方向転換した。

『グルルル……』

「「え」」

――ところ、先程よりもでかい虎の魔物が、森の木々を踏み倒してこちらを睨んでいた。

『グルルル……』

『ガオオオオオ……』

『グオオオ……』

しかも、群れで。

「う、う～ん……」

倒せる、だろうけど、お子さまの目の前で流血沙汰は控えたい。

てなわけで、

「ちょっと目を瞑っててくれる？」

「？　うん」

目隠し大作戦。

少年を降ろして目を瞑らせたソラは、

「よし。じゃあいくよ」

虎さんたちに、にっこりと笑いかけながら右手を向けた。

「バーンバニッシュ！！」

ちゅどおおおおおん！！

流血も目隠しもあったもんじゃない現状。

魔物を焼き尽くしてもなお燃え盛る青い炎に、少年はまた違った種類の恐怖を身に覚えたそうな。

第173回　家族日和

揺れる蒸気機関車の車内で、ポトフはゆっくりと目を開けた。

「……？」

えらく懐かしい夢を見ていた彼は、どうやら横になっているようだ。
よって起き上がろうと目線を下に向けると、

「……。膝？」

彼は、膝を発見した。
もちろんそれは、自分のものではなく。

「――！」

まさか、と思って振り向くと、

「「！」」

膝の持ち主、ココアとばっちり目が合った。

「……」

「……」

「「……」」

間。

「いっ、いやあああ！！」

スパアアアアアアン！！

自分でやっといて悲鳴をあげられても。

ガラガラガラバシーンッ！

ココアは寝起きポトフをぶっ叩いて、そのままコンパートメントから飛び出していった。

ガラガラ

「だいじょぶ、ポトフ？」

「ぷわ、ねむねむ……」

それと入れ替わるようにして現れるミントとプリン。

どうやら彼らは、コーラとプリンを買ってきて部屋に戻ろうとした際、あの現場を見てしまい、部屋の前で足止めを食らっていたようだ。

「ミント！　俺！　ココアちゃんに膝枕してもらった！！」

「わっは～、派手にぶたれたねポトフ～」

ガバッと起き上がってキラッキラの瞳を向けてきた右頬腫れまくりな彼に、ミントはかわいそうな瞳を向けた。

「やっべェ俺生きててよかったァ！！」

「貴様死にそうだぞ」

口から出た血を拭いながら命のありがたみを膝枕で実感するポトフを、素で心配するプリン。

「でもさ」

きゃっほう！　という言葉が似合いそうなほど喜んでいる彼に、

「今ので思い切りキミがファザコンなとこ知られたよね」

ミントがさらりとそう言った。

「な――――？！」

「うむ。お兄さんお兄さん言ってたぞ」

衝撃を受けた彼に、プリンがとどめを刺した。

「……！？」

え、何それめちゃくちゃカッコ悪ィじゃん、と、ポトフははしゃぐことをやめた瞬間、

「……、……消えてなくなりたい」

シートの上で体操座りして絶望し始めた。

「む？　お望みとあらば。テレポ」
「前から気になってたんだけどさ」
そんな彼にプリンが向けた右手を、やめなさいと下ろさせたミントが、
「どうして”お兄さん”なの？」
ソラのことをお兄さんと呼ぶ理由を尋ねた。
「へ？」
その問いに、ポトフは顔を上げ、
「おにィさんが、おにィさんだからだぜェ？」
至極当然のようにそう答えた。
「いやいや、まあ確かにお兄さんはお兄さんなんだろうけど。じゃあさ」
その答えに首を横に振った後、ミントはプリンを指差した。
「プリンはキミにとっての何さ？」
「む？」
「……。おにィちゃん？」

「ぴわ？！」

二人の会話に利用され、プリンが地味にリアクションしているのをよそに、

「プリンとソラさんは、同じなの？」

ミントは至って真剣な眼でそう質問した。

「そりゃァ、お兄さんはお兄さんでもお兄さん違いだろォ？」

だから、ポトフは疑問符を浮かべながらも素でややこしい回答をする。

「だからさ」

なんと言えばいいのかと、ミントはう～んと考えた後で、

「ソラさんは、キミの親じゃないの？」

と、尋ねた。

「え――……」

不意打ちを受けたように停止した彼に、

「それなら〝お兄さん〟じゃなくて〝お父さん〟でしょう？」

ミントは、つらつらと続けて言い聞かせた。

「それに敬語もだよ。……まあ、使う家族はいるかもしれないけどさ。オレ、前から不自然だなって思ってたんだ。プリンの家でも使わないでしょう？」

「うむ。敬語は、尊敬に値する相手に使うものだ」

「え、何堂々と問題発言しっちゃってるの？」

「だから僕は敬語は使わない主義だ」

「いや何胸を張ってるのさ？　まあ確かに先生とかルゥ様にも普通に喋ってたけどそれはそれで問題あるんじゃ……？」

「父からそう教えられたんだ。したてに出ると、付け上がられるからな」

「あ～、あの人ね～」

敬語についてミントとプリンが話している隣で、ミントの言葉を考えていたポトフは、

「変じゃ、ねェかな？」

なんだか照れ臭そうに質問した。

「！　うん、きっと喜んでくれるよ？」

そんな彼に、ミントはにこっと笑ってそう言った。

汽車を降りて大通りを抜け、赤い屋根のお家までやってきたミント。

「あ、手紙来てるじゃん」

玄関脇にある郵便受けの手紙を取り出すと、彼は家のなかへ入った。

「ただいま」

「あ、おかえりなさいませミントさん」

「おかえりまろ～！」

『むむむ～！』

「目からビームが出したいわ！」

「おお、遅かったな？」

ただいまと言うと、返ってくるのはやかましい答え。

「プリンの家に遊びに寄ってから帰ってきたから」

長期休暇の為に重い荷物を抱えていたミントは、それをどさっと降ろすと、

「まろ?!　なんでまろも誘ってくれなかったまろっ!?」

「それより手紙来てたよ」

プリンと聞いて喚き始めたマロはほっといて、ミントは手紙を差し出した。

「母さん」

と、言って。

それは、家族の何気ない会話。

ズザザザアッッッ!!

――の、筈なのに。

「……?」

にぎやかにテーブルを囲んで夕食を食べていたシャーンとジャンヌとフランとマロとむぅちゃんが、一斉にミントから勢いよく後退りして、それぞれの壁に激突した。

「何してんのさ?」

その行動に、ミントが小首を傾げると、

「……っみ」

「みみ、みんとんが……」

『む、む～』

「じゃ、ジャンヌを」

「か、”母さん”……？！」

それから、協力して一文を作り、

「じゃっ、じゃあ……俺は？」

「……？　父さん？」

沈黙。

「「えええええええ！？」」

後、大パニック。

「――え？」

自分がいかに説得力のないことをポトフに言っていたのか、身をもって思い知らされたミントであった。

第１７４回　主席日和

王都市という呼び名の通り、街の中心に国王の住む大きなお城がある街、シャイア。
その白く美しい城に、随分と裾の長い上着を着た赤髪の男性がやってきた。

「「おはようございます、兵士長」」

彼、兵士長のシャーンに、門番が頭を下げて挨拶をすると、

「おっはよう！」

彼は、にっこりと笑って爽やかに挨拶した。

「「……？」」

そんな彼に、顔を見合わせて疑問符を浮かべる門番。
だって、いつもなら顔も変えずに”おー”とか”んー”とか、適当な返事しかしないのに。

「今日はいい天気だな！」

「は、はぁ」

「そ、そうですね？」

なんか余計なことまで言っている。

（へ、兵士長がご機嫌だ！）

（ああ、なんか知らんがいつもは仏頂面かアンニュイフェイスな兵士長が今日は珍しくご機嫌だ！）

これは何かいいことがあったのだろうと考えた門番二人は、

「兵士長、ご機嫌ですねっ！」

「何かいいことがあったんですかっ？」

彼をここまでご機嫌にした出来事を、興味本位で聞いてみた。

「おお、よくぞ聞いてくれた！」

どうやら聞いてほしかったらしい。

シャーンは右手をぐっと握り締め、喜色満面でこう言った。

「昨日息子に初めて”父さん”って言われたんだ！」

きらきらきら

「……」

「……」

「「……」」

数秒間の停止。

「――そっ、それはそれはっ！」

「よかったですね兵士長っ！」

後、慌てて反応。

「おう！」

それに気をよくした彼は、

「今日も頑張れよ、ワトソンとクリック！」

何やらＤＮＡの二重螺旋構造を解明した学者みたいな組み合わせの名前だった門番二人の肩を叩き、城の中へと入っていった。

「……」

「……」

ご機嫌兵士長を見送った二人は、

「……へ、兵士長の息子さんって確か」

「もうすぐ十八、だったよな……？」

彼の一人息子にしてよく国王のルゥの相手をさせられている、ミントの年齢を確認した。

「「……へ、兵士長……っ！！」」

十八になる息子に父さんと呼ばれ、まるで初めて言葉を口にした赤ちゃんの父親のような気持ちになっている兵士長に、二人の門番は口を押さえて哀れみの涙を流した。

ご機嫌麗しい彼を見て、城で働く皆が門番のようにヒソヒソと会話している中で、

「失礼いたしま～す！」

シャーンは、いつものように呼び出されていた王室にやってきた。

「！　シャーン！　助けて！！」

すると当然そこにいた国王が、彼を見るなり彼に助けを求めて駆け寄った。

「？」

自分の後ろにさっと隠れた国王の行動に、シャーンが疑問符を浮かべると、

「シャーン」

国王の側近、フィーナが、にっこりと笑って彼の名を呼んだ。

「フィーナ？　なんだ、またコイツ変なことしたのか？」

笑っているが、怒っている。

そんなことは百も承知なシャーンが聞き返すと、

「ええ、またニンジンを残していたのです」

フィーナは、やれやれと首を横に振った。

「だ、だってヤツら中途半端に甘いじゃねえか！！」

と、シャーンの背中から必死に言い訳するルゥ。

「ニンジンに失礼です。ですから罰として今日は牛乳二本です」

フィーナ、罰則。

「だからなんで牛乳が出てくるんだよ?!　なぁシャーン！！」

ルゥ、必死。

「こらこら。ちゃんと食べなきゃ駄目だろ?」

シャーン、ご機嫌。

「な……？！　お、オレを裏切るのかシャーン！？」

「その通りです。シャーン、ルクレツィア様をしっかり捕まえておいてくださいね」

「はーい♪」

「なんか今日キャラ違うぞお前えええええええ？！」

――こんないろいろと残念なトップたちに支えられ、この国は今日も平和なのであった。

第175回　チョコ日和

雪が降り出しそうなどんよりとした曇り空。
授業が終わりいつものように食堂にやってくると、ミントはプレゼントを貰ったのであった。

「ありがと……て、チョコレートシロップ？」

プレゼントは、赤いリボンが巻かれたチョコレートシロップ。

「そう、チョコレートシロップ！」

ミントにそれをプレゼントしたのは、彼を彼の友人たちから無理矢理引き離し、プリンを居づらくした張本人、チロル。
ちなみに、何故居づらくなったかと言うと、

「今日はバレンタインデーでしょ？」

そんなわけで、ココアがそわそわしてポトフが威嚇しはじめたから。
よって現在プリンは寮で一人プリンを食べながらむくれ中。

「だからね、ミントきゅんがそのチョコをかけたものは、全部ミントきゅんのものになるのみたいな！」

相手がいないわけではないが別にムースが来ても残念ながら喜ばないであろう彼はほっといて、チロルはニコニコしながら言葉を続けた。

「例えば、このホットケーキとかあのコーヒーとかこのドリアとか

そのお味噌汁とか」

オレはワタルか、とか思いながら、ミントはなんとなく嫌な予感。

「アタイとかっ♪」

的中。

「……あのねぇ」

パコッ

「――って」

ミントが苦く笑いながらコーラを手にした瞬間、彼の右手に握られたチョコレートシロップのフタが開けられ、

「ごくごく」

それをそのままひっくり返して直接飲み始めた人物が一人。

「……」

「……」

「ごくごくごくごく」

「「……」」

「ぷはあー」

完飲。

「って、ワタル?!」

効果音つきでチョコレートシロップを一気飲みした彼の名前を呼ぶと、

「フッフッフッ。ごち」

死神は、満足げに口を拭った。

「いや、”ごち”って」

しかし、彼女からのプレゼントを一気飲みされて、ミントはたまったものじゃないと怒り心頭、

「こんなことして、糖尿病になっちゃうよ?!」

かと思いきや、体の心配。

「フッフッフッ、今日はいい日だ。知らない人からもゆうこりんからもいっぱいチョコを貰ったしな」

チョコレート大好き死神にとって、バレンタインデーは特に素敵なイベント。

どうやら彼は、顔の整い加減からたくさんのチョコを貰えただけでなく、甘いの大嫌いゆうこりんからも、たくさん貰ったチョコをそのまま横流しされて残飯処理機のように貰っていたようだ。

「ますます糖尿病になっちゃうよ?!」

ゆえに、余計に心配される死神。

「フッフッフッ、心配するな。それより」

「いや、心配するって……て、それより?」

「みんとんチョコ持ってない?」

「もはや依存症!?」

まだまだチョコレートを欲している死神と、彼を本気で心配しながらも突っ込むミント。

「……そ、そんな……」

彼の手に握られた、空のチョコレートシロップの容器を見つめ、カタカタと震えていたチロルは、

「あ、アタイじゃなくて、コイツがミントきゅんのものになっちゃったみたいな~~~!!」

と、叫んだ。

「「え?」」

と、疑問符を浮かべるミントと死神。

「「……」」

と、その他大勢。

「え、どしたのさ……？」

食堂の皆さんの目は、ミントが持つ空のチョコレートシロップの容器と、

「……。おお」

その下にいる死神に注がれた。

「オレ様、みんとんのものになっちゃったのか。……ぽ」

今日は、バレンタインデー。

「いやいや、何言ってんのさワタ」

ズザザザアッッッ！！

「ってちょっと待ってよ皆さん?!」

文字通りひかれるミント。

「や、何考えたか知りませんが絶対それ誤解で」

「ミントきゅんのバカあああああみたいなあああああ！！」

走り去るチロル。

「って、何涙散らしながら走り去ってんのさチロ」

「「ミント＝ブライトてめぇよくもチロルちゃんをっ！！」」

「いや、だから誤解だってばって言うか皆さん何ヒソヒソ話して」

「フッフッフッ。みんとんあいらびゅー」

「て、だから話をややこしくするなあああああ！！」

ミントは今日も、突っ込みに忙しいのであった。

「ソラ」

「――っ！！」

ちなみに、バレンタインはフラント家にも。

「？　何そんなに汗かいてるの？」

「い、いやぁ、なんかヤバイ逃げろって僕の本能が」

冷や汗かきまくりなソラに、エリアは天使の微笑みを向けた。

「はい。ハッピーバレンタイン♪」

――今日はバレンタインデー。

「だから違うんだってばさあああああ!?」

「これはチョコこれはチョコこれはチョコこれはチョコ……っ!!」

想いを伝える、素敵な日。

第176回　形無し日和

お休みの日に、異世界のお友達と遊びに来たのは遊園地。

「……ぷゆ……」

「だ、大丈夫っ？　何か飲むっ？」

初めてのジェットコースターに乗って見事に酔ったプリンを介抱するアオイから少し離れたところで、

「～っ！　もういいわよ行こう、リン、ココア！！」

「ふえ？！　わ、私ー？」

「う、ウララ、速い、ですっ」

何やらカチンと頭に来たウララが、ココアとリンを連れて人混みの中へと消えていった。

「あーあ」

「うららん」

「怒っちゃったぜェ？」

彼女たちを見送ったミントと死神とポトフが向けた視線の先は、

「……。知るか」

ぷいっとそっぽを向いた、ユウ。

「もう、そんな子どもみたいにって二本食い？！　きゅうりをまさかの二本食い！？」

「おお、ゆうこりん贅沢だな。もふもふ」

「そしてこっちはチュロス五本食い？！」

知らんぷりしてきゅうりを二本食いし始めたユウと、それに対抗してチュロスを五本食いし始めた死神に突っ込みを入れるミントはほっといて、

「なんでそんな素直じゃねェかなァ？」

呆れたもんだと、かなり説得力がないポトフが溜め息をついた。

「フッフッフッ。五連メイプルだ」

「あっまぁ？！　糖分取りすぎなのは気のせいなんかじゃないよ！？」

メイプルな甘ったるいにおいが漂う中で、

「お前、そんなんじゃ一生伝わらねェぞ？」

ポトフはさらりとそう言った。

「みんとん、あのキャラメルポップコーン欲しい」

「だから糖分取りすぎだし更に塩分と脂肪分足す気なのかよって言うかこっちが気持ち悪くなるからやめようよ?!」

「えー?　じゃあコーラ」

「なら許す!」

死神とミントの会話と平行して、確かに聞こえたその言葉に、

「――?!」

ユウは、目を見開いた。

ボフッ

後、真っ赤っか。

「なっ、ななな、何言ってっ!?」

プラス、噛み噛み。

「……」

「……」

「……」

その様に、彼は野郎三人からの注目を浴びた。

「……？　食後の虎の前足と口の周りのように顔が真っ赤だが、ゆうこりん、お熱？」

と、小首を傾げたのは、遊園地で大鎌を担いでいる死神。

「もうちょいまともな例えが見付からなかったの？　甘党らしくイチゴジャムとかさ」

と、突っ込みを入れたのは、絶叫マシーンに乗る前に帽子を取ることを断固拒否したミント。

「お熱はお熱でも、ウララちゃんにな」

と、さらりと言ってくれたのは、鹿の着ぐるみを見てお腹を鳴らしたポトフ。

「……」

「……」

「……」

「……」

間。

「ッ、だから違っ」

「おお、だからゆうこりんはうららんのチョコレートだけくれなかったのか」

「ち、違」

「へぇ、超分かりやすいねゆうこりん」

「違」

「認めろよゆうこりん」

「ち――って言うか”ゆうこりん”言うな！！」

思わず本来の話題と違うところを否定しちゃったゆうこりん。

「あのなァ？」

はふう、と再び溜め息をついたポトフは、

「お前がウララちゃん大好きなのは、見てれば誰でも分かるってェの」

「ウララと、あとワタル以外ね」

ぴっとユウを指差してそう言い放ち、ミントが軽く補足した。

「ん？　オレ様、２―ブチン？」

「なんでそこで化学の世界へようこそ？」

「フッフッフッ。意味はない」

ニブチンで分かりにくいボケをかました死神と、とことん突っ込むミントはやっぱりほっといて、

「な、何?!　何故分かる――って、あ!?」

うっかり認めてしまったユウ。

「……。ま、こぉゆう理由なんだろぉけどな。好きなら好きって自分から伝えろよ」

クールのかけらもない今の彼に、ポトフはズビシッと言い放った。

「男だろ」

お節介は、承知の上。

「――!」

その言葉は、どうやらちゃんとユウに届いたようだ。

「遊園地なら、ベタに観覧車でとかどうー?」

「「!」」

そこへ、いつの間にか戻ってきていたココアが提案した。

「それはいい、ですね。ウララ、ベタに弱い、です」

それにリンが同意すると、

「ちょっ、ココア、リン？　何よ忘れ物って？」

彼女たちに遅れて、ウララがその場所に戻ってきた。

「観覧車ね」

「観覧車か」

「観覧車な」

そう、ミントと死神とポトフに文字通り背中を押されたユウは、

「っ……い、行くぞっ！」

「へ？　ちょっ、な、何するのよ?!」

素直にウララを観覧車まで引っ張っていった。

「おおー、ゆうこりんガンバ」

「ちゃんと告白しろよォ」

「真っ赤っかの噛み噛みだけどね」

「うまくいけばいいねー」

「はい、です」

そんな二人を見送りながら応援している彼らのもとへ、

「……ぷゅぅ」

「あれ？」

だいぶ具合がよくなったプリンと、彼を看病していたアオイがやってきた。

「ユウとウララ、どこに行ったの？」

彼らとすれ違ったのか、皆に尋ねるアオイ。

「観覧車、です」

それに、リンが答えると、

「へぇ？　珍しいね？」

アオイは、ぱちぱちとまばたきをしてからこう言った。

「ユウ、高いところ苦手なのに」

高所恐怖症、判明。

「「え」」

――この後、ウララが気を失ったユウを引きずって帰ってきたそうな。

第177回　お話し日和

二月の終わりに雪が降り、

「まったく、こういう時はちゃんと自分で起きるんだから」

寒さ対策バッチリの格好で外へとやってきたミントは、雪を掻き集めながらため息をついた。

「あっはっはっ！　なんてったって雪だからな！」

「うむ、雪だからな」

「意味分かんないよ」

その隣で同じく雪を掻き集めているポトフとプリンに突っ込みを入れてから、

「もう、普段からちゃんと一人で起きられるようになりなよ」

ミントは、雪の塊に葉っぱを挿しながらこう言った。

「来年で卒業なんだよ？」

雪ウサギ、完成。

「「――」」

彼の言葉に、手を止めて目を見開いた友人二人。

「卒……」

「……業」

後、ポトフとプリンは協力して単語を紡ぎ、

じわり

と涙を浮かべだした。

「って、な、何涙を浮かべだしてんのさ?!」

それを見て慌てだしたミントに、

「だっ……だって、卒業したら」

「もォ、ミントに会えなくなるんだろォ……?」

二人は手に載せた雪ウサギを雪の地面に置きながらそう言った。

「な、何言ってんのさ?　ほら、オレ二人の家の場所知ってるし、会おうと思えばいつでも会え……」

言いながら、新たに作った雪ウサギをそっと置いたミントは、

「……もう、オレまで泣けてきたじゃんかバカぁ」

二人につられて泣き出した。

そうして三人仲良く泣いていると、

「ホントに雪が好きだねー……って、何事ー?!」

そこへ、ココアがやってきた。

「ちょ、何ごっそり雪ウサギ作ってんのって言うか何泣いてるのー!?」

彼女の驚きポイントは、野郎三人が輪になって雪ウサギを大量生産しながら泣いていたところ。

「な……なんとなく……」

「……っ、そつ」

「ぎょ……」

「……卒業?　一年前から泣いてどーするのー?」

三人から単語を聞き取ったココアは、呆れたように腰に手を当てた。
雪ウサギを量産したのは、なんとなくらしい。

「ほら泣かないのー。って言うか」

彼女は三人にポケットティッシュを投げ付けた後、

「卒業なんて、これが初めてなわけじゃないでしょー?」

と、イエスを求める疑問文を口にした。

「そう……だけど」

「「……」」

「え、なんでこの質問の答えが統一されないのー？」

結果、イエスは一人。

「てかちょっと待って今プリンとポトフ首横に振らなかったー？！」

三歳から五歳までが幼稚園で六歳から九歳までが初等部で十歳から十三歳までが中等部で今でしょー！？　と、計三回は経験している筈のことに対して首を横に振った彼らに驚くココア。

「む……僕は、途中でやめた」

理由、詰まらないから。

「さ、さいですか……」

すげー理由、と思いながらも、状況から考えてそうとしか言えないココア。

「俺は、……なんてェか、〝預ける〟って言葉に過剰反応してたみたいで」

理由、お家から離れたくないの。

「あー、なるほどねー……？」

すげー理由、と思いながらも、状況から考えて、やっぱりそうとしか言えないココア。

「うーん……あ、でも、ミントは卒業したんだよねー？」

ちっちゃい頃から退屈しのぎに本読みすぎなプリンとちっちゃい頃のトラウマを抱えていたポトフはひとまず置いといて、

「うん……でも、オレあんまり出席してなかったからさ」

「あー、そっかー……」

ミントに問うてみたものの、ココアはやっぱりそう答えるしかなかった。

「じゃ、じゃー、学校行かないで何してたのー？」

ニートな三人にココアが苦笑いを浮かべながら聞いてみると、

「俺は……手伝いと勉強ォ？」

「ふむ、主に読書だな」

「オレも、花屋の手伝いと勉強かなぁ」

わりと真面目だった三人。

「あれ？　ミントって親嫌いじゃなかったっけー？」

その答えを聞いて、ココアは雪を掻き集めながら再び質問した。

「や、別に嫌いなわけではないけどさ」

それに、小さな赤い実を取りながらミントは再び答えた。

「なんて言うか、世話が焼ける？」

「それ、親に対して抱く感情じゃないよねー？」

そんな、それぞれの懐かしい話を聞かせ合いながら、四人はひたすら無意味に雪ウサギを作り続けるのであった。

第１７７回　お話し日和（後書き）

と、微妙に最終回をにおわせてみる回でしたー。

第１７８回　火山日和

冬の寒さがまだ残る三月初頭。

「森はまだ寒いよね！」

という、クー先生の温かなご厚意で、

「わは～、超あったかい」

学年末の実技試験は、セイクリッド島の南に位置する火山で行うことになったのであった。

「って、暑すぎるわ！！」

いきなり乗り突っ込みをかましたミントは、外は寒いからと首に巻いてきたマフラーと手袋を地面に叩きつけた。

「ふふふ、ミントと一緒」

その隣には、ご機嫌プリンが、

「って、あれ？　プリン、暑くないの？」

何やらいつもと変わらぬ涼しげな様子で立っていた。

「む？　むしむしのあつあつだぞ」

「？　の、わりには汗ひとっつも掻いてないじゃんか？」

小首を傾げたら傾げ返してきたミントに、プリンはさらりとこう言った。

「僕、あんまり出ない」

発汗作用に問題あり。

「え、ちょ、やばいよそれ体温調節出来てないってことだよ!?」

「ふふふ、僕はトカゲさんか」

「え?!　な、何言い出すのさプリン!?」

「てっきり哺乳類だと思ってたぞ」

「や、哺乳類だから!　まごうことなき哺乳類だから!!」

「そう言えば、最近しっぽが切れたな」

「しっぽ!?　あ、いや違う違うあれしっぽじゃなくて髪の毛だから!!　いや確かに一つに束ねてたからしっぽに見えなくもなかったけどさ?!　って言うか最近って言うけど結構前な上に着実にちょっとずつ伸びてきてるから!!」

「保護色!」

「って、やめてプリンんんんん?!」

ローブを被って変なことをやり始めた頭が参ってしまったかっこい

いプリンを、直視することができないミントであった。

ところ変わって南へ進むと、

「あーっつーいーいー」

うだるような暑さに、ココアが実際にうだっていた。

「っもー、いい加減降ろしてよー！？　この暑いなかおかしいでしょー？！」

毎度のごとく、ポトフにお姫様だっこされながら。

「ココアちゃんの誕生日にココアちゃんとペアになってココアちゃんと二人きり……！」

しかし、

「これはもォ、運命としか言いようがないぜェ！！」

聞いてないポトフ。

「だからちゃんと聞きなさいってー！」

そんな彼のウサギさん寮生の証であるネクタイを引っ張りながら、

「なんでこのクソ暑い時にお姫様だっこなんかしてんのよー！？」

暑さもあいまって、イライラしながら訴えた。

「え？」

すると、きょとん顔をココアに向けた彼は素で、こう言った。

「だって普通のだっことかおんぶだと、俺、たぶん我慢できなくなっちゃうぜェ？」

何が。

「ダークネスサクリファイスー！！」

とは敢えて聞かずに、ココアは闇の十字架を振りかざした。

「……ったく、さっさと終わらせるよー？」

かなりの至近距離で直撃を食らって吹っ飛んだ彼を起き上がらせると、ココアはスタスタと歩き出した。

「ココアひゃん、あんで鼻つまんでるの？」

ポトフの鼻を、つまみながら。

「……だって、ポトフは狼男でしょー？」

すると、ココアは鼻をつまんだままこう言った。

「私、汗だくなんだもん」

狼だから、鼻が利く？

「……大丈夫だぜ、ココアちゃん」

右手を離させたポトフは、汗のにおいを気にする彼女に、爽やかに微笑んでみせた。

「むしろそそられ」

「ダークネスサクリファイスー！！」

至近距離、再び。

光属性の弱点は闇属性。

効果抜群な上に渾身の一撃を何度もその身に受けていながらも、いまいち学習しないポトフであった。

暑くて汗が出ないのならばと、プリンを薔薇の鞭で縛って溶岩の上すれすれに吊すという強行手段に出たミントは、

「あっつ～……出口見えてこないね、プリン？」

脱いだローブをタオルさながらに用いながら口を開いた。

「うむ。そうだな」

こちらは冷や汗だくだく。

「でも、ここって魔物がいないからまだいいよね」

『キシャー！！』

「ってうわ出たー」

安心したそばから現われやがった魔物は、燃え盛る炎の体を持つ大きな鳥。

「もう、ただでさえ暑いんだから運動させないでよね？」

「うむ。まったくだ」

と、いつものように薔薇の鞭を構えたミントと魔力を高めたプリンは、

「蓮華！」

『キシャー！！』

「て、……あれ？」

「旋毛風！」

『キシャー！！』

「……ぷゆ？」

とあることに、気が付いた。

「わは、そっか。植物ってモロ燃料だもんね」

「ふむ。風も全力でいかない限り、火の勢いを強めてしまうだけようだな」

互いに、火とは相性が悪いということ。

「燃えにくい植物の魔法は使ったことないからなぁ」

「この暑さで全力でいくとなると、僕の体力が出口までもつ自信がない」

『キシャー！！』

魔物の攻撃を避けながら、冷静に状況を分析した結果、

「あれしかないね」

「うむ、そうだな」

一つの答えに、たどり着いた。

「行くよ、プリン！」

「うむ！」

ミントの掛け声とともに、プリンは右手を、ミントは左手を魔物に向けた。

「「結合魔法」」

それは、二種類の魔法を組み合わせる高等術。

互いの息がぴったりあっていないと、絶対に成功しない業。

「「――桜吹雪！！」」

二人の声が重なった直後、結合魔法は形をなした。

『――？！』

視界一面に広がる無数の桜の花弁が、風に吹かれて舞い踊る、見事なまでに美しいその魔法。

「うにゃあああああ！！」

「ぴわわわわわわわ？！」

――使用用途は、単純に目眩まし。

互いに変な叫び声をあげながら、ミントの箒に乗った二人は、も

のすごいスピードで出口を目指すのであった。

第１７９回　彼宅日和

玄関のドアを開けると、そこには金髪美少女が立っていた。

「あれ？　あなたは確か、チロルさん、ですか？」

ドアを開けたシルクハット紳士、フランが首を傾げると、

「ミントきゅんはいますか～？　みたいな！」

それを首だけで肯定したチロルは、遊びに来ちゃった♪　なノリで質問した。

「すみません。ミントさんはまだ帰ってきていないのです」

申し訳なさそうに告げたところ、残念そうな顔をした彼女を見て、

「あ、で、ですが、もうそろそろお帰りになると思いますので」

フランは素敵に笑ってご親切。

「外はもう寒いですし、家の中でお待ちになられますか？」

そんなわけで、春休み突入の日にブライト家にお邪魔したチロルは、

「はい、どうぞ」

「美人さんまろ……！」

『む～！』

フランに紅茶を出され、マロとむぅちゃんに接近されていた。

「……」

ピエロな彼女を見て、ぱちぱちと瞬きをしたチロル。

「これ、取れるの？」

「まろ！？」

その手は、マロの鼻の先にある赤い球体をむぎゅっとつまんだ。

「まろ～！　と、取れないまろ～！　それはまろの鼻まろ～！」

「はなまろ？」

「”はなまろ”じゃなくて”鼻”まろ～！」

まろまろ言うマロはほっといて、

「……しっかし、ミントはどんな裏技使ったんだろうな？」

あんなイケメンな友達を差し置いて、と、自分の息子の彼女を見て、シャーンがしみじみと呟いた。

「そうねぇ……」

それにしみじみと同意したジャンヌは、そっとチロルの肩に手を置いた。

「！」

驚いて顔をはね上げた彼女に、

「おまいさん、なんかミントに弱みでも握られてるの？」

素で問い掛けるジャンヌ。

「お寿司さびぬきでしか食べられないとか」

「それ、そんなにバレたら不都合か？」

心配するジャンヌにさらりと突っ込むシャーン。

「もしかして、夜は明かりを付けとかないと眠れないまろか？」

「それはマロ様のことでしょう」

心配するマロに、さらりと突っ込むフラン。

「割り箸を割ると9：1くらいにかなり偏るとか」

「だから、それを隠す必要はあるのか？」

「お菓子の袋が上手くあけられないまろ？」

「それもマロ様のことでしょう」

「蝶々結びがどうしても縦になるとか」

「もはや弱みなのかそれは？」

「シュークリームのクリームがどうしてもびよって出ちゃって綺麗に食べられないまろ？」

「ですからそれもマロ様のことでしょう」

心配する女二人に突っ込む男二人。

どちらも決してふざけているわけではない彼らの言葉を、目をぱちくりさせながら聞いていたチロルは、

「あ、い、いえ。あたし、別にミントきゅんに弱みを握られているから一緒にいるわけでは……」

手を振りながら、よそゆきな口調でそう言った。

「「――？！」」

「……そんなに驚くことなんですか……？」

思い切りびっくらこいた四人を見て、むぅちゃんが頭に乗っているチロルは、頭に大粒の汗を浮かべた。

「弱みじゃないとしたら何を握られてるのかしらあの子?!」

「必ずしも握るって表現の必要性はないだろ」

「お米!?」

「寿司か」

「あれまろ!　やっぱりみんとんが遊ばれてるまろ!　悪女まろ!」

「小声とはいえ本人の前でなんて失礼なことをおっしゃっているんですかマロ様?!」

「それで、飽きたらみんとんは捨てられるまろ!　期限がすぎたお守りのように!」

「わりと丁寧な捨てられ方です!?」

ヒソヒソと会議を始める四人。

『む〜』

あの、聞こえてますけど……と、大粒の汗を増やしていたチロルは、

「……まあ、そうですね」

頭に乗っていたむぅちゃんを膝の上に移動させてからうつむいた。

「「え？」」

疑問符を浮かべながらこちらに顔を向けた三人と、そらみたことか！　と得意げな顔を向けた一人。

「男なんてみんな同じ……百回くらい痛い目にあえばいいと思ってました」

『む～』

むぅちゃんを撫でながら、チロルは続ける。

「擦り剥いたところを完治する前にもう一度擦り剥くとか」

「「！？」」

「新品の包丁洗ってたら手が滑って指をスパっと切っちゃうとか」

「「？！」」

「勢い良く閉めた扉に自分の指をはさむとか」

「「！！？」」

彼女の発言を聞いて、想像上の痛みに身を縮める四人。

「人間のクセに本能に簡単に負ける暴力的で自己中心的な気持ちの

悪い生き物。そんなやつらに、何度も怖い思いをさせられて……」

『む～……』

震える手を、むぅちゃんの小さな手に撫でられながら、

「だから、今度はこっちが振り回して酷いめにあわせて捨ててやろうと思ってました」

ファンクラブの皆さんを指してそう言った。

「でも、ミントきゅんは違ったんですっ！」

後、チロルは顔を上げて、

「あたしのことを心の底から気遣って、綺麗で真っすぐな瞳を向けて、本当に親切に接してくれました」

真剣に聞いてくれている四人に訴えた。

「だから、……やり方は間違っているかもしれないけれど、どこにも行ってほしくなくて……。でも、あたし、ミントきゅんが好きなんです愛してるんですずっと一緒にいたいんです」

キリッと真剣な目を向けて。

「ミントきゅんを、あたしにください！！」

――脱線事故、発生。

「「持ってけ泥棒！！」」

更に、横転。

「――！！　ホントですか？！」

「もちろんだ！！」

「そうね……つらかったのね……？」

「同じ男としても、許せることではありませんね……！」

「酷いこと言ってごめんまろ！　まろ、ちーちゃんのこと応援するまろっ！！」

『む～む～！！』

などと、五人と一匹が騒いでいると、

「ただいま～」

ミントが、帰ってきた。

「『！』」

と同時に、見事なアイコンタクト。

それを受けて立ち上がったチロルは、とびきりの笑顔で彼を迎えに行った。

「おかえりなさいミントきゅん！　ご飯にするお風呂にするそれと

もアタ」

――が、

「チロル?!　ごめん、折角来てくれたのにいなくて……オレ、ポトフの家に遊びに寄ってから帰ってきたから……」

素で、ぶち壊し。

「え、あ、気にしないで?　アタイが勝手に来ただけだから……。それより、やっぱり、アタ」

「いや本当ごめんね?　もう暗いから、家まで送ってくよ」

箒を呼び出しながら、再び遮断。

「え?　えっと……」

「この時間に女の子がひとりで汽車は危ないでしょ?　えっと、確かフラワンドに住んでるんだったよね?　街までの道なら分かるから大丈夫だよ」

親切に、らぶらぶ殺し。

「……う、うん、ありがとう……」

ミントの素に負けて、彼の箒の後ろに乗り、ご自宅へと帰っていくチロル。

「ち、ちーちゃん、応援してるまろ……」

『むむ～』

そんな彼女を玄関先で見送りながら、気の毒そうに応援するブライト家の皆さんであった。

第１８０回　花屋日和

王都市、シャイアの大通り。
様々な店が立ち並ぶその中に、小さな花屋が建っていた。

『ジェラァ♪』

「そう言えばさ」

その店のカウンターにて咲き誇っている、植物とも動物とも形容し難いマッドプラントを撫でながら、

「この前、チロルと何か話してたの？」

お手伝いのミントは、ふとそんな疑問を口にした。

「んぼ？」

「どんな反応ボイスさそれは？」

すると、この店の主にして彼の母親、ジャンヌが振り向いてこう言った。

「何唐突に一週間以上も前のこと聞いてんのよ？」

「や、それは諸事情があるからでしょうよ」

裏事情にさりげなく触れるミント。

「んー、そうね。話してたっちゃあ話してたけど」

並べられた花々を綺麗に整えながら、

「あやつ、求婚しにきたみたいだのぅ」

ジャンヌはさらりとそう言った。

「？　球根？」

「チューリップじゃないわよ？」

「え？！　もしかしてマッドウィンプスベルゼモーネの！？」

「あんた随分とマニアックな植物知ってるわね？」

疑問符を浮かべた次には目を輝かせて思わず立ち上がった息子に、ジャンヌは珍しく突っ込んだ。

「球根じゃなくて求婚。あんたを嫁にくださいって」

「いや、そこ嫁じゃなくて婿じゃない？」

「ああ、そうね婿だわね」

なんて、普通に訂正をしたのも束の間。

「って、求婚？！」

やっと本題に突っ込みを入れたミントは、

「は？　え？　な、何がどうなってそんな話になるのさ？！」

あたふたしながら疑問文を重ねた。

「カエルが輪になって」

「うわめっちゃ仲良し？！　っていやいやそうじゃないしカエル関係ないし意味分かんないし！？」

ケロリと答えた母親に突っ込みを続けるミント。

「まあ、あれよ。海草よ」

「海草って、ノリって言えばいいじゃんかもう分かりにくいなぁ！」

「回想よ」

「”うまいこと言った”って顔で言ったぁ？！」

≫≫≫

「そう……あんさんが愚息を婿にしたいってのは分かったわ」

コトリ、と湯呑みをテーブルに置いたジャンヌは、その眼鏡をきらりと光らせた。

（え、オレ、なんでそんな話になったのかを聞いたんだけど。って言うか愚息って言ったよ愚息って）

聞きながら、頭で突っ込みを入れているミントはほっといて、

「でもね。あのすっとこどっこいが、どんなにすっとことっこ、ぴょーんのぽんぽんぽーんでも、おまいさんが嫌っていた男には一応変わりないことは、ゆめゆめ忘れるでないぞよ？」

回想ジャンヌは言葉を続けた。

「は……はい、分かってます……？」

ミントが男だと言うことは分かっているが、彼女の発言のせいで疑問符を付加するチロル。

「こないだも、あいつのベッドの下で発見したのよ」

「え？！」

やれやれとため息をついたジャンヌの言葉に、チロルは思わずびっくり仰天。

「あ……や、そ、そうですよね、ミントきゅんももう大人――……」

予想外のことに動揺しながらも、さも当たり前のようにチロルは振る舞おうとした。

「カブトムシが」

「って、めちゃくちゃ少年みたいな？！」

が、無駄だった。

≫≫≫

「あのさ、なんでそんな小話を今したの？」

ご尤な疑問を投げ掛けたミントは、

「んん、いい質問だわね、ゴキ三つ！！」

「何その全然嬉しくない評価？」

ジャンヌにグッと親指を立てられた。

「あんたの部屋にカブトムシがいたのよカブトムシ！　ゴキじゃなくてよりによってカブトムシが！」

「なんでカブトムシより、しかもよりによってゴキを希望してるのさ？」

「時期的におかしいでしょ？」

「と思ったら、おお、まともな疑問」

「思わず食べちゃったわよ！！」

「と思ったら、食べ……」

ちょっと待て。

「……」

「……」

「「……」」

沈黙。

「……美味しかった？」

取り敢えず、聞いてみた。

「夏の思い出の味がしたわ！」

取り敢えず、答えてみた。

「……」

「……」

「「……」」

夏の思い出の味？

カランコローン♪

「あ、いらっしゃいませー」

『ジェラジェラァ♪』

気にしたら負けだ、って言うか気にしたら気持ち悪いと思ってミントは、ちょうど入ってきたお客さんをいいことに、カブトムシから離れようと必死に努めるのであった。

第１８１回　お出掛日和

庭で謎の特訓をしているシルクハット紳士とピエロ少女とそのペットに留守を任せ、

「えっと、タマネギにニンジンにジャガイモに……」

財布を持って家を出たミントは、買う予定のものを指折りしながら商店街へと向かった。

「あ。あと、確か洗剤と歯磨き粉がなかったよなぁ」

完全に主夫化した彼は、数あるなかで一番安いと経験で学んだスーパーに入ると、早速お目当ての物を買い物カゴに入れはじめた。

「……」

一通り必要なものをカゴに入れ、ついでにコーラをおまけしたミントははたと立ち止まった。

「……？　何か忘れてるような……？」

余計なものはコーラ以外入っていないカゴ。
それをじーっと眺めてしばらく思考。

「あ、タマゴか！」

ピコンと思い出したミントが顔を上げると、

「ほへ？」

タマゴが、振り向いた。

「……」

「……」

「「……」」

もちろん、タマゴ違い。

「って、タマゴ？！」

「おお。久しぶりやな、ミント」

キャラメルブラウンのクセっ毛と緑の瞳のソバカス少年、タマゴを発見し、

「え、タマゴってシャイアに住んでたの？」

驚いたミントは質問を投げ掛けた。

「いや、観光に来てこないな生活必需品は買わへんやろ？」

すると、ご尤な答えが返ってきた。

「え、じゃあもしかしてサラダも？」

「……。まぁせやけど、そんないっしょくたにせんといてもらいた

いわ」

まるでサラダとセットが当たり前のような感じに聞こえたのか、若干不満そうなタマゴ。

「あ、ごめん。でも、へえそうだったんだぁ」

シャイアは広いことを改めて実感しているミント。

生まれてからずっとここに住んでいるのに、彼らが同じ街に住んでいることを知らなかったなんて。

「まあ、ワイらは知ってたけどな？」

そんな彼に、

「自分、その頭でめちゃくちゃ有名なんやで？」

タマゴは、矢印的な何かをぶっ刺した。

「それに、学校よくサボってたやろ？」

「……え？　タマゴって、イースト校生だったの？」

心に傷を負いながらも、ミントは驚きに目を見開いた。

イースト校、その名の通りシャイアの東に位置する学校は、ミントにとっては苦々しい思い出の場所。

「ちゃうちゃう。ワイはサウス校生や」

それを首を横に振って否定したタマゴ。

どうやら東区ではなく南区に住んでいるらしい彼は、

「自分がシャイアの外によくひとりで出てってたのを見たんや」

平日にもな、と付け加えて口を閉じた。

南区には駅があり、更には城壁で囲まれた街の通常の出口となる門がある。

「ああ、なるほど」

そこを通って街外れの花壇に通っていたミントはなるほど納得。

「学校にも行かんと……よく国立魔法学校に入れたな？」

そんな彼をしみじみと眺めながら、タマゴは続ける。

それもその筈。

国立魔法学校に入学する為には、入学試験に合格しなければならないから。

しかもその上、実はセイクリッド魔法学校はこの国においてトップクラス。

「え？　ああ……なんて言うか、すごい家庭教師さんがついてたからさ」

引きつった笑みを浮かべながら言うミント。

すごい家庭教師とは、夜な夜な城を抜け出す常習犯、ルクレツィア＝シャイアルク。

「なるほどなぁ」

「う、うん。そうそう」

流石に国王様に勉強を見てもらっていたなんて言えない彼は、納得してくれたタマゴに感謝しつつ、

「あ、そう言えばさ」

早急に話題を変えることにした。

「シャイアに住んでるのにどうしてお国喋りなの？」

自然に、自然に。

「ん？　ああ、これな。おとんの影響やねん」

狙い通り、自然に話題を変えることに成功した。

会計を済ませた後、魔法で家に荷物を移動させたミントは、

「ここや」

タマゴのご自宅にお邪魔することに。

「わは～……」

「あ、せや」

「ん？」

綺麗なお住まいに感心していたミントは、

「家に入る前に、花粉叩き落としてな？」

と、言われたので、パタパタと服を叩く。

誰か花粉症なのかな、と、少なくともマスクをして外出していないタマゴ以外の人物を予想。

その間にドアを開けたタマゴは、

「ただい」

「おっそい！！」

バリバリバリィィィ！！

電撃で、ぶっ飛ばされた。

ズザザザアッッッ！！

後、地面と激しくご対面。

「て、タマゴおおお？！」

何事かと思いつつ、ぶっ飛んだタマゴのもとにミントが駆け寄ると、

「鼻炎の薬とティッシュペーパー買ってくるのにどんだけかかってるの?!」

家の中から、ポリー先生が現れた。

「?!」

現れたポリー先生に、ミントはびっくり。

「お、おかん、ごめ……」

「!?」

タマゴのおかん発言に、ミントは更にびっくり。

「おお、タマゴ。帰ったか」

「?!」

一汗流して帰ってきたエル先生に、ミントは更に更にびっくり。

「……て、ミントさん?」

「おお。なんや、ブライトもおんのか」

どうやらこの世界は、夫婦で同じ学校の教師を勤められるらしい。

「えええええええええ?!」

タマゴの傷に、響く声。

「ちょ、ええ?!　や、セル先生とクー先生もそうだけど、夫婦で、って言うかベル先生とフェイ先生とチロルもそうだけど、家族で同じ学校行っててていいんですか!?」

が、アウトオブ眼中。
ミントは長い突っ込み質問を投下した。

「ええんちゃう?」

「ってめちゃくちゃ軽いです?!」

回答は、エル先生のお国喋り。

「……まあ、学校では一応”せんせ”言うとるしな」

「いやまあ確かにそうだけどさ!?」

補足は、それに影響されたタマゴ。

「それに、バレなきゃいいことです」

「いや、今めちゃくちゃばれてるんですが?!」

ついでに、ピノキ花粉症のポリー先生。

「ああ、では」

スチャ

「忘れていただきましょうか」

ポリー先生は、両手にトンファーを装備した。

「い、いやぁ、先生が生徒に」

「いえ、今は主婦ですし」

「や、オフだとしても生徒に手を挙げるのは問題が」

「いえ、問題ありません」

「いやいやいや、何をおっしゃって」

ミントの発言を再三遮り、

「どうせ忘れるんですから」

ポリー先生は、地を蹴った。

「い、やあああああ?!」

脱兎のごとく逃げ出したミントと、それを追う狩人、ポリー先生。

そんな二人を見送りながら、

「おかん、花粉症と違うの?」

「今日は〝非常に多い〟って言うてたのにな」

お国喋りの二人は、のんきにそんな会話をするのであった。

第１８２回　兄妹日和

雪がよく降るフェノリリル。
温泉がたくさん湧き出ていることで有名な山の奥地のその町の、一際大きな旅館の一室にて、

「すかーっ」

ポトフは気持ち良く眠っていた。

「お……重い……」

寝返りを打って潰した、ミントの上で。

「ぽ……とふ……」

「すかーっ」

「重い、ってば……」

「すかーっ」

「どい……て……」

「すかーっ」

規則的な寝息は、うつ伏せに潰れているミントに、見事な相槌を打つ。

「……っ、プリン？」

駄目だコレは、と思ったミントは、ばすばすと布団を叩きながら、反対隣の布団に寝ているプリンに助けを求めた。

「……む？」

――奇跡が起きた。

「あれ？！　ホントに起きた！？　っていやいやそうじゃなくっ……プリン、助けてっ！」

あれだけで起きるなんて思いもよらなかったのだが、起きた以上は助けてもらわねば。

「ぴわ？！　ミント！？」

引き続きばすばすと布団を叩きながら助けを求めていたミントを発見したプリンは、

「ば、馬鹿馬鹿馬鹿っ！　どこに寝ているんだ馬鹿犬？！」

枕でポトフをばすばすと叩きながらこう言った。

「ミントがはみ出ちゃうっ！」

はみ出る？

「……ってェな……。んだよ？」

文字通り叩き起こされたポトフは、

「だからミントがはみ出ちゃう！」

「は？　って、おお？！」

自分がミントを潰していることに気が付いた。

「ミントはみ出てない大丈夫っ？！」

「ゴメン！　何もはみ出てねェよなミントォ！？」

「……なんとか……」

一体ミントから何がはみ出ると言うのか。

「はみ出るって、内臓がー？」

その疑問に答える疑問を繰り出したのは、朝ご飯を持ってきたココア。

「たく、朝っぱらから汚い会話しないでよねー？」

「む、馬鹿犬が重いのが悪いっ！」

「やっべェ俺ダイエットした方がいいのかな？！」

「……それよかまず寝相をなおそうよ？」

という具合に、朝っぱらから騒がしい彼らの部屋にココアがお膳

を並べていると、

「ははは、手伝うよマイシスタ♪」

自然に部屋に入ってきた人物が一人。

「ふわあ?!　ど、どっから湧いて出たのよ馬鹿兄ー!?」

くりくりした桜色の髪がココアにそっくりな、青い瞳の彼はココアの兄、ショコラ。

「お兄様?!」

「おーっと手が滑ったー」

妹を手伝いに来た彼は、お吸物をうっかりポトフの顔にぶっかけてしまった。

「うあっつぅぅぅ?!」

「って、どこがうっかりなのよー!?」

だしの利いた美味しいお吸物の逆襲。

飲まれてたまるかと顔面にかかった熱々のそれに思わず叫んだポトフと、慌ててておしぼりで拭いてあげるココア。

「美味しいねぇ」

「うむ。松茸の味だ」

すっかり蚊帳の外なミントとプリンは、しっかりお吸物をいただいている。

「な……？！」

そんな二人はほっといて、

「大丈夫ー？」

「あ、ありがとォココアちゃん」

ショコラは、熱々なお二人に衝撃を受けていた。

「な、なな……何故だココア？！」

「何故って、アンタがお吸物ぶっかけたからでしょー？」

ココアの的確な突っ込みを無視して、ショコラは語りだした。

≫≫≫

「ココア？」

「ん？」

名前を呼ぶと、ちっちゃいココアはクレヨンを止めて振り向いた。

「なーに？　おにいちゃん」

用件を尋ねてきた彼女に、

「ココアはお兄ちゃんと結婚するんだよなー？」

ショコラは、にっこりと笑って確認した。

「んーん。ココアはかっこよくてやさしくて、あたまもよくておかねもちのひととけっこんするの！」

≫≫≫

「昔はお兄ちゃんと結婚するって言ってたじゃないか？！」

「や、そんなこと一回も言ってないけどー？」

自分で語っておいて総無視した彼に、妹の冷ややかな視線が突き刺さる。

「それなのに、よりによってそんなチャラそうな男、略してチそ男と！！」

「え、俺ってチそ男だったのかァ？！」

「その前にチそ男じゃなくてチャラ男って言うんだろうけどね」

「うむ。語呂が悪い」

ズビシッと指を差され、ショックを受けたポトフに、さらりと返すミントとプリン。

「しかも、見るからに女の子を複数つれ回してヘラヘラしてそうな

野郎じゃないか！！」

「む。お見事大正解――」

「キラキラァ！！」

「ダークネスサクリファイスーっ！！」

言い掛けたプリンの口を慌ててストップさせるポトフとココア。

「とにかくっ！　そんなココアを遊んで汚して傷付けて泣かせそうなヤツは、お兄ちゃんは絶対に認めないからな！！」

ぶっ飛ばされたプリンの肩をぽんと叩くミントをよそに、ショコラがそう言い放つと、

「そんなこと、夜中に家を抜け出して彼女のとこに遊びに行ってるようなヒトに言われたくないよー？」

と、ココアがさらりと言い返した。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「「……」」

四人の冷ややかな視線が、ショコラ一人に突き刺さった。

「……え？　なんでそれを知っ――……」

「あらあら、家の門限は夜の十時まででしょう？」

ショコラの言葉を遮った人物は、いつの間にやら彼の後ろに立っていたココアママ。

「――て……」

「ちょっとこっちにいらっしゃい、しょーちゃん？」

四人の冷ややかな視線をその身に受けながら、母親に引きずられていくショコラであった。

第１８３回　青春日和

春めく陽気のなか、やわらかな風に乗って桜の花弁がひらひらと舞うグラウンド。
靴ひもをしっかりと結び、そこに立った彼の顔は、

「……ぷえ……」

超嫌そう。

「……本当にやるの？」

校庭に出て三秒後、早くも帰りたくなったプリンが尋ねると、

「「当然」」

彼の隣に立つ友人、ミントとポトフがばっちりと頷いた。

「体力は基本だよ！　それにキミ、学力は学年最上位なのに体力は学年最下位なんだよ？」

「そォそォ。負けっぱなしで悔しくねェのかよ？」

頭はトップで体はドベだったプリンに、ミントとポトフが訴える。

「うむ。別にいい」

別にハナからトップなど狙っていないと、プリンは頷きながら即答した。

「いくないの！」

が、否定された。

「もうすぐ体力テストでしょう？」

「うむ」

「お前また学年最下位に成り下がる気かよ？！」

「うむ」

「いやいやいやそこは否定しようよ！？」

「む？　だって」

とりわけプライドがあるわけでもないプリンは、そんな二人に正論を突き付けた。

「僕、握力以外は開始十秒で疲れるんだぞ？」

開き直りの風格。

「っだから、それを改善する為に特訓しに来たんじゃんか！」

「ぷゆう！」

無意味に威厳のある彼にビシィッとキレのあるツッコミチョップをお見舞いした後、

「まずは走り込みだよ！　ほら、ここに立って」

彼をスタートラインに立たせ、呼び出した箒を振り上げた。

「付き合ってやるんだからありがたく思えよ？」

「む、お前も走るのか？」

トントンと爪先で地面を叩きながら言ったポトフに首を傾げるプリン。

「そ。速い人と走った方が速くなるってよく言うでしょ？」

彼の疑問に答えたあとで、ミントは勢い良く箒を振り下ろした。

「よーい、どんっ！」

走り込み、スタート。

「……」

走り出した二人を見て、何も言えなくなるミント。

擬声語で現状を表すと、どぴゅーん、と、ぱたぱた。

「んっだそのちょっとした所要を思い出して室内を小走りするときみたいな走り方はァァァ！？」

「ぴわあ？！」

トラックを一周回ってプリンに易々と追い付いたポトフは、両手で彼を押し始めた。

「ば、馬鹿か貴様は！　四百メートルもあるんだからペース配分というものが」

「四百メートルしかねェだろって言うか俺はとっくに超えてるぞって言うかペース配分とか明らか必要ねェだろォ！？」

「何を言うか、四百メートルだぞ？！　センチになおすと四万センチメートルでミリになおすと四十万ミリメートルでマイクロになおすと四億マイクロメートルでナノになおすと四千億」

「お前の歩幅はナノ単位かァァァァ！？」

などと言い合いながらも、押されていることによってプリンの足はその分速くなる。

「ぷ、わっ？！」

が、分不相応な足の動かし方は、破滅を呼ぶだけであって。

「ぴわあ！」

「うおわァ？！」

ズザザザアッッッ！！

足がもつれた彼は、ポトフを巻き込んで盛大にずっこけた。

「……うん。差がありすぎたね」

速い人と一緒に走ると言っても、体力面でも学年トップな彼と走らせるのはと、ようやく無理に気付いたミントであった。

「気を取り直して、じゃあ一回走ってみようか？」

回復魔法のありがたみを身をもって体験したプリンに、ゴール地点に立ったミントはそう言った。

「あれったけの距離を走ったくらいでウォーミングアップになるとは思えねェけど」

「ぷう……は……」

「そうでもねェみたいだからやってみっか」

トラックを半周もしていないプリンの息が若干あがっていることに気付いたポトフは、取り敢えず右手をスタートフラッグの代わりにした。

「はい、スタートォ」

ゆるい掛け声に、プリンは枕を抱えたまま走りだす。

ピッ

結果、

「わっは～、単純計算してポトフが二回ゴールできるね」

ポトフが行って帰って行った分。

「お前、ちゃんと本気で」

「ぴわ……ぷう……っ」

「……やってるんだな？」

呆れたように言い掛けた途中で、ポトフは彼が本気だったことに気付く。

「たく、今までどんな生活送ってたんだか」

「まあ、歩き以外は瞬間移動だし」

「まったくもって魔力の無駄遣いだよな」

「そだねぇ。魔力が高いからいいものの、テレポートは普通一回使ったらすっからかんになる消費量なんでしょ？」

そう言いながら、

ガシッ

「ふっ……、ぷゆ？」

ミントとポトフは、プリンの両腕をしっかりと掴んだ。

「「特訓あるのみ」」

「!?　ま、まだやるのか?!」

「「特訓あるのみ」」

大事なことだから、二回。

「っヤー!!」

そういうわけで、グラウンドをひたすら走り続ける三人を見て、

「青春じゃあ……!!」

体育担当のエル先生は、感動の涙を流していた。

今年の体力テストのプリンの成績がちょっぴりアップしたのは、特訓のおかげかエル先生の好感度アップなおかげなのかは定かではない。

第１８３回　青春日和（後書き）

更新不定期誠に申し訳ございません……っ！
どうやらかなりのスランプらしく思うように書けません
よって今回もかなり微妙な話に……

まだまだ抜け出せていませんゆえ、今後も気長に待っていただけると嬉しいです……！！

第１８４回　同族日和

青い空の下、緑色の芝生の上で、

「ミっント～ォ！！」

「わは～なんか久しぶり」

温かな陽を浴びていたミントは、ポトフに久しぶりにガバーッと飛び付かれた。

「どしたのさ？　今日はココアとデートしてくるんじゃなかったの？」

ミント相変わらずほっそいなァ！　とか言いながらひっついている彼に、何事もなかったようにコーラを飲み飲み質問するミント。

「の、筈だったんだけど、ほら、女の子にもいろいろあるだろォ？」

そんな彼を文字通り振り回しつつポトフが応えた。

「ああ、女心と秋の空？」

「え、何俺フラれちゃったの？」

その言葉に、ミントを後ろから抱えてぐーるぐーる回っていたポトフはぴたっと停止した。

「そうだったら面白いかなと」

「人の不幸は蜜の味?!」

おにぃさんそんな子に育てた覚えはないぜェ!?　とか、いや育てられた覚えはないけど、とか会話している彼らの横には、

「仲良し、ですね」

「そうだねぇ」

「む、ミントが弟……」

「……。万更でもなさそうだな」

「いやいや、アンタよりもミントの方が上なんでしょ?　誕生日的に」

プリンと異世界フレンズが。

「む?　ミントがお兄さん?」

「おにぃ……」

ウララの発言に、立ち上がったプリンと、もともと立っているポトフはミントを見下ろす。

「……」

そう、見下ろす。

「「やっぱり弟」」

「うっさい！！　これでもちゃんと伸びてるんだからね？！」

１８０もある彼らに挟まれたミントは、やっぱり小さく見えてしまうようで。

「む？　伸びたのか？」

「３ミリ！」

「変わんねぇって」

「うむ。靴下か帽子でどうにかなるぞ」

「ちっげーし！　変わったし！　伸びたんだし！！」

「そかそか。おっきくなったなァミント？」

「っにゃあああああ！！」

慈愛に満ち溢れた顔でよしよしと頭を撫でられ、怒りのあまり猫化するミント。

「言われてみれば、プリンとポトフって背ぇ高いわよねぇ？」

「頭、ごっちんしそう、です」

敷居を跨ぐ時に、とほのぼの言うウララとリン。

「あのね、僕も3ミリ伸びたんだよ！」

「そ、そうか。3ミリも大きくなったのか」

きらきらした顔でアオイに訴えられ、気付かなかった上に彼よりも高いユウは反応に困っている。

「あらま。じゃあ私の方が高くなったのね？」

「ええ？！　ウララ何センチ！？」

「163．6」

「ええ、僕より3ミリ……！？」

「き、気にするなアオイ！　3ミリくらい、あってないようなものだっ」

「ユウ、さっきと言ってること違う、です」

3ミリ議論、伝染。

「て言うかそもそもさ？！　兄弟決めるのに身長関係ないじゃん！」

「て言うか、もともと兄弟じゃない、です」

リンの冷静な突っ込みは流されて、

「それもそうねぇ。現にプリンとポトフは同じ身長だし、私のお姉ちゃんも私より低いし」

ウララは双子を見比べながらそう言った。

「あ、そう言えばプリンとポトフって、どっちがお兄さんなの？」

それを受けて、アオイが首を傾げると、

「僕」

「俺」

二人は、同時に同調子で答えた。

「……や、ゼリーさんが言ってたじゃんか。ポトフがプリンの双子の弟だって」

きょとんとしたアオイたちの隣で、手を横に振りながら言うミント。

「いーや、よく考えたら、俺のが断っ然お兄ちゃんだぜ」

それを真っ向から否定するポトフ。

「何を言うか、僕が兄に決まっているだろう」

更にそれを真っ向から否定するプリン。

「て言うか、双子ってのは認めるようになったんだね？」

火花を散らし始めた今の二人に、ミントの声は残念ながら届かず、

「んだとテメェ、運動能力は遥かに俺の方が上じゃねェか！」

「貴様こそ、頭で僕に勝てたことなど今まで一度もないだろう！」

「うっせェ！　頭は一位と二位だけどな、体は一位と最下位だ！！」

「煩い！　その分僕は貴様より魔力が断然高いんだっ！！」

「テメェより料理がずっと出来るぜ？！」

「貴様よりずっとずっと器用だ！！」

「テメェよりいっぱい食うぞ！」

「貴様よりいっぱいいっぱい寝るぞ！」

プリンとポトフの熾烈な口喧嘩が始まった。

「レベルが高いんだか低いんだか分かんないわね」

「大丈夫。低いんだよ」

「……ご苦労様、です」

呆れたように肩をすくめたウララの隣で肩を落としたミントの肩に、リンはぽんっと手を置いた。

「仲良しだねぇ」

「そうだな」

そんな二人を見て、楽しそうにくすりと笑いながら言うアオイに、お前が原因だろうとは絶対に言わないアオイ贔屓、ユウ。

「おお、喧嘩か？　ふわふわ」

そこへ、大鎌に乗った死神が、言葉通りふわふわとやってきた。

「大喧嘩だよ」

突然現れた彼の言葉に、すんなりと頷いてみせるミント。

「フッフッフッ、仲良しだな。オレ様とゆうこりん程ではないが」

「いつ俺と仲良くなったんだアホ神」

不適に笑って言う死神に、ユウは表情一つ変えずにさらりとそう返した。

「わは～、何？　ユウとワタルもこんな感じなの？」

「うん、仲いいよねぇ」

「アンタはいつも平和だわね？」

「て言うか、ゆうこりんは否定しない、ですか？」

何か違うが、プリンとポトフと同じようなにおいを感じ取ったミントと、いつもの調子で喋るアオイとリンとウララ。

「お互いニックネーム呼びだし」

「いい加減あの呼び方はやめろアホ神」

「バレンタインデーにオレ様にたくさん手作りチョコレートくれたし」

「俺が作ったわけじゃないし単に甘いものが嫌いなだけだアホ神」

「フッフッフッ、ツンデレだな」

「お望みならぶっ飛ばしてやるぞアホ神」

なんて、淡々とした会話を聞いていると、ミントはふとあることに気が付いた。

「そう言えば、ワタルって変なニックネームつけるよね？」

注意、悪意はない。

「ん、よく気付いたな。みんとんにプリッツ、ポッティーで、うららんにりんりんにゆうこりんに」

「だから誰がゆうこりんだ？」

死神も、ユウに釵を突き付けられながら、発言の途中であることに気が付いた。

「……、アオイ？」

アオイだけ、ニックネームを付けていないことに。

「そう言えば、アオイはアオイって読んでる、です」

「そ言えばそうねぇ」

「僕はプリンだっ！」

「ポッティーて……なんか懐かしいなァ？」

そのことに気付いたリンとウララと、ニックネームに反応するプリンとポトフ。

「でさ、アオイもアオイでワタルには”さん”付けだよね？」

「え？　あ、そう言えば、死神さんは死神さんだね」

ミントとアオイは、アオイの呼び方についても気が付いた。

「それは、ワタルが初め、”死神”として現れたから、ではないですか？」

「ああ、苗字じゃなくて、職業の方ね」

詰まり、”死神さん”の”死神”は、名前じゃないということ。

「そっか、気が付かなかった。ごめんね？　えっと、……わ、ワタル」

と、アオイが照れながら名前を呼んでみたところで、

「フッフッフッ。気にするな、あおむ――」

「《暗雲の閃光は破滅をもたらす》」

やっぱり吹っ飛ばされた死神。

彼の付ける安直なニックネームは、どうやらユウのお気に召さなかったようだ。

第１８５回　逆訪問日和

青く晴れ渡った空に、人で賑わう高等学校。
学園祭の日のお昼過ぎ。
校門の近くの立派な木の下に、

「きゃ！　見て見てあの人！」

「やーん、素敵っ！　しかも双子？」

その人混みのなかで、多くの女性票を集める黒髪双子がいた。

「あは、そう言えばそんな設定だったね」

きゃいきゃい騒がれている彼らに、今思い出したように帽子を被った黒髪の男の子が言うと、

「む？　設定？」

「ひでェなミント、俺のイケメン加減を忘れるなんて？」

一方が枕を片手に首を傾げて、一方がナルシーっぷりを披露した。

「それにしても、黒髪になると本当にそっくりだよねー？」

その隣で、こちらは多くの男性票を集めている黒髪女の子が発言した。

「な――」

「むう、こんな馬鹿と僕を一緒にするな」

「――んだとテメェもう一辺言ってみろ？」

「むう、こんな馬鹿と僕を一緒にするな」

「上等だなテメェ」

こちらの世界では少々派手な髪色を魔法で黒く見せ、ますます双子度が増した彼らはプリンとポトフ。

「そっくりそっくりー」

「まあ、枕と眼帯で見分けつくけどね」

そんな彼らを眺める、こちらも黒髪ココアとミント。

「あ、ちょっとあれって」

「なーんだ、彼女連れかぁ……」

そう言えば美形だった彼らを熱心に見ていた女衆は、残念そうに踵を返した。

「どっちも」

と、言って。

「って、聞き捨てならねえ？！」

その最後の一言が聞き捨てならなかったミント。

「ふえ？　どったのミントー？」

「誰が彼女かあ！？」

「あーなんだ、そんなことー？」

「そんなこととは何さけしからん！！」

ご立腹ミントの訴えに、

「だって実際ミントは女だよー？」

ココアは呆れたようにそう言った。

「いや、何勝手にヒトの性別ねじまげてんのさ？！」

「あ、間違えた。女顔だよー？」

「どんな間違い！？　って言うか、そんなん絶対認めねえええ！！」

十八にもなって性別を間違えられるなんてたまったもんじゃないと、ミントはその事実を否定した。

「でもさー、私も初め女の子かと思ったもーん」

「いや知らねえしって言うか聞き捨てならねえ？！」

「あ、ちなみに俺もォ」

「いや何さそのいらん捕捉!?」

ココアとポトフに突っ込みを入れた後、ミントは助けを求めるようにプリンを見た。

「……」

プリンは、目を逸らした。

「――っ!?」

そんなバカな。

ミントは衝撃のあまり、その場でガクッと両膝をついた。

「おォ、ミントが燃え尽きたァ?!」

「ぴわわっ、ミント冗談だっ!」

そんな彼に、ポトフとプリンが慌てていると、

「お待たせしました、です」

制服を着た栗色髪の彼女、リンがやってきた。

「? どうかしました、ですか?」

その独特な口調で、彼女は体操座りし始めたミントと彼を必死で慰めるプリンとポトフを見て疑問を口にした。

「ねーねー、リンは初め、ミントが男の子か女の子のどっちに見えたー？」

すると、ココアはそれに疑問文で答えた。

「……。そう、ですね」

それで状況を理解したリンは、落ち込みつつもわずかな希望を抱いて耳をそばだてたミントを見て答えた。

「アオイと同種だと思いました、です」

アオイと、同種。

「マジで？！」

それすなわち、男の子。

ミントはぱあっと顔を明るくし、ちょうど頭の上にあったポトフにヘッドアッパーを食らわしながら立ち上がった。

「はい、です」

「わあ……っ！　流石リン！！」

こくりと頷いたリンに涙ぐむミント。

（そういう意味合いじゃないと思うんだけどー？）

喜びが最高潮な彼に、ココアは言ってはならない思考をめぐらせた。

「む？　リンちゃんだけか？」

（”ちゃん”？！　て、あ。私も最初呼ばれたかー）

小首を傾げたプリンの言葉にびっくりしつつ、初めは自分も”ちゃん”付けされたことを思い出すココア。

「はい、です」

が、当の本人は気にも止めず。

「リンの店番は終わって交代してもらいましたが、ウララたちは部活の店番の方がある、です」

プリンの問いに答えたリンは、彼らに新たな疑問を抱かせた。

「部活？」

部活とはなんぞや、と、ミント。

「部活動、です」

ちょっと長くしたリン。

「部活動って？」

続けて質問するポトフ。

「……。主に放課後に開かれる、文化やスポーツなど特定の種類の

ものを、そこに所属した生徒が集団で行う教科外活動、です」

それに、リンは簡潔に説明してみせた。

「詰まり、学校終わってからみんなで合奏したりスポーツしたりするってことー？」

「はい、です」

もっと簡単にしたココアにこくりと頷いたリンは、

「……物好きだな」

「はい、です」

何故に学校終わってからスポーツなんぞやるしかないんだという感じのプリンにもこくりと頷いた。

帰宅部上等。

「へえ、部活って、どんなのがあるの？」

が、わりとスポーツ好きなミントが興味をもって質問してきたので、

「この学校には、野球部、サッカー部、バスケットボール部、ソフトテニス部、水泳部、陸上部、柔道部、空手道部、弓道部、吹奏楽部、美術部、茶道部、華道部、書道部、などがある、です」

リンは、思い当たる主な部活を列挙した。

「へー、リンは何部なのー？」

後、尋ねるココア。

「帰宅部、です」

帰宅部上等。

「帰宅……詰まり、無所属なわけだね？」

「はい、です」

「む。では僕たちも帰宅部か」

「いや、そもそも部活がねェだろ」

「ね、じゃーウララとかアオイは何してるのー？」

学園祭らしくお店で賑わう校内を適当に歩きながら、会話するリンと異世界組。

「アオイはテニス部で、ウララとユウはバスケ部、です」

「ええ！　ウララはなんか分かるけどアオイとユウってテニスとバスケやってるのー？」

「はい、です。強いかどうかは知りません、ですが」

「へー！　あ、ワタルはー？」

「美術部、です」

「えええ?!　ワタルが美術ー!?」

「はい、です。ちなみに、絵画コンクール連続金メダリスト、です」

「えええええ!?　ワタルってそんな特技がー?!」

そんな会話をしながら出店を回るリンとココア。

「平和な学園祭だなァ」

「うむ。サバイバル感は皆無だな」

当たり前のことを当たり前じゃなく言うポトフとプリン。

（てことは、本格的にヘタクソなんだなぁオレ……）

実は美的センス抜群だった死神に”カオス”と言われたことを思い出し、知ってはいたものの、本格的に落ち込むミントであった。

第１８６回　招待日和

学園祭に招待してくれたお礼にご招待。

『レディースアンドジェントルメーン！！』

したのはよかったのだが、

「……テンションたけー、です」

「なになに？　これって闘技場？」

「闘技場って、……え？　もしかして、戦うの？」

「……随分と荒れた学園祭だな」

国立魔法学校のグラウンドに突如現れた闘技場の観客席に座ったリンとウララとアオイとユウは、世間一般的な感想を口にした。

「あ、あれー？　去年は普通だったのにー」

「うむ。元に戻ったようだな」

「しかしユウたちの感想に違和感を覚えるオレって一体……？」

彼らの横で、苦笑いを浮かべるしかないココアとミントと、なんだか眠そうなプリン。

『それじゃあ始めるよ！　第一回戦、チロル＝チョコ！　バーサス、

アロエ＝ヨーグルト！』

そんなことはお構いなしに、クー先生はいつも通りにハイテンション。

「あ、アロエ、です」

「あらホント。しかも相手はミント嫁ね」

「いやいやいやいやいや」

ステージに上がったアロエとチロルに反応したリンとウララと、ウララの発言に反応したミント。

「何照れてるのよ？　ミントチョコはすでに世間で認められてるでしょ？」

「いや関係ねえし！　って言うか婿養子?!　しかもミントチョコって確かに周知されてるけどそんな好みが別れるようなものを」

「あー、ちなみに私はアレ嫌いよ」

「って、しかも嫌いなのかよ?!」

「だって歯みがき粉の味がするじゃない」

「一般的な理由！　ものすごく一般的な理由!!」

「なんでチョコに余計なもの纏わせるのよって感じよね」

「重点的に否定したね!?　今、ミント要素だけを重点的に否定したね?!」

何故かミントチョコ議論を始めたミントとウララ。

「……。ココアプリンもある、です」

「って、流れ弾ー?!　ちょ、やめてよリンー!」

「カスタード以外のプリンは邪道だ」

「しかもなんか私がフラれちゃったみたいになってるしー!?」

そして、リンとココアとプリンによるココアプリン討論も展開した。

「わあ、すごいねユウ!　雷と炎の魔法だよ!」

「そうだな。奇声があがったな」

「真剣勝負、って感じだね!」

「そうだな。雄叫びがあがったな」

「でも、危なくないのかな?」

「そうだな。悲鳴があがったな」

そのなかで、ほのぼのしていない内容の会話でほのぼのするアオイとユウ。

『決まったー！！　勝者、アロエ＝ヨーグルト！！』

そうこうしているうちにアロエが勝利。

彼女が、”レディがはしたないですよ”、と捨て台詞を残してステージを降りたことから、どうやら先程の奇声と雄叫びはチロルのものであったらしい。

「あれ？　アロエが勝ったのー？」

「あらら。じゃあ負けたのね、ミント嫁は」

「まだ言うか？！」

勝敗に興味を示したココアとウララと、まだまだ元気に突っ込むミント。

「ん？　もう試合は終わっちゃったのか？」

するとそこへ、ポップコーンを抱えた死神がやってきた。

「うむ。アロエちゃんの勝ちだ」

「だからそれ激しく抵抗あるんだけどプリンー？」

プリンの”ちゃん”付けがどうにも許容できないココアをよそに、

「アロエか。アロエはにきびに効くからな」

「いやそのアロエじゃないって言うかにきびって」

「フッフッフッ。青春の勲章だ」

「なんでそこ無意味に偉そうなのさ？」

「妥当☆アクネ菌！」

「しかもなんか漢字変換間違ってない？」

「なん打倒？」

「わっは～、ダジャレきた～」

「フッフッフッ、きゅうり味のポップコーン食べるか？」

「え、斬新」

突っ込みに忙しいミントは死神に突っ込みを続けている。

『続いて第二試合！　イチゴ＝タルト、バーサス、ポトフ＝フラント！！』

と、その時、完全に学園祭そっちのけで会話していた彼らの耳に、クー先生のアナウンスが聞こえてきた。

「「きゃあああああ！」」

ついでに、黄色い歓声も聞こえてきた。

「「ポトフくううううん！！」」

更についでに、ハートもいっぱい飛んできた。

「……」

「……」

「……」

「「……」」

間。

「わあ、ポトフって大人気なんだね？」

「フッフッフッ、なんてったって家庭的な料理だからな。オレ様は嫌いだが」

「だからそっちじゃねえ、です」

観客席からポトフを見下ろしながらほのぼの会話するは、アオイと死神とリン。

「お。コっコアちゃァ～ん！！」

黄色い歓声をものともせずに、ただ愛しの彼女だけを見て無邪気に右手を振るポトフ。

「……。アイツ、手ぇ振ってるぞ」

「うむ。ココアご指名だ」

喜色満面で愛しの彼女に向かって手を振る彼を無表情で見下ろしているプリンと、死神から強奪したきゅうり味のポップコーンを抱えているユウ。

「……あんた、すんごいのが彼なのね？　周りからバシバシ敵意向けられてる気がするんだけど」

なんだか恐ろしい状況に耐えかねて、ウララは思わずこう言った。

「いじめとかあわなかった？」

と。

「……ふ」

「……へ？」

すると、

「うん、始めはあったよー陰湿なのが。椅子にガビョウが置いてあったりー、陰口たたかれたりー。うふふふー」

「あはは、でもココアはいいじゃんか。ミスウサギさん寮って盾があるんだからさ。オレなんて完全無防備だから滅多打ちだよ？」

「あ、そっかそっか。チロルは学校一美人さんだしスタイル抜群だしねー」

「まあ、プリンもだけどポトフも学校一美男子さんだし成績もいい

しねー」

「たいてい一人の時を狙ってくるんだよねー」

「そうそう。絶妙なタイミングでしかけてくるんだよね」

「うふふ、ミントも苦労しますなー」

「あはは、本当だよねココア」

ココアとミントは、どこか遠くの方を見ながらうわごとのように語りだした。

「うふふふふふふー」

「あはははははははは」

何か踏んではいけないスイッチを踏んでしまったらしいウララ。

「な、なんかごめんなさい……」

ここではないどこか遠くを見て清々しく笑い続ける二人に、深々と頭を下げて謝る彼女であった。

第１８７回　旅行日和

修学旅行でやってきたのは、定番の古都。
歴史を感じる街で自由行動が始まってからしばらくして、

「……」

ミントは、ぷくーっとむくれていた。

「……」

そんな彼を見て、隣を歩いているプリンは、

「えいっ」

「ぷふ」

人さし指で、ミントの頬を破裂させた。

「って、何するのさ?!」

「む。つい」

「いや何テヘッて謝ってるのさ、テヘッて!!」

テヘッと謝ってきた彼にミントが突っ込みを入れたところ、

「まーだ気にしてるのー？　いい加減認めちゃいなよー？」

ココアが呆れたようにため息をついた。

「いや断じて認めねえしって言うかオレのどこが女なんだよって言うかいい加減しつこいと思うんだよねこのネタ！？」

するとミントは、激しく突っ込みながらそう訴えた。

「しつこいって、いや実際ここで会った人はみんな今日初めてミントを見たわけだしー」

ネタってなんだネタって、とか思いながら、ココアは彼の目の前で人差し指でくるくると円を描きだした。

「ほーら、ミントはだんだん女の子になるーミントはだんだん女の子になるー」

ザ、催眠術。

「なるかぁ！？」

催眠術、失敗。

「あは、大丈夫。ミントは男だぜェ？」

その時、思いもよらぬところから慰めが。

「！　ポトフ……！」

それに驚きながらも感動したミントが顔をそちらに向けると、ポトフは何もかも分かっているかのように頷いた。

「ぎゅってしたとき、ホネホネしてるからな」

ココアちゃんと違って。

「ダークネスサクリファイスー！！」

と、いつも通りポトフがココアにぶっ飛ばされている間、

「……はあ……」

ミントは再び意気消沈。

「どう考えてもその判断基準はおかしいでしょこの変態ー！！」

「や、でも実際女の子は誰でも比較的ふわふわして」

「何その女の子は誰でも素敵になれる的な発言、って言うか、誰でもって、さ、最っ低ー！！　やっぱり女の子なら誰でもよかったのねー？！」

「へえ？！　い、いやいやいやいや、決してそういう意味じゃァなくて」

「何よ別に男の子でもよかったって言うのこの無差別タラシー！！」

「何故に！？　ちちち違うって、ほっ、ほら、女の子は男より体に脂肪がつきやすいから、って言うか、真面目に俺が好きな女の子はココアちゃんだけで」

「ええい、問答無用じゃ女の敵め！　成敗いたすーっ！！」

「ってだから誤解だってばァァァァ？！」

まるで浮気がばれたときのような言い訳をするポトフと、せっかく古都にやってきたということで口調に変化が生じたココア。

「む。ミント」

そんな残念なバックグラウンドミュージックを聞き流しながら、プリンはミントの袖を引いた。

「……？」

何？　と顔を上げたミントに、

「お寺！」

前方に見えてきたお寺を指でさす。
どうやら彼は、修学旅行をしっかりまっとうしていたようだ。

「……。ん、そうだね」

言われて思い出したミントは、笑顔を取り戻して頷いた。
そうだ、ココアが見たいと言って入った着物店の店員に素敵な振り袖を薦められたからってご機嫌を斜め５８度にしている場合ではない。

「よーし、あのお寺まで競争だよプリン！」

「うむ！」

もとを正せば自分が原因でダークネスサクリファイス衝撃の２０ヒットを記録したポトフをよそに、ミントはお寺に向け、競って走りだした。

「テレポート！」

「うおおい？！」

勝てるわけがなかった。

ばっちり観光した後向かった先は、風情あふれる温泉旅館。

「やっぱ風呂上がりはコーラだよね！」

効能書きまくりな温泉から上がり、浴衣に身を包んだミントは、お得意のコーラ一気飲みを披露した。

「うむ。お風呂上がりはプリンに限るな」

それに同意しながらも、まったくもって内容の異なることを言うプ

リン。

「あっは、鹿肉最高だぜェ♪」

ポトフにいたっては、この地では神聖とされている鹿の肉を気持ち良く頬張っている。

「わは～、布団っていうのもなんかいいよね」

部屋割りもいつも通りだったらしく、畳に並んだ布団三式を見て言うミント。

「あ」

彼は、そこで何かに気が付いた。

「む？」

「はェ？」

そそそと枕元に移動したミントに、プリンとポトフが疑問符を浮かべると、

「そう言えば今までなんでやらなかったんだろう！」

彼は、三つの枕を持ち上げて友人に向き直った。

「やらなかったって、何をだミントォ？」

それでも分からないポトフは、更に疑問を深めた。

「旅館と言えば」

ミント、大きく振りかぶって、

「枕投げだよ！」

投げた、投げた、投げた。

「ぴわ！？」

「おォ？！」

判定、デッドボール。

「むう、お返しっ！」

「あはは、まだまだぁ！」

当てられた枕をプリンが投げ返し、それをまたミントに投げ返され。

彼らの部屋で、楽しい枕投げ大会が始まった。

「む、枕がない」

「いやいやプリン持ってるじゃんか」

「むう。これは、め」

ちなみに、プリンは間違っても自分の枕は投げないようだ。

「……」

そんな二人を見て、ポトフはおもむろに参戦した。

「でりゃァァァ！！」

枕投げに。

「ってその枕じゃないからねえええ?!」

見事な一本背負いを仕掛けたポトフに、ミントは慌てて突っ込んだ。

「ぴわあ?!」

が、時すでに遅く、もちろん受け身なんて心得ていないプリンは畳にビターン。

「あっはっはっ！　楽しいなァ、枕投げ?」

完全に主旨を履き違えているポトフが愉快そうに笑うが、

「っき……貴様……！」

それを快く許すプリンではなく。

「わ、わは～……」

始まっちゃったよとばかりに、ミントは苦笑い。

「枕の綿にしてくれる！」

「あっは、上等だァ！」

こうして、楽しい枕投げ大会は、壮絶な枕投げ大会へと化したのであった。

「……”枕の綿”？」

第１８８回　苦手日和

高校からの帰り道。
プリントを渡すよう先生に頼まれて、友人宅にやってきた黒髪の彼はユウ。

「……」

すれ違う人が思わず二度見してしまうような整った顔をした背の高い彼。
しかし、人格がひねくれているためか性格が悪いためか、興味の対象にない相手はことごとく突き放す。
更に口数も多い方ではないことも加わって、彼は彼の通う高校において、クールな硬派野郎で通っている。

「……っ」

そんなクールな硬派野郎にも、弱点があった。
そのうちのひとつは、甘いもの。
甘味に何一つとして魅力を感じないらしい。
って言うか、もはやきゅうり以外の食べ物は邪道だと思っている勢いである。
もうひとつは、高いところ。
安定感のない、足が竦むような場所が単純に怖いようだ。
更にひとつは、オバケ。
なんて言うか、存在しちゃダメだろ。
そしてもうひとつは、

『ヘッヘッヘッヘッヘッ』

――動物。
　都会というわけでもないこの辺りは、広い庭のある住宅がわりと多い。
それは、小綺麗な美容院の隣に建つ、この簡素な家も例外ではなく。
ぴくっ
日向という表札のある門から一歩足を踏み入れると、気配に気付いて庭にある大きめの小屋から顔を出す。
「く……っ！」
ピンク色の舌を垂らした白くてもこもこした、やたら存在感のあるそいつは、家にやってきたユウを確認すると、のそのそと小屋の外に出た。
『ヘッヘッヘッヘッヘッ』
大型犬の彼の名は、モコモコ。
安直すぎるその名前をつけたのは、彼のご主人様、アオイ。
彼は、舌を出したまま呼吸をしつつ、つぶらな瞳をきらきらと輝かせる。
――遊んで遊んで！
まるでそう言っているように、おもむろに近付いてくるモコモコ。
「……！！」

――来るな来るな来るな！

まるでそう言っているように、素早く距離をとるユウ。

人懐っこいモコモコは、動物嫌いのユウにしてみたら尋常じゃないほどのいい迷惑。

よって、彼の一番の友人であるアオイの家の門から玄関までの約数メートルは、彼の前に立ちはだかる最大の難所。

『ヘッヘッヘッヘッヘッ』

リードで繋がれているが、アオイの優しさからか、残念ながらあまり行動が制限されていない。

「っ……！！」

ゆえに、積極的なモコモコはユウに急接近。

クラスの女子がなしえなかったことを難なくやってみせるのが彼である。

――ねえねえ、遊ぼうよ！

ふさふさの尻尾を元気に振って、きらっきらの瞳を彼の整った顔に向けるモコモコ。

――動くな動くな動くな……っ！！

冷や汗を滝のように流しつつ油断なく彼を見張りながら、そろりそろりと前進するユウ。

モコモコの可愛さは一割り増しだが、ユウのかっこよさは九割減である。

『へッへッへッへッへッ』

しかし、モコモコ。

一向に構ってくれないユウにちょっぴりむくれたらしく、

『わおん！』

と、一吠え。

「――！？」

ドサッ

――直後、ユウはカバンを取り落としたことなど気にする余裕もなく、

どぴゅーん！！

と、素晴らしい速さで日向家から去っていった。

――あ。

『へッへッへッへッ？』

帰っちゃった、と門の向こうに顔を向けつつ、何しに来たんだろうと首を傾げるモコモコ。

犬に不審者に見られたユウは、現在、声にならない悲鳴をあげながら川原添いを爆走中。

ガチャ

「あれ？　モコモコ？」

すると、玄関から現われたのは銀髪の彼、アオイ。

「あ。これ、ユウのカバン……」

先程窓から確認したユウの姿がないことに疑問符を浮かべていると、アオイは彼のカバンを発見した。

「もう、ユウをびっくりさせちゃダメでしょう？」

それを見て、モコモコが友人を驚かせてしまったと考えたアオイ。

『……きゅーん……』

怒られちゃった、と頭と尻尾を垂れるモコモコ。

「ユウ、なんの用事だったんだろう？　あと、これ返さなきゃ」

ユウのカバンを拾い、ついでにモコモコのリードを杭から外して握るアオイ。

「さ、謝りに行こう？」

『わおん！』

恐らくアオイに、悪意はない。

第１８９回　体験日和

お馴染みの学食の隣にある売店にて、

「うーむ」

ミントは、財布を片手に両面閉じ、いつになく真剣に悩んでいた。

「『草食系植物』と『肉食系植物』？」

すると、彼が買おうか悩んでいた本のタイトルを読み上げられ、

「へ？」

ミントはそちらに目を向けた。

「草食系植物って。共食いではありませんの？」

「って言うか、それって完全に草食系男子とかのパクりだよねー？」

そこには、黄色の髪をくるくる縦ロールかつツインテールにした女子生徒と、桃色の髪をゆるゆるウェーブにした女子生徒が立っていた。

「……」

したがって、ミントはおめめをぱちくりさせた後、

「ココアの友達？」

知ってる方だけの名前を口にした。

「って、いつも会っているでしょう！？」

すると、ツインテが何やら食って掛かってきたので、

「え、や、知りませんけど？」

新手の詐欺か何かだと思ったのか、ミントは財布を背に回して三歩後退。

「いやいや多少イメチェンしましたけれど知ってるはずですわ！？」

「いやいやお嬢様口調の知り合いはムースでツインテの知り合いはウララしかいませんから」

「チャームポイントだだかぶり？！」

ショーック！　と両手で頭を抱え始めた彼女から目を離し、ミントは助けを求めるようにココアを見た。

「レモンだよレモン。ウサギさん寮の委員長さんだよミントー？」

ココアは、苦く笑いながら名前を教えた。

「ああ、……ハジメマシテ？」

が、検索エンジンに引っ掛からなかったようで。

「だからいつも会っているでしょう?!　レモン＝グラス！　あなたの寮のレモン＝グラス！　ついでにチロルと親友のレモン＝グラスですわ！！」

それがよほど悔しかったのか、ツインテ、もとい、レモンは、選挙カーばりの自己紹介をかましました。

「で、なんの用ですか、ココアとレモン＝グラスさん?」

なんかめんどくさくなったのか、ミントはそれを適当に流す。

「うん……ちょっとねー?　女子のみんなからミントにお願いがあるみたいなのー」

キィーっとツインテを吊り上げたレモンをどうどうとなだめつつ、ココアはやはり苦く笑う。

「は?　女子の、〝みんな〟?」

聞き返すと同時に、ミントは後方に控えていたウサギさん寮の女子生徒たちに気が付いた。

「……詰まり、一日オレに成り済ましてみたいと？」

話を聞いたミントは、呆れたように肩を落とした。

「何？　美人は三日で飽きるんじゃなかったの？」

「う、うん、違ったみたいだねー？」

彼女たちの目的は、いまだに絶大な人気を誇るプリンとポトフ。

その人気は、三日どころか三年以上続いている。

「って言うかさ、ポトフも含まれてるんだよ？　何協力しちゃってんのさココア？」

彼氏も対象にされているのに、とミントが尋ねると、

「だ、だってココアパフェおごってもらっちゃったんだもんー！」

仕方ないじゃないか、とココアが切り返してきた。

「ココアパフェ……」

それは、最近学食に現れた、期間限定の新メニュー。

だがしかし、ワンコイン。

そんなんでいいのか、とか思いつつ、ミントは盛大な溜め息をついた。

「……別に。やってみればいいんじゃない？」

その後、レモンとその他大勢に向き直って了承した。

「「！　ほんとう！？」」

彼の言葉に、ぱっと顔を明るくする女子のみなさん。

「本当本当」

「「きゃーっ！！」」

超適当に肯定してみせたミントと、それを見てきゃいきゃいはしゃぐレモンとその他大勢。

「い、いいのミントー？」

すると、最終確認してきたココア。

「うん、いいんじゃない？　一回体験してみれば」

ミントはコーラのフタを開け、

「まあ、すぐに終わるだろうけど」

くぴーっと飲みながらそう言った。

「ふえ？」

というココアの疑問は、すぐに答えが返ってきた。

「む。ミントお帰り」

――手始めに、プリンの微笑みビーム。

「おっ帰りィミントォ♪」

続いて、ポトフの飛び付き攻撃。

「むっ、ミント離せ！」

「はァ？　ミントは俺のだ！」

「違う、僕のーっ！」

後、取り合い。

「む？　ミント顔真っ赤」

「はェ！？　どしたミント熱でもあるのかァ？！」

とどめに、顔急接近。

「……。……なるほどねー？」

ふらふら倒れてプリンとポトフにめちゃくちゃ慌てられている偽ミントを眺めながら、心底納得したココア。

「確かにあれは心臓に悪いねー？」

「憧れてるなら尚更ね」

後ろに控えている女子たちもくらっときているところから、もうこんなことは頼まれないだろうと一安心するミントであった。

第１９０回　ダンス日和

強い日ざしが容赦なく照りつける夏の午後。

「ダンスパーティ？」

首が隠れて暑いのか、切ればいいものを後頭部で一つにまとめた黒髪の彼、ユウがおうむ返しをした。

「そォ、ダンスパーティ」

それに頷いて見せたのは、こちらも同じく黒髪の彼、ポトフ。

「お前気持ち悪いな」

「いや、俺と一緒に踊れとは言ってねェよ？！」

あからさまに身を退いたユウに、ポトフは透かさず突っ込んだ。

「俺はココアちゃんとに決まってんだろォ？　んで、ユーはウララちゃんを誘ってこいって話」

誰が野郎と踊るか、と、ポトフ。

ちなみに、ユーとは、ユーやっちゃいなよ！　のユーではなく、ユウのことである。

「……って、何耳塞いでんだよ？」

言ってる途中で、ユウが耳を塞いでいることに気が付いたポトフ。

お前がやっても可愛くねェぞと言ってやると、

「無理だ！」

ユウは、胸を張ってそう答えた。

「お前のクールキャラどんどん崩壊してんな？」

この暑さのせいか？　とか思いつつ、ポトフははふーっとため息。

「いいか？　ダンスパーティだぜダンスパーティ。パーティは夜の涼しくなった頃に始まってしかもパーティってことはすなわちレディはドレスアップしててめちゃくちゃ綺麗で可愛くてそんな相手と長時間ずっと一緒にいて二人きりなわけで――ココアちゃんラブーーー！！」

後、説明の途中で何か思い出したのか思わずエキサイト。

「つまりだ。きっかけ作ってやるからとっとと誘ってこい」

発作か！？　とびっくりしている彼に、こほんと咳払いして、ポトフはぴんと指を立てた。

「……」

「……なんだよ？」

無言で見返してきたユウにポトフが言うと、

「お前、なんでそこまで」

協力してくれるのか、とユウ。

「ユーじゃねェ。ウララちゃんのためだ」

するとポトフは、照れ隠しでもなんでもなく、きっぱりすっきり言い切った。

「……？　……しかしお前は踊れるのか？」

何故にあいつのためになる？　とか思いながら、鈍いユウは別の質問を繰り出した。

「はァ？　踊れるに決まってんだろォ？」

それを、ポトフは当然のごとく肯定した。

「まァ特に密着するヤツがだな――ココアちゃんラブーーー！！」

ただの変態発言である。

「お前も踊れるのか？」

また発作を起こしているポトフはほっといて、ユウは彼の後ろにひょこっと顔を出した。

「む？」

その先にいたのは、アオイと死神とほのぼのティータイムをしていた、プリン。

「ふむ、そうだな……」

彼はその質問に対して、少し考えた後でこう言った。

「ラジオ体操なら」

きりり。

「……は？」

ラジオ体操は踊りなのか否か。

「肩の力を抜いて背伸びの運動ー」

ユウがそんなことを考えている間に、プリンがさらりとそう言うと、

「あ、それなら僕も踊れるよ」

アオイはくすりと笑って立ち上がった。

「いち、にー、さん、しー」

「ごー、ろく、しち、はち」

プリンの掛け声に合わせて背伸びの運動を始めるアオイ。

「……」

「……」

はきはきとした、見事な動きである。

「おお。オレ様の得意分野だな」

すると、死神も得意げに参加した。

「いち、にー、さん、しー」

「「ごー、ろく、しち、はち」」

彼らの頭のなかでは、あの爽やかな音楽が流れているに違いない。

「……おい。なんかラジオ体操始まったぞ？」

「だな。ってェか、枕は言ってるだけでやってねェじゃねェか」

食堂で急にラジオ体操を始めた彼らを眺めるユウとポトフ。

「いち、にー、さん、しー」

「「ごー、ろく、しち、はち」」

プリンの掛け声に合わせて、完璧なラジオ体操をするアオイと死神。

「……」

「……」

そんな彼らを、無言で眺めるポトフとユウ。

「いち、にー、さん、しー」

「……」

「「ごー、ろく、しち、はち」」

「……」

「いち、にー、さん、しー」

「……」

「「ごー、ろく、しち、はち」」

「……」

しかし、

「いち、にー、さん、しー」

「「ごー、ろく、しち、はち」」

最終的には、彼らもラジオ体操に参加した。

「……」

暑さの厳しい夏の日の午後。

コーラを購入したミントは遠巻きに謎の行動を始めた彼らを発見し、

「植物学のレポート終わらせなきゃ」

何も見てない聞いてない、と自己暗示しながら、自分の部屋にすったすった帰っていった。

第１９１回　子猫日和

そよぐ風が心地よい木の下。
木漏れ日が揺れるそこで、

「ぷわぁ……」

お昼寝から目を覚ましたプリンは、口に手をかざしながらあくびを一つ。

「……むぅ」

よく寝た、と目を擦りながら身を起こす。
そう言えば、今日の午後からは例年通りの実技試験が始まる。

「む？」

そう思って、確か隣で一緒に涼んでいたミントに目を向けたのだが。

「……。ミントが帽子だけになってる」

彼の隣にあったものは、ミントが被っていた白黒の帽子のみ。

「……？」

どこに行ったんだろう、ときょろきょろと辺りを見回すプリン。
しかし、見渡せる範囲にはいないようだ。

「ふむ、帽子を忘れるなんて珍しい」

と言って、プリンが帽子を拾い上げると、

『なーう』

帽子の下から、ふあふあした生物が現れた。

「む？」

くりっとした瞳にふさふさな毛並み、ピンと外側を向いた三角の耳にちょっと短いしっぽを持つその生物は、

「！　にゃんにゃん！」

そう、にゃんにゃん。

「ぴわわ、帽子なんかに入ってて暑くなかった？」

何せ黒いし、と、帽子を見てみるが、見た目によらず通気性は抜群。いつも帽子を被っているだけあって、その辺のぬかりはないミントであった。

「む？」

『なー』

「ふふふ、よしよし」

てててと足元にきたにゃんにゃん、もとい、子猫を、プリンは手にしていた帽子を被って抱き上げた。

「むぅ、ミント帰ってこない」

そうして頭を撫でてやりながら、プリンはミントの帰りを待った。

『なーう』

すると、子猫が鳴いた。

「む？」

ので、プリンはそちらに顔を向ける。

「……」

『……』

無言。

「……？」

『……？』

後、疑問符。

「……。……、……」

しばらく考えて、プリンはまさかと思ったが、

「……ミント？」

と、呼んでみた。

『なーう』

子猫が、鳴いた。

「……」

『……』

「ミント」

『なーう』

「……」

『……』

「……」

間。

「っぴわわわわわわ?!」

珍しく慌てたプリンは、これはえらいこっちゃと走りだした。

木の枝が風に揺れ、涼しげな音をたてている中庭にて。

「やー、でもまさかダンスパーティが急遽ラジオ体操パーティーになるとはねー？」

ココアは、アイスココアを片手に口を開いた。

「あは、……あんのクソ枕……っ！！」

彼女の隣で苦く笑ったポトフは、ついでにぼそっと悪態をつく。

ダンスパーティ前にプリンが原因で始まったラジオ体操をクー先生がたまたま目にしたらしく、楽しそうだという理由でラジオ体操パーティになってしまったようだ。

パーティの雰囲気でユウたちを後押ししてやろうとか軽く思っていた上に、自分自身も楽しみにしていたのに、これじゃあムードも何もあったもんじゃない。

「まー、わけわかんなくて楽しかったけどねー」

しかし、ココアとしては楽しかったようで。

「そぉ？　俺としては」

すると、ポトフは彼女をふわりと抱き締めて、

「二人きりで、ココアちゃんだけを見ていたかったんだけどな？」

クサ台詞。

「え――」

しかし、ココアには何故か効果抜群。

「……ココアちゃん」

抱き締める力を緩め、顔と顔が真正面から向き合うようにすると、

「ぽ……ポト――」

「わんわん！！」

寸前で、お約束の邪魔が入った。

「ほりゃあああああ！！」

バシコーン！！

ゆえに、人様の目の前でいちゃこらやっほいできないココアは、ポトフを透かさずぶっ飛ばす。

「っ、テメェこのクソ枕お前ちょっとぐらい空気読んで登場しやがれ！！」

ぶっ飛ばされたポトフは、迷わずココアではなくプリンを怒鳴り付ける。
が、ある意味空気を読んでの登場だと思われる。

「わんわん！　ココア！　にゃんにゃんが、ミント、ココア、わんわん、わんにゃんっ！！」

「お、落ち着いてよプリンー？　何言ってるのか全然分かんないよー？」

わたわたと必死で何かを伝えようとしているプリンだが、残念ながらその熱意しか伝わってこない。

「はァ？！　ミントがにゃんこになっちまったのかァ！？」

「って、ばっちり解読したー？！」

しかし、ポトフには何故かばっちり伝わったようで。

「にゃんにゃん！！」

と、頷くプリンの腕の中には、子猫がしっかり抱えられている。

「えええ！？　じゃー、この猫がミントなのー？！」

『なーう』

「いやん、可愛いっ♪」

慌てたと思ったらハートを撃ち抜かれたココア。

「ま、まさかこれが今回の課題なのかァ!?　獣化の呪いって、そんないきなり……！」

ハッとして、今までため込んできた自分の知識を探るポトフ。

「う、うむっ！　確か、獣化の呪いを解くには逆呪いが！」

慌てながらも答えを導くプリン。

「逆呪いって、ええー!?　今回の課題そんなに難問なのー?!」

ココアを含め、この学年トップの慌てっぷりからして、逆呪いというものは相当ハードなようだ。

『なー……』

あわあわしている三人をよそに、プリンの腕から抜け出した子猫は気持ち良く伸びをした。

『なーう』

後、てててと校舎に向かって歩きだしたので、

「「！　ミント！」」

見失ったら困ると、三人は慌てて呼び止めた。

「何さ?」

すると、ミントが聞き返してきた。

「……」

「……」

「……」

間。

『なーう』

「？　何この猫？」

人懐っこく寄ってきた猫を一見した後、

「もうすぐ課題はじまるよ？　あとプリン、帽子返してよ」

ミントはさらりとそう言った。

「……」

「……」

「……」

固。

「？　どしたのさ、みんな？」

『なーう』

疑問符を浮かべるミントと、我関せずと鳴く子猫と、居たたまれなくなるプリンであった。

第１９２回　親子日和

試験も無事終わり、長期休暇で自宅に帰ってきたミントは、

「家族旅行だぁ？」

と、聞き返した。

「そうだ、家族旅行。そう言えばそういうのやったことなかったなー、と」

シャーンは腕組みしながらうんうんと頷く。

「……何？　リストラされたの？」

すると、ミントから痛恨の一言が返ってきた。

「……」

「……」

間。

「っ、されてねぇよ！？　なんで旅行に行こうって言っただけなのにリストラされたのって返ってくるんだよ？！　あれか！　お前は冷めた夫婦の嫁みたいに夫は家にいないで働いて稼いで来りゃいいとでも思ってんのか！！」

そんなミントに、長丁場なツッコミで返すシャーン。

「分かってんじゃん」

「うおおおおい！！」

それをさらりと肯定されたが、負けるものかとシャーンは必死に突っ込みを入れる。

「そんなん隠してもすぐ分かるよ？」

「リストラありき？！」

どうやら脳内で確定したらしいミントは、父親を見上げつつあからさまなため息をつく。

「あのなぁ、純粋に家族旅行に行こうって言ってんだ！　断じて他意は無い、って今度はあからさまに嫌そうな顔するな！！」

流石と言うべきなのか、ミントの父親だけにツッコミがせわしない。

「なんでオレがおっさん夫婦とピエロと紳士とそのペットを連れて仲良く旅行しなきゃならないのさ？」

「……。……お前アレだろ。どうせ行くならあのスタイル抜群で美人な彼女と行きたいとか思ってんだろこのエロガキが！！」

「はぁ？　何言って」

「流石俺の息子だ！！」

「て、ちげえしお門違いに誉めてんじゃねえよ?!」

突っ込みを入れてたのにボケだしたシャーンに、ミントの反撃が始まった。

「照れるな照れるな。分かるぞぉ、父さんもお前くらいの歳にだな」

「いや興味ねえし聞いてねえよ?!」

「ちなみに母さんとはシャイア城で出会ったんだ」

「そして構わず語るなよ!?」

などと、二人が近所のはた迷惑にもキッチンでギャーギャーと騒いでいると、

「るっさいわね、ウチも混ぜろ!!」

「「いや混ざるなよ?!」」

オカンの登場で、結果的には静まった。

「ちなみに訂正するけど、マロとフランとそのペットは行かないわよ」

計算通りなのか、ジャンヌはふんぞり返ってそう言った。

「? 行かないの?」

どうして、と疑問符を浮かべるミント。

「言っただろ？　家族旅行だって」

彼の問いに、シャーンは続ける。

「詰まり、親子三人水入らず」

と。

「あら、水がいらないんだったらアンタは行かなくていいわね」

「って、いやその水じゃねえよ？！」

「じゃあどこの水？」

「いやそこで場所を尋ねられても！！」

「あー、あの水ね」

「しかもなんか自己解決した？！」

「もこ水」

「どこの水！？」

相変わらず騒がしい夫婦である。

「……」

そんな彼らを見て、ミントは小さく息をはく。

「お？　どした？」

二人の横を通り抜けて歩きだした彼に、シャーンがツッコミをやめて問い掛けると、

「もう寝る」

ミントは、止まりもせずにそれに答えた。

「……明日早いんでしょう？」

と。

「……！　お、おう！」

――こうして、彼らは夏休みの思い出に、初めての家族旅行に行ったのであった。

第１９３回　睡眠日和

お日様の光がちょうど一番強く南向きの窓から差し込む時間帯。

「む……」

プリンはゆっくりとその青い瞳を開けた。

寝心地抜群な大きいベッドには立派な天蓋がついていて、いかにもなおぼっちゃま。

この大きなベッドが余裕で納まるほどの広々とした部屋は、どこもかしこも綺麗に片付いている。

「……」

が、プリンは一ヶ所だけ散らかっている場所を横になったまま発見した。

そこはこの部屋の隅で、散らかっているのは目覚まし時計。

おかしい。

あれは昨夜まではまっとうな状態で枕元にあったはずだ。

なのに、あんなところにあって、しかも大破されている。

だがしかし、この部屋のセキュリティは万全。

人間はおろか、あの黒くてカサカサ動く昆虫すら一匹たりとも侵入することはできないはずだ。

詰まり、あの目覚まし時計をあそこまで動かして、しかもあそこまで大破させたのは、

「……。僕か」

そう、お前だ。

「……むう、記憶に無い」

こんな単純明快な状況把握にえらく長いことかかったのは、寝起きだからなのかどうなのか。

プリンはのそのそと起き上がると、お亡くなりになられた目覚まし時計のもとに移動した。

「……ぷわあ……」

壁が微妙にへこんでいる。

どうやらお休み中の彼は、けたたましく鳴り響くように自分で設定しておいた罪の無い目覚まし時計を、風魔法か何かで豪快にぶっ飛ばしたようだ。

「……ねむねむ」

しかしそんなことはまったく記憶に無いプリンは、悠長に欠伸をしながらバラバラになった目覚まし時計のパーツを拾い集めた。

そしてその場に座り込み、哀れな目覚まし時計を器用に復元し始める。

「……」

修復魔法も使えるが、このくらいは朝飯前。

と言っても、朝飯の時間はとうに過ぎ去っているのだが。

ぴ、ぴぴぴぴ、ぴぴぴぴ

とか言っているうちに修復完了。

見事に生き返った目覚まし時計の音を聞き、プリンは一言。

「……ミントすごい」

何故この程度の音でばっちりお目覚め出来るのか。

そう言う自分も、この音を不快極まりなく思ってぶっ飛ばしたのであろうが。

実はこれ、夏休み前にミントから貰ったもの。

いい加減一人で起きられるようになりなさい、そう言って。

詰まり、彼は一応努力はしたようだ。

「……むう」

だがしかし、眠いもんは眠い。

原因は重々承知している。

――彼のねむねむヒストリーは、彼が保育所に通いはじめた頃から始まる。

ねむねむ理由その一、非常に退屈だったから。

『じゃあ、あしたオレのいえにしゅうごうな！』

『『うん！』』

それは、授業そのものもそうだが、その他の時間にも当てはまる。

『……』

朝の馬車から始まって帰りの馬車まで、彼はいつも一人きり。

文字を覚えるのが早かったことと、本を読む以外に暇を潰す方法を知らなかったことから、授業中はとても退屈。

知らず知らずのうちについた知識は、いわゆるエリートな保育所であるここでのレベルを超えていた。
よって、授業中にだんだん眠くなる。
しかし、頭はいいから勉強はできる。
ゆえに、エリート意識の高い周りからしたら非常に面白くない。
したがって、人が離れていく。

『……ぷあ』

護衛がついていた頃は、皆にこにこ笑って話し掛けてくれていたけれど、その笑顔は彼ではなく彼の護衛を通した父親に向けてのもの。
頭が必要以上によく働くのはどうもいけない。
それが鬱陶しくて護衛を解いて貰ったら、ものの見事にひとりぼっち。

『ねむねむ……』

――睡眠は、一番のストレス回避法。
そんな言葉をどこかで聞いたのか、彼はいつしか、いつでもどこでも眠れるようになっていた。

『ずっとともだち！　やくそくだよ？』

そんな暮らしのなかで、やっと出来た一人の友達。
怪我のこともあって、名前を聞くのも忘れてしまったが、確かに嘘偽りなく自分のことを友達と言ってくれた。

『うふふ。プリン、支度はできました？』

『はっはっはっ！　さあ、お見合いに行くぞ、プリン！』

しかし、あれ以来一度も会っていない。
彼を送った病院にも行ってみたけれど、結局わからず仕舞い。
住所も名前も分からないのだから、他に探しようがない。

『……。僕、忘れ物した』

『うふふ、あら、プリン？』

『先行ってて』

それでも、公園で遊ぶ、自分と同じくらいの歳の子どもたちを見かけると、無性に彼に会いたくなって。

『……わんわん？』

いないと分かっていながらも、彼と別れた森の中へと足が動く。

『わんわん』

しかし、やはりそこに彼はいなくて。

『……わんわん……』

彼の残した血のあとが、白い岩の上にあるだけで。

『わんわん、わんわん……っ！！』

探して呼んで、泣いて疲れて。

これが、彼のもう一つの眠る理由。

『トモダチ……』

『……いや？』

『違う、……嬉しい』

『そっか、よかった！　よろしくね、プリン！』

それからいくつもの月日が流れて、魔法学校に入学。
ミントと出会って、それから、長いこと家から出ずに本を読んでいたせいか、体力が恐ろしくないことに気付いて。

『テレポート』

これが、更にもう一つの理由。
――そして、今。

ぴぴぴぴ、ぴぴぴぴ

「……む？」

目覚まし時計の音に気付いて目を覚ます。

「！　僕、起きられた！」

かちっと止めた、目覚まし時計はジャスト7時。
しかし一体いつ寝たんだ僕は、とか思っていると、プリンはとあることに気が付いた。

「……。月が出てる」

詰まり、夜の7時。

「ふむ、よい子はもう寝る時間だな」

よっこらせ、と立ち上がったプリンは、迷わずベッドに向かう。
どうやらまだまだ眠いようだ。
寝る子は育つ、と言うが、彼は本日何も口にしていない。
コンディションは最悪だ。

「ぷわ……」

だがしかし、眠いもんは眠い。

「……ねむねむ」

プリンは枕元に目覚まし時計を置くと、ピンクのヒラヒラがついた枕を――現在の主なねむねむ理由であるそれを抱えながら、再び眠りだした。

第１９４回　団欒日和

虫たちが涼しげに鳴く山奥の静かな街。
その街にある旅館を兼ねた家で、早めの朝食をとる家族がいた。

「けーたい？」

と、彼、ココアパパは見慣れない機械を見て疑問符を浮かべた。

「そー、ケータイ。これはまだ試作品なんだけどー、携帯できる電話なんだってー」

それにこくりと頷いたココアは、

「なんか、通信魔法のテレパシーの原理を応用して、この中に入ってる電池式の魔石の魔力がもつまで相手と通話ができるとかなんとかー？」

確かそんなこと言ってたなとか思いながら、ケータイを説明した。

「へえ、便利なものを作るね、プリンくんは」

すごいなと素直に感心するココアパパと、

「あらあら、プリンくんって、あのかわいい子？」

以前旅館に泊まっていた水色の髪の男の子を思い出しながら言うココアママと、

「ははは、そのプリンくんが作ったものを、どうしてココアが持ってるのかなー？」

”くん”イコール男ということで敵意むき出しのココア兄。

「いや、フツーに使えるかどうか試してみてって。これがどこまで通じるか、夏休み中に試してほしいみたいよー？」

それに対して、ココアはさらりと答えてみせる。

ここ、フェノリリルは大陸の端の方に位置する街。

「でもすごいよねー。聞いただけで本当に作っちゃうなんて、さすが魔科学者目指してるって言うかー」

ゆえに合点がいったのか敵意が弱まったココア兄の隣で、以前アオイのそのままな説明を聞いただけでこれを完成させたプリンに感心するココア。

ちなみに、彼女の兄は、彼女の彼氏が大陸の反対側の端の方に位置する街に住んでいることは知らないようだ。

「目指してるって言えば、ココアちゃんもこの夏に試験を受けるんでしょう？」

すると、ココアママがにこやかにそう切り出した。

「うん、だから今年はあんまり手伝えなくなっちゃうけどー」

試験とは、看護学校に行くためのもの。

魔法学校卒業後の彼女の進路である。

「気にするなココア。お兄ちゃんは精一杯応援するぞ！」

「うん、別にしなくていいよー？」

「え」

「邪魔だから」

重度のシスコンである兄の激励を、ココアはすっぱりざっくり断った。

（反抗期？！）

可愛くて仕方ない妹に突き放されて、お兄ちゃんはぐさりときた後に落ち込みだした。

「そうだね、第一志望があの有名なアクリウムだからね」

「そうね、しょーちゃんは邪魔ね」

相変わらず穏やかなココアパパと、にこやかに追撃するココアママ。

「うん！　目指すはアクリウムだよー」

更に落ち込んだ兄をよそに意気込むココア。

アクリウムと言えば、この国一の医療の街。

「でも、ここからアクリウムに通うとなると大変ねぇ？」

ついでに、ここ、フェノリリルから一番離れた街。

「て、ちょっともーママったら。そーゆー心配は試験に受かってからにしてよねー？」

「ははは、気が早いなぁママは」

そして、

「あ！　そう言えば、ポトフくんはアクリウムに住んでるのよね？」

フラント家が在住している街。

「……」

「……」

オカン、そんなことを言ってしまったら、と動きが止まるココアとココアパパ。

「……え？」

彼らの予想通りに、落ち込んだ兄がぴくりと反応する。

「まあまあ！　だったら、そこから通わせて貰えばいいんじゃないかしら？」

素敵素敵、と、楽しげに言うココアママ。

「……」

「……」

「……」

オカン、そんなこと言ってしまったら。

「って、えええー?!　ななな何言ってるのよママー!?」

「そうだ！　そんなの絶対駄目だぞ母さん?!」

そんな父の予想通りに、桃色兄妹は騒ぎだした。

「あら、どうして?　いい考えだと思うのだけど?」

「何言ってるんだ、あんなケダモノと同棲なんて」

「相談してみるー!!」

「て、乗り気いいい?!」

首を傾げた母に食って掛かる途中できりりと言った妹に思わず突っ込みを入れる兄。

「ちょ、駄目だろマイシスタよりによってあんなケダモノと一緒に住むなんて」

「うふふ、プリンくんのけーたいの使いどきね！　アクリウムはちょうどここから一番遠い街だし、試すにはもってこいだわ！」

「いやだから何を煽ってるんだと言うか母さんは一度引っ込んで」

「う、うん！　ありがとープリンー！！」

「いやいやいやだからなんで乗り気なんだって言うか一度冷静になるんだマイシス」

「番号分かる？」

「うん、……でも電話で話したことないからなんかドキドキするよー！」

「分かるわその気持ち！　ママも、固定電話だったけど、パパに初めて電話した時にね」

「って、聞いてーーー？！」

兄の突っ込みは完全に無視されたなかで進む母と娘の会話を、

「あ、茶柱」

のほほんと和みながら聞く父であった。

第１９５回　恋路日和

「もうすぐ学校ね、ポトフくん」

新しいローブを広げて見ていた彼にエリアが声をかけると、

「……学校って、どんなところなんですか？」

振り向いたポトフは質問を投げ掛けた。

「そうね、ソラや私なんかよりずっと上手に勉強を教えてくれるところよ」

その問いに、エリアは笑顔で答えた。

「同じ年の子たちがいるから、きっと素敵なお友達ができるわ。あとは」

ある意味引きこもり状態だったポトフは、座った状態で彼女を見上げている。

「青春らぶロマンスよ！」

すると、エリアはグッと親指を立ててばちこーんとウインクした。

「え……、それってもしかして、”ボブとアリエッタ”みたいなヤツですか？！」

それに対してツッコミを入れるどころか、むしろ食い付くポトフ。

「そう！　ポトフくんはかっこいいから、きっとすぐにアリエッタみたいな可愛い彼女ができちゃうわ！」

ぱんっと胸の前で両手を合わせて盛り上がるエリア。

「彼女……！！　じゃァ、俺もボブみたいにかっこよく！？」

「ええ、まずは偶然出会った可愛い女の子を爽やかにお茶に誘う！　そうすれば素敵ロマンスのスタートよ！！」

「マジですか！！」

「マジですよ！！」

「うああ、もォ一回シリーズ1から見直してボブを復習します！！」

「そうこなくっちゃ！！　私も最新作まで付き合うわ！！」

「……ご飯できたよ？」

何やらきゃっほいと盛り上がっている二人に、ソラはさらりとそう言った。

「腹減ったなァ……」

ソラの実家にお邪魔して、学校を思い出して慌ててこちらに帰ってきたはいいものの、ここは一体どこなんだ。

「うわあああああ？！」

「――!?」

腹に手を当ててさまよっていると、突如天井から爆音とともに降ってきた生徒にびっくり。

（おお!?　もしかしてあの子が”偶然出会った可愛い女の子”?!）

「オレの帽子!?」

（――……じゃない、っぽいな……?）

”オレ”と聞いて、ミントが男の子だと知ったポトフ。

「払えねぇなら、体で払ってもらうしかねぇな?」

「なんでオレばっかり?!」

出会って間もないのにたらふくご馳走してくれた、わけではなかったようではあるが、

「あっはっはっ、ミントはおもしれェなァ♪」

ポトフは、餌付けされたわんこのごとく、すっかりミントに懐いていた。

ツッコミはするが、敵意は感じられない。

ぐちぐち言いつつも、ちゃんと手伝ってくれている。

――素敵なお友達ができるわ。

友達に、なってくれるかな?
　デッキブラシで力いっぱい床を擦っているミントを見てそんなことを考えつつも、エリアに言われた通り女の子をお茶に誘っていた矢先に、

「あれれー?　ミントそこで何してんのー?」

ココアが、現れた。

（――!!）

ばきゅーんってきた。
なんか今ばきゅーんってきた。
おおう!
これがあれか!
おねェさんが言ってた偶然出会った可愛い女の子か!
これが青春らぶロマンスなのか!!

「掃除」

「掃除ー?」

ミントと普通に会話している、ボブで言うところの運命のひと（アリエッタ）に、ポトフは早速声をかけてお茶のお誘いをした。

スッパアアアアン!!

――……のに、何故かいきなり渾身の平手打ち。

「私女好きは好きくないしー」

そして否定。

「離してよー！！」

更に拒絶。

「なななな何するのよー？！」

精一杯の抵抗。

（……？）

おかしい。

今までの経験からか、ひとの気持ちを人一倍に感じ取れるポトフは、その能力ゆえに混乱していた。

あまり好ましく思っていない目、詰まり、敵意を向ける男子生徒たち。

向こうが嫌いなら、こちらからわざわざ近づかなければいい。

きゃいきゃいと寄ってくる女子生徒たち。

こちらは安全、害はない。

親しみをもってそばにいてくれるミントとプリン。

ミントは分かりやすく、プリンはちょっと難儀な感じだが分かりやすい、初めてできた大切な仲のいい友達。

――だが、ココアは。

「ダークネスサクリファイスー！！」

好意を持ってくれているのに、攻撃してくる。

これはどういうことだ。
好いているようだが嫌われている。
嫌われているようだが好いている。
うーむ、不思議だ。
青春らぶロマンスは奥が深い。

「――は！」

そんなこんなを過ごしていくなかで、ポトフはひとつの結論にたどり着いた。

「もしや、これが”ツンデレ”……？！」

なきにしもあらず。

≫≫≫

る、ぴるるるる

「……お？」

朝ご飯を終えて自室に戻ってきたポトフ。
彼は、カバンの中から機械音が漏れていることに気が付いた。
そこからごそごそと取り出したのは、夏休み前にプリンから渡された携帯の試作品。

ぴ

「と、も……しもし？」

すげえ、ホントに電話だ、とか思いつつ、そう言えば電話なんてほとんど使ったことがなかったポトフが疑問系で電話に出る。

『ふえ?!　……あっ！　え、えっと、ポトフっ?』

すると聞こえてきたのは、ココアの声。

「ココアちゃん?」

おおう！
本当にスゲーな枕！
こんなちっこい電話！
これが文明の利器か！！

「どぉしたの?」

などと感動しつつ、用件を訪ねる。

『へ!?　あ！　え、えっとー！』

すると、先程から挙動不審っぽいココアの声が聞こえてくる。

『えーと、ええとね?』

「うん」

『えーと、……あのー……ええと……』

「うん」

『えー……とー……』

「うん」

長い。

ひたすら長い。

用件を一向に伝えない彼女だが、ポトフは根気強く次の言葉を待つ。

『――……べ、べんきょ、頑張ってね！！』

ブツン！

あ、切れた。

「……」

確かに受験勉強は必須。

エリアのような立派な医者になるために。

ココアが伝えたかった用件は、恐らくそんなことではなかったと思われるが。

「うん、俺頑張る！！」

が、ポトフには効果絶大だったのでよしとする。

第１９６回　再現日和

長くて短い夏休みが終わり、学生たちは再び学校に集まった。

「やーっと試験が終わったよー！」

「ホント、やァっと終わったぜェ！」

「うむ、終わったな」

蒸気をあげる汽車から降りて、解放感あふれる言葉を口にしたのはココアとポトフとプリン。

「あは、おつかれさま」

彼らの後で下車したミントは、そんな友人たちに労いの言葉をかける。

「テストどうだった？」

「それが聞いてよ過去問と形式変わりまくってたのー！　まー、わりといけた気がするけどー！」

「そォそォ、俺の方もだいぶ変わってたんだぜェ？　まァ、わりといけた気がするけど！」

「うむ。まあ、あんなところだろう」

と、試験の話題を継続しながらも、自分はこの国を優雅にぐるーっ

と旅行してましたなミントは、ちょっとした罪悪感を覚えなくもないような気がしていた。

「って、あれー？　プリンも試験受けてたのー？」

「うむ。入社試験」

だって、街のお花屋さんに試験なんてないんだもん。

「はェ？　御曹司サマでも試験受けるのかァ？」

「そんなこと関係ない。アラモード社は完全に実力至上主義だ」

でもお土産買ってきちゃったなぁ、と、会話を右から左に受け流しながら微妙な葛藤を繰り広げるミント。

「へー、大変だねー？」

「む？　そうか？」

「あの超有名会社だぞおまえ倍率とか絶対知ってねェだろ」

こんなことならお土産なんて買うんじゃなかった。

「で、ミントは休み中何してたのー？」

「へ？　あ、ああ、オレはりょこ――……」

が、急に話を振られたミントは、思わず素直に答えてしまった。

「「旅行っ？」」

きらきらきら

「……、うん。旅行」

お土産は、買ってきて正解だったようだ。

「ココアにはこれ」

「わ、フラワンド名産花ココアー！」

「プリンにはこれ」

「む、エンシエン名産都プリン！」

「ポトフにはこれ」

「おお！　鹿……、の……ぬいぐるみ？」

なんとも手っ取り早く思い付くようなミントからのお土産に、素直に瞳を輝かせてお礼を述べるココアとプリン。

「ただの鹿じゃないよ。フェノリリル名産のリッカジカだよ」

「リッカジカ！？　余計になんでぬいぐるみなんだミントォ？！」

「だって鹿肉だと腐っちゃうじゃん」

「なまものの欠点！？」

それにブランド肉だから高いし、としれっと応えるミントに、鹿のぬいぐるみを片手にショックを受けるポトフ。

「それにしても、毎回この森を通ってるとなんか慣れちゃったねー」

「ね。魔物もなんか一年の時のヤツとか見ると懐かしい感じがするよね」

……、いやでもなんかちょっと可愛いぞ？　と、微妙に気に入り始めたポトフをよそに、ミントたちは懐かしい思いに浸り始めた。

「うむ。確か最初はミント、スライムに怯えてたな」

「そ！　それは仕方ないじゃんかっ！」

「あはは！　かなりびびってたし、なんかもう泣きそうだったもんねー？」

「うむ。僕はそんなミントにびびったぞ」

「う、うっさいな～」

面白そうに笑うプリンとココアに、若干顔を赤くしてむくれるミント。

「あの時はまだ魔法が使えなかったの！　まったく、もうスライムなんか怖くも何ともないんだか」

ぼよん

「ら？」

ぷりぷり怒って歩いていくと、ミントは、何かぼよんとしたものにぶつかった。

「……あら？」

見上げると、そこには立派なスライムが。

「……ふむ、噂をすれば」

「ね、立派なスライムだねー」

「水色ぷるぷるだなァ」

その存在に気付いた友人三人も、そのスライムを見上げる。

「……」

「……」

「……」

「……」

「「……」」

そう、見上げる。

「でかくない？」

「でかいな」

「でかいねー？」

「でっけェ」

ごくごく平凡な感想。

見上げた先のでかいスライムは、目はないのだが、もの言わずに見下ろしている感じがする。

ぴょん

ドシーン！！

後、ジャンプ。

着地の音や振動からして、ぴょん、とか可愛い表現はまるで似合っていない。

「ミント」

「ミントー」

「ミントォ」

そんなスライムから目を逸らし、プリンとココアとポトフは、先ほど大口を叩いたミントに焦点を合わせた。

「ごめん。怖い」

前言撤回。

「うわあああああ？！」

「あは、一年の時と同じだねー？」

「うむ。あの時のミントと同じだ」

「むゥ……仲間外れ……」

今にも泣きそうな表情で逃げ回るミントと、それをほのぼのと眺めるココアとプリンと、諸事情により話題に入れないポトフであった。

第１９７回　学習日和

一日の授業が終わり、一先ず寮に戻ろうといつものメンバーで廊下を歩いていたときの出来事。

「プリンさん」

「む？」

彼らの行く手を阻むかのように、眼鏡少女アロエと、

「ミントきゅ～んっ！！」

「ううわっ？！」

金髪少女のチロルが現れた。

「あは、いつ見てもらぶらぶだなァ」

「えへ、だってらぶらぶなんだもーん！　みたいな～っ♪」

ほのぼのと笑うポトフに、チロルは喜色満面でそう答える。

「ね、ミントきゅん、ちゅ～♪」

「は？！　え、ちょっ、まっ、待て！！」

「何その犬にするような命令ー？」

「待つ！」

「って、チロル従っちゃってるー？！」

ミントの命令にばっちり従った彼女にココアが突っ込みを入れるなか、

「プリンさん、単刀直入にお聞きします」

「うむ？」

アロエは本来の用件を持ち出すべく口を開いた。

「恋愛感情で好きな人はいますか？」

非常にめんどくさそうな表情で。

「「へ？」」

その質問に、面を食らったのはミントとココアとポトフの三人。

質問された当の本人は、顔色一つ変えずにさらりと答えた。

「ううむ」

と。

「……」

「……」

「……」

間。

「えええ?!　ちょ、何言ってるのさプリン!?」

「そぉだぞお前婚約者いるだろぉ?!」

「そーだよ、ムースでしょムースー!!」

後の、リアクション。

「……。ムースは確かに僕の婚約者だが」

そんな反応に、プリンは顎に手をあてがいながら、

「恋愛感情ってなんだ?」

と、逆に質問をした。

「「は?」」

彼からの問いに、再び鳩が豆でっぽうを食らったような顔になる三人。

「……はぁ……」

「あらら、アロエの予想通り〜みたいな?」

その隣で、倦怠感溢れる溜め息をつくアロエと、あらあらと周りの

様子を眺めるチロル。

「おま、恋愛感情って言ったら俺とココアちゃんとかみたいなもんだろォ！？」

「って、ふやーーー？！」

ココアをぎゅーっと抱き締めてポトフが言うと、

「悲鳴をあげさせるのが恋愛感情なのか？」

プリンが再び質問した。

「え」

ポトフ、一時停止。

「……え？　ちょっと待って俺って実は超最悪じゃねェ？」

「え！？　ちょ、ポトフからキノコがー？！」

彼からの問いに、ココアをはなしたポトフは、第三者からの見え方を知って落ち込み始めた。

「あんた、それでよくミントきゅんの友達やってるわね～みたいな？」

すると、今度はチロル。

彼女はミントにぴったりとくっつきながらもピッとプリンを指差した。

「ミントきゅんが初めてアタイに会った日のことを思い出してみるがいいわみたいな！」

「って、思いもよらぬ流れ弾？！」

ズビシィっと言い放たれた言葉に突っ込みを入れるミント。

「ふむ。確か顔を真っ赤にして帰ってきたと思ったら布団に顔を沈めてありえないありえないと」

「って、ちょー！？　何つるっとしゃべってんのさプリンんん？！」

「やぁん、ミントきゅんか～わ～い～い～♪」

「ちちち違う違う違うってば」

「そのあとガバッと起き上がったかと思うとしきりに僕にありえないよね違うよねと」

「うにゃあああああ！！」

と、跳弾しまくる流れ弾に苦しめられているミントをよそに、

「ムースさんからの相談でしたが、連れてこなくて正解でしたね」

アロエは、やれやれと深く溜め息をついた。

「ではその答、教えて差し上げましょう」

後ろに回していた手を前に出し、アロエはにこりと笑ってそう言った。

「む、本当か？」

と、振り向いたプリンに、アロエはふしゅーっと霧吹きで透明な液体を吹き掛けた。

「お手を拝借しますよ、ポトフさん」

「お？」

その後、彼女はポトフの腕を掴み、プリンの頬にぺたっと右手をつけさせた。

「ありがとうございます」

「？　アロエちゃん？」

何を、と、取り敢えず手をはなしてもらったポトフが疑問符を浮かべると、

「恋愛感情が学べる魔法薬です」

「……」

アロエがさらりと答え、プリンに変化があらわれた。

「……？　どしたのー、プリンー？」

その変化に、小首を傾げながらぱちぱちと目をしばたたくココア。

「ココア」

を、プリンはふわりと抱き締めた。

「え」

突然の出来事に、一時停止するココア。

「愛している」

を、プリンはぎゅーっと抱き締めた。

「――」

よってココア、完全停止。

「え、えええええええ?!　ちょ、な、何言ってるのさプリン!?」

プリンの突然の告白に、ミントは本気で焦りだす。

その理由は、

「……まァくゥらァ……」

隣で、鬼のようなオーラを出しているヤツがいるから。

「やぁん♪　なになにっ?　これが噂の三角関係～みたいな、みたいな～っ?」

反対隣では、なんか知らんがはしゃいでるヤツもいるが。

「な……何したのさアロエ？」

「ポトフさんの気持ちがそっくりそのまま自分の物になるような魔法をかけた水を吹き掛けてみました」

「なるほど、それでプリンがポトフみたいにココアにめろりんこなのね～、みたいな？」

そんな、しっかり安全なところに避難した三人はほっといて、

「ココアちゃんに触るなァァァァァァァァ！！」

「馬鹿か貴様は。ココアは僕のものだ」

何やらおかしな理由で争い始めたポトフとプリンと、

「ちょっと今の聞いた？」

「本当、どんなご身分なのよココア」

ひそひそ

「って、違う違う違ーーーう！！」

あらぬ噂と周囲からの冷たい視線という二次被害をこうむるココアであった。

第１９８回　結論日和

朝の陽気に包まれて、

「む……」

海のごとく青い瞳を開けたプリンは、こちらを覗き込んでいる二人を発見した。

「わあ！　プリン偉い偉い！」

「ぴわ！？」

一人はミント。

彼は一人でちゃんと起きられた友人を犬のように撫でてやった。

「おはよ！　ちゃんと一人で起きられるようになったんだね！」

「む、おはよう。ふふふ、頑張った」

もそもそと起き上がった後、進化を遂げたプリンはミントと挨拶を交わす。

前よりも随分と伸びた髪についた寝癖は、撫で付けるだけですぐに従う。

これを、なかなか素直な髪と取るか、なかなか根性のない寝癖と取るか。

「？」

ココアにケンカを売っているその髪質はほっといて、プリンは残る一人に目を向けた。

「……」

それは、さっきからこちらをじとーっとした目で見ているポトフ。

「……。人の寝顔を観察するとは、趣味が悪いな」

そんな彼に、プリンはさらりとそう言った。

「誰もテメェの寝顔なんざ興味ねェって言うかそれ以前に今までどんだけ寝顔さらして生きてきたと思ってんだテメェはっていやそんなツッコミはどォでもいい！！」

するとポトフは自らの長いツッコミをポイ捨てし、後ろに隠していた少女を前に出した。

「ふわあ？！」

両方の肩をしっかり掴まれてズイッと姿を現した彼女は、

「？　ココア？」

まごうことなきココア。

「……おはよう？」

「お！　おおおはよー！」

なんでいるの？　と言わんばかりだが取り敢えず挨拶をするプリンに、挙動不振に応えるココア。

「……」

「……」

「……」

「……」

「「……」」

沈黙。

「ええっと……プリン、ときめいたりする？」

訪れた無音の世界を振り払うように、ミントがゆっくりと口を開いた。

「？　ときめく？」

「う～ん、なんて言うか、ココアを見てドキドキする～、とか？」

ときめくの説明を、ミントが自信なさげにすると、

「全然」

プリンがきっぱりくっきり答えた。

「テメェちょっとはときめけェ！！」

ゆえに、ポトフは彼に蹴を入れた。

「っていやいやときめいちゃダメでしょー？！」

よって、ココアが彼にツッコミを入れた。

「テメェ、ココアちゃんに魅力がないっていうのかいやときめきやがっても蹴るけどな！！」

「つまりどっちにしろ蹴ってたのー！？」

むちゃくちゃなポトフにココアが突っ込みを入れているなか、

「つまり、魔法はちゃんと解けたってことだね」

ミントはプリンを起こさせながら安心した。

「む？　……、ああ」

なんのこっちゃと少し考えた後、たどりつくのは昨日の出来事。

「ちゃんと覚えてるみたいだね、どうだった？」

「む？」

「”恋愛感情”の感想は」

ピンときたプリンに、イタズラっぽく笑ったミントが問い掛けた。

「……。ふむ」

すると、プリンはココアに目を向けた。

「確か、ココアを見ているだけでドキドキしてきて何か理由もなく”好き”という気持ちでいっぱいになってずっとそばにいたくて誰にも渡したくな」

「のわーーーーー！！」

真面目な顔でさらさらとこっぱずかしいことを言われて堪ったもんじゃないココアは、顔を真っ赤にしてその回答を遮った。

「ほほう、どうやらポトフからそんなふうに思われてるらしいねココア？」

「聞こえない聞こえない聞こえないー！」

にやりと笑ってみせたミントの言葉も、両手で耳を塞いでシャットアウトするココア。

「……で、”恋愛感情”とやらがなんぞやってのは分かったんだろォ？」

その隣で、その感情が自分の物と確認できたポトフが質問を投げ掛けた。

「ムースちゃんのことはどォなんだ？」

という、当初の目的を。

「うむ、あれが”恋愛感情”と言うものならば」

それを真面目に受け取ったプリンは、

「僕は今まで一度もその感情を抱いたことがないぞ」

まことにさらりとお答えになった。

「っ、くしゅん！」

同時刻。

隣国の国立魔法学校に小さなくしゃみが放たれた。

「……ふぅ、嫌ですわ。風邪でしょうか？」

それは、見事なツイストがかかった紫色のロングヘアお嬢様のムースから。

「……」

鼻に手を当てるムースの隣で、彼女のルームメイトであるバニラは、水晶玉から飛び出したカードを無表情に見下ろしていた。

「……道端の、小石」

第１９９回　学食日和

学生食堂、略して学食。
その名目上、比較的お手頃な価格で食事を楽しめる場所。
なかには自室できちんと自炊する者もいるが、大多数の生徒が利用する。
おそらくは、準備から後始末までの面倒がないということが大きいのだろう。

「鹿の丸焼きちなみにレアで！」

早速注文をした彼はポトフ。
おそらくは、血抜きと骨の後処理の面倒がないということが大きいのだろう。

「ははは、あいよ。まったく、ポトフくんくらいだよこんな注文するのは」

「あっは、お願いしまァす！」

という冗談はさておき、こんな注文をしても比較的安価。
それは、料理長の趣味がハンティングだから。

「お次の方どうぞ」

という冗談もさておき、食堂のおっちゃんがカウンター越しに声をかけると、

「キャベツちなみに千切りで」

さらりとした注文が飛んできた。

「――！！」

「なっ……」

ほとばしる戦慄。

キャベツの千切り。

これは比較的安価な学食のなかでもかなり安い方の品目。

それでいてこの上なくシンプルなこの注文は、おかわり自由。

おそらくまがいなりにも栄養バランスを考えたヘルシー思考の女子生徒くらいしか頼まないだろうと踏んだ店側は、注文通りに決まってちょこんと副菜用の小皿にのせる。

これのどこがバランスを取れているんだ、ペッ。

第三者から見ると、そんな心境。

「ど、どのサイズにします？」

なのだが、今回の客は勝手が違うようで。

「一玉」

一点の曇りもなく即答したプリンは、ややあって、テーブルに何やらモサッとしたものを運んで席に着いた。

ややあったのは、おっちゃんが自らキャベツを刻んだから。

魔法を使えば早いのであろうが、それは職人のプライドが許さない。

「……」

「……」

「……」

「いただきます」

ぱむっと手を合わせて箸を取り、キャベツの千切りを何もかけずに食べ始めたプリン。

「お、美味しいー？」

「うむ」

問えば、もくもくと虫のごとくキャベツを食らいながら頷いた。

「た、たまにあるけどなんなんだろーね、あのプリンのキャベツ食らいー？」

「まあ、普段からプリンとか豆腐とかところてんとか……取り敢えず、ぷるぷるしたものばっかり食べてるから、たまには歯ごたえのあるものが食べたくなるんじゃないの？」

ドリア片手にヒソヒソと話し掛けてきたココアに、タラコスパをいただきつつ答えるミント。

今夜は焼き魚定食でも食べさせよう、と、偏りまくりな友人の食生活を心配しながら。

「あのなァお前」

そんなとき、鹿に噛り付いていたポトフが、呆れ返ったようなた

め息をついた。

「肉食え、肉！」

そして、まだ手を付けていない部分の生々しい肉を差し出した。

彼なりに、やはり心配しているだろう。

「……、知っているか？」

そんな彼にちらりと目を向けて、

「肉はガスを臭くする」

プリンはぼそっとそう言った。

「……へ？」

唐突に提示された話題に、ポトフは差し出したポーズのまま疑問符を浮かべる。

「肉などを食べると分解の際にインドールなどのにおいの強いガスが発生する」

彼の疑問に答えるように、プリンはさらさらと言葉を続けた。

「――」

オナラか。

オナラの話をしてるのかこいつ。

お食事中の話題じゃあないだろうそれは。

いやしかし。
いやしかし。

ガタッ

立ち上がったポトフは、迷わずカウンターに振り向いた。

「おっちゃん、キャベツの千切り一玉追加！！」

「あい――よおおお？！」

お前はおっちゃんに腱鞘炎を起こさせる気か、と心の内で突っ込みつつ、意地と根性でキャベツを高速で切り刻み始めるおっちゃんであった。

「！？　なんかポトフにもヘルシー思考が感染したー？！」

「えええ、どしたのさポトフまで！？」

「……ちなみに食物繊維は腸内細菌の栄養になるからガスの量が多くなるのだがな」

第２００回　合格日和

夏休みから約一ヶ月。
卒業を控えた学校には、お知らせフクロウがたくさんやってきていた。

「受かったァーっ！！」

「わっ、ホントに受かってるーっ！！」

リボンを解いて内容を確認すると、ポトフとココアの瞳が輝いた。

「ホント、ココアちゃんもっ？！」

「うんうん、ポトフもーっ？」

「あはは、おめでと二人とも」

きゃいきゃいとはしゃいでいる彼らを見て、ミントは温かく祝福した。

「む。受かった」

「あはは、えらい温度差だねプリン？」

後、実にあっさりとしたプリンの感想に、笑いながらツッコミを入れた。

「む？　ミントにも、お知らせ？」

するとこちらの持ち物に気付いたプリン。
彼は、ミントの左手にあるお知らせの紙を見て首を傾げた。

「あ、うん。みんなみたいに進路が決まったお知らせなわけじゃないけど」

それにこくりと頷いた後で紙をそちらに見せたミントは、

「薬草取り扱いの資格。これならみんなに少しでも協力できるかなー？　……って、思って」

と、照れ臭そうにそう言った。

「……」

「……」

「……」

協力。
言わずもがな、ココアとポトフは医療関係。
プリンは、製薬などにも関する大企業。

「……あ、えっと、その」

「「ミントーーー！！」」

「って、何事おおお？！」

彼らの反応を見て言わなきゃよかったかと思っていたところ、プリンとポトフが感極まってひっついてきたゆえに叫ぶミント。

「あはは、やっぱり友達思いだねーミントはー？」

そんな友情を眺めながら、ココアはふわりと微笑んだ。

「ん？」

その時彼女は、ひっつかれた拍子にミントの手から落ちた紙が、二枚であることに気が付いた。

「なんで二枚ー？」

それを拾ったココアは、彼がもう一つの資格を取得していたことを知った。

「……猛植類取り扱い資格……」

具体例・マッドプラント。

廊下を歩いていると聞こえてくるは、生徒たちの声。

「受かりましたぁ！」

「ホンマか！　やったなぁ自分！」

それは、夏休み中に受けた就職試験やら入学試験の結果。

「うんうん、みんなちゃんと受かってるね」

学力水準の高い学校だけあって、喜びの声の方が圧倒的に多い。

「うふふっ」

明るいニュースで持ちきりの校内で、クー先生は、頬が弛むのを止められなかった。

それもそのはず、自分が手塩をかけて教育してきた教え子たちが立派に巣立っていくから、

「これでやっと遊べるねー！！」

――では、なかったようだ。

『そんなわけで、第何回？　愛と勇気の体育祭を始めるよー！！』

思い立ったらすぐ実行。

アナウンス魔法を使い、クー先生は全校生徒に体育祭開始を告げた。

『なんか受験生らしくピリピリしちゃって……まったく、このわた

しに気を遣わせるなんて高度なテクニック使わせないでよねみんなったら！』

ちなみに彼女が、ええええ、とか、そんないきなり、とか、校内の至る所から発されたツッコミに構うことなんて一切ない。

『タイトルは、”サバイバル・いん・樹海での障害物競走――目の前の障害物を張り倒せ――”！　ルールは簡単っ、とにかくサバイバルだよ！』

ノリノリで体育祭らしくない説明した後に、クー先生は指ぱっちんをかました。

『優勝ペアには、トロフィーと賞状が贈られるよ！』

賞品は、わりと普通。

『じゃあ早速始めるよ！　みんな、デッドオアアライブ☆』

後に縁起でもない言葉で、クー先生はスタートフラッグを振り下ろした。

第２０１回　因縁日和

落葉が舞い始めた森のなかを、二人の少女がお話しながら歩いていた。

「まったく……大部分の生徒の進路が決まったからって、いきなりサバイバルバトルだなんて」

「一体何考えてるんだ～ってかんじみたいな～？」

「……まあ、おおよそ何も考えてないんでしょうけどね」

その名もアロエとチロル。
種類は違えど、二人揃って美少女である。

「で～、アロエは大学進学が決まったのよねみたいな？」

クー先生への愚痴をこぼした後で、チロルはころっと話題をもとに戻した。

「はい、より専門的な知識を身に付けるために」

それに対し、アロエは尤らしい返答をする。

「それで、チロルさんは花嫁修業、でしたっけ？」

返答ついでに、彼女が次の話題を持ち出した。

「そうそうそうそう！　花嫁修業！　立派な花嫁になってみせる～

みたいな！」

するとチロルは、がっつり食い付いた。

「ほほう、例えば？」

「んとね、お料理でしょ、お洗濯でしょ、お掃除でしょっ」

アロエの適当な催促にノリノリでついていくチロル。

「ふむふむ、他には？」

「それにそれに、あんなことやこんなことまで、ってキャー！　何妄想してるのアタイってばー！！」

「……何を妄想したのか知りませんがご馳走様です」

呆れたような棒読みアロエの隣で、チロルは一人で勝手にフィーバーしていた。

「だからねだからねっ、アタイはもっとミントきゅんにふさわしいような可愛くて素直で明るくてしっかりものでか弱くて頼りがいがあって艶めかしくてセクシーで落ち着きのある女性になるのみたいな！」

「随分と欲張りましたね」

「んふ～っ♪」

どうやら自分の世界に入ってしまった様子のチロルにかなり適当

に付き合いながら、アロエが無意味に前進していると、

「あ」

「「あ」」

「あ？」

木々が晴れて道が拓け、彼女の目の前にミントとココアが現れた。

「あ」

それを、チロルはワンテンポ遅れて確認した。

「お久しぶりです、ミントさん、ココアさん」

「あ、うん。こっちこそ久しぶり」

「ひ、ひさしぶりー」

さらっとしたアロエの挨拶に、さらっと応えるミントと引きつるココア。

その、引きつるゆえんのものは、

「……、……」

心なしか燃え盛る炎と共に阿修羅像が背後に見える、チロル。

「ね、念のために言っておくけど、勘違いしないでよねーチロルー？　わ……私は、今回たまたまミントとペアになっただけで」

「キエエエエエエ！！」

「って、イヤーーー？！」

誤解を解こうにもチロルが先に錯乱状態に陥り襲い掛かってきたため、ココアはひとまず逃げ回り始めた。

「ち、チロル……？」

「おやおや。落ち着きのある女性を目指していたのではないのですか？」

その荒れ狂いっぷりに若干引き気味のミントの隣で、アロエは小さく息をつく。

ガキィン！！

瞬間、炎の属性がついた双剣でミントの首を狙ったところ、マットホイップの口で食い止められた。

「っ、危な……。あ、アロエ？」

冷や汗かいたミントが、恐る恐る名前を呼んでみると、

「これはサバイバルバトルですよって首を狙います」

アロエの、単純かつ明快な回答が返ってきた。

「いやいやいやサバイバルバトルなんだけど首を狙いますって」

「では心臓を狙います」

「っていやオレなんか悪いことしたあああ?!」

「まあ、多少」

「って、ええホント!?　ちょ、まっ……、ご、ごめんなさいいいいい!!」

連続攻撃を畳み掛けるアロエと紙一重でかわしまくるミント。

こうして、ミント・ココアペアとチロル・アロエペアの戦いが始まった。

第２０２回　応報日和

カサリと渇いた音をたてて、枯葉は地面の上に降り立った。

「っだァァァ！！　なーんーでーテメェとペアなんだよォォォ？！」

そんな風情あふれる物静かな空間に、ポトフの嘆く声が響き渡った。

「僕だって好きで貴様とペアになったわけじゃない」

頭を抱える彼に向かって、ぴしゃりと返したのはプリン。

「はァ……なんだこの何一つときめかない状況は……？」

がっくりと肩を落としたポトフの、ため息まじりの一言。

「……。まあ、ときめかれたら逆に気持ち悪いが」

すると、プリンは静かに脚を止め、

「この状況は、ときめき好きな貴様が原因だな」

ふっと目を閉じてそう言った。

「は？」

と、疑問符を浮かべたすぐ後で、

「――！？」

ポトフは、周囲の異変に気が付いた。

「フレアストライク！」

「サンダーシュート！」

「アクアホーク！」

「ウッドスピアー！」

「シャドウサーベル！」

「ライトハンマー！」

「アイスブラッジン！」

「ウインドナイフ！」

瞬間、彼に複数の魔法が一度に襲い掛かってきた。

「うおう？！」

ドカアアアアアン！！

慌てて射程内から逃げたポトフであったが、突然の出来事に混乱し、辺りを見回した。

――するとそこには、

「ごめんなさいポトフくん！」

「本当はこんなことしたくなかったんだけど！」

「でもはっきりぶっちゃけますと！」

「「私たち、あなたにいっぺん痛い目に合わせてみたかったの！！」」

複数人の、女の子。

「……え？」

予想だにしなかったこの状況。
しかし確かなこの敵意。

「なんていうか、もうすぐ卒業だし！」

「もういっかな的な考えで！」

「取り敢えず！」

「皆の意見が一致したので！」

「実行することにしました！」

未だ状況を掴めていないポトフに構うことなく、女の子たちは一言ずつ発すると、

「「覚悟なさい！　女の敵！！」」

再び魔力を高め始めた。

「……え？　っと……？」

「恐らく貴様が以前遊びで付き合っていた女の子たちだろう」

疑問符大量発生な彼に、プリンは枕を抱え直しながらさらりと告げた。

「ええ？！　確かにみんなと付き合ってたけど一緒にお茶とかお散歩とかしてただけで遊んでなんか……それに、ちゃんと二年のダンスパーティーの時にココアちゃんだけだって断ったぜ！？」

「それが”遊んでいた”と言うのだろう」

あわあわとなんかほざいているポトフに、プリンは呆れたようなため息をつく。

「とにかく、これは貴様が招いた事態だ。貴様が落とし前をつけろ」

後、きっぱりすっきりそう言った。

「えええ？！　いやでも俺――」

そうプリンが突き放した直後、ポトフに複数の魔法が直撃した。

「「あ、当たった！？」」

いや、びっくりしてるが、当てる気で魔法を放ったのだろう。

「……っ」

ドサッ

魔法の世界に女の子は男の子より力が弱い、なんて定説は存在しない。

魔法の力は、その人個人の魔力と気持ち次第。

ましてや、これだけバトルイベントの多い学校の最上級生の、しかも複数ともなると、その威力は言うまでもない。

「これが教訓だな」

相当なダメージを受けて倒れたポトフを見下ろし、

「どうする？　反撃するか？」

プリンは、質問を投げかけた。

「……ゴホ……っ」

すると、ポトフは起き上がる動作も見せず、

「っれ……レディは、蹴ら……ね……」

と、一言そう返した。

――それが、彼の覚悟。

「……、そうか」

ポトフの答えを聞いたプリンは、それ以上は何も言わずに、黙って

彼に背を向けた。
そう、自分はもう何も言うまい。
今になってようやく自分のしたことに気付いた愚かな弟だが、せめて彼の意見を尊重することだけはしてやろう。
何もかも受け入れたプリンは、フッと静かに目を閉じた。

「〝神風〟」

――直後、彼の最大魔法が炸裂した。

「って、オイイイイ?!」

「「っきゃあああああああ!?」」

吹き荒れる暴風により綺麗にぶっ飛んだ女の子たちは、全員見事に星になった。

「ちょっ、おま、何してんだっていうか俺の話ちゃんと聞いてた?!」

女の子に手を挙げるわけにはいかんと、騎士道を貫いたつもりであったポトフが食って掛かると、

「む?　だから、魔法で吹っ飛ばしたんだろう?」

プリンは、何を言うかといった態度で言い返した。

「いや、だから女の子に手を……ってお前あれか!　お前まさか蹴らなきゃいいとか判断したのか!!」

「だから貴様がそう言ったのだろう」

「いや、そォいう意味じゃねェしって言うかお前レディィに暴力振るうなんて最低だな?!」

「む……、男女平等だ、と言うかお前にそんなこと言われたくないっ！」

「テメェ尤らしく男女平等語ってんじゃねェって言うかなんであの流れで攻撃したんだよあの流れで?!」

「そんなの負けたくないからに決まっているだろうこれは唯一僕がみんなと対等に渡り合える体育祭なんだぞと言うかなぜ二回言ったっ！?」

「こんなん体育祭って言わねェって言うかんなもん大事なことだからに決まってんだろォォォ！!」

そんなこんなで、ボロボロだったことも忘れていつものごとく兄弟喧嘩を始める二人であった。

第２０３回　思考日和

綺麗な花には刺がある、とはよく言ったもので。

「覚悟なさいこの頭ピンク～！！」

「脳内ピンクには負けないよー！！」

片や釘バット、片や電ノコという、いかにも刺々しい武器を手にした美少女が二人。

彼女たちは、一人の罪な男が原因で戦っていた。

「絡みつけ！　朝――」

「剣舞、火炎車」

「うにゃあああ！　マッドホイップううう！！」

アロエの動きを封じるつもりが、炎を纏った回転切りによって鞭を斬られた焼き尽くされ、あまりのショックに叫んだ彼の名はミント。

彼が原因で、と言っても、明らかに一方的な勘違いだが、彼らの戦いは始まったのであった。

「きぃーっ！　あんたはおとなしくポトフといちゃついてなさいよ～みたいな～！！」

「っだからぁ！　私とミントは友達だって何回言ったら分かるのよー？！」

もちろん、ドロドロ三角関係が原因なわけではない。

「友達が彼女の目を盗んでらぶらぶするかあああああ！！」

「いや、あんたの目はどういうふうに脳内変換されてんのよーーー！？」

互いに噛み合わない言い争いをしながら、互いに物騒な武器を振り回す。

「ウッドウォール！！」

「フレアドライヴ！」

「って、わあああ！？　天然杉があああ！！」

そして、こっちもこっちで騒がしい。

先程から、ミントは対アロエに苦戦していた。

理由は見ての通り、ミントの魔法をアロエがことごとく燃やし尽くすから。

「おやおや、学年チャンピオンがこの程度ですか？」

燃え尽きた愛すべき植物に愕然としている彼を、彼女は悪役のごとく嘲笑った。

「ほら！　アロエがミントをいぢめてるよー！」

「話を逸らそうなんてそうはいかないみたいな！」

「いやいや事実ー！　ミントめちゃくちゃ相性悪くてめちゃくちゃ不利ー！」

魔法も交えて怒濤の攻撃をしてくるチロルから、ココアは逃げるだけで精一杯。

「うう、愛の力って恐ろしい……」

なんて感想も抱くほど。

ミントの状況を見ても、明らかにこちらの方が分が悪い。

でも、だからって負けたくない。

ついでにミントをそんな目で見たことは一度もない。

恐らく自分もそんな目で見られたことも一度もない。

「ココア！」

「！？　ちょ、ちょっとー！　近づかないでよ火に油ー！！」

そんなことを考えているとミントが隣にやってきたので、ココアは傷つく言葉を口にした。

「？　何言ってんのさ？」

対してミント。

こいつ、今チロルがあんなに荒れている理由を絶対理解していない。

「とにかく、申し訳ないけどオレだけじゃアロエに勝てそうにないんだ」

そんなココアの思考なんて知る由もなく、ミントは言葉を続けた。

「ココア、盾で動きを封じられる？」

と。

それは、彼のまんま木製の盾では簡単に燃やされてしまうから。

「あ！　その手があったかー！」

すると、ココアは気が付いた。

逃げるのがしんどいなら、襲ってくるのを止めればいい。

「いくよー！　カオスシールドー！！」

それならば、と早速実行。

ココアは、チロルとアロエを囲むように闇の盾を張り巡らせた。

「！」

「へぶっ！」

それに直感で足を止めたアロエと、見事にぶつかったチロル。

「”へぶっ”って……はしたないですね」

鼻からいったチロルに、アロエは呆れたような目を向けた後、

「さて、どうしましょうかね」

自分の三倍程もある闇の盾を見回した。

闇と言っても、もちろんただの影になっているわけではない。

現に、チロルが顔面を”へぶっ”っとぶつけている。
そして、以前の学祭で見たように、この盾は相手の魔法を吸収する。

「と、なると」

囲まれていない、上。
しかし、これでは相手の位置が分からない。

「きぃー！　この小癪ピンク～！！　アタイもミントきゅんと内緒話したい～みたいな～！！」

冷静に状況を見るアロエに対し、何やらおかしな方向で頭に血が上っているチロル。

「まあ、闇の盾を張っている以上ココアさんは攻撃できないでしょうし」

そんなペアとは相談する気も起きないのか、アロエはそのままにしておいた。

「回復魔法は対象の傍にいないと使えないし、召喚魔法なら詠唱させなければいい話。他のミントさんの攻撃なら、アロエの炎で焼き尽くせばそれで終わり」

召喚魔法並みの魔力が高まれば、いくら森の中でもミントの居場所が分かる。
アロエはつらつらと解析すると、

「時間の問題ですね。アロエが勝ちま」

「うーん、残念。オレの魔法は植物を生やすだけじゃないんだよね」

そんなアロエの発言を、ミントが盾の向こう側から遮った。

「……？」

聞こえてきた声に、彼女は疑問符を浮かべる。

どういうことだ。

彼の今までの攻撃を見ても、鞭の他は、地面からばかすか植物を生やすだけ。

「オレさ、知ってるんだ」

ココアの隣で弱く魔力を放出し、

「チロルのことも、アロエのことも」

ミントは左手を上に向けた。

「「――！？」」

彼の言葉に、アロエのみならずココアも目を見開いた。

「？」

分かっていないのは、チロルだけ。

今はもう昔の感情ではあるが、誤魔化し切ったつもりだったのに。

まさか、彼はアロエの気持ちに気付いて、

「ピノキ花粉症だって」

やっぱり、いなかった。

「「え」」

が、気付くとドーナツ状の闇の盾の真上に現れた黄色い塊。

――そう、ミントの魔法は植物を操る力。

「食らえ！　花粉玉あああ！」

「「きゃあああ？！」」

花粉アレルギーな方に対してのみ最悪な奥義、花粉玉。

どこかしらのパクリっぽい攻撃で、ミントたちは勝利をおさめたのであった。

第２０４回　似者日和

今年の体育祭は、森での障害物競走。
なんでも、障害物を蹴散らして最後までサバイバルした者が優勝するらしい。
しかし、ここは紅葉しはじめた木々の生い茂る自然豊かな森の中。
住人は、野生の本能に忠実に従う動物たちと、やたら血の気が多い魔物たち。
その他は、基本的に植物で埋め尽くされている。
むちゃくちゃな学校と言えど、まさかこの森の生態系をぶっ壊すなんてことを主旨としているわけではない。
すると、必然的に残る”障害物”というのは――。

「これは障害物競走で、しかもルールは障害物を張り倒すサバイバルバトル。となると、障害物である他のペアを負かすのは当然のことだろう」

「だからって最大魔法なんて連発しやがってテメェはレディィに対する優しさってもんがねェのかって聞いてんだよ?!」

「だから、向こうから攻撃してきたんだ。それが自分に跳ね返ってくることなんて覚悟の上だろう」

「あれはっ！　……っ、お……俺に対する恨みであって……」

体裁的にはかわいいはずの教え子たちを”障害物”と称した学校イベントにて、二人の学生は歩きながら会話を交わしていた。

「ぜ、全部俺が悪ィんだよっ！」

と、ポトフ。
彼は、自身の独断と偏見からきた軽はずみな行動が、いかに皆を傷付けていたかを痛感していた。

「そんなことはどうでもいい」

それを、プリンは知ったことかと受け流した。

「て、いやいやどう考えてもどうでもよくねェだろォ？！」

「彼女たちの恨み辛みや貴様の考えなんて僕には関係ない」

噛み付くポトフに対して、プリンはさらりと言ってのける。
ちなみに、あれから数回に分けて同じような理由でやってきた女の子たちを、プリンは同じように吹っ飛ばした。
確かに、奇襲をしかけてきた女の子たちやポトフの過去の行いなんて、プリンには一切関係ない。
だから、彼女たちを攻撃する理由はただひとつ。
これは障害物競走なのであって。

「あいつらが攻撃してきたんだ」

――お前に。
そんな、分かりにくく弟想いなお兄ちゃん。

「だから、俺が全部悪いんだっつってんだろォ！？」

ほら、やっぱり伝わっていない。

「……、うむ。そうだな」

「って、今度はあっさり認めやがった?!」

「確かに貴様は頭も口も性格も行儀も趣味もセンスも悪い」

「って、今度は喧嘩売ってんのかテメェ!?」

「何を言うか。貴様が”全部悪い”と自分で言ったのだろう」

「いや全くそォいう意味じゃねェしって言うか俺の人格すべて否定!?」

「と言うか今更気付いたのか？　そんなこと、僕はとうの昔に知っていたぞ」

「喧嘩売ってんのかそォなんだなテメェコノヤロおおお!!」

そんなだから、いつもケンカに発展する。

と言っても、それはお互い様なのではあるが。

「あ！　ポトフさん！」

「おお、プリンもおるな」

二人が互いに戦闘態勢に入りかかったところで、彼らは後方から声をかけられた。

「「？」」

よって二人が振り向くと、そこにはニャンコとソバカスくんが立っていた。

「おお！　サラダとタマゴじゃねェか！」

彼らの名前を口にして応えるポトフと、

「……、……。　！　ああ……」

かろうじて記憶にあったらしいプリン。

「ポトフさん！　ボクら、ポトフさんのご指導のおかげで！」

「ついに彼女ができたんや！」

プリンの失礼極まりない反応に気付くことなく、サラダとタマゴは、喜色満面で報告した。

「ソルティちゃんと！」

「ドレシィや！」

それは、彼女ができた嬉しい報告。

「……、……。　！　ああ……」

その名前は、どうやらポトフの検索エンジンに引っ掛かったらしい。

「心当たりがあるのか貴様まさか遊びで――むぐっ」

「おォ、そうか！　よかったなァお前ら！」

余計なことを言い掛けたプリンの口を右手でガッツリ塞ぎつつ、ポトフはにこっと笑って喜びを分かち合った。

「はい！　ポトフさんのおかげですっ！」

「ほんま、おおきにな！」

輝くばかりの感謝の気持ちが良心に痛い。

「そんな感謝の気持ちを抱きつつ！」

「ワイらと勝負や、ポトフとプリン！」

そんなポトフの心境なんてつゆ知らず、サラダとタマゴは彼らに真っ向から勝負を仕掛けてきたのであった。

第２０５回　幸せ日和

ことの始まりは、またしてもこの男。

「あら、ご機嫌麗しゅう。ココアさん、ミントさん」

「わあ、こんにちは。ココア、ミントくん」

チロルとアロエ戦を終えて現われたのは、ツインテ少女とふわふわ少女。

「あ。こんにちはー、ブドウ、レモ――？」

挨拶を返そうとしたココアを弱く肘でつつき、

「ブドウは分かるけど、隣だれ？　ココアの友達？」

ミントは、こそっと小声で問い掛けた。

なんかナチュラルに話し掛けられちゃったけど、とでも言いたげに。

「へ？　だ、だからあの娘は委員長で」

何故か彼女に対してだけは妙に覚えが悪い彼に、ココアが慌てて答えようとしたところ、

「レ～モ～ン～っ！！　ですわあああああ！！」

レモンの怒りと炎魔法が暴発した。

ちゅどおおおおおん！！

――で、今に至る。

「い、ったたた……。ああもう、炎やだっ！」

不意討ちに吹っ飛ばされたミントは、起き上がりながら炎を批判した。

なんか、自分の知る炎魔法使いは一貫しておっかない気がする。

「ん？　でもサラダはそうでもないか？」

などと言いながら、ミントは一緒に吹っ飛ばされたとみられるココアを起こそうと試みた。

「大丈夫、ココ――」

が、ふいに違和感。

そこに倒れているのは、髪にウェーブのかかった女の子。

この、プリンには理解できないクセっ毛っぷりはココアに当てはまる。

だがしかし。

「……紫い……」

ココアは確か、ピンクかったはずだ。

ほら、チロルに頭ピンクとか脳内ピンクとか、……脳内ピンク？

「う……？　……あれ？　ミントくんだぁ」

ミントが余計な疑問を抱き始めたあたりで、彼女はゆっくりと目を覚ました。

「あ。おはよう、ブドウ」

しかも、ココア疑惑をなんかナチュラルに解決している。

「うん、おはよう」

にこりと笑って挨拶を返すブドウ。
それから辺りを軽く見回すと、彼女はふわりと疑問符を浮かべた。

「あれ？　ココアとレモンちゃんは？」

さっきまで一緒にいたはずなのに。

「うん。たぶんレモン？　に吹っ飛ばされたみたいだね」

するとミントは、煤けたローブを叩きながらさらりと答えた。
一部疑問が残っているが、そこはまあ置いといて。

「そっかぁ。大変だねぇ」

「いや、大変だねってブドウもだから」

「そっかぁ。大変だねぇ」

「いや、キミ本当に大変だって思ってる？」

「二人ともケガとかしてなければいいねぇ」

「いや、ココアはしてるかもしれないけど少なくとも攻撃したはずのレモン？　はケガしてないよね」

「ふふふ、ミントくん早口言葉上手そうだねぇ」

こいつ、アオイ科の人間だ。

「……はぁ……」

ツッコミの天敵と一緒になってしまったミントは、疲れたように座り込んだ。

「あ。ため息ついたらね、幸せが逃げちゃうんだよ」

するとブドウ。

自分が原因とはつゆ知らず、にこにこ笑ってそう言った。

「へ？」

「早く捕まえなきゃ！」

「え？」

「はい、大きく息を吸ってー！」

「すーっ？」

「はいてー！」

「はーっ？」

「あ！　また逃がしちゃった！」

こいつ、アオイ科の人間だ。

「ごめんねごめんねっ？」

「い、いや、大丈夫だよ。気にしないで」

しみじみと実感しながら、ミントは彼女に話し掛けた。

「幸せって言えば、ポトフの耳についてるのはブドウの家のものなんだよね？」

耳についてるの。

なんか表現がゴミっぽい。

「あ、うん。あれは”しあわせのおまもり”って言ってね？　私はココアにあげたつもりだったんだけど、……まあ、いっか。教会できちんとお祈りしたものだから、持ってる人を神様が守ってくれるんだよ」

そんなことは微塵も気にすることなく、ブドウはにこやかにそれに答えた。

「守って……」

「それで、幸せにしてくれるの！」

「幸せ……」

彼女の説明を聞きながら、ミントは、ことごとくココアに吹っ飛ばされるポトフを思い返していた。

「へえ……じゃあ、ブドウはココアに幸せを？」

うん、きっと手違いでプレゼントされたから効果があんまりないんだな。

と、ミントは勝手に解釈した。

「うん！　だって、ココアはルームメイトだし」

ふわふわした笑顔で話すブドウは、ココアのルームメイト。

「ココアは私の、一番のともだちだもの！」

そして、ココアの一番のともだち。

「！　ブドウ……！」

ミントとブドウよりも高く飛ばされたのか、木の枝に布団のように引っ掛かっていたココア。

降りるタイミングを見計らっているうちに流れてきた二人の会話を聞いていた彼女は、自然と胸を詰まらせた。

――それは、以前にも聞いたことのある言葉。

『ブドウも可哀想だね』

『あんなのと一緒の部屋だなんて』

『しかもそれをいいことに付き纏われちゃって』

にわかには信じられないほどの人気っぷりだったプリンとポトフとの仲が良かったココアは、女子生徒たちからの風当たりが最悪。

ミントたちと別れた後の女子寮は、この上なく居心地が悪かった。

『ううん、そんなことないよ？』

『無理しなくていいんだよ？』

いじめというものは大抵陰湿。

仲間を増やして自分のを行為を正当化し、その対象を排除して仲間意識を確認する。

そして、仲間は対象になるのを恐れて相手に同調する。

相手に悪いなんて、そんな気持ちは、ほとんどない。

『無理なんてしてないよ。私は私が一緒にいたいからそうしているの』

そんななか、ブドウはふわりと笑ってみせた。

『ココアは私の、一番のともだちだもの！』

偽りのない――少なくとも隠れて聞いていたココアにはそう感じられたその言葉は、彼女の傷を温かく癒していった。

「それに」

思い出がよみがえっていたココアの耳に、ブドウの声が聞こえて

きた。

「ココアがポトフくんのことが大好きって気持ちがすごく伝わってくるし！」

「って、ちょー？！」

「ふべっ」

「ななな、何言ってるのよブドウー！？」

どうやら、降りるタイミングを掴んだらしい。
ミントを潰しつつ現れたココアは、赤い顔で声を張り上げた。

「あ。ココアだぁ」

「見付けましたわ！　覚悟なさいまし！！」

「あ。レモンちゃんも」

アオイ科の人間は、そんなことには動じない。
ブドウは、ふわふわしたまま登場した人物の名前を呼んだ。

「お、重い……」

しかし、ミント。
このままでは潰れると、震える声を絞りだした。

「あ？」

あくまでも、悪気のない素直な感想、なのだが。

「――え？」

「バあああストインディグネィションっ！！」

「ダあああクネスサクリファイスーーー！！」

口は禍のもと。

どうやら本当に幸を逃がしたらしいミントであった。

第２０６回　語弊日和

障害物競走という名のサバイバルで、

「うはァ？！」

「ぴわわ！？」

炎と氷の使い手に、光と風の魔法使いは苦しめられていた。

というのも、この秋晴れの陽気に似合わないような極端な温度差と、

「〝霜柱〟！」

「〝バーンバニッシュ〟！」

動きを鈍らせた後に敵を討つ、息の合った攻撃に。

「くっそ……〝キラキラ〟ァ！！」

「させんで！　〝雪やこんこん〟！！」

タマゴの可愛らしい業名に合わせて降ってきた雪だるまに攻撃を防がれたと思ったら、

「〝フレイムアタック〟！」

「な――」

背後にいるサラダから、隙だらけの背中に攻撃が飛んでくる。

「っなんでフォローしねェんだよ?!」

そんな様子を何もしないで眺めていたプリンに、ポトフはガバッと起き上がってもの申した。

「む?　あんな分かりやすい手にかかるお前が悪い」

すると、プリンはさらりと言い返す。

「んだとテメェ喧嘩売ってんのか!?」

「敵を増やしてどうする、馬鹿か貴様は?」

「だからその言い方が腹立つんだって言ってんだろォ?!」

この期に及んで喧嘩する二人を見て、

「なんや、余裕やな?」

「よそ見は危険ですよ?」

「「結合魔法――”氷炭(ひょうたん)”!」」

これはチャンス、とタマゴとサラダは協力して強力な魔法を放った。

「「――」」

ちゅどおおおおおん!!

結合魔法は、文字通りに二種類以上の魔法を合わせて繰り出す魔法。
魔法は普通、ぶつかり合うとその力のバランスに従って打ち消し合う。

「け、結合魔法だと……っ？」

「む……厄介な……」

しかし、お互いの力を邪魔することなく、尚且つお互いの力を高め合う。
それゆえ、結合魔法は強力で隙がない。

「どうや？　ワイらの結合魔法の味は？」

「相当な練習を重ねてきましたからね。普通の結合魔法とは少しわけが違いますよ」

氷の炎。
なんとも矛盾した魔法を操りながら、タマゴとサラダは強気な笑みを見せた。

「ま……、まだまだっ！　”キラキラ”ァ！！」

「む、”神風”！！」

しかし、このまま負けてられない。
ポトフとプリンは気合いと根性で立ち上がると、得意の光魔法と風魔法をお見舞いした。

「「な――っ！？」」

が、氷炭の前にあっけなく打ち消される。

「無駄や」

信じられないといった顔をした彼らに、

「ぼくらの結合魔法は、結合魔法でないと勝てませんよ」

と、二人は強気に言い放った。

魔法は、単純にその力のベクトルが小さい方が大きい方に負ける。

しかも氷と炎は、本来であれば対極の魔法。

それを見事に結合させているところから見ても、彼らの結合魔法は、並みのレベルでは打ち消すことができない。

詰まり、こちらも魔法のレベルを引き上げる結合魔法で対抗することが、

「……結合……？」

「……魔法……？」

ベター、なのだが。

「「……」」

隣どうしは、ポトフとプリン。

「うむ」

「ああ」

自慢じゃないが、これだけ長い付き合い。
お互いの考えていそうなことくらい、目を見れば分かる。

「「無理」」

本当に、自慢じゃない。

「「え？」」

だが、他人からはとってもなかよしこよしに見えるのか、サラダとタマゴはびっくりフェイス。

「僕と馬鹿犬が結合魔法？　何を言うか。できるわけないだろう」

「い、いえ、出来そうな気がビシバシしていたんですが……？」

「ないない。俺がこいつと結合できるわけねェだろって言うか結合なんざしたくもねェ気持ち悪ィ」

「聞こえ悪いわ！！　ちゃんと結合のあとに魔法つけんかい魔法！！　ワイらそんなんとちゃうわ！！」

どうやら、サラダとタマゴはどっちもツッコミ属性なようだ。

「まァ、ミントとなら結合できるかもだけどな」

「た、確かになんかポトフさんが言うと語弊がある気がします？！」

「む？　僕はとっくの昔に結合できたぞ」

「まさかのプリンまで?!　品位!!　品位が著しく損なわれとる!!」

「はァ?!　おま、何ミントと結合してんだよ!?」

「はにゃにゃ……ぼ、ぼくらは正常ですようっ!!」

「ふふふ、羨ましいだろう?」

「三角関係や!?　禁断の三角関係や?!」

何やらポトフが言うと語弊があるように聞こえるらしい。
結合魔法に変なイメージがついてしまったらしいタマゴとサラダ。
彼らは、自分たちの身の潔白を示すために、青い顔で慌てて結合魔法を解いた。

「馬鹿犬」

「おう」

直後、プリンは枕で顔を覆い、ポトフは右手を上に上げた。

「”ピカピカ”ァ!」

「「っ?!」」

「――”テレポート”」

強烈な光で視界を奪い身動きを止めた後での場外強制送還。

「敵前で自ら武器をしまうなんてな。フッ……甘いぜ！」

「ぷわ……ねむねむ」

結合魔法で対抗できないどころかそれを使ったこともないのであれば、別の方法で相手の結合魔法を消せばいいだけ。

自ら武器を収めた二人に作戦勝ちした後で、なんかかっこよく決めたつもりらしいポトフと、何事もなかったかのようにあくびをするプリンであった。

第２０７回　対応日和

ヒトは見かけによらないようで。

「……ま、まさか……」

なんとか召喚魔法で炎の委員長に勝ったミントは、召喚獣を帰らせた後、ある異変に気が付いた。

「？　おねーちゃ、どーちたの？」

激闘を繰り広げている間にすっかりブドウとココアを忘れていたミントだが、

「き、キミ、お名前は？」

戻ってきてみると、どうしたことか。

「ん？　ココアはね、ココアだよー？」

ココアが、ちっこい。

「へえ……ブドウって、バニラと同じ呪魂魔法使いなんだ……？」

あのふわふわにこにこおっとり教会少女が、まさか呪魂魔法の使い手だとは思ってもみなかったミント。

彼は、ちっこいココアを前に引きつるしかなかった。

「おねーちゃ、おなまえはー？」

「ん？　ああ、オレはミントだよ。って言うかお姉ちゃんじゃなくてお兄ちゃんなんだけど」

そんな彼に、ちっこい彼女は話し掛けた。

「ミントおねーちゃ、ここはどこー？」

「ここはセイクリッドの森だよ。って言うかお姉ちゃんじゃなくてお兄ちゃんなんだけど」

「せーくりど？　ミントおねーちゃ、ココア、ふぇのりりるがおうちなんだけどー？」

「あー、うん。ちゃんと帰してあげるからちょっと待っててね。って言うかお姉ちゃんじゃなくてお兄ちゃんなんだけど」

「ミントおねーちゃ、ココア、ココアがのみたい！」

「ごめんね、今ココアないんだ。って言うかお姉ちゃんじゃなくてお兄ちゃんなんだけど」

どうやら、ココアはとことんミントを男として認識していないらしい。

しかし、相手は自分の身長の半分くらいしかないがきんちょ。

ここでプッチンするミントではない。

「えー？　ミントおねーちゃのけち！」

「ごめんごめん。これで許して。って言うかお姉ちゃんじゃなくて

お兄ちゃんなんだけど」

ぷーっと膨れたココアにしつこく訂正を入れながら、ミントは指を鳴らしてお花を呼び出した。

「わー！　きれー！」

すると、流石は女の子と言ったところか、ココアはたちまちご機嫌に。

「これ、なんのお花ー？」

「それはね、コ・コーアってお花なんだよ？」

「わー！　ココアとおんなじおなまえだー！」

もちろんお花と言っても、ポトフみたいに真っ赤なバラでキザぶるミントでもない。

「はちめて見たー！」

「雪解けの季節に山の天辺近くに咲く花でね？　そんなふうにピンク色とか、赤い花を咲かせるんだよ」

自分と同じピンク色の花に目を輝かせているココアを相手に、ミントが植物講座を開いていると、

「む？」

「お？」

噂をすれば、なんとやら。

「え？」

「！」

ミントたちは、後方からこちらにやってくる二人に気が付いた。

「「ミント！」」

「あ、ポトプリン」

「「ポトプリン？！」」

ポトプリン、改め、ポトフとプリン。

「どうして僕が後なんだっ？」

「いや、そこかよ？！」

変なところにご立腹なプリンにツッコミを入れた後、

「れ？　ミント、ココアちゃんは一緒じゃねェのかァ？」

ポトフは辺りを見回しながら質問した。

「何言ってんのさ？　ココアはここ……」

言われて、ミントが足元に目を向けると、

「あ……れ？」

ココアは、彼の足をガードにして隠れていた。

「どしたのさ？」

「だ、だって！」

「「！？」」

ミントが後ろを向いてしゃがみこんだときに、ちらっと見えたらしい。

プリンとポトフは、ちっこいココアに目を見開いた。

「こ……ココアちゃんのこども……？！」

「いや、こどものココアだろう」

衝撃を受けまくったポトフに、プリンがさらりと訂正を入れた。

「な、なんだ……俺としたことが、てっきり無意識に襲ってしまっていたのかと……」

「何をそんなに焦っているんだ貴様は」

「いや！？　それよりまさか他の野郎に無理矢理こどもを産まされていたのでは？！」

「だからココアのこどもではなくこどものココアと言っているだろ

う」

「ハッ！！　それとももしや俺とは遊びで他に本命が！？」

「激しく混乱しているな貴様」

百面相ポトフの隣の、無表情プリン。

そんな愉快な二人に背を向けて、ミントはココアに向き直った。

「み、ミントおねーちゃ、あの人たちのことしってるのー？」

すると、ココアは何故か小さな声で問い掛けた。

「へ？　あ、うん。水色の方がプリンで、黒いのがポトフ。オレの友達だよ」

なんだ人見知りか、と思ったミントは二人をご紹介した後で、

「……プリン、と、ポトフ……」

あれ？　でもオレには普通に話し掛けてきたよな？　と、矛盾した事実を思い出した。

が、これが人見知りではないとすると。

「……かっこいい……」

プリンとポトフの外見は、どうやらこんながきんちょにも通用するようだ。

「……」

そんな、友人二人との対応の違いに、

「……いや、別に分かり切ってたことだけどさ……」

なんとなく落ち込むミントであった。

第２０８回　呪解日和

「ココアちゃァん？」

と、呼んでみても一向にミントの足元から離れない彼女に、ポトフは疑問符とともに彼に答えを求めた。

「……なんか、キミらがかっこよすぎるから出てこれないみたいだよ？」

するとミントはさらりと答える。

ちっちゃいココアの咎めるような視線など知ったこっちゃない。

「え？　あっは、やっぱりィ？」

「否定しない辺りがポトフだよね。まあ、否定したら逆に嫌味っぽいけど」

照れるぜェ、と嬉しそうなポトフに言葉を返すミントをよそに、

「……」

プリンは、しわっと眉間にしわを寄せた。

「「？」」

そしてその場にしゃがみこんで、

「……」

「……？」

じーっとココアを観察。

彼の綺麗な青い瞳に捕らえられ、ココアは顔を赤くしつつ挙動不振に。

「……ま、枕……お前、まさか……」

その様子を見て、ポトフはごくりと息を呑んだ。

「ロリコンだったのか？！」

「んなわけないでしょ」

ガビーンという効果音が似合いそうなポトフに、ミントはさらりと突っ込んだ。

「？　ろりこ……？」

知らない単語に疑問を抱きつつ、プリンは立ち上がった。

その表情は、やはりどことなく不機嫌そうで。

「？　どしたのさ、プリン？」

「む、なんでもない」

それに気付いたミントが問い掛けると、彼は首を振ってみせた後、ところで、と言葉を繋げた。

「どうしてこうなったんだ？」

「あ、うん。えっと、直接見たわけじゃないけど、たぶんブドウに呪いをかけられたみたい」

「ブドウに？」

「食物の方じゃないからねプリン？」

ナチュラルに返してきたプリンだが、ブドウのこと知っているわけではなさそうなのをなんとなく感じ取って、ミントは素早く注釈を入れた。

「む、ワインの方か」

「いや飲み物でもないし。人だよ人」

「武道か」

「ねえ解決したって顔してるけど絶対わかってないよねキミ」

ふむ、と自己解決を図った彼にツッコミを入れるミント。

「……呪い……」

ポトフはポトフで、何かを考え込むような仕草をした後、

「――！」

ピーン、と、きた。

「詰まり、俺のちゅーで万事解決?!」

「キミのがロリコンの気があるっぽいんだけどその発言?」

彼の言葉に真っ赤になったココアはほっといて、ミントは突っ込みに大忙し。

「いや、だってほら、お姫様の呪いは王子様の熱烈キッスで解くってのがお約束だろォ?」

「余計な一言で物語全体をいかがわしくしないでくれます?」

「む、そうなのか?」

「なんだよ知らねェのか? スゲーんだぞちゅーは。何せカエルが美女に変身したり失った声を取り戻したり死の淵から呼び戻したり百年の眠りからも覚まさせたり」

「ファンタジーをさも現実のように語るな」

首を傾げたプリンに説明するポトフに、ミントはまたまた突っ込んだ後、

「ほら、ココアがますます動かなくなっちゃったじゃんか」

足に張り付いているココアに一応気を配った。

「そして二人は結ばれて幸せになるんだぜェ!」

「って聞いてないし」

「俺のおとォさんとおかァさんのように！」

「いや……て、なんかツッコミにくいじゃんか」

「……ふむ、果てしなく気持ち悪くなった人生の汚点としての記憶しかないが」

「あっはっは、なんのことを言ってるのか全然わかんないなァ？」

ぼそっと何か呟いたプリンに、ポトフは何も察していない感をアピールした。

「とにかく！　早くココアちゃんを元に戻さなきゃだぜェ！」

「うむ。だがこの呪いは」

さっさと本題に戻したポトフに、プリンはさらりと忠告した。

「うつるぞ」

それが、呪文によるこの呪いの性質。

「「え」」

ゆえに、固まるポトフとミント。

一方は、ちゅーじゃ治せないのか、と。

もう一方は、ちょっと待ってオレひっつかれてるんだけど、と。

「だからミント、離れた方がいいぞ」

「ぅおっそい！！！！」

何気なく注意したプリンに、ミントはジャンピングツッコミをかました。

ちなみに、ジャンプをしたのはココアを剥がすため。

「ひゃあっ？！」

ミントが上昇したことでガードを失ってオロオロしているココアに、プリンは不思議な響きの言葉で呪文を唱えながら右手を向けた。

「「――！？」」

すると、彼女の頭上と腰回りと足元に、それぞれ複雑な魔法陣が現れ、

ぼわんっ

「ほえ？」

ココアが、元に戻った。

「……」

「……」

「「……」」

ぽかんとしているミントとポトフは、数秒後に我を取り戻した。

「「治せるんかい！？」」

「む？　うむ。最近本で読んだ」

「えーと、何があったのー？」

第２０９回　好戦日和

「私ブドウと一緒にいたはずなんだけどー？」

「ココアも元に戻ったことだし」

「ってちょっと無視っすか？」

ココアの疑問をひらりとかわし、ミントは友人二人に向き直った。

「試合開始といこっか？」

いつものメンバーではあるが、これはサバイバルバトルと言う名の体育祭。

「えェ？！　俺、ココアちゃんとミントを攻撃なんて……！」

「さっきからそればっかりだな貴様は」

にもかかわらずまったく争う気のなかったポトフに、プリンは呆れたように呟いた。

「何度も言うがこれはサバイバルバトルだ」

「そうだよ。今の言葉、ぜんっぜんかっこよくないんだからね！」

そして、プリンに次いでミントが畳み掛ける。

「で、でも」

「でももまりもも桃じゃなーいっ！」

「はェ？？」

わけっちょ分からない言葉にポトフが疑問符を発生させた直後、

「ポトフが戦わないって言うなら、こうだよ！」

『『ジェララララ！！』』

ミントは、バシーっとココアを縛り上げた。

「ココアちゃん！？」

「って、ちょ、とばっちりー？！」

荒技にでたミントに、ポトフとココアはダブルでびっくり。

『『ジェラ～♪』』

「って、ちょー、よだれー？！」

「ほーら、戦わないとココアが食べられちゃうよ？」

ココアを人質に、何故か悪役ぶるミント。

「くっ……！」

しかし、ポトフには効果絶大。

「ホントは……っこんなことしたくねェけど！　……”キラキラ”ァ！！」

「そうこなくっちゃ！」

ポトフが初めて自分に向けた光線をかわしながら、ミントは薔薇の鞭を装備した。

「いっくよー！　”蓮華”っ！」

「遅いぜ！」

すると今度はポトフがミントの攻撃をかわし、自慢の脚でミントの後ろに回り込んだ。

「！　はや――」

「”キラキラ”ァ！！」

後の、最大魔法。

「わ……っ？！」

背中に受けた、よく知っているが初めての魔法に、ミントは思い切り吹っ飛ばされる。

「ふむ。致し方なかったのだろうが」

その視界のまっすぐ先に、プリン。

「自ら二対一にするとはな？」

「――！　やっぱ」

不敵に笑った彼に言われ、ミントは初めてそのことに気が付いた。
そうだ、これではプリンにココアの呪いを解いてもらった意味がまるでない。

「枕が代わって」

自ら進んで不利にしてしまったこの戦いで、

「お仕置きだっ！」

「って、なんか懐かしい技名いいい？！」

何やら久しぶりに聞いた単なる枕でバシーンに、ミントは打ち返されながら突っ込んだ。

「あっは、おかえりミント♪」

逆方向に進んだミントは、当然ポトフのもとに向かうわけで。
なんだか楽しくなってきた模様のポトフは、今度は軸足でしっかりと地面を踏みしめた。

「なめんな、”朝顔”！」

そんな彼の様子を見て、ミントは好戦的に笑いながら薔薇の鞭を操った。

「で、お返しだよ！！」

そうしてうまく捕えられたポトフを、ミントは着地の直後にプリンに向かって投げ飛ばした。

「っぴわ？！」

「おわァ！？」

結果、見事にストライク。

「そんな簡単に負けないんだから！」

「む……こっちだって」

「まだまだだぜェ！」

挟まれている形成を脱した後に対峙したところで、彼らは再びぶつかり合っていった。

「”神風”！」

「”キラキラ”！」

「”ウッドウォール”！」

「む、”木枯らし”！」

「”サザンクロス”！」

「甘い、〝枝下桜〟！！」

と、どんパチし始めた彼らを眺めながら、

「……なに？　私今回かんぜん無視ー？」

『『ジェラララ！！』』

マッドホイップとともに佇む、少しむくれたココアであった。

第２１０回　理由日和

体育祭を終えて、戻ってくるのは通常通りの授業。
それをこなした後の昼休み、ミントはいつものようにコーラを飲んでいた。

「でもやっぱり二対一はきつかったね」

「ふふふ、僕の勝ち」

プリンとお話しながら。

「でも、二対二だったら負けていた」

「へ？　そうかな？」

話の流れからして、どうやら先日のサバイバルバトルはプリンとポトフが勝利したようだ。

「うむ。馬鹿犬が完全に使い物にならなくなる」

すっぱりと言い切ったプリンは、食後のプリンを片手に。

「あはは、そうだね。ポトフがココアを攻撃なんて」

そう言うミントの目線の先で、ポトフは今まさにココアからの平手打ちを食らっていた。

「うむ。何か知らないが、変なこだわりがあるらしいからな」

そのこだわりというのは、今までの学校生活で見てきたもの。

「……」

そんな彼を見て、ミントはなるほど、と納得した。

「弟想いだねぇ？」

それゆえ出てきた、この一言。

「ぷあ？！」

彼の言葉に、プリンは思わずプリンをスプーンで一刀両断。

「な、ななな、何を言って」

慌ててこちらに顔を向けた彼を見て、分かりやすいなぁと至極平凡な感想を抱きつつ、

「や、だからあの時怒ってたんだなぁと思って」

ミントはさらりとそう言った。

ちなみにあの時とは、ココアが小さくなっていたときのこと。

ポトフのみならず、自分にまで興味を持たれたことからきたあの感情。

「アロエの魔法からも、ポトフがどれだけココアのこと好きなのか知ってるわけだし」

それなのに、彼だけを見ない彼女にお冠。

「……。……それだけじゃない」

ぶう、と、自分の考えを見透かされてしまったプリンは、拗ねたように膨らんだ。

「うん、それもなんとなく分かるよ」

「ぴわ!?」

しかし、ミントの観察力は予想以上だったようで。

「たぶん、それがムースに対しての対応の理由だよね?」

彼は、ちゅーとコーラを優雅にストローでいただきながら、勝ったような笑顔でそう言った。

「……。……むう、ミントすごい」

「伊達に長い間一緒にいるわけじゃないって」

負けを認めたプリンに、ミントは楽しそうに笑ってみせた。

「まあ、オレから見たら羨ましい悩みだと思うんだけどなぁ」

悔しそうな表情のプリンに対し、ミントはコップのカラカラと氷を鳴らしている。

「……」

「？」

すると、彼がじっとこちらを見てきたため、

「あ。大丈夫大丈夫、オレはそんなのじゃないって」

ミントはプリンの頭に頑張って手を置いた。

ちなみに、頑張らなきゃいけないのは、二人の距離と身長差に起因する。

「……でも、ムースもたぶん違うと思うよ？」

よしよし、とされるがままに頭を撫でられながら、プリンは何かがちょっと引っ掛かっているご様子。

「それこそ、ポトフみたいな感じの感情なんじゃないかな？」

そんな彼に言い聞かせるように、ミントはちょっとしたお節介。

「……むう、あいつのココアに対する気持ちは原因不明だ」

アロエの魔法で写し取ったのは、あくまでもポトフの”恋愛感情”のみ。

その根本の理由は、彼にはよく分からない。

「ミントもそうなのか？」

ゆえに、恋愛感情とやらは一般的にあんなものなのかと質問した。

「え」

すると、ミントは急に停止した。

「む？」

止まった、と、プリンは、ミントの顔の前でふいふいと手を振ってみる。

その顔は、さっきまでよりは確実に赤い。

「……ふむ」

その様子から、なんとなく彼もそうなのかと分かったプリン。

しかし、ここで新たな疑問点。

「ミント、チロルちゃんは危ないぞ？」

何故ミントは、チロルが好きなのか。

「へ？」

危ない？　と、首を傾げた彼。

「だって」

チロル、と言ったら。

『ヒヒヒヒヒヒヒ！！』

と、赤い血を見て悪魔のように極悪顔で笑い狂い、

『死ねえええええ！！』

と、鬼の形相で斧やら鎌やらをブンブン振り回す。

「ぴわわわわ……危ないぞ！！」

「いや、キミのなかのチロルってどんなイメージなのさ？！」

とある記憶が鮮明によみがえり、ゾッと顔を青くしたプリンに、ミントはびくっと突っ込んだ。

「危険だミントっ！」

「だ、だから、どう危険なのさ！？」

「とにかく危ないっ！！」

「いや、だからどんなイメージを植え付けられてるのさキミは？！」

「く……、くるとん！！」

「くるとん！？　あの、赤い血を見て極悪顔で笑い狂いながら鬼の形相で斧やら鎌やらを振り回す殺人鬼のオバケのくるとん？！」

「うむ、まさにくるとんだっ！！」

「いやいや、くるとんはお話上の存在でしかもオバケであって」

「くるとんの生まれ変わりだっ！！」

「って、くるとん生まれ変わったあああ?!」

なにゆえプリンがチロルに対してそんなイメージを持ったのか分からないながらも、説明口調で驚くミントであった。

第２１１回　恋情日和

パーティー会場で友人を見つけ、ミントはぱたぱたと駆け寄った。

「あ！　アオイ！」

「あ、ミント」

「はい、ハッピーハロウィン！　来てくれたんだね。ありがとう」

「うん、招待してくれてありがとう」

お菓子を受け取りながらお礼を述べたアオイは、

「わあ、ミントは魔法使いなんだね」

ミントの格好を見てそう言った。

「いや、もとから魔法使いだから」

が、ミントからしてみれば別に仮装でもなんでもないのである。

「あ、そっか」

そう言えばそうだねと手をたたいたアオイ。

「……？　ミント、そのカボチャさんは？」

彼は、ミントの後ろをついてくる単純な顔が描かれたカボチャを頭

に被っている人物に気が付いた。

「カボチャさんだ」

すると、カボチャさんは自らカボチャさんだと名乗り出た。

「あ、プリン……じゃなかった。ハッピーハロウィン、カボチャさん」

「うむ、ありがとう」

まんまプリンの声だったのだが、本人が言うのだからそういう事にしてプリンをあげる優しいアオイ。

「カボチャさん、です」

その隣にひょっこり現れたリンは、カボチャさんをじっと見た。

「……」

「……」

じーっとこちらに向けられた栗色の瞳は、心なしか輝いて見える。

「め！」

しかし、カボチャさんは自分の顔をしっかり押さえてそう言った。

「うっはー！　何この美味しそうなパンプキンパイ～！！」

一方、ウララは招待してくれた友人そっちのけで、テーブルにずらりと並んだご馳走に目を輝かせていた。

「って、あれ？　あー！　アップルパイがなくなってるー！！」

そして、お目当てのアップルパイのお代わりがなくなっていることにショックを受けていた。

「フッフッフッ。甘いなうららん」

そんな彼女の目の前で、

「アップルパイはいただいた」

死神は、もっさもっさとアップルパイを全力で頬張っていた。

「ちょ、あんたねえ！　ちょっとくらい残しときなさいよ！！」

「フッフッフッ。甘いな」

「いやそりゃそんだけアップルパイってたら甘いでしょうよ！？」

と、甘党死神に食って掛かっていると、

「あの」

ウララは、隣から声をかけられた。

「よろしければ、お食べになりますか？」

どうやら、相当アップルパイが食べたかった気持ちが伝わってしまったらしい。

「ええ！　いいんですかっ？！」

差し出されたアップルパイのお皿に顔を明るくしたウララは、

「はい、どうぞ」

自分が何者に声をかけられたのかを知った。

「え……」

この、ふわっふわでキラキラしたドレスを優雅に着こなしている紫ロングのお嬢様は、

「えっと、ムース！？」

あれだあれあれ、としばらく時間を要したウララ。

「……、まあ、ウララさん！」

すると、ムースもムースで思い出すのにちょっとかかった。

「わ、久しぶり！　相変わらず綺麗なドレスですっごいね～！」

「うふふ、ありがとうございます」

そうそう着るものじゃないドレスを普段着のように着ている彼女にキラキラした瞳をむけた後、

「あ、そうだ！　ねえねえプリンとはうまくいってるの？」

にやりと笑って話を持ち出した。

どうやらウララは、この手のお話が好きなようで。

「え、ええ……まあ……」

すると、ムースはにこりと笑いながらそう答えた。

「……？」

その歯切れの悪い答えに、ウララが首を傾げる。

「……」

「……」

「「……」」

間。

「……う」

後、うるりら。

「って、ムース？！」

何事！？　と、ウララがびっくらこくと、

「どうせわたくしなんて、どうせわたくしなんてですわー！！」

「いやいや、だからどうしたのよムース？！」

「なんでもないのですわー！！」

「いや何かあるだろ！　絶対何かあるだろそれ！！」

「ですわー！！」

「つか、それ泣き声！？　泣き声なのそれ本当に！？」

急に、ですわーっと泣き出したムース。

「一体どうしたのよ？」

そんな彼女に一通りのツッコミを入れた後、ウララはハンカチを差し出しながらそう尋ねた。

「ううう、……実は」

それで少し落ち着いたらしいムースは、

「はあ?!　好きじゃない!?」

アロエに相談した結果得られた情報を公開した。

「なんでよ!?　あんたたち、婚約してるんでしょう?!」

信じられないといった表情のウララに、

「プリンは、プリンはわたくしのことなんて嫌いなのですわ……!」

およよと泣きながら応えるムース。

「意味分かんない!　ちょっと問いただしに行こうっ?!」

そんなムースの腕をガシッと掴み、ウララは彼女と一緒にプリンのところに行こうとした。

「え!?　い、いえ、それはちょっと……」

しかし、ムースはそれを拒んだ。

「でも理由聞かなきゃ」

と、振り向いたウララは、

「……う……」

「って、ムースさあああん?!」

ムースが再びうるりらしていることに気が付いた。

「り、理由は、わたくしも……っ知りたいの……ですけれど……」

あたふたしている彼女の前で、ムースは自分の想いを告げた。

「こ……怖いのです……っ！」

自分が恋い慕っている相手から、拒絶されることが。

「……ムース……」

そんな彼女を見て、ウララはその腕を掴んでいた手を離した。

「……ごめん、私……」

余計なことして、と謝るウララ。

「いえ……わたくしの問題ですのに、真剣に聞いてくださってありがとうございます」

しょぼんとした彼女に、にこりと笑ってお礼を述べるムースであった。

第２１２回　決心日和

「……でも、どうしてプリンは……」

お節介だとはわかっていても、ウララはまだ気になっていた。

そこで、ふと顔を上げた彼女は、とある人物に話し掛けた。

「ねえ、あんたはなんでだと思う？」

「は？」

それは、近くのサラダバーできゅうりハンティングをしていた、ユウ。

話をまったく聞いていなかったわけである彼は、何をいきなり、と疑問符を顕にした。

「だって、あんたが一番乙女心が分からない野郎のことが分かるでしょう？」

すると、ウララが失礼極まりないことを言い放った。

「だから、プリンがなんでムースのこと好きじゃないのかなーって、今あんたに聞いてるの」

これは、相談してもらう態度じゃない。

「はあ？　知るか。そんなこと、本人に直接聞いてこい」

そしてユウもユウで、相談に乗る態度でもない。

「それができないからあんたに聞いてるんでしょうが！」

「だから、俺があいつの考えなんて分かるわけないだろ」

「いや、だーかーらー！　プリンは婚約者のムースの気持ちが分からないような、あんたみたいに乙女心が分からないどうしようもない野郎であって」

「喧嘩売ってるのかお前」

これでは、まったくもってお話にならない。

「……お前、どうしてそんなのと婚約関係にあるんだ？」

「「！」」

と、思いきや。

「え、ええと、……形としては政略結婚のようなものであって……」

何やら相談に乗ってくれる気配。

急に話を振られたため、ムースがおろおろしながら答えると、

「なら、それが原因だろ」

ユウは、あっさり話を終わらせた。

「それなら好きとか嫌いとか、そんなもの関係ないだろ」

確かに政略結婚は、親の都合。
本人たちの気持ちなんて知ったこっちゃない。

「で、ですが、わたくしは、わたくし個人の感情でプロポーズいたしましたわっ！」

素っ気なく言い放つ彼にかちんときながらも、ムースははっきりと主張した。

「……なら、お前があいつを好きになった理由はなんだ」

そんな彼女を前に、ユウは面倒くさそうに質問する。

「そ、そんなこと、理由なんてありませんわっ！　見るからに素敵ですもの！」

ムースの言葉に、何故か自分が恥ずかしくなっているウララはほっといて、

「だったら、あいつがお前のことを嫌いなのも」

ユウは、きゅうりを片手にこう言った。

「理由なんてないだろ」

と。

「――！？」

予想だにしていなかった答えに思わず言葉を詰まらせたムースに代

わって、ウララがもの申した。

「そんな、嫌いなのに理由がないって――！！」

「好きになるのに理由がいらないのに、嫌いになるのには理由が必要なのか？」

「っ！　そ、それは……」

呑気にきゅうりをかじっているユウに、うまく言い返せないことを悔しがるウララ。

「姿かたちや家柄だけで寄ってくるようなヤツは、少なくとも俺は大嫌いだ」

そこへ追い打ちとばかりに彼はそう締めくくった。

「……」

「……む、ムース……」

また余計なことをしてしまった。

ユウなんかに相談するんじゃなかった、と思っても、時すでに遅し。

「……、……分かりましたわ」

と、思いきや。

「え？」

「わたくしは、政略結婚という保証に甘えていたのですね」

ムースは、落ち着いた声でそう言った。

「そんなものでは、プリンの心は掴めない。そして、好きになるのにも嫌いになるのにも理由なんていらない。……でしたら」

そして力強く涙を拭うと、ぱっと顔を上げて声に力を込めた。

「保証なんて破棄して、理由なんていらないくらいわたくしを好きになってくださるように素敵になって、意地でもプリンを振り向かせてみせますわ！！」

それが、彼女の出した答。

「お、おお……！！」

なんだかよく分からないが、そんな彼女にウララは圧倒されていた。

「……が、頑張ってねムース！　私、応援する！」

「ええ。ありがとうございます、ウララさん。そしてユウさんも」

応援してくれるウララと、相談に乗ってくれたユウに感謝の意を示したところで踵を返し、ムースは覚悟を決めたようにプリンのもとへと歩いていった。

「なんかよく分からないけど、ムース元気になったみたいね」

ぽかんとしていたウララは、ムースがひとごみのなかに消えたと

きになってやっと口を開いた。

「……い、一応言っておくけど！」

「？」

彼女の切り出した話を、ユウが無言で促すと、

「わ、私はそんな、見た目や家柄だけで好きになるようなヤツじゃないわよっ？」

ウララは、勝手に言い訳しだした。

「そ、そりゃあ第一ステップはそうだったかもしれないけど、それだけじゃこんなに長く……って何言ってんの私うあああやっぱり今のなしなしなしなし！！」

そして、勝手に自爆した。

「……」

そんな彼女を見て、

「……ぷ」

ユウは、思わず噴き出した。

「あ！　笑ったな！？　今ぷって笑いやがったな？！」

「お前、アホだな」

「笑いやがった上にアホだと?!　うああ、もういい！　もう知らん！！」

「好きだぞ」

「はいはいアホで悪うござ」

ぷいっとそっぽを向いて歩きだそうとした直後、

「……、……え?」

ウララは、自分の耳を疑った。
そしてその後、恐る恐る振り向いた。
そうして、雑踏のなか、二人の瞳は真正面から結ばれた。

「好きだ」

多くの人で賑わうパーティー会場であるにも関わらず、はっきりと届いたその言葉。

「――」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。
しかし、目の前にいる彼、ずっと想いを寄せていた彼の口から発された言葉は、確かに彼女の心に届いて、確かに彼女を優しく包み込んだ。

「……う……うんっ！！　私も！」

そうして、知らず知らずのうちに赤くなる顔を隠そうともせずにウララははっきり答えを出した。

「おお。ひゅーひゅー」

すると、死神に祝福された。

「……」

「……」

「……」

「「……」」

忘れていた。

こいつが近くでアップルパイを全力で頬張っていたことを、今の今まですっかり忘れていた。

――詰まり、全部聞かれていた。

「っ集中豪雨ううう！！」

「《暗雲の閃光は破滅をもたらす》！！！！」

そうなれば、即刻排除。

「フッフッフッ。おめでただな」

「「誤解を招く発言をするなあああああああ！！」」

招待してもらったパーティー会場で、突如暴れだしたウララとユウであった。

第２１２回　決心日和（後書き）

みなさまあけましておめでとうございますー！
なんだか連続投稿してみましたが、諸事情ゆえに今後、とりあえず２月までは更新がストップするかと思われます！
誠に申し訳ないのですが、気長に学校日和にお付き合いしていただけたら幸いです。
ではでは、どうぞ今年も、学校日和完結までの間、よろしくお願いいたします～＾＾

第２１３回　淡恋日和

「ユーはうまくいったのかな？」

パーティー会場のまた違う場所で、ポトフはこんがりと焼かれた鳥を片手に呟いた。

どうやら以前のようにユウを煽ってきたらしいポトフは、サラダバー付近に潜伏している彼を観察中。

「フハハ！　逢いたかったよアロエ嬢ー！！」

「バーンバニッシュ！」

その近くでは、バジルとアロエがなんかやっている。

「フハハ！　照れちゃって可愛いなぁ！」

「バーンバニッシュバーンバニッシュ！」

「……おやおや」

二人の様子をなんの気なしに観察していたアセロラは、やれやれといった感じに眼鏡をかけなおした。

「まさかアロエがバジルさんに興味を持とうとは」

「え？　アロエ、バジルのこと好きなのー？」

彼の言葉に、アロエに聞かれようものならもれなくぶっ飛ばされる

質問をココアはした。

「見ていればなんとなく分かりますよ」

「へー、さすが情報収集家さんの観察力だねー？」

さらりと返してきたアセロラに、ポトフの隣から顔を出しているココアは、感心したように頷いた。

「ホント、なんでも知ってるよなァ？」

すると、何か言い合いになっているユウとウララから目を離したポトフも話に加わった。

「なんでも知っていると言うわけではありませんよ」

そんな二人に、アセロラはシャーベットをぱくつきつつ言葉を返す。

「特に、自分への感情というものは客観的に観察できませんからよく分かりませんし」

それも、寒くないのかなぁと思ってしまうペースで。

「逆に、知りたくない情報まで分かってしまうこともありますが」

これは僕の話ではありませんが、とアセロラ。

「知りたくない情報？」

「あ。……もしかして、相手が誰に思いを寄せてるかも分かっちゃ

うってことー？」

ずばり、アロエの話。

「はい。観察力が普通よりも鋭いというのも、良し悪しですね」

知らない方が幸せということもある。

だからなのか、彼らは自分に対しての感情はよく読み取れないようだ。

「……」

「ん？　どーしたの、バニラー？」

諸刃の剣のような才能に恵まれているアセロラの話を聞いている途中で、ココアは袖を弱くひかれて振り向いた。

「……」

その手には、ブルーハワイのかき氷。

「え？　バニラも氷好きなのー？」

それを見て、ココアは、アセロラと同じで、という意味で質問した。

「……」

すると、バニラの顔がリンゴのごとく赤くなった。

「え？」

「……」

「……」

「……」

「「……」」

静寂。

「……バニラちゃん、もしかしてアセロラのことぶはァ？！」

口をはさんできたポトフにバニラが水晶玉ストライクをお見舞いした後、

「アセロラ、今日はハロウィンだよー？」

ココアは、バニラを前に押し出しつつにっこりと笑ってそう言った。

「……？」

何を今更、と疑問符を浮かべたところで、

「！　ああ」

アセロラは、バニラが何か隠し持っていることに気が付いた。

「バニラさん、トリックオアトリート？」

ゆえに、にこりと笑ってハロウィンのあの言葉を口にした。

「……」

すると、バニラはバッとかき氷を差し出した。

「ふふ、ありがとうございます」

「……」

かき氷を受け取ってお礼を言いながら、アセロラは彼女に数個の飴玉をお返しした。

すると、バニラは手にのせられたそれを、相変わらずの無表情で凝視した。

「？　バニラさん、顔が赤いですよ？」

が、顔は赤かったようで。

「……！」

ぶんぶんと高速で首を横に振るバニラを前に、首を傾げているアセロラ。

「……ホントに、自分のことに対しては鈍いみたいだねー？」

「だなァ」

そんな二人を眺めながら、呆れたように呟くココアとポトフであった。

「……」

ちなみに、アセロラはこの時セル先生から殺気を向けられていることにも気付いていなかったそうな。

第２１４回　ひま日和

外は穏やかに晴れた休みの日。
部屋の中は、暖かな陽射しに照らされていた。

「ごろごろぉ」

そして、ポトフは床に転がっていた。

「……何してんのさ？」

先刻よりごろごろと転がり始めた彼をしばらく観察した後で、ミントはようやく質問した。

「暇だからゴロゴロしてるんだぜ！」

すると、無駄に爽やかなスマイルと無駄に爽やかなアンサーが返ってきた。

「あー、そう。じゃあ、ついでにそのまま部屋を一周してくれる？」

綺麗になるから、と言ってミントは再び本に目を落とした。

「……、……」

ポトフは、爽やかなアンサーをしたままの状態で固まっていた。

「俺、ぞうきん？！」

「ツッコミが遅い」

そしてツッコミを入れてみると、ミントはぴしゃりと言い放った。

「いや、だって俺がゴロゴロしてるのにあまりにも反応が淡白だから」

「他にどう対応しろと？」

「俺と一緒にゴロゴロするとか俺と一緒に出掛けるとか俺と一緒に遊ぶとか！」

「ホントに暇なんだね」

なんかぷんぷんし出した彼を見て、ミントは読んでいた本を閉じて立ち上がった。

遊んでくれるの？　と、目を輝かせたポトフの目の前にやってきた彼は、

「おすわり」

「わん♪　って、いやいやいやいや」

従順な態度を示したポトフに、激しく首を横に振られた。

「そうじゃない。そうじゃないんだぜミントくん」

「おて？」

「わん♪　いや、おてでもなく」

「よーしよしよし、お利口さんだね～」

「あっはっはっ、聞いてねェ」

わしゃわしゃと頭を撫でてくるミントに、ポトフは取り敢えず笑っておいた。

「さ、行こっか」

「？　朝のお散歩？」

「ううん、保健所」

「野良犬設定？！」

「執行猶予は一週間」

「しかも引き取り手が見つからなくて処分される感じの！？」

そんなやりとりをしたポトフは、とあることに気が付いた。

「……れ？　そォ言えば、枕は？」

それは、今までなら聞こえてくるはずの、寝言のようにも聞こえなくもない単調ないびきがないことに。

「マクロス＝ボナムエル？」

「どちらさま！？」

どうやらミントは、今日はボケの日らしい。

「プリンなら出掛けたよ」

ミントがいるのにツッコミで忙しいポトフは、プリンが最近よく一人で出掛けることがなんとなく気になっていた。

「まあ、朝の散歩じゃない？」

「え、犬ネタつながり？」

「軍手と袋持ってたし」

「セルフ”フンは飼い主が持ち帰りましょう”？！」

トイレ行けトイレ！！　小分けせずに！！　と、簡単に注意を逸らされてしまう彼ではあるが。

「とまあ、冗談は置いといて。ちゃんと起きられるようになったことは良いことだよねぇ」

一応プリンの名誉のため、もちろん、冗談である。

「だなァ」

日が沈むまで寝てたころと比べたら、文字通りにめざましい進歩である。

しかし、そんな彼にもまだ成長していないところが。

「でも、なんでまだ枕は枕を抱えてるかな？」

それは、初めて彼と出会ったときに、誰もが思うであろう謎。

「うーん、そうだね。相変わらず眠そうだけど、授業とかはちゃんと聞くようになったわけだし。って言うかそもそもなんで持ち歩いてん？」

いつものことで感覚が薄くなっていたが、改めて言われてみれば、それは気になる。

「……」

「……」

二人は、何か企てるような顔になった。

「目標は枕！！」

「ノット枕ァ！」

そして変な合図をしたあとで、彼らは早速行動に移ったのであった。

第２１５回　変化日和

学校の裏庭を森に向かって歩いていたプリンは、ふいに足を止めて振り向いた。

「そこで何をしているんだ」

彼の後ろには、誰もいないように見えるのだが、

「ココア」

「ふお！？」

その代わり、不自然な段ボール箱がひとつ。

「な、なんで分かったのー！？」

「分からないほうがびっくりだ」

そして魔力もだだもれだ、とプリンはいたって普通のことを口にした。

「うー……いけると思ったんだけどなー」

完全に気分はスパイだったココアは、観念したように段ボール箱から姿を現した。

「むう、尾行とは趣味が悪い」

「だ、だって、最近よく一人で出掛けてるし」

め、といった感じの彼に、彼女は彼女なりの行動の理由を述べた。

「それに、ムースと婚約破棄したって聞いたから、誰かと逢引きでもしてるんじゃないかと思ったんだもんー！」

単純に、噂好きなおばちゃんの行動である。

「？　ハンバーグ？」

「まさかの切り返しー？！」

あいびき違いだとツッコミながらも、ココアはその答えで彼がそんなことはしていなかったことを知った。

「……ちなみに、破棄はしていない」

すると、プリンは先程のココアの言葉に訂正を入れた。

「えっ？　でも、ムースがそう言って……？」

驚いたココアの目の前に、プリンは先日ムースから押し付けられた紙を出現させて広げてみせた。

「……！　プリン……！」

そこに彼のサインがないところを見ると、確かに破棄は成立していない。

それについて、ココアが感動したように顔を上げると、

「破棄したところで、他の会社と婚約相手を決めさせられるだけだからな」

プリンは、誠にさらりとおっしゃった。

「って、もー！！　プリンはムースのこと好きじゃないのー？！」

ゆえに、ココアは感動を返せと言わんばかりに憤慨した。

「むう、だからそう言っているだろう」

「なんでよー！　何が気に食わないのー！？」

ぶんぶんと腕を振り回しながらぷんぷん怒る彼女に、

「ぴわわっ、ぼ、僕は、親を通して僕を見られたくないっ！」

ぽかぽかと叩かれ、プリンは痛い痛いしながらそう答えた。

「え」

「……そういう人間が、とても嫌いだ」

学術や芸術や、とにかく何ができても、それは親があの大会社の社長だから。

自分を自分と認めてもらえないような、そんな感じのつらい気持ち。

「そ、それは……私も嫌だけど……」

相手の親に気に入られることによって身内の立場をあげる。
政略結婚なんてものは、まさにそのど真ん中をいくようなこと。

「で、でもっ！　ムースは絶対そんなんじゃないよー！」

しかし、ムースはそんなことを考えて、こんなに長い間彼の婚約者であったとは考えられないココア。

「だってだって！　え、えーと、ムースは」

必死に彼を説得できるような言葉を探す彼女の頭を、

「……」

「て？」

プリンは、先程広げた紙を筒状に丸めたものでぽこっと叩いた。

「そんな気がしたから、サインしてない」

見上げると、返ってきた答え。

「……！　っじゃあ、プリン、やっぱりムースのこと……！」

ココア、本日二度目の感動。

「うむ。少し気になった。気がした」

プリンは、やはりさらりとお答えになった。

「っだからー！　なんでそう余計な一言付けるのよー！？」

「ぴわわ、ココア痛い！」

ゆえに、再びぽかぽか叩き始めるココアであった。

第２１６回　罠日和

森のなかでプリンを見つけ、小さな魔物はその足元に擦り寄った。

『まふ～』

「む。足の調子は大丈夫か？」

そのウサギのように耳の長いもふもふした生物を撫でてやりながら、彼はふわりと微笑んだ。

『まふ～！』

「？　プリン、その子のケガを治してあげたのー？」

元気に鳴いて答える魔物を中腰になって眺めながら、彼について森に入ったココアは口を開いた。

「うむ。ここは、その崖のせいでたまに怪我してる動物さんがいることを最近発見したんだ」

よしよししながらそう答えたプリンの前には、確かに岩壁が顔を出している。

この上から落ちたらタダではすまないことは、言われなくても見れば分かる。

「へえー、だから最近よくここに来てたのー？」

「うむ。今日は大丈夫みたいだな」

なるほどと納得したココアに頷いて返した後、プリンは辺りを見回して立ち上がった。

「帰るか」

「あ、うん」

怪我をした動物がいないことを確認すると、小さな魔物とお別れをした二人は学校への道を戻り始めた。

「やっぱり逢引きなわけじゃなかったんだねー？」

「むう、僕は強いて言うなら鶏肉派だ」

「いや、だから牛豚合挽きのこと言ってるんじゃないってー」

「うむ。お昼は鳥肉にしよう」

「……。私はきつねうどんな気分だなー」

「む、ココアはキツネさんか」

「いや、確認のために言っておくけどきつねうどんにキツネは入ってないからねー？」

そんなとりとめのないお話をしながら、二人は木々のトンネルを抜けた。

「む」

そして森が終わり、あとは学校に向かうために裏庭を横切るだけといったところで、プリンは唐突に足を止めた。

「？　どーしたの、プリ」

対して、足を止めずにいたココアは、

「ン――ひょわあ?!」

見事なまでにカモフラージュされていた落とし穴に、まんまと落下した。

「そこ、落とし穴があるぞ?」

「言うのおっそーい!!」

地上から穴を覗き込みながら注意した彼に、ココアはうがーっと突っ込んだ。

「ったく……誰よこんなところに落とし穴なんて作ったのはー?」

怒りながらもプリンに手伝ってもらって穴から這い出したココア。彼女は、服についた汚れを叩き落としながら、落し穴を迂回した。

「ふむ、ココア」

「んー?　なに――にょあー?!」

ところ、またしても見事にカモフラージュされていたトラップを踏

んでしまい、ココアはネットに捉われた状態で木の枝に宙吊りにされる羽目になった。

「そこも危ないぞ？」

「っだから、おっそーーーい！！」

小首を傾げたプリンに対してネットのなかで暴れるココア。

「ココアちゃん？！」

そこへ、ポトフが慌ててすっ飛んできた。

「！　ポトフ！　ちょっと助け」

「枕テメェ何ココアちゃんをたぶらかしてんだ？！」

「っていや今そこー！？」

「つかこれはどっちもお前用の罠なんだぞ？！」

「しかもあんたが仕掛けたんかこれー？！」

「ココアちゃん、今助け」

ズバズバとツッコミを入れるココアを助けるべくこちらを見上げたポトフは、

「……？　どしたのー？」

はた、と動きを止めた。

「こ、ココアちゃん、水玉」

「ダークネスサクリファイスーーー！！！！」

そして、ココアの渾身の闇魔法が炸裂した。

「ポトフきらいっ！！」

結果、自力でトラップを抜けることに成功したココアは、ぷんすか怒りながらズンズンと校舎へと消えていったのであった。

第２１７回　白状日和

彼女の捨て台詞に、ポトフは思い切り雷に撃たれたような衝撃を受けていた。

「……。むう、何故僕を罠にかけようとしんだ？」

だから、身に覚えがないと言わんばかりにプリンがむすっと質問しても、

「……ポトフ、きらい……ポトフ、きらい……ポトフ、きらい……ポト」

「って、……だ、大丈夫かっ？」

逆に心配してやる羽目に。

「何やってんのさ？」

「！　ミント！」

灰になったポトフを見て呆れたようにこちらにやってきたミントに反応し、プリンは顔を彼に向けた。

「わ、わんわんが灰になった！」

慌てて状況報告をしてきたプリン。

「そのうち治るでしょ」

対して、放置。

「まったく……だからプリンがそんな初歩的な罠にかかるわけないって言ったのに」

ミントはため息をついた後で、ねえ、とプリンに同意を求めた。

「う、うむ、そうだ――」

「オレ的には、プリンを餌にカゴを紐を巻いた棒でつっかえて」

「――……ミント……？」

いや、むしろそっちの方が初歩的な罠なのではないのかといった疑問を抱いたプリン。

「どうして僕を罠に？」

彼は取り敢えず、話を進めさせることにしたようだ。

「ん。いや、ちょっと、ていうか、ずっと気になってて」

彼の意思を尊重し、ミントも話を進めることに。

「どうしてプリンはいつも枕を持ってるの？」

提示されたのは、今更ながらの素朴な疑問。

「む？　なんだそんなことか」

「え？」

すると、プリンが拍子抜けしたような言葉を返してきたため、今度はミントが拍子抜けした。
まさか、長年の疑問をこうもあっさり解決してくれるのか。

「そんなこと、決まっているだろう」

プリンの次の言葉に、ミントは息を呑んで集中した。

「これは、ミントから貰った大切なものだからだ」

――必殺、素敵な微笑み。

「ぷ、プリン……！」

そう言えば、確かにそれはミントがあげたもの。
プリンの枕にインクをひっくり返してしまった、そのお詫びに。

「って、いやいやいや。プリンその前から抱えていたでしょうよ」

「ぴ」

感動したと見せ掛けてズバッと言い返してきたミントに、プリンはぎくり。

「あのねぇ、オレにイケメンビームなんて効かないんだからね？」

「い、いけめんびーむ？」

何年キミら双子と一緒にいると思ってるのさ、とミントは呆れたようにため息をついた。

「流そうったってそうはいかないんだから」

「む、むう……」

手強い、とプリンは思わずじりっと後退り。

「な、なんとなくだ」

「なんとなくで毎日肌身離さず？」

「い、いつでも眠れるように」

「確かにいつでも眠れるけど、抱えてるから枕として機能してないじゃん」

「ち……小さい頃からのクセで……」

友人のツッコミに、プリンはたらたらと汗をかく。

「？　小さい頃からの？」

が、ここで信じてくれたらしいミント。

「う、うむ。そうだ、小さい頃からのクセで」

こっくんこっくん頷きながら、プリンはその真相を明かすことに

した。

「昔、前の枕を貰ったときに父に言われたんだ。”枕をいつも抱えていると願いが叶う”と」

本当は、家にいても学校にいても淋しいから、いつも一緒にいてくれるペットが欲しかったのだけれど。

何かいいように誤魔化された気もするが、ここで対立してもなんのメリットもない。

「へえ、そうなんだ。で、なんてお願いしたの？」

ちっさいころから冷めていたらしいプリンに、ミントは続けて質問した。

「む、それは……」

問われ、プリンは枕で顔を若干隠しつつ、目線を逸らして恥ずかしそうに白状した。

「……と……”トモダチができますように”」

と。

「……」

そんな水色の生物が、ミントにはとても可愛らしく見えた。

「あははっ！　プリンかわいい！」

「むっ、わ、笑うなっ！」

「よしよし、願い事がかなってよかったねえ？」

「むう、ミントひどい！」

笑いながら頭をわしゃわしゃ撫でてくる彼に、プリンは馬鹿にされたととても不機嫌。

「……ん？　でも、そしたらもう願い事叶ってるじゃん？」

そこで、ミントははたと気が付いた。

「ぴゆ」

ゆえに、プリンはまたしてもぎくり。

「……プ～リ～ン～？」

「て、テレポート！」

「あ！　逃げるなー！！」

プリンが戦闘から離脱したことによって、結局、謎は謎のままで終わったのであった。

「きらい……ポトフ、きらい……」

「って、ポトフまだ真っ白だし？！」

「……ミント。俺、先に行くわ」

「行くってどこに!?　って、戻ってきてポトフううう?!」

ひとり、想定外の癒えぬ傷を心に負って。

第２１８回　復縁日和

どんよりとした曇り空の見える廊下の窓に、
「……はァ……」
負けず劣らずどんよりとした生徒が一人、頭を預けてため息をついた。
そのため息の原因は、
「む？　何をしているんだ？」
「みつあみだよー？」
ここのところ、ずっと彼女が構ってくれないから。
「ココア、僕は男だ」
「分かってるよー♪」
そんな彼をよそに、ココアはいじくるためにほどよく伸びたプリンの髪をみつあみに結っていた。
「はい、次そっちー！」
いくら話し掛けても、ぷいっとそっぽを向いて構ってくれない。
それどころか、よりによってプリンと楽しそうにお話し始める。
完全無視。
徹底無視。

「……はァ……」

よって、ポトフは先程からため息ばかりついているのであった。

「あ！　見て見てミントきゅん、渋柿チロルだって～！」

心なしかそこだけ暗がりができているポトフの前、食堂脇の売店で、チロルは彼の腕に引っ付きながら、新発売の渋柿チロルを指差した。

「……うん……」

しかし、彼、ミントの心はここにないようで。

「？　ミントきゅん？」

ゆえに、疑問に思ったチロルは、彼の綺麗な黄緑色の瞳の先をたどった。

するとそこには、

「わー！　似合う似合うー！」

「むう、だから僕は男だ」

おさげの加害者、ココアと、被害者プリンと、

「……はァ……」

手前に、先程から幸を逃がしまくっている、ポトフ。

「……」

それで、大体のことがわかったチロル。
お友達を心配するいい子だが、デート中にそっぽを向いている悪い子。

「ミントきゅん、あとでご褒美ちょうだいみたいな」

「へ？」

ぷくっとむくれてそう言った後、チロルはすったすったと歩いていき、

「解錠！！」

「ふおォ？！」

「って、ポトフ！？」

通りがけにポトフが頭を預けていた窓を鍵を開けて全開にしてからからココアのもとへと移動した。

「びびった……！　って、チロルちゃん？」

「だ、大丈夫っ？」

落ちるかと思い冷や汗が吹き出たポトフに、ミントはぱたぱたと駆け寄った。

「お、おォ。俺は大丈夫だけど」

それに返事をした後で、ポトフは、ココアのところへずかずかと歩いていったチロルを目で追いながら、疑問符を浮かべた。

「……なんか、協力してくれるみたい？」

そんな彼女に感謝しながら、ミントは友人と向き合った。

「協力？」

「そ。さっきからバカみたいにため息つきまくってるキミと、いじけてるココアを介抱するのに」

今度はこちらに疑問符を向けたポトフに、ミントはさらりとそう言った。

「……。……だって俺、ココアちゃんに嫌われちゃったらもう」

「ヤンデレか」

「いや、そんな自分を人質にして無理矢理従わせようとしているわけではない、んだ……けど……」

「けど？」

「……ココアちゃァ～ん」

「どんなため息だ」

体操座りし始めた彼に、ミントは呆れたようにため息をついた。

「あのねぇ、言ったでしょ？　ココアはいじけてるだけなの」

ポトフの目の前にしゃがみこんで、ミントは口を開いた。

「いじけてる？」

「たぶんね」

そうして顔を上げて聞き返してきた彼に、

「で、理由はたぶんキミがココアのピンチに下ネタに走ったから」

ミントはさらりと言い放った。

「え」

「それでまあ、それと日頃のなんやかんやも合わさって何かしらのよからぬものがブチッときたんでないの？」

何とも言えない顔で固まったポトフ相手でも、お構いなし。

「私よりパンツの方が好きなのかー、ってな具合に」

ミントは、自分なりの解釈で言葉を伝えた。

「そんな――」

「それじゃー私じゃなくても女の子なら誰でもいいんだー、……と

か？」

「――？！」

彼の言葉に、ポトフは目を見開いた。
まさか、自分がそこまで相手のことを傷付けていたなんて思いもしなかった。

「さっすがミントきゅん！　みたいな～♪」

「「！」」

すると背後には、いつの間にかチロルとココアが。
ズバリ的中していたのか、ココアは動揺している。
何故に分かるんだおぬし。

「ほら立ちなさいよお邪魔虫」

「え、俺？」

そう言いたげなココアの背中を押しつつ、チロルはポトフに命令した。

「で、ココア」

「ひゃあ？！」

彼が立ち上がったことを確認すると、チロルはココアを押し出した。

「抱いてもらうがいいわみたいな」

後、きっぱりすっきりそう言った。
ちょっと捕らえ方を間違うと、誤解されるその言葉。

「な?!」

ココアは、捕らえ方を間違ったようだ。

「ココアちゃん!!」

顔が著しく赤くなったココアを、ポトフはきつく抱き締めた。
どうやら彼は、正しく理解したようだ。

「って、ちょ!?　離してよー!!」

「ごめん!　本当にごめん!!」

「な、何謝って」

「好き!　大好き!!　すっげェ好き!!!」

「て、今度は何――」

「ココアちゃん好きィィィ!!」

「――ふにょわーーーーー?!」

何やら騒々しい二人の近くで、チロルは作戦大成功とばかりに誇らしげな顔をしていた。

「ふふん、ぎゅっとしてもらえば自他共に気持ちが分かる大作戦大成功みたいな！」

「あはは、流石チロル様々だね」

そんなチロルを誉め讃えるミント。

「てなわけで♪」

「ん？」

すると、チロルはにっこりと笑ってこちらに向き直った。

「！　ああ」

すぐにその意味を理解したミントは、にこりと笑い返して彼女の手を取った。

「はい、ご褒美」

そしてその手に、いくつかの渋柿チロルをお乗せになった。

「……」

彼は、ちゃんとチロルの話も聞いていたようだ。

第２１９回　お礼日和

せっせと課題を終了させた後の午後、

「ごろごろォ」

ポトフは、床に転がっていた。

「……」

またやってるよコイツ、とか思ったミントの隣で、

「……？　何をしているんだ？」

プリンが首を傾げて質問した。

「暇だからゴロゴロしてんだよ」

それに対してさも当然のように答えた後、

「ごろごろォ」

ポトフは引き続き床の上を転がりだした。

「……」

理由は、暇だから。

「「ごろごろォ」」

「て、加わるな加わるな」

一緒にゴロゴロし始めた彼らに、ミントのツッコミ本能が黙っていなかった。

「ん？」

と、そこで鳴り響いた着信音。

そう言えば、夏休み前からずっと持っていた。

「む？　ココアから？」

「だね」

プリンの言葉に、ケータイをカバンから引っ張りだしながら答えるミント。

何故分かるかってそれは、ケータイ所有者が四人しかいないから。

「うん。……へ？　う……うん、分かった」

なんとも短い通話。

しかしプリンは、自分の作ったものが実際に使用されるのを見て満足気。

「どォしたんだァ？」

「うん。なんか来いって」

ポトフからの問いにアバウトに答えたミントは、

「ちょっと行ってくるね」

てこてこと部屋から出ていった。

「いってら～ァ」

「……」

ひらひらと手を振るポトフを片目に、ココアと一緒にいる僕の時とはえらい違いだな、と思ったプリン。

「……、でーと？」

「あっはっはっ、んなまさかァ」

ないない、と手を横に振るポトフ。

どうやら彼も、あまりミントを野郎とみなしていないようだ。

ココアに呼び出されて向かった先は、食堂の隣の小さな売店。

筆記用具やらお菓子やらシンプルな服やら、いろいろなものを取り扱っているその店の、隅っこに設けられた試着室から、

「……」

ネコ耳フードがついたきぐるみパジャマを着たミントが現れた。

「やー！　ミント可愛いー！」

フードの下からのぞく表情から、彼がこれを気に入っていないことはすぐ分かるのだが、ココアは知らんぷり。

「……何。これのために呼び出したの？」

気分の優れない表情で、ミントは引きつりながら質問した。

「いや違くて！　これ絶対似合うと思ってー！」

「なんだその思わせぶりな否定の語句は」

「おねーさん、これいくらですかー？」

「っていや何勝手に購入する方向で話を進めてるのさ？」

「心配しないでミント、このサイズ大丈夫だよー！」

「いやオレ今そんな質問した？」

何て言ってるうちにお会計を済ませたココア。

「って、お会計を済ませたココア？！」

「レシートびりびりー！」

「そして手際よく返品不可能にしたココア！？」

いらねえええ！！　とショックを受けて頭を抱えているミントに、

「ミント、ありがとー」

ココアはにこっと笑ってお礼を言った。

「……、へ？」

突然のお礼に、ミントは疑問符を浮かべた。

「ミントのおかげで、仲直りできたから」

そんな彼に、ココアは感謝の理由をつける。

「あ。ううん、お礼ならチロルに言ってよ」

するとミントは、とんでもないと笑いながら首を横に振った。

「ふふ、チロルにもちゃんと言ったよー」

対して、彼女はそう答えた後、

「でもすごいよねーミント？　私の心が読めるんだもーん！」

きらきらした尊敬の眼差しを彼に向けた。

「へ？　いや、ココアの心を読んだわけではなく単なる想像で」

「乙女心が分かるなんて、流石だよー！」

「ねえ、それは褒めてるの？」

なんだか、流石は女の子と言われた気がしてならないミント。

「きっと中身もお母さんに似たんだねー？」

「”も”って何さ”も”って」

ミントの勘は、当たるらしい。

「……あんなのには似たくないよ」

ため息をつきながらそう返す。

あんなのとは、もちろん彼の母親、ジャンヌのこと。

「またまたー、そんなこと言っ」

「だってまあそりゃあ激痛を絶する激痛なんだろうけど出産するのに溶解魔法使ったりまだ一歳にもならない息子に人工ミルクを自力で作らせたり育児放棄と取れる放任で自分はずっと庭で意味もなくブリッジしてたりおかずをちょっと残したりすると鞭打ちとゴキと幼虫の刑を執行したりヒトの迷惑も考えずに大通りでぶくぶく溶けたりメルヘンだのわけの分からないことをごちゃごちゃごちゃごちゃ」

「ごめん。私が悪かったよー」

この日ココアは、ミントにジャンヌの話を振ってはいけないことを学習した。

「とにかく、この前のお礼がしたかったの。本当にありがとー、ミントー！」

ざっくりと話を戻したココアは、にこりと笑いながらお礼を言い、

「それ、ほんの気持ちだからー！」

バイバイしながらぱたぱたと去っていった。

「へ？　あ、うん。ありがとー」

いつの間に話題が戻ったのか不思議に思いながら、ミントは、感謝の言葉とお礼の品をくれた彼女に手を振り返した。

「……って……」

お礼の、品。

「ありがたくねえええええ？！」

ミントは、猫耳パジャマを手に入れた。

第２２０回　通話日和

北から冷たい風が吹き、気温もなかなか上がらなくなってきた今日この頃。

「……む。ぷわぁ」

眠りから覚めたプリンは、むくりと起き上がると小さく欠伸をした。
時計を見ると、ジャスト七時。
夏休みの特訓の成果は、きちんと身に染み付いたようだ。

「む？」

次いで、カーテンが開いていないことに気付く。
すなわち、プリンが一番早く起きたようだ。
靴を履いてとことこと窓に移動し、カーテンを開ける。
冬の朝日は、まだそれほど強くない。

「……」

やんわりと明るくなった室内を振り返ると、ミントとポトフがまだ眠っている。
珍しい、と思いつつ、プリンはミントの枕元に移動した。

「……すぅ……」

布団から顔を出しているのは、ネコ。

「ふふふ、可愛い」

先日ココアから貰ったパジャマを律儀に使っているらしいネコミント。
動物好きなプリンには好評のようだ。

「む？」

ネコ耳フードに気をとられていたプリンは、そこでとあることに気がついた。

「……う……」

何やらミントの顔が赤い。

「？　お熱？」

と思ったプリンがミントの額に触れてみたところ、

「！　お熱！」

だったらしい。

「ぴわわ、わ、わんわんっ！」

ゆえに、慌ててポトフを起しにかかるプリン。

「ん、おにぃちゃん……」

ポトフは、寝言を言っていた。

「気持ち悪い！」

スパーン！！

「ふおォ？！」

よって、プリンは枕で文字通り彼を叩き起こした。

「何す」

「ミントがお熱！」

「ん――何ィ？！」

プリンの報告を受け、ポトフは慌ててミントの様子を窺った。

見ると、猫耳フードの下から見える顔が確かに赤い。

「可愛い！」

「違う！」

何か別の感想を口にしたポトフを、プリンは再び枕で強打した。

「ってェな……ん、風邪だな。たぶんきっと恐らく」

ミントを診て、えらく曖昧に答えを出したポトフ。

「むぅ……ミント、大丈夫？」

「……うにゅ」

「熱があるみたいだし、今日は休みだな」

うにゅ、と答えたのか寝言なのかよく分からないミントに、大事をとって授業を休むことにしたポトフは、

「ココアちゃんに電話しなきゃだぜぇ♪」

何やらルンルンでココアに電話を掛け始めた。

ピリリリリリ

「ん」

食堂でいつものごとく食後のココアを飲んでいたココアは、授業カバンからの機械音に気がついた。

「……げ」

後、嫌なものと遭遇したときの典型的な反応。

と言うのも、画面にポトフとの表示が出ているから。
ちゃんと仲直りしたわけなので、彼自身が嫌なものと言うわけではない。
ただ、電話となると。

「あれ？　ココア何それ～？」

「それなあにココア？」

「え？」

ケータイと睨めっこしていると、珍しい機械を持った彼女に興味を持った女の子たちがわらわらと集まってきた。
彼女たちは、同じウサギさん寮の生徒たち。
以前のわだかまりも消えて、今では普通に仲のよいお友達。

「ああ、ケータイって言って、携帯できる電話なんだよー」

彼女たちの問いに、以前のアオイの答えと同じ答えを口にするココア。

「へー！　そんなものあるんだー！」

「プリンが作った試作品なんだけどねー」

「そうなんだ、流石プリンくん！」

きゃいきゃいと盛り上がるなか、一人の女子生徒が口を開いた。

「で。電話鳴っていますわよ？」

ごもっとも。

「う、うん。そーなんだけどー……」

「ココア、出ないの？」

親友、ブドウに小首を傾げられ、

「……う、うん。分かったよー」

ココアは、しぶしぶ通話ボタンを押すことにした。
すると皆がケータイに注目してきたので、ついでに拡声ボタンを押した。

『ココアちゃん？』

――すると、素晴らしくクリアなポトフの声が聞こえてきた。

「「っきゃあああ！！」」

『っ？！　へ？？』

耳元にダイレクトに届く甘い声に、女子生徒たちは思わず悲鳴を上げた。

「……だから嫌だったのにー……」

『え？　えっと、……ココアちゃァん？』

声だけ耳元に届くことがなれないようで。
性能良く作り上げたプリンを若干恨みつつ、耳から少し離して通話するココアであった。

第２２１回　判断日和

コトコトと音を立てる小さな鍋の前に、ポトフは座っていた。

「♪」

彼が作った料理はおかゆ。

典型的な、病人食。

それを作りながら、彼は嬉しそうに顔をほころばせる。

と言うのも、懐かしい記憶がよみがえったから。

自分が昔に風邪を引いたとき、ソラにおかゆを作ってもらった。

ふーふーしてもらうのが、何故かとても嬉しかった。

「えいっ」

ポトフが小さな簡易キッチンで火を見ている間、プリンはミントを看病していた。

きゅーっと絞ったタオルをミントの額にのせる。

「……にゅ……」

「むぅ……」

いまだ辛そうな彼に、プリンもなんだか辛くなる。

ポコッ

「む？」

力になれなくてしょげているとき、不思議な物音に気付いたプリン。

「……、芽？」

音のもとに目を向けてみると、そこには可愛らしい双葉が。
ミントのベッドから突然生えたそれに、プリンは首を傾ぐ。

ポコポコッ

「む」

すると、また芽が。

ポコッ

「ぴ」

ポコポコポコポコポコポコ

「ぴわわわわわわ……」

気が付くと、ミントを中心に小さな若い森が出来上がっていた。

「おまた」

「ば、馬鹿犬！！」

そこへ、ポトフが今しがた出来上がったおかゆを持ってきたため、

「って、変なところで邪魔するなよ？」

「そんなことを言っている場合か！」

プリンは慌てて彼に状況を見せた。

「……へ？」

見ると、何やら自然の生命力が溢れる空間が広がっていた。

「こ、これは……」

ポコッ

『ジェラララ！！』

ポトフが思わずおかゆを持ったまま固まっている間にも、また新たな生命が。

「み、ミントの魔力が漏れだしてるぞっ？」

あわあわするプリンの言葉に、

「……だなァ……」

「……」

ポトフは、引きつりながら同意した。

「……」

「「……」」

沈黙の末、ポトフは弱く笑いながらこう言った。

「カゼじゃないかも」

と。

「む!?　誤診か?!　誤診なのか!?」

「は、早く病院行くぞ枕っ!!　魔力が漏れだしてるってことはミントの命に関わる!!」

「関わるのか?!」

「かも!!」

「っ、テレポート!!!!」

使えないとばかりに舌打ちしたい気分だが、人命を優先させるプリンであった。

「……う？」

目を開けると、一面白い天井が飛び込んできた。

「「！　ミント！」」

「……？　プリンと、ポトフ？」

次いで、ミントの視界にひょっこり入り込んできたプリンとポトフ。

「少し疲れがたまって、免疫力が落ちてたみたいね」

「！　エリアさんっ？」

金髪白衣のドクターに、ミントはようやく自分の現在地を把握した。

「薬も魔法も効いてきたみたいだから、もう少し休んだらすぐ帰れるわ」

にこりと笑ってそう言うと、エリアはポトフとプリンに顔を向けた。

「病院に連れてきたのは、いい判断だったわ」

風邪に良く似てるから、見過ごされると重症化するこの病気。

それをよく見抜いたいい判断だと褒めるエリアに、

「い、いやァ」

「いや、実際誤診――むぐっ」

ポトフは、余計なこと言うなとプリンの口を右手で封印した。

「ふふ、じゃあ、私はここで失礼するわね」

仲のよさそうな彼らに微笑みつつ、エリアは部屋から出ていった。

「「ミント！！」」

「っわあ？！」

途端、プリンとポトフは無事を確認できたミントに引っ付いた。

「ミント大丈夫っ？」

「どこも痛くないかミントォっ？」

「だ、大丈夫だよ。それよりさ」

むいむいと二人を押し返しながら、ミントは疑問を口にした。

「二人がここに連れてきてくれたの？」

ここ、とは、もちろんこの病院のこと。

「おお！」

「ううむ、僕のテレポートだ」

「って、テメェ何ひとりで好感度アップ狙ってんだよ？！」

「事実を言ったまでだ、このへっぽこ犬」

「へっぽ……！？　誰がへっぽこだコノヤロォ？！」

「使えないの極みだ」

「んだとテメ」

「じゃあさ」

いつものごとくにぎやかな二人に、ミントは続けざまに質問した。

「二人がこのまま連れてきてくれたの？」

このまま、とは、この、猫耳パジャマのままのこと。

「「あ」」

この時初めて、プリンとポトフは、同じ点滴室にいる他の復活した患者さんや看護師さんたちがくすくす笑っていることと、ミントの顔が別の意味で赤くなっていることに気付いた。
そう言えば、エリアもなんだかくすくす笑っていた。

「「ご、ごめんミント！！」」

「ううん……ありがとう二人とも」

なりふり構っていられないのが正しい判断なのであろうが、恥ずかしいものは恥ずかしいミントであった。

第222回　聖夜日和

定期試験を終えて冬休みになり、家に着いた頃にはすっかり日も暮れていた。

「ただいまー」

ガチャッとドアを開けて家に帰ってきたミントに、

「なんで帰ってきたまろか?!」

ちょっと耳を疑う言葉が返ってきた。

「……なんでって、オレの家だからじゃんか?」

びっくりマロさんにしらっとした目を向けながら答えるミント。

「だって今日はクリスマスまろよ!?」

「へ?　ああ、プリンとポトフの誕生日会なら帰りの汽車のなかで」

「バカまろパーンチ!!」

「ぶっは?!」

なんの気なしにさらりと答えたミントの頬に、バカまろパンチがヒットした。

「な、何すー―」

2003

「だから今日はクリスマスなのになんでちーちゃんといちゃこらやっほいしてこないまろ！？」

「――やっほい……？？」

困惑気味に自分を見下ろしている彼を見上げ、盛大にため息をついたマロは、

「今日はみんとんに食わせる飯はないまろ！」

ぷいっとそっぽを向いてスタスタとキッチンの方へ歩いていった。

「……はあ……？」

お前、居候の分際じゃね？　と、心の隅にブラックミントさんを覗かせつつ、彼は取り敢えず荷を下ろそうと階段を上がっていった。

「よいしょっ」

自室で荷を下ろしたミントは、疲れたように小さく一息。

まあ、ご飯に関しては汽車のなかでケーキやら鳥やらを食べてきたから別にいらん。

ばふっ

そんなことを思いながら、ミントは、ベッドに倒れこんでみた。

流石フラン、お日様の香りがするぜ。

「……？」

瞬時に布団を干してくれた人物がフランだと分かる辺りがミントである。
　が、そのミントは、倒れこむ瞬間、視界の端っこのほうにチラッと赤いものを捕えた気がした。
ゆえに、彼は体勢はそのままに顔を上げてみると、

『メリークリスマース！　みたいな♪』

窓の向こうに、サンタクロースが。

「って、チロ――……」

思わずいつもの調子で叫びそうになったが、下の奴らに気付かれるといろいろ面倒だと、ミントは叫び声を自粛した。

「な、何してんのさ？　って言うかその格好」

「チロルサンタさん登場～って感じぃ？」

気付いてしまった以上、取り敢えず窓を開けてあげると、箒で浮いていたチロルは、そのままスイーっとミントの部屋に着地した。

「今年一年ミントきゅんがいい子にしてたから、プレゼントフォーユーみたいな！」

そして、にこっと笑ってプレゼントを差し出した。

「……あのねぇ……」

にこにこチロルに、ミントは毎度のことながら頭を痛めつつ口を開いた。

「いつからいたの？」

「うっふふ～、一旦家に帰ってプレゼントを用意して着替えてたから、本当にちょうど今まさに来たところ～みたいな♪」

「……その格好でここまで来たの？」

一応プレゼントを受け取って、それをテーブルに置いたミントが尋ねると、

「うん！　これ、見掛けによらずあったかいんだよ～？」

チロルはやはりにこにこ笑ってそう答えた。

「そうじゃなくて」

そんな彼女の回答を打ち消すように、ミント言葉を繋げた。

「女の子がこんな時間にそんな格好でしかも一人で出歩くんじゃありません」

そして、オカンのように諭した。

「え、もしかしてミントきゅんこういうの好き！？」

「なんでそうなる」

ぱあっと顔を明るくして接近してきたチロルを押えつつ、いつものようにツッコミを入れるミント。

「やぁん、ミントきゅんがサンタさん相手に何かよからぬこと考えてる～♪」

そして、いつものように聞いてないチロル。

「……」

そんなチロルを見て、

「っ！？」

ミントは、チロル右手をとって、そのまま壁に押しつけた。

「……ほら、やっぱり怖がった」

そのわずかな反応に、ミントはそのままの状態で口を開いた。

「そういうの、チロルが一番嫌いなんじゃないの？」

「！　え――」

彼の言葉を受けて、チロルは驚いたように目を開く。

「チロルに昔何があったかなんて知らないけど、でもきっと、だから男が嫌いなんでしょう？」

その間にも、ミントは若干怒ったような、悲しいような声で問い掛

けた。

「なのに、どうして自分からそんなことするの？」

無駄に相手を挑発するような格好や言動をする、彼女に向けて。

「そ、それは……」

気付かれていた。

そのことに動揺しているチロルをよそに、

「オレは、チロルを傷付けるようなことはしたくないし、他の人にチロルをそんな目で見られたくもない」

ミントは、ひたすら一生懸命言葉を紡いだ。

「……ミントきゅん……」

そう、彼の言う通り、試していた。

だから彼が大慌てで自分を止めたり話を明後日の方向へすっ飛ばしたりすると、嬉しかった。

彼は、今までの奴らとは違うんだと安心できた。

しかし逆に、こうでもしないと彼が自分から離れていってしまうような気がしていた。

それは、今までの男が、少なくとも彼女の目線からはそういう目的で近づいてきたようにしか見えなかったから。

そして彼に、嫌われたくなかったから。

「オレは、”チロル”が好き」

外見だけで好きになったわけじゃない。
そうでなければ一目惚れなわけで、出会って告白されて早々本気で逃げたりしない。
むしろ、最初は完全にからかわれていると思っていたし、誰にでも愛想を振りまくような、そんな彼女が嫌いだった。

「……！」

告白。
チロルは、その言葉に胸を詰まらせた。

「……、うえ」

「？　上？」

と、ミントが指示に従って上を見上げた瞬間、

「うえええええええん！！」

「って、うえええええええん？！」

チロルが泣き始めたため、ミントはびくーっと焦り始めた。

「ちょ、え？！　ちちちチロルさん！？」

どうなすったのですか急に！！　とパニック状態なミント。

「ごめんなさあああい！！」

「や？！　ごめん！　むしろオレがごめん！！」

「ミントきゅん大好きいいい！！」

「て、ええ？！　な、何をおっしゃって」

「プレゼントはニット帽うううう！！」

「はい？！　あ、ありがとうございました！？」

「メリークリスマスううう！！」

「メリークリスマスううう？！」

泣き叫ぶチロルさんに合わせて思わず同じ調子で返すミント。
近所迷惑である。

「……、……あたしね？　実は初等部のときに襲われたことがあって」

「初等――？！」

涙を拭った彼女は、ためらうように口を開いた。

「それから、男がだいっっっきらいになったの」

ミントが驚くのも無理はなく、初等部と言えば最上級生でもまだ十歳くらい。

「でもね」

目を見開いた、しかし自分を拒絶しているわけではない彼に、

「ミントきゅんならいいって気持ちも本当なのっ！」

チロルは、嬉しそうにそう言った。

「……、……はい？」

何が？

いや、落ち着けオレ。

これは考えたら負けだ。

「――あっ、そうだ！！」

若干顔が赤くなったミントの頭に、豆電球がピコーン。

「ほ、ほら、オレからもクリスマスプレゼント！」

必殺、お話逸らし。

ぽん、と彼が呼び出したのは、小綺麗に包装されたプレゼントと、ティッシュの箱。

これで、涙を拭いて。

「！　ミント、きゅん……！」

というメッセージ、だったのだが。

「超好きいいいい！！」

「なぜにいいいい！？」

彼は忘れていた。
きっかけは、ティッシュだったことを。

「どうしたまろフラン？　よく聞こえないまろ」

一方そのころブライト家の住民は、

「念のためです。さあ、ジャンヌ様たちとお食事に参りましょう」

二階から聞こえてきたミントとチロルが騒いでいる声を聞きつけ、
妙な気を利かして家を出たのであった。

2012

第２２３回　参拝日和

ひらりひらりと雪が舞う、夜の明るい神社にて。

「……ふあ」

アオイは、白く霞んだあくびをひとつ。

「アオイ、眠い、ですか？」

「あ、ごめん。いつもなら寝てる時間だから」

彼の隣で真っ白なコートを着込んでいるリンが首を傾げると、アオイは申し訳なさそうに肯定した。
ちなみに今は、夜の十一時を回った頃。

「フッフッフッ。あおぴょん眠いのか」

すると、何やら全体的に紺色の死神が得意気に話に参加した。

「う、うん。でも、大丈夫だよ。折角みんなで初詣に来たんだから」

「フッフッフッ。オレ様にいい考えがあるぞ、あおぴょん」

「？」

どうやら、ニックネームはあおぴょんで決定したらしい。
得意の含み笑いを存分に披露する彼に、アオイはぴこっと疑問符を浮かべた。

「歩きながら寝ればいいんだ」

「って、できるわけないでしょ?!」

「わ、頭いいね、ワタル」

「んでアンタも納得しなさんなだわよ!?」

そんな死神とアオイに、赤で決めてきたウララの突っ込みが炸裂した。

「ウララ、用は足せた、ですか?」

「リンちゃんレディにそんなこと聞いちゃダメよ?」

後、リンからの質問に苦笑い。

「レディ?」

「そう、レディ」

「ゴー、です」

「ううん、そっちのレディじゃないの」

「アーユーレディ?　て、だいぶ失礼な疑問文、ですね」

「うん、そうね。でもアナタ今しがた自分で私にそう聞き返してきたわよね?」

真顔でボケる彼女に、ウララは諦めたように笑ってみせた。

「ふふ。でも、僕、初詣なんて初めてだよ」

「フッフッフッ。初初詣だな」

「ふふ、そうだね。ワタルはいつも初詣するの？」

「いや、いつもなら一狩りしてるぜ」

「なんか最近よく聞くけどアンタが言うと危ないわ」

はたして死神が狩っているのはゲームのモンスターなのかリアルの魂なのかというおっかない疑問を抱くウララ。

「ユウは？」

おかしな死神にくすくすと笑いながら、アオイは隣の人物に話し掛けた。

「俺は」

「って、うお？！　アンタどこにもいないと思ってたのにいつからそこにいたの！？」

「……は？　お前が用を足しに行く前からに決まってるだろ」

「だからレディにそんなこと言うんじゃないわよ黒ずくめって言うか完全に保護色化してるって言うかなんだオマエ黒の組織か？！」

「いつもなら寝てる」

「あ、そうなんだ。同じだね」

「って、シカトかコラあああ！？」

いつもどおり全身が黒いユウは、青いコートのアオイとのお話をいつもどおり優先させた。

「じゃあ、ウララは？」

「え？　あ、私？　私はいつもリンと一緒に詣でるわよ」

「へえ、そうなんだ」

「……せわしない、です」

話を振られると途端に切り替わるウララに、リンは今更ながら突っ込んだ。

「初詣って、何するの？」

ここにきて、今更ながらの質問。

神社の本殿への列に並びながら、初めてのことゆえにピコリと小首を傾げるアオイ。

「ん、と……そうね。まずはお店で美味しそうなもの買って食べて」

「鐘を鳴らして参拝に来たのを神様に知らせて、お賽銭を入れてか

ら二礼二拍手で、名前住所年齢お願い事を言ってからもう一度お辞儀する、です」

「で、帰りに美味しいもの食べると！」

彼からの問いに、ウララとリンがそれぞれ具体的に答えた。

「ウララ、食べることしか言ってない、です」

「えへへ♪　って言うか、名前と住所と年齢まで言うの？」

「神様は客がどこの馬の骨だか知らない、です。あんた誰やねん状態では、願い事は叶わない、です」

「へー、神様って全知全能なわけじゃないのね？」

アオイを納得させながら、リンの解答について学習するウララ。

「……、とか言いながら、何をお願いする、です？」

「もちろん、志望校に受かりますように！」

「神頼み、ですか」

予想通りすぎるウララに、リンはしらっとした目を向けた。

「「！」」

その時、年が明けたのか、参拝客の列が動き始めた。

「あれ？　あ、明けましておめでとう？」

「おめでとうございます、です」

「フッフッフッ。明けたのにあっけないな」

「まさか新年早々つまらんのを聞かされるとはな」

詰まり、年が明けたということ。

「ふふん！　ウララちゃん奮発しちゃうわよー！」

客の波に従って前に進みながら会話をする友人たちの先頭で、ウララはお賽銭箱に向かってお金を投げ入れた。

（（ご、五十円……っ！！））

その金額に、リンとユウと死神は目を見開いた。

「わあ、大奮発したね、ウララ」

「あたぼうよ！！」

「……小吉……」

お願い事した後で、今年の運試しとばかりに勇んでおみくじを引きにいったウララ。

彼女は、あまりいいことが書いてないそれに、新年早々肩を落とした。

「リン～……って、れ？」

聞いてくれと振り向くと、そこにはいるはずのメンバーが存在しない。

「……」

と、言うことは。

「迷子になっちゃったあああ？！」

もちろん、あいつらが。

「ちょともう、高三にもなって何やってんのよあいつら？」

やれやれとため息をつきつつ、いいことの書いてないおみくじを杉の木に結び付ける。

ちなみに、杉の木に結ぶと、悪い運が早く過ぎ去る、らしい。

「……しかたないわね」

いろいろとシャレ固めな風習をレッツトライした後で、ウララは気

持ちを切り替えた。

「たこ焼きでも食うか！」

「どアホ」

が、そこへ、ものすごく聞き覚えのあるこえが聞こえてきた。

「あ！　どこ行ってたのよユウ？！」

「御守り販売所」

「御守り販売所！？」

「学業成就」

そのまま聞き返してきた彼女に、ユウはさらりと答えてみせる。

「学業成就ぅ？！」

それを聞いて、ウララはズビシっと彼を指差した。

「なんだ嫌味かコノヤロー！？　私以外全員推薦合格だったくせに！！　アオイとリンとアンタは学校推薦でワタルは部活動推薦で合格したくせに！！」

そして、悔しそうにそれを上下させながらぷんぷん怒りだした。

「それならお前も推薦受ければよかっただろ？」

と、ごもっともなユウ。

「門前払いだコノヤロー！！」

詰まり、条件が満たされていなかったということ。

「……それは自業自得だろ」

「うっさい！　いいの！　神頼みしたし！　奮発したし！」

なんだか酒でも入ってるのか疑いたくなるテンションで、

「くそう、こうなったらたこ焼きのみならずたい焼きも食ってやるー！！」

と、ウララはくるりと方向転換した。

「どアホ」

べしっ

「った？」

すると、ウララの後頭部に何物かが直撃した。

「……って、え？」

直撃して、足元に落ちたそれは、御守り。

「……帰って勉強しろ」

拾い上げたその先で、彼はそう言い残して帰っていった。

「……！　うんっ！！」

ユウから貰った学業成就のお守りを胸に、とびきりの笑顔をみせるウララであった。

「……。キザだな」

「ユウ、いつからあんなキザ野郎になった、です？」

「わあ、やっぱりユウは、優しいね」

――そんな一部始終を、ぼっちり見ていた死神とリンとアオイであった。

2022

第２２４回　積雪日和

夜のうちにしんしんと降り積もった白い雪は、山の斜面を覆いつくした。

「わっは～！」

「ぴわわ」

「すっげェ雪！」

外に出ると眼下に広がる一面の雪に、雪なれしていないミントとプリンとポトフの瞳が輝いた。

「うわー……雪かき大変だよー」

対して、この豪雪地域、フェノリリル在住のココアはげんなり。

「「？　雪かき？」」

すると、何それと疑問符を浮かべるプリンとポトフ。

「……、ほら見て。屋根の上とか道に積もってるでしょー？」

「うん」

「うむ」

その反応に、そんなことも知らないのかと思いながらココアは旅館

の屋根の上を指差し、

「重いし滑るし危ないからあれを退かすのー」

と、けだるそうに説明をした。

「へえ、大変だねぇ」

「本当だよー」

敷地が広い分、とのミントの言葉を肯定しながら、ココアは、はふうとため息をつく。

そんな彼女たちのお隣で、

「「雪かき……！！」」

おめめを輝かせている野郎が二人。

「……」

「……」

「輝いてるね」

「ね」

テンションが釣り合っていないミントとココア。

そんな彼女に、輝くばかりのやる気を全開にしたポトフとプリンはこう言った。

「ココアちゃん、俺雪かき手伝う！！」

「僕もっ！」

「へ？　そ、それはありがたいけどー？」

「「ミントも！」」

「って、当然のごとく巻き込まれた？！」

当然のごとく、ミントを巻き込んで。

そうして、とにもかくにも四人は雪かきをすることに。

「とりあえず、屋根の上のと、宿の玄関先から敷地の入り口までの雪をー」

手始めにとスコップを呼び出したココア。

そして、雪かきなんてしたことないだろうと思われる三人に、

「ダークネスサクリファイスー！！」

ちゅどおおおおおん！！

「ってな具合に消し飛ばすんだよー？」

雪かきの仕方を説明した。

「……へえ……」

なんか違う。

想像してたのとなんか違う。
そして直前に呼び出したスコップの存在意義を疑問視しつつ、これが雪国式なのかと一応納得するミント。

「「……っ？！」」

が、しかし。

「こ、ココアひどいっ！」

「へ？」

「そぉだぜココアちゃんっ！」

「ほえ？」

プリンとポトフには納得がいかなかったようで。

「な、何がひどいのー？」

何がひどいって、

「「雪！！」」

雪を粗末にしたらあかん。

「い、いや、だって、こーした方が早いでしょー？」

「そんなことしたら雪がなくなるぞココア？！」

「いやだから雪をなくすために雪かきするんでしょー？」

「せっかくあんなに降り積もったんだぜェ！？」

「いやだからあんなに降り積もったから雪かきするんでしょーに」

二人の言っている意味が理解できていない彼女に向けて、

「ココア」

「？」

ミントは気の毒そうに首を横に振った。

何を言っても無駄である、と。

「……え？」

いや、そんな憐れむように首を振られても。

「よォし！　どっちがでかい雪だるまを作れるか競争だ枕ァ！！」

「ふふふ、望むところだっ！」

雪といえば、雪だるま。

ポトフとプリンはそれぞれ手にした雪玉を、闘争心と遊び心をふんだんに込めて転がし始めた。

「はい、雪落とすよ～」

ドサドサ

「「ミント、もっと！」」

「はいはい」

薔薇の鞭を巧みに操り屋根の上の雪を下に落としながら、

「遊び道具を取り上げちゃダメってこと」

「……子どもだねー？」

ミントは、ココアを取り敢えず納得させた。
小さい頃から当たり前のように見てきた雪。
ココアにはなんの目新しさも感じられないが、彼らにとっては新鮮味にあふれかえっているのであろう。

「知ってるか枕、雪の上を転がると自分が雪だるまになれるんだぞ？」

「む、本当か？！」

「って、何実践してんのさあああ！？」

「っ、ぴわわわわわ！？」

「あっはっはっ！　相変わらず頭いいくせにバカだなァ！」

「止まってプリンその先崖えええ！！」

「って、何ィィィ？！」

「ヤーーー！？」

「……。子どもだねー？」

そんなこんなで、正月早々騒がしい朝が過ぎていったのであった。

第２２５回　楽観日和

南へ向かう黒い汽車は、軽快な汽笛を鳴らして雪の国を出発した。

「っくしゅ」

「おやおや、風邪かいアセロラ君？」

凍るような外とは違って暖かな車内で、バジルはくしゃみをしているアセロラを発見した。

「あ、バジルさん。おはようございます」

久しぶりに会ったルームメイトに、アセロラは鼻に手を当てながら適当に挨拶を済ませた。

「ふはは！　風邪の時はネギを首にまくといいんだぞアセロラ君！」

「ネギなんて持ってませんよ」

「ちょうど長ネギを持っている！」

「……なんで持ってるんですか」

もっともな疑問を抱く彼をよそに、カバンからにゅっと長ネギを取り出したバジルは、手際よく首にネギをまきつけた。

「うん、これでよし！」

「臭いです」

「ふはは！　早く良くなるといいね、アセロラ君！」

相変わらずあまり噛み合わない二人の会話。
しかし、それももういつものこと。
アセロラは諦めたように手帳に目を落とした。

「そう言えば」

それを見たバジルは、思い出したように口を開く。

「その手帳には、私のことも書いてあるのかい？」

今更ながらの質問ではあるが、少し気になったので聞いてみる。

「くしゅ！　……はい。バジルさんの生年月日から家族構――」

本当に風邪かとか思いつつ、ネギのかおりに包まれているアセロラは、ここではたと気がついた。

「そう言えば、どうして父親だけなのですか？」

家族構成が、片親という理由を知らないことに。

「あ」

しかし、これはまずい質問だったかとすぐさま思われた。
しまったと口を塞いだアセロラに、

「聞きたいのかい？」

バジルは、輝くばかりの笑顔を向けた。

「……え？」

この、語りたくてうずうずしているバジルの顔。

アセロラは、別の意味でまずい質問をしたようだ。

≫≫≫

「おとうさま！」

初等部の学校から帰ってきたバジル少年は、カバンを下ろすと父親の事務所に顔を出した。

「ん？　おお、おかえりバジル」

大事な息子に笑顔で応えるバジルパパ。

ここは、弁護士である彼の仕事場。

腕利きの弁護士らしい彼の家は、この辺りでは有名な邸宅である。

「おとうさま、聞きたいことがあるのですが」

「うん、なんだい？」

ちょうど暇を持て余していたらしいバジルパパは、息子の話相手をすることに。

「わたしのおかあさまは、どこにいらっしゃるのですか？」

すると、しょっぱなからキツい質問が飛んできた。

「ふはは！　気になるのかい？」

しかし、バジルパパは基本傷付かない。

「はい！」

と答えたバジルに、

「じゃあ質問だ」

「？」

バジルパパは、にこりと笑ってこう尋ねた。

「この前、女性のことを酷く言った偉い人のことを知っているかい？」

「はい！　子どもをつくるキカイだとか、ひどいですよね！」

ゆえに、バジルはそのニュースに対して頬を膨らませながらスラスラ答える。

「その通り。さすがバジルは頭がいいな」

「えへへ」

「そう、機械だなんて酷いだろう？　でもね」

褒めると素直に照れるバジルに、バジルパパは言葉を続ける。

「君のお母様は、私のことをお金を作る機械だと勘違いしていたのだよ」

笑顔で、子どもに、残念な話題。

「え？」

一瞬、バジルの思考が停止した。

そんな彼に、バジルパパはふはは！　といつものように笑ってのける。

「ちょっと前までは私もダメな弁護士でね！　まあ、お金がない、そんな時代もあったのさ！」

別に強がっているとかそんなのではなく、普通に笑い話をしているバジルパパ。

「そこで、またバジルに質問だ」

「は、はい？」

そんなふうに話されるもんだから、バジルも深刻な問題ではないように思えてくる。

「お金を作る機械なのに、ボタンを押してもお金が出ない。さあ、どうする？」

茶化されたシビアな質問に、

「えっと……、たたいてなおします！」

無邪気で簡単な答え。
調子が悪い機械は叩いてなおす。
これが、バジルの常識。

「ふはは！　さすがバジル！　話の的を得た的確な答えだね！」

「えへへ」

「そう、ひっぱたいてでもお金を出させようとした。しかし、それでも出なかった」

それを映像的に考えると、かなり不憫な状況なのではあるが。

「まったくダメなポンコツ機械。さあ、どうする？」

しかし、それを図らずして感じさせないバジルパパ。
彼の質問に、バジルは少し考えた後、

「えーっと……、すてます！」

的確な、しかし残酷な答えを導いた。

「その通り！　ふはは！　さすがバジル、天才だ！」

「ふふっ、とうぜんです、おとうさま！」

そうして、バジルを持ち上げて楽しそうにくるくると回り始めたバジルパパであった。

≫≫≫

「と、言うことなのだよ。ふはははは！」

そう、父親と変わらず能天気に語ったバジルと、

「……よく似た親子ですね？」

何やら頭が痛くなってきたため、風邪が悪化したんじゃないかと思うアセロラであった。

第２２６回　先導日和

心地よく揺れる汽車のなか、向かい合わせで座った二人の女子生徒は、中央の水晶玉に注目した。

「お、お願いいたしますわっ」

「……」

緊張した面持ちのムースに、バニラは表情を変えずにこくりとうなずく。

そうして膝にのせた水晶玉に手をかざし、得意の占いを始めるバニラ。

「っ……！」

それを固唾を飲んで見つめるムース。

占うは、愛しき相手。

ゆえに、彼女はひたすら祈る。

どうか、”道端の小石”だけはやめてくれ。

ポンッ

そんなことをしているうちに、水晶玉は一枚のカードを吐き出した。

ぱしっ

馴れた様子で、それを取るバニラ。

彼女はそのカードを確認した後、無言で友人に見せてあげた。

「？　……卓上の卵？」

カードに書かれているのは、今は使われなくなった古い文字。
それを読み解いたムースは、描かれた絵とともにカードの意味を考える。

「……」

「え？　この状況でどう思う？」

何故かムースは、バニラの言わんとしていた言葉が分かるようだ。

「そうですわね……。何が生まれてくるのか、気になりますわ」

彼女のまさに無言の問い掛けからの、答え。

「――！　つ、つまり、気になる、ということですのっ？」

「……」

「きゃあああ！　やりましたのですわあああ！！」

こくりと頷かれて、ムースははしゃぐ。
見た目はなんら変わらずとも、バニラもそれを喜ばしく思う。
傍から見るとえらいテンションの差だが、彼女たちからすると実際はそうでもないのである。

終点の駅は、南の地。
まばゆい太陽に恵まれたそこは、バテコンハイジュ。

『さあ、今回も始めるヨ～！　二人一組で、頑張って森を抜けてきてネ！』

そこで始まる魔法学校の試練。
どうやらこれが、デフォルトらしい。

「バニラさん！」

「？」

セイクリッドと似たような元気印の女の先生のアナウンスを聞いた直後、ムースは爛々と目を輝かせた。

「これは、二人きりになるチャンスですわよ！」

もちろん相手は、バニラの想い人と。

「！」

「うふふ、照れてたんじゃ何も始まりませんわ？」

ぶんぶんと首を横に振って遠慮するバニラの手を取って、ムースは勇んでアセロラのもとに移動した。

「ふはは！　では私はアセロラ君と」

「たわけですわ！」

ズバアアアアアアン！！

アセロラとペアになろうとしたバジルに渾身の扇子張り手。効果音的に、ココアの平手より切れ味があると思われる。

「口を慎みなすって？」

バジルを張り倒した扇子で優雅に顔を扇ぎつつ、ムースはころっと表情を変えてアセロラに向き直った。

「アセロラさん、ペアはお決まりでいて？」

お嬢様に相応しく、麗しい笑顔で。

「いえ、今しがた欠場しましたので」

そんなことは日常茶飯事なのか、アセロラもこれといって動揺していない。

「そうですか。それはちょうどよろしいですわ」

涼しい顔で対応する彼に、

「バニラさんが、お相手を探していたところですの」

ムースは、にっこりと笑ってバニラをご紹介した。

「……」

何も言わないが、本当はもう心臓がやばい。
今すぐにでも帰りたい気持ちでいっぱいな彼女をよそに、

「いかがかしら？」

ムースは超楽しそう。
このアマ……！　と、若干心の声が凶暴化しつつあるバニラである。

「はい。では」

しかし、そんな彼女に、

「よろしくお願いします、バニラさん」

アセロラは、ふわりと微笑みかけながらそう言った。

「……！」

これが、ミントに言わせたところのイケメンビーム。
バニラには効果は抜群だ。

「決まりですわね。さあ、アセロラさん。バニラさんのリード、よ

ろしくお願いいたしますわ」

くらくらな彼女に追い打ちをかけるムース。

彼女はアセロラの腕を掴むと、自然な流れでバニラと手を繋がせた。

「――?!」

だから、効果は抜群だって。

内心うろたえまくるバニラであるが、無表情の鉄の仮面は剥がれない。

流石は沈黙のお姫様。

「さあ、参りましょうか?」

「……」

にこりと笑って手を引くアセロラに、黙って頷くバニラ。

「男性が女性の手を取ってリードするのは、当然のことですわ!」

彼のジェントルな対応に、ムースは申し分ないと満足気に頷くのであった。

「なるほど。では、お手をどうぞ、ムース嬢?」

ズバアアアアアン!!

「気安く触らないでくださる?」

レディのリードは、いろいろルールがあるようだ。

第２２７回　和解日和

ふわふわと降る雪を眺めながら、

「ぽかぽかだねぇ」

帽子代わりに頭にタオルを巻いたミントが、温泉にとっぷりと浸かりながら口を開いた。

「うむ。ぽかぽか」

それに同意するプリンは、髪がお湯につかないようにまとめあげ、濡れないように泡で包んだ枕を抱えている。

「ぽかぽかだなァ」

ミントの反対隣のポトフは、いつものように眼帯を付けたまま。

雪掻き、とは名ばかりの、全力の雪遊びを終えた彼らは、その疲れを癒すべく昼間から露天風呂に浸かっていたのであった。

時間帯のせいもあってか、今現在、露天風呂は貸し切り状態。

ぬくぬくと暖かいお湯に、三人は最高にくつろいでいた。

ガバーッ！！

「うおわ？！」

――のだが。

「！？　ポトフ？！」

「何事――」

突然のお湯飛沫とポトフの短い悲鳴に、驚いたミントとプリンが一斉に振り向くと、

「捕まえたぞこのケダモノ！！」

「お、お兄さ?！」

「貴様に”お兄さん”などと呼ばれる筋合いは毛頭ないわあああ！！」

ポトフは、ココアの兄、ショコラに両腕で首を絞められていた。

「あ、なんだ。ココアの」

「うむ。人騒がせ」

「いやいやいや俺首絞められてるんだけど?！」

ゆえに、心配して損したとばかりにミントとプリンは再びのほほんと雪景色を眺め始めた。

「あ。ウサギがいるよ」

「うむ。可愛いな」

彼らとポトフを阻む湯煙の壁は、どうやらポトフの想像以上に厚いようだ。

「ふっふっふっ、俺の可愛い妹をたぶらかした罪は重い！！」

「ええ？！　た、たぶらかしてなんか」

「今その息の根を止めてくれるわ！！」

「ってちょお兄さァァァん？！」

「”お兄さん”て呼ぶなあああ！！」

露天風呂のふちでちっこい雪だるまを作っているミントとプリンに対して、暑苦しいこと極まりないこの二人。

「ちょ、お、落ち着いてください！」

「これが落ち着いていられるかこの野郎？！」

「いやだから何がどォしたんですか！？」

まさか露天風呂で命の駆け引きが始まるだなんて予想だにしていなかったポトフは、取り敢えずご乱心の原因を聞くことに。

「煩い！！　いくらアクリウムの学校に近いからってお前の家に下宿とか絶対させないからな！！」

なんだかんだでちゃんと答えてくれるショコラ。

「？！　下宿！？」

何それ初耳なんだけどなポトフ。
どうやら彼は、ココアからいまだに相談されていないようで。

「そうだふざけんなこんなヤツのとこに下宿なんてした日にはあんなことやこんなこと――って貴様今変なこと想像しただろこの変態がああああ！！」

「いや俺まだ何も言って、いたたたァ？！」

しかし、そんなこと知らんショコラは、ご立腹な様子で彼の首を絞める。

「？　あんなこと……どんなこと？」

「気にしちゃダメだよプリン」

殺気立った風景からは程遠いミントとプリン。

「ま、待ってください。……ゴホッ、それって、おにィ――……ショコラさんは承諾してるんですか？」

必死の抵抗をしながら、ポトフは冷静に質問した。

「するわけないだろこのケダモノおおお！！」

お兄さんと呼ばなくなったので若干攻撃の手がゆるむ分かりやすいショコラ。

「なら！　俺もオススメしませんっ！」

その手をどうにか退かそうと頑張るポトフ。

「え？」

すると、ショコラの間抜けボイスが飛んできた。

「……ショコラさんに……反対されたままじゃ、ゴホッ……ココアちゃんは悲しみます」

やっとこさで解放されたポトフは、むせながらも言葉を続けた。

「こ、ココアが、悲しむ……？」

彼の言葉に、ショコラは動揺の色を見せる。

「は……はい。ココアちゃんは、きっとショコラさんが大好きなんです」

桃色天パで青い瞳のお兄さんに、ポトフは茶色の片目を向けた。

「たった一人の、大切なお兄さんなんですから」

露天風呂に響いた、彼の言葉。

ぱきっと固まったプリンとにやりと笑ったミントはほっといて、

「そんなお兄さんに、自分の考えを反対されたら、絶対悲しいです」

ポトフは一生懸命語り続けた。

ちなみに、彼は完全に友人二人の存在を忘れている。

「そんな……ココア……っ？」

すべては可愛い妹を思っての行動だったのだが、逆にそれが彼女を傷付けていたのかと気付くショコラ。

大切な大切な妹に、変な虫がつかないように、

『ポトフだけど、それがどうか――』

『これ？　ポトフに貰ったのー！』

『相談してみるー！』

していた、つもりなのだけれど。

「……」

思い返してみると、しあわせそうな妹の顔。

写真もネックレスもケータイに表示された名前も、全部大切に抱き締めて。

「……、そうか。お兄ちゃん、バカだったんだな」

ふっ、と思わず、自嘲が零れる。

「？　ショコラさん？」

「すまなかった」

ショコラは、首を傾げたポトフと――どうやら可愛い妹が心底惚れているらしい彼と、真正面から向き合った。

「――ココアを、よろしく頼む」

そして、深々と頭を下げてそう言った。

「「！」」

ゆえに、ぱあっと明るくなるポトフとミント。

展開に若干ついていけていないプリンはこの際気にしてはいけない。

「はい！」

ショコラの頼みに、ポトフは心からの笑顔で力強く返事をした。

「時にポトフくん」

「？　はい？」

直後、ショコラはコソコソとポトフに話し掛けた。

「ココアとはどこまで？」

この時点で、ミントのテンションが著しく低下したのは言うまでもなく。

「へ？！　そ、それは……えっと……ちゅー、ですか？」

「何？！　え、おたくらどんだけ長いのよ！？」

「ええと、一応四年くらいになります」

「何その本当に清いお付き合い?!」

ショコラの発言に対してプリンが質問してくるが、ミントはじとっとした目のまま動かない。

「あのな、参考までに言っておくが」

が、この時ミントとプリンは、木の壁の向こうで、闇の魔力が高まるのを感じ取った。

「たぶんもうココアも期待して」

「ダークネスサクリファイスーーーーーーー!!」

どうやら露天風呂の女湯に入っていたらしいココア。

壁ごしの的確な狙いは、果たして兄妹の絆の強さなのかどうなのか。

第２２８回　職員日和

よく晴れたぽかぽか陽気の昼下がり。
全生徒の進路も決まっていよいよ全体的にゆるゆるし始めた学校内の食堂にて、

「これなんかどぉ？」

「わー！　この部屋可愛いー！」

「……何畳設定なのさこれ？」

「ふむ、十八畳くらいあるだろうな」

ポトフとココアとミントとプリンは、昼食をいただきつつ新生活を応援するカタログを見ていた。

「うえ、そっかー。ね、部屋ってどのくらいだっけー？」

「んー……八くらいかなァ？」

「広さ考えないと足の踏み場もなくなるよ？」

「うむ。その広さならこっちだ」

新しい生活に向けての他愛のない会話。
そんなほのぼのとした空間の後ろに、

「ここにしよっかー！」

クー先生ご一行がやってきた。

（？　珍しい）

ずらりと並んだ先生方。
いつもバラバラに食べているのに珍しい、とコーラを飲みながら思うミント。

「そうだな」

（あ、お子様メニューじゃない）

同意したセル先生のお盆には、簡単なサンドウィッチとコーヒーがのっている。
どうやら他の先生と一緒の時は、お子様メニューは控えているようだ。

「いやあ、進路も全員決まって一安心だなぁ！」

「ふふ、そうですね。みなさん決まって本当によかったです」

席に着いた社会科のフェイ先生と家庭科のピット先生は、ほのぼのと笑い合う。

「……パイナップル……」

「あらぁ？　リアラ、酢豚にパイナップル入れない派？」

その隣で医務室のベル先生の言ったとおり、酢豚に入ったパイナッ

プルにわなわなと肩を震わせているのは生物学のリア先生。

「……で、卒業式の方はどうするんです？」

そんななか、マスクをした魔法学のポリー先生が本題に触れた。

（え、こんなところで？）

そんな話をしていいのか、と聞こえてくる会話から思うミント。

「うーん、ただやるだけじゃあつまらないよね？」

（卒業式に面白さを求めないでくださいクー先生）

クロワッサンをもぐもぐしながら言うクー先生。

「……。そうだな」

（クー先生の味方ですねセル先生）

いつもクー先生の味方なセル先生。

「そのまま帰しちゃえばいいんじゃないのぉ？　かったるい」

（そこはかったるがらないでくださいベル先生）

パスタをくるくるしながら面倒臭がるベル先生。

「……パイナップル……」

（こだわりますねリア先生）

酢豚に入ったパイナップルがとことん気に食わないリア先生。

「……じゃあ、いつもみたいに試験しまぶえくしょん！！」

（今年のピノキは厄介らしいですねポリー先生）

目と鼻腔がつらい季節なポリー先生。

「いや、ここはマヨネーズでしょう」

「アホかマスタードに決まっとるやろ」

（いやなんの話をしてるんですかって、え！？　プリンに？！　プリンにそれらをかけるんですか！？）

プリンにかけるもので口論になっている美術のケア先生と体育のエル先生はほっといて、

「えー？　卒業するのに試験なんてするの？」

クー先生は、不満そうに口を尖らせた。

「最後まで勉強させるなんて可哀想だよ！」

なんだかいつになく生徒の味方のような発言。

「何を言いますか。学生の本分は勉学です」

ズビズビとつらそうな鼻をかみつつ、ポリー先生が反論する。

「それはそうかもしれないけど……、でも！」

どうやらここは譲れないクー先生は、

「生徒のＵＲＬを考えるべきだよ！」

ガタッと立ち上がって、真剣な顔でかっこよく言い放った。

「……？　ＵＲＬ？」

インターネットアドレス？　と首を傾げたポリー先生に、

「……。ＱＯＬって言いたかったんだろ」

セル先生は、生活の質の間違いだとコソッと訂正してあげた。
ちなみに、コソッとなあたりが彼の優しさである。

「じゃあ、クロレカはどうしたいのぉ？」

間違いに気付いていないクー先生に向けて、ベル先生は、桃色の髪を指先に巻き付けながら質問した。
なんだか、かなりどうでもよさそうだ。

「え、わたし？　えっと、わたしはね」

しかし、クー先生にとってはそんな態度の方がどうでもいいようで。
彼女はその質問を待っていたかのように、らんと目を輝かせた。

「生徒のみんなが、この学校に来てよかったなって思えるような卒業式にしたいの！」

そして、にこっと笑って自分の意見を発表する。

「この学校で、みんなが先生たちから学んだことを最大限に活かせるような」

胸に手を当てて、優しく言葉を紡ぐクー先生。

「それで、それらを乗り越えることで、ひとりひとりが誇りと自信を持って新しい未来に大きくはばたけるような」

いつもの彼女らしからぬ、学校の先生らしい提案に、他の先生たちは驚いたように黙り込んでいた。

「――そんな実技試験にしたいの！」

が、いつものクー先生だった。

（（やっぱりね））

ガクッと軽く思い思いにずっこけた先生たちの周りで、話を聞いていた生徒たちは、予想通りだと小さくため息をつくのであった。

第２２９回　逃足日和

春の訪れを少しづつ感じられるようになった今日の日。
見慣れた景色の森に、

『そんなわけで、これから卒業試験を始めるよ！』

拡声魔法を使ったクー先生の声が響き渡った。

「”そんなわけで”って」

「あはは、始まったねー」

いつも通りな無茶ぶりに、広大な森のある地点にワープさせられたミントとココアは苦笑い。

『課題はこの森を抜けて汽車にたどり着くこと！』

「？　いつもと同じなのかァ？」

「……そのようだな」

内容を知らされ、単純なゴールに首を傾げたポトフにプリンはさらりと言葉を返した。

『出発予定時刻は十二時ちょうど！　じゃ、頑張ってね！』

拍子抜けしたような生徒たちに構うことなく、クー先生は課題開始を高らかに宣言した。

「……まーたく、最後くらいおとなしく式あげればいいのにねー？」

「あっは、まァらしいっちゃらしいんだけどなァ？」

先生の声が聞こえなくなり、課題が始まる。

ランダムに送り飛ばされたこの場所は、何度も来て見慣れているものの、方向感覚が分からなくなるほどの深い森。

その中での唯一の目印は、遠くに見える魔法学校のシルエット。

「とにかく、目指すは駅だね」

「うむ。あっちだな」

学校の位置が確認できることから、取り敢えず進むべき方向は把握できる。

よって四人は、学校の正面から見て真南に位置する駅を目指して歩き始めた。

「「？」」

直後、四人は視界に捕えた物体に思わず足を止める。

四角い箱の上についた、赤いスイッチ。

「……何これ？」

と、目を細くするミント。

「スイッチ、だねー？」

怪しい。
あからさまに怪しすぎる。
こんな、押すと何か起こる可能性が極めて高そうなスイッチを目の前に出されたら、躊躇なく押すのがコメディアン。

「スイッチ……だなァ」

しかし、生憎自分たちは一般市民。
別に周りを笑わせるためにわざわざ身を危険にさらしてまでアホな行動をとる必要は、一切ないのである。
て言うか、自分たちの周りには誰もいない。
ゆえに、こんな不審物は華麗にスルーしてみせるのが普通。

「えい」

そんなことをミントとココアとポトフが考えているうちに、プリンはスイッチを押していた。

ぽちっ

流石は天才。
普通の人とは、やることが違う。

「って、何してんのさあああ?!」

「押した」

ミントの突っ込みに、プリンは満足気な顔で答えてみせた。

「いやそんなレストランの呼び鈴を初めて押せたときみたいな顔し

てる場合じゃ――」

具体例を交えて焦るミントをよそに、彼の背後に衝撃音が鳴り響く。

どしん！！

「「どしん？」」

振り向いたら、激しく負けな気がする。

負けな気がするのだが、振り向かないといけない気もする。

「「……」」

四人が音源に振り向くと、そこには丸々とした大きな岩が。

――やっぱりな。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

「って、来たァァァ！！」

「いやーーーーー！！」

「プリンのバカあああ！」

「ぴわわ、ごめんなさいっ！！」

見事に予想が的中した四人は、血相を変えて逃げ出した。

なんとか逃げ切った四人は、疲れたように森の中で座り込んでいた。

「ったく、もう、スイッチなんか、押しちゃ、ダメ、だよ？」

「う……、う、むっ」

全力で友人を引っ張ってきたミントと、全力で友人に引っ張られてきたプリン。

「ココアちゃん、ケガはない？」

「う、うん、大丈夫ー」

まだまだ大丈夫そうなポトフは、へたりこんでいたココアを気遣っていた。

「たく、ちょっとは考えろよテメェ？」

「む、だって」

「だってじゃないでしょ」

呆れたようなポトフとミントと、何か言い訳し始めるプリン。

「？」

元気に騒いでいる野郎三人はほっといて、周囲を見回していたココア。

「なんだろこれ？」

彼女は、近くに小さな楕円形の玉を発見した。
つるつるぴかぴかしたそれは、手のひらサイズの大きさで。

「あ」

つるっと手から滑り落ちた玉は、ぱきょっと脆く割れてしまった。

ガサガサ

と、同時に彼女は、辺りの異変に気が付いた。

「へ？」

自分たちを囲むように、茂みがざわめいている。
ざわざわガサガサ、殺気立つ。

「……ね、ねー？」

「「？」」

この現象がよろしい展開に発展したことなど、今までに一度だってない。
そんなわけだから、ココアはその異変に気付いていない野郎どもに声をかけた。

「私たち、囲まれちゃったみたーい」

とても引きつった笑顔とともに。
え？　と辺りに目を走らせる三人。

『『ぐばばばばば！！』』

ガササー！

すると、茂みのなかから、

「む、いつぞやのクマさんが」

いつぞやのクマさんが、

「とてもメタリックな状態だなァ」

とてもメタリックな状態で現れた。

「なんか見るからにパワーアップしてるううう？！」

というミントのツッコミを合図に、四人はクマさんの手が薄い一ヶ所を出口に再び逃げ出した。

『『ぐばばばばば！！』』

「なんか怒ってる！　なんで怒ってるんだァあのメタリックマ？！」

「メタリックマ！？　何そのそこはかとなく何かしらと類似性がありそうなネーミング？！」

「たぶんタマゴ割っちゃったからだと思いますどーぞー！」

「はあ？！　なっ、なんてことしちゃってんのさココア！？」

「むう。ココア、おっちょこちょい」

「おっちょこちょいなんて可愛らしい表現で済むかあああああ！！」

メタリックマに追い掛けられながらも、ツッコミ続けるミントであった。

第２３０回　成敗日和

さわりと静かに葉の揺れる大木の下、

「……たく、なんでのっけからこんなに疲れてんのさ？」

袖で額の汗を拭いながら、ミントは一度大きく息をついた。

「む、おっきい岩と」

「クマさんに追い掛けられたからでーす」

「んん、正しい。正座あと三分ね」

「「はーい」」

疲労の原因であるハプニングを生み出した、プリンとココアを正座させながら。

「先生、足痛いでーす」

「ぷゆ……先生、痺れた」

「我慢なさい」

「「はーい」」

なんてやり取りを三人がしているなか、

「お？」

ポトフは、ふとあることに気が付いた。
風に乗ってふわりと届いたのは、

「！　あんなところにシカが！」

シカのにおい。
そちらに目を向けると、右斜め前方にシカが横たわっていた。

「いっただっきまァす！」

大好物が目の前に存在している。
これはもう、行くっきゃない。

「いい？　二人ともうちょっと慎重になってよ？　下手に動かないポトフを見習っ」

がしょーん！！

「て、ポトフううう？！」

ミントが気付いた頃は時すでに遅く。
ポトフは、シカを餌にした棒でつっかえてあったカゴのなかに、見事に捕らえられてしまった。
これはもちろん、ミントが言う見習うべき姿では断じてない。

「しまった！？」

と、思わず叫びながら口の周りを拭うポトフ。

「って、バッチリ食べたんかい?!」

と、思わず心配も忘れて突っ込むミント。

「ちょ、もう何してんのさ言ってるそばから!?」

「だってシカが仕掛けてあったから」

「んなダジャレ言ってる場合?!」

「い、いや別にダジャレのつもりでは……」

慌ててカゴの前までやってきたミントの言葉に対応するポトフ。

「とにかく出て!」

「お、おう!」

そんなゆるい会話をしている場合ではないことは、一応把握していたらしいミント。

こんな罠を仕掛けているようでは、近くに敵がいることは明らか。

ガサリ

ほらみたことか。

『あんぎゃあああ!!』

二人の目線の先に、なんか〝あんぎゃあああ!!〟とかおぞまし

い鳴き声をあげながら、恐竜チックな魔物が現れた。

「……」

「……」

「「……」」

取り敢えず、びびるよね。

「ポトフ？」

「ん？」

少しの間を置いて、ミントとポトフはお互いの顔を見合わせた。

「”ここは俺に任せろ☆”みたいな、かっこいいこと言う気ない？」

という、ミントの質問に、

「その言葉、そっくりそのまま返していい？」

ポトフは、にっこりと笑って答えてみせた。

「いやそれを更にそっちに――」

『あんぎゃあああ！！』

「――って、ちょ、た、タイムタイムタイムタイムっ！！」

再びけたたましい雄叫びをあげた魔物相手にタイムを乞いながら、ミントはバッと後ろを振り向いた。

「プリン、ココア！！」

ポトフがカゴに入っている今、頼りになるのは後ろの二人。

「「あしびれたー」」

しかし、彼らは足が痺れていた。

「……」

そう言えば、さっきまで正座させてたなあ。

『あんぎゃあああ！！』

「って、うわあああ？！」

タイムの時間が超過してしまったのか、魔物はもう一度吠えた後、ミントに向かってやってきた。

「まっ、待ってください話せば分かります取り敢えず一旦落ち着きましょう恐竜さん？！」

ゆえに、ミントは和解を試みた。

『あんぎゃあああ！！』

そんな彼の前に立ちはだかる言葉の壁。

何を言ってるのかさっぱり分からない。
でもきっと、今まさに踏み潰そうとしておられるのだから、”イエス”とかそういう方面の返事ではないんだろうなあ。

「オレがきみに何したって言うのさあああ!?」

冷静な判断をして逃げ出したミントは、興奮状態のモンスターに半泣きだ。

『あんぎゃあああ!!』

そのちょこまか逃げる彼をドシンドシンと追い掛ける魔物。
それほど速いわけでもなさそうなのだが、圧倒的なのは、歩幅の差。

「ちょ、落ち着きましょうて!」

『あんぎゃあああ!!』

平和的解決を求めるミントの言葉は、暴れだした魔物には聞こえないようで。

「いやなんでもかんでも暴力で解決させるなんて良くないですって!」

『あんぎゃあああ!!』

と言うか、それ以前にこの魔物は人語を理解できるのかどうなのか。

「いやだから暴力は」

『あんぎゃ』

でも、やっぱり暴力はよろしくないわけで。

「ダメだって言ってんのが分かんねえのかボケえええ！！」

ズバアアアアアン！！

何を言っても攻撃態勢を崩さない魔物のバカでかい図体に、ミントの薔薇の鞭がクリーンヒットした。

そんな華奢な鞭に打たれたところで痛くもかゆくもないように思えるのだが、

どしーん！！

魔物は、その攻撃された腹を大幅にへこませて、力なく地面に横転させられた。

「ったく、暴力はどんな理由であれ許されることじゃないんだよ？」

何やらぴくぴくいっている魔物に対し、武器を収めたミントはぷんすかしながら注意した。

『あ、あんぎゃ……』

「ましてや弱いものいじめなんて最悪だよって言うかなんでシカを餌にポトフ捕まえてるのさ肉の量的に確実に損してるじゃんバカだなそれくらい罠仕掛ける前にちゃんと考えて」

くどくどと説教しだしたミントに、

「「……」」

ただただいい知れぬ恐怖を覚えるプリンとココアとポトフであった。

第２３１回　実践日和

木の枝で羽根を休めながら、小鳥たちが春の歌をさえずる森のなか。

「ふにゃにゃ……っ！！」

ミントは、超頑張っていた。

「っあーもう！　無理これ持ち上がんない！」

これ、とは、ポトフを閉じ込めている檻のこと。

友人を助けようと頑張っていたミントは、疲れたように檻から手を離して座り込んだ。

「えェ？！　もォちょっと頑張ろォぜミントォ！？」

早々に諦めた彼に、中から檻を持ち上げようと頑張っていたポトフが声をかける。

「だって全然動かないんだもん」

「いやそこでぷくっと膨れられても可愛いとしか思わねェぞ？」

「可愛かない！」

ぶーっと膨れっ面になられて困ったポトフに、ミントはぷんすか言い返す。

可愛いという言葉は、彼にとっては誉め言葉でもなんでもないよう

だ。

「まったく、自分で入ったんだから自分でなんとかしなよ？」

「いや、なんとかできねェから出られねェんだけど」

「取り敢えずもう一回持ち上げてみて！」

「ふぬぬ……！」

「気合いが足りん！」

「ふぐぐぐぐ……っ！」

「もっと本気で！！」

「ふぬわァ！！」

柵を掴んで力いっぱい持ち上げようと試みる。

それでもやっぱり、ポトフの檻は動かない。

「う～ん……あがらないねえ？」

「あ、あがんねェな……」

手強い檻に頭を悩ませるミントと、疲れて息があがってきたポトフ。

「なーにやってるのよ二人ともー？」

そこへ、足の痺れがおさまったのか、ココアがツカツカとやって

きた。

「こーゆーときは、プリンの出番でしょー？」

「む」

同じく正座により血行が悪くなっていたプリンとともに。

「「あ」」

そっか！　と、素直に納得する二人。

そうだ、プリンが得意とする魔法――テレポートならば、この状況を打開できるに違いない。

「ふむ。それはそうだが」

しかし、プリンはこてっと首を傾げて、

「僕、ここの座標が分からない」

と、言い放った。

確か、テレポートを使うには、移動対象と移動先の座標を知る必要がある。

「それでも構わないなら、テレポ」

「「って、いやいやいやいや？！」」

失敗すればそれは瞬間消滅というとんでもないハイリスクで、そしていろんな意味でノーリターンな魔法。

それをさらっと使おうとしたプリンを、ミントとココアとポトフは一斉に止めにかかった。

「冗談だ」

「ウソこけ目が本気だったぞテメェ？！」

「しかもローブもはためいてたよプリンー！？」

ぱっと手を下ろした彼に、冗談じゃないと突っ込み攻撃をするポトフとココア。

「……」

その間、ツッコミに参加せずに檻をどうすればいいか考えていたミントは、

「！　あ、ねえ」

ある考えが頭に浮かんだ。

「もしかして、これがクー先生が前に言ってた”今まで学んだことを最大限に活かせるような試験”ってことなんじゃないかな？」

呼び掛けに呼応してこちらに注目した三人の友人に、ミントはその考えを披露した。

「む？　つまり、今まで学んだことで」

「解決しよー、ってことー？」

プリンとココアの聞き返しに、こくりと頷いて肯定するミント。

「となると……ん？　檻から出るための学習なんてしたかァ？」

それを受けて、ポトフは改めて首をひねる。

「あ！　前に魔法学でポリー先生が言ってたよー！」

勢い良く手を挙げたココアは、いいアイデアが浮かんだのかにっこにこ。

「”正攻法がダメなら、力ずくでぶっこわす”♪」

「ちょっと待ってココアちゃ」

「ダークネスサクリファイスー！！」

ちゅどおおおおおん！！

ポトフの素早い制止の声も虚しく、ココアの最大魔法が檻に直撃した。

「あらら。ダメみたいだねー？」

人が通り抜けられないとはいえ、スッカスカの檻に当たった魔法の余波は、漏れなくポトフに大打撃。

「ふむ。そう言えば、魔科学でクー先生が」

なんか黒焦げた彼に構うことなく、顎に手を当てていたプリンは、

「”魔酸で溶けない金属はない”と」

ぱきんと指を鳴らして、工業用の大量の魔酸という名の酸を呼び出した。

「っていや待てお前殺す気か?!」

「冗談だ」

「だからさっきから冗談が笑えねェんだよテメェはよォ!?」

タンクで呼び出しておいてどうやら冗談だったらしいプリンに、真っ青ポトフが頑張って反論する。

「あ、そう言えば、魔物学でセル先生が言ってたよね?」

ぴこんと豆電球が光ったミントに、ポトフは長年の、と言うかさっきまでの経験から身構える。

さあ、次は何が来る。

「”無駄な努力はやめていさぎよく諦めろ”」

なんか、一番寂しい発言きた。

「む。では諦めるか」

「そーだねー。全然びくともしないしー」

「”諦めて逃げるのも策のうちだ”て言ってたしね」

「いやいや去るな！？　去るでない！！　って、ちょっ、ホントおいてかないでェェェ？！」

ははははと談笑しながら歩きだした三人の背中に向けて、必死に叫ぶポトフであった。

第２３２回　解法日和

「うーん」

「ふむ……」

「……えーと」

「んんん」

森から聞こえてくる悩む声。
ミントとプリンとココアとポトフは、開かずの檻に苦戦を強いられていた。
己の腕力を信じて持ち上げようにも、魔法のごり押しという力ずくで破壊しようにも本当にびくともしない鉄壁の檻。
まさか、こんな厄介なトラップだったとは。

「もー、ポトフのバカーっ！！」

「ホンッットにごめんなさい」

怒るココアに返す言葉もないポトフは、ただただ深々と謝罪するしか他になく。

「えと、あの恐竜を倒しても消えないってことは、アイツは関係なかったってこと？」

「うむ。恐らくは」

何やら脱出に向けてポトフに穴を掘らせ始めたココアをよそに、ミントとプリンは相談タイム。

「となると、あのトラップを仕掛けたのは」

「馬鹿犬が無類のシカさん好きと知っての罠だろうから、恐らくは先生たちだろうな」

手抜きなのかそうではないのか、よく分からない罠を仕掛けるとみえた魔法学校の先生方。

「……スイッチの心理的な挑発はフェイ先生かベル先生あたりで、岩ゴロゴロの体育的な猛ダッシュはエル先生？」

そこで、ミントは今までのことを、やらかしそうな先生たちとこじつけてみた。

「む。動物的な怒りは魔物と生物のどちらも当てはまるからセル先生かリア先生か？」

彼に合わせて、プリンも同じように考えてみる。

「卵とシカ入手は意外と行動派な家庭科のピット先生で、あのメタリックパワーアップはむちゃくちゃ科学者のクー先生？」

「では、クマさんに妙に美術的模様がついてたのはケア先生辺りの遊び心か」

なんとなくな雰囲気で、ある程度当てはめられた様子の二人は、

「と、言うことは」

改めて檻に目を向けた。

あらかた当てはめた先生の名前。

そして、自動的に檻を担当した者に当てはまる、残った先生は、

「「……ポリー先生」」

一番まともで真面目で真剣でひたむきで勉強第一な黒髪美人教師、ポリー先生。

実際問題、この檻はそう簡単には攻略できない。

ピノキがつらいこの時期にも関わらず、彼女は一切手を抜いていないようだ。

「ここ掘れワンワーン！」

「おりゃあああ！」

だからきっと、あんな安易な方法で脱出することなんて出来はしない。

「んと、ポリー先生の専門は魔法学で、得意なのは雷魔法と無属性魔法だよね」

「ふむ、触っても大丈夫ということは、雷魔法ではないようだな」

なんか、どこから持ち出したんだと思うようなちっちゃいスコップで頑張っているポトフを傍観しながら、ミントとプリンは考察を続ける。

「……無属性……」

「……檻……」

その間、ココアは彼女なりに穴堀りポトフを一生懸命応援している。

「「――！」」

しばらくの思考の末、ほぼ同時にピンときたミントとプリン。

「む、もしかして」

プリンは自分の考えの正誤を確かめるため、ポトフを捕らえている檻に触れた。

「？　何してんだ枕？」

「！　何か分かったのー、プリンー？」

そのまま目を閉じて集中。

彼の行動に、ポトフとココアは思い思いの反応を示した。

「……！　やっぱり」

再び目を開けたプリンは、記憶が当たっていたことを確信する。

と、同時に、何かとても厄介そうな顔。

「「やっぱり？」」

疑問符を浮かべて聞き返す二人。

「プリン、何か分かったの？」

彼らの心の声を代弁したのは、ミント。

「うむ。恐らく」

「そう、じゃあ」

肯定した友人の返事に安心した彼は、

「出来るだけ早く解決お願い！」

『『ぐばばばば！！』』

しつこく追ってきていた、メタリックマと対峙していた。

「！」

「ミントォ！？」

「ちょ、まだついてきてたのー？！」

ミントが気付いたことは、敵の接近だったらしい。

驚き慌てるポトフとココアの隣で、

「……っ」

プリンは、頭に手を当て必死に解決法を考え始めた。

「ね、ねープリンー？」

至極真剣な彼に、ココアはためらいつつも質問する。

「これってどんな魔法の檻なのー？」

本人は分かったようだが、こちらはさっぱり分からない。

物理攻撃を食らわせようにも傷一つつかず、変身魔法で檻を別の物にするか、檻を通り抜けられるサイズの物にポトフを変身させようとも無効化されてしまう。

「……。これは、恐らくポリー先生の呪魂魔法」

困り果てた様子の彼女に、プリンは思考を続けながらも説明した。

「だから、この魔法に対する正攻法でないとこれは攻略できない」

呪魂魔法は、呪いを解く魔法を使うか、その呪いが成立する条件を解消しないかぎり解けることはない高度で強力な魔法。

ゆえに、他の物理的な手法は、まったくもって受け付けない。

「そ、その正攻法って？」

心配そうな表情で、檻を両手で掴んだポトフが問う。

「この魔法は、お前の呪いに連動しているらしい。だから」

檻に触れて、魔力を探った結果の事実。

ゆえに、この檻を解く方法は――。

「お前にかかった呪いを解くことだ」

第２３３回　覚悟日和

まばゆい琥珀色の光が溢れ出し、幻獣、グリフォンが現れた。

「行くよσ！」

『了解なんだなぁ～！』

σ（シグマ）を召喚したミントは、気合いを入れたσとともにメタリックマたちに向かっていった。

「俺の、呪い……？」

ざわりと風が木々の枝を躍らせたその後で、ポトフはゆっくりと聞き返した。

「うむ」

それを迷いなく肯定するプリン。

もちろん、これは冗談ではない。

「……！」

そこで、ポトフがバニラから受け取ったいつぞやのカードを思い出すココア。

――”言霊の呪い”。

そう記してあった、何か理由もなく不吉を感じさせる不気味なカー

ド。
しかし、その前にも後にも特に変わった様子のないいつも通りな彼に、ココアはすっかり安心していたのだが。
「ぷ、プリン、どうやって解くか知ってるのー？」
ざわざわと沸き上がる不安を落ち着かせるように、ココアは恐る恐る尋ねた。
すると、プリンはこちらに顔を向ける。
青く澄んだ瞳がココアを捕らえ、彼はゆっくりとその重い口を動かした。
「知らん」
「「って、知らんのかいィ？！」」
ココアとポトフのツッコミが、これまた見事にシンクロした。
「仕方ないだろう。知らんものは知らん」
「いや何ほっぺ脹らましてんだよテメェ？！」
「えええ、じゃあ一体どーするのー！？」
可愛くねェ！　と付け足すポトフと焦るココア。
「……学校の図書室の本は全部調べた」
「ええ！？　それでも載ってなかったのー？！」

悔しそうなプリンの言葉に、ほろりときたポトフはほっといて、

「ねえ、きっと解決できるようになってるんだと思う！」

メタリックマを押さえ込みながら、σに乗ったミントが振り向きもせずに口を開いた。

どうやら、戦いながらも今までの会話を聞いていたらしい。

「”今まで学んできたこと”のなかで、答えはもう見付けてるんじゃない？」

困っている友人を、一生懸命勇気づける。

こんなところで諦めちゃいけない。

「む、今までの……」

「学んできたことー？」

「……何か、ヒントになるよぉなこと」

頑張っているミントのためにも、早くこの状況を打開しなくては。

友人たちは、再び考え始めた。

これは、予想ではあるがポリー先生からの課題。

筆記のテストでも、それこそ重箱の隅をつつくようなかなり細かい問題を提示する。

授業中の何気ない一言が、彼女の求める答えだったりもする。

「――！　あ」

あ、と何か閃いたプリンの口が、思わず声を出す。

「「え？」」

ゆえに、ココアとポトフから期待の眼差しが向けられる。
流石は天才。
頼りになるぜ。

「……いや……しかし……？」

しかし、彼の表情は何故かかんばしくない。
なにか、自分の考えを認めたくないような、そんな感じ。

「ど、どしたの？　何かいい考えが浮かんだんじゃないのー？」

苦々しい顔をした彼に、ココアは疑問符を浮かべる。

「う……うむ……」

腑に落ちない。
腑に落ちないが、今はそんなわがままを言っている場合じゃない。

「……、ココア」

「んー？」

ゆえに、プリンは致し方なくココアの耳を借りることにした。

（こ、ココアちゃんとこしょこしょ話……！！）

枕テメェ！！　と怒りの炎をメラリと燃やすポトフの手前で、

「っえええええー?!」

ココアは、顔を真っ赤にして仰け反った。

その表情はさしずめ、え、何故にそんなことをせなあきまへんのん？　と、いったところだろう。

「むう、馬鹿犬のためだ」

たぶん、と付け足しながらもココアに言い聞かせた後で、

「馬鹿犬」

「？」

プリンはポトフに顔を向けた。

「柵と柵の間に顔を付けた上で目をつぶって歯を食い縛れ」

「はァ?!」

そんなお願いは、すんなり聞いてくれるはずもなく。

「いいから黙って言う通りにしろ」

「おま、何する気だ枕テメェ?!」

「何かをするのは僕じゃない。ココアだ」

「っ、何!?　ココアちゃ?!」

しかし、

ぴた

「む。甘んじて受ける気になったか」

相手がココアなら、許容できるようだ。

「ちょ、ちょっとプリン本気なのー！？」

が、覚悟を決めたポトフの不安を煽る声。

え、敢えてもう一度確認するほど危険なことなの？

「うむ。可能性はある。納得いかないが」

そしてお前は何故にさっきから自分の考えに納得してないの？

「～っ！　じゃー、プリンあっち向いててよねー！？」

思わず目を逸らして欲しくなるようなことする気なの？！

「む？　分かった」

ココアに言われた通り、素直にくるりと背を向ける。

「……」

「……」

「……」

後、流れる沈黙。

聞こえてくるのは、ミントとσの奮闘の声と、風が木々を揺らす音。

自らを盾に時間を作ってくれている彼のためにも、ここは早く解決しなくては。

「っ、ポトフ覚悟ー！！」

ココアは己に課せられた使命を果たすべく、半ばやけくそになりつつ地を蹴ったのであった。

第２３４回　復活日和

ココアから発せられた、まるでお侍のような言葉に応えて覚悟を決めた籠のなかのポトフ。
この状況を切り抜けるためならば仕方がない。
我ながらアホな罠にかかったものだ、と彼が人生の反省会を始めたところで、

「――」

何かが、触れた。
少しの間を置いて、何か条件反射で弾けるように目を開けると、

「……っ」

バッと身を退いてはいるものの、顔を完熟したトマトのごとく真っ赤っかにしているココアが、そこにはいた。

「……」

「……」

「……」

訪れる沈黙。
停止中のポトフの頭に、いつだったか口にした言葉が思い返された。
――呪いは、キスで解くってのがお約束だろォ？

パキィン！！

直後、彼を閉じ込めていた頑丈な檻が、いともたやすく砕け散った。

「……」

「……」

「……」

続、沈黙。

「ッ、貴様はどうしてそう単純なんだ?!」

後の、怒号。

プリンはズビシっと彼を指差して怒鳴り付けた。

「お、俺、今……?！」

理不尽に怒られたポトフは、信じられないといったようすで口元を右手で覆う。

「ココアちゃんにちゅーしてもらっ」

「ダークネスサクリファイスー！！」

余計なアテンションプリーズをしたポトフを遠慮なくぶっ飛ばすココアは、依然として顔が赤い。

「なんだそのふざけた呪いは！　僕の時間を返せ貴様！！」

珍しく取り乱すプリン。
彼は、どれだけの書物にかじりつこうとも辿り着けなかったその解決法のあっさり加減に、それはそれはご立腹。

（（ああ、だから納得がいかなかったのか））

ゆえにあんな苦渋の決断のような顔をしていたのかと納得するココアとポトフ。
うん、図書館制覇するくらい頑張ったんだもん、納得いかないよな。

「……っ、馬鹿者め……」

しかし、方法はどうであれ、呪いが解けたことには変わりはない。
ひどく安堵した様子のプリンは、出所祝いに闇の十字架で盛大にぶっ飛ばされた弟の隣に膝をつき、右手に魔力を集中させた。

「?!　な、枕!?」

その異様な魔力に、ポトフは思わず目を見張る。
この、途方も無いほどに膨大な魔力は一体どこから。

「「――!?」」

その答えは、もう隠すことをやめた枕から。
プリンがずっと抱えていたそれには、彼の日々の魔力が貯えられていた。
魔力の気配を消すまじないをかけた枕には、このときのための膨大な魔力が蓄積されていた。

「まく……、な、何を？」

それらを一点に集中させている彼に、ポトフは疑問を投げ掛ける。

「……人間の、身体中の遺伝子すべてを変化させる薬なんてない」

その問いに答えると言うよりは、独り言のようにプリンは言葉を口にした。

「だから、人間が永遠に狼男になる薬なんて、存在しない」

高まる魔力に呼応して、巻き起こる風にローブとその水色の長い髪を踊らせながら、

「そして、アクリウムが誇る名医に長年回復魔法をかけてもらっているのに消えない刺し傷なんて、あるわけない」

プリンは、まっすぐな瞳をポトフに向けた。

「詰まり、それはお前にかけられていた、言葉の呪いが原因だったんだ」

言葉の呪い。

意図せずに呪いとして彼を苦しめていたその言葉は、考えられる範囲では、彼が捨てられる直前に吐かれたひどく心ない言葉。

恐らくは、それが今の今まで彼に狼男の呪いをかけ、その呪いが発動している間に受けた傷の治りを妨害していたのだろう。

それが解けた今、彼の身体のなかに邪魔するものは何もない。

プリンは左手で彼の眼帯を取り去った後、ありったけの魔力を込めた右手を、ポトフの右目にかざした。

「――”リザレクション”っ！！」

思わず目を瞑る程のまばゆい光が、プリンとポトフを包み込む。
複雑な魔法陣が何重にも展開され、容赦なく術者の魔力を奪い去る。

「「！！」」

――”リザレクション”。
その名の通り、術者が対象とした人物を復活させる回復魔法。
完全に使いこなすことが出来れば、死者をも復活させることが出来るとも言われているこの魔法。
しかし、膨大な魔力と繊細なコントロール、細心の注意と複雑な知識を要することから、医者であっても使えるものはほんのわずか。

「……！　ポトフの傷が……！」

それをいっぱしの学生が使ってみせたことに、ココアとポトフは驚くばかり。

「ま、まく――」

光がおさまり、思わず閉じた瞳を開けると、ポトフはいつもとの違いにいち早く気が付いた。

「……！」

視界が、広がっている。

「右目が、治ってる？」

まさかそんなことが起きるとは、夢にも思っていなかったポトフ。
だって、あれだけエリアが回復魔法をかけても、全然治らなかったのに。

「……ふ……、よかっ」

彼の様子から、ちゃんと右目が機能していると知る。
ふわりと微笑んだ後、くらっと倒れそうになったプリンを、

「お疲れさま」

ガシッと受け止めたのは、ミント。

「！　ミント！　もう倒し終わったのー？」

その姿に、ココアが労いの言葉を掛けようとしたところで、

「ううん。多すぎて無理」

ミントは、きっぱりと否定した。

「「え」」

ぱきっと固まったココアとポトフに向けて、ミントはにっこり笑ってみせると、

「逃げるよ！」

プリンを担いでσの背に乗ってそう言った。

直後、薔薇の鞭で器用にすくわれるココアとポトフ。

「ようし、エンジン全開！　出発進行ー！」

『迫る木々にご注意ください、なんだなぁ～♪』

「ちょっ、ミント危な」

「ッイヤーーーー？！」

『『ぐばばばばば！！』』

ミントとプリンを背中に乗せ、ココアとポトフをぶら下げながら、エンジンを全開にして駅に向かってかっ飛ばすσであった。

最終回　卒業日和

見慣れた汽車に乗り込んで、まだ空いているコンパートメントに、四人はゆっくりと腰を下ろした。

「大丈夫、プリン？」

「う、うむ。ありがとうミント」

魔力の消費が激しいプリンは、支えになってもらっていたミントにお礼を言う。

どういたしまして、と笑顔で応えたミントは、気持ち良く伸びをした。

「いやあ、疲れたねえ」

お疲れさま、とにこやかに言えば、

「もーちょっと丁寧に運んでほしかったなー」

「なんかちょっと死ぬかと思ったぜェ？」

ココアとポトフの文句が聞こえてきた。

「あはは、ドンマイドンマイ」

しかし、まるで他人事。

「でも、毎日枕に魔力を貯えてたとはねぇ？」

ころっと話題を変えて、ミントはプリンに注目した。

「あ、もしかして、森で動物のケガを治してたのってー？」

「む。うむ、予行演習だ」

思い出したように話題についていったココアの言葉に、プリンはこくりと頷いてみせる。

「リザレクションなんて、どこで覚えたんだァ？」

「む？　本で読んだ」

「へ？　そんな簡単なもんなの？」

「いや、絶対に違うでしょー」

いつものように会話を始める四人。
思い付きの話題はいろんな方向へふらふらする。

『最終試験お疲れ様！』

そんな穏やかな時間が流れていた車内に、クー先生の声が聞こえてきた。

『流石！　全員余裕で合格できたみたいだね！』

声の様子から、彼女はとても上機嫌。

『つまり、みんなは学んできたことを活かせるようになった』

それは、入学当初と比べたら、みんなが心身ともにとても強くなったから。

『この魔法学校での五年間で、みんなは立派に成長してくれたんだね！』

授業に試験、修学旅行や運動会に学園祭などなど。

いろいろなことがあったこの五年間。

『これから先も、みんながみんならしく輝いてくれることを、先生たちは願ってるよ！』

これからは、ひとりひとり違う道に進んでいく。

『うまくいくことばかりじゃないから、つらい事や苦しいことなんて山ほどあると思う。でも、そんなときはこの学校生活を思い出してみてくれたら嬉しいな』

でも、忘れないで。

こんな無茶ぶりだらけの五年間、一緒に苦難を乗り越えてきた仲間がいるよ。

きみたちは、ひとりじゃないよ。

『……えへへ、こう真面目なのは慣れないね？』

照れたように笑ったクー先生は、

『ではでは、みんなのますますのご成長とご健康を祈って！』

いつも通り、元気いっぱいな声で締めくくった。

『卒業、おめでとう！』

――光り輝く太陽の下。

名残惜しく汽笛を鳴らした黒い汽車は、国立魔法学校を出発した。

「じゃ、ある程度予定が決まったら連絡するねー？」

まだ春は遠い山奥の街、フェノリリルの駅に、春色の髪の少女が降り立った。

「あは、いつでも待ってるぜェ！」

窓を大きく開けて彼女に頷き返し、ポトフはいつも通りの笑顔を見せる。

「ふふ、ミントはチロルとお幸せにー！」

「はは……どうもありがとう」

彼に笑い返した後で、ココアはミントに顔を向けた。

「プリンは、ムースを大事にするんだからねー？」

「うむ。……む？」

次いでプリンに向けて笑いかけたココアは、彼に頷いた後に首をかしげられた。

「それじゃー、みんな、お元気で！」

煙突から煙が上がり、動き出した汽車に、

「またみんなで家の温泉に来てねー！」

ココアは、大きく手を振りながら微笑んだ。

「うん！　ココアも元気で！」

「うむ、絶対またいつか」

そんな彼女に手を振り替えしながら、彼らはお別れの挨拶をした。

「ココアちゃんラブーーー！！」

「な？！　ば、バカーーー！！」

ひとり、何か違うことを叫んだ気がするが、その辺は敢えて触れないでおくとする。

「……。これはどういう状況なのさ？」

森に囲まれたアクリウムの駅で、ミントは冷静な質問をひとつ。

「ミント、大好きだからな……！」

すると、窓枠越しにぎゅーっと彼の頭を抱き締めていたポトフが告白した。

「なんかちょっととんでもないくらいに！」

「”ちょっととんでもない”？」

どんな言葉だ、と突っ込みながら、ミントはポトフの腕から脱出した。

「まったく……。頑張ってね、医者志望」

「おォ！」

彼の応援に、ぱっちり笑顔で応えたポトフは、

「と……、」

ミントの隣に視線を移した。

「？」

目が合ったため、疑問符を浮かべながら首を傾げたプリンに、

「……、……目」

彼は、照れ臭そうに口を開いた。

「ありがとォ、おにィちゃん！」

「――？！」

後、ガバチョーっと思い切り抱きついた。

「なっ、は、はなせ！　そして”お兄ちゃん”て呼ぶなっ！」

突然かつ予想外の抱き付き攻撃に、プリンはバタバタ暴れ始める。

「俺、もしも右目が治ったら絶対やってみたいことがあったんだぜェ？」

が、その言葉にピタリとおとなしくなるプリン。

ふふん、と彼から離れたポトフはもったいぶって咳払いをし、友人二人の注目を集めた。

「イケメンウインク！！」

「微風」

ばちこーん☆　とウインクしたポトフに、プリンの微風が直撃した。

「たくもう、相変わらずなんだから」

やれやれと頭を抱えたミントは、進歩がないと苦く笑う。

「俺かっこいい?!」

「あーうんちょーかっこいー」

「ッ貴様そんなことのために僕は」

「どうどうプリン」

再び動き出した汽車の窓辺で、ミントは適当に場を収める。

「あっはっはっ！　じゃ、いつでも遊びに行くからな！」

貴様ちょっとは相手の都合を考えろ。

「二人とも元気でなァ！」

そんなツッコミも忘れるくらいの眩しい笑顔に、諦めたように手を振り返すミントとプリンであった。

「うむ、お別れだな」

砂漠の駅、アルカイドに降りたのは、普段通りに涼しげなプリン。

「うん。五年間、早かったねえ」

「うむ、早かった」

ミントの言葉にこくりと頷いて返した後、

「この五年間が、一番楽しかった」

プリンはふわりと微笑んだ。

「ミントに出会えてよかった」

それは、彼の心からの素直な言葉。

「あはは、オレの方こそ」

友人に負けない笑顔で、ミントは感謝を伝えた。

「ふふ、ミント、今まで本当にありがとう」

定刻通りに走りだそうとする汽車に乗る彼に、プリンは寂しげな笑顔で別れの挨拶をした。

がしっ

「！」

ところ、彼の手は、がしっとミントに掴まれた。

「これからも、よろしくねプリン！」

見上げると、彼は飛びきりの笑顔で。

「……！　うむっ！」

温かい約束をしてくれたミントに、力強く応えるプリンであった。

「うん！　またねっ！」

そうして、汽車は砂漠を出発した。
ガタンゴトンと規則的に揺れる車内。
開け放たれた窓からは、冷たい風が吹き付ける。
誰もいなくなったシートを見て、少し視界がぼやけたけれど。
でも、もう二度と会えなくなるわけではないから。
会おうと思えば、いつでもみんなでまた笑いあえるから。
――だって、ちゃんと約束したでしょう？

「ずっと、友達だよ」

新しい生活の始まりを祝福するように、蒸気機関車の汽笛が鳴り

響く。
見上げた空は、どこまでも青かった。

おわり

最終回　卒業日和（後書き）

ここまで学校日和にお付き合いしてくださった読者様方に、心からの感謝を込めて。
ご愛読、誠にありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7269d/

学校日和２

2011年3月30日17時24分発行